

# 京都府遺跡調査報告集

## 第185冊

平成30年度・令和元年度国営緊急農地再編整備事業

「亀岡中部地区」関係遺跡

犬飼遺跡第2・3次

春日部遺跡第2次

2022

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



B地区上層全景(北から)





(1) 調査地全景(上が北)



(2) 堀 S D01・土橋 S X 428(南から)





(1) 上層出土遺物



(2) 開析谷N R50IV・V層出土遺物



## 序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行い、その調査成果を地域の歴史教育や考古学研究に活用していただけるように努めてまいりました。

また、これまで発掘調査を実施したすべての調査は、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、各遺跡がもつ歴史的な意義について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する犬飼遺跡ならびに春日部遺跡の発掘調査は、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施しました。このたび、整理作業を終え調査成果をまとめましたので『京都府遺跡調査報告集 第185冊』として刊行いたします。

犬飼遺跡の調査では、古墳時代前期末から同中期前半の護岸施設や飛鳥時代の木材集積遺構などを検出するとともに、13世紀後半を中心とする鎌倉時代の居館を検出しました。深さ約1.8mの薬研堀で囲まれた居館は、亀岡盆地で初めて確認された事例であり、出土遺物などから居住施設ではなく、荘官屋敷に代表される公的施設である可能性も考えられます。

一方、春日部遺跡の調査では、古墳時代中期の集落と10世紀後半から12世紀前半の平安時代の居館を検出しました。特に、方形区画溝で囲繞された居館は、造営時期が異なるものの犬飼遺跡同様、当該盆地で初めて確認された事例であります。両遺跡の調査成果は、当時の政治状況を考えるうえで非常に重要なものとなりました。

本書が、地域の歴史や人々の暮らし、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める資料として、あわせて学術研究の資料として、ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の機会をお与えいただきました農林水産省近畿農政局ならびにご支援とご協力を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理 事 長 井 上 満 郎

# 例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

平成30年度・令和元年度国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡発掘調査報告

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1.	犬飼遺跡 第2・3次	亀岡市曾我部町犬飼 馬ノ上、畑ヶ久保	平成30年11月12日～ 平成31年3月14日  令和元年5月2日～ 令和元年10月3日	農林水産省 近畿農政局	桐井理揮 引原茂治 上井佐妃 名村威彦 黒坪一樹 ほか
2.	春日部遺跡第2次	亀岡市曾我部町春日 部	平成30年5月14日～ 平成30年9月18日		

3. 整理作業・報告書作成については、上記以外に、浦蓉子(奈良文化財研究所)、大須賀広夢(当時京都府立大学院生)、中塚武、(名古屋大学)、星野安治(奈良文化財研究所)、丸山真史(東海大学)、李貞(名古屋大学)に玉稿を賜った。記して感謝いたします(五十音順、敬称略)。

4. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

6. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

7. 現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係武本典子が行った。



# 本文目次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	
1) 地理的環境	
(1) 地誌と交通路	3
(2) 地質	4
(3) 調査地周辺の地形形成過程と微地形	5
(4) 植生と環境	8
2) 歴史的環境	
(1) 周辺の遺跡	9
(2) 文献史学からみた犬飼遺跡をとりまく環境	12
3. 調査の経過と方法	
1) 調査の経緯	14
2) 調査の方法	
(1) 地区割りの方法について	14
(2) 遺構番号について	15
(1) 犬飼遺跡第2・3次	
1. はじめに	16
2. 小規模調査	18
3. B・C・D地区(第1面)の調査	
1) 調査の概要	21
2) 基本層序	21
3) 検出遺構	
(1) 堀SD01と付属施設	21
(2) 堀SD01の堆積物の理化学分析	29
(3) 堀SD02と付属施設	31
(4) 堀SD03と付属施設	33
(5) 橋	36
(6) 建物及び関連遺構	37
(7) 柵列	45
(8) 土坑	45
(9) 遺物を埋納する柱穴	48
(10) その他の遺構	51

(11)居館廃絶後の遺構	51
4)出土遺物(第1面)	
(1)出土土器の分類と概要	53
(2)土器	56
(3)木製品ほか	72
(4)金属製品	80
(5)動物遺存体	84
4. B・C・D地区(第2面)の調査	
1)調査の概要	85
2)検出遺構	
(1)開析谷とその関連遺構	85
(2)掘立柱建物	92
(3)竪穴建物	96
(4)土坑	101
(5)溝	103
3)C地区出土遺物(第2面)	
(1)土器	104
(2)埴輪	116
(3)木製品	116
(4)石製品	134
(5)動物遺存体	134
4)B・D地区の出土遺物(第2面)	135
5. A・E地区の調査	
1)調査の概要	139
2)基本層序	139
3)検出遺構	
(1)掘立柱建物	139
(2)竪穴建物	139
(3)柵列	142
(4)土坑	145
(5)ピット	147
(6)溝状遺構・不明遺構	147
4)A・E地区出土遺物	148
5)小結	149
6. 自然科学分析	



1)放射性炭素年代測定	
(1)はじめに-----	150
(2)試料と方法-----	150
(3)結果-----	153
2)花粉分析、プラント・オパール分析	
(1)はじめに-----	154
(2)試料と方法-----	154
(3)方法-----	155
(4)結果-----	155
3)堆積物中の珪藻化石群集	
(1)はじめに-----	162
(2)試料-----	162
(3)方法-----	162
(4)珪藻化石の環境指標種群-----	162
(5)結果-----	163
4)大型植物遺体	
(1)はじめに-----	168
(2)試料-----	168
(3)方法-----	168
(4)結果-----	168
(5)考察-----	174
5)犬飼遺跡出土木製品の樹種同定	
(1)はじめに-----	178
(2)結果-----	178
(3)考察-----	182
6)漆器碗の塗膜分析	
(1)はじめに-----	183
(2)試料-----	183
(3)方法-----	183
(4)結果-----	183
7)年輪年代測定	
(1)はじめに-----	188
(2)調査対象と方法-----	188
8)酸素同位体比年輪年代測定	
(1)はじめに-----	189

(2) 試料と方法	189
(3) 結果と考察法	192
7. 考古学的検討	
1) 丹波型瓦器椀の編年と中世犬飼遺跡の変遷	
(1) 丹波型瓦器椀について	194
(2) 亀岡盆地における瓦器椀の変遷	194
(3) 陶磁器からみた犬飼遺跡	200
(4) 中世犬飼遺跡の年代と変遷	200
2) 犬飼遺跡における居館の構造	
(1) 堀と土橋	202
(2) 囲曉施設	202
(3) 建物の構造	204
(4) 居館としての犬飼遺跡	206
3) 犬飼遺跡と中世曾我部地域の景観	
(1) 方形居館と水利	208
(2) 法貴谷川流域の水利システム	208
(3) 犬飼遺跡と曾我部地域の開発	210
4) 開析谷N R50出土木材の実年代	
(1) 出土状況の整理	211
(2) T K43型式の実年代をめぐる議論	211
(3) 犬飼遺跡出土資料の評価	213
8. 総括	214
(2) 春日部遺跡第2次	
1. はじめに	217
2. 調査経過	217
3. 基本層序	218
4. 検出遺構	
1) A・B地区	218
(1) 古墳時代	220
(2) 平安時代	225
(3) 近世	234
2) C地区	
(1) 平安時代	234
5. 出土遺物	
1) A・B地区	



(1)古墳時代	234
(2)平安時代	235
(3)近世	238
2)C地区	239
6. まとめ	239

## 挿 図 目 次

### (1)犬飼遺跡第2・3次

第1図 亀岡市の位置	3
第2図 近世の村と交通路	4
第3図 亀岡盆地の地形	5
第4図 調査区周辺の地形分類図	6
第5図 周辺遺跡分布図	11
第6図 調査地区割り図	15
第7図 調査地位置図	17
第8図 1・2トレンチ実測図	19
第9図 3～5トレンチ実測図	20
第10図 B地区の基盤層の模式柱状図	21
第11図 B・D地区(第1面)遺構配置図	22
第12図 B～D地区土層図(1)	23
第13図 B～D地区土層図(2)	24
第14図 堀SD01断面図(1)	25
第15図 堀SD01断面図(2)	26
第16図 取水溝SD136平・断面図	27
第17図 排水溝SD353・通路状遺構SX406平・断面図	28
第18図 堀SD02平面図	31
第19図 堀SD02断面図	32
第20図 井堰SW430立面図	33
第21図 堀SD03平・断面図	34
第22図 通路状遺構SX382・排水溝SD400平・断面図	35
第23図 土橋SX428平・断面図	36
第24図 土橋SX429平・断面図(1/100)	37
第25図 掘立柱建物SB431平面図	38
第26図 掘立柱建物SB431断面図(1)	39

第27図	掘立柱建物 S B 431断面図(2)	40
第28図	掘立柱建物 S B 432平面図	41
第29図	掘立柱建物 S B 433平面図	42
第30図	掘立柱建物 S B 433断面図	43
第31図	掘立柱建物 S B 434平・断面図	44
第32図	柵列 S A 425平・断面図	45
第33図	土坑 S K 11平・断面図	46
第34図	土坑 S K 11出土石の法量一覧・分布図	46
第35図	土坑 S K 27・36・37・39・40・242・405平・断面図	47
第36図	遺物を埋納する柱穴 平・断面図	49
第37図	切岸 S X 427・区画溝 S D 401平・断面図	50
第38図	D地区北側崖面土層図	51
第39図	石列 S X 38平・断面図	52
第40図	土坑 S K 481平・断面図	52
第41図	瓦器椀分類図	53
第42図	B・C・D地区第1面出土遺物(1)	55
第43図	B・C・D地区第1面出土遺物(2)	57
第44図	B・C・D地区第1面出土遺物(3)	58
第45図	B・C・D地区第1面出土遺物(4)	60
第46図	B・C・D地区第1面出土遺物(5)	62
第47図	B・C・D地区第1面出土遺物(6)	64
第48図	B・C・D地区第1面出土遺物(7)	66
第49図	B・C・D地区第1面出土遺物(8)	68
第50図	B・C・D地区第1面出土遺物(9)	70
第51図	B・C・D地区第1面出土遺物(10)	71
第52図	B・C・D地区第1面出土遺物(11)	73
第53図	B・C・D地区第1面出土遺物(12)	75
第54図	B・C・D地区第1面出土遺物(13)	76
第55図	B・C・D地区第1面出土遺物(14)	78
第56図	B・C・D地区第1面出土遺物(15)	79
第57図	杭分類図	80
第58図	B・C・D地区第1面出土遺物(16)	81
第59図	B・C・D地区第1面出土遺物(17)	82
第60図	B・C・D地区第1面出土遺物(18)	83
第61図	B～D地区(第2面)遺構配置	86

第62図	C地区遺構配置図	87
第63図	開析谷N R 50断面図	88
第64図	開析谷N R 50・護岸遺構S W440出土状況図	89
第65図	開析谷N R 50・木材集積S X 444出土状況図	90
第66図	杭列S W441立面図	91
第67図	B・D地区(第2面)遺構配置図	93
第68図	掘立柱建物S B 451平・断面図	94
第69図	掘立柱建物S B 452平・断面図	95
第70図	掘立柱建物S B 453平・断面図	96
第71図	掘立柱建物S B 454平・断面図	97
第72図	掘立柱建物S B 455平・断面図	98
第73図	竪穴建物S H351・352・371平・断面図	99
第74図	土坑S K 96・141・142・197・374・380平・断面図	100
第75図	土坑S K 80～82・317平・断面図	101
第76図	溝S D 152平・断面図	102
第77図	C地区第2面出土遺物(1)	104
第78図	C地区第2面出土遺物(2)	106
第79図	C地区第2面出土遺物(3)	107
第80図	C地区第2面出土遺物(4)	108
第81図	C地区第2面出土遺物(5)	110
第82図	C地区第2面出土遺物(6)	111
第83図	C地区第2面出土遺物(7)	113
第84図	C地区第2面出土遺物(8)	114
第85図	C地区第2面出土遺物(9)	115
第86図	C地区第2面出土遺物(10)	119
第87図	C地区第2面出土遺物(11)	121
第88図	C地区第2面出土遺物(12)	122
第89図	C地区第2面出土遺物(13)	125
第90図	C地区第2面出土遺物(14)	126
第91図	C地区第2面出土遺物(15)	127
第92図	C地区第2面出土遺物(16)	128
第93図	C地区第2面出土遺物(17)	129
第94図	C地区第2面出土遺物(18)	131
第95図	作業工程と排出される木屑(削りかす)との対応関係	132
第96図	C地区第2面出土遺物(19)	134

第97図	B・D地区第2面出土遺物(1)	136
第98図	B・D地区第2面出土遺物(2)	137
第99図	A・E地区遺構配置図	140
第100図	A・E地区南壁土層断面図	141
第101図	E地区東壁土層断面図	142
第102図	A地区竪穴建物SH1061・E地区掘立柱建物SB2121平・断面図	143
第103図	E地区柵列平・断面図	144
第104図	A地区土坑・ピット平・断面図	146
第105図	E地区焼土坑平・断面図	147
第106図	A・E地区出土遺物	148
第107図	年代測定試料の採取地点	150
第108図	年代測定試料	151
第109図	暦年較正結果	152
第110図	マルチプロット図	152
第111図	分析試料の採取状況	154
第112図	B地区のSD01、C地区のNR50採取分析ブロック試料断面と分析試料採取位置	156
第113図	SD01とNR50の花粉分布図	158
第114図	開析谷NR50の植物珪酸体分布図	159
第115図	堀SD01の堆積物中の珪藻化石分布図	166
第116図	開析谷NR50の堆積物中の珪藻化石分布図	166
第117図	試料番号1の薄板(a)とそれをセルロース化したもの(b), 及びその年輪 セルロース酸素同位体比と標準年輪曲線のスライド相関解析(c)	190
第118図	試料番号2の薄板(a)とそれをセルロース化したもの(b), 及びその年輪 セルロース酸素同位体比と標準年輪曲線のスライド相関解析(c)	190
第119図	試料番号3の薄板(a)とそれをセルロース化したもの(b), 及びその年輪 セルロース酸素同位体比と標準年輪曲線のスライド相関解析(c)	191
第120図	試料番号4の薄板(a)とそれをセルロース化したもの(b), 及びその年輪 セルロース酸素同位体比と標準年輪曲線のスライド相関解析(c)	191
第121図	試料番号5の薄板(a)とそれをセルロース化したもの(b), 及びその年輪 セルロース酸素同位体比と標準年輪曲線のスライド相関解析(c)	192
第122図	丹波瓦器椀法量分布図	196
第123図	土坑出土瓦器椀編年案	198
第124図	瓦器椀の製作技法	199
第125図	犬飼遺跡出土土器の変遷	201
第126図	絵図に描かれた居館の生垣とタケ	203



第127図	土間を持つ建物	205
第128図	文献にみる連郭の居館の事例	207
第129図	調査地周辺の現在の水利系統	208
第130図	法貴谷川扇状地の水利慣行	209
第131図	開析谷N R 50断面模式図	212
第132図	T K 43型式資料の一例	213
(2)春日部遺跡第2次		
第133図	春日部遺跡調査地位置図	217
第134図	土層断面図	218
第135図	A～C地区遺構配置図	219
第136図	A地区下層遺構配置図	221
第137図	S H 150・170・279・281平・断面図	222
第138図	S H 180・280平・断面図	222
第139図	S H 294平・断面図	224
第140図	土坑S K 261平・断面図	224
第141図	A地区上層遺構配置図	226
第142図	堀S D 290平・断面図	227
第143図	溝S D 290断面図	228
第144図	土橋平・断面図	228
第145図	掘立柱建物S B 26平・断面図	229
第146図	掘立柱建物S B 02平・断面図	229
第147図	掘立柱建物S B 06平・断面図	230
第148図	掘立柱建物S B 164平・断面図	231
第149図	掘立柱建物S B 305平・断面図	231
第150図	柵列S A 60・65平断面図	232
第151図	柵列S A 100平・断面図	233
第152図	土坑S K 01・03・04平・断面図	233
第153図	S K 304平・断面図	234
第154図	A・B地区出土土器(古墳時代)	236
第155図	A・B地区出土土器(平安時代)	237
第156図	C地区出土土器	239

# 付 表 目 次

付表 1	石高変遷表	13
付表 2	調査一覧	14
付表 3	出土土器数量表	54
付表 4	陶磁器数量表	54
付表 5	開析谷 N R 50 出土木製品の組成	118
付表 6	開析谷 N R 50 出土の動物遺体一覧	134
付表 7	測定試料及び処理	151
付表 8	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	152
付表 9	C/N 比測定結果	153
付表 10	分析試料一覧	154
付表 11	産出花粉孢子一覧表	157
付表 12	試料 1 g 当たりのプラント・オパール個数	159
付表 13	堆積物中の珪藻化石産出表	164
付表 14	大型植物遺体(1)	169
付表 15	大型植物遺体(2)	171
付表 16	モモ核の大きさ	174
付表 17	犬飼遺跡出土木材の樹種同定結果	178
付表 18	犬飼遺跡出土木材の樹種同定結果一覧	179
付表 19	犬飼遺跡出土木材の年輪年代調査一覧	188
付表 20	酸素同位体比年輪年代法による年代決定に供した犬飼遺跡の出土材	189
付表 21	酸素同位体比年輪年代法による犬飼遺跡の出土材の年輪年代の決定結果	193
付表 22	S X 444 木材一覧	215
付表 23	犬飼遺跡出土土器観察表	251
付表 24	犬飼遺跡出土木製品ほか観察表	280
付表 25	犬飼遺跡出土金属製品観察表	286
付表 26	犬飼遺跡出土石製品観察表	286
付表 27	春日部遺跡出土土器観察表	287

## 写真目次

写真1	堀S D03出土ウシの骨	84
写真2	堀S D01(No.4)から産出した花粉化石	160
写真3	開析谷N R50から産出した植物珪酸体	161
写真4	堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真	167
写真5	犬飼遺跡のN R50から出土した大型植物遺体(1)	176
写真6	犬飼遺跡のN R50から出土した大型植物遺体(2)	177
写真7	犬飼遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(1)	180
写真8	犬飼遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(2)	181
写真9	犬飼遺跡の塗膜分析写真 I	185
写真10	犬飼遺跡の塗膜分析写真 II	186
写真11	犬飼遺跡の塗膜分析写真 III	187

## 図版目次

巻頭図版1	犬飼遺跡第2・3次 B地区上層全景(北から)
巻頭図版2	犬飼遺跡第2・3次 (1)調査地全景(上が北) (2)堀S D01・土橋S X428(南から)
巻頭図版3	犬飼遺跡第2・3次 (1)上層出土遺物 (2)開析谷N R50IV・V層出土遺物
(1)犬飼遺跡第2・3次	
図版第1	(1)調査地遠景(東から) (2)第1面掘削状況(上が北)
図版第2	(1)第1面掘削状況(北西から) (2)第1面掘削状況(西から)
図版第3	(1)犬飼遺跡と犬飼城(南東から) (2)第1面掘削状況(南西から)

- 図版第4 (1) 1 トレンチ全景(北東から)  
(2) 1 トレンチ南壁断面(北から)  
(3) 2 トレンチ全景(南から)
- 図版第5 (1) 2 トレンチ北壁断面(南から)  
(2) 6 トレンチ北壁断面(南から)  
(3) 第1面遺構検出状況(南東から)
- 図版第6 (1) 第1面区画①全景(南西から)  
(2) 第1面区画①全景(南東から)
- 図版第7 (1) 第1面区画②全景(南西から)  
(2) 第1面区画②全景(南から)
- 図版第8 (1) 堀S D01断面 a (東から)  
(2) 堀S D01断面 b (南東から)
- 図版第9 (1) 堀S D01断面 c (南から)  
(2) 堀S D01断面 d (南から)
- 図版第10 (1) 堀S D01東西断面①(南西から)  
(2) 堀S D01東西断面②(南西から)  
(3) 堀S D01Ⅲa層検出状況(南東から)
- 図版第11 (1) 堀S D01完掘(南西から)  
(2) 堀S D01完掘(南西から)  
(3) 堀S D01掘削状況(東から)
- 図版第12 (1) 堀S D01Ⅲ層遺物出土状況(上が北)  
(2) 堀S D01Ⅲ層直上遺物出土状況(東から)  
(3) 堀S D01出口付近遺物出土状況(南西から)
- 図版第13 (1) 取水溝S D136完掘(北東から)  
(2) 取水溝S D136断面(北東から)  
(3) 堀S D01出口付近(北東から)
- 図版第14 (1) 排水溝S D353(東から)  
(2) 排水溝S D353と堀S D01の接続部分(西から)  
(3) 排水溝S D353と雨落ち溝S D386の接続部分(北から)
- 図版第15 (1) 排水溝S D353断面 a (東から)  
(2) 排水溝S D353断面 b (南から)  
(3) 通路状遺構S X406(北から)
- 図版第16 (1) B・C間拡張区堀S D02完掘状況(南西から)  
(2) 堀S D02北壁断面(南から)

- 図版第17 (1)堀 S D02及び関連遺構完掘(南西から)  
(2)溝 S D140、井堰 S W430完掘状況(北東から)
- 図版第18 (1)溝 S D140・井堰 S W430断面(北から)  
(2)堀 S D02完掘(北西から)  
(3)堀 S D02植物遺体検出(南東から)
- 図版第19 (1)堀 S D02漆器椀出土状況(北から)  
(2)井堰 S W430杭断面(西から)  
(3)堀 S D02植物遺体検出(北東から)
- 図版第20 (1)堀 S D03断面 a (西から)  
(2)堀 S D03断面 d (南から)
- 図版第21 (1)堀 S D03屈曲部(北西から)  
(2)堀 S D03編籠出土状況(上が東)
- 図版第22 (1)堀 S D03東西断面(南西から)  
(2)堀 S D03と S D70の接続部(北東から)  
(3)堀 S D03掘削状況(南西から)
- 図版第23 (1)堀SD03掘削状況(北西から)  
(2)土橋 S X429東側、堀 S D03断面(北から)  
(3)堀 S D03木製品出土状況(北西から)
- 図版第24 (1)排水溝 S D400断面 a (北から)  
(2)排水溝 S D400断面 b (西から)  
(3)通路状遺構 S X382断面(北から)
- 図版第25 (1)土橋 S X428(南から)  
(2)土橋 S X428(南東から)
- 図版第26 (1)土橋 S X428(南から)  
(2)土橋 S X428(北東から)
- 図版第27 (1)土橋 S X429(南西から)  
(2)土橋 S X429断ち割り(南西から)
- 図版第28 (1)掘立柱建物 S B431完掘(南から)  
(2)掘立柱建物 S B431完掘(西から)
- 図版第29 (1)掘立柱建物 S B432完掘(南から)  
(2)掘立柱建物 S B433完掘(南から)
- 図版第30 (1)竪穴状遺構 S X303掘削状況(南から)  
(2)竪穴状遺構 S X303掘削状況(東から)
- 図版第31 (1)竪穴状遺構 S X303、焼土坑 S K312周辺炭・焼土検出(北東から)  
(2)竪穴状遺構 S X303完掘(東から)



- 図版第32 (1) 竪穴状遺構 S X 303、焼土坑 S K 312 断面(北西から)  
(2) 竪穴状遺構 S X 303東側断面(南東から)  
(3) 竪穴状遺構 S X 303・304断面(南東から)
- 図版第33 (1) 掘立柱建物 S B 434(南から)  
(2) 集石土坑 S K 11検出(南から)
- 図版第34 (1) 集石土坑 S K 11断面(北から)  
(2) 集石土坑 S K 11断面(南から)
- 図版第35 (1) 集石土坑 S K 18断面(東から)  
(2) 集石土坑 S K 18(掘削状況から)
- 図版第36 (1) 土坑 S K 36掘削状況(南から)  
(2) 土坑 S K 40遺物出土状況(北から)  
(3) 土坑 S K 405(南東から)
- 図版第37 (1) 掘立柱建物 S B 431柱穴 S P 339遺物出土状況(北から)  
(2) 掘立柱建物 S B 431柱穴 S P 41遺物出土状況(東から)  
(3) 掘立柱建物 S B 431柱穴 S P 279遺物出土状況(南から)
- 図版第38 (1) 掘立柱建物 S B 431柱穴 S P 42～45検出状況(南から)  
(2) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 131遺物出土状況(南から)  
(3) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 191遺物出土状況(西から)
- 図版第39 (1) 掘立柱建物 S B 433礎石 S X 30遺物出土状況(南から)  
(2) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 123遺物出土状況(北から)  
(3) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 191遺物出土状況(西から)
- 図版第40 (1) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 188断面(北から)  
(2) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 193・S P 198断面(西から)  
(3) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 167断面(東から)
- 図版第41 (1) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 173断面(東から)  
(2) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 134断面(北から)  
(3) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 183根石検出(南から)
- 図版第42 (1) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 188根石検出(南から)  
(2) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 300根石検出(南から)  
(3) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 138根石検出(南から)
- 図版第43 (1) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 193根石検出(南から)  
(2) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 13根石検出(南から)  
(3) 掘立柱建物 S B 433柱穴 S P 167根石検出(南から)
- 図版第44 (1) B地区北側斜面(北東から)  
(2) 切岸 S X 427(東から)

- 図版第45 (1) 切岸 S X 427(西から)  
(2) 区画溝 S D 401(西から)  
(3) 区画溝 S D 401(西から)
- 図版第46 (1) 石列 S X 38検出(南から)  
(2) 石列 S X 38断面(東から)  
(3) 土坑 S K 481(北から)
- 図版第47 (1) 開析谷 N R 50(Ⅲ層)検出状況(上が北)  
(2) 開析谷 N R 50(Ⅲ層)検出状況(南東から)
- 図版第48 (1) 開析谷 N R 50(Ⅲ層)検出状況(西から)  
(2) 木材集積 S X 444検出状況(南東から)
- 図版第49 (1) 木材集積 S X 444(北東から)  
(2) 木材集積 S X 444(北から)
- 図版第50 (1) 開析谷 N R 50断面(南から)  
(2) 開析谷 N R 50断面(南西から)
- 図版第51 (1) 開析谷 N R 50断面(南西から)  
(2) 開析谷 N R 50自然木 I N 03出土状況(南から)
- 図版第52 (1) 開析谷 N R 50完掘状況(南東から)  
(2) 開析谷 N R 50遺物出土状況(南東から)
- 図版第53 (1) 開析谷 N R 50遺物出土状況(南から)  
(2) 杭列 S W 441掘削状況(西から)
- 図版第54 (1) 開析谷 N R 50遺物出土状況(西から)  
(2) 開析谷 N R 50遺物出土状況(南から)  
(3) 開析谷 N R 50遺物出土状況(北から)
- 図版第55 (1) 第 2 面調査地遠景(北東から)  
(2) 第 2 面調査地遠景(東から)
- 図版第56 (1) D 地区全景(南から)  
(2) 掘立柱建物 S B 451完掘(南西から)
- 図版第57 (1) 掘立柱建物 S B 452完掘(南から)  
(2) 掘立柱建物 S B 453完掘(南から)
- 図版第58 (1) 掘立柱建物 S B 454完掘(南西から)  
(2) 掘立柱建物 S B 455完掘(南から)
- 図版第59 (1) A 地区全景(南から)  
(2) 竪穴建物 S H 1061(北から)

- 図版第60 (1)ピット S P 1025断面(南から)  
 (2)ピット S P 1036完掘(南から)  
 (3)ピット S P 1037断面(南東から)
- 図版第61 (1)ピット S P 1044・土坑 S K 1062断面(東から)  
 (2)土坑 S K 1021断面(南から)  
 (3)土坑 S K 1034断面(南東から)
- 図版第62 (1)土坑 S K 1038断面(南から)  
 (2)土坑 S K 1039断面(南から)  
 (3)土坑 S K 1040断面(南から)
- 図版第63 (1)土坑 S K 1041断面(南から)  
 (2)土坑 S K 1060断面(西から)  
 (3)不明遺構 S X 1065焼土部分断面(南から)
- 図版第64 (1) E 地区北半全景(東から)  
 (2) E 地区南半全景(北から)
- 図版第65 (1)掘立柱建物 S B 2121(南から)  
 (2)柵列 S A 2021(北西から)
- 図版第66 (1)柵列 S A 2051(北から)  
 (2)柵列 S A 2191(西から)
- 図版第67 (1)柵列 S A 2207(南から)  
 (2)溝 S D 2001・S D 2002検出状況(北西から)
- 図版第68 (1)焼土坑 S K 2036検出状況(東から)  
 (2)焼土坑 S K 2036断面(南西から)  
 (3)焼土坑 S K 2083掘削状況(南から)
- 図版第69 出土遺物 1
- 図版第70 出土遺物 2
- 図版第71 出土遺物 3
- 図版第72 出土遺物 4
- 図版第73 出土遺物 5
- 図版第74 出土遺物 6
- 図版第75 出土遺物 7
- 図版第76 出土遺物 8
- 図版第77 出土遺物 9
- 図版第78 出土遺物10
- 図版第79 (1)出土遺物11 輸入陶磁器(外面)  
 (2)出土遺物12 輸入陶磁器(内面)

- 図版第80 (1)出土遺物13 炆器(外面)  
(2)出土遺物14 炆器(内面)
- 図版第81 (1)出土遺物15 瀬戸・美濃(外面)  
(2)出土遺物16 瀬戸・美濃(内面)
- 図版第82 (1)出土遺物17 石器・金属器  
(2)出土遺物18 金属器
- 図版第83 出土遺物19
- 図版第84 出土遺物20
- 図版第85 出土遺物21
- 図版第86 出土遺物22
- 図版第87 出土遺物23
- 図版第88 出土遺物24
- 図版第89 出土遺物25
- 図版第90 出土遺物26
- 図版第91 出土遺物27
- 図版第92 出土遺物28
- 図版第93 出土遺物29
- 図版第94 出土遺物30
- 図版第95 出土遺物31
- 図版第96 出土遺物32
- 図版第97 出土遺物33
- 図版第98 出土遺物34 開析谷NR50出土の動物遺存体
- 図版第99 出土遺物35 A・E地区出土遺物1
- 図版第100 出土遺物36 A・E地区出土遺物2

## (2)春日部遺跡

- 図版第101 (1)調査地遠景(南から)  
(2)調査地全景(上が北)
- 図版第102 (1)調査地A・B地区(西から)  
(2)調査地C地区(北から)  
(3)同(東から)
- 図版第103 (1)竪穴建物S H279・281、竪穴遺構S K150・170(南から)  
(2)同(北東から)  
(3)竪穴建物S H279出土土器(南から)



- 図版第104 (1) 竪穴建物 S H281、S P 151内出土遺物(北東から)  
(2) 竪穴建物 S H180(西から)  
(3) 竪穴建物 S H180出土土師器(北西から)
- 図版第105 (1) 竪穴建物 S H180出土須恵器(南西から)  
(2) 竪穴遺構 S K280(南から)  
(3) ピット S P190(南から)
- 図版第106 (1) 土坑 S K 1 (東から)  
(2) 土坑 S K 3 (北から)  
(3) 土坑 S K 4 (北から)
- 図版第107 (1) ピット S P12(南から)  
(2) 掘立柱建物 S B164(北から)  
(3) 溝 S D290東西部(西から)
- 図版第108 (1) 溝 S D290 a— a ´ 断面(東から)  
(2) 溝 S D290 d— d ´ 断面(東から)  
(3) 溝 S D290 h— h ´ 断面(東から)
- 図版第109 (1) 溝 S D290南西屈曲部1(南西から)  
(2) 溝 S D290南西屈曲部2(南西から)  
(3) 溝 S D290土橋検出状況(北から)
- 図版第110 (1) 溝 S D290土橋(西から)  
(2) 溝 S D290土橋南側面(南から)  
(3) 溝 S D290土橋北側面(北から)
- 図版第111 (1) 竪穴建物 S H294(南から)  
(2) 溝 S D291~293(南西から)  
(3) 掘立柱建物 S B292(西から)
- 図版第112 (1) 土坑 S K304(北から)  
(2) 土坑 S K304土器出土状況(北から)  
(3) 土坑 S K297(南から)
- 図版第113 (1) 土坑 S K298(西から)  
(2) 土坑 S K298広東椀出土状況(北西から)  
(3) ピット列 C— S A 1 (北東から)
- 図版第114 出土遺物 1
- 図版第115 (1) 出土遺物 2  
(2) 出土遺物 3
- 図版第116 (1) 出土遺物 4  
(2) 出土遺物 5

# 平成30年度・令和元年度国営緊急農地再編整備事業 「亀岡中部地区」関係遺跡発掘調査報告

## 1. はじめに

京都府中部に位置する亀岡市では、桂川右岸の比較的緩やかな傾斜地を利用して、水稻を中心とした土地利用型農業の経営が行われてきた。しかしながら、農地の多くが狭小で不整形であるため、効率的な機械利用が図られていない状況である。また、農業従事者の高齢化等の様々な問題が顕在化し、耕作放棄地も散見されるなど、農業生産基盤の脆弱化が進んでいる。このため、平成26年度から農林水産省近畿農政局亀岡中部農地整備事業所により、亀岡市土地利用の整序化・担い手への農地利用集積を進めるための区画整理を行い、農業経営の合理化と構造改善を図る国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」事業が行われてきた。<sup>(注1)</sup>

このうち亀岡市稗田野工区では、当事業に伴い当調査研究センターが平成27年度から稗田野町工区内で佐伯遺跡の発掘調査を行い、平成30年度に整理報告が完了した。<sup>(注2)</sup>

平成30年度からは曾我部工区での発掘調査に着手し、犬飼遺跡、金生寺遺跡、春日部遺跡、法貴峠古墳群の調査を継続して行っている。本書で報告する犬飼遺跡と春日部遺跡は、曾我部工区に遺跡範囲の全域が含まれることから、京都府教育委員会による現地踏査、亀岡市教育委員会の小規模調査などを経て、近畿農政局と京都府教育委員会の協議が行われ、発掘調査について当調査研究センターが依頼を受けた。

現地調査にあたっては、曾我部町、稗田野町、東別院町、西別院町、吉川町、本梅町、畑野町、宮前町、東本梅町、大井町、千代川町、亀岡地区西部の各自治会に御高配を賜るとともに、多くの地元の方々にご参加いただいた。また、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会に指導・助言をいただいた。

以下の方々には、現地調査及び整理作業に当たり、ご指導・ご助言を賜った。記して感謝申し上げます。

青柳泰介・赤松佳奈・飛鳥井拓・諫早直人・伊野近富・岩越陽平・浦蓉子・大須賀広夢・小田裕樹・樫木規秀・菊池望・國下多美樹・小林楓・小林慧人・式田洸・鈴木裕明・鈴木康大・中久保辰夫・中塚武・新田和央・箱崎和久・濱野俊一・早川圭・樋口隆久・福島克彦・星野安治・前田仁暉・丸山真史・水野章二・三好裕太郎・山上雅弘・森島康雄・李暉・李貞(50音順・敬称略)

なお、調査に係る経費は農林水産省近畿農政局が全額負担した。(桐井理揮)

〔調査体制等〕

<犬飼遺跡第2・3次>

現地調査責任者	調査課長	小池 寛(平成30年度、令和元年度)
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	細川康晴(平成30年度)
	調査課調査第1係 係長	村田和弘(令和元年度)
	調査課調査第1係 主査	村田和弘(平成30年度)
	調査課調査第1係 副主査	引原茂治(平成30年度、令和元年度)
	同 副主査	黒坪一樹(平成30年度、令和元年度)
	同 調査員	桐井理揮(平成30年度、令和元年度)
	同 調査員	浅田洋輔(平成30年度、令和元年度)
	同 調査員	山本 梓(令和元年度)
	同 調査員	上井佐妃(令和元年度)
	調査課調査第3係 調査員	名村威彦(令和元年度)
調査場所	亀岡市曾我部町犬飼馬ノ上、畑ヶ久保	
現地調査期間	平成30年11月12日～平成31年3月14日(犬飼遺跡第2次) 令和元年5月2日～令和元年10月3日(犬飼遺跡第3次)	
調査面積	犬飼遺跡第2次：4,155㎡ 犬飼遺跡第3次：5,569㎡	

<春日部遺跡第2次>

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	細川康晴
	調査課調査第1係 主査	村田和弘
	同 副主査	黒坪一樹
	同 調査員	浅田洋輔
調査場所	亀岡市曾我部町中長瀬	
現地調査期間	平成30年5月14日～平成30年9月18日	
調査面積	1,715㎡	

## 2. 位置と環境

### 1) 地理的環境

#### (1) 地誌と交通路(第2図)

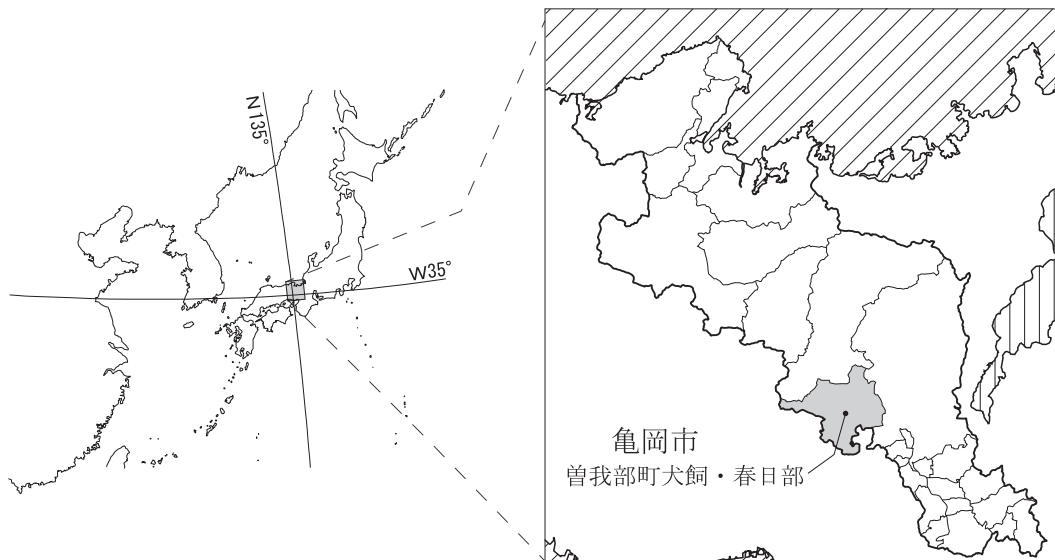
亀岡市は、京都府のほぼ中央に位置し、西側と南側が大きく突出した四角形状を呈している。面積約224.87㎢で、東西約24.6km、南北約20.5kmの広さをもつ。北は南丹市、東は京都市、南及び西は大阪府高槻市・茨木市・豊能郡能勢町・同豊能町に接する。

犬飼遺跡と春日部遺跡の所在する亀岡市曾我部町は亀岡盆地の南西端にあたり、大阪方面各所へと通じる交通路が通っている。曾我部町の西側には旧摂丹街道である国道423号線が通っており、亀岡市西別院町、大阪府能勢町を経て池田市に通じる。現在は犬飼集落の東側で大きく南に曲がっているが、本来は重利集落付近から法貴谷川に沿って扇状地を上り、法貴峠へと至る道であったという。

現在の国道423号線よりも西側、現在のほ場の中には南北に直線にのびる里道があり、近世には妙見社への巡礼道として利用された。また、中世には、源満仲が京から多田荘へ抜ける万寿越と呼ばれる峠であった。法貴峠の中腹には、天正年間に明智光秀が西別院町の笑路城を攻めた際に、攻めきれずに馬を戻したという伝承を持つ「明智の戻り岩」という巨岩がある。明智の戻り岩には「享徳三年戊甲三月廿日」の年紀を持つ題目が彫られており、この交通路も中世には活発に利用されていたことがうかがえる。

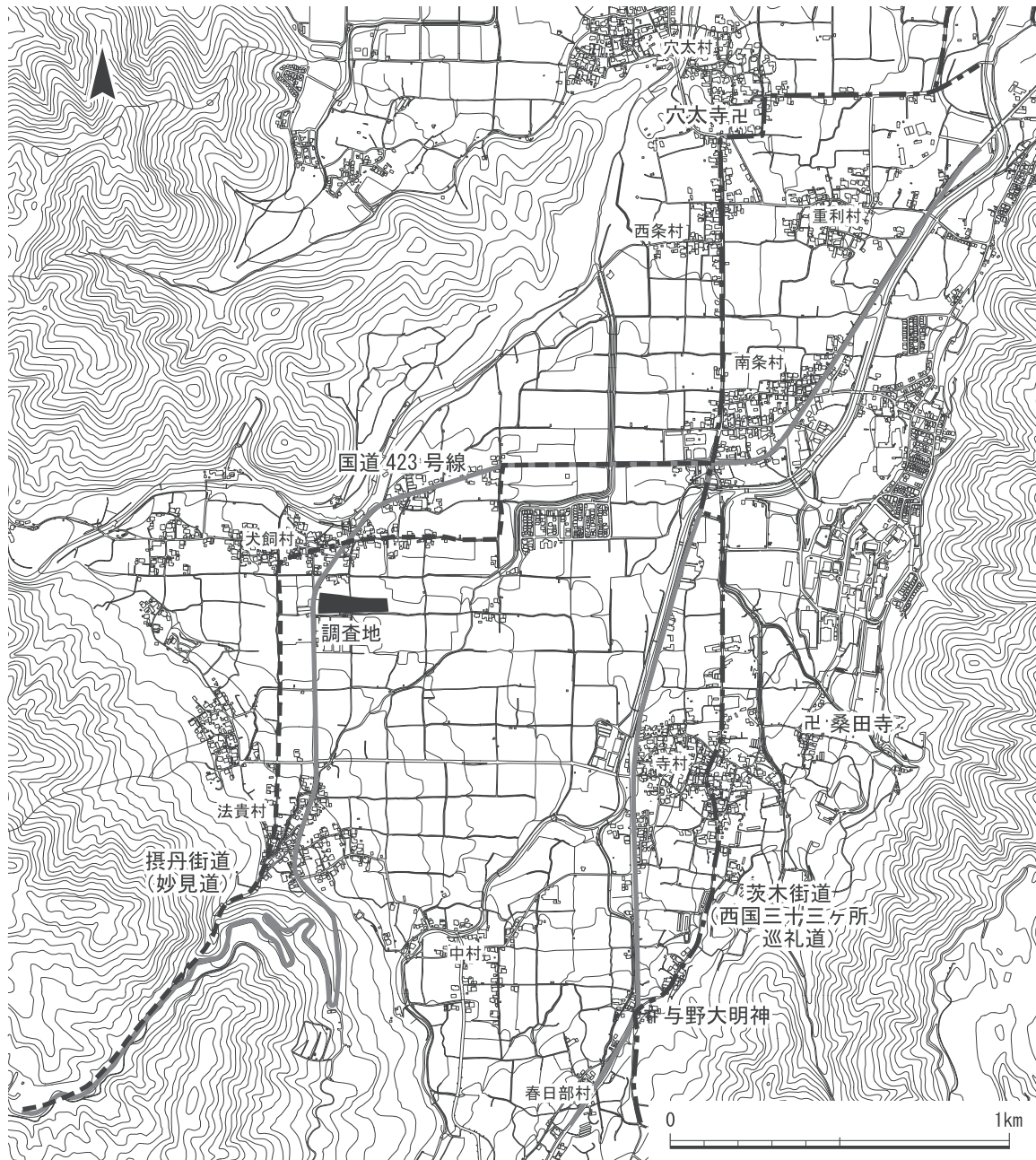
東側を通る府道407号線は旧茨木街道であり、亀岡市東別院町を経て大阪府茨木市に至る。茨木街道は、重利付近で摂丹街道と分岐し、曾我谷川に沿って南下する道であり、近世には穴太寺から総持寺に至る、西国三十三所の巡礼道でもあった。

これらの道は、近世に整備された、亀山城下から峠や谷筋を通して摂津方面に向かう道であり、前者は関明神越道、後者は鳥居嶺道として『五畿内志』中にもみえる。近世には法貴村など一部の村が高槻藩領であった時期もあり、丹波の中でもとりわけ摂津との関係が深い地域である。<sup>(注3)</sup>



第1図 亀岡市の位置

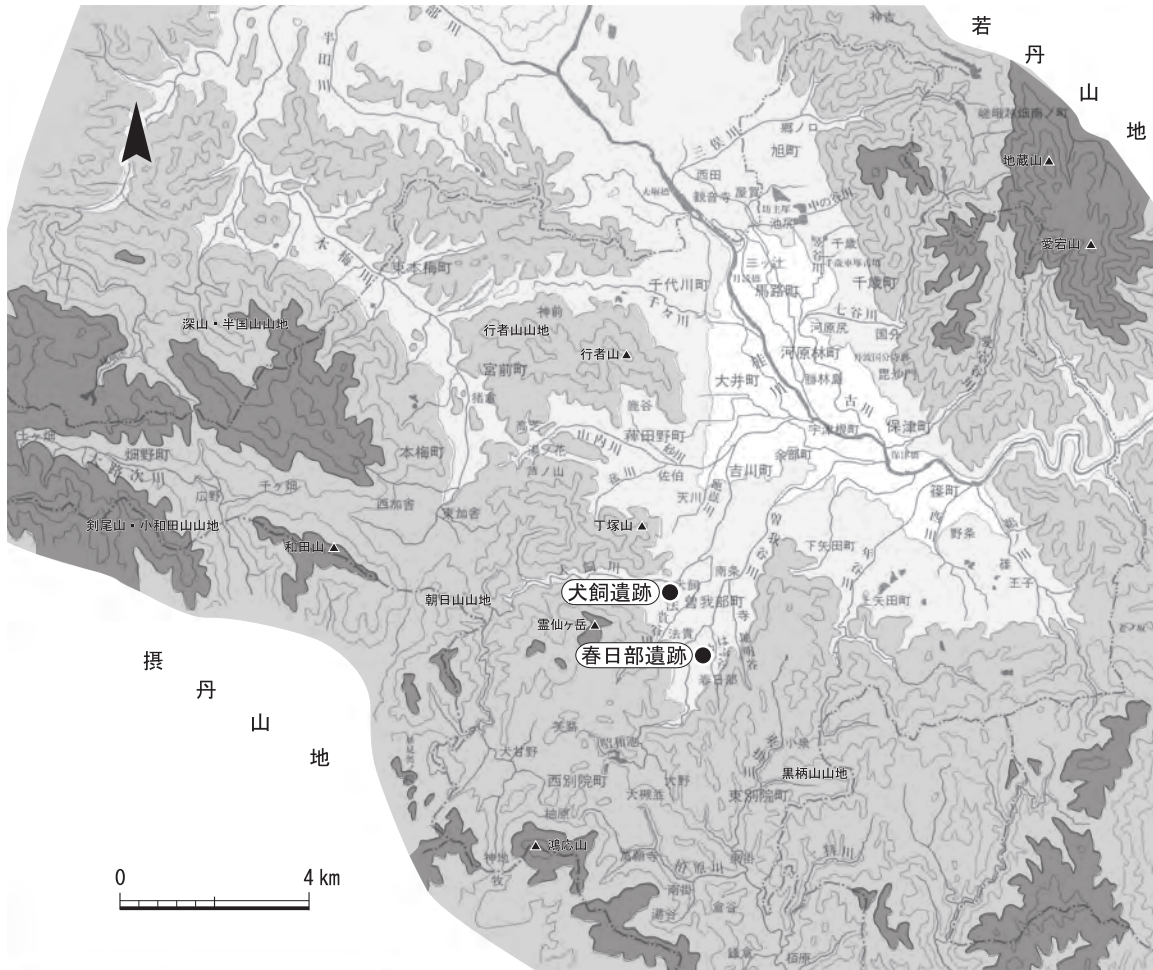




第2図 近世の村と交通路(1/20,000 QGISを基に作成)

(2)地質(第3図)

亀岡盆地は、北東に若丹山地、南西を撰丹山地の両山地に囲まれて、中央部に盆地が広がっている。これらの山地は丹波帯と呼ばれ、泥質岩、砂岩、チャートを中心とした堆積岩で、一部に石灰岩を含んでいる。亀岡断層の断層崖に沿うように、北西から南東方向に大堰川(桂川)が盆地のほぼ中央を流れている。大堰川の両岸には河岸段丘が発達しており、近世以降の集落も多くは段丘上に位置している。大堰川は淀川の1支流であり、京都盆地を経て大阪湾へと注ぐ。盆地内には大堰川に直交するように北東から南西方向に流れる大小の支流が複数存在している。このような地理的環境によって山麓にみられる緩斜面から大堰川に向かって、断層崖と扇状地、平坦な河岸段丘というように階段状の地形を呈していることが亀岡盆地の特徴である。



第3図 亀岡盆地の地形(注4を基に作成)

摂丹山地のうち、曾我部町の西側にある山々の頂部は400～500メートルの小起伏をなし、朝日山山地と呼ばれる。この山地内にある霊仙ヶ岳に水源をもつ犬飼川は、深いV字谷を形成して曾我部町内を東流し、大堰川に合流する。この霊仙ヶ岳の北東側山麓には、霊仙ヶ岳から供給された砂岩、粘板岩、花崗岩、石英閃緑岩、その風化物である真砂土からなる扇状地が発達している。また、盆地南部に位置する黒柄山山地から南流する曾我谷川、法貴谷川は、曾我部町周辺でやや緩斜面となり、犬飼川に合流する。犬飼、法貴の現集落はこの扇状地上に位置している。

このように、曾我部町は、犬飼川、法貴谷川、曾我谷川が形成した、緩く北に低く傾いた平らな地形と、山麓にみられる急斜面の扇状地が複合した合成扇状地上<sup>(注4)</sup>に位置している。

(桐井理揮)

### (3) 調査地周辺の地形形成過程と微地形

犬飼遺跡の調査中には土壌分析を実施し、これまで不明確であった当地域の地形形成史にも寄与する成果が得られている。以下ではその成果を踏まえつつ、調査地周辺の地形の形成過程及び微地形にも留意して記述を進めたい。以下、地区名は犬飼遺跡のものであり、後述の報告を参照いただきたい。

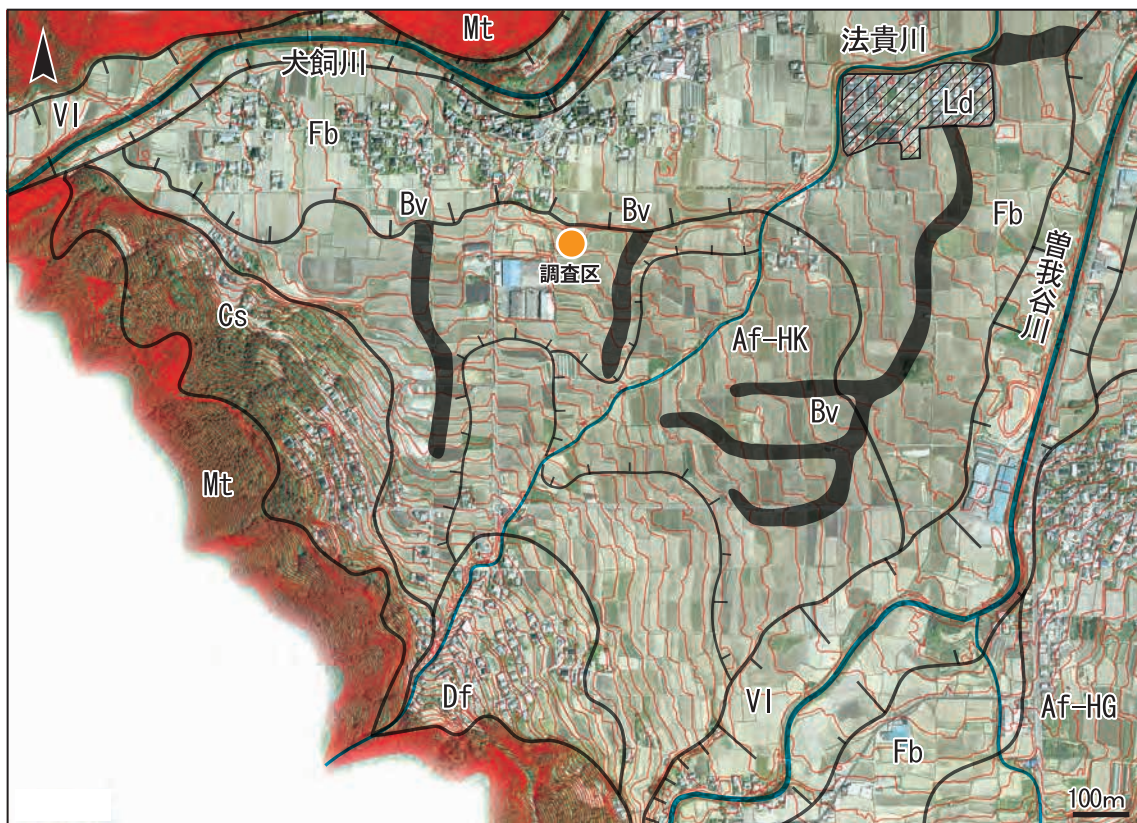
今回の調査区は、法貴谷川の谷口を頂点として、同心円状の等高線群の分布で区分される地形



面上に位置する。このような等高線の分布状況は、典型的な扇状地のうち、主扇状地領域を示す地形である<sup>(注5)</sup>。一方で、堆積営力からは、扇状地は自然堤防帯が発達するような氾濫低地と区別されるが、B・D地区北端部の崖面の露頭観察では、土石流堆積物と解釈される比較的厚い礫層の堆積が確認できるため、調査区が立地する地形面は堆積営力からも扇状地と判断できる。以下では、この扇状地を法貴谷川扇状地とする(第4図)。

上述のように、法貴谷川扇状地は等高線群において同心円状の配列が示されるが、地形の判読からは地形面内に連続するいくつかの小崖の存在が読み取れる。同様に、扇状地内には、不明瞭ながら周囲よりも暗色でやや凹地をなす、流路状ないし谷状の地割りを呈する、埋没谷あるいは埋没流路の痕跡(Bv)と推定される地表テクスチャーが判読可能である。また、法貴谷川扇状地の谷口付近には、地形傾斜が相対的に急となる領域が分布しており、この部分は土石流扇状地(Df)となる可能性がある。さらに、扇状地背後の北西方向の山地斜面の山麓部には、崖錐や沖積錐などからなる堆積斜面である麓積面(Cs)が発達する。

上記のような地形的特徴を示す法貴谷川扇状地については、ボーリングデータもなく、構成層を観察できるような露頭も存在しておらず、表層地質に関して不明な点が多かった。このような



凡例

Mt: 山地斜面 Cs: 麓積面 Df: 土石流扇状地 Fb: 段丘化した氾濫原 VI: 谷底低地 Ld: 人工造成地  
 Bv: 埋没谷痕跡、埋没流路痕跡 Af-HK: 法貴川沖積扇状地(段丘化) Af-HG: 東側沖積扇状地 ㄣ: 崖、遷急線

- ・等高線は、埼玉大学の谷謙二氏のホームページの「web 等高線メーカー」サイトで作成した画像を基に作成した。
- ・標高データは、国土地理院の地理院タイル(標高タイル)による。等高線の間隔は1mである。
- ・基図は、国土地理院の「地理院地図」の地理院タイル(地理院最新写真)を使用している。

第4図 調査区周辺の地形分類図

なか、今回の発掘調査では、犬飼遺跡B区北縁部の崖面の露頭で扇状地堆積物の観察を行うことができた。なお、基盤層の露頭観察を行った北端部の崖は、犬飼川と併行するような位置関係から、犬飼川による側刻によって形成された侵食崖とみなされる。侵食崖の北側には、平坦な氾濫原が分布する。現犬飼川は、この氾濫原を下刻して形成された谷底低地を流下する。このような地形から、侵食崖の北側の氾濫原は、犬飼川が現流路に至る侵食過程で形成された段丘面と考えられる。

この崖面で観察できる基盤層では、礫層上部に層厚1.0m程度の砂質泥～泥質砂を主体とする細粒の氾濫原堆積物が被覆する。この氾濫原堆積物には、年代測定試料の採取地点の2地点などで、細粒の中礫(4～8mm)を最大礫径とする砂礫層が部分的に堆積する。崖面部分の礫層上部の氾濫原堆積物では、土色が暗色帯をなす相対的に腐植含量の高い、埋没した3層準の土壤発達層準(古土壤)が挟在する(第10図)。これらの腐植からは、 $2\sigma$ の暦年代値で9,000～8,300年前の年代値が得られた(犬飼遺跡第6章 理化学分析の項を参照)。

B地区北端の侵食崖の露頭観察で確認できる、いずれも9,000～8,300年前を示す土壤発達層準は、今回の発掘調査の遺構面からかなり浅い深度に位置しており、遺構面の上部には厚い砂礫層などの粗粒の流路堆積物は累重しない。このような堆積状況から、調査区が立地する付近の法貴谷川扇状地は9,000～8,300年前頃にすでに離水しており、新たな氾濫原の上方付加が生じていなかったと捉えられる。また、侵食崖の北側では、新たな扇状地堆積物が供給されておらず、上述のように犬飼川の侵食過程によって形成された氾濫原が分布する。犬飼川の側刻による侵食崖では、扇状地の構成層上部の古土壤が侵食されているため、犬飼川は9,000～8,300年前以降のある段階まで、扇状地の侵食崖下に広がる氾濫原上を流下していた可能性が高い。したがって、少なくともこの段階までには、現流路でみられるような谷底低地を形成して、扇状地とその東側に広がる氾濫原を下刻するような地形を未だ形成していなかった可能性が高い。つまり、9,000～8,300年前以降のある段階までには、犬飼川の河床は現在よりも高かったと解釈できる。

一方で、扇状地の下流側に広がる平坦な氾濫原については、『新修亀岡市史』によると、後期更新世の最終氷期に形成及び離水した低位段丘構成層からなる段丘面(低位段丘面Ⅱ面)とされている。<sup>(注6)</sup>法貴川扇状地の北東側では、氾濫原面との地形境界部分に明瞭な崖が認められず、地形が連続的である。また、上述した法貴谷川扇状地の北側の側刻時期と地形的特徴から、低位段丘面Ⅱ面の段丘化の時期は、新修亀岡市史で推定された後期更新世ではなく、1.17万年前以降の完新世となる可能性も指摘しうる。

したがって、低位段丘面Ⅱ面に対比される氾濫原については、その地形面の形成時期が最終氷期とみなせるかどうか、再検討の余地があると言えよう。ただし、曾我部町内とその周辺で人間活動が目立つようになる古墳時代以降には、扇状地と氾濫原の双方において、現在の地形と同様に、すでに段丘化が進行していたと考えられる。つまり、これらの地形面では、弥生時代には水がかりが悪い状況となっており、犬飼川、曾我谷川ともに水田灌漑のために堰などを設けて側方へ直接的に分水することは困難な状況であったと考えられる。実際に現在でも、犬飼川では段丘



化した氾濫原部分へは遷急点の上部に位置するとみられる谷口の奥部で取水し、そこから下流へ水路で導水している。

以上から、法貴川扇状地は、縄文時代早期後葉の9,000～8,300年前以降<sup>(注7)</sup>のある時期に離水が進行して、地形面が全体的に侵食傾向へ転じたと考えられる。したがって、法貴川扇状地は、地形的には段丘化した沖積扇状地として捉えられる。今回の調査によって、扇状地の離水時期については、ある程度の推定ができたものの、砂礫層から年代測定試料が得られなかったため、発達時期は確認できていない。ただし、年代測定を実施した古土壌を挟在する細粒の氾濫原堆積物と、その下位の粗粒の礫層などとの間には、明瞭な侵食面が存在していないため、扇状地面は連続的に上方付加して形成されたと捉えられる。したがって、扇状地構成層のうち、その上部は後期更新世から中期完新世の2万から1万年前頃に地形発達が進行した可能性を考えておきたい。

(辻 康男・AMS年代測定グループ＝パレオラボ)

#### (4) 植生と環境

亀岡盆地は降雨日数が少ない内陸気候的な特徴を持った地域で、瀬戸内式気候地域の周辺部に当たる。

亀岡盆地の植生についてのデータは、鮮新・更新世に関しては蓄積がみられるが、縄文時代以降の花粉分析結果がほとんど存在していなかった。今回の調査に伴い、古墳時代前期後半～奈良時代、鎌倉時代～室町時代の古植生に関するデータが得られた。平安時代前後のデータが欠落するものの、1遺跡における通時的な植生変遷に関する情報が得られた点で、極めて貴重である。仔細なデータは犬飼遺跡第6章に提示し、ここでは、概要を記しておきたい。

花粉分析の結果では、犬飼遺跡C地区で検出した古墳時代前期後半～奈良時代の開析谷N R 50のいずれの層位においても、スギ属の産出が目立ち、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科やコウヤマキ属、モミ属、ツガ属といった温帯性針葉樹を伴っている。したがって、古墳時代前期後半～奈良時代の遺跡周辺の山地斜面や台地などには、スギ林を主体とする温帯性針葉樹林が広がっていたと思われる。また、コナラ属アカガシ亜属の産出も目立ち、カシ類からなる照葉樹林も分布を広げていたと考えられる。クリ属－シイノキ属も産出しているため、カシ類からなる照葉樹林にはシイ類も混じっていた可能性が高い。なお、コナラ属アカガシ亜属は上位層に向かって増加しており、カシ類からなる照葉樹林は、奈良時代にかけて分布を広げていった可能性がある。

丹波山地西部では、約1,000年前頃までは、スギやイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の温帯性針葉樹が多いという事例が報告されている<sup>(注8)</sup>。今回得られた草本の花粉化石群集は、人間による強い植生攪乱の影響が少なかった平安時代頃までの丹波山地西部の森林植生の特徴を示しているとみられる。

13世紀後半～14世紀に属する堀S D 01でも、スギ属やコナラ属アカガシ亜属の産出が目立つ。この時期においても遺跡周辺の山地斜面や台地などにはスギ林や照葉樹林が分布していたと考えられる。S D 01における花粉化石群集の組成には層位的変化が少なく、試料の堆積期間中は同一の植生が広がっていたと考えられる。ただし、古墳時代～奈良時代と大きく異なるのは、マツ属



複雑管束亜属とコナラ属コナラ亜属が多く産出している点である。周辺の発掘調査成果をふまえると、この時期には遺跡周辺で人間活動が活発化したと考えられるため、開けた明るい場所が多く、そこにニヨウマツ類やコナラなどからなる二次林が発達していたと考えられる。

さらに、S D01ではハンノキ属が多産し、エノキ属－ムクノキ属を伴っている。13世紀後半～14世紀には、遺跡周辺の谷筋などにハンノキ属からなる湿地林が分布しており、その周辺の水分条件の良好な場所にはエノキ属－ムクノキ属などが生育していた可能性がある。

(森 将志・辻 康男＝パレオ・ラボ)

## 2) 歴史的環境

### (1) 周辺の遺跡(第5図)<sup>(注9)</sup>

**弥生時代以前** これまでの調査では、曾我部町内では弥生時代以前の明確な遺構は検出されていない。

亀岡盆地に目を広げると、弥生時代以前のものとして鹿谷遺跡で出土した黒曜石製の尖頭器や、千代川遺跡の有舌尖頭器石器を挙げるができる。縄文時代では押型文土器が千代川遺跡や南条遺跡などで得られているものの、中期以前の遺構が検出された遺跡数はいまだ少ない。遺跡数が増加するのは縄文時代後期以降であり、晩期の凸帯文土器は大堰川西岸を中心に多くの遺跡で出土している。

当地域の弥生時代前期の様相は明らかではなく、太田遺跡を挙げうる程度である。太田遺跡は畿内第Ⅰ様式末に形成が始まり、Ⅱ様式まで継続した環濠集落である。東海地域や朝鮮半島との関係をうかがわせるような土器も出土しており、広範囲に及ぶ交流があったことを示唆している。Ⅲ様式以降には盆地内の広い範囲で大規模な集落が形成されるようになる。大堰川西岸では、千代川遺跡や余部遺跡で、竪穴建物や方形周溝墓が検出されており、当地域の中心的な遺跡とみられる。弥生時代後期になると、中期までの遺跡の多くは断絶し、東谷遺跡・北金岐遺跡・太田遺跡など、小規模な遺跡が認められるが、集落構造は不明点が多い。

しかしながら、曾我部町内ではこれまで弥生時代に属する顕著な遺構は未検出であり、集落の形成は古墳時代を待たなければならない。

**古墳時代** 亀岡盆地内では、初期古墳は確認されていない。園部地域までを射程に入れると、前期初頭の黒田古墳(前方後円墳、52m)、前期中葉の園部垣内古墳(前方後円墳、82m)、中畷古墳(前方後方墳、75m)が相次いで築造されており、当地域の中心的な位置にあったのは園部盆地と考えられる。前期後半になると、亀岡盆地でも向山古墳など小規模な古墳が確認されるようになる。中期以降、豊富な副葬品を持つ坊主塚古墳や、全長82mの前方後円墳である千歳車塚古墳など、比較的有力な古墳が大堰川東岸に築造されるようになる。他方、大堰川西岸では、200基以上からなる小金岐古墳群や、石棚付石室を有する拝田古墳群・鹿谷古墳群、後述する法貴・法貴峠古墳群など、群集墳が多く確認されている。集落遺跡も多く、大堰川西岸では、100棟を越す竪穴建物が検出された鹿谷遺跡をはじめ、千代川遺跡や余部遺跡、佐伯遺跡などで小・中規模の集落遺跡が調査されている。

近年の曾我部町内での継続的な発掘調査では、古墳時代前期から中期前半の遺構が広範で検出されていることから、弥生時代以前の遺跡の形成が低調な曾我部町内でも、古墳時代になると安定的な居住域が形成されるようになったと考えられる。前期古墳は未確認であるが、穴太周辺で採取されたと伝わる筒形銅器が知られており、周辺に未知の前期古墳が存在する可能性は高い。犬飼遺跡の西側丘陵上には、中期後半の須恵器及び紡錘車形石製品、鉄刀の出土が伝わる犬飼古墳群や、墳丘内列石が調査された後期の法貴峠20号墳など、石室墳が密集しており、盆地内でも屈指の古墳集中地域となっている。

**古代** 飛鳥時代は、古墳時代と比較して盆地全体で集落の形成がやや低調であり、古墳時代後期末の首長居館である八木嶋遺跡も飛鳥時代には継続しない。集落遺跡としては、馬路遺跡や蔵垣内遺跡を挙げうる程度である。なお、これらの遺跡では竪穴建物が主体で、掘立柱建物の本格的な普及は8世紀半ば以降と考えられる。

古代の亀岡盆地内では複数の古代寺院が知られており、曾我部町内でも白鳳寺院とされる與野廢寺がある。與野廢寺は正式な発掘調査は行われていないが、塔心礎が残されており、周辺では瓦が採取されている。

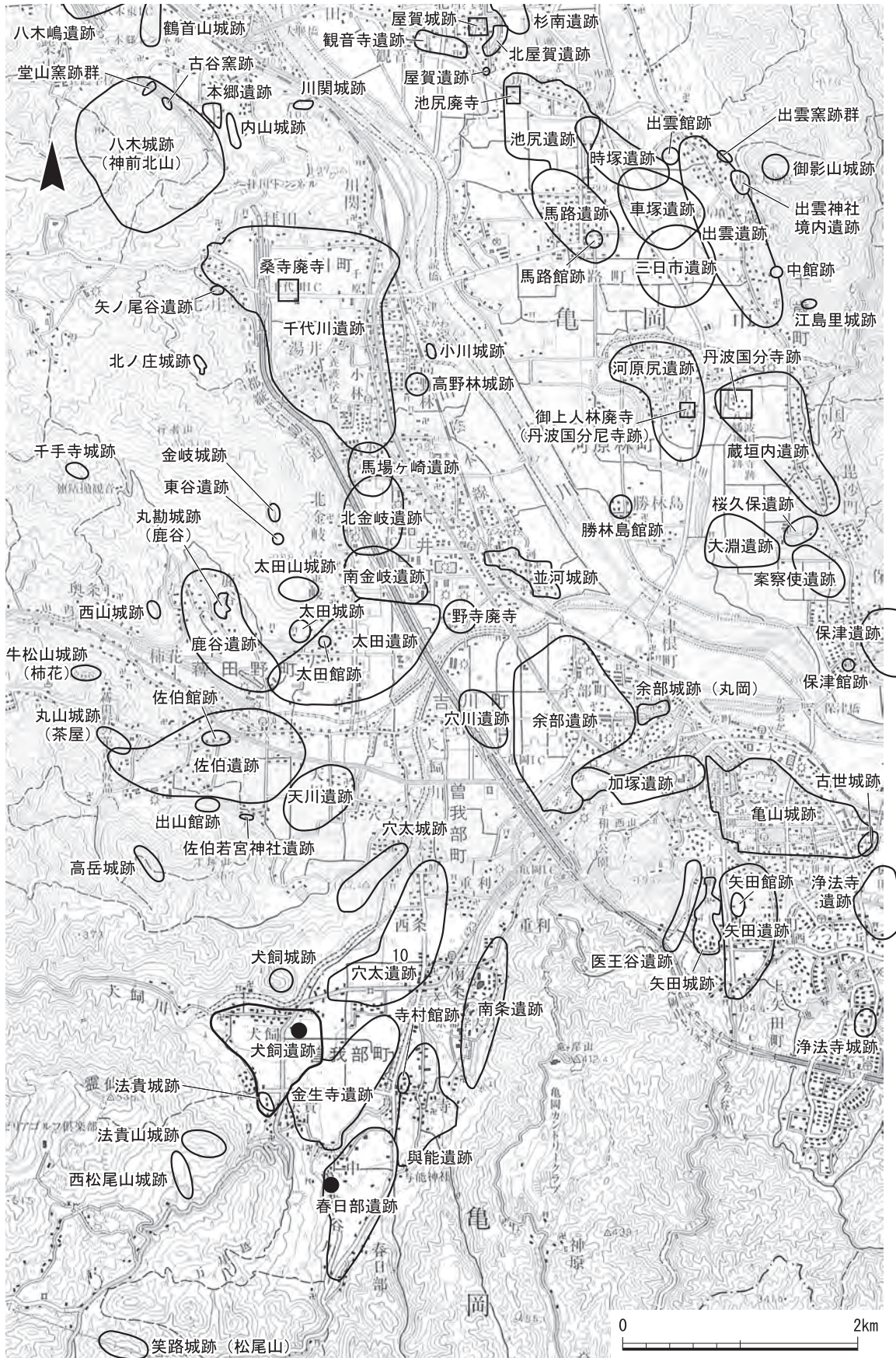
奈良時代には、盆地全域で遺跡の数は急増する。大堰川東岸では7世紀末に池尻廢寺が、8世紀中葉には国分寺が造営され、周辺の遺跡でも建物の数が増加する。この時期、大堰川東岸では古山陰道が整備されており、これらは軌を一にした現象ととらえられる。これらの遺跡は8世紀で多くは消滅し、9世紀には、丹波国府の推定地である千代川遺跡や、大形の掘立柱建物が検出されている太田遺跡など、大堰川西岸に中心が移動することとなる。

古代の生産遺跡としては、篠窯業生産遺跡群(篠窯)を挙げることができる。7世紀に操業を開始した篠窯は、11世紀まで須恵器、緑釉陶器、瓦などを、平安京をはじめ列島各地に供給した。窯業の他に、「山国柚」の存在も文献資料から知られており、丹波の木材が盆地内の「山川津」から大堰川を下り、平城京・平安京へと運搬された。これまで、柚の位置としては大堰川上流の南丹市天若遺跡が想定されてきたが、考古学的な成果からは詳細な位置は不明であった。今回の調査では古代の木材加工の痕跡が検出されており、柚関連の遺跡として注目される。

**中世** 中世の亀岡盆地の集落遺跡としては、千代川遺跡や太田遺跡、天川遺跡などを挙げることができるが、集落の全体像がわかる遺跡には恵まれぬ。曾我部町内でも近年、犬飼遺跡や金生寺遺跡などで事例が増加している。曾我部町の南条火葬墓群では、13世紀後半～14世紀前半にかけてのものとされる古瀬戸灰釉瓶子の骨蔵器が検出されている。ただし、いずれの遺跡も14世紀前半には遺構が確認できなくなっており、中世後期には現集落に近い位置に居住域が形成されていた可能性が高い。

中世城館も多く確認されており、市内だけでも71城が知られている。曾我部町内には酒井氏が城主と伝わる法貴館跡や、盆地内でも屈指の縄張りを持つ法貴山城、周辺に「城ヶ裏」や「垣内」など城館関連地名を残す寺村館跡などがある。犬飼遺跡の北西丘陵上には犬飼城があり、『丹波志桑田記』によると、上原(福智)氏が応永元(1467)年より居住したとされる。ただし、南北朝時





第5図 周辺遺跡分布図(国土地理院 1/50,000 京都西南部・京都北西部)



代以前にさかのぼる可能性があるものは少なく、本書で報告する犬飼遺跡、春日部遺跡を除くと、出雲遺跡の発掘調査で部分的に方形居館の一部と考えられる溝が検出されているのみである。

天正3(1575)年には、明智光秀による丹波国攻略が開始され、天正5(1577)年には亀山城を攻め落とした。先述の犬飼城も天正10(1582)年に落城している。天正8(1580)年には光秀は丹波29万石に封せられ、亀山城を整備するなど近世の城下町の礎を築いた。

## (2)文献史学からみた犬飼遺跡をとりまく環境

**蘇斯岐屯倉と犬飼遺跡** 犬飼遺跡の所在する、京都府亀岡市曾我部町「犬飼」という地名は、古代氏族のひとつである犬養氏に結びつけて考えられてきた。犬養氏については黛弘道氏が総括的に整理しており、残証地名から「イヌカイ」と「ミヤケ」が近接してみられる例が複数あること、犬養氏がクラにかかわる氏族との関係が認められることを指摘した。そして、犬養氏の職掌について、犬の飼養だけでなく、大王の直轄領であるミヤケを守衛することであったと説く。その中で亀岡市の犬飼地名については、近隣に延喜式内社の三宅神社が所在していることから、「イヌカイ」と「ミヤケ」が関係する一例として挙げている<sup>(注10)</sup>。その後、生田敦司氏は犬養部自体がいくつかの系統に分別可能であることを説き、多様なイヌ需要に対してイヌを供出したことを指摘しているが、アガタやミヤケ、クラにかかわる可能性を排除しておらず、その点では黛説は現在でも説得力がある。

日本書紀安閑条には、安閑2(535)年5月に全国26か所にミヤケが設置され、その中には「丹波国蘇斯岐屯倉」の記載が認められる。蘇斯岐屯倉の詳細な所在地については不明であるが、先述の三宅神社付近が有力な候補の一つとされてきた<sup>(注12)</sup>。対して、和田萃氏は、和名抄にみえる「宋我部郷」が、蘇我氏の私有部民が設置されたものと考え、黛氏の説を引用しつつ、蘇斯岐屯倉が蘇我稲目の主導で設置されたことを指摘する。そして、その具体的な比定地には曾我部町犬飼周辺を想定している<sup>(注13)</sup>。犬養部が設置されたのは安閑朝期で、大宝令以降には見られないことから、遺存地名から犬養氏、さらにはミヤケとの関係を追及するには慎重である必要があるが、当地域周辺はミヤケとの関係を示す根拠が認められることは注意されてもよからう。

また、文献中に登場する「丹波直」や私部、部民の分類から、丹波自体が古代には中央政権とのつながりが強い地域であったことも指摘されている<sup>(注14)</sup>。

**中世の曾我部町** 奈良・平安時代の曾我部町に関する文献資料は少なく、様相は不明である。鎌倉時代になると、それまで平氏と密接な関係のあった丹波は後鳥羽上皇の知行となり、大内氏が守護の任にあたったとされる。承久の乱以降は、後高倉上皇の知行国となり、六波羅探題南方北条氏が守護を歴任した。鎌倉時代末期には、足利高氏が亀岡市篠八幡宮で挙兵したことに代表されるように、戦乱の舞台となり、多くの国人たちの記録が残されている。

高氏は、元弘3(1333)年に丹波の土豪や赤松則村らとともに六波羅探題を攻め、翌年、後醍醐天皇は建武新政を開始した。建武2(1335)年、後醍醐天皇と対立した尊氏は、久下時重・波々伯部次郎門尉為光・中沢三郎入道ら丹波の国人と通じ、丹波守護代を敗走させた。その後、尊氏は一度は天皇方に敗れて九州まで逃れることとなるが、体制を立て直し、湊川の戦いを経て入京し

付表1 石高変遷表

典拠	正保国 絵図	丹波国亀山領郷村高帳				元禄郷帳	天保郷帳	桑下漫禄		旧高旧領取調帳	
年代	1648 ～49	1684	詳細			1700	1834	1808～44		1877	
項目	村高(石)	村高(石)	本高(石)	改出(石)	新田(石)	村高(石)	村高(石)	村高(石)	戸数(軒)	村高(石)	旧領
犬飼村	604	724	604	114	6	604	727	718	90	729	亀岡藩
寺村	544					550	550	544	90	544	高槻藩
春日部村	244					224	233	220	30	224	篠山藩
法貴村	505					505	505	540	60	505	高槻藩
中村	240					240	244	246	30	242	高槻藩
南条村	373	430	373	48	9	373	431	420	57	430	亀岡藩
西条村	240	305	270	33	2	270	306	303	30	307	亀岡藩
重利村	335	428	335	87	6	335	428	422	37	428	亀岡藩
穴太村	636					655	672	630	100余	672	松田 善右衛門

※ 新修亀岡市史資料編第二巻（付図4-1）から作成。値は小数点以下を切捨。

※ 改出は、1640年に菅沼定芳が実施した検地の改出高。新田は、寛永検地以降の新田高

た。この間、丹波国は尊氏の支配下にあったようで、京から地理的に近い桑田郡では、緊張状態(注15)にあった。

このように、一瞥しただけでも丹波の中世に関する史料は比較的豊富だが、曾我部町を取巻く環境は、文献史学からは明らかではなく、「犬飼」に関する記述も見られない。『新修亀岡市史』資料編では、「犬飼」の初出は慶長8(1603)年銘がある與野神社の棟札であり、犬飼村がほかの曾我部町5村とともに中世後期には成立していたことを示している。

この6か村は、先述の『和名抄』宋我部郷に起源をもつと考えられ、曾我部荘の荘域にあてられてきた。曾我部荘は竹内理三が『鎌倉遺文』中の嘉禄元(1225)年11月5日付「東大寺文書」にある東大寺東南院門跡領「丹波国一処曾我部荘」とあるのを桑田郡と考え、それ以降当地に比定する意見が多い。(注16)しかし、丹波には、後白河院法華堂領曾我部荘と、東大寺東南院門跡領曾我部荘があること、そして多紀郡と天田郡にも「ソガベ」の地名があることから、曾我部荘の比定地については定見をみない。

飛鳥井拓は、曾我部町の荘園について整理し、実際の史料上で確実にみえるのは「召継(次)保」であることを指摘する。この一連の「召次保」に関わる資料は、徳治3(1308)年の『鹿王院文書』を初出として14～16世紀に散見され、中世の土地利用にかかわる当地域の様相を断片的ながら知ることができる。『両足院文書』には、永享元(1429)年「丹波国桑田郡宗我部郷召次御保法貴村寺庵領」とあることから、現在の曾我部町法貴を含む「曾我部郷」に「召次保」がおかれたことは確実である。嘉暦4(1329)年には「桑田召次保重安名」という人物の田畠が伊予局の子孫に安堵されており、その宛名が「桑田下司」とされていることから、召次保の名の進退を管掌する存在が「桑田下司」であると指摘している。(注17) (桐井理揮)



### 3. 調査の経過と方法

#### 1) 調査の経緯

平成30年度以降、犬飼遺跡・春日部遺跡では継続的に発掘調査を行っており、令和3年度末現在で調査次数は犬飼遺跡で11次、春日部遺跡で5次に及ぶ。その概略は付表2のとおりである。<sup>(注18)</sup>

#### 2) 調査の方法

##### (1) 地区割りの方法について(第6図)

犬飼遺跡の調査にあたり、第2次調査で最初に調査に着手した面的調査地2か所にはA地区、

付表2 調査一覧

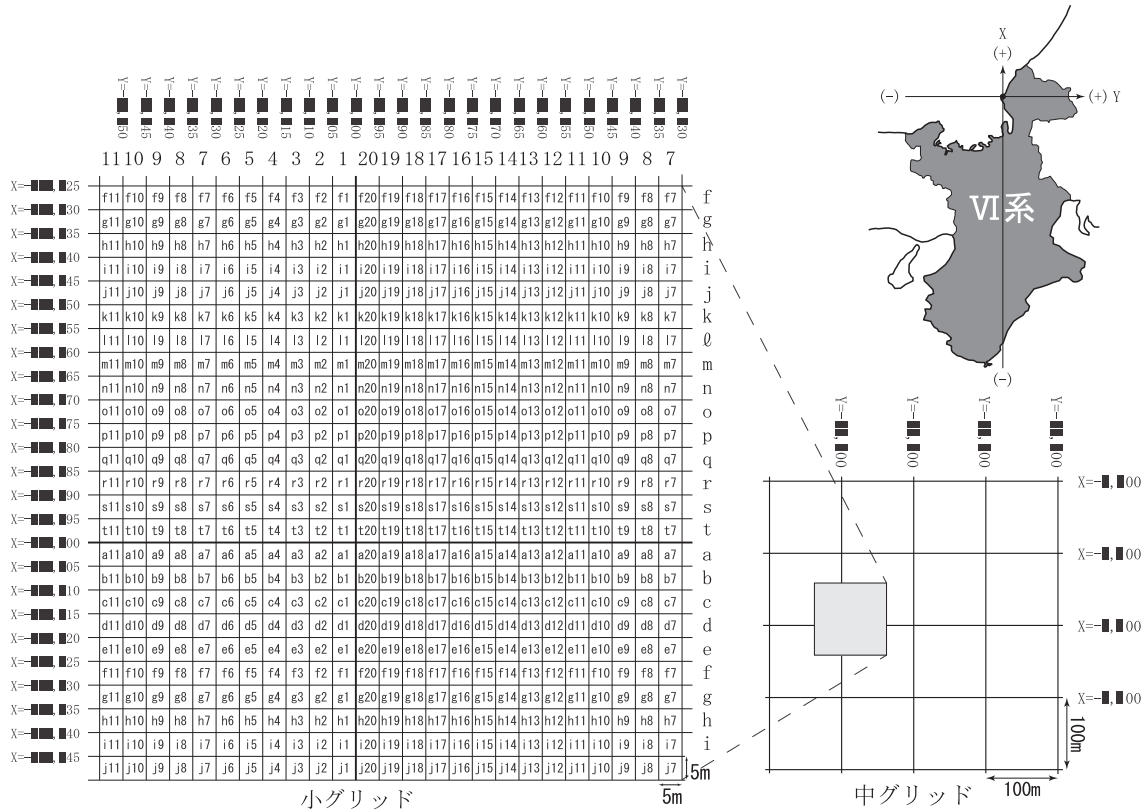
#### 犬飼遺跡

次数	調査区	調査期間	調査面積	調査機関	調査要因	主な成果	文献
第1次	-	平成23年11月～12月	220㎡	亀岡市教育委員会	ほ場整備	範囲確認	亀岡市文化財報告書第82集
第2次	A・B・C・D	平成30年11月12日～平成31年3月14日	4,155㎡	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	ほ場整備	古墳～奈良の集落	本報告
第3次	E	令和元年5月2日～令和元年10月3日	5,569㎡		ほ場整備	中世の方形居館	
第4次	F	令和元年5月15日～令和元年8月9日 令和元年11月7日～令和2年3月12日	2,600㎡		バイパス建設	古墳時代～古代の集落	京都府センター情報138号
第5次	G	令和元年11月5日～令和2年2月12日	1,950㎡		ほ場整備	古墳時代前期の水路 地震痕跡	京都府センター情報138号
第6次	F2・K	令和2年5月14日～令和3年1月6日	2,000㎡		バイパス建設	古墳時代中期初頭の灌漑施設	京都府センター情報139号
第7次	H・I	令和2年6月8日～令和3年1月12日	2,000㎡		河川改修	古墳時代前期の灌漑施設 中世の屋敷跡	京都府センター情報139号
第8次	J	令和2年9月15日～令和2年10月29日	410㎡		ほ場整備	古墳時代中期初頭の流路	京都府センター情報139号
第9次	K	令和3年5月18日～令和3年12月21日	1,200㎡		バイパス建設	古代の集落	未報告
第10次	小規模・L	令和3年7月1日～令和4年1月17日	2,000㎡		河川改修	中世の水路	未報告
第11次	小規模調査	令和4年1月5日～令和4年2月25日	534㎡		ほ場整備		調査中

#### 春日部遺跡

次数	調査区	調査期間	調査面積	調査機関	調査要因	主な成果	文献
第1次	-	平成23年2月	92㎡	亀岡市教育委員会	ほ場整備	範囲確認	亀岡市文化財報告書第82集
第2次	A・B・C	平成30年5月14日～平成30年9月18日	1,715㎡	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	ほ場整備	古墳時代の集落、中世の方形居館	本報告
第3次	小規模調査	平成30年11月12日～平成30年12月11日	276㎡		ほ場整備	顕著な遺構なし 遺物包含層	未報告
第4次	小規模調査	令和2年5月19日～令和2年8月31日	450㎡		ほ場整備	顕著な遺構なし	未報告
第5次	小規模・D	令和3年9月13日～令和4年2月25日	1,437㎡		ほ場整備	古墳時代・中世の集落	調査中

犬飼遺跡第11次調査、春日部遺跡第5次調査は令和4年2月10日現在の予定



第6図 調査地区割り図

B地区とアルファベットの地区名を、小規模調査地には1～9トレンチの数字の地区名を付した。以降、面的調査地には調査回数に関わらずアルファベットの通しのアルファベットの地区名を、小規模調査地には回数ごとに数字の地区名を付すこととした。

両遺跡とも、遺物の取り上げに対応するため、平面直角座標系を利用した5mのグリッドを設定した。X、Yの座標値のうち、整数値の下2桁が00となる線を基準に100m四方の中グリッドを設定し、これを東西と南北でそれぞれ20等分した。VI系平面直角座標系は北東角を起点としており、南と西へ向かってX、Yの絶対値が増加する。この点を考慮して、南北方向は北からa～t、東西方向は東から1～20として、各グリッドの名称はa1、a2などとする。

(2)遺構番号について

犬飼遺跡においては同時並行で複数の調査区で調査を行ったため、番号の混同を避けるためにB・C・D地区では1～、A地区では1000番台、E地区では2000番台の番号を付した。春日部遺跡では、地区に関わらず1～番号を付した。

また、それぞれの遺構番号の頭には遺構の性格を示す略号を付した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。本書で使用した略号は以下のとおりである。

SD：溝・堀、SK：土坑、SP：柱穴・ピット、SB：掘立柱建物、SH：縦穴建物、NR：開析谷・自然流路、SW：井堰・水制遺構、SX：その他の遺構

## (1) 犬飼遺跡第2・3次

### 1. はじめに

犬飼遺跡は、亀岡市曾我部町犬飼・法貴に所在する集落遺跡である。

平成23年度に亀岡市教育委員会による小規模調査が行われ、遺跡地内の広い範囲に遺構面の広がり<sup>(注19)</sup>が認められることが明らかとなった。本格的な発掘調査はこれまで行われてこなかったが、平成30年度以降、当センターが継続的に発掘調査を行っており、令和4年2月現在で11次の調査が行われている。各地区の概要は付表2のとおりである。本書では、平成30年に行った第2次調査、令和元年度に行った第3次調査の報告を行う。

**第2次調査** 当センターによる犬飼遺跡の初めての調査は平成30年度の第2次調査である。第1次調査の結果を受け、遺構が確認されたほ場では、全面が調査対象となった。小字馬ノ上に設定したのがA地区、小字畑ヶ久保に設定したのがB地区である。いずれの地区でも重機で表土掘削を行ったのち、人力で遺構面の精査を行い、A地区では古墳時代の遺構を、B地区では中世の方形居館関連の遺構の調査を行った。

また、亀岡市教育委員会の小規模調査の対象外となっていたが、ほ場整備による切土が及ぶほ場に関しては、遺構面の有無・深さを確認する目的で、表土掘削を行ったのち、小規模調査区を設定した。(1～9トレンチ)

調査期間は平成30年11月12日～平成31年3月14日で、調査面積は4,155㎡である。

**第3次調査** 平成31年(令和元)度には、第2次調査で中世の遺構を検出したB地区の調査を継続して行うとともに、第2次調査の小規模調査で遺構が検出された3～7トレンチを拡張して、面的に調査を行うこととなった(C～E地区)。令和元年6月16日には現地説明会を行い、200名を超える参加者を得た。

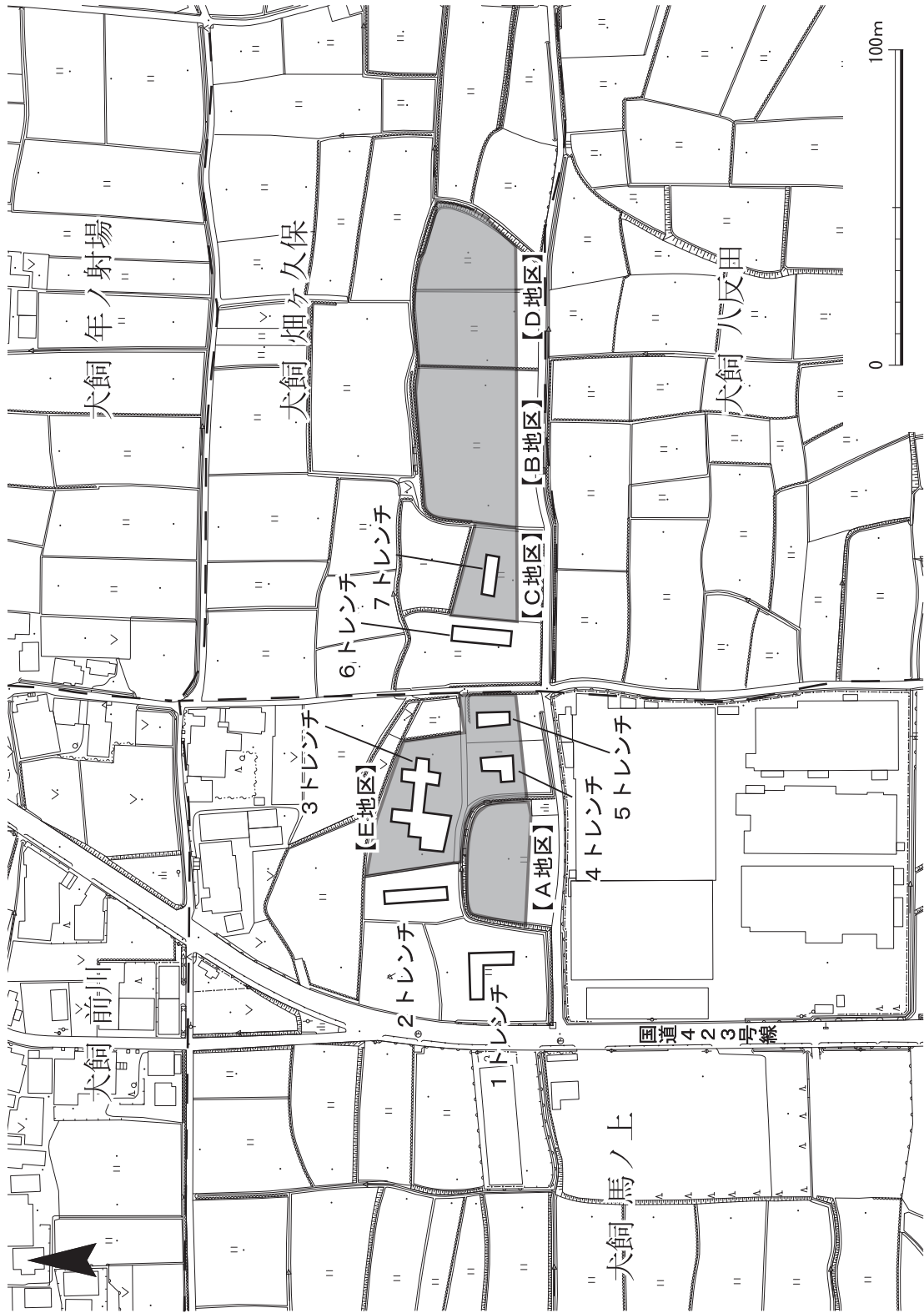
B地区では東側で、中世の遺構群の下層に古墳時代～古代の遺構面が存在したため、中世面の記録が終了したのち、人力で包含層を掘削し、下層遺構の調査を行った。

また、A～E地区の調査終了後、調査対象外となっていたB地区とC地区の間に位置する水路を除去し、補足の記録の作成を行った(B・C地区間拡張区)。

調査期間は令和元年5月2日～令和元年10月3日で、調査面積は5,569㎡である。

**整理報告作業** 調査終了後から令和3年度にかけて整理報告作業を行った。出土遺物については、台帳登録、洗浄作業を行い、その後注記・接合作業を行った。その作業と並行し、報告書に掲載する出土遺物の選別及び実測作業、写真撮影等を行った。木製品と陶磁器類については、図化を行うことができなかったものについても、すべての個体の集計を行なった。

本報告で使用した遺構図は、現地で作成したもののほか、空中写真撮影を基に作成した平面図を使用した。



第7図 調査地位置図

## 2. 小規模調査

調査区は、重機によっては場全面の耕作土を除去したのち設定した(第7図)。

当初、小規模調査は1～9トレンチの9か所で調査を行う予定であったが、8・9トレンチの予定地では耕作土を除去した段階で、すでに遺構が露出している状態であった。そのため、令和3年度にD地区として面的な調査を実施した。また、7トレンチでは小規模調査の結果、B地区で検出した堀の延長部分を検出したため、その範囲を確定するために拡張し、C地区として面的な調査を実施した。

したがって、小規模調査のトレンチを設定したのは、1～6トレンチの6か所である。以下では各調査区の概要について報告する。

1トレンチ(第8図) 幅4mの「L」字状の調査区である。表土下0.4mで砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、下層遺構の有無を確認するために断ち割りによる調査を行なったが、締まりのない砂層の堆積を確認したのみである。

2トレンチ(第8図) 幅4m、長さ20mの長方形の調査区である。表土下0.6mで砂質土からなる安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行なったが、締まりのない砂層の堆積を確認したのみである。

3トレンチ(第9図) 当初は幅4mの「キ」字状の調査区を設定した。東半では、表土下0.3mで安定地盤を検出し、円形の柱掘形などの遺構を確認した。安定地盤は西側に向かって高くなっており、西半では耕作土直下で遺構面に達する。西半では幅1.5mの平行する2条の溝を検出した。調査区の拡張により、2条の溝はさらに南側へ延長することが明らかとなった。

4トレンチ(第9図) 幅4.5mの「L」字状の調査区である。耕作土下0.2mで砂質土からなる安定地盤を検出し、この面で円形の柱穴を検出した。

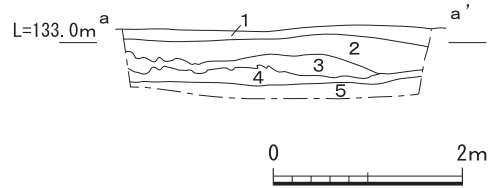
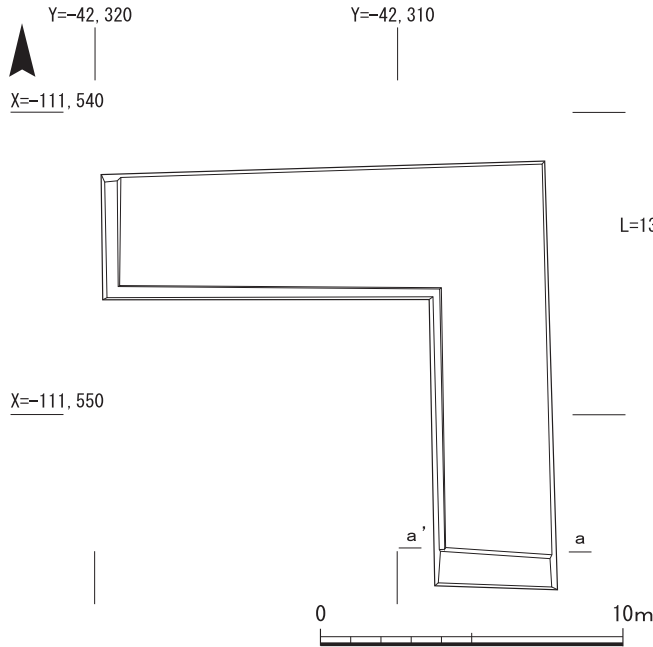
5トレンチ(第9図) 幅4m、長さ10.5mの長方形の調査区である。表土下0.5mで砂質土からなる安定地盤を検出し、この面で円形の柱穴を検出した。

6トレンチ(第9図) 幅4mの「ト」字状の調査区である。耕作土下0.5mで砂質土からなる地盤を検出したが、遺構・遺物を確認することはできなかった。さらに、断ち割りにより下層の確認を行ったが、締まりのない砂層の堆積のみであり、安定地盤は存在しないと考えられる。

以上の結果を受け、遺構を確認することができた3～5トレンチについて、E地区として面的な調査を行うこととなった。

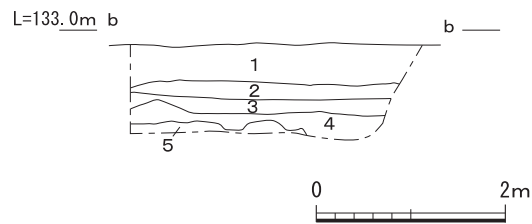
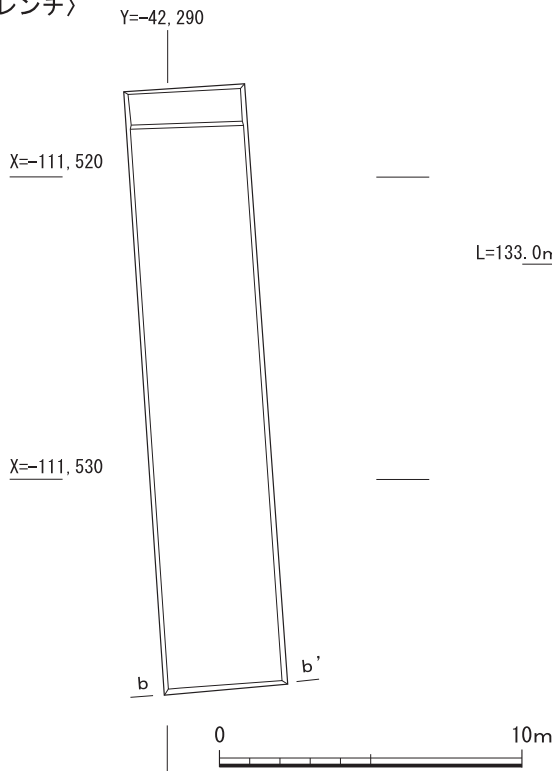


〈1 トレンチ〉



1. 黄褐色 (10YR 5/6) 粗粒砂
2. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 中粒砂  
〈径 5.0cm 大の砂粒を少量含む〉
3. 暗褐色 (10YR 3/4) 中粒砂  
〈径 2.0 ~ 3.0cm 大の砂粒を少量含む〉
4. 褐色 (10YR 4/6) 細粒砂
5. 黄褐色 (10YR 5/6) 細粒砂粘砂質土

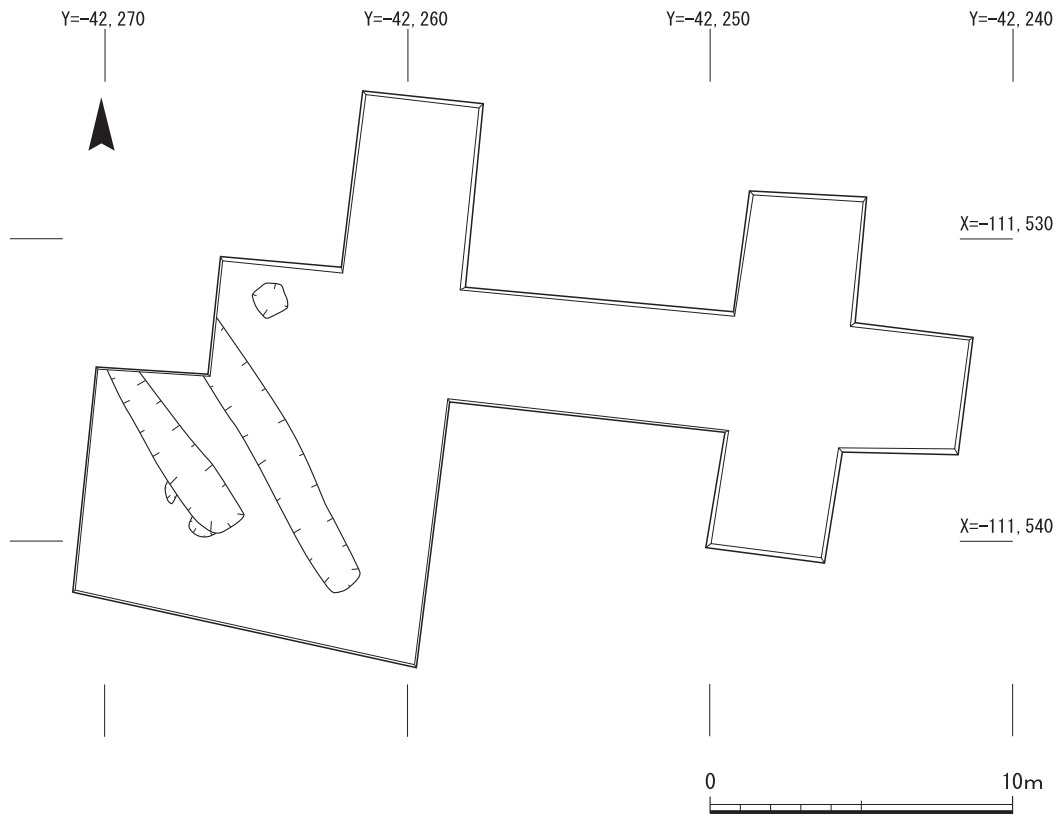
〈2 トレンチ〉



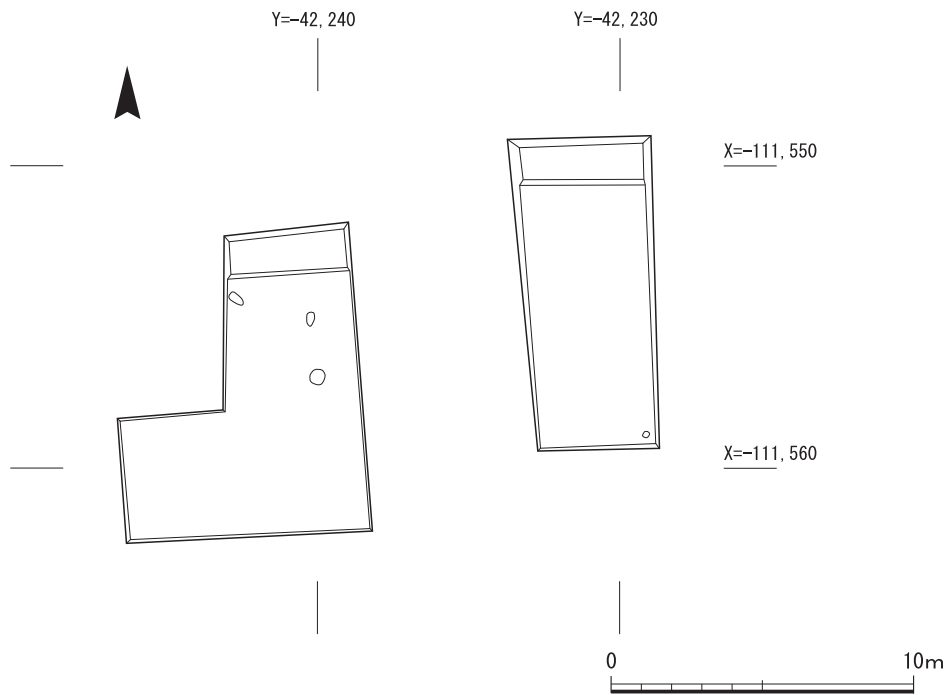
1. 黄褐色 (10YR 5/3) 細粒砂  
〈径 0.5 ~ 2.0cm 大の砂粒を少量含む〉
2. 明黄褐色 (10YR 2/3) 細粒砂  
〈径 0.5 ~ 2.0cm 大の砂粒を少量含む〉
3. 褐色 (10YR 4/6) 細粒砂  
〈径 1.0 ~ 3.0cm 大の砂粒を少量含む〉
4. 黒褐色 (10YR 2/2) 極細粒砂
5. 褐色 (10YR 4/6) 極細粒砂

第8図 1・2トレンチ実測図 (1/250・1/80)

〈3トレンチ〉



〈4・5トレンチ〉



第9図 3～5トレンチ実測図 (1/250)

### 3. B・C・D地区（第1面）の調査

#### 1) 調査の概要

B地区を中心に、中世の方形居館に伴う遺構群を検出した(第11図)。居館はC地区の堀SD02、B地区の堀SD01、B地区とD地区にまたがる堀SD03に囲まれた空間で、北側は自然地形の侵食崖を利用して敷地の境界とする。全体の広さは、東西半町、南北1/4町の規模で、東端と南端は坪境に当たる。

堀により区画された空間のうち、西側の空間を「区画①」、東側の空間を「区画②」とする。それぞれ区画①が約500㎡、区画②が約350㎡の広さを測る。双方の区画とも、主屋とみられる建物と、それに付属する小形の建物を1棟検出した。

#### 2) 基本層序(第12・13図)

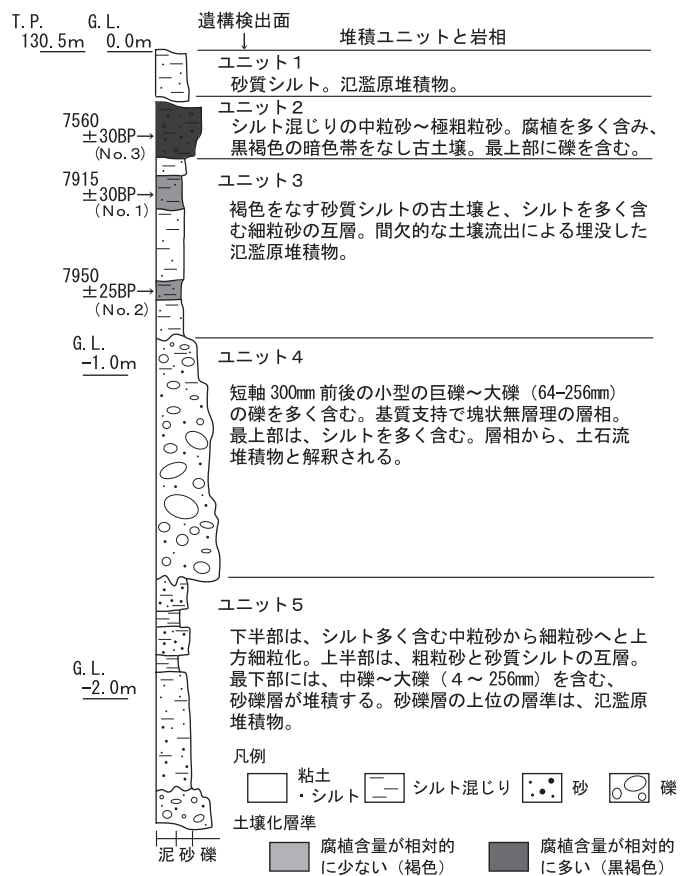
B地区の現地表面は、標高131.6mであり、東・西・南側には現在の水路がある。西側がC地区、東側がD地区であり、地表面のレベルはそれぞれ131.3m、130.8～131mである。

B地区は、表土及び床土を除去した段階で、すでに基盤層が検出され、この面で中世の遺構が検出された。地理的環境の項で述べたとおり、基盤層では、礫層上部に層厚1.0m程度の砂質泥～泥質砂を主体とする細粒の氾濫原堆積物が被覆する。この氾濫原堆積物中には、細粒の中礫を最大礫径とする砂礫層が部分的に認められる。

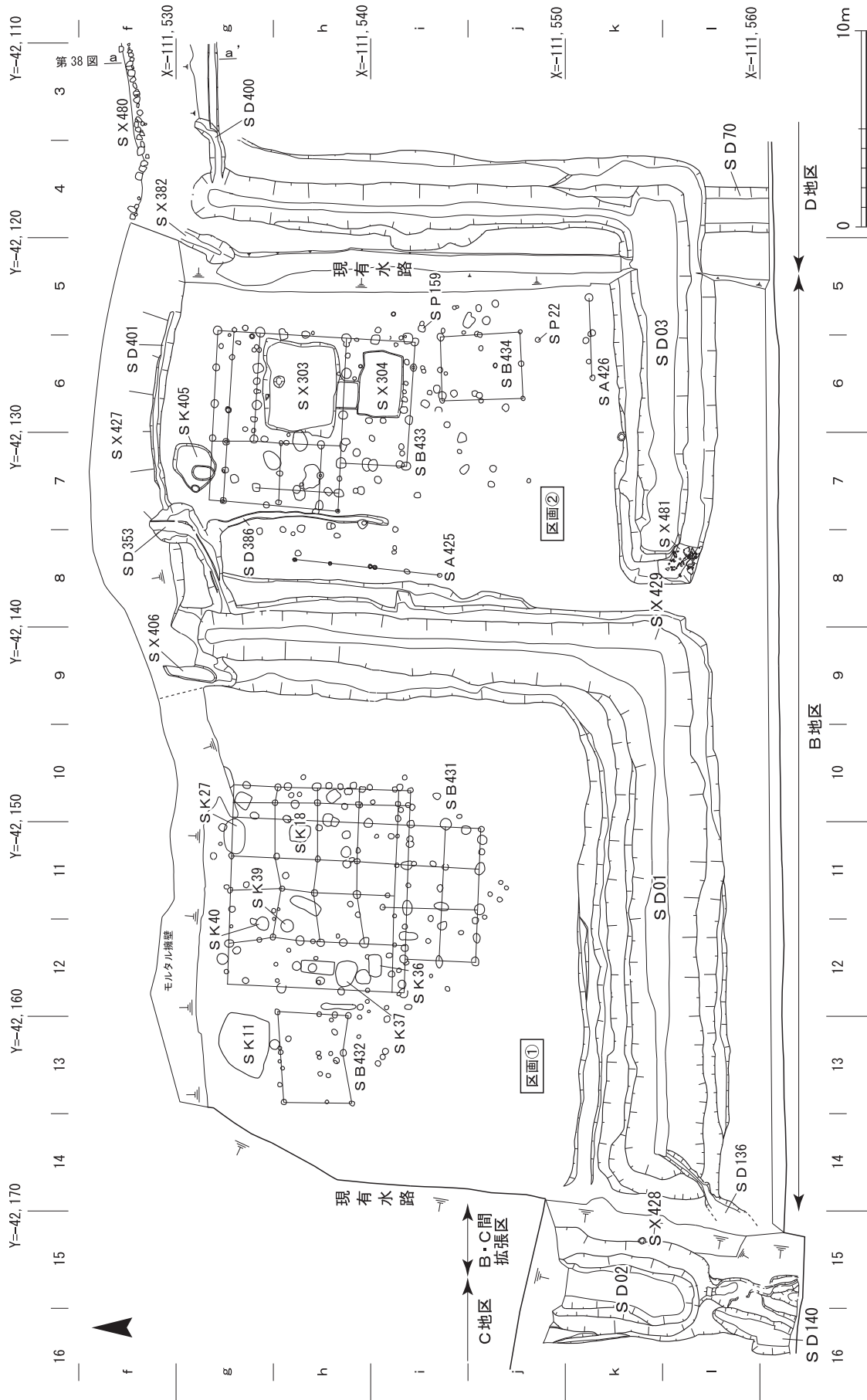
#### 3) 検出遺構

##### (1) 堀SD01と付属施設

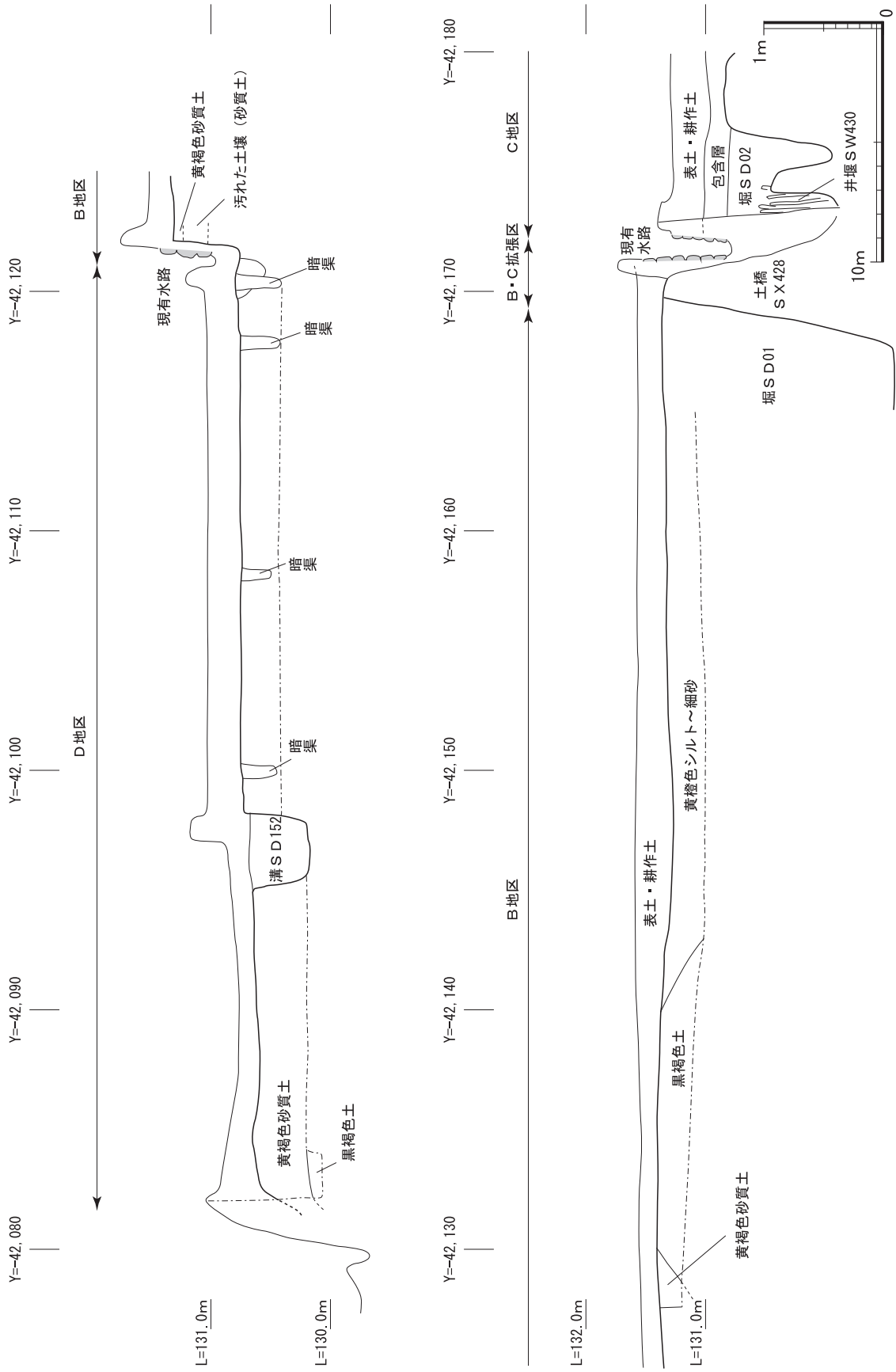
堀SD01(第14・15図) 3本の堀のうち、唯一攪乱を免れ、ほぼ完全な形状がわかる。B地区の南西から東西方向に掘削され、中央部でほぼ直角に曲がり南北方向に掘削される堀である。東西方向は約30m、南北方向は約27mを測り、最大幅約7.5m、最大深度約1.8mである。東西方向は断面形状が「V」字状で、いわゆる薬研堀となっている。それに対し、南北方向の部分は西の区画①側にテラス面を持つ。底面のレベルは南から北にわずかに傾いており、水は北向きに流れる構造となっている。北端は、高さ0.6mの立ち上がりをもたせていることから、出口付近では最大0.6mの滞水があったとみられる。



第10図 B地区の基盤層の模式柱状図

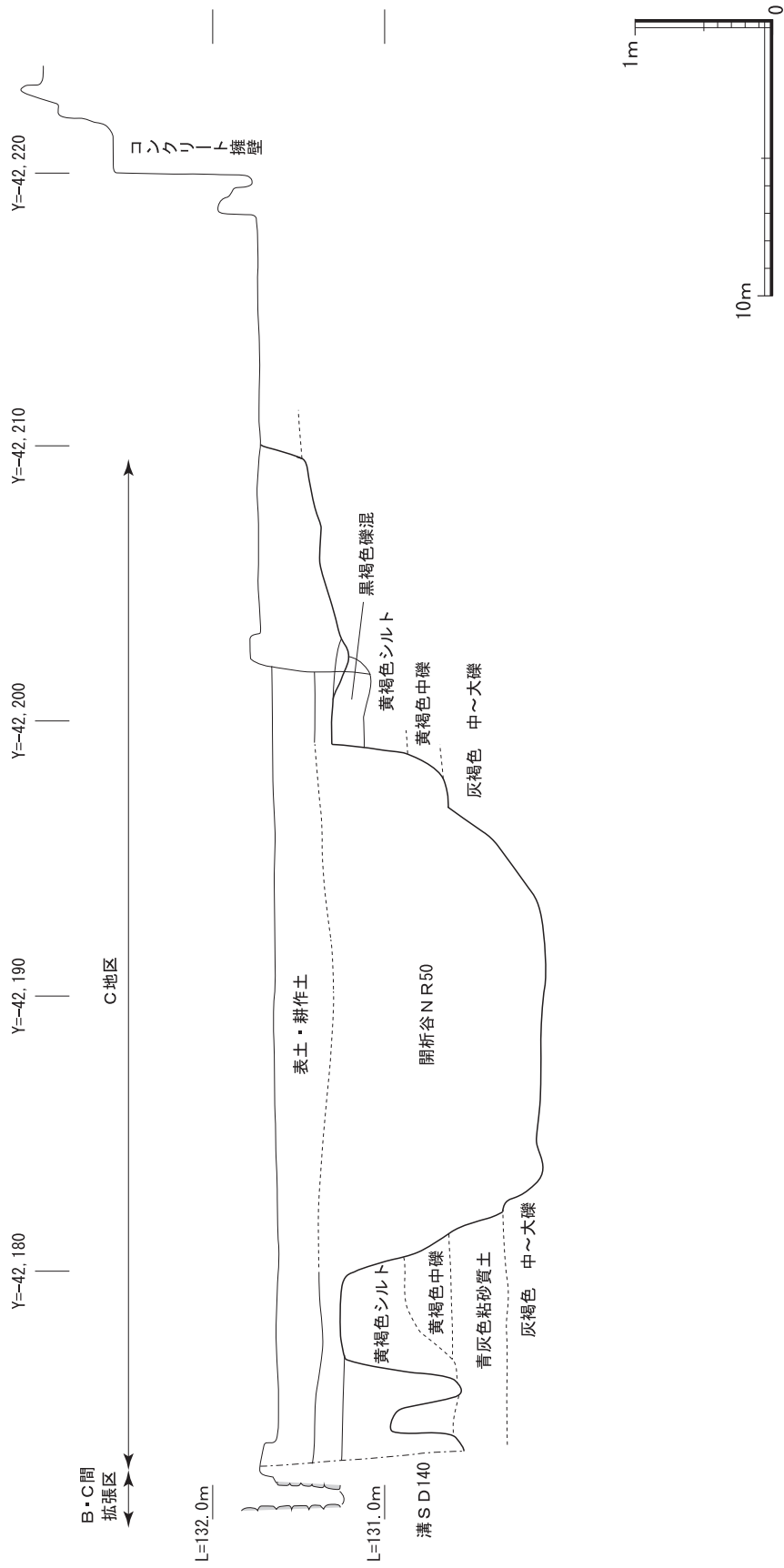


第11図 B・D地区(第1面)遺構配置図(1/300)



第12図 B～D地区土層図(1) (1/250・1/50)

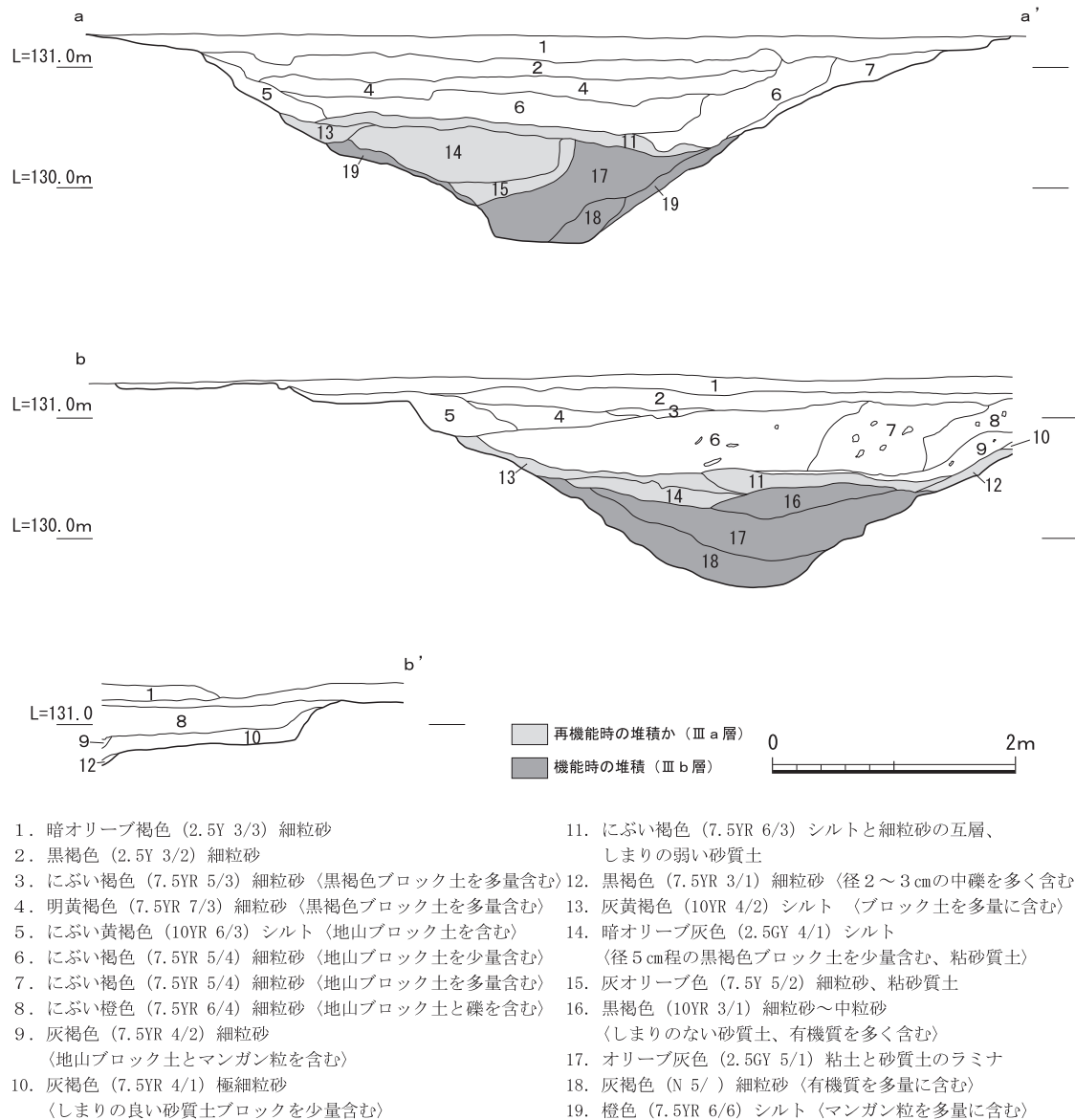




第13図 B～D地区土層図(2)(1/250・1/50)

堆積は、大きく4層に区分される。最下層のⅢ b層は、堀の機能時の層である。最下層にはわずかにブロック土を含む19層、弱いラミナ状堆積の18層が認められるが、これは溝掘削のごく初期の堆積と考えられる。その上位には粘質が強い砂質土である17層が堆積するが、この中には弱いラミナ状の堆積が認められる一方、地山が崩れたようなブロック土はほとんど認められず、維持管理のために定期的な堀浚えが行われていたと考えられる。17層からは草履等の有機質遺物が極めて良好な状態で出土した。なお、17層は南西側がより厚く、出口付近では薄い堆積となっていることから、周辺の地山由来の流入土層ではなく、取水溝 S D136が上流から供給する粘土が堆積したものであり、少量ながらも水流があったとみてよいだろう。この所見は後述の珪藻化石分析からも裏付けられる。

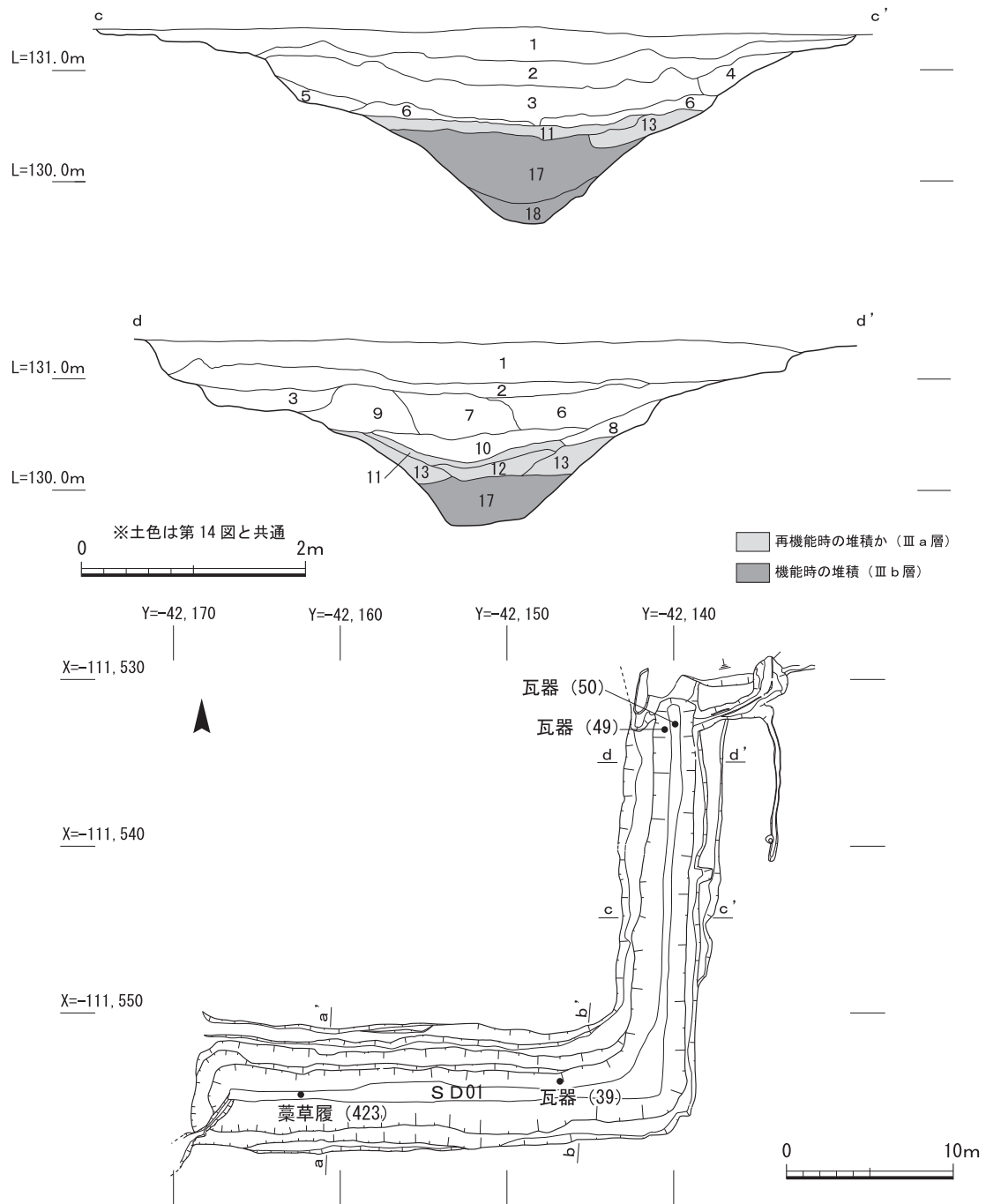
Ⅲ b層の直上には薄い15層が堆積し、その上層にⅢ a層が堆積する。Ⅲ a層もⅢ b層と同じように機能時の堆積土であるが、一部Ⅲ b層を掘り込んで掘削されている。したがって、Ⅲ b層と



第14図 堀 S D01断面図(1) (1/60)

は若干の時間差を経て再掘削された溝である可能性が高い。12～14層は、やや汚れた土層であり、ブロック土や礫を多く含む。11層は砂質シルトの堆積であり、堀（あるいは再掘削された溝）の廃絶直前期の土層である。

なお、Ⅲ a層とⅢ b層は、場所によって厚さが異なっており、底面は著しく凹凸状を呈していた。そのため、遺物の取り上げに関しては必ずしも分別することができていない。しかしながら、Ⅲ層として取り上げた遺物の中には明らかに時期を異にする2群があるため、再掘削が行われたことは確実である。



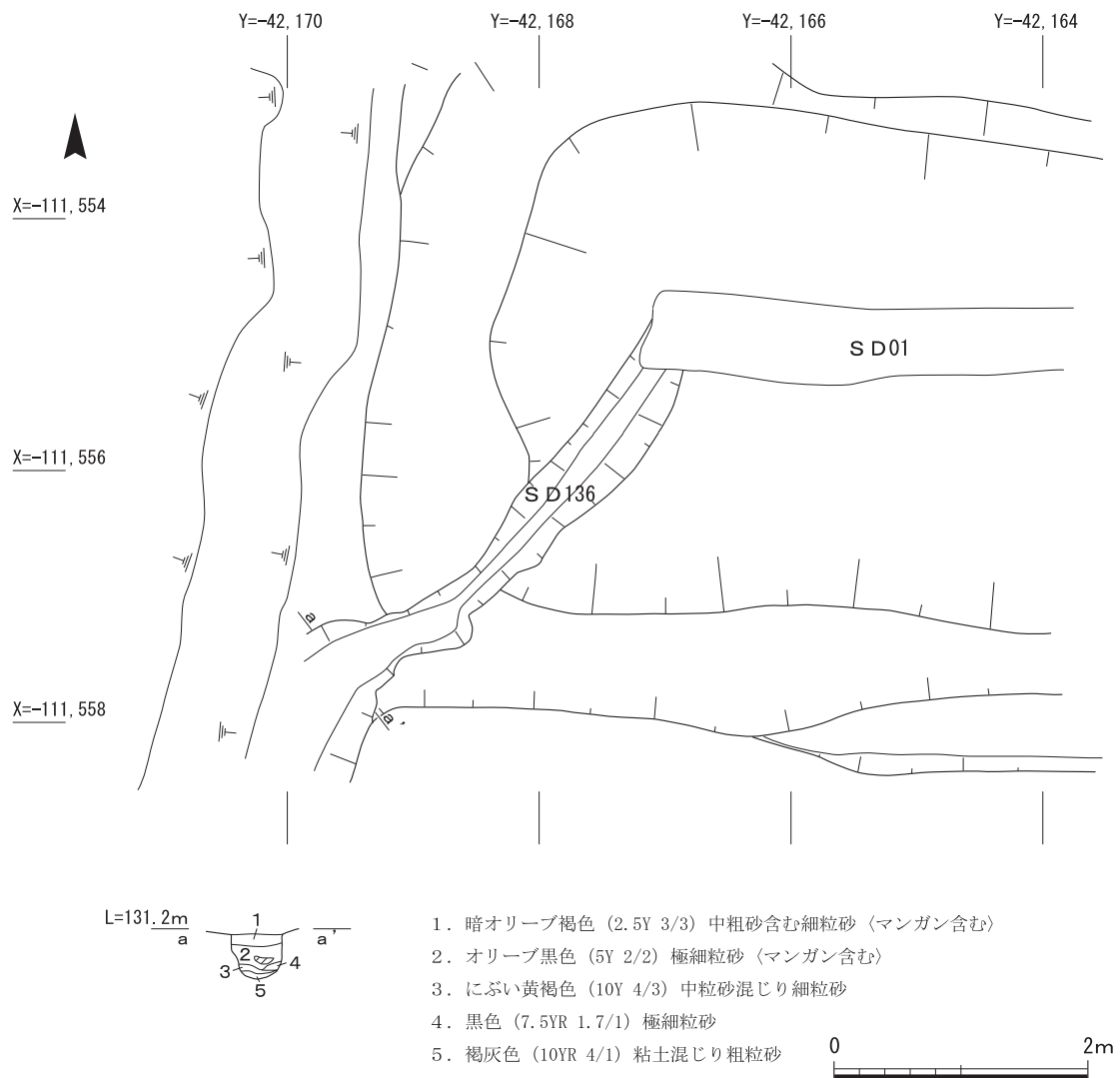
第15図 堀 S D01断面図(2) (1/60・1/400)

II層はブロック土や有機質を多く含む土で、3～10層が相当する。堀が機能を停止し、人為的に埋め戻された土層である。土層の観察から、南側に関しては、堀の内側から埋め立てられたと考えられる。掘削中には瓦器碗や国産陶器等が出土しているが、破片が多く、本来的にこの層に伴っていたかは不明である。なお、土塁の痕跡は全く残されておらず、当初から土塁は存在しなかった可能性が高いと考える。

I層は最上層の砂層である。この堆積中では石組みS X38を検出した。S X38は堀S D01と同じ幅を持つが、中世の堀に関連する遺構ではなく、堀を埋め戻した後の窪地に構築された何らかの構築物であると考えられる。遺物は出土しなかった。

取水溝S D136(第16図) 堀S D01の南西端には、土橋S X428を掘り込むように、幅約0.3mの溝S D136が掘削されている。南西部は攪乱により検出することができていないが、南側の水路から取水する機能を持っていたと考えられる。

排水溝S D353(第17図) S D353は、堀S D01の出口から南に1.5mの地点、堀S D01の西側に取り付くように掘削されている。検出面では、最大幅1.9m、最大深0.9mである。断面形状は「V」

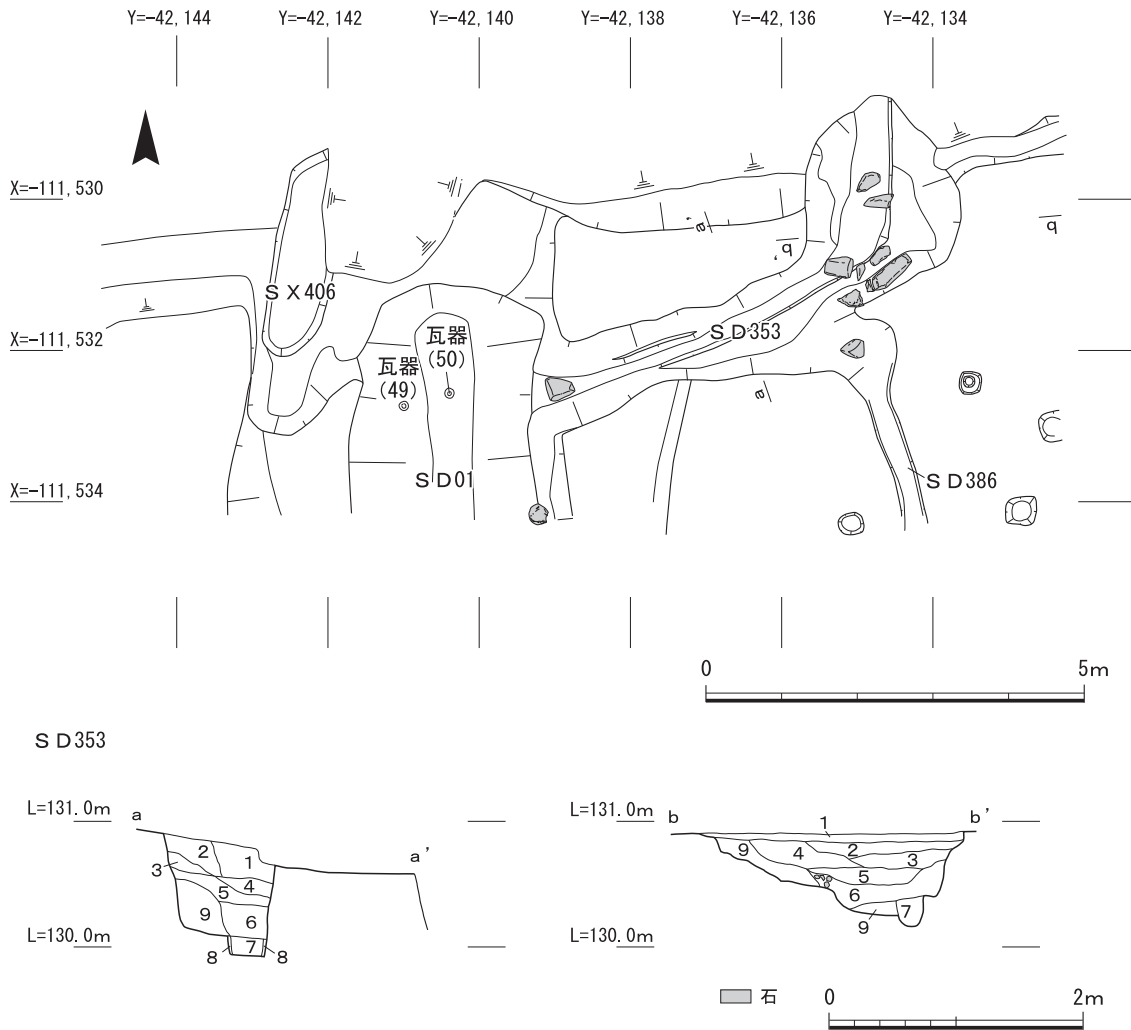


第16図 取水溝S D136平・断面図(1/60)



字状で、底から0.2mの間は断面形状が長方形となる。平面的な検出はできていないが、土層観察より8層は木樋痕跡の可能性がある。上層はブロックを多量に含む汚れた土であり、非常に締まりのよい土層である。これは、人為的な埋め戻し土と考えられる。土層の堆積状況から、本来は暗渠であった可能性も指摘しうるが明らかではない。

排水溝 S D 353の北端はそのまま侵食崖に接続しており、堀 S D 01の水量が一定以上になると排水するような機能を持っていたものと考えられる。後述するように、掘立柱建物 S B 433に伴



1. にぶい黄褐色 (10YR 6/3) よごれた極細粒砂 (地山由来の粗砂を多く含む・S D 01 の I 層に似る)
2. にぶい黄褐色 (10YR 7/3) よごれた極細粒砂 (地山由来の粗砂を多量に含む・S D 01 の I 層に似る)
3. 暗灰黄色 (2.5YR 5/2)、極細粒砂 (地山由来・中～粗粒砂含む・埋め戻し土・S D 01 II 層に似る)
4. にぶい黄褐色 (10YR 7/2) シルト～極細粒砂、ブロック土を少量含む (埋め戻し土・S D 01 の II 層に似る)
5. 明黄褐色 (10YR 7/6) シルト～極細粒砂、粘質土 (埋め戻し土・S D 01 の II 層に似る)
6. 褐灰色 (10YR 5/1) シルト～極細粒砂、粘質土 (地山ブロック・粘質土ブロックを多量に含む)
7. 褐灰色 (7.5YR 4/1) 粘土、粘質土 (ブロックをほとんど含まない・機能時の堆積か)
8. 橙色 (7.5YR 6/6) 極細粒砂 (本来の木質の反映か・木樋部分)
9. 灰色 (5YR 5/1) 粘土 (地山ブロックを含む・裏込め土、テラス部のみにあり)

第17図 排水溝 S D 353・通路状遺構 S X 406平・断面図(1/100・1/60)

う雨落ち溝もS D353に接続しており、区画②の排水溝の機能も果たしている。

通路状遺構S X406(第17図) 堀S D01の出口付近、東側では、溝状に掘り窪められた遺構を検出した。当初、堀S D01のⅡ層と同一のものとして掘削したが、掘削を進めた結果、幅1.2m、深さ0.6mの溝状であることが明らかとなった。

埋土の上半は攪乱により、堆積状況は不明である。掘削中には、直径0.5m以上の角礫が出土しているが、居館に伴うものではなく、後世の攪乱と考えている。また、下層の堆積には水流の痕跡等は認められない。

したがって、段丘下部へと続く通路状遺構と考えておきたい。(桐井理揮)

## (2)堀S D01の堆積物の理化学分析

堀S D01の堆積環境や古水文環境について検討するため、堆積物中の珪藻化石群集分析及び、花粉分析、プラントオパール分析を行った。ここでは所見のみを記すこととし、詳細な分析結果については第6章を参照いただきたい。

**堀S D01の古水分環境** 溝底部に薄く堆積した泥層(19層)のNo.5では、珪藻化石の保存状態が極めて不良であった。この直上には、居館側の斜面から流れ込んだ、シルトの葉理を挟在する葉理の発達した礫混じり砂層(18層)が乗る。この層相から、溝埋土の19層に相当する泥層とその上部の礫質砂層(18層)には、居館造成時の地表攪乱の影響が残るとともに、溝周辺での植皮がまだ進んでおらず裸地が多く広がるような溝掘削後の早い段階に、降雨などによって地表付近の堆積物が侵食され、流入した層準と解釈される。したがって、19層は堆積速度が速く、堆積環境も不安定で、珪藻化石が堆積物中にほとんど取り込まれなかったと考えられる。

この上位の17層では、粘土質シルトなどの非常に泥質な堆積物が連続的に積層する。層位によっては、相対的に砂を多く含む層準が挟在する。この17層に含まれる珪藻化石は、基本的に淡水種からなり、広布種を随伴して、淡水不定・不明種が優占する珪藻化石群集が豊富に産出する。このうち、優占種である*Epithemia*属は、基本的には付着性だが、湖のプランクトンとしても出現する種群である。さらに17層では、わずかながら湖沼沼沢湿地指標種群(N)と沼沢湿地付着生指標種群(O)が層位的に連続して産出する。層相及び珪藻化石群集から、17層の堆積段階にはS D01内で滞水する時期が続いていたとみられる。また、好流水性種を含む中～下流性河川指標種群(K)も伴っており、溝内では、少し水の流れがあった可能性がある。なお、泥炭が存在しないのは、水位が高かったためか、溝内に湿性の植物が繁茂していなかったためと推測される。17層の泥層中には、砂などの周囲からの地表堆積物の流入が非常に少なく、さらに植物遺体の挟在が認められない。以上の状況から、S D01の肩部やその周辺は、居館側とその反対側を含め、雨食などを防ぐ植皮が密度の高い状態で存在するとともに、崩壊や侵食が発生しないような管理が行われていた状況が推測される。

以上から、屋敷地の堀として掘削された段階の層準のうち、その下半部から上部までを埋積する泥質の17層の堆積時期には、堀内において滞水状態が継続するような堆積環境下にあったと考えられる。したがって、この時期に堀は閉塞状態が強く、排水不良であったとみられる。居館の

堀は、B区北縁の侵食崖部分まで掘削されており、ここが堀の排水口となっていた可能性が高い。このような状況から、S D01の15層の堆積段階には、堀の排水口付近に堀内の水位を維持させるような、遮蔽物のような何かが存在したと推定される。

この17層は、水路の可能性のある掘り込みによって再掘削されている。この掘り込みは、客土によって埋め立てられている。掘り込みが水路として利用されていた場合、掘り込みが機能していた時期には滞水しておらず、通水していたとみられる。17層の堆積時期と掘り込み部分の堆積時期では、堀部分での古水文環境が大きく異なっていた可能性がある。

**堀S D01の花粉分析** 堀S D01ではスギ属やコナラ属アカガシ亜属の産出が目立ち、この時期においても遺跡周辺の山地斜面や台地などにはスギ林や照葉樹林が分布していたと考えられる。さらに、堀S D01における花粉化石群集の組成には層位的変化が少ないため、試料の堆積期間中は同一の植生が広がっていたと思われる。

古墳～奈良時代の開析谷NR50と異なっているのは、マツ属複維管束亜属とコナラ属コナラ亜属が多く産出している点である。堀S D01の時期には遺跡周辺で人間活動が活発化したと考えられるため、開けた明るい場所が多く、そこにニヨウマツ類やコナラなどからなる二次林が発達していたと考えられる。このような二次林化は、耕作地の拡大や村落人口の増大などによって、耕作地への緑肥や家畜の飼料採集を目的とした採草、日常及び商品としての薪や、炭焼きのための樹木の採取や伐採といった森林バイオマス資源が収奪傾向にあった状況を示していると考えられる。ニヨウマツ類やコナラなどの林分は、居館周辺に農用林として分布していたとみられる。

さらに、堀S D01ではハンノキ属が多産し、エノキ属－ムクノキ属を伴っている。13世紀後半～14世紀には、居館周辺の谷筋などにハンノキ属からなる湿地林が分布しており、その周辺の水分条件の良好な場所にはエノキ属－ムクノキ属などが生育していた可能性がある。

また、古墳～奈良時代の開析谷NR50では産出が稀であったが堀S D01では産出が目立つ分類群として、ジャケツイバラ属やセンダン属が挙げられる。これらの植物は、居館に植栽されていた可能性があるが、中でも茎に棘があるジャケツイバラ属に注目したい。例えば、同じマメ科植物で棘を持つサイカチは、日本史料において戦国期の屋敷地の周辺に垣根として植林されている事例が何例も確認されている。<sup>(注20)</sup> また、花粉分析の事例としては、城跡においてサイカチ属が特異的に確認されており、防護林として利用されていた可能性が指摘されている。<sup>(注21)</sup> 堀S D01は屋敷地を囲う居館の堀である点を考慮し、盛本の研究及び先行分析事例を参照すると、茎に棘を持つジャケツイバラ属は居館の垣根に植栽されていた可能性がある。

次に、堀S D01の草本花粉を見ると、いずれの試料もイネ科の産出率が高い。イネに由来する花粉かどうかは不明であるが、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やキカシグサ属を伴う層準もある点を考慮すると、堀S D01の集水域で水田稲作が行われていた可能性を示唆する。また、堀S D01ではソバ属や、メロン仲間やキュウリなどが含まれるキュウリ属が産出する層準も確認でき、集水域においてソバやメロン仲間、キュウリなどが栽培されていた可能性もある。

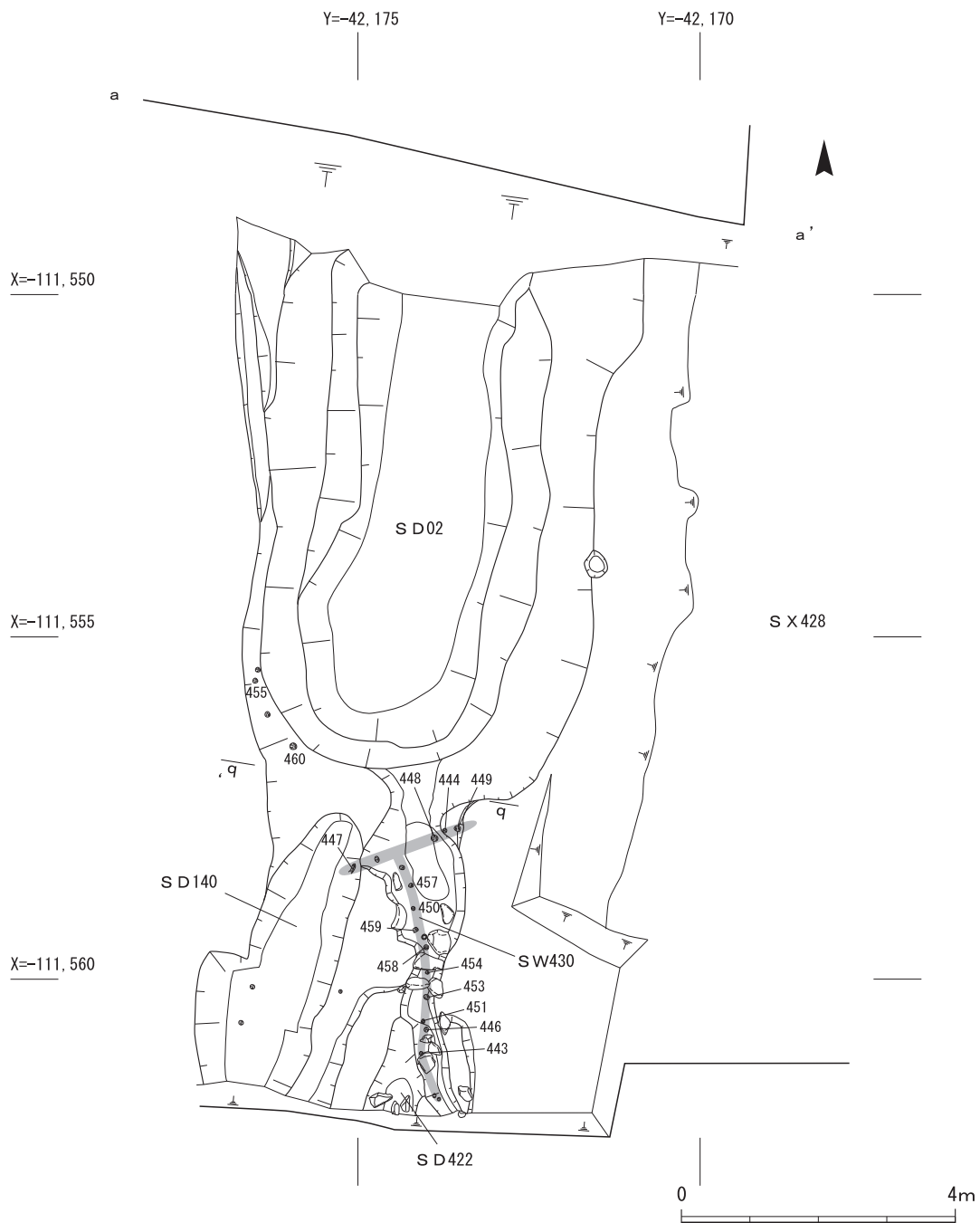
(森 将志・野口真利江・辻 康男＝パレオ・ラボ)

(3) 堀 S D02 と付属施設

堀 S D02 (第18・19図) 堀 S D02は、区画①の西端を区切る直線の堀である。北半は調査対象地外であり、南側しか調査を行っていない。また、調査を行った南側も現在の水路がほぼ同じ位置を踏襲しているため、上部は攪乱を被っており、残存状況には恵まれない。

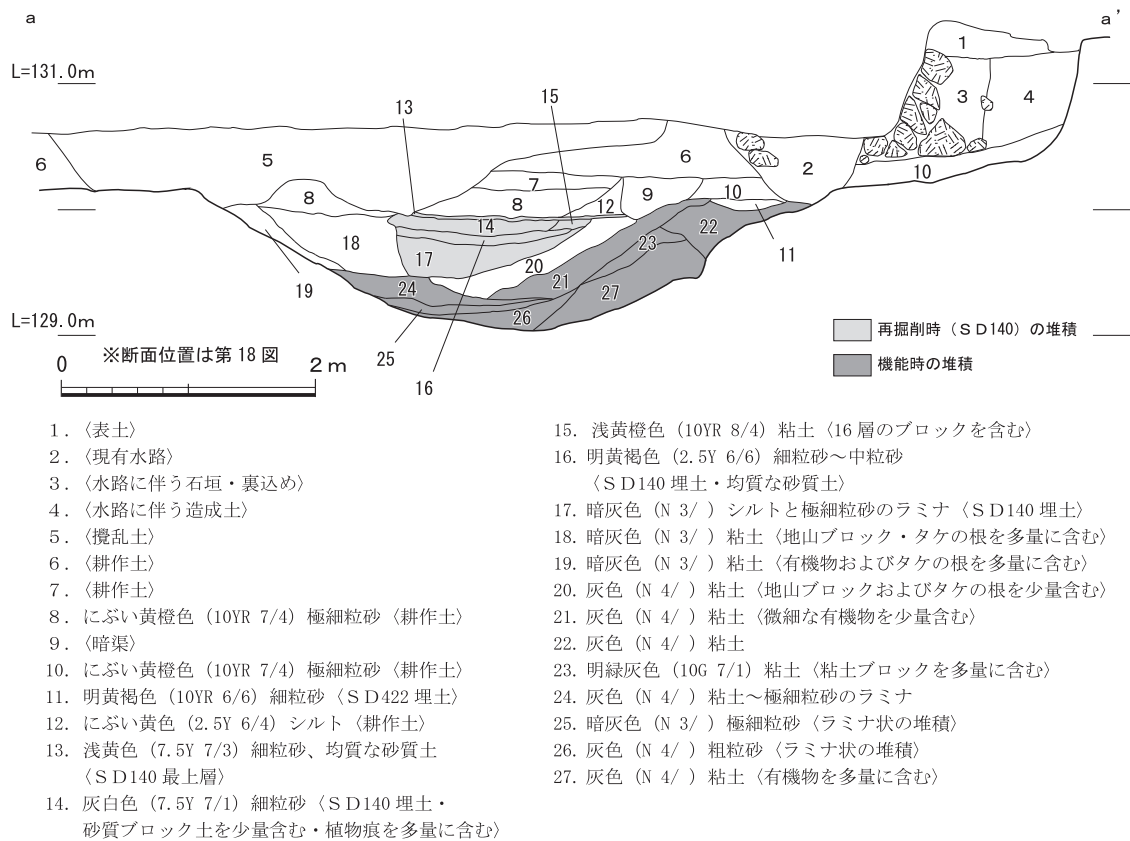
土橋 S X428の上部からの計測で、最大幅は約8m、深さは2.4mを測る。西側は自然地形の谷部にあたっており、西側からの深さの計測値は、約1.8mである。

第19図の21～27層は、下層埋土で、堀の機能時堆積と考えられる。堀 S D01のⅢ b層に対応する。灰～暗灰色の粘砂質土のラミナ状の堆積であり、一定の水流の存在がうかがわれる。出土遺



第18図 堀 S D02平面図(1/100)





第19図 堀 S D02断面図(1/60)

物は少なく、瓦器碗の破片や漆器碗などが少量出土したのみである。S D02の南側に水路や井堰が構築されていることから、堀 S D02は水路としての機能も有していたと考えられる。

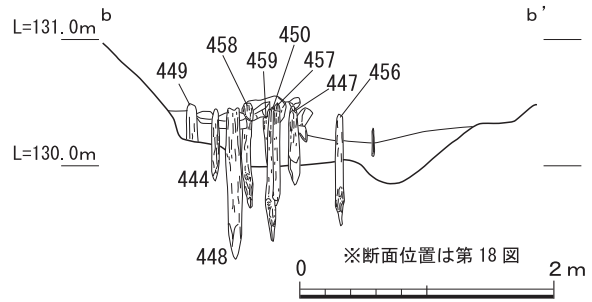
18～20層は灰～暗灰色の粘土であり、地山由来のブロック土を多量に含む、埋め戻し土と考える。掘削中にヤダケ属、あるいはマダケ属とみられるタケの地下茎が検出されている<sup>(注22)</sup>。タケの地下茎はブロック土や粘土に混在した状況で検出していることから、近隣に植栽されていたものが、一括して埋め戻されたものと判断している。

13～17層は、再掘削に伴う溝 S D140の埋土である。堀 S D01のⅢ a層に対応すると考える。この上面では、第60図461の青銅製の筭が出土している。

6～12層は、近世以降の耕作に伴う埋土である。その耕作土を掘り込むように、現在の水路(2層)が掘り込まれている。2層は石組を伴う現代の基幹水路である。堀 S D02の上層には、堀の廃絶後も S D140と2層の水路が機能したと考えられ、現代まで水路が位置をほぼ踏襲して構築されていたことが明らかとなった。

溝 S D422(第18図) 溝 S D422は、堀 S D02の南側に接続する溝である。幅1.2m、深さ0.15mを測る。埋土は大礫を含む砂質シルトで、堀 S D02下層の堆積と共通する。堀 S D02との接続部には杭で構築された井堰 S W430と土手状の掘り残しがあり、堀に水を引き込む水路と考えられる。出土遺物はない。

**井堰 S W430 (第18・20図)** 井堰 S W430 は、堀 S D02と、溝 S D422の接続部で検出された、平面形状が「T」字状を呈する杭列である。杭は直径15～20cm程度の太さがあるしっかりとしたもので、深いものでは S D422の底面から 1 m 程度打ち込まれている。西側の構造は、現在の水路による攪乱のため不明であるが、本来は平面形状が方



第20図 井堰 S W430立面図(1/60)

形を呈する、より堅牢な構造の遺構であった可能性もあろう。堀 S D02に流れ込む水量を調整する遺構と考えられる。

**溝 S D140 (第18図)** 溝 S D140は、西側の堀 S D02の南側で検出した、幅1.3m、深さ0.6mの溝である。一部を検出したのみで、さらに南側へ続く。堀 S D02の断面観察で、堀 S D02が埋没したのちに再掘削された水路であることが明らかとなった。ヘソ皿や瓦器碗の破片がわずかに出土している。

#### (4)堀 S D03と付属施設

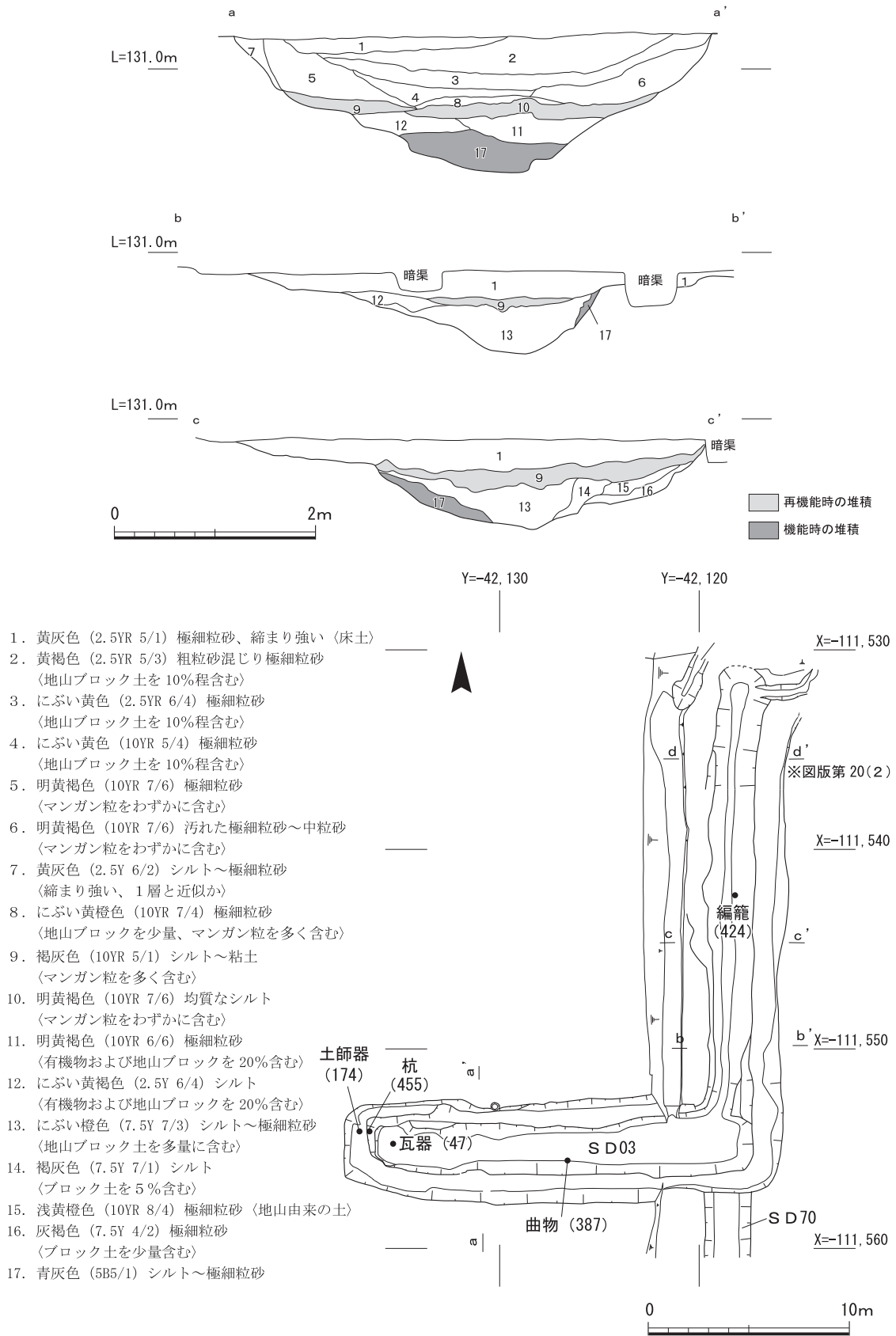
**堀 S D03 (第21図)** 堀 S D03は、区画②の南端及び東端を区切る「L」字状の堀である。S D01の屈曲部とは、土橋 S X429を挟んで東西方向直線的に掘削されており、現在の田境ではほぼ直角に曲がり、南北方向に掘削される。東西方向は約22.5m、南北方向は約27mを測り、最大幅5.4m、最大深度1.4mである。東西方向の部分は、断面形状が緩い逆台形状を呈しているが、南北方向は石組みを伴う水路がほぼ同じ位置で踏襲されており、上半部を攪乱されているため明らかではない。堀の外側には緩いテラス面を有する。

最も残りの良かった東西部分で堆積状況を確認しておこう。最下層の17層はシルト～極細粒砂が堆積するが、堀 S D01と違い、ラミナ状の堆積構造を示さない。S D01のように水を引き入れる導水溝は南東角で認められたため、東西部分は雨水等による滞水はあったものの、水流はほとんどなかったと推測する。17層からは土器類のほか、有機質遺物が残りの良い状態で出土した。11～16層は有機質や地山ブロックを多く含む周囲から流入した汚れた堆積土である。8～10層はシルト～粘土の水性堆積と考えるが、マンガング粒が多く沈着する。1～7層は地山ブロックを多量に含んでおり、人為的な埋め戻し土と考える。

以上のような状況から、堀 S D03の堆積は、掘削直後からの機能時の堆積(17層)、途中まで埋め戻した堆積土(11～16層)、再機能時(9・10層)、最終埋没土(1～7層)というように整理できる。

なお、後述するように、溝底直上から出土した動物骨(ウシ右中手骨)をAMS法による年代測定を行ったところ、 $2\sigma$  歴年代範囲(95.4%)で1213～1265年という結果を得ている。したがって、堀 S D03の掘削時期も13世紀後半を大きくさかのぼることはない。

**導水溝 S D70 (第11図)** 後世の掘削のため、残存状態が悪く、深さわずか0.05mほどの土色変化を確認したのみであるが、堀 S D03の南東隅に接続するような南北方向の溝である。現在の水

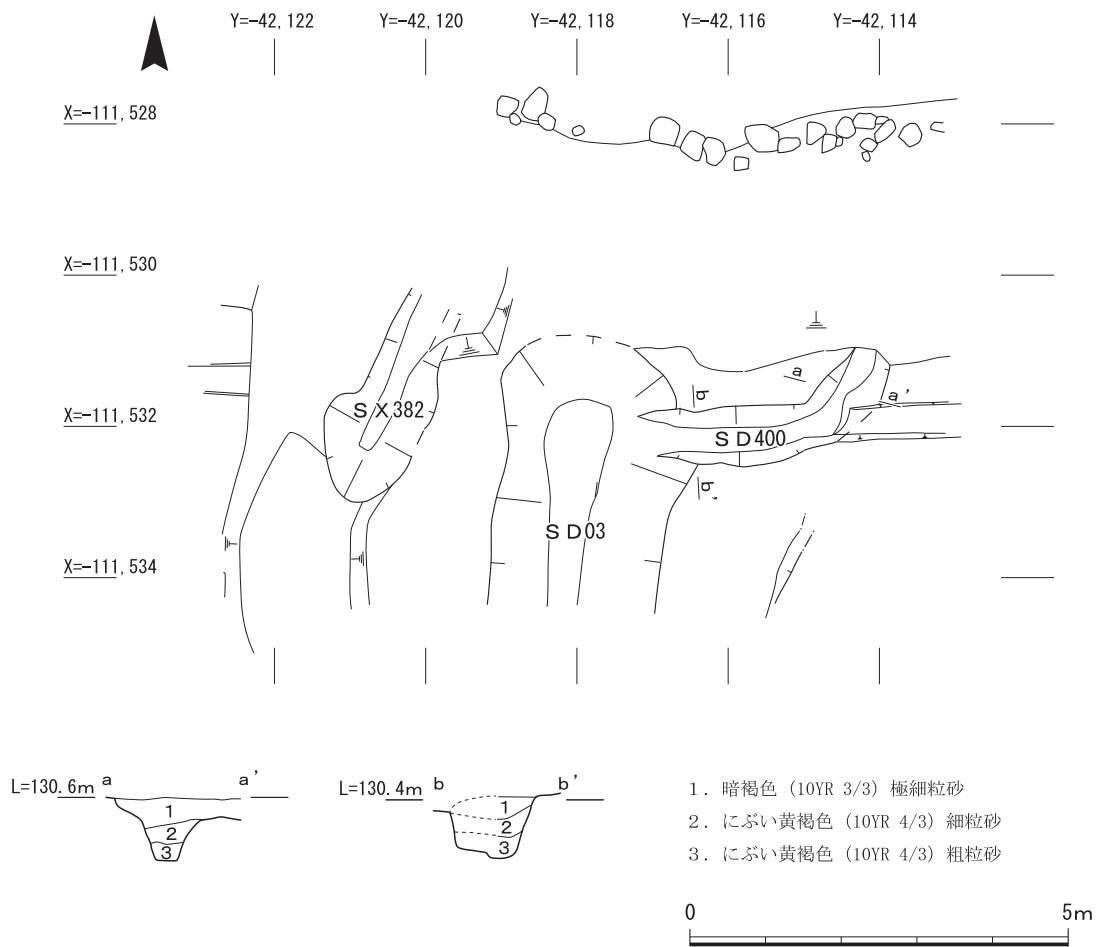


第21図 堀 S D03 平・断面図(1/60・1/300)

路が位置を踏襲している。

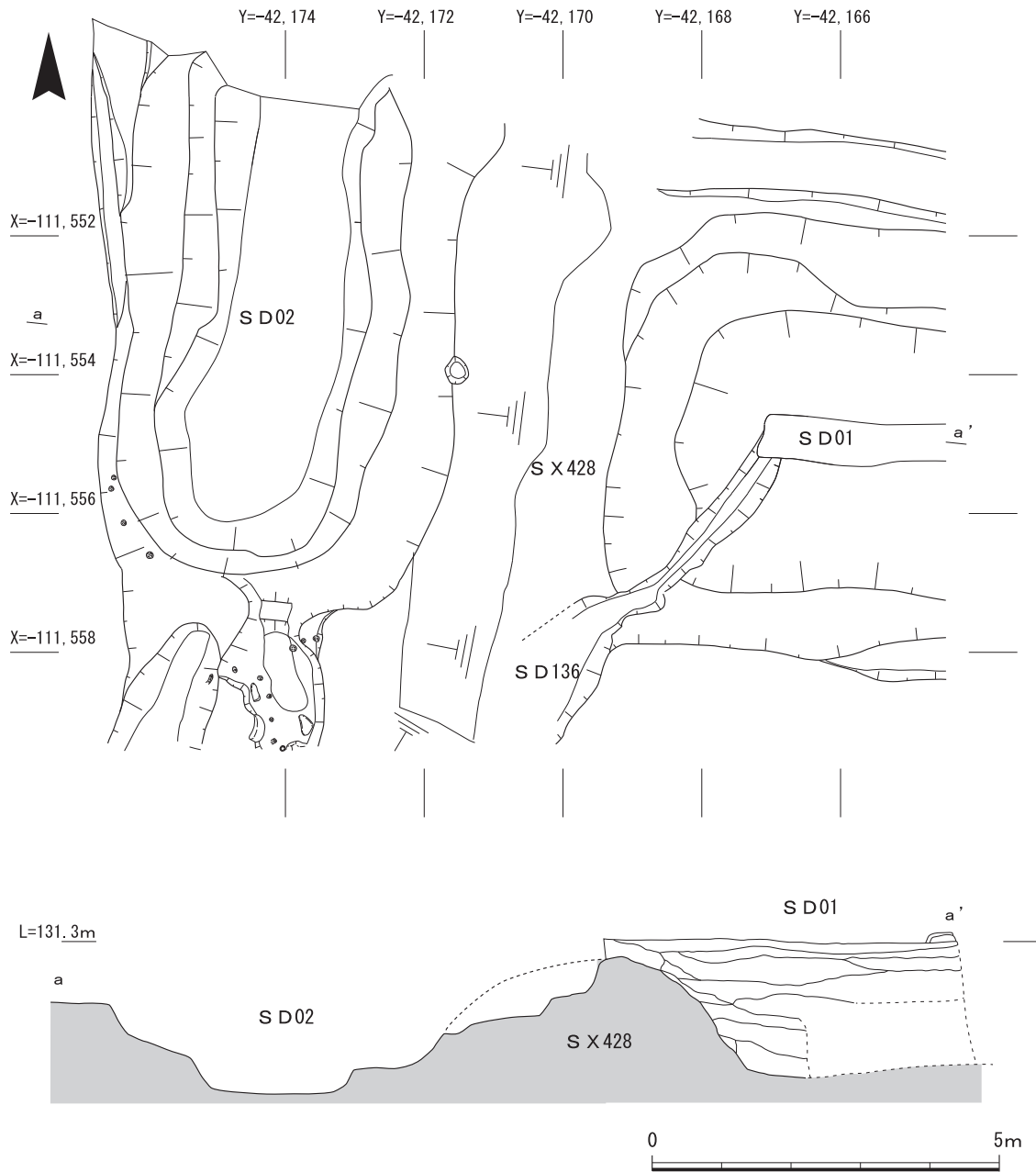
**排水溝 S D 400 (第22図)** 出口付近では先述の堀 S D 01と同様、排水溝 S D 400が検出された。堀 S D 03の北端は侵食崖につながっているが、そのまま排水させるのではなく、高さ0.5mの立ち上がりをもたせていることから、出口付近では最大0.5mの滞水があったとみられる。また、北端から手前に1mの部分には斜め方向の排水溝 S D 400が取り付いている。排水溝 S D 400は、幅0.7mで検出深0.8~0.9mを測り、断面は緩い「U」字状である。堀 S D 01で認められたような礫による蓋は認められない。堀 S D 01の排水溝 S D 353と違い、木樋の痕跡や人為的に埋め戻した堆積は認められず、開放状態であったと考えられる。

**通路状遺構 S X 382 (第22図)** 堀 S D 03の出口付近、東側では、溝状に掘り窪められた遺構を検出した。当初、堀 S D 03と同一のものとして掘削したが、掘削を進めた結果、幅1.2m、深さ0.6mの溝状遺構であることが明らかとなった。南側と西側は攪乱により失われているが、堀 S D 01でも同様の構造、通路状遺構 S X 406が確認できたことから、同様に段丘下部へと続く通路状遺構と考えておきたい。



第22図 通路状遺構 S X 382・排水溝 S D 400平・断面図(1/100)



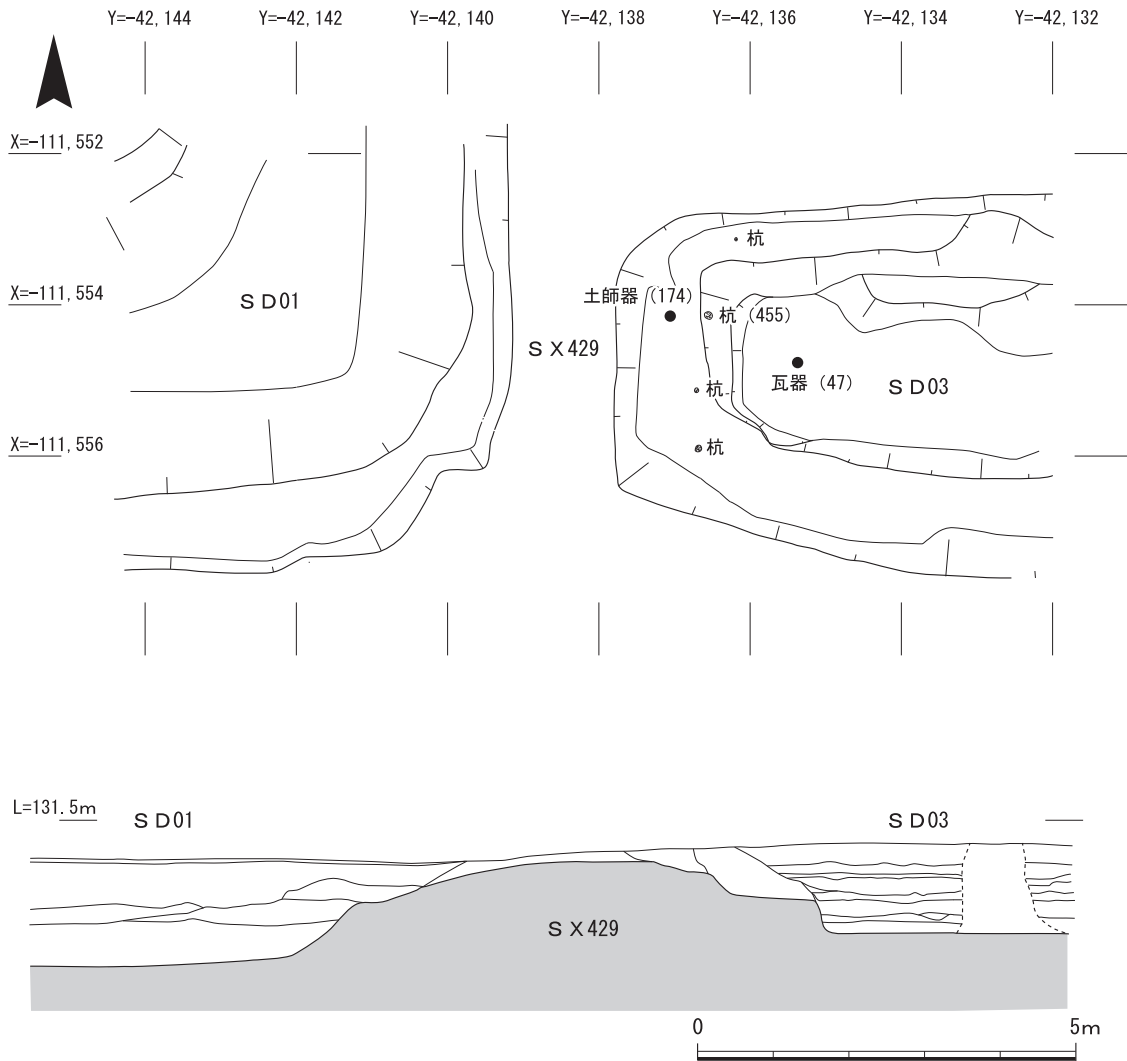


第23図 土橋 S X 428平・断面図(1/100)

(5)橋

橋はそれぞれの区画の南東端で検出した。いずれも地山を削り残して作り出された土橋であり、木橋の存在は確認できなかった。

土橋 S X 428 (第23図) 堀 S D 01の南西隅で検出した土橋である。地山を削り出すことによって作り出している。底面の幅は約4.8m、底面から検出面までの高さは西側は2m、東側は1.8mを測り、断面は台形状を呈する。西半分は現在の水路により上部が削平されている。土橋の下層に暗渠等の構造は認められない。



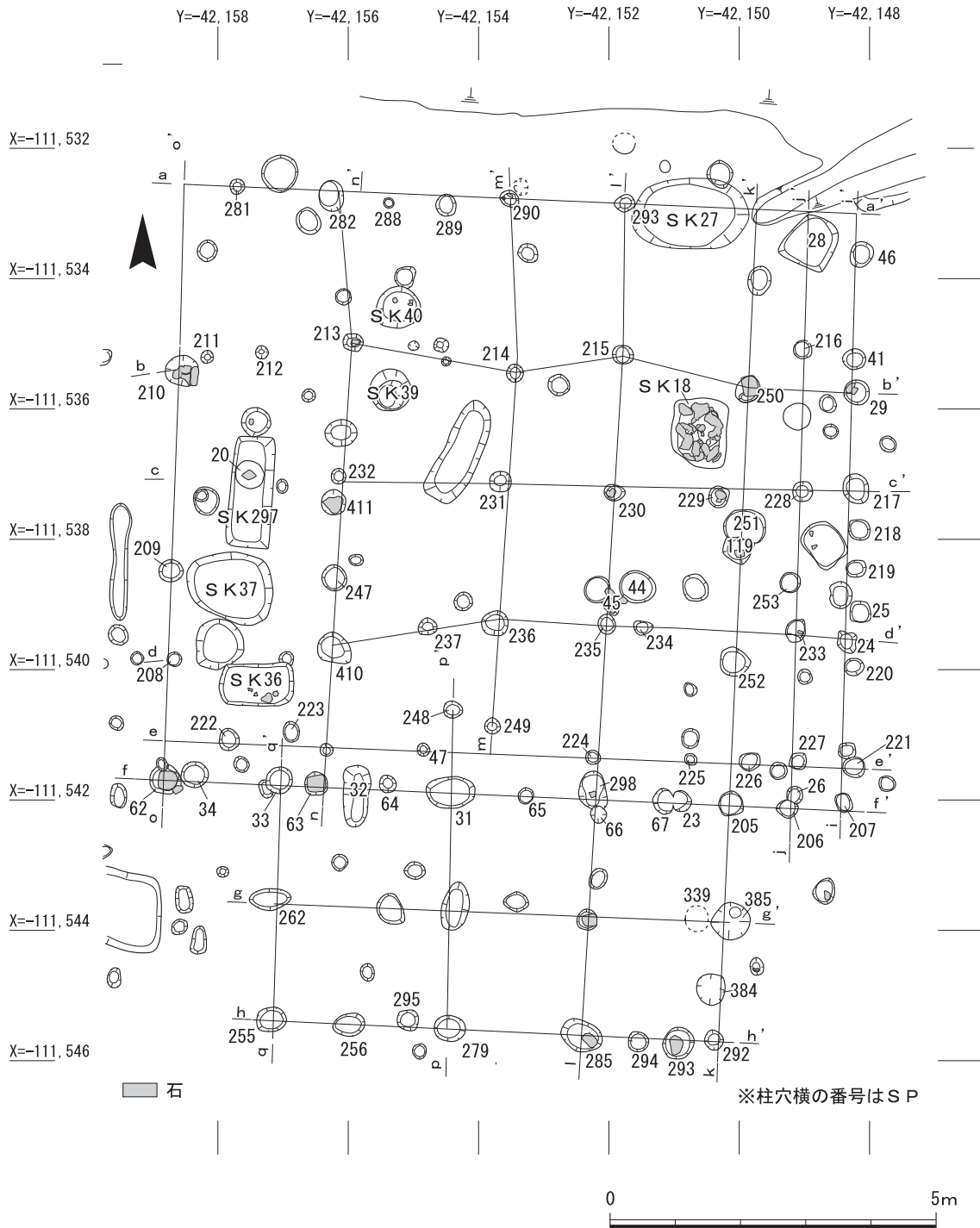
第24図 土橋 S X 429平・断面図(1/100)

土橋 S X 429 (第24図) 堀 S D 03の南西隅で検出した土橋である。地山を削り出すことによって作り出している。底面の幅は7 m、上面の幅は約1.8mである。底面から検出面までの高さは西側は1.4m、東側は1.1mを測り、断面は緩い台形状を呈する。東側は居館廃絶後の廃棄土坑 S X 481により上部が削平されている。また、土橋の両側には地山由来と考えられるブロック土を多く含む土層が堆積しており、居館廃絶後には土橋頂部など崩れやすい部分から堀の中に崩落したと考えられる。

#### (6)建物及び関連遺構

中世の建物は区画①と区画②でそれぞれ大小の建物を2棟ずつ復元した。調査区内での柱穴の重複は少なく、柱の据替や小規模な増・改築などはあったと考えられるが、何度も建物が建て替えられたような状況は想定しがたい。

掘立柱建物 S B 431 (第25～27図) 区画①の主屋になるとみられる掘立柱建物 S B 431は、梁間4間・桁行4間を測る総柱建物で、東側に1間分の軒、あるいは縁側と考えられる構造を持つ。



第25図 掘立柱建物 S B 431平面図(1/100)

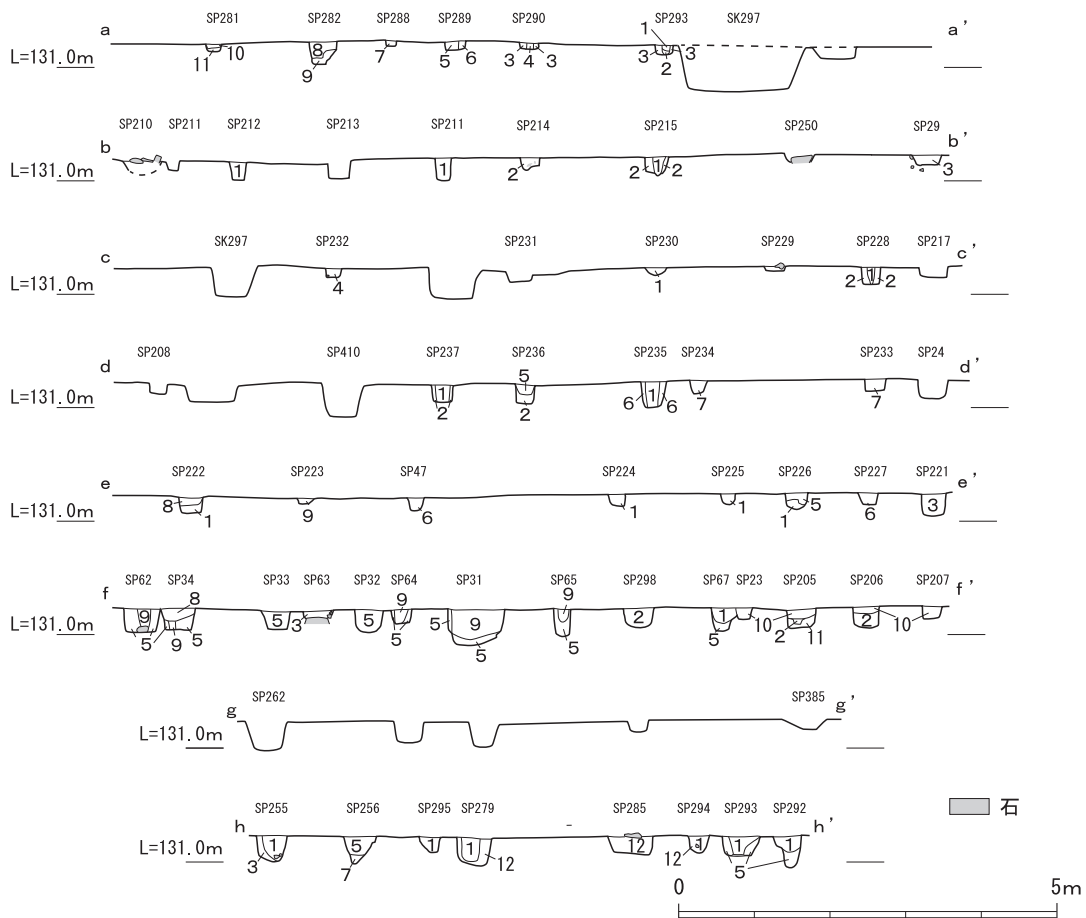
北東隅は攪乱のため検出できていない。南側には東西3間・南北2間の張り出し部をもつ。当初この張り出し部は別の建物の可能性も考えたが、北の主屋部と張り出し部が柱穴をほぼ共有しており、それぞれが独立の建物と考えるよりも1棟の同じ建物と考える。したがって、張り出し部は入口部の底のような当初から設置されていた施設、あるいは増築部などの可能性が考えうる。

西側1間分は柱筋の乱れや省略があり、土坑状の掘り込みも多く認められたため、土間の可能性もある。平面規模は約120㎡である。

**掘立柱建物 S B 432 (第28図)** 掘立柱建物 S B 432は、区画①の北西隅で検出した梁間1間・桁行2間の小形の建物で、平面規模は17㎡である。

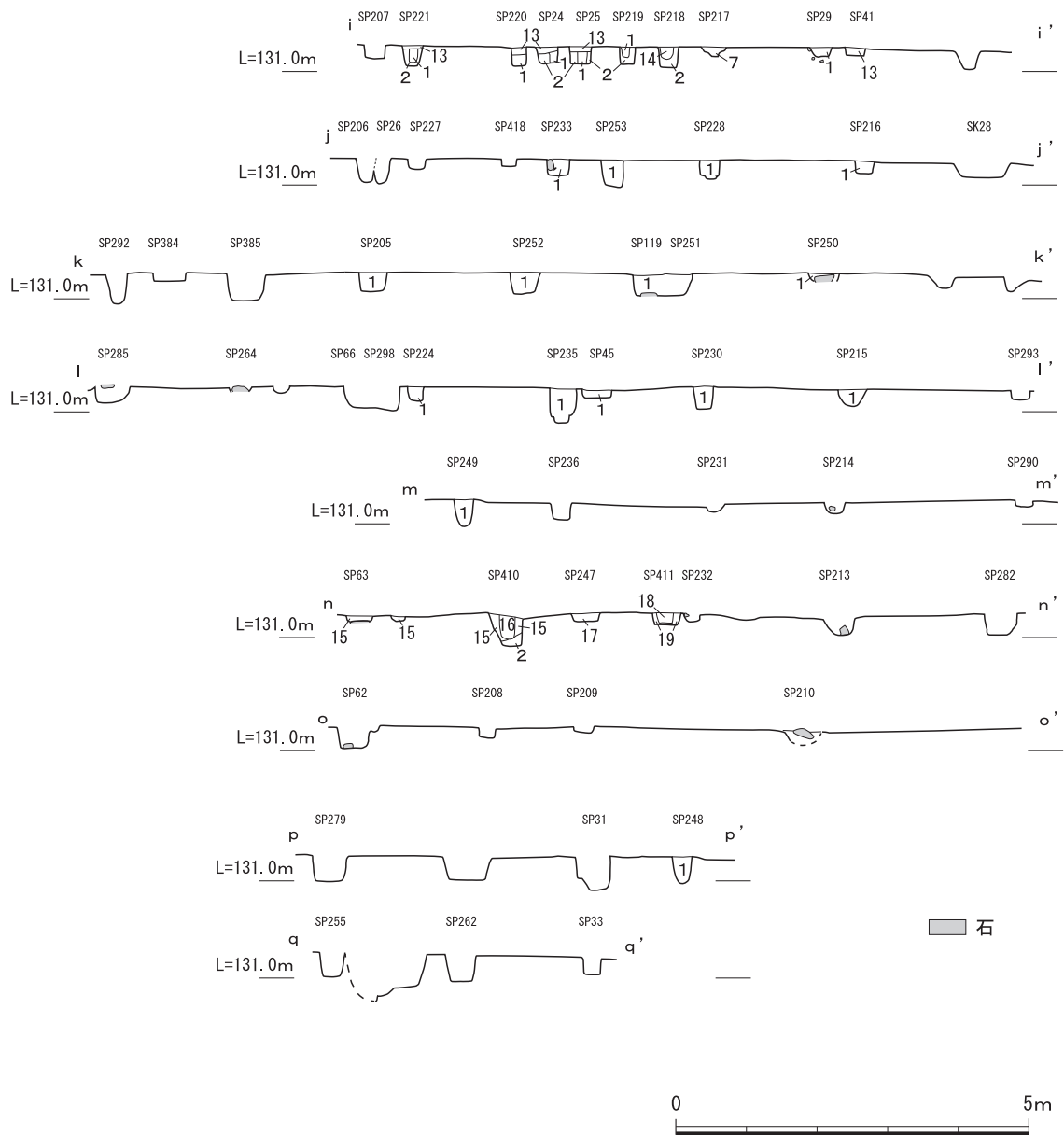
**掘立柱建物 S B 433 (第29・30図)** 掘立柱建物 S B 433は、梁間5間・桁行4間で、北側には1間分、軒あるいは縁側と考えられる構造を持つ。南側には東西3間・南北2間の張り出し部をもつ。平面規模は約85㎡である。建物中央部では竪穴状遺構 S X 303を、張り出し部では竪穴状遺構 S X 304を検出した。これらの竪穴建物は周囲の柱跡と切りあい関係が認められないことから、竪穴状遺構 S X 303と竪穴状遺構 S X 304を取り囲むように上屋構造が存在したと考えられる。

なお、掘立柱建物 S B 433の柱痕は根石・栗石を持つものが多く、柱掘形自体も掘立柱建物 S



第26図 掘立柱建物 S B 431断面図(1) (1/100)





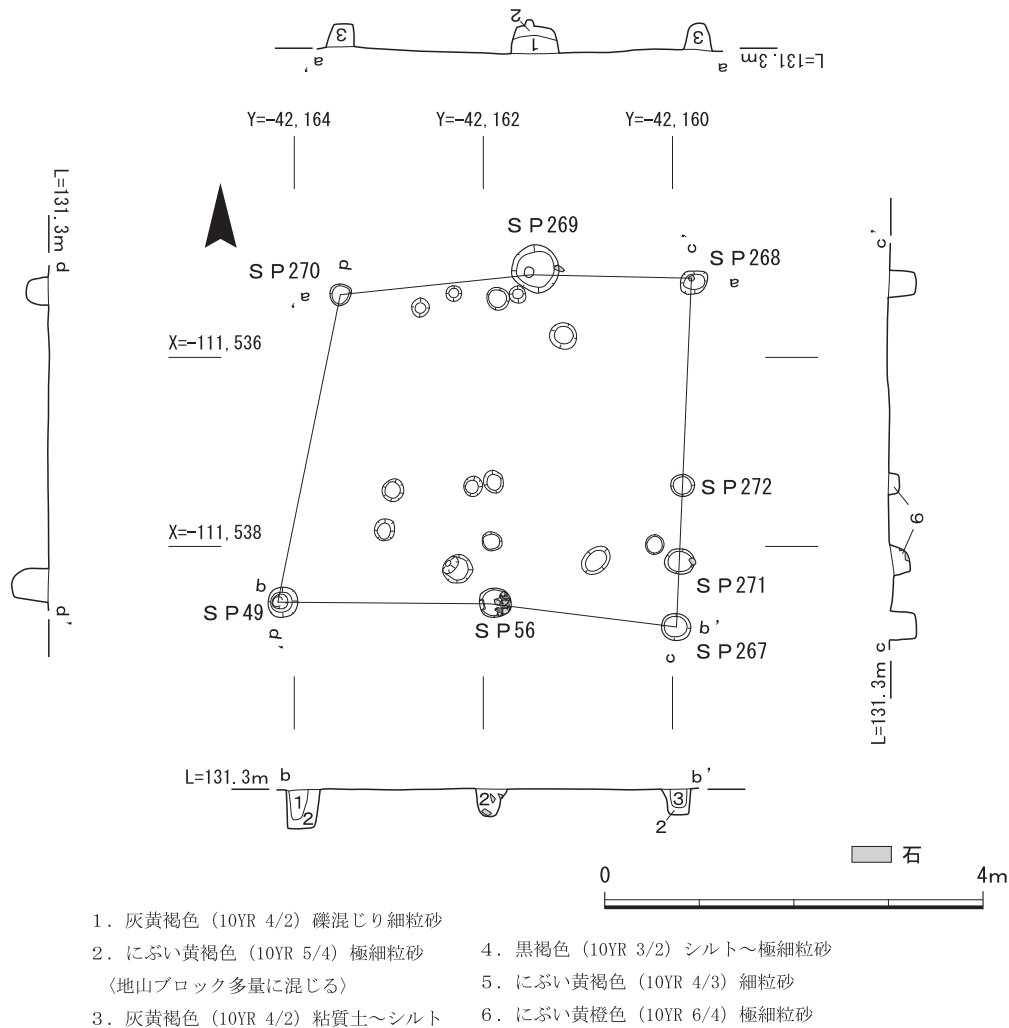
- |  |  |
|--|--|
| 1. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘土～シルト、粘砂質土                | 10. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 細粒砂                      |
| 2. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂<br>〈有機質多く混じる粘砂質土〉      | 11. 暗褐色 (10YR 3/3) 〈1 cm 程の礫少し含む〉              |
| 3. 褐色 (10YR 4/4) 極細粒砂                        | 12. 黒褐色 (10YR 2/2) 粗粒砂混じり細粒砂 〈地山に似た埋土〉         |
| 4. 明黄褐色 (10YR 7/6) シルト～極細粒砂                  | 13. 土壌化したにぶい黄褐色 (10YR 5/3) 極細粒砂                |
| 5. 褐色 (10YR 4/1) 極細粒砂 〈地山ブロックを多く含む〉          | 14. 灰褐色 (7.5YR 4/2) 粘土～シルト                     |
| 6. 明黄褐色 (10YR 7/6) シルト 〈地山ブロックを多く含む〉         | 15. にぶい黄橙色 (10YR 6/4) 細粒砂                      |
| 7. 褐色 (7.5YR 4/3) 極細粒砂～シルト                   | 16. 灰黄褐色 (10YR 6/2) シルト 〈柱痕〉                   |
| 8. 明黄褐色 (10YR 7/6) シルト～極細粒砂<br>〈地山ブロックを多く含む〉 | 17. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 極細粒砂 〈中礫を多量に含む〉            |
| 9. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 細粒砂 〈中～大礫含む〉              | 18. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 極細粒砂<br>〈地山ブロック多量に含む〉 〈柱痕〉 |
|  | 19. にぶい黄橙色 (10YR 6/3) 極細粒砂 〈地山ブロック多量に含む〉       |

第27図 掘立柱建物 S B 431断面図(2) (1/100)

B431と比較して一回り直径が大きいことから、より堅牢な上屋構造を持つ建物の存在が想定される。上屋柱と下屋柱は区別することはできていない。

竪穴状遺構 S X 303 (第29・30図) S B 433の建物内で検出した、1辺約4.5m、深さ0.3mを測る竪穴状の遺構である。掘立柱建物 S B 433の柱穴との切り合いはなく、床面にも柱穴の痕跡等は認められないため、建物の内部構造と考えられる。西辺中央部に直径0.8m、深さ0.5mの焼土坑 S K 312があり、床面付近には焼土が認められたことから、簡易な炉などの火処のような施設があった可能性がある。

8・9層は、後世に流入した包含層である。埋土中からは古瀬戸平椀などが出土している。10・11層は礫を含み、締まりの強い砂質土であり、下層には地山ブロック土を多く含む。掘削中には鉄釘や器種不明の小形の鉄器・砥石など、他の遺構ではあまり出土しなかった遺物が得られている。なお、埋土を持ち帰り、ふるいにかけてたが、鍛造鉄片などの工房に関わる遺物は出土していない。12~17層は S K 312の埋土である。締まりの弱い堆積であり、上層では炭化物や有機



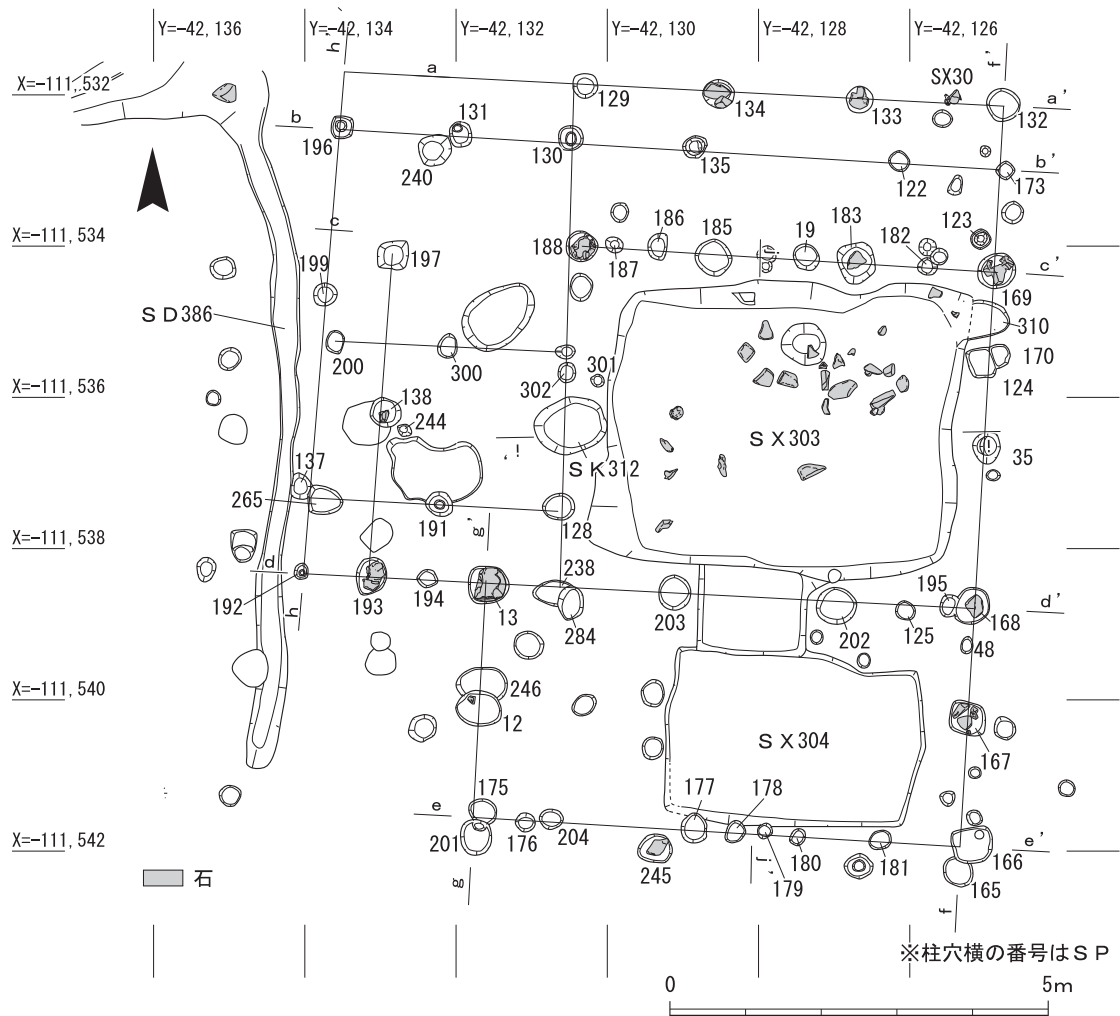
第28図 掘立柱建物 S B 432平面図(1/80)

質及び弱く被熱した土を含む。

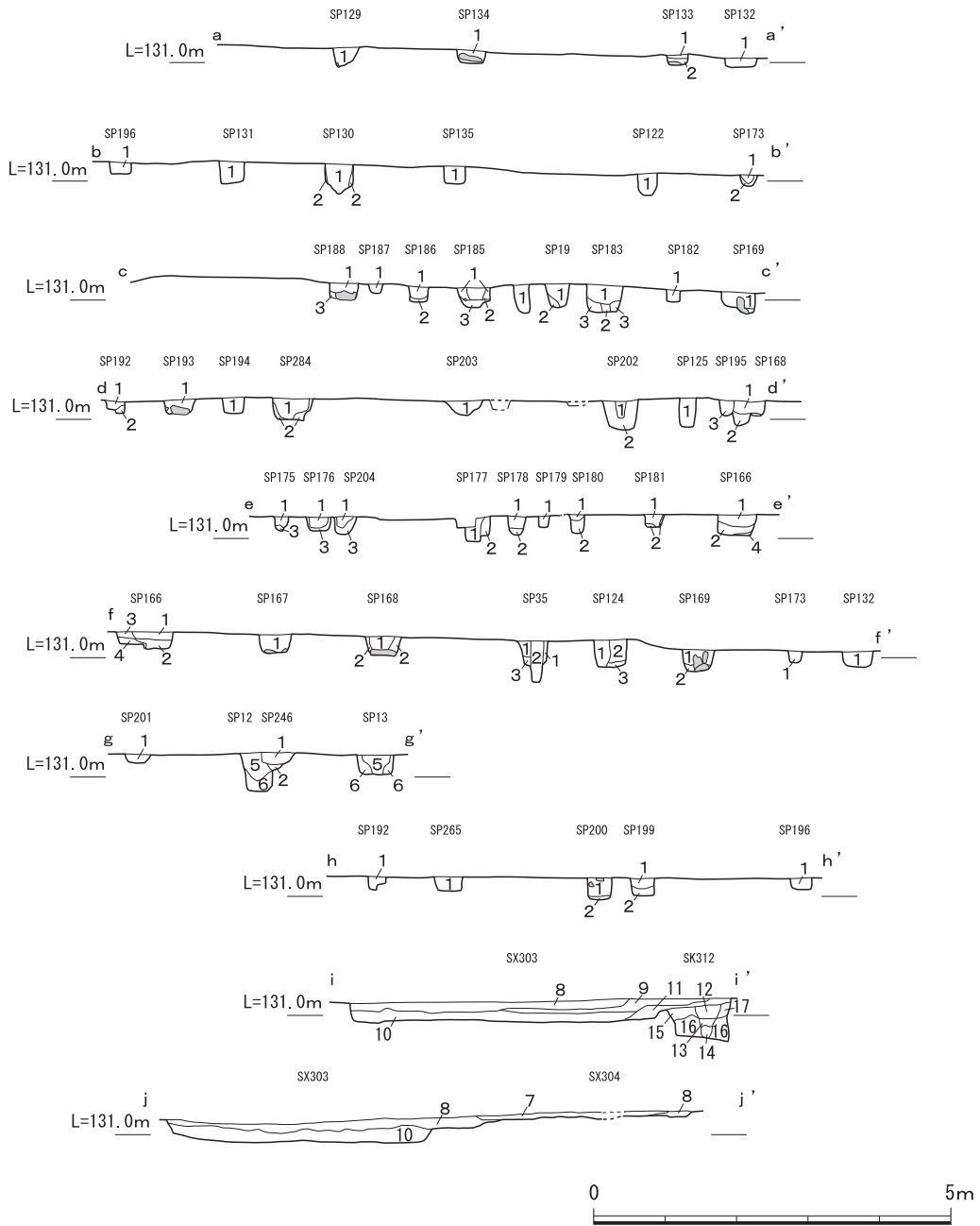
類似する竪穴状の遺構は、東日本を中心に検出されている竪穴建物として報告されることがある。<sup>(注23)</sup> また、13世紀後半から15世紀前半の中世の居館の建物に伴う方形竪穴遺構については本村充保が整理し、平面形状から類型化しているが、<sup>(注24)</sup> 出土遺物が少ないことなどからその性格については保留している。

本例では、焼土坑 S K 312や竪穴状遺構 S X 304など、建物内部構造で他の遺構と切り合い関係がなく、並存したような状況が想定できることから、竪穴状に深く掘り窪めた空間というよりも、竪穴に締まりの良い土を入れた、土間の「タタキ」のような構造であった可能性も考慮に入れておきたい。その場合、本来の床面は10・11層の上面であり、残存深で約15cm程掘り窪められた空間であったと想定できよう。

焼土坑 S K 312(第29図) 竪穴状遺構 S X 303の西辺中央部に付属する直径0.8mを測る楕円形の土坑である。竪穴状遺構 S X 303を掘り込んでおり、残存深は約0.5mである。検出中に、弱い

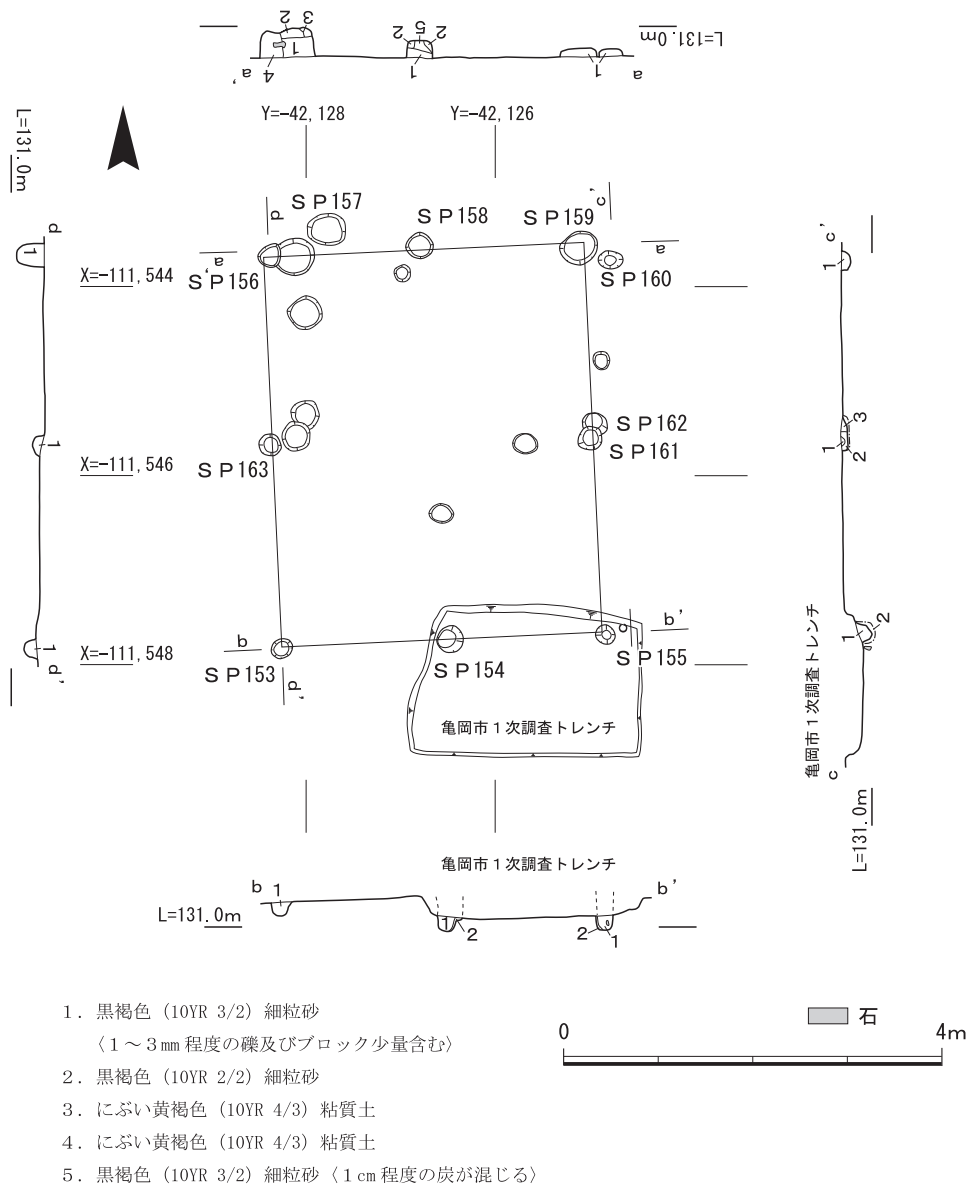


第29図 掘立柱建物 S B 433平面図(1/100)



- |   |  |
|---|--|
| <p>1. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂 (1~5mmの礫、ブロック少量含む)</p> <p>2. 黒褐色 (10YR 2/2) 細粒砂 (1~5mmの礫含む)</p> <p>3. 黒褐色 (10YR 2/2) 細粒砂 (1~3mmの礫、ブロック少量含む)</p> <p>4. 黒褐色 (10YR 2/3) 極細粒砂</p> <p>5. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂 (ブロック多量含む)</p> <p>6. 黒褐色 (10YR 2/3) 細粒砂 (ブロック少量含む)</p> <p>7. 浅黄橙色 (10YR 8/4) 極細粒砂 (しまり強い)</p> <p>8. 浅黄橙色 (10YR 8/3) 極細~細粒砂 (しまり強い)</p> <p>9. 浅黄橙色 (7.5YR 8/4) 極細粒砂<br/>(径1mm程の白色粒多量に含む しまり強い)</p> <p>10. 褐色 (10YR 4/4) 極細粒砂<br/>(径5~10cmの地山ブロック多量に含む しまり強い)</p> | <p>11. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂 (地山ブロック・焼土ブロック含む・瓦器碗の破片含む しまり中)</p> <p>12. 黒褐色 (7.5YR 3/1) 細粒砂に粗粒砂含む</p> <p>13. 灰褐色 (7.5YR 4/2) 細粒砂に中粒砂含む</p> <p>14. 褐色 (10YR 4/4) 極細粒砂に細粒砂含む</p> <p>15. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂に粗粒砂含む (炭化物と焼土・褐色ブロック含む)</p> <p>16. 黒褐色 (10YR 2/2) 極細粒砂に径5mm程の礫含む (5~10cm程のブロック土含む)</p> <p>17. 暗褐色 (10YR 3/3) 細粒砂 (褐色土含む)</p> |
|---|--|

第30図 掘立柱建物 S B 433断面図(1/100)



第31図 掘立柱建物 S B 434平・断面図(1/80)

焼土や炭などを検出した。火処のような施設の可能性がある。

**竪穴状遺構 S X 304** (第29・30図) 竪穴状遺構 S X 304は、掘立柱建物 S B 433の南東隅で検出した、東西3.3m、南北2.3m、検出深0.15mを測る長方形の竪穴状遺構である。北側に段が付き、スロープ状となっている。埋土中から顕著な遺物は出土していない。先述の竪穴状遺構 S X 303と類似する構造だが、馬屋である可能性を指摘しておきたい。馬屋の検出事例を検討した箱崎譲治によると、その認定基準は①カマド・炉がない、②竪穴が設けられている、③床面が傾斜する、④尿溜めがある、⑤張り出しが付くものがある、⑥スロープが付くものがある、の6要件とされる。<sup>(注25)</sup> 竪穴状遺構 S X 304では、確実に尿溜めとわかる遺構は検出できていないが、近世民家では、床面にスノコを敷き、尿が馬に触れないようにする事例もあり、必ずしも土坑状の施設が必要な



訳ではない。他の5要件を満たしていること、建物の隅部に作られていることから、建物内部の馬屋と考えておきたい。

雨落ち溝SD386(第29図) 掘立柱建物SB433の西側で検出した、深さ0.1mの浅い溝である。建物に沿うように検出されており、素掘りの雨落ち溝と考えられる。北側は、排水溝SD353に接続している。

掘立柱建物SB434(第31図) 梁間2間、桁行2間の南北棟である。南北4.12m、東西3.4mで平面規模は約14㎡である。南辺の柱穴2基は亀岡市が実施した1次調査トレンチで切り込まれており、上半の堆積状況は不明だが、ほかの柱穴は検出面から0.1~0.3mの深さである。

(7) 柵列

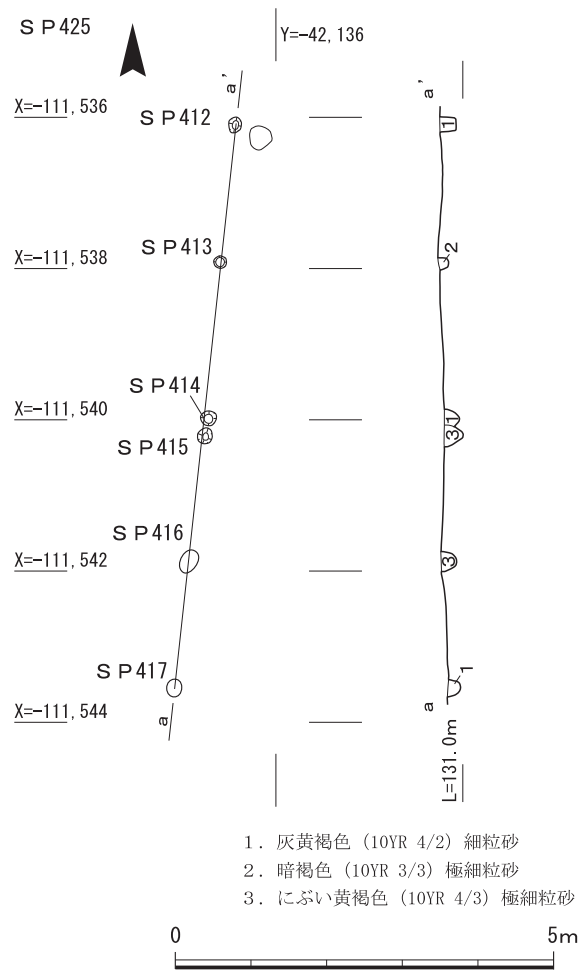
柵列SA425(第32図) 掘立柱建物SB433の西側で検出した柵列である。径0.2m程の小ピットを、堀SD01に沿うように6基検出した。出土遺物が少なく、明確な帰属時期は明らかではないが、掘立柱建物SB433と方位を揃えていることから、一連の遺構であると考えられる。

柵列SA426 掘立柱建物SB434の南側にあり、堀SD03の北側に沿って検出した東西方向の柵列である。遺存状況に恵まれず、深さは0.1mほどである。出土遺物はない。他の柱穴と比べて極端に遺存状況が悪いことから、しっかりと杭が打ち込まれた構造のものではなく、当初から簡易な施設であった可能性が高い。

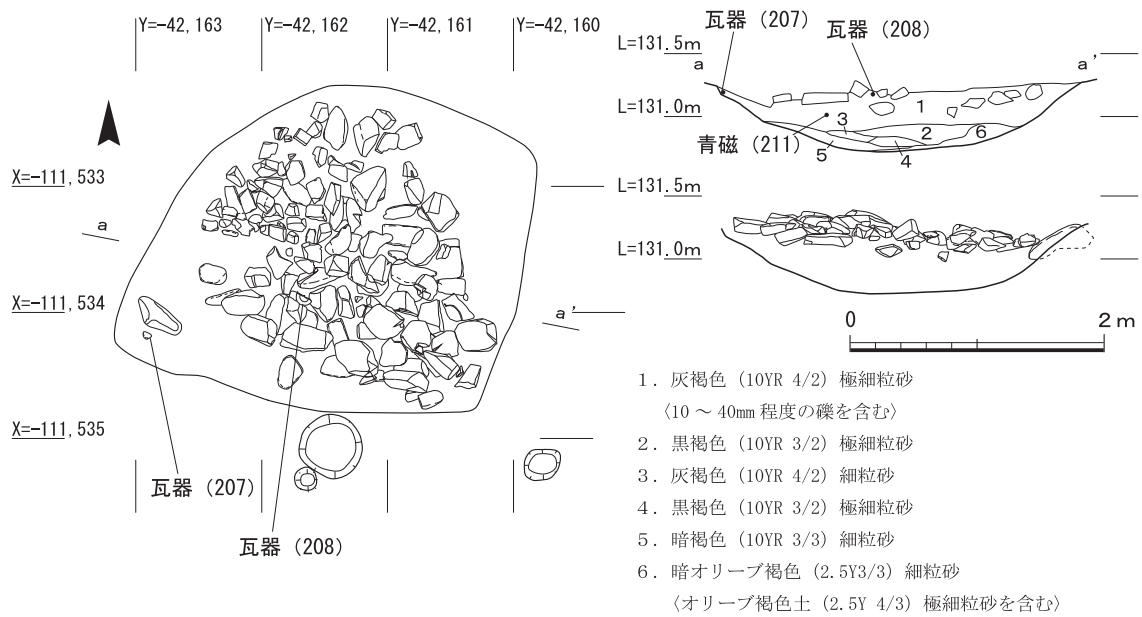
(8) 土坑

集石土坑SK11(第33・34図) 区画①の北西隅で確認した、楕円形を呈する土坑である。床土を除去した段階で礫が露出しており、中央部には完形に近い瓦器椀(第48図208)が伏せて置かれた状態であった。最上層の1層は礫やブロック土を多く含み、人為的に埋め戻された土層であると解釈した。2~6層は比較的均質な埋土であり、ブロック土はほとんど含まない。埋土には遺物の小片を含むが用途を示すような出土状況ではない。

礫のうち、半数をサンプルとして計測を行ったが、大きさや種類に一定の規範は認められなかった。山城では切岸付近に礫の集積が認められることがあり、<sup>(注26)</sup> 防御を意識した施設の可能性があるろう。



第32図 柵列SA425平・断面図(1/100)



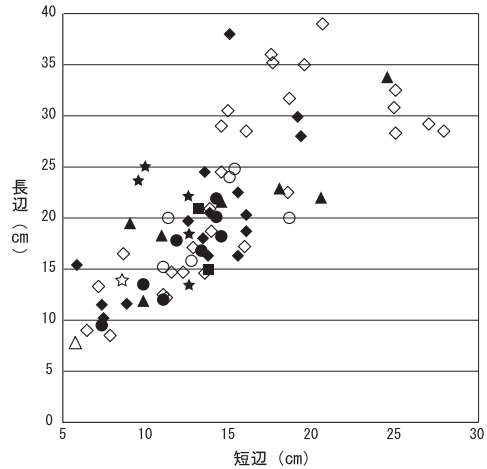
第33図 集石土坑 S K 11平・断面図(1/60)

石の法量一覧

No	長辺	短辺	厚さ	形状	石材
1	28.5	27.9	13.8	丸	砂岩
2	29.2	27.0	13.8	丸	砂岩
3	20.9	13.1	7.5	角	花崗岩
4	17.2	15.9	11.8	丸	砂岩
5	24.0	15.0	11.5	丸	泥岩
6	20.0	11.3	9.8	丸	泥岩
7	20.0	18.6	12.3	丸	泥岩
8	18.7	16.0	10.2	角	砂岩
9	10.2	7.4	8.5	角	砂岩
10	12.0	11.0	8.9	角	泥岩
11	18.3	10.9	5.5	角	チャート
12	18.2	14.5	8.5	角	泥岩
13	14.6	13.5	8.7	丸	砂岩
14	22.9	18.0	8.6	角	チャート
15	12.2	11.2	6.3	丸	砂岩
16	7.8	5.7	3.5	丸	チャート
17	18.0	13.4	9.3	角	砂岩
18	14.7	12.2	10.0	丸	砂岩
19	21.9	14.2	8.1	角	泥岩
20	16.3	13.7	8.5	角	砂岩
21	30.5	14.9	9.2	丸	砂岩
22	11.9	9.8	9.7	角	チャート
23	17.1	12.8	9.0	丸	砂岩
24	9.0	6.4	4.0	丸	砂岩
25	23.7	9.5	8.4	角	?
26	15.0	13.7	7.5	角	花崗岩
27	29.9	19.1	13.6	角	砂岩
28	22.2	12.5	6.7	角	?
29	20.1	14.2	12.2	角	泥岩
30	13.3	7.1	4.7	丸	砂岩
31	8.5	7.8	4.6	丸	砂岩
32	30.8	24.9	12.5	丸	砂岩
33	14.7	11.5	7.0	丸	砂岩
34	20.9	13.8	10.1	丸	砂岩
35	18.7	13.9	10.7	丸	砂岩
36	16.5	8.6	6.6	丸	砂岩
37	25.1	9.9	6.9	角	?
38	15.4	5.8	5.4	角	砂岩
39	15.2	11.0	9.3	丸	泥岩
40	35.2	17.6	10.1	丸	砂岩
41	18.5	12.5	11.0	角	?
42	16.8	13.3	5.5	角	泥岩
43	15.8	12.7	8.5	丸	泥岩
44	31.7	18.6	7.5	丸	砂岩
45	13.5	12.5	47.0	角	?
46	20.5	13.8	11.2	角	砂岩
47	14.0	8.5	4.5	丸	?
48	13.5	9.8	4.7	角	泥岩
49	19.7	12.5	11.7	角	砂岩
50	38.0	15.0	11.5	角	砂岩

No	長辺	短辺	厚さ	形状	石材
56	39.0	20.6	8.5	丸	砂岩
57	22.5	15.5	14.5	角	砂岩
58	33.8	24.5	14.0	角	チャート
59	22.0	20.5	8.5	角	チャート
60	9.5	7.3	5.5	角	泥岩
61	19.5	9.0	7.5	角	チャート
62	29.0	14.5	4.5	丸	砂岩
63	28.0	19.3	9.5	角	砂岩
64	28.5	16.0	11.5	丸	砂岩
65	12.5	11.0	11.5	丸	砂岩
66	16.3	15.5	4.5	角	砂岩
67	11.6	8.8	3.5	角	砂岩
68	11.5	7.3	4.5	角	砂岩
69	21.6	14.5	12.0	角	チャート
70	17.8	11.8	4.5	角	泥岩
71	20.3	16.0	12.0	角	砂岩
72	28.3	25.0	5.5	丸	砂岩
73	22.5	18.5	9.7	丸	砂岩
74	35.0	19.5	9.3	丸	砂岩
75	31.0	15.5	11.8	丸	砂岩

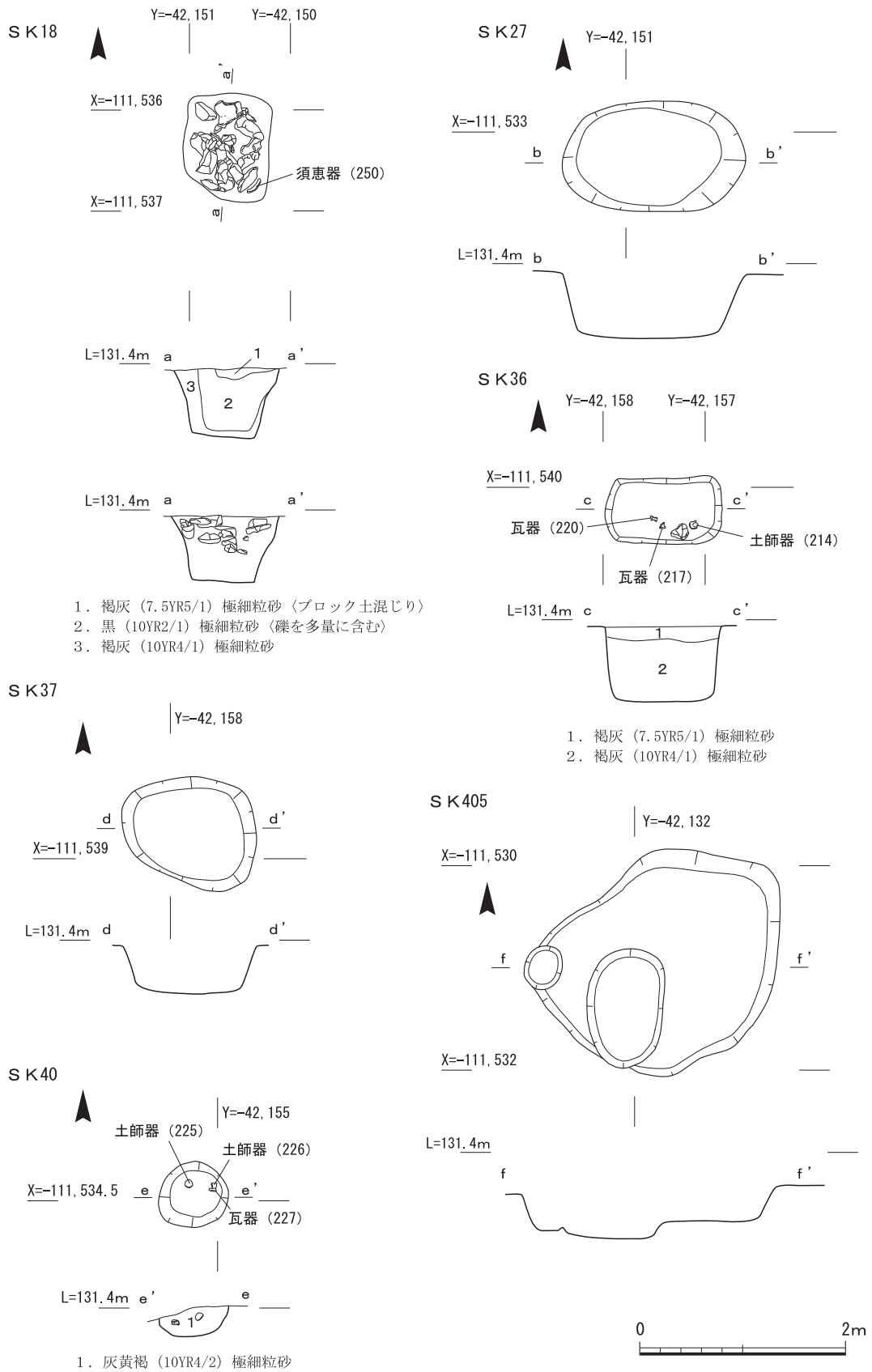
石の法量分布



凡例

- ◇砂岩・丸 ○泥岩・丸 △チャート・丸 ■花崗岩・角 ☆不明・丸
- ◆砂岩・角 ●泥岩・角 ▲チャート・角 ★不明・角

第34図 集石土坑 S K 11出土石の法量一覧・分布図



第35図 土坑SK27・36・37・39・40・242・405平・断面図(1/60)

なお、礫除去中に肥前陶器の小片(第48図210)が出土しており、一定期間礫が露出した状態で放置されていた可能性がある。

**集石土坑 S K 18**(第35図) 区画①の中央部で検出した方形の土坑である。短辺0.84m、長辺1.1m、検出深0.66mを測る。掘立柱建物 S B 431として復元した建物の内部にあたり、本来ならば床下部分である。上層には礫が堆積しており、礫に混在するように遺物の破片が出土している。丹波の現存民家では、床下に「芋穴」を設ける例があるが、礫が充填されている事例は見当たらない。貯蔵穴の可能性はあるが用途は不明である。

**土坑 S K 27**(第35図) 掘立柱建物 S B 431の北東隅、崖面と接するように検出された長楕円形の土坑である。長辺1.8m、短辺1.1mを測る。埋土にはブロック土を多く含み、瓦器碗及び土師器皿の破片が出土した。第48図237は15世紀代の遺物であり、居館廃絶後の遺構である可能性もあるが、正確な帰属時期は不明である。

**土坑 S K 36**(第35図) 掘立柱建物 S B 431の内部、西側で検出した長方形の土坑である。長辺1.1m、短辺0.65mを測る。上層埋土中から礫に混じり瓦器碗や土師器皿の破片が出土した。

**土坑 S K 37**(第35図) 掘立柱建物 S B 431の内部で検出した不整形の円形を呈する土坑である。埋土中から瓦器碗及び土師器皿の破片が出土した。

**土坑 S K 40**(第35図) 掘立柱建物 S B 431の北側で検出した直径約0.6mの円形の土坑である。断面は緩い「U」字状を呈する。上面精査中に完形に近い土師器皿が出土している。掘立柱建物 S B 431の内部にあり、建物柱跡の一部となる可能性も考慮に入れ断面の観察を行ったが、柱痕跡は認められなかった。

**土坑 S K 405**(第35図) 掘立柱建物 S B 433の北西で検出した不整形の土坑である。長辺約2.4m、短辺約2.1mを測る。検出時は複数の土坑が切り合っているような状況であったが、断面観察の結果、複数回の掘り直しがある土坑と判断している。埋土中からは15世紀代の遺物が出土しており、居館廃絶後の遺構である可能性もある。

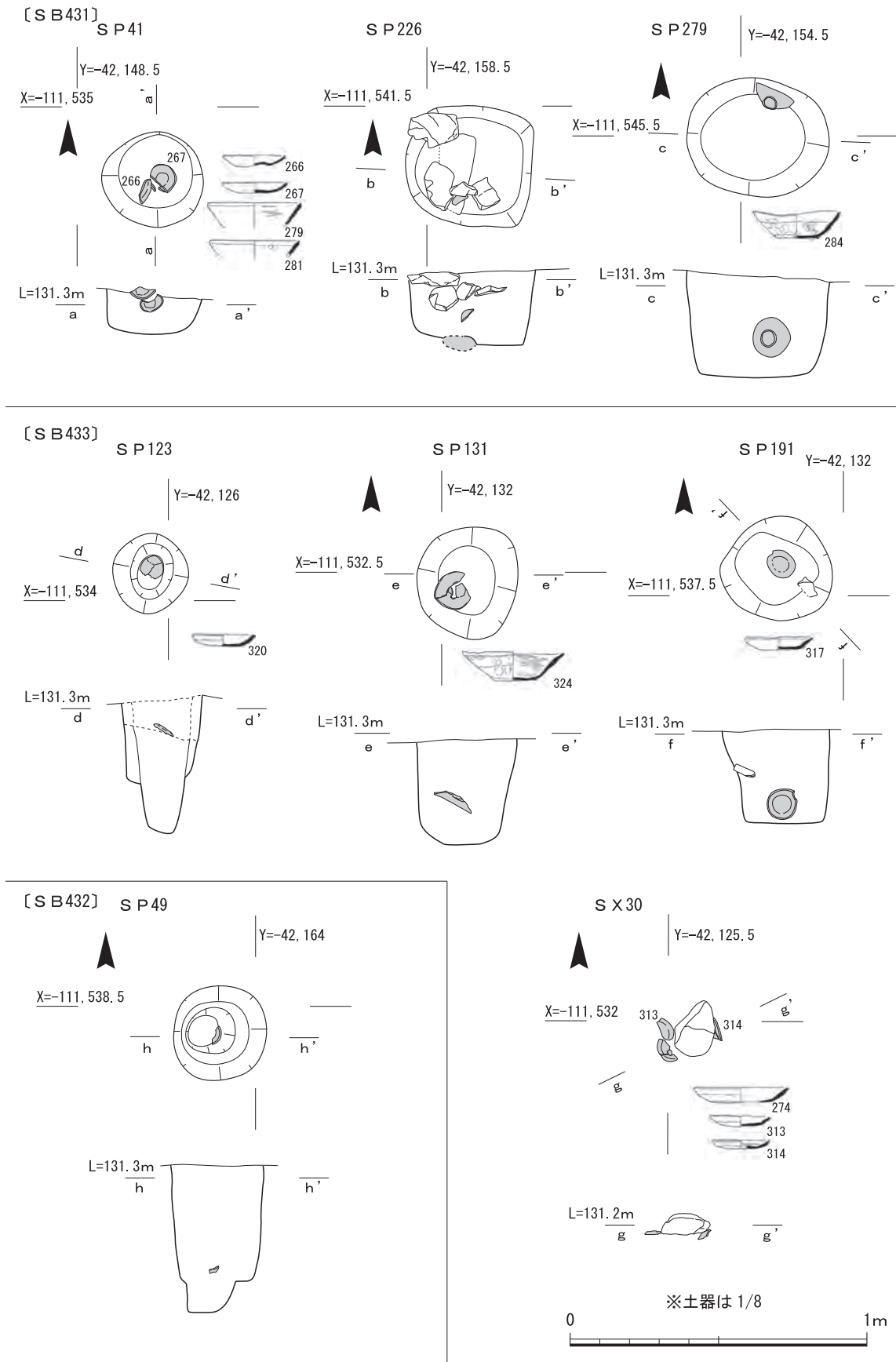
#### (9)遺物を埋納する柱穴(第36図)

今回の調査では、柱穴掘削中にはほぼ完形の土師器あるいは瓦器が検出された柱穴が多くある。それらの中でも、状況がわかるものを一括して報告する。

**柱穴 S P 41** 掘立柱建物 S B 431東端、S P 29の北側に位置する柱穴である。上層から土師器皿が2点(第49図266・267)出土している。柱の掘形は確認できなかったことから、柱を抜き取った後に上面に土師器皿を埋置したと考えられる。

**柱穴 S P 226** 掘立柱建物 S B 431の南東部の柱穴である。上層の礫を除去したところ、ほぼ完形の土師器皿が1点出土した。柱痕跡は確認できなかったが、床面から根石を検出しており、本来は柱が立っていたことは確実である。土師器皿は中央から出土しており、柱を抜き取った後に、土師器皿を埋納したものと考えられる。

**柱穴 S P 279** 掘立柱建物 S B 431の内部の柱穴である。掘形側方から完形の瓦器碗(第49図284)が出土している。出土状況からは、抜き取り後か、柱を設置する前がいずれのタイミングで



第36図 遺物を埋納する柱穴 平・断面図(1/20)



土器を埋納したかは明らかではない。

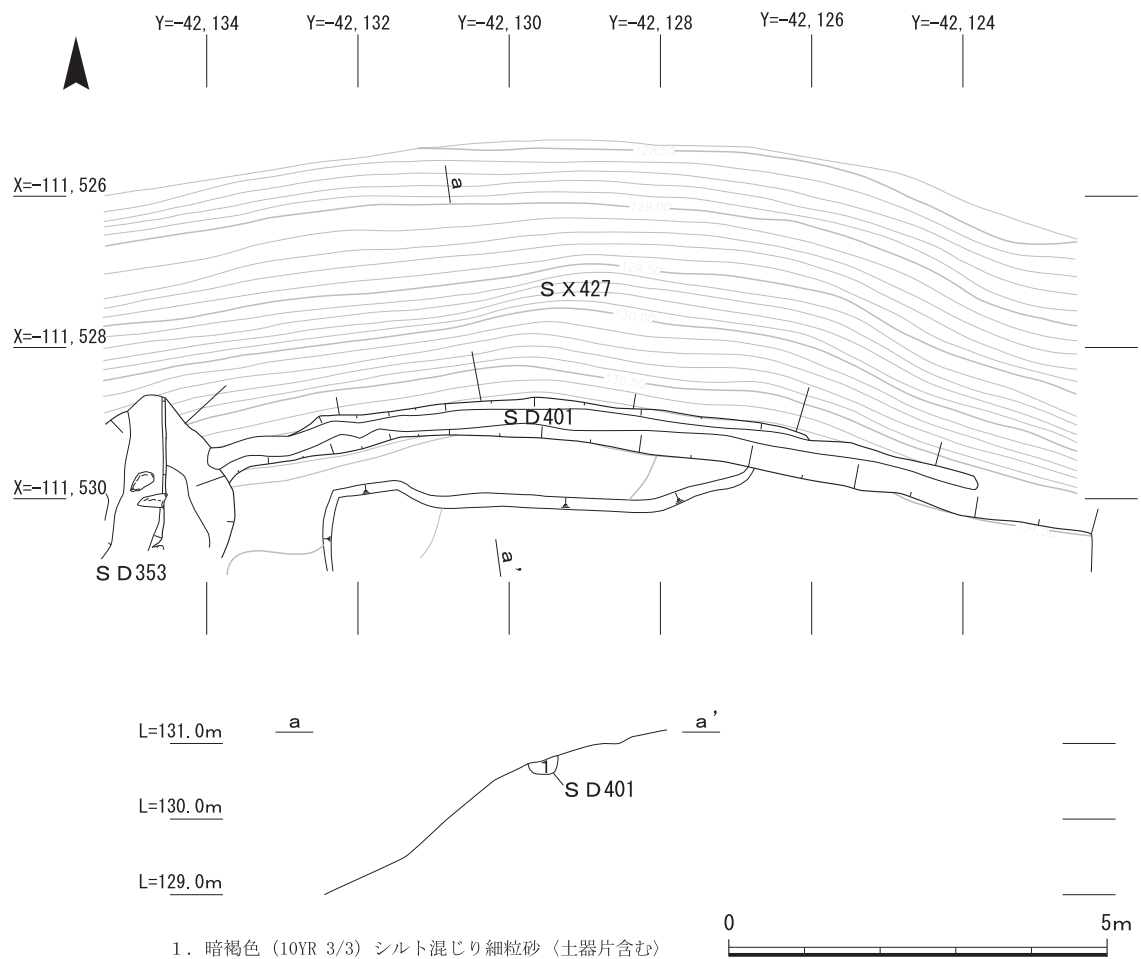
**柱穴 S P 49** 掘立柱建物 S B 432の南西隅の柱穴である。底近くから残存率が半分ほどの土師器皿が出土している。

**柱穴 S P 123** 掘立柱建物 S B 433の東端の柱穴に沿う柱穴である。深さ約0.5mの柱穴の上層から土師器皿(第50図320)が1点完形で出土した。柱を抜き取った後に、土師器皿を埋納したものと考えられる。

**柱穴 S P 131** 掘立柱建物 S B 433の北西隅近くの柱穴である。柱痕は確認できないが、中層中央から瓦器椀(第50図324)が1点出土しており、柱を抜き取ったのちに埋納したものと考えられる。

**柱穴 S P 191** 掘立柱建物 S B 433を構成する柱穴である。中央部に位置し、床塚と考えている。床面近くからほぼ完形の土師器皿(第50図317)が出土した。出土状況からは、抜き取り後か、柱を設置する前かいずれのタイミングで土器を埋納したかは明らかではない。

**礎石 S X 30** 掘立柱建物 S B 433の北端柱列、礎石と考えられる石に接するように2点の土師器皿(第50図313・314)が出土した。1点は、石に立てかけるように置かれていたが、これが原位位置をとどめていたかは不明である。



第37図 切岸 S X 427・区画溝 S D 401平・断面図(1/100)

以上のように、掘立柱建物を構成する柱穴からは完形ないし残りの良い土器が出土する事例が散見された。出土状況がわかるものを中心に報告したが、抜き取り穴に埋納する事例が多いことが明らかである。屋敷の片付けに伴う地鎮の一端を示す事例と考えられる。

(10) その他の遺構

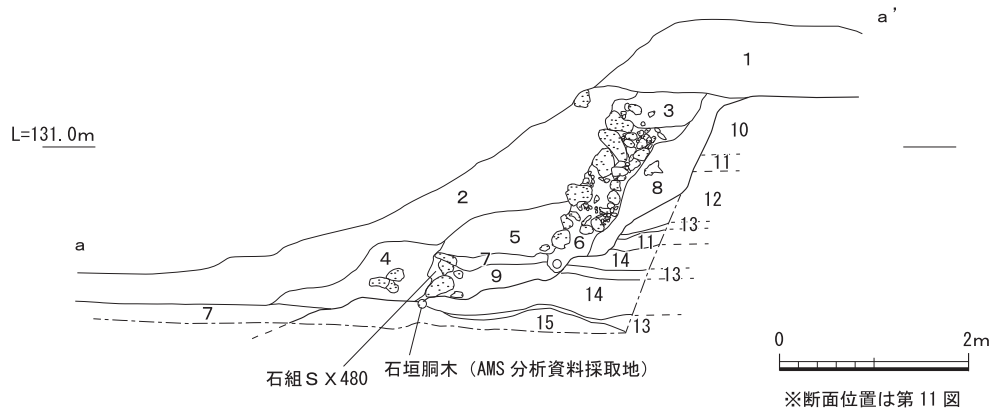
切岸 S X 427 (第37図) B地区の北側は犬飼川の下刻により形成された侵食崖であり、現地形での標高差は約4mある。また、調査前は、区画①の北側崖はモルタル擁壁であったが、区画②の北側は棚田に伴う石組であった。その石組を除去したところ、区画②の北側の崖は緩い弧状を描く形状であり、人工的な改変を受けた地形であると判断した。したがって、この崖を切岸 S X 427として報告する。

崩落などにより、遺存状況には恵まれないが、本来の切岸が確認できるのはB地区東側の現在の水路から排水溝 S D 353までの間で、東西幅およそ11mである。角度はおよそ35度で下部で屈曲を持たせる。畝状堅堀などの構造は認められない。

区画溝 S D 401 (第37図) 区画②の北端、切岸 S X 427に沿うように弧状にめぐる溝である。深さはおよそ0.25mで、断面形状は「U」字状を呈する。東端は攪乱で不明であるが、西端は排水溝 S D 353に接続する。区画内の余水が切岸 S X 427に垂れ流しになるのを防ぐような機能があったと考えられる。

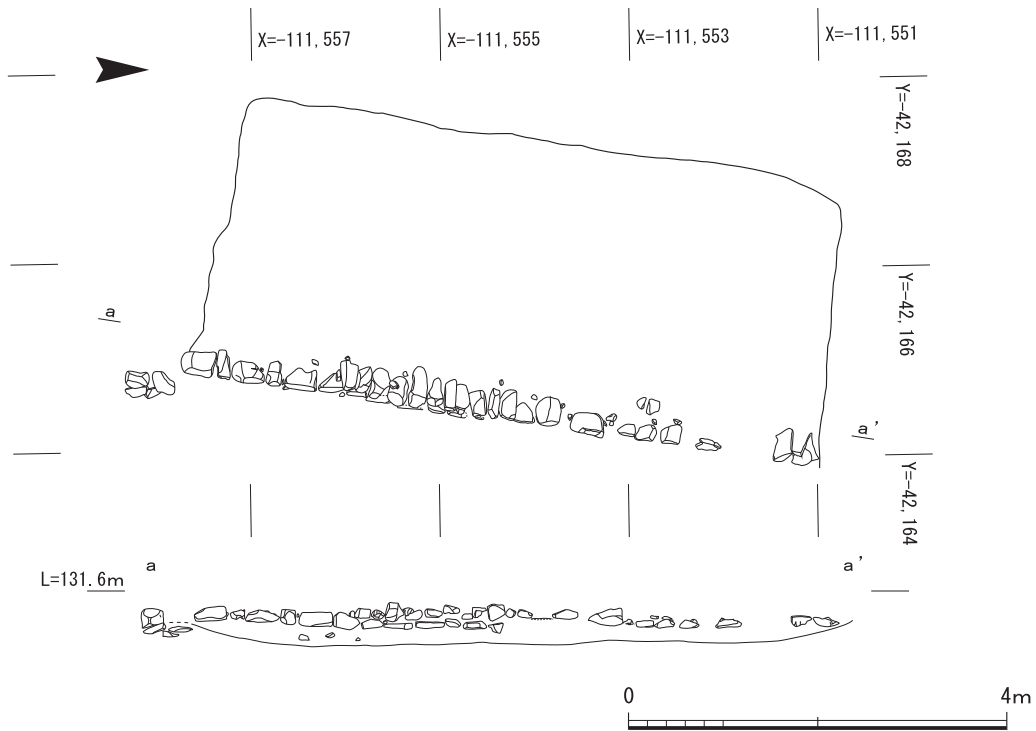
(11) 居館廃絶後の遺構

石組 S X 480 (第11・38図) 石組 S X 480は、B地区及びD地区の北側で露出していた石組である。切岸 S X 427の裾部で検出されたため、居館に伴う遺構である可能性も考慮に入れて調査

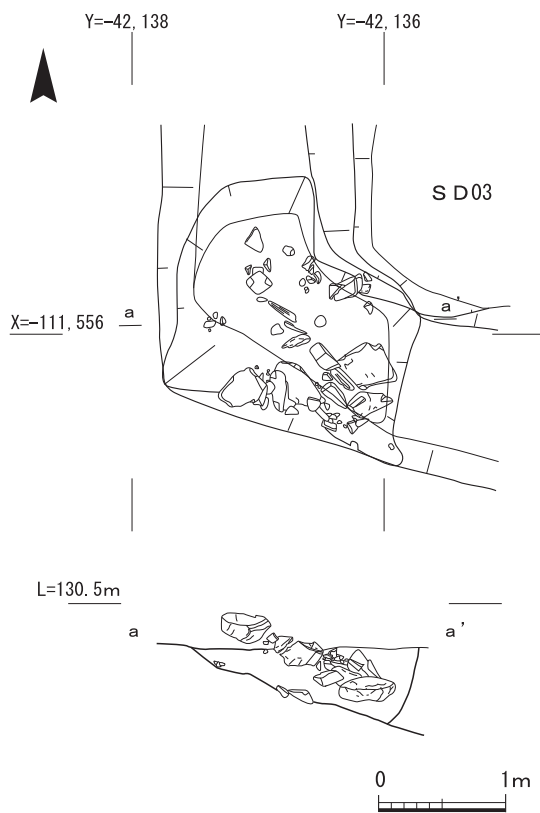


- |  |                                  |
|--|----------------------------------|
| 1. <表土>                                  | 9. 灰白色 (2.5Y 7/1) 極細粒砂<棚田に伴う盛土>  |
| 2. <造成土>                                 | 10. 明褐色 (5YR 7/2) 極細粒砂、遺構検出面<地山> |
| 3. <根攪乱>                                 | 11. 褐色 (5YR 5/1) 粗粒砂~小礫<地山>      |
| 4. 青灰色 (5B 6/1) 細粒砂、しまりのない砂質土            | 12. 明褐色 (7.5YR 7/2) 礫混じり極細粒砂<地山> |
| 5. 灰白色 (10YR 7/1) 細粒砂<上層は旧表土>            | 13. 灰白色 (7.5YR 8/2) シルト~極細粒砂<地山> |
| 6. 褐色 (7.5YR 5/1) 細粒砂<棚田に伴う石垣>           | 14. 褐色 (5YR 5/1) シルト<地山>         |
| 7. 明褐色 (7.5YR 7/1) シルト~極細粒砂<旧耕作土>        | 15. 褐色 (10YR 5/1) 砂質シルト<地山>      |
| 8. にぶい黄橙色 (10YR 7/2) 礫混じり砂質土<br><地山再堆積土> |                                  |

第38図 D地区北側崖面土層図



第39図 石列 S X 38平・断面図



第40図 土坑 S K 481平・断面図

を行った。侵食崖の底部に沿うように、2～3段の角石で構成され、最下段には基礎となる径10cm程の胴木を伴う。この石組に伴う遺物は出土していない。構築年代を得るため、胴木の放射性炭素年代測定を行った結果、1670年以降という結果が得られた。したがって、石組 S X 480も江戸時代以降の棚田造成に伴う石垣と判断した。

**石列 S X 38** (第39図) 石列 S X 38は、耕作土直下、堀 S D 01の最上層で検出した石列である。1～3段の人頭大の石で構成される。堀 S D 01と同じ幅であり、沈下に備えた何らかの施設であると考えられる。

**土坑 S K 481** (第40図) 土坑 S K 481は、土橋 S X 429を掘り込むように構築された廃棄土坑である。拳大～人頭台の礫が、西側から落ち込むように堆積していた。居館廃絶後の片付けに伴う遺構と考えられる。出土遺物はない。

4) 出土遺物(第1面)

(1) 出土土器の分類と概要

中世の遺物は石製品、木製品、金属製品などがあるが、大半を土器が占める。まずは、土器の報告に当たり、各器種の概略と傾向を示し、時期比定の根拠とした典拠を示しておきたい。

**土師器** 土師器はほとんどが皿で、わずかに煮沸具の破片が認められる。土師器の分類は平尾正幸の「土師器再考」<sup>(注27)</sup>を参考にした。

**瓦器** 瓦器は瓦器碗のほか、いわゆる瓦質土器として播鉢、鍋・土釜、風炉などの器種がある。瓦器碗は、いわゆる丹波型瓦器碗と呼ばれるものが大半である。犬飼遺跡で出土した瓦器碗には、器形から2つの型が認められる(第41図)。

A類：丸みのある体部をもつもの。

B類：高台際から口縁部までが直線的に立ち上がり、側面観が台形を呈するもの。

B類は、口縁部の調整や底部の作り方などは従来知られていた丹波型瓦器碗と大きな違いはないが、外面の高台際および内面の見込み部分に顕著なユビ圧痕を残すことが特徴である。口縁部形状は、面取りをするもの、丸く単純におさめるもの、上方に拡張するものなどバリエーションが多い。また、口縁端部には粘土紐の接合痕を残すものが通有である。これらの瓦器碗は、第7章で詳細に検討するように、多くは13世紀後葉～14世紀初頭のものと考えている。

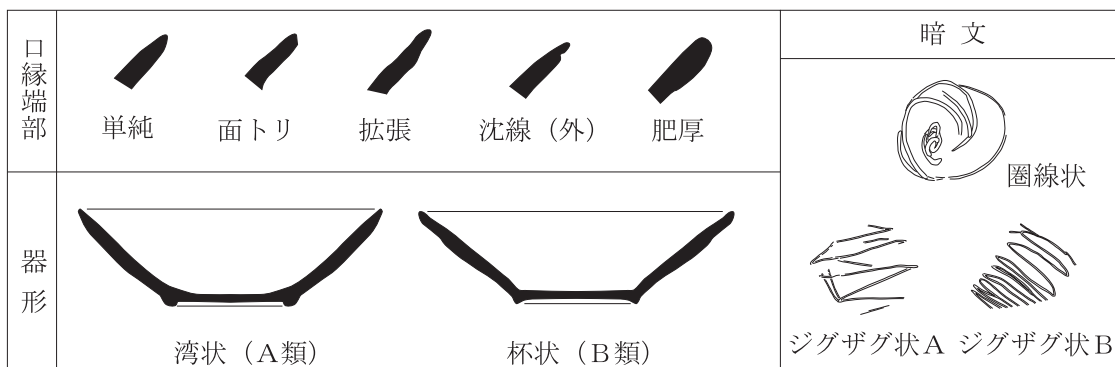
そのほかの器種に関しては中世土器研究会編1996と菅原正明1989<sup>(注28)</sup>を参考にした。

**須恵器** 須恵器は少なく、いわゆる東播系須恵器のほか、甕などの大形器種の破片がみられるのみである。

**焼締陶器** 焼締陶器では、常滑系と備前系の製品がみられる。器種としては甕などの貯蔵具や播鉢のような調理具が含まれる。記述は重根弘和<sup>(注29)</sup>を参考とした。

**国産陶器** 主に館を囲む堀SD01の上層埋土から、古瀬戸系の施釉陶器が出土している。碗皿類の食膳具がほとんどである。碗では、灰釉平碗や天目碗がある。皿は、すべて灰釉卸目皿である。ほかに、香炉が1点出土している。時期的には、古瀬戸後Ⅱ期以降の15世紀を中心とする頃のもの<sup>(注30)</sup>とみられる。国産陶器の記載は安井俊則ほか2012による。

**陶磁器** 今回の調査では、量的には多くないが、中国製の輸入陶磁器が出土している。小片が



第41図 瓦器碗分類図

付表3 出土土器数量表

瓦器・瓦質土器						土師器		須恵器	陶磁器		合計
椀	皿	小壺	摺鉢	羽釜	風炉・火鉢	皿	鍋	鉢	壺	椀・皿	
140	2	2	5	6	2	152	1	7	14	42	373
37.5%	0.5%	0.5%	1.3%	1.6%	0.5%	40.8%	0.3%	1.9%	3.8%	11.3%	100.0%

付表4 陶磁器数量表

輸入														国産										合計						
白磁						青磁				青白磁	陶器	緑釉陶器盤	合計	焼締陶器		施釉陶器						合計								
椀			皿		杯	蓋	不明	椀		杯				不明	杯	天目椀	茶入	甕	壺	摺鉢	古瀬戸									
II	IV	V	不明	IX	D				I or II	I	II			平椀	香炉						天目椀	卸目皿	瓶子	壺	不明					
1	2	3	1	2	1	1	1	1	2	1	3	1	2	1	2	1	1	27	72	1	2	13	1	6	4	1	1	3	104	131

ほとんどで、明確に器形のわかるものは少ない。時期的には、12世紀から14世紀頃のものである。また、包含層中より、国産陶磁器がわずかに出土している。器種分類については、太宰府市教育委員会の『大宰府条坊跡XV』<sup>(注31)</sup>、中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』<sup>(注32)</sup>、九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』<sup>(注33)</sup>を参照した。

**全体の比率** 今回図化した中世の土器は、すべてで373点である。13世紀後半～15世紀前半という一定の時間幅を含む資料である。また、陶磁器類は破片であっても積極的に図化したので、実際の比率よりも高率になると予想されるが、全体の傾向は推し量ることができよう。

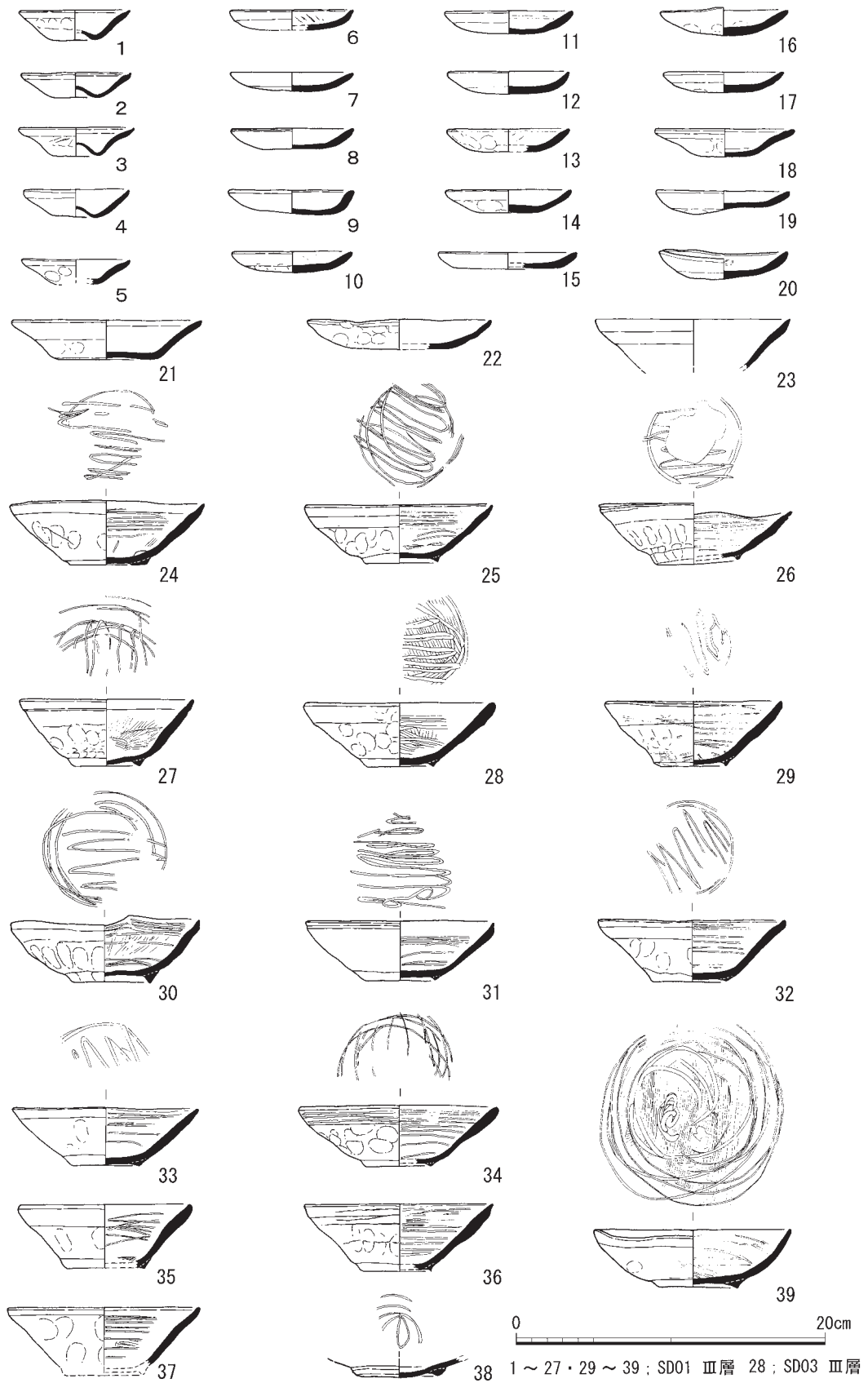
最も多いのは土師器皿(40.8%)で、瓦器椀(37.5%)がそれに続く。陶磁器類も含めると、全体の約9割を供膳具が占める。貯蔵具は焼締陶器及び国産陶磁器の壺が約4%、調理具は摺鉢等が約3%で、羽釜・鍋等の煮炊具は1%ほどと極めて低率である。今回図化した煮炊具はいずれも小片であり、本来の比率はさらに低くなるとみられる。(桐井理揮)

**陶磁器の数量** 犬飼遺跡では、報告外の遺物も含めて、輸入陶磁器・国産陶器が計131点出土している。個別の仔細な所見は後述することとして、ここでは全体の傾向を示しておきたい。

輸入陶磁器は、計27点と少ない。青磁が白磁よりも多く、陶器・青白磁がわずかに出土している。基本的には11世紀後半から14世紀初頭にかけての陶磁器が中心で、15世紀に降る可能性があるものは白磁皿C類など、非常に少ない。器種の組成としては、通常の供膳具である椀皿類が15点と半数を占め、その他に杯や蓋などが含まれる。また、丹波地域では初出となる緑釉陶器盤といった高級品が出土していることも特徴の一つである。一方で、壺などの袋物は出土しなかった。

国産陶器は、常滑系の焼締陶器、備前焼、古瀬戸が出土している。常滑系の甕が72点と大半を占めるが、これは甕が大形で必然的に破片数が増えるためと考えられる。今回出土した甕の口縁部はすべて「N」字状の口縁であり、犬飼遺跡で出土した常滑系の甕はすべて13世紀後半のもの





第42図 B・C・D地区第1面出土遺物(1)

であると考え。また、古瀬戸は29点を確認した。上述のように、すべてが古瀬戸後Ⅱ期以降の15世紀代のものである。器種は、供膳具や調理具である平椀、卸目皿のほか、香炉や天目椀といった奢侈品が含まれている。このほか、備前焼も15世紀の摺鉢が2点出土している。

(上井佐妃)

## (2)土器

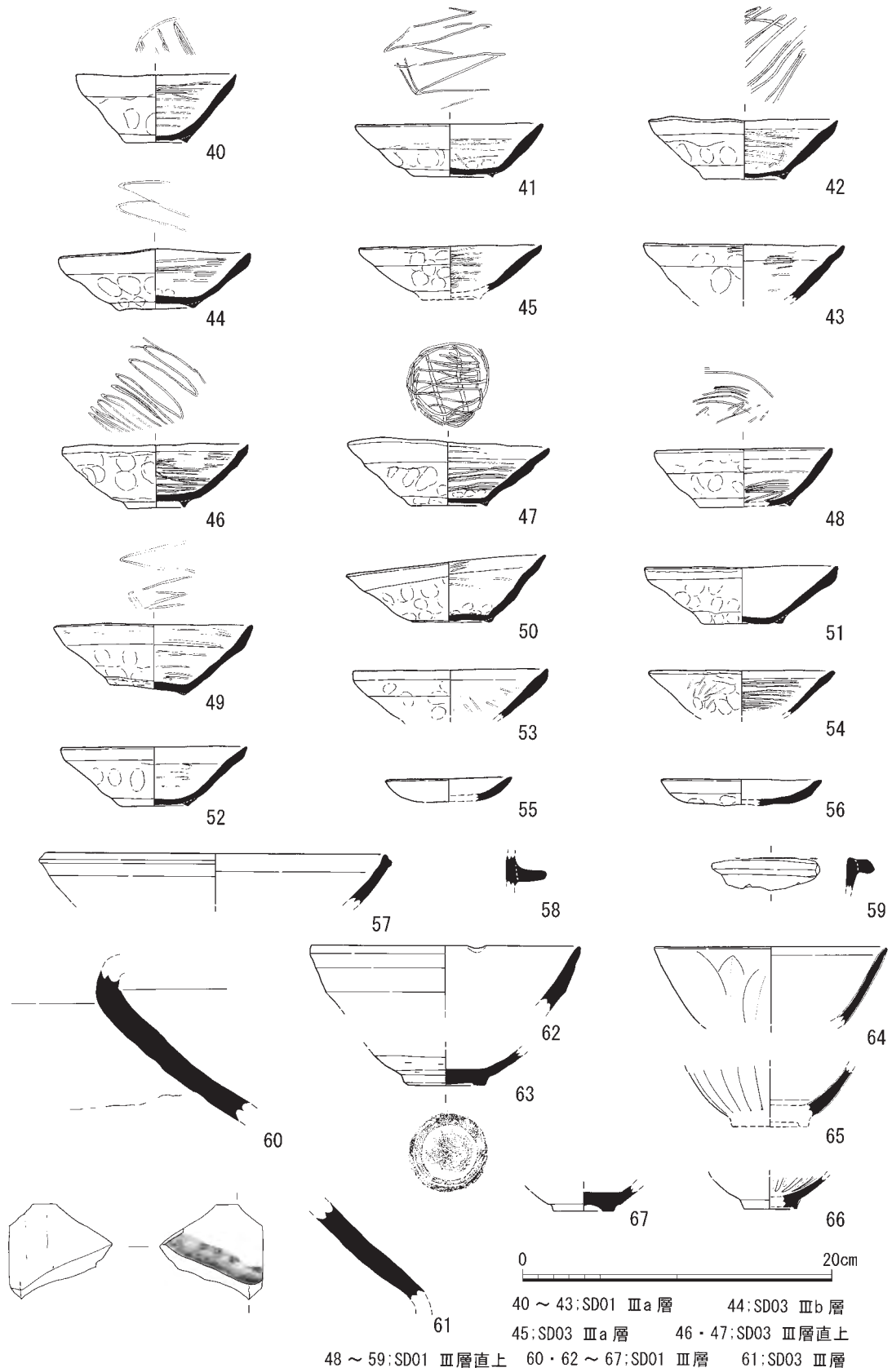
堀S D01(第43～46図) S D01は堀の最上層であるⅠ層、中層埋土に当たるⅡ層、機能時のⅢ層に大別できる。Ⅲ層は居館機能時のⅢb層と、再掘削時の埋土であるⅢa層に分別可能だが、断ち割り時に一括して取り上げざるを得なかった遺物も多く、必ずしも分別することはできていない。したがって、確実に層位ごとに取り上げられたもののみ細別層位を記載することとする。

1～27・29～39はⅢ層から出土した。断ち割り時に出土したものが多く、Ⅲ層直上のものも含む可能性があるが、一括して報告する。

1～23は土師器皿である。1～5はヘソ皿である。3は精良な胎土でほとんど砂礫を含まない。焼成も白色であり、京都系の搬入品の可能性もあろう。1・2・4はやや赤みのある焼き上がりで、胎土には石英・長石類等の径1mm以下の砂粒を少量含んでいる。18は側面観が台形を呈する小皿で、口縁端部はナデによりつまみあげる。砂粒をほとんど含まず、白色の焼き上がりを呈する。6～20は小皿で、すべて赤系の焼き上がりを呈する在地系の土師器皿である。21は復元口径14.4cmと中形の土師器皿である。胎土には石英・長石類、シャモットなどを含み、赤橙色の焼き上がりを呈する。15世紀代に下るもので、上層からの混入か。23は径1mm程の砂粒をやや多く含む、粗製の土師器である。端部の調整は瓦器椀と共通しており、椀の可能性もある。

24～27・29～39は瓦器椀である。24はつぶれた扁平な高台を持つ。他の土器の高台の痕跡が融着するが、その上から暗文を施しており、焼成前に土器を重ね置いた痕跡であろう。25は見込みにジグザク状の暗文を施したのち、細い工具で弧状の暗文を重ねる。26は粗雑な椀で、内面にはハケメの痕跡を顕著に残す。口縁端部はナデで整形するが、外面には沈線が一条めぐる。底部のみ欠損しており、意図的な打ち欠きの可能性もある。27は4分の1程度の破片で、外面に粘土巻き上げ痕を顕著に残す。内面はハケメによって平滑に仕上げられる。29は底部から口縁部まで厚い器壁である。底部外面に幅0.5mm程の工具で並行に5条のケズリ痕が認められる。この痕跡は高台の剝離部分には認められず、高台を貼り付けたのちに施文したものと考え。30は外面に接合痕や爪・ユビ圧痕を顕著に残し、やや粗雑なものである。口縁部はナデによって部分的に突出しており、土師器皿と同様の特徴をもつ。31はユビ圧痕が少なく、ミガキも粗く、不安定である。胎土に径1mm以下の有色鉱物を多く含むなど、当遺跡出土の瓦器椀と胎土が異なる。焼成も還元焰焼成のものに比べて甘く、断面は橙色を呈する。34は体部内面にブラシ状のハケメを残す。36は口径12.2cm、器高4.4cmとやや丈高の椀である。内面見込み部には高台貼り付けに伴う爪圧痕が6か所に認められる。

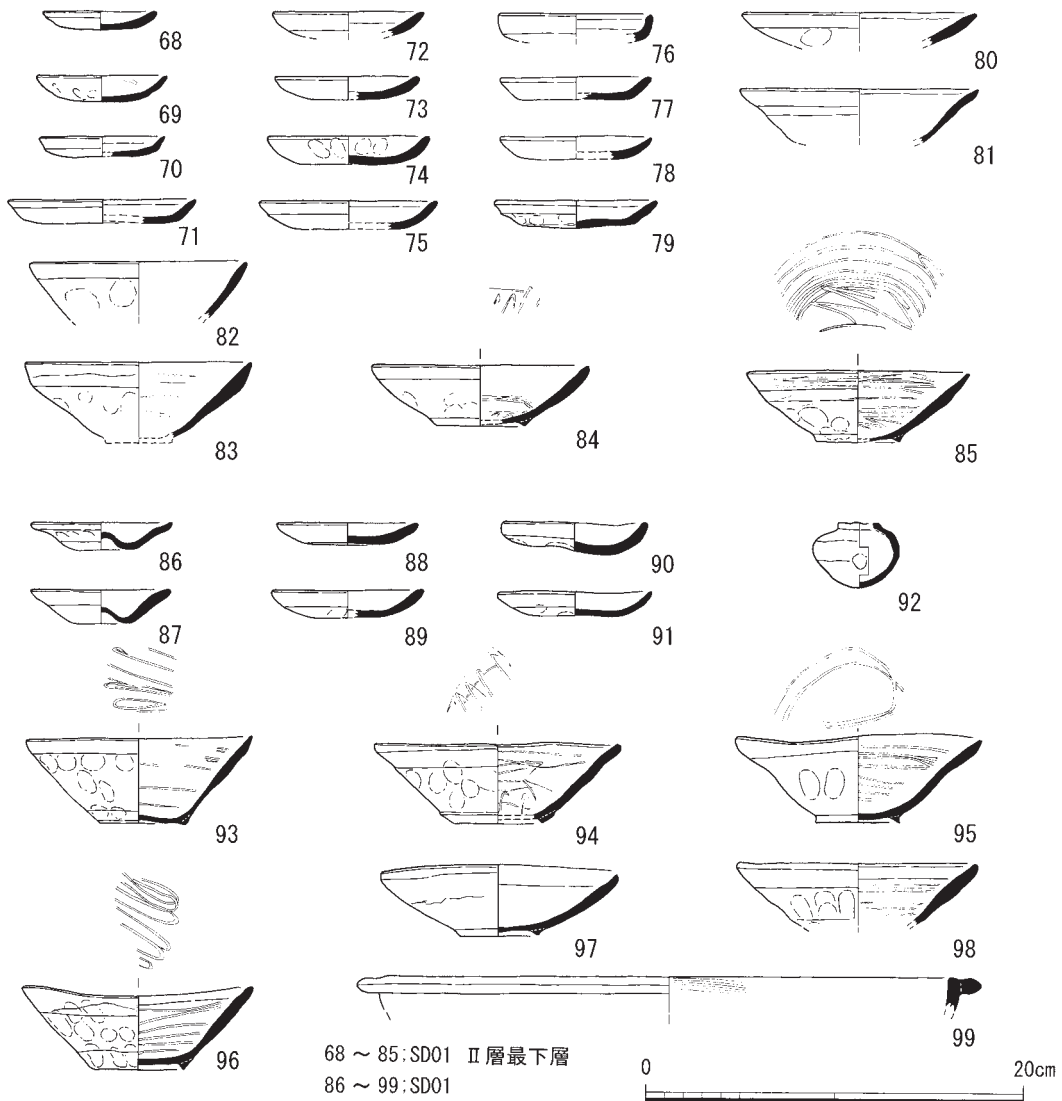
40～43はⅢa層に伴う瓦器椀である。41は平らな底部から、口縁部が外反気味に立ち上がる型式で、内面見込み部にはユビ圧痕を顕著に残す。ミガキの密度は粗い。



第43図 B・C・D地区第1面出土遺物(2)

48～54はⅢ層直上から出土した瓦器碗である。49・50は扁平な底部に直線的な体部を持つタイプである。ともに口縁部の傾きが著しい。49は顕著にユビ圧痕を残し、ミガキ及び暗文はまばらである。50はハケメを顕著に残す一方、内面見込みはユビ圧痕のみで、暗文は認められない。55・56は焼成が軟質だが、瓦器皿の可能性もある。57は東播系須恵器鉢の口縁部である。口縁端部にはナデによる沈線が認められる。58・59は瓦質鍋の鏝部である。S D01から出土した煮沸具は少なく、図化できるのはこの2点のみである。

60～67は陶磁器類を図化した。60は常滑系の甕の肩部片であり、肩の張った形状に復元できる。外面は被熱のため変色している。62は灰釉平碗の口縁部である。小片だが、押圧による輪花が認められる。63は灰釉平碗の底部である。内面に灰釉を施し、外面は上半部に施釉する。高台には糸切り痕が残る。見込み際に5個の目跡が残る。62・63は15世紀代に下る遺物と見られ、混入の可能性が高い。64は青磁碗で、外面に鎬蓮弁文を有する。口縁端部はやや外反する。龍泉窯系の青磁で、青磁碗Ⅱ-b類とみられる。13世紀前半頃のものである。65は青磁碗で、外面に鎬蓮弁



第44図 B・C・D地区第1面出土遺物(3)

文を刻出する。内面見込みには円刻をもつ。龍泉窯系の青磁で、青磁椀Ⅱ－b類とみられる。13世紀前半頃のものである。66は白磁椀とみられるが、高台径などから、あまり大形のものではない。内面に、放射状にやや幅広の沈線を刻する。67は天目椀の底部である。胎土は精良で、焼成は堅緻である。高台ケズリのロクロ回転方向は左廻りである。建窯系のものか。

68～85はⅡ層最下層から出土したものであるが、実際にはⅢ層直上のものと厳密には分別できていない。しかし、現地での認識に合わせ、Ⅱ層最下層として報告する。

68～79は土師器小皿である。小片がほとんどで、全形をうかがうことができるのは79のみである。しかし、71・77・79などⅢ層出土土師器皿と比べて扁平な形状で、側面観が台形を呈するものがやや目立ち、相対的に新相を呈す。77は立ち上がりがシャープで、焼き上がりが赤褐色を呈するなど、他の土器とやや異なっている。焼き上がりはすべて赤系である。また、76のように、緩く上方へ屈曲するものもある。

81は復元口径12.6cmの土師器皿で、口縁部はやや上方に拡張する。

82～85は瓦器椀である。83は薄手の体部で、口縁部付近は接合痕で極端に厚い。85はほぼ完形で、口縁部は上方に拡張する。83と同様、口縁部付近は厚い。

86～99はⅡ・Ⅲ層から出土したものであるが、詳細な層位等が不明なものである。86・87はヘソ皿、88～91は土師器小皿である。92は瓦質の小壺である。器壁は3～4mmと薄い。扁平で肩が張る玉葱形の体部に直立する口縁部が付く。体部外面には指ナデの痕跡が残る。ほぼ完形で、体部中位には打ち欠きの可能性がある小孔が穿たれる。

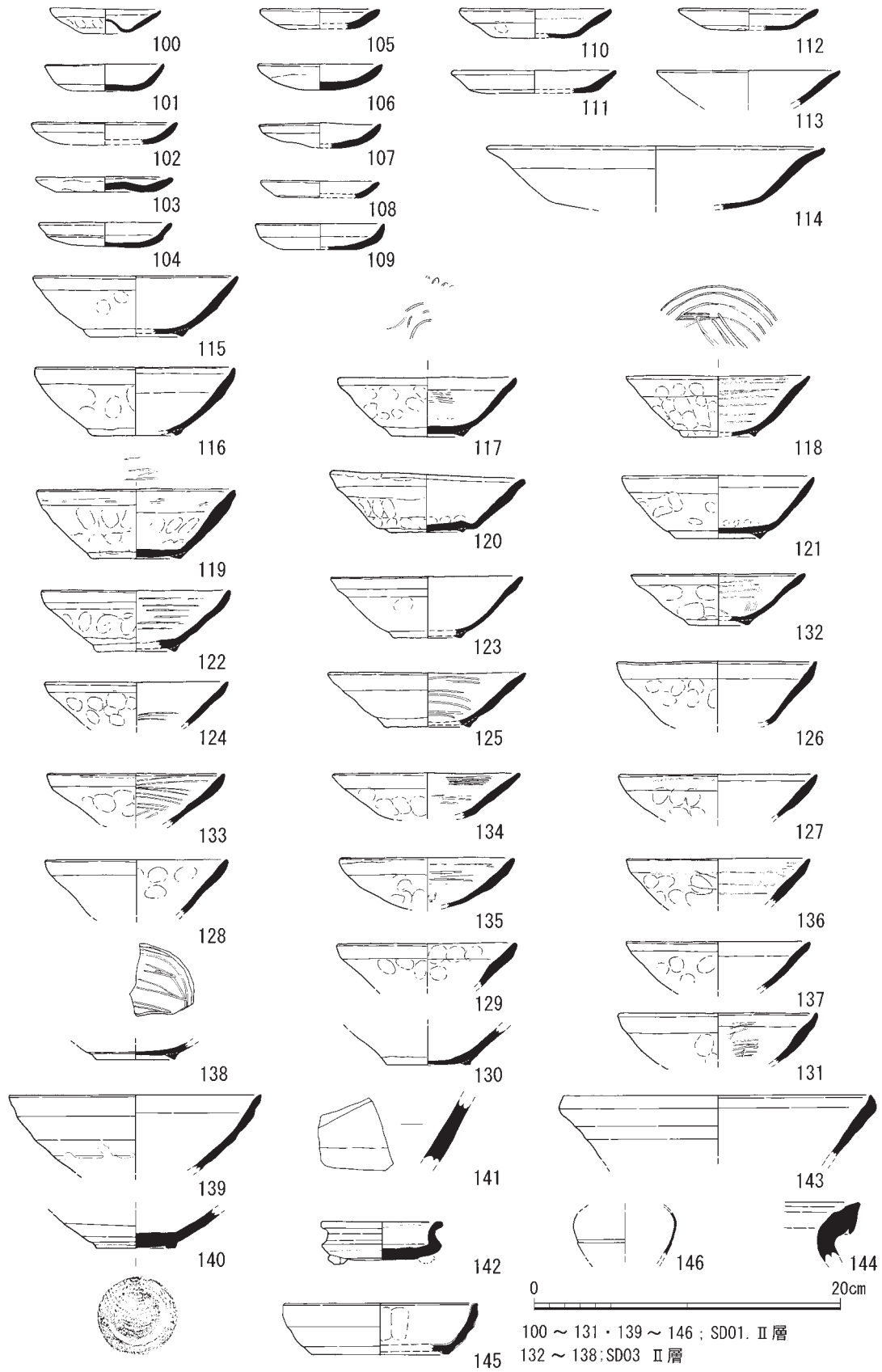
93～98は瓦器椀、99は瓦質羽釜である。瓦器椀はⅢ層出土のものと大きな違いはない。94は扁平な高台が横側に付く。95は体部下半が丸みを帯び、椀状となるものである。97は扁平な器形で調整が乏しい。

100～131・139～146は堀S D01Ⅱ層から出土した。Ⅱ層はS D01を人為的に埋め戻した層位であり、Ⅲ層出土土器に比べて、量的にも質的にも恵まれない。

110～114は土師器皿である。基本的な型式はⅢ層とほぼ共通する。104は口縁部に段が付くもので、15世紀代に下るものであろうか。110はやや深手の皿である。胎土は白色系。113は小片だが、湾状の器形で、口縁部はやや肥厚させる。114は小片だが、復元口径22cm、器高4.1cmの大形の土師器皿に復元できる。同様に15世紀代に下る資料であろう。

115～131は瓦器椀である。土師器皿と同様、Ⅲ層と基本的な様相はほぼ共通する。いずれも遺存状況に恵まれず、全形をうかがうことができるのは115～121など数点に過ぎない。115・116・118はいずれも破片だが、器形Aである。118は口縁端部を上方に拡張するもので、内面には細筋のミガキが認められる。117・119～121は器形Bである。119は内面に強いユビオサエが残る。側面のミガキは残るが、見込み部の暗文は消失している。120は唯一完形で出土しているもので、同様に内面に強いユビオサエの痕跡を持つ。ミガキは消失しており、外面の成形も極めて粗雑である。121は白色を呈する瓦器椀である。摩滅により調整は不明。123～130はいずれも破片資料である。129は極めて薄い体部から口縁部にかけて厚く肥厚する。





第45図 B・C・D地区第1面出土遺物(4)

139は灰釉平椀である。口縁部外面がややくびれ気味になる。外面に、施釉時に器胎をつかんだ指痕が残る。また、内外面とも被熱の痕跡が認められる。140は灰釉平椀の底部である。内面に灰釉を施し、外面は上半部に施釉する。高台には糸切り痕が残る。141は灰釉陶器の一部とみられる。内外面共に施釉される。器胎の厚さは1 cmと厚い。内外面共に調整は丁寧で、壺などの袋物ではなく、鉢などの器種と考えられる。142は灰釉香炉である。底部は糸切りで、団子状の小さい脚を付す、小形の製品である。全体的に器形は扁平気味である。古瀬戸後期Ⅱ～Ⅲ期か。

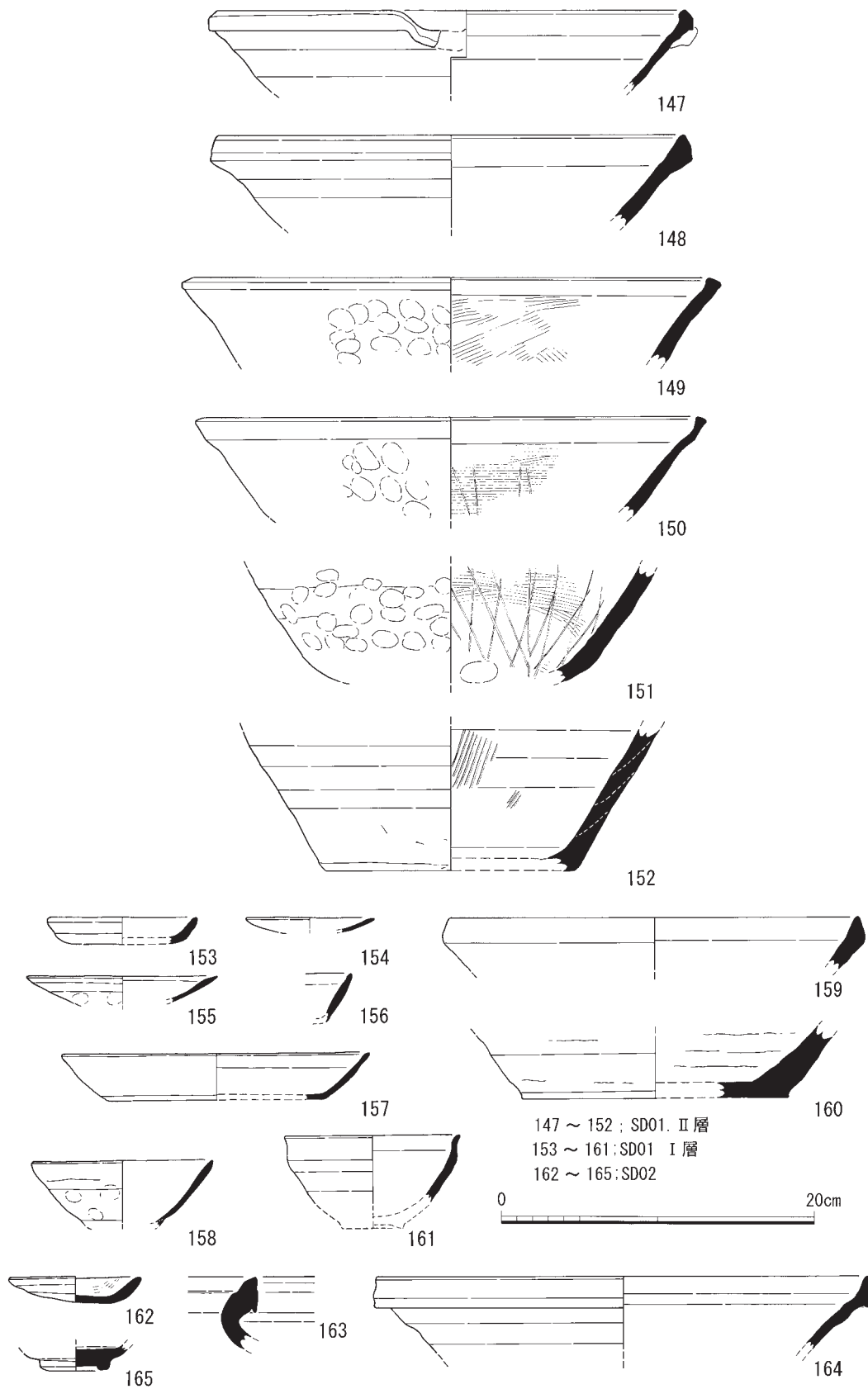
144は常滑系の甕である。口縁端部を下方に垂下させ、内面は浅く窪ませる。13世紀頃のものとみられる。143・147・148は東播系須恵器鉢である。143は復元口径20cmと、やや小形のものである。147は端部を玉縁状に肥厚させ、注ぎ口が取り付く。148は厚手で、口縁端部が肥厚する。

145は青磁盤か。体部と口縁部の接点はないが、同一個体と考えられるため、図上で復元した。外面体部中央付近に凸線を巡らし、高台は畳付きまで施釉する。平面形は円形とみられるが、見込みは多角形を呈するものと考えられる。146は陶器小壺の肩部片である。外面は錆化しているか、あるいは鉄釉を施釉するものか。胎土は精良で、焼成は堅緻である。器胎の厚さはほぼ1 mmで、かなり薄手である。肩部のやや下方に沈線が巡る。茶入として使用されたものと考えられる。

149～151は、瓦質の擂鉢である。いずれも破片で、全形をうかがうことはできない。149は口縁部であり、体部からほぼ屈曲せずに直線的に伸びる。内面にはハケメが認められるが、摺り目は確認できない。150は口縁部を緩い受け口状に作り出す。151は体部である。いずれも、ハケメの上に一本引きで細筋の摺り目が斜格子状に認められる。152は備前系の擂鉢の体部下半片である。櫛状工具で摺り目を施す。内面底部際には、使用によるものか、かなりの摩滅がみられる。

153～161は堀S D01 I層から出土した。I層は堀が埋め戻された後に堆積した層であり、出土遺物も少ない。I層出土遺物が示す時期には、S D01は水路としての機能も失っていたと考えられる。153は土師器小皿である。厚手で焼成は良好である。口縁端部には煤が付着しており、灯明皿の可能性もある。154・155は薄手の土師器小皿である。156・157はいずれも小片ながら、土師器の大皿と考える。156は白系胎土で、口縁下部が肥厚する。158は瓦器椀の小片、159は東播系須恵器鉢である。160は常滑系の甕の底部片である。内面に霜降り状に自然釉が付着する。161は天目椀である。外面は2次被熱を受けている。大窯期に下る製品の可能性もある。

堀S D02(第46・47図) 堀S D02は、屋敷地の西側を区画する堀である。上半が現在の水路に踏襲されていたことから残存状況に恵まれない。また、機能時の層からの出土遺物も極めて少なく、図化できた土器は162～165・180・198のみである。162は完形の土師器皿である。時計回りに1段ナデを施し、口縁部付近にナデ抜きの痕跡が認められる。163は常滑系の甕である。口縁端部を「N」字状に折り返す。肩の張った形状の甕である。13世紀頃の製品とみられる。164は東播系須恵器鉢である。口縁部は大きく上方に拡張している。165は青磁椀底部である。高台は削り出しの輪高台である。見込みは無文である。龍泉窯系青磁とみられるが、底部のみの残存であり、詳細は不明である。180は粗製の皿である。198は小片だが、土師質の火鉢であろうか。幅6 mm程の凸帯を1条貼り付け、その上部には、「×」状の文様を描く。平面円形の浅鉢形で



第46図 B・C・D地区第1面出土遺物(5)

あれば、14世紀末～15世紀あたりの製品と考えられる。

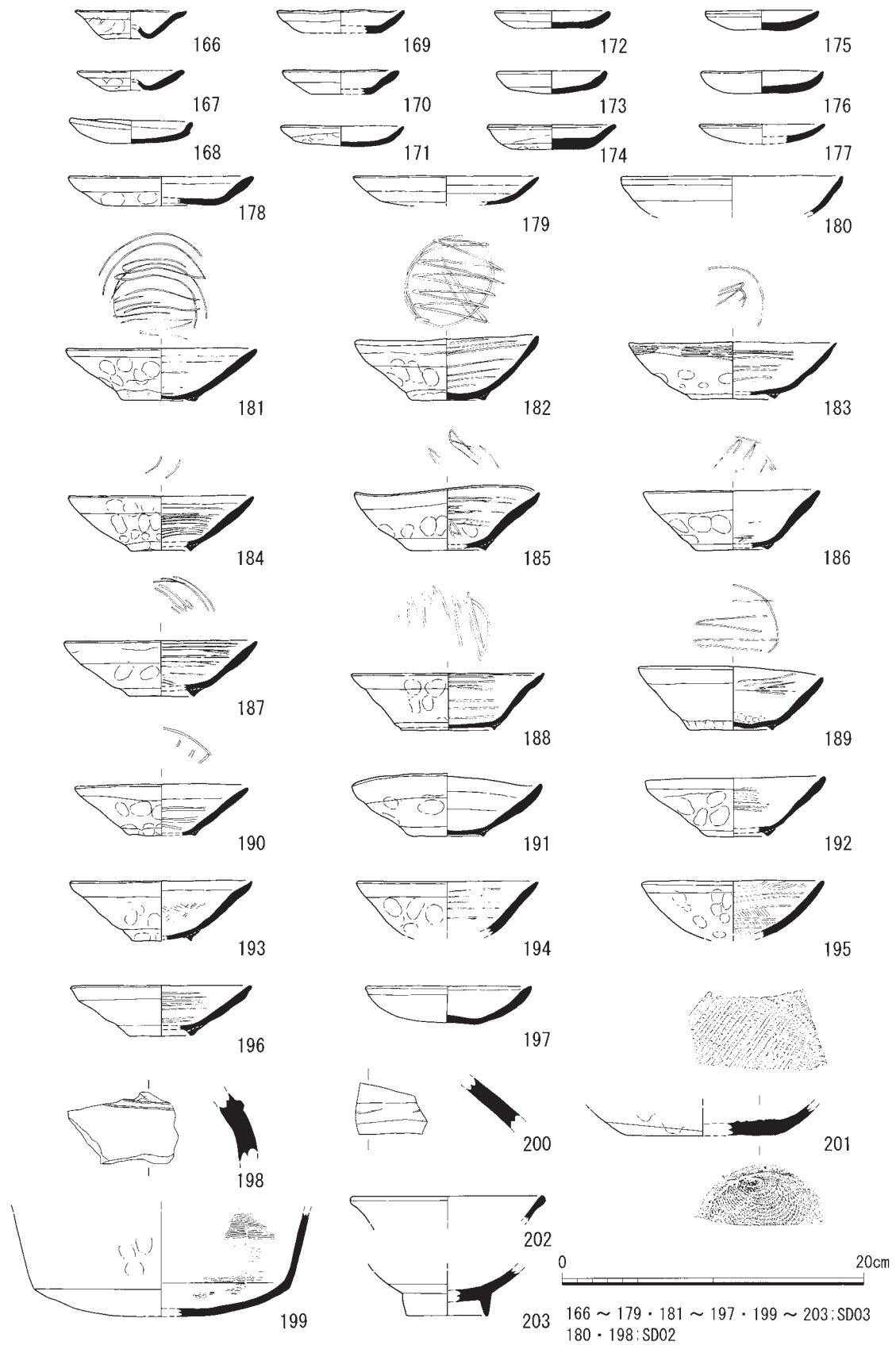
堀S D 03(第42・43～46・47) 堀S D 03は、数度にわたり砂礫の流入と除去の痕跡が認められ(Ⅲ層)、その上層に埋め戻し土(Ⅱ層)と自然堆積土(Ⅰ層)が堆積する。特に記載しないもの以外はⅢ層から出土したものであるが、Ⅲ層の中の細別層位ごとに取り上げることはできていない。したがって、一定の時間幅を見積もらなければならない資料群である。

28は4分の1程度の瓦器碗破片で、外面に粘土巻き上げ痕を顕著に残す。内面はハケメによって平滑に仕上げられる。44～47・61はⅢ層から出土した。46は体部内面にハケメの痕跡を顕著に残す。見込み部分にはやや密にジグザグ状の暗文が施される。47は扁平な底部に直線的な体部を持つタイプである。内面見込み部には顕著にユビ圧痕を残す。暗文は幅広の工具で「キ」字状を書いた後、幅狭工具でジグザグ状暗文が施されている。外面口縁部付近には強い回転ナデによる凹みがある。61は常滑系の甕の肩部片であり、肩の張った形状に復元できる。外面は被熱のため変色しており、内面に漆状の黒色を呈する付着物が残る。132～138は瓦器碗である。いずれも破片で、全形をうかがうことができないものはない。基本的にはⅢ層出土瓦器碗と共通するが、復元口径がやや小ぶりなものが含まれ、若干時期が下る可能性がある。166～179・197は土師器皿である。166・167はヘソ皿である。いずれも石英・長石類を含み、赤橙色の焼き上がりを呈する。168は平面形が楕円形でいびつな形状となる。見込み内面にはハケメが認められる。170は砂礫をほとんど含まない精良な胎土で、焼き上がりは灰白色を呈する。171は1段ナデで、口縁部にナデ抜き痕跡が認められる。172は完形の土師器皿である。173は2次被熱のためか、灰色を呈する。174は完形で、内面見込みに強いナデによる窪みを残す。土橋S X 429の東側から出土した。175は丸底気味になる、やや粗製の皿である。173～176はⅡ層出土である。178は胎土に有色鉱物を含み、焼き上がりは赤色を呈する。内面見込み部分にはナデによる窪みを残す。

181～196は瓦器碗である。181は、底部は完存するが口縁部の3分の2を欠く。内面には1次調整のハケメを残す。外面のユビ圧痕は目立たず、ナデで仕上げる。182は焼成が良好で、外面の炭素吸着が良好に残存する。圏線ミガキを施した後、暗文を施す前に口縁部から底部中心部に向かって一文字の暗文が施されている。183・184は不定方向のハケメを顕著に残し、その上から細筋の圏線ミガキを施す。184は、口縁部はほぼ完存するが、底部を欠く。187は復元口径12.8cmを測る。口縁部付近には粘土接合痕を残す。188は扁平な底部から外反気味に口縁部が取り付く。189は典型的な器形Bタイプで、内面見込み付近にユビ圧痕を顕著に残す。扁平な底部に外反気味に口縁部が取り付く。内面の1次調整ハケメは認められず、ナデによる成形と考える。191はゆがみが大きく、口径が11.4～12.5cmまで幅がある。完形だがミガキや暗文は認められず、内面全体に指ナデの痕跡が残る。192は高台径が4cmとやや小さい。外面口縁部付近に粘土接合痕を顕著に残す。

199は土師質の土鍋あるいは土釜の下半部であろう。腰部で鋭く屈曲するタイプで、内外面に煤・焦げを残す。胎土には径1mm程の砂粒を顕著に含む。14～15世紀あたりの製品と考えられる。

200は灰釉陶器の一部とみられる。内外面共に施釉され、器胎の厚さは1cmと厚い。内外面共



第47図 B・C・D地区第1面出土遺物(6)



に調整は丁寧で、外面にはキザミメが認められる。壺、あるいは瓶子などの袋物が復元の候補となろうか。201は灰釉卸目皿の底部である。見込みに櫛状工具で卸目を引く。底部外面には糸切り痕が残る。

202は白磁椀の口縁部片で、口縁端部は玉縁状になる。白磁椀Ⅳ類とみられ、12世紀のものと考えられる。203は白磁椀で、高く細めの高台をもつ。外面は高台際付近まで施釉する。体部は斜め上方に直線状に立ち上がるもので、口縁端部は面をもち、外側に嘴状に張り出すものとみられる。このような形状から、白磁椀Ⅴ-4a類と考えられる。12世紀中～後半頃のものである。

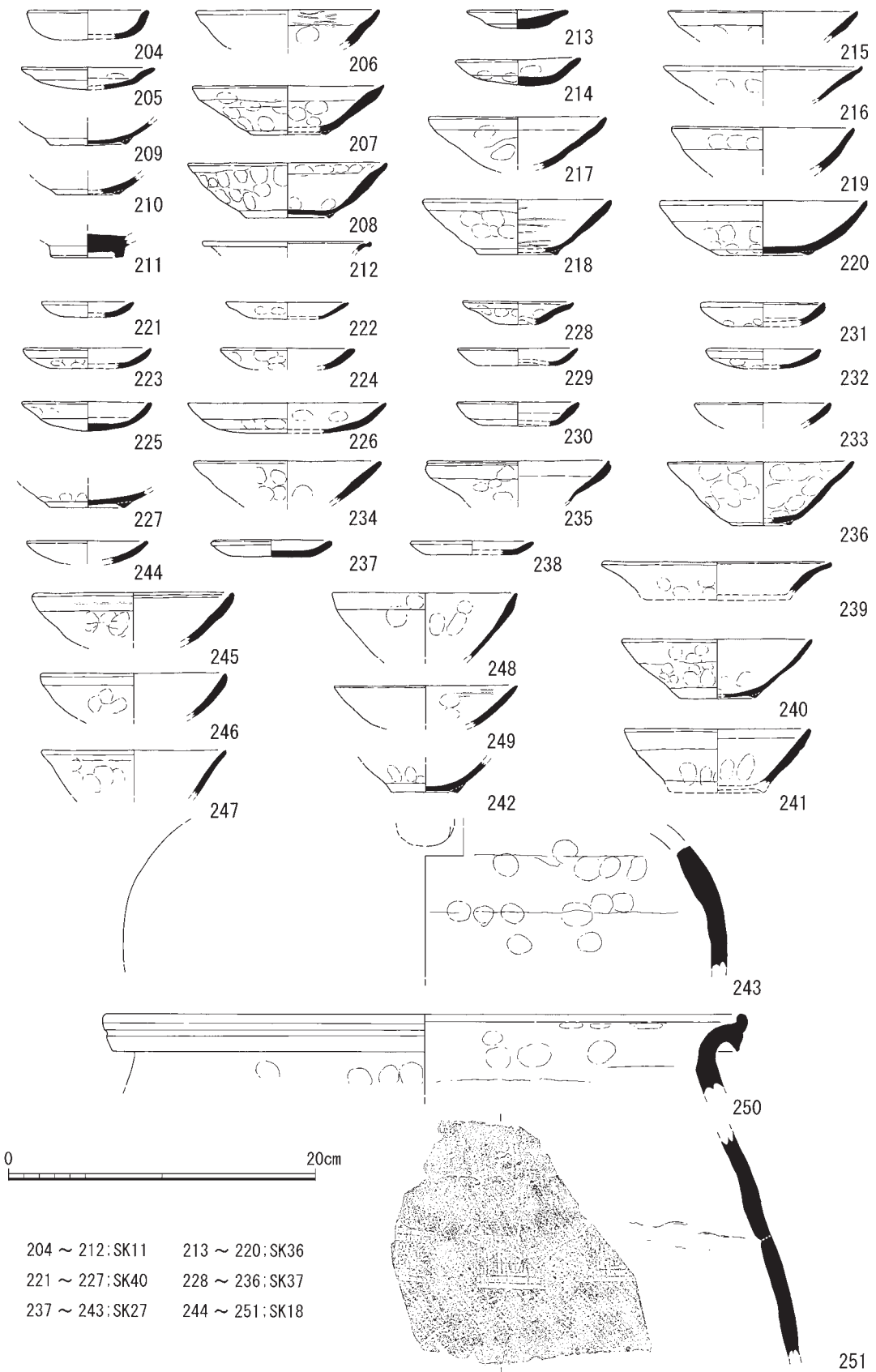
**集石土坑 S K 11** (第48図204～212) 集石土坑 S K 11では、検出面で残存率約50%の瓦器椀が伏せられた状態で出土した(208)以外はすべて小片である。205は口縁部を外反させる土師器皿である。内面見込み部はナデによる窪みが残る。胎土には微細な有色鉱物を多く含み、焼き上がりは赤橙色を呈する。208の瓦器椀は内外面とも摩滅が著しく、調整は不明。口縁部はやや上方に拡張する。瓦器椀は209・210など破片が出土しているが、全形をうかがうことができない。211は青磁椀の底部である。高台は削り出しの輪高台である。見込みは無文である。龍泉窯系青磁とみられるが、底部のみの残存であり、詳細は不明。212は口縁部をつまみ上げる施釉陶器である。17世紀の肥前陶器とみられる。S K 11は埋没時期は中世後半だが、17世紀の遺物の小片が認められることから、少なくとも近世初頭までは礫が露出状態であったと考えられる。

**土坑 S K 36** (第48図213～220) 土坑 S K 36は、建物 S B 431の西端で確認した長方形の土坑である。213～216は土師器皿である。213は外面に段を持つ、厚手の皿である。214は手づくねのいびつな形の皿で、赤褐色の焼き上がりを呈する。215・216はいずれも灰白色で精良な胎土を持つ。217～220は瓦器椀である。219は厚手で、炭素の吸着がほとんど認められないが、調整が瓦器椀と共通しており、瓦器とした。220は扁平な形状の瓦器椀である。摩滅が著しく、ミガキやナデは確認できない。

**土坑 S K 40** (第48図221～227) 土坑 S K 40は、掘立柱建物 S B 431の北西で確認された円形の土坑である。上面で残りのよい土師器皿2点(225・226)と瓦器椀底部(227)が出土したほか、掘削中に土師器皿の小片が出土した。225は完形の土師器皿である。226は白系胎土の土師器大皿である。227は底部のみ残存している瓦器椀である。

**土坑 S K 37** (第48図228～236) 土坑 S K 37は、建物 S B 431の西端で確認した長方形の土坑である。出土遺物は細片が多く、完形になるものはない。228～233は土師器皿である。228は口縁部の破片だが、ヘソ皿であろう。器壁が厚く、口縁部のつまみあげは顕著ではない。胎土には砂粒を含み、赤褐色を呈する。230は灰白色の焼き上がりだが、焼成が甘く、外面・断面に黒斑部がある。234～236は瓦器椀である。235は体部が器壁1mm程と極めて薄く、口縁部は肥厚させる。口縁端部外面には沈線が巡る。236は扁平な底部を持つ。ミガキ・暗文は認められない。

**土坑 S K 27** (第48図237～243) 土坑 S K 27は、掘立柱建物 S B 431の北側で検出した楕円形の土坑である。237～239は土師器皿である。239は精良な白系胎土で、口縁端部はナデで仕上げる。小片だが、大皿とみられる。240～242は瓦器椀である。243は瓦質の風炉である。文様や凸帯は



第48図 B・C・D地区第1面出土遺物(7)

認められない。孔は一部残るのみで形状は不明である。

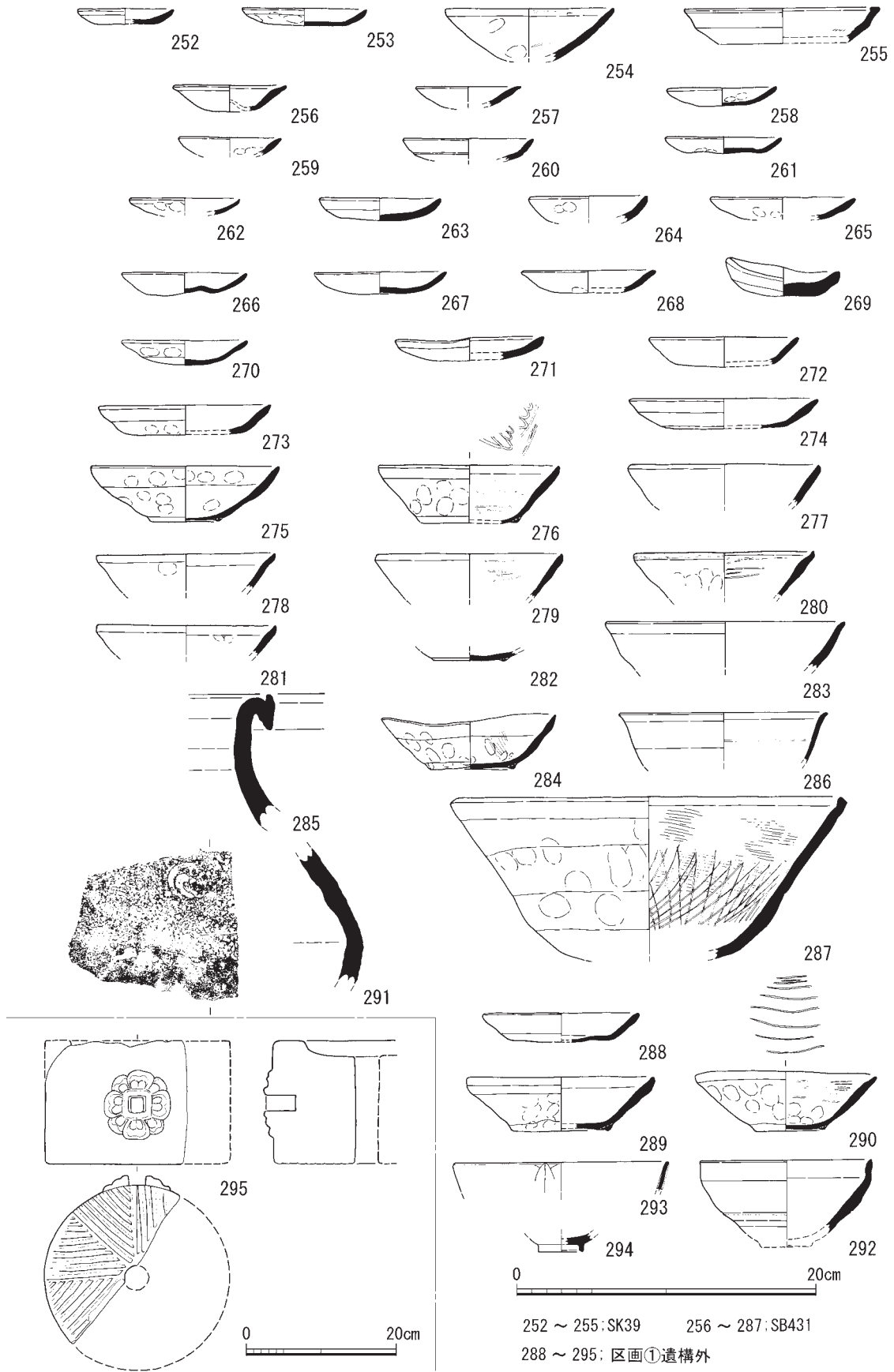
土坑 S K 18 (第48図244～251) 土坑 S K 18は、掘立柱建物 S B 431の北東部で検出した方形の土坑である。土師器皿・瓦器碗の細片のほか、須恵器の大甕が出土した。250・251は須恵器系甕である。径3mm程の黑色粒を多く含む特徴的な胎土で、同一個体の可能性が高いが、接点はない。口縁部は上下に拡張し、1条の沈線をめぐらせる。体部はタタキを粗いハケメで消しているが、一部、ハケメの後に格子目タタキを規則的に施している。

土坑 S K 39 (第49図252～255) 土坑 S K 39は、掘立柱建物 S B 431の北西部で検出した円形の土坑である。土師器・瓦器・陶磁器類が出土しているが、いずれも小片である。253は残存率が50%ほどの土師器皿である。255は灰釉卸目皿の口縁部片である。

掘立柱建物 S B 431 (第49図256～287) 掘立柱建物 S B 431を構成する柱穴などから出土した。256はやや厚手のヘソ皿である。白系胎土に微細な有色鉱物を多く含む。S P 62の抜き取りの際の遺物と考えられる。260は小片ながら内外面に煤が付着しており、灯明皿と考えられる。261・263はS P 26から出土した。263は完形の土師器皿で、柱抜き取り痕から出土した。266・267はS P 41の上面で出土したほぼ完形の土師器皿である。266はやや深手で手づくねの土師器皿である。269もほぼ完形の土師器皿であり、赤褐色の焼き上がりを呈する。厚手でいびつな形状である。S P 339から出土した。274は白灰色の焼き上がりを呈する大皿である。S P 45から出土した。285は口縁端部を「N」字状に折り返し、肩の張った形状の常滑系の甕である。13世紀代の製品とみられる。S P 233から出土した。286は青磁碗の口縁部片である。口縁端部は外反する。外面は無文であるが、内面口縁端部やや下方に細い圏線を施す。龍泉窯系青磁碗Ⅳ類であり、14世紀代のものとみられる。S P 25から出土した。284は完形の瓦器碗である。内面見込み部にはユビ圧痕、体部内面にはハケメがみられる、きわめて粗雑な作りの瓦器碗である。S P 279から出土した。

区画①遺構外 (第49図288～295) 288～294は区画①から出土した遺構に伴わない土器である。290は一部口縁部を欠くがほぼ完形の瓦器碗である。調査区北東隅で排水溝掘削中に出土した。見込みの暗文はジグザグではなく、1本ずつ並行に引く。291は常滑系の甕の肩部片である。三つ巴文を押印する。緑灰色の灰釉が掛かる。292は天目碗である。胎土は精良で灰色味を帯びる。詳細な産地は不明だが、中国製とみられる。293は青磁碗の口縁部で、外面に鎬蓮弁文を刻出する。龍泉窯系の青磁で、青磁碗Ⅱ-b類とみられる。13世紀前半頃のものである。294は白磁小碗とみられる。小片のため、詳細は不明である。

295は茶白の上白である。区画①の北端攪乱土中から出土した。全体の三分の一程度の残存率だが、直径は約25cm、白面8分画に復元できる。挽木孔は方形で、その周囲の台座には蓮弁文が陽刻される。石材は閃緑岩である。このような特徴をもつ茶白は13世紀末に出現するとされ、居館や城館、寺院からの出土が目立つという<sup>(注34)</sup>。攪乱中からの出土のため、居館の時期に伴うかどうかは明らかではないが、注目すべき遺物である。



第49図 B・C・D地区第1面出土遺物(8)

**竪穴状遺構 S X 303** (第50図296～308) 296～308は竪穴状遺構 S X 303から出土した。296～300は土師器皿である。296はやや白っぽい焼き上がりで、側面観は台形状となる。300は大形の皿で、端部にはわずかに煤が付着している。303～305は瓦器椀である。303は丸みのある体部で、内面にはハケメの痕跡を残す。306は灰釉の削り出し高台で、平椀底部と考える。埋土上層から出土した。307は東播系須恵器鉢である。308は泥岩あるいは頁岩製の砥石である。両面とも使い込まれており、上面には細かい擦痕が多く認められる。側面には成形の際についたと考えられる細かい凹凸状の痕跡を顕著に残す。

**掘立柱建物 S B 433** (第50図309～320・322～325・327～331) 掘立柱建物 S B 433を構成するピットから出土した。313・314は S X 30の上面に置かれていた土師器皿である。完形の313は粘土の巻き上げ痕跡を外面に残す。315は S P 310の上面から出土した完形の土師器皿である。317は口縁部外面に強いナデを残す、完形の土師器皿である。S P 191から出土した。319も完形に復元できる土師器皿で、焼き上がりは赤橙色を呈する。S P 300から出土した。320は S P 123の柱痕から出土した、ほぼ完形の土師器皿である。324は S P 131から出土した瓦器椀である。見込みには強いユビオサエが認められる。

**溝 S D 70** (第50図332～334) 溝 S D 70で図化できたのは、土師器皿のみである。332はヘソ皿の小片である。333は金雲母を多量に含む。

**排水溝 S D 353** (第50図335～338) 335～338は排水溝 S D 353から出土した。335・336は土師器皿である。337は瓦質小壺である。瓦質小壺は堀 S D 01 II層からも、ほぼ同じ法量のものが出土している。338は瓦器椀である。335・336・338は S D 386との合流点付近から出土した。

**区画②各遺構** (第50図321・326・339) 321は S P 159から出土した土師器皿である。326は S P 22から出土した瓦器椀である。339は S K 405から出土した瓦質土器播鉢である。丸みのある体部で、口縁部はやや上方に拡張する。摺り目は一本引きで、格子状に施されている。

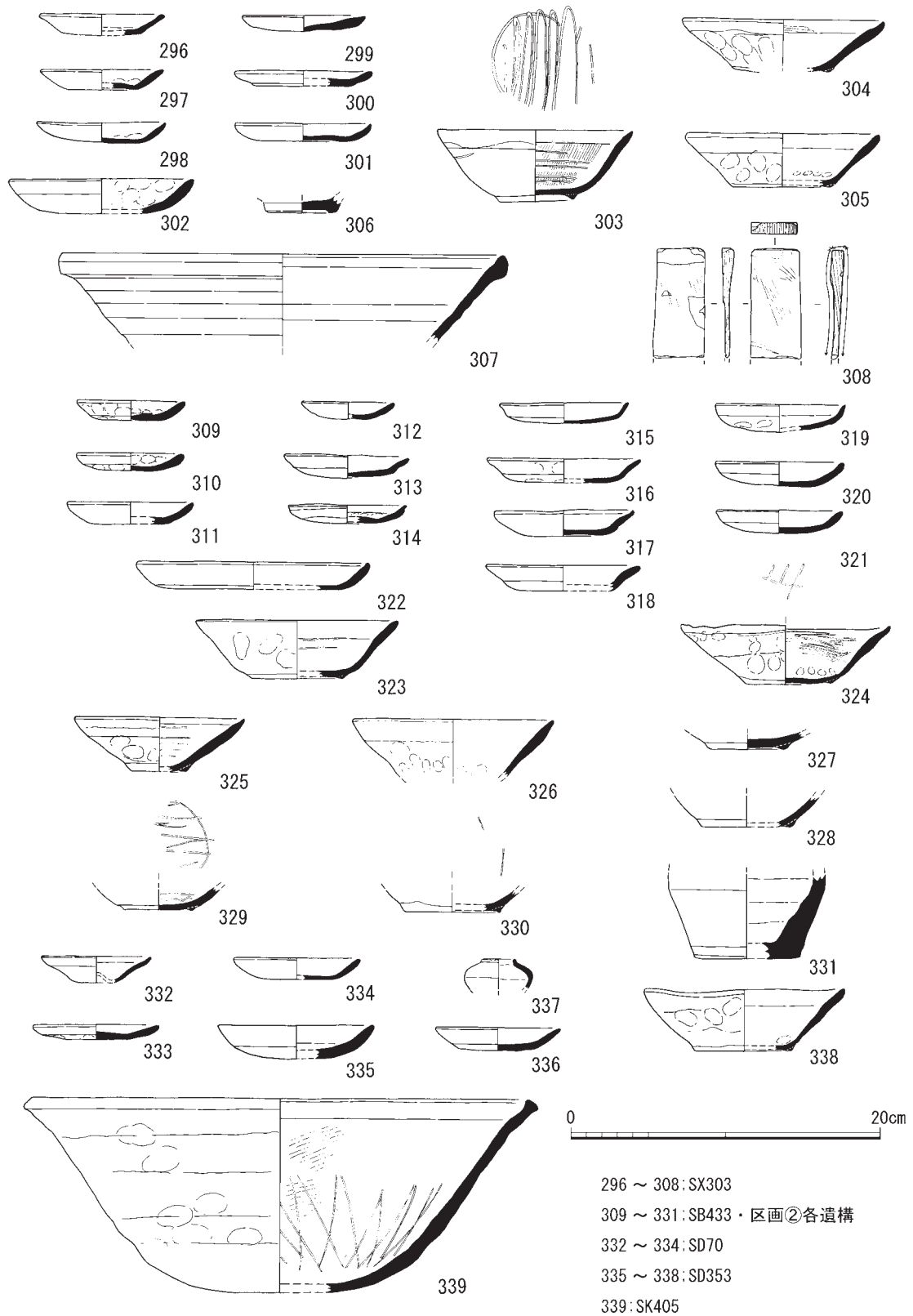
**区画②遺構外** (第51図340～377) 包含層出土の遺物で、残りの良いもの、特徴的なものを中心に図化した。342・343は完形の土師器皿で、断ち割り中に出土した。本来は遺構に伴っていたと考えられる。13世紀代のものか。345は、側面観が逆台形を呈する薄手の土師器皿で、15世紀代のものと考えられる。

348～354は瓦器椀である。350以外は全形がわかるものはないが、形式的には堀 S D 01と大差なく、同時期のものであろう。350は丸みのある体部で、口縁部はつまみ上げるように整形する。底部は出尻気味となる。352は薄手のもの。口縁部もシャープであり、あるいは搬入品であろうか。

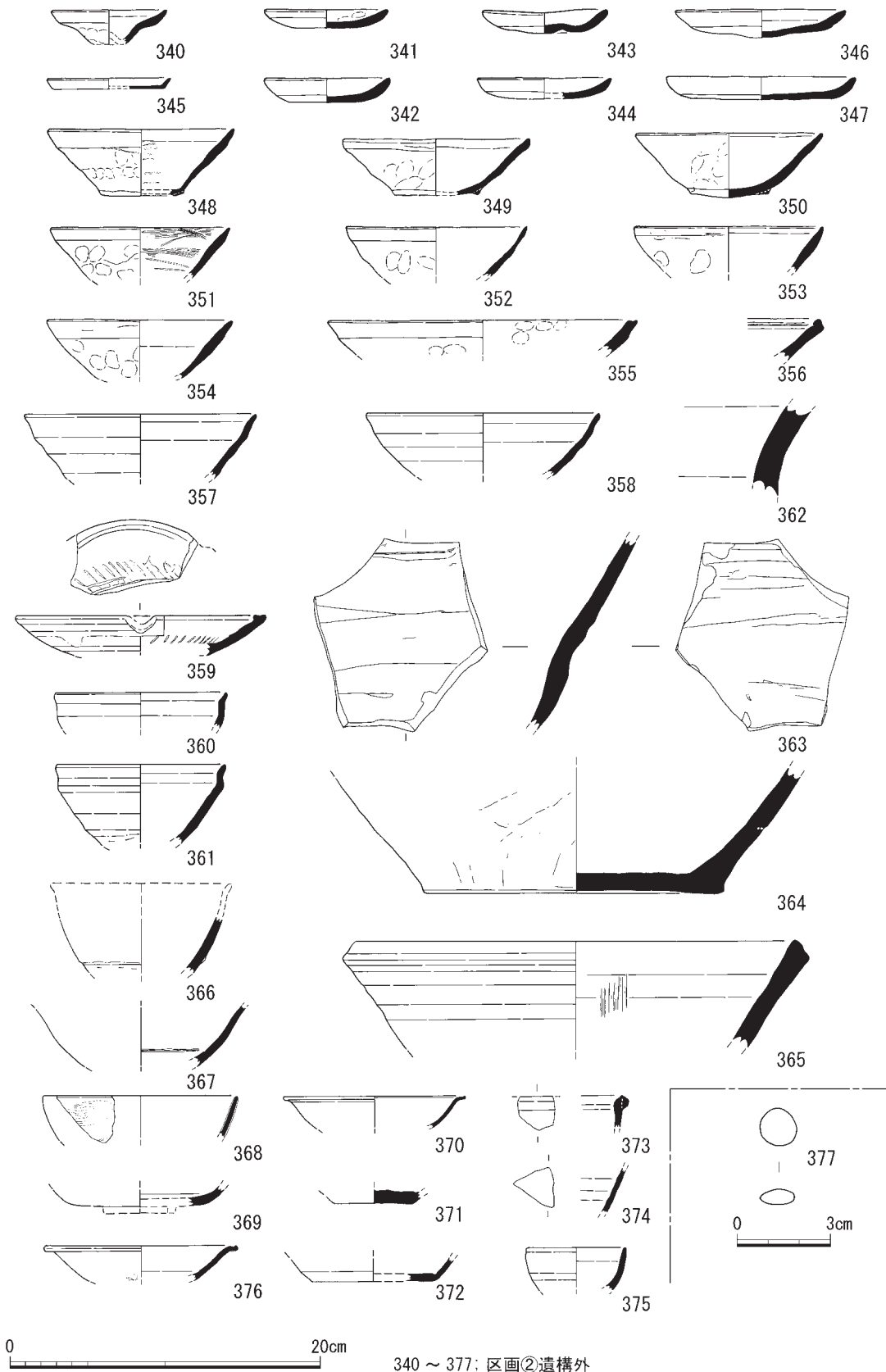
355・356は瓦質土器の口縁部である。355はやや上方に拡張する口縁部で、端部は沈線上に窪む。356は内側に折り返す口縁部で、鍋あるいは釜か。

357～364・375・376は、国産陶器類である。357・358は瀬戸平椀である。外反する口縁部で、15世紀代に下るものか。359は瀬戸卸目皿である。口縁部の注口部が一部に残る。360・361は瀬戸天目椀である。361は重機掘削中に出土したもので、17世紀代に下る可能性がある。362～364は常滑系大甕の破片である。367～374は輸入陶磁器類である。367は青磁椀で、口縁端部は外反





第50図 B・C・D地区第1面出土遺物(9)



第51図 B・C・D地区第1面出土遺物(10)

するものとみられる。外面は無文、内面見込み付近に細い2条の圈線を巡らす。龍泉窯系で、青磁碗Ⅳ類と考えられる。368は青磁碗で、龍泉窯系の製品である。外面口縁部に雷文を刻む。青磁蓮弁文碗B群に属するもので、15世紀前半頃のものと考えられる。369は青磁皿で、体部が中位で屈曲して斜め上方に直線的に立ち上がる。小片であり窯の判断は困難であるが、いずれにしても皿Ⅰ類である。12世紀中～後半頃のものである。370は白磁皿で、口縁端部が外反する。白磁皿C群に分類されるもので、16世紀頃のものと考えられる。371は白磁皿の底部で、平らな底部から口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がるもので、口縁端部は口禿げになるものとみられる。内外面とも施釉されており、白磁皿Ⅸ-2類と考えられる。372は白磁皿で、371と同様の形状のものともみられる。外面底部から口縁部にかけて無釉であり、白磁皿Ⅸ-2類とみられる。13世紀後半～14世紀前半頃のものである。373は小片だが緑釉陶器盤の口縁部とみられる。口縁端部は外側に巻き込むように成形する。丹波以北では初例とみられる。14世紀代のものか。374は焼締の陶器片で、小壺もしくは筒形の容器の一部とみられる。胎土は精良で、赤味を帯びる。焼成は堅緻である。器胎の厚さは2～3mmと薄手である。宜興窯系の製品に似る。375は灰釉小碗で、東海系の製品と考えられる。外面口縁端部に沈線が巡り、細い玉縁状になる。376は肥前陶器(唐津)皿で、口縁端部が「て」の字状に屈曲する。見込みには円刻がある。肥前陶器Ⅱ期に属するもので、17世紀前半期の製品である。

377は黒色の基石である。扁平でややいびつな楕円形状を呈する。粘板岩製で、外面はよく磨き込まれている。(桐井理揮・引原茂治)

### (3)木製品ほか

木製品はすべて堀S D01・02・03から出土している。製品は少なく、割材や細い枝などが大多数を占める。今回は製品と考えられるものはすべてピックアップして図化した。枝葉や先端のみを加工したものは特徴的なものに限った。

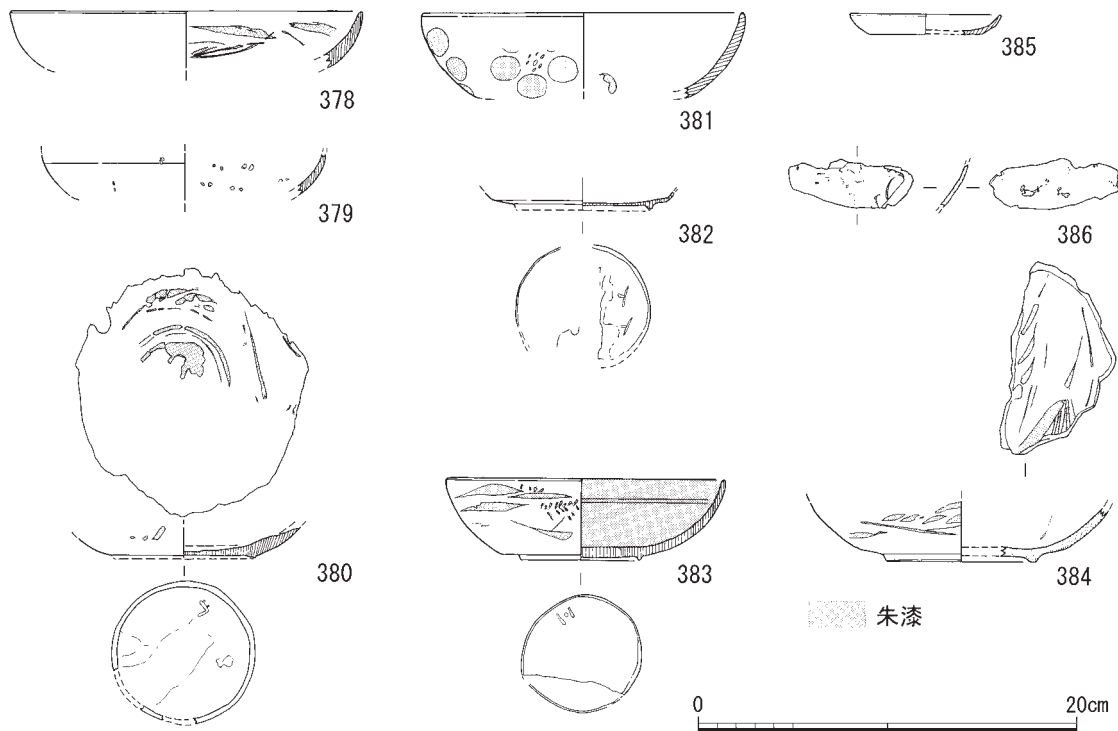
**漆器碗**(第52図378～386) 378～386は漆器である。漆器は、すべて居館を囲む堀S D01・02・03から出土した。ほとんどが、黒漆塗りもしくは炭粉下地の上に透明漆を施した器表に、朱漆で文様を描く、漆絵漆器である。

378は、漆絵漆器碗の口縁部である。内面に朱漆で草花文を描く。漆絵の残存状況は良好である。外面は無文である。復原口径18.4cmを測るが、材質上、土圧等での変形も考えられ、それよりも小さい可能性がある。380は、漆絵漆器碗の底部である。見込みに朱漆で草花文を輪状に描く。外面にも絵付けする。底部外面には、低い高台を彫出する。高台内に「二」状の刻文がある。刻文は、木地に施されており、その上に漆が塗布される。高台径は7.6cmを測る。378と同一個体の可能性がある。樹種はいずれもトチノキである。379は、漆絵漆器碗の体部の一部とみられる。内外面に2個一組の点文を朱漆で散らし描きする。点文は、内面のほうが密度が高い。樹種はハンノキ属。ハンノキ属が漆器の用材として選択されるのは珍しいが、S D01の花粉分析ではハンノキ属が優位に検出されており、周辺で製作された可能性も考えられる。381は、漆絵漆器碗で

ある。外面に梅鉢状の梅花文を朱漆で描く。漆絵の残存状況は良好である。口径は16.6cmを測る。樹種はカツラである。382は、漆器椀底部である。内面に朱漆を施す。漆絵付の有無は不明である。高台内に「ト」字状の刻文が2個ある。刻文は木地に施されており、その上に漆が塗布される。高台径7.0cmを測る。樹種はケヤキ。383は、漆絵漆器椀である。外面に萩もしくは藤袴のような秋草文を朱漆で描く。内面は朱漆を塗布する。底部外面には、低い高台を彫出する。高台内に「三」もしくは「川」字状の刻文がある。380・382と同様に、刻文は木地に施されており、その上に漆が塗布される。なお、内面口縁端部やや下方に沈線状の段があり、蓋受けとも考えられる。蓋物の可能性がある。口径14.5cm、器高4.3cm、高台径6.3cmを測る。樹種はトチノキ。384は、漆絵漆器椀の底部である。内外面に草花文を朱漆で描く。底部には、やや太めの高台を彫出する。復元高台径は7.8cmを測る。樹種はトチノキ。385は、漆器皿である。器面が剥離しており、下地の黒漆もしくは炭粉下地が残るのみである。漆絵の有無は不明である。外面底部は平底である。口径8.0cm・器高1.1cm・底部径6.0cmを測る。樹種はサクラ属である。386は、漆絵漆器椀の一部とみられる。内外面に花文を朱漆で描く。木胎がなく、樹種は不明である。 (引原茂治)

**漆器椀の塗膜分析** 今回出土した漆器椀に関して、断面観察及び蛍光X線分析による塗膜分析を行った。ここではその概要のみを記し、分析の詳細は第6章を参照していただきたい。

断面観察の結果、本遺跡では386を除き漆器の下地層は炭粉下地であった。炭粉を利用する場合に用いる下地結合剤には、漆液を利用する炭粉漆下地と、柿渋を利用する炭粉渋下地が主流である。炭粉に漆液を混ぜる炭粉漆下地は縄文時代から用いられており、平安時代中頃まで主流と



第52図 B・C・D地区第1面出土遺物(11)

される技法である。一方、炭粉渋下地は、平安時代後期から工程を大幅に省略し、安価で簡便な漆器を製作する中で、登場したとされる<sup>(注35)</sup>。本遺跡より出土した漆器は、386を除きいずれの下地にも炭粉の空隙に漆が観察されず、下地の下地結合剤は漆液ではなかったことから、これらの漆器の下地塗りは柿渋を利用した炭粉渋下地で行われたと判断される。

下地層の上には、漆層が1層ないし2層観察された。これらの漆層が、多くの試料では下部で炭粉粒子が混入しており、下地塗りの仕上げに塗られた透き漆であると考えられる。また、漆層の下部は平坦では無いのに対して、上部は平坦になっていることから、下地塗りの次に塗布した漆を乾かした段階で、表面の凹凸を緩やかにするために表面を削ったり研磨したりすることで、器面を整えたと考えられる。

赤色の表現は全て赤色漆層で赤色鉱物粒子が観察され、その径が1 μm以下であること、光学顕微鏡下で赤色に観察されること、水銀(Hg)と硫黄(S)が検出されることから、水銀朱に展色剤として漆液を混ぜた朱漆を利用している。黒色の表現は漆製作の中で3種類あり、漆そのものの色合いで黒色漆とするものの他に、炭粉を混ぜた黒色漆、鉄粉を混ぜ酸化させることで黒色にし、布で漉して鉄粉を回収した黒色漆があり、炭粉や鉄粉を添加することで漆黒になるとされている。全ての試料の木胎の蛍光X線分析を行うことができなかったが、漆器碗の木胎と黒色部の鉄(Fe)に大きな差は無く、また黒色を示す漆器の漆層は粒子の無い漆であったため、漆そのものの色合いで黒色を表現したものであると考えられる。

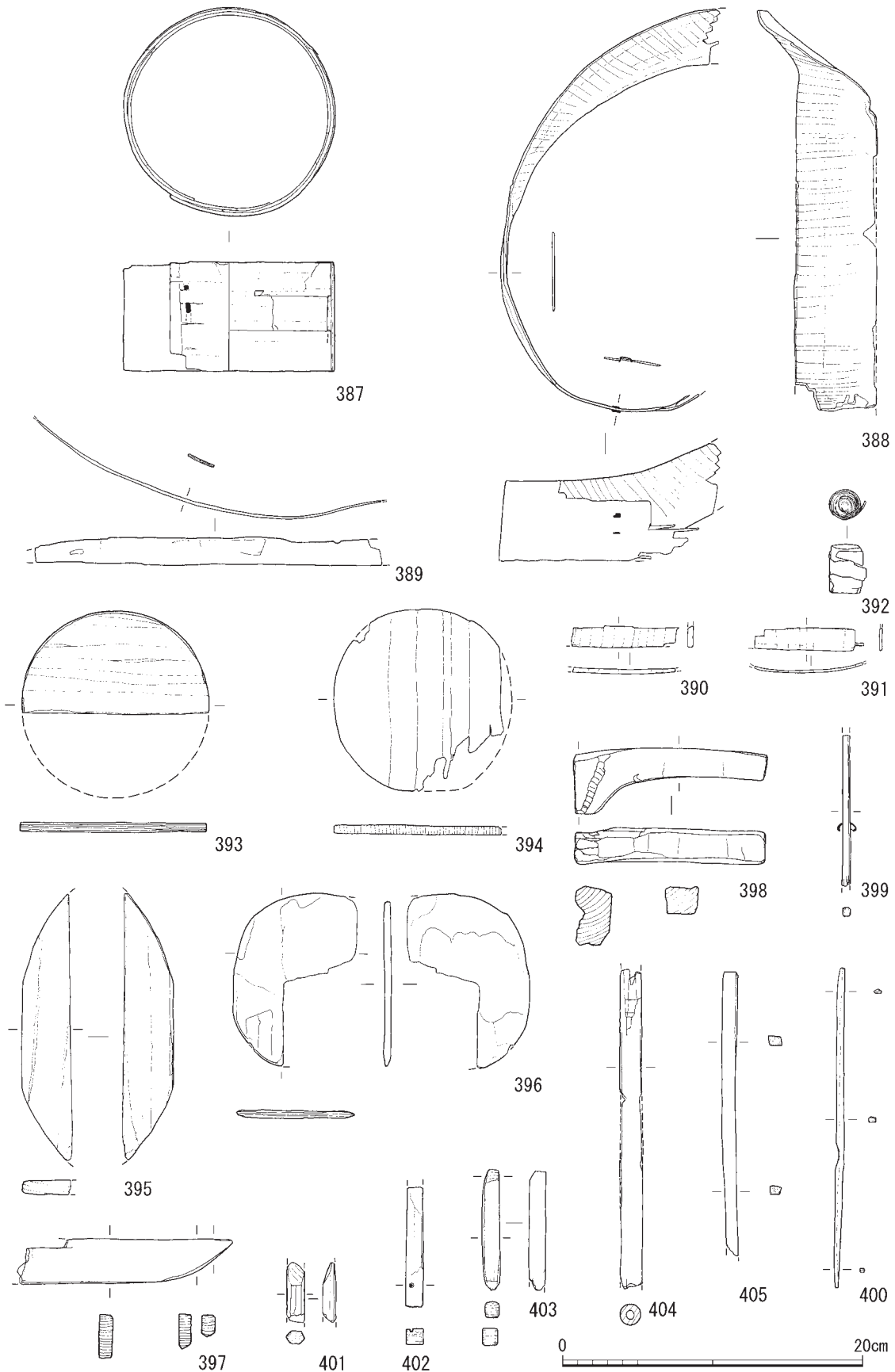
386の下地層は植物質を砕いたものに漆液を混ぜたものと考えられる。また、下地の下には繊維状の組織があるように見える。一定の構造をしている場合は、木胎に漆で湿らせた布を巻く布巻によって製品を強固にしたことが考えられるが、劣化が著しく観察に至らなかった。蛍光X線分析でわずかだがチタン(Ti)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、ジルコニウム(Zr)などが検出された。これは漆器碗の状態が悪く付着した泥や砂を完全に除去することが難しかったため、土壌のデータが反映された可能性がある。一方で他の漆製品と異なり、黒色では無く茶色であり、また色には見えないが模様が描かれていた痕跡が観察されたため、模様を利用された顔料などの有機物が検出された可能性もある。

以上のことから、本遺跡の漆器は木胎を製作したのち、炭粉に漆液を混ぜた炭粉漆下地で下地塗りをを行い、透き漆(漆層Ⅰ)を1層塗布したのち研磨して表面の凹凸を整え、全体に漆(漆層Ⅱ)を塗布して仕上げている。なお、この段階で漆器の黒色は漆そのものの色で表現されている。なお、黒色の漆器に水銀朱に漆を混ぜた朱漆(赤色漆層)で模様もしくは全体に赤色を施している。なお、386に関しては工法が異なり、植物質を砕いて漆を混ぜた下地を利用している。

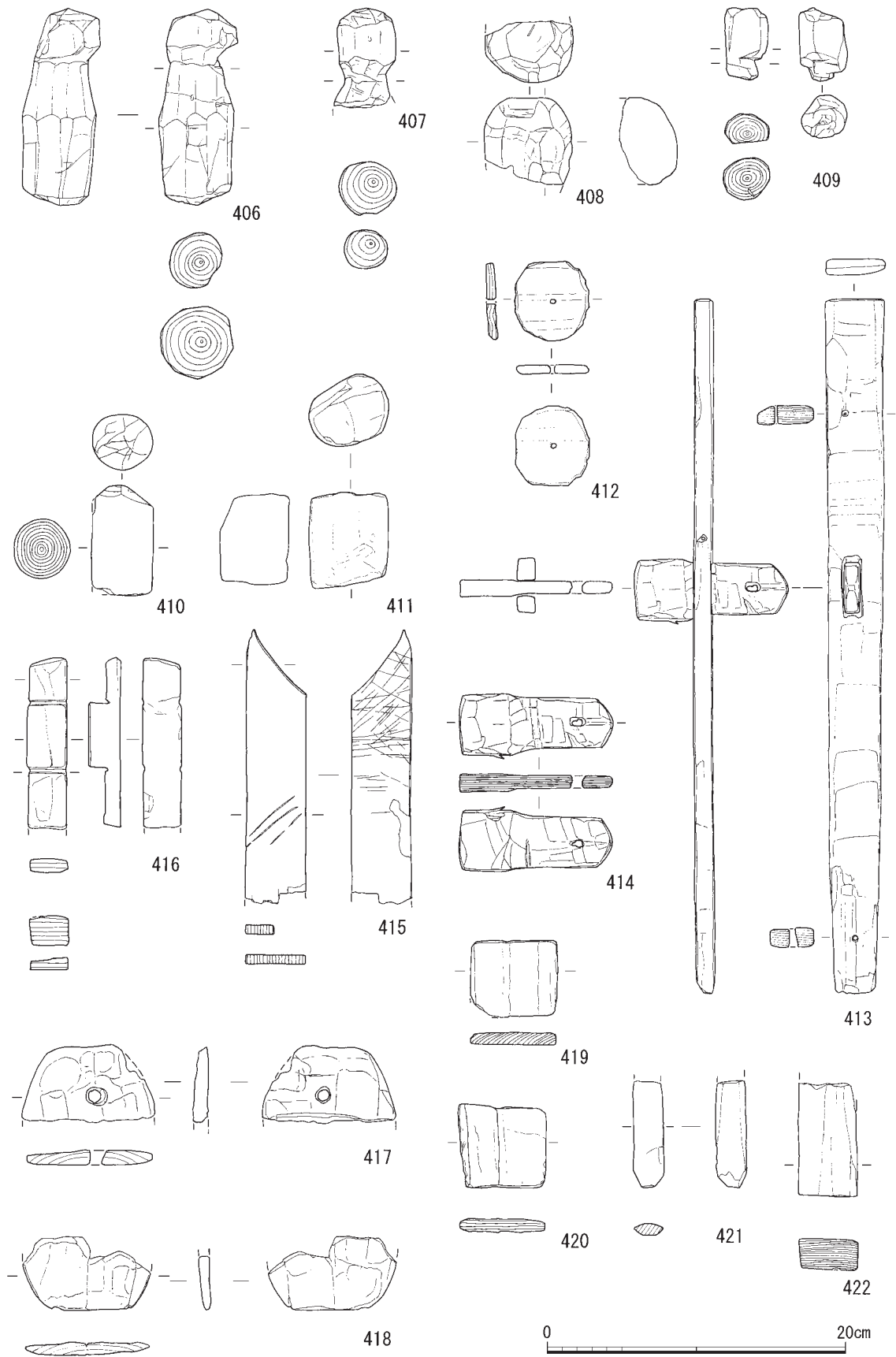
(文化財科学研究センター報告を改変)

**容器・食器類(第53図)** 387~396は曲物である。法量がわかるものは少ないが、387・393・394・396は直径12cm台であり、小形のものが多い。387は側板が完存しているもので、S D 03の溝底から出土した。底板は欠損する。側板内面のケビキは縦方向である。388は綴じが外れた側板で、縦方向のケビキが認められる。390・391も側板の破片で、391には一部に綴じ部





第53図 B・C・D地区第1面出土遺物(12)



第54図 B・C・D地区第1面出土遺物(13)

が残る。392は、薄板あるいは樹皮が巻かれたものである。何らかの部材の一部、あるいは曲物の可能性がある。

393～396は底板・蓋板である。396は側板と結合させるための小孔が認められるため、底板として利用されたことがわかる。木取りは、394が板目材を使用するほかは柾目材を加工したものである。

397は欠損が大きく本来の形がわからないが、先端の弧状になった部分は角が落とされており、模造品、あるいは曲物などの可能性も考えられる。398はアーチ状に湾曲する木製品で用途は不明である。箱などの把手であろうか。399は断面方形を呈する棒状の部材で、中央部に樹皮が装填される。曲物などの部材の可能性はあるが、用途は明らかではない。

400は箸である。断面は、先端部は円形だが、中央部は扁平で蒲鉾状を呈する。残存長約21.3cmを測る。樹種は、まっすぐで耐水性に優れた樹種であるアスナロが利用されている。405も、やや太いが箸の可能性はある。

424は編籠である。S D03の最下層から出土した。欠損が大きく、詳細は不明である。材はタケ亜科である。

401～404は用途不明の棒状の材である。402は断面がほぼ正方形を呈し、下部に径1.5mm程の小孔が穿たれる。401・403は扁平な材である。404はタケ科で、中央が管状となる棒材である。

**生産用具か(第54図)** 406～409は径3～6cm程の材に、くびれを作り出したいわゆる有頭棒である。唯一完形で出土したのは406であり、芯持丸木の側面を加工し、そこにくびれを削り出すことによって円形に近い頭部を作り出す。材はマツ属複維管束亜属である。形状はいわゆるツチノコに似るが、用途は不明である。410・411は円柱状の木製品である。410の筒部は面取りされているのに対して、411は芯持材の外表面を平滑に加工したものである。頭部の加工はなく、栓などの用途が考えられる。

412は中央に孔を持つ円盤状木製品である。木製の紡錘車であろうか。樹種はスギである。

413と414は組み合ったまま、土橋S X429のすぐ東側、S D03のⅢ層から出土した。413は先端に小孔をもち、ややパースがある部材である。414は両端に小孔をもち、中央には貫穴をもつ板材である。出土時には中央孔に413が装填されており、太くなっている部分が「かえし」となり組み合うようになっている。用途は不明だが、413の孔に紐を通し、吊り下げるような使用方法が想定しうる。材はヒノキである。415も用途不明の板材である。片側には擦痕が多く認められることから、紡織関係、あるいはまな板などの再加工品であろうか。

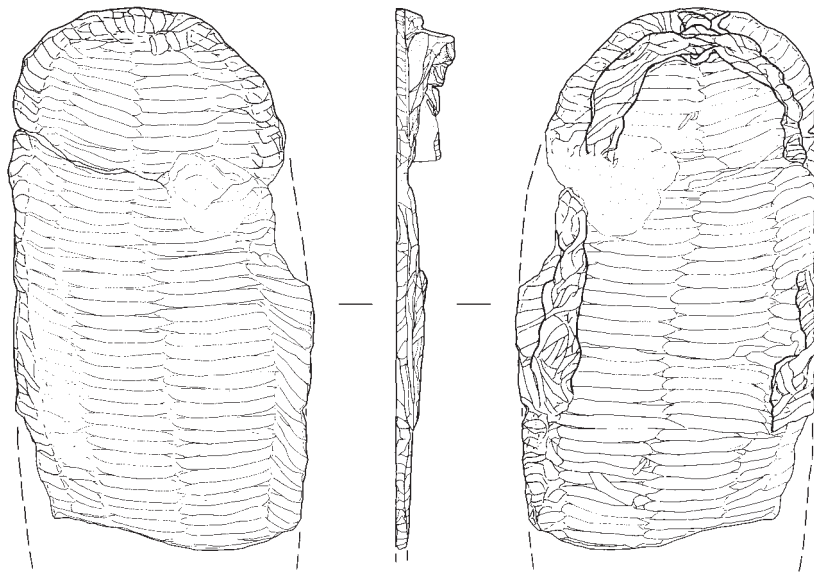
419・420は平面形がほぼ正方形の板材である。いずれもわずかにパースがつけられている。421・422はいずれも用途不明の木材である。

**履物(第54・55図)** 416～418は下駄である。416は中央部が一部残っているのみであるが、歯と台板が一木で作られた連歯下駄である。歯と台板の境界には1mm程の溝が作り出される。417は台頭部であり、鼻緒を通すための壺穴が1孔確認できる。台表には、使用による擦れ痕がわずかに認められる。418は台尻部である。いずれも全形は不明ながら、平面形状は小判形であ

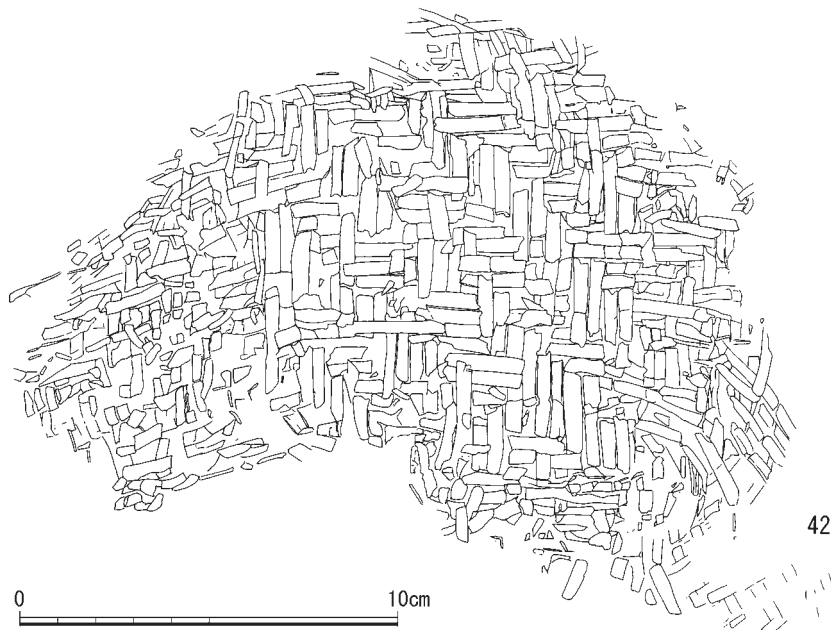
<sup>(注36)</sup>  
ろう。

423は藁草履である。踵部を欠く以外は極めて良好な状態で、堀S D01から出土した。幅8cm、残存長14.2cmを測る。楕円形の台も藁で作られ、中芯は認められない。まえ緒は通常、台の先から2～3cm下がったところにすげられるが、外枠に直接すげられている。すげ緒は前緒と別に作られており、側方の外枠にすげられる。爪先部の左側に穴が開いており、右足用の草履と推定する。<sup>(注37)</sup>

ヘラ(第56図) 425～435はヘラ状木製品である。ヘラ状木製品は他にも多く出土したが、残りの良いものを中心に図化を行った。端部の形状は三角形を呈するもの、斜めに切り落とすもの、

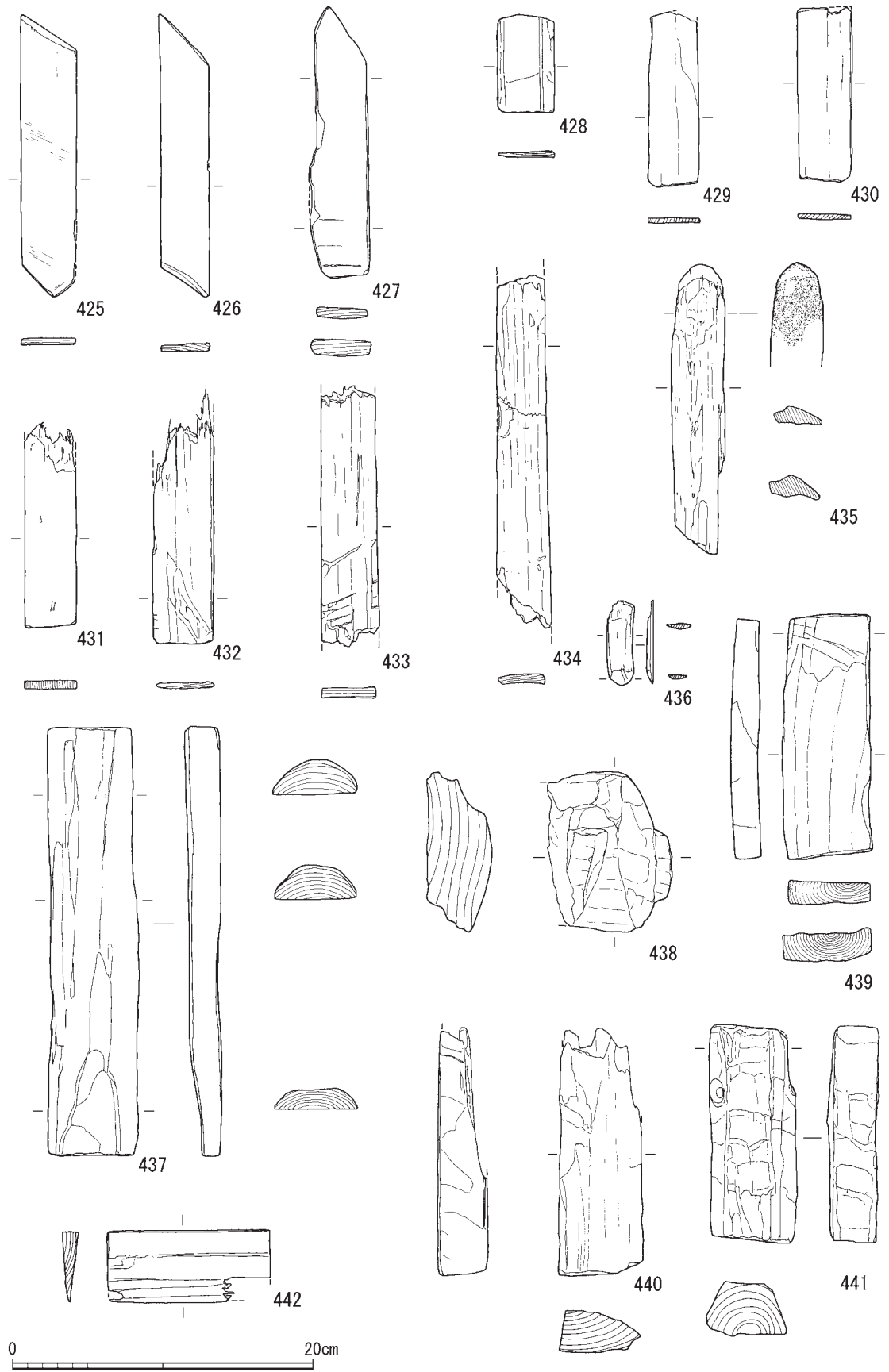


423



424

第55図 B・C・D地区第1面出土遺物(14)



第56図 B・C・D地区第1面出土遺物(15)



直線となるものなどバリエーションが多い。

425は片側を斜めに切り落とし、もう一方を三角形状に加工する。427は他のものよりもやや厚みがあり、片面のみに三条の擦れ痕がある。429・430はいずれも両端を直線的に切り落としたものである。出土したヘラ状木製品の多くがこの形状である。

法量は、長さ6cm台から20cmを越すものまで認められるが、幅はいずれも4cm前後にまとまる。肉眼観察ではベンガラや漆、墨痕を確認できるものはなく、用途は不明である。

**木材(第56図)** 435は、加工痕のある木材の先端が炭化したもので、いわゆる付け木である。

436は木材の小片であり、加工時に生じた削りかすと考える。437～441は割材である。いずれも加工痕が認められるが、製品や部材ではない、いわゆる割材を一括した。中世の遺構から取り上げた削りかすは436のみであるが、437～441も木材の加工に伴う残材と考えられる。大きな木材は出土していないが、居館周辺あるいは内部で小規模な木材の加工が行われていたと考えられよう。

**杭(第58・59図)** 原位置を保持していた杭は、堀S D02の南側で検出した井堰S W430に伴うものが最も多く15本以上あり、比較的太い径のものが多い。他に、堀S D02西岸付近や土橋S X429の東側などで数本ずつが原位置で出土している。また、わずかながら堀S D01・03掘削中に出土したのものがある。

杭は加工の方法から、3類に分類できる。

i類：先端のみを加工し、杭とするもの。

ii類：高い位置から、面を持つように加工するもの。

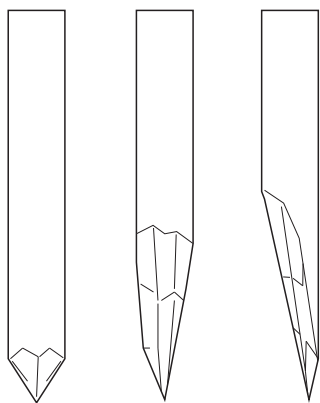
iii類：一方向のみから深い抉りを持つように加工するもの。先端のみ全面加工するものもある。

杭はいずれも芯持ち丸太であり、角杭は使用されていない。表面が炭化しているものがあるが、現在でも杭は腐植防止のために「焼き」を入れることが知られていることから、一部には同様の加工がなされていた可能性もあろう。また、顕著な加工がみられない部位でも樹皮を除去しているものが多く、同様に腐植防止のためと考えられる。以下、特徴的なものについて、記述する。

443～447はやや小形の一群である。446は上部に炭化が認められる。448は片側が強く抉られるiii類である。先端のみ、全面から加工が認められる。449は径が細く、屈曲がみられることから、枝を加工したものであろうか。全面樹皮は除去されているが、杭の加工は先端のみのi類である。453はiii類である。樹皮は除去され、上端にも加工が認められる。上端の加工が残るのはこの1点のみで、全長80cmを測る。

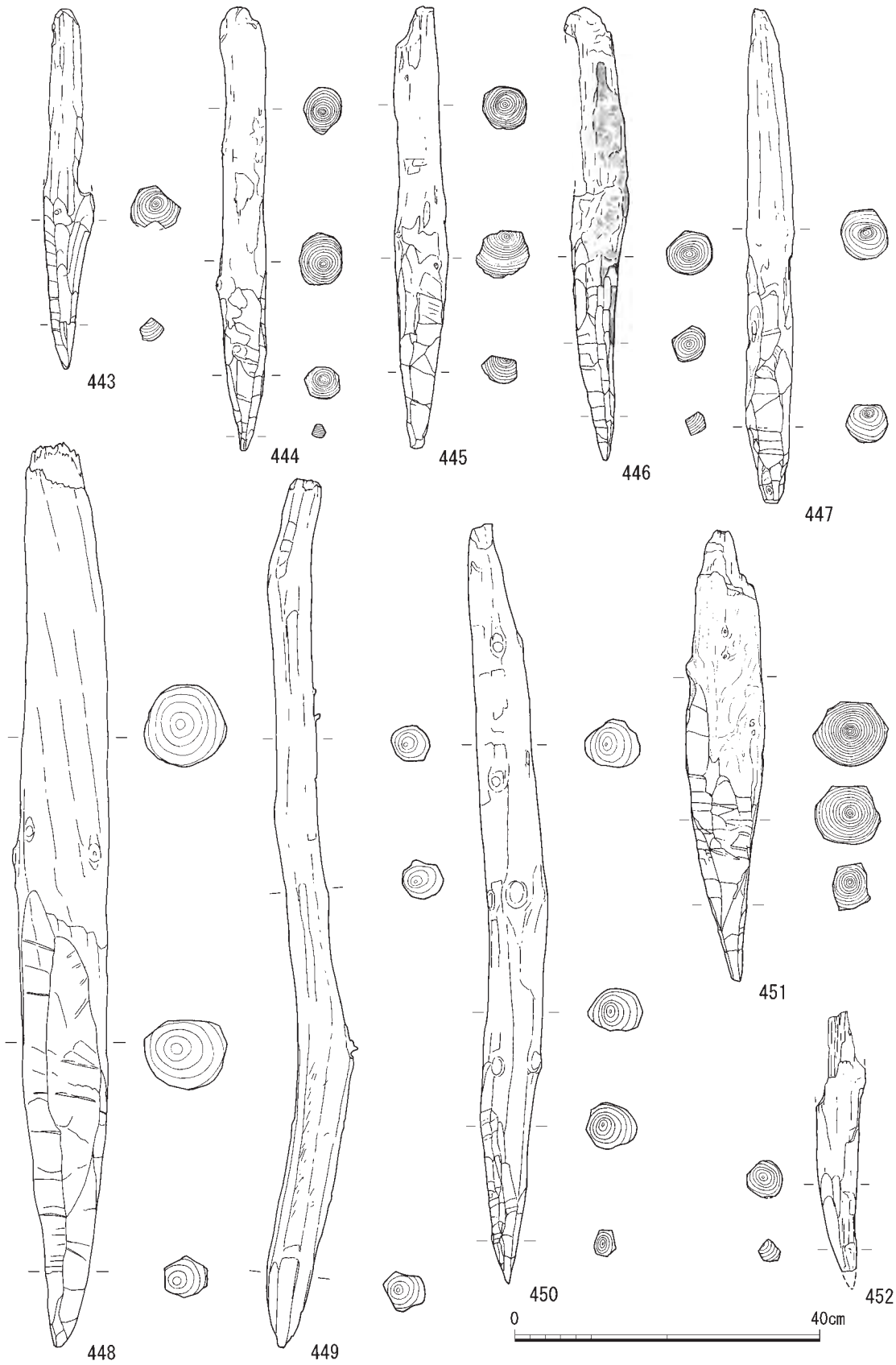
#### (4) 金属製品(第60図)

461は青銅製の筭である。堀S D02検出中に出土した。幅1.3cm、長さ16.6cmを測る。先端は耳かき状に細く、屈曲させている。片面には花草文と考えられる文様が認められる。

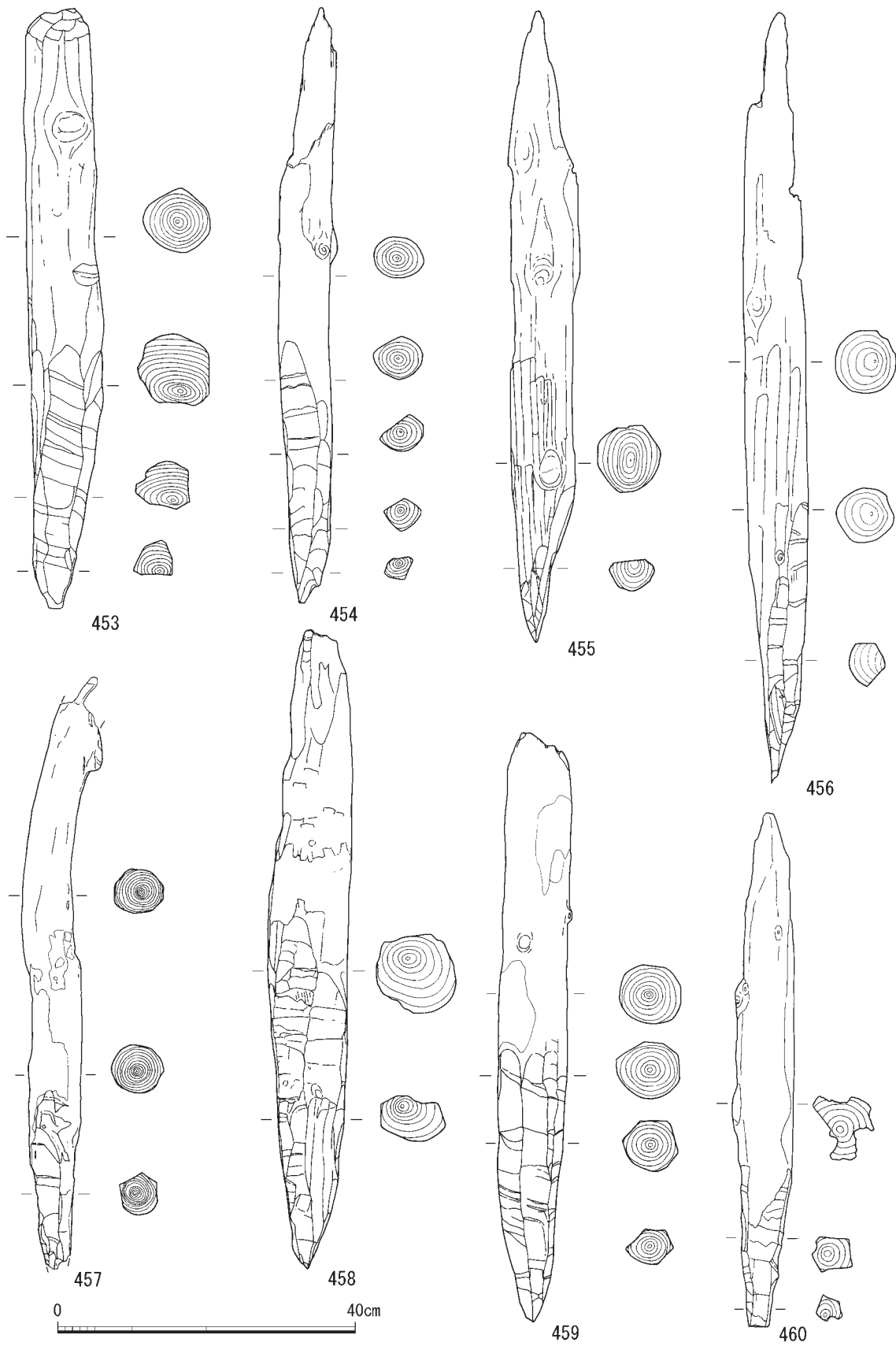


i類      ii類      iii類

第57図 杭分類図



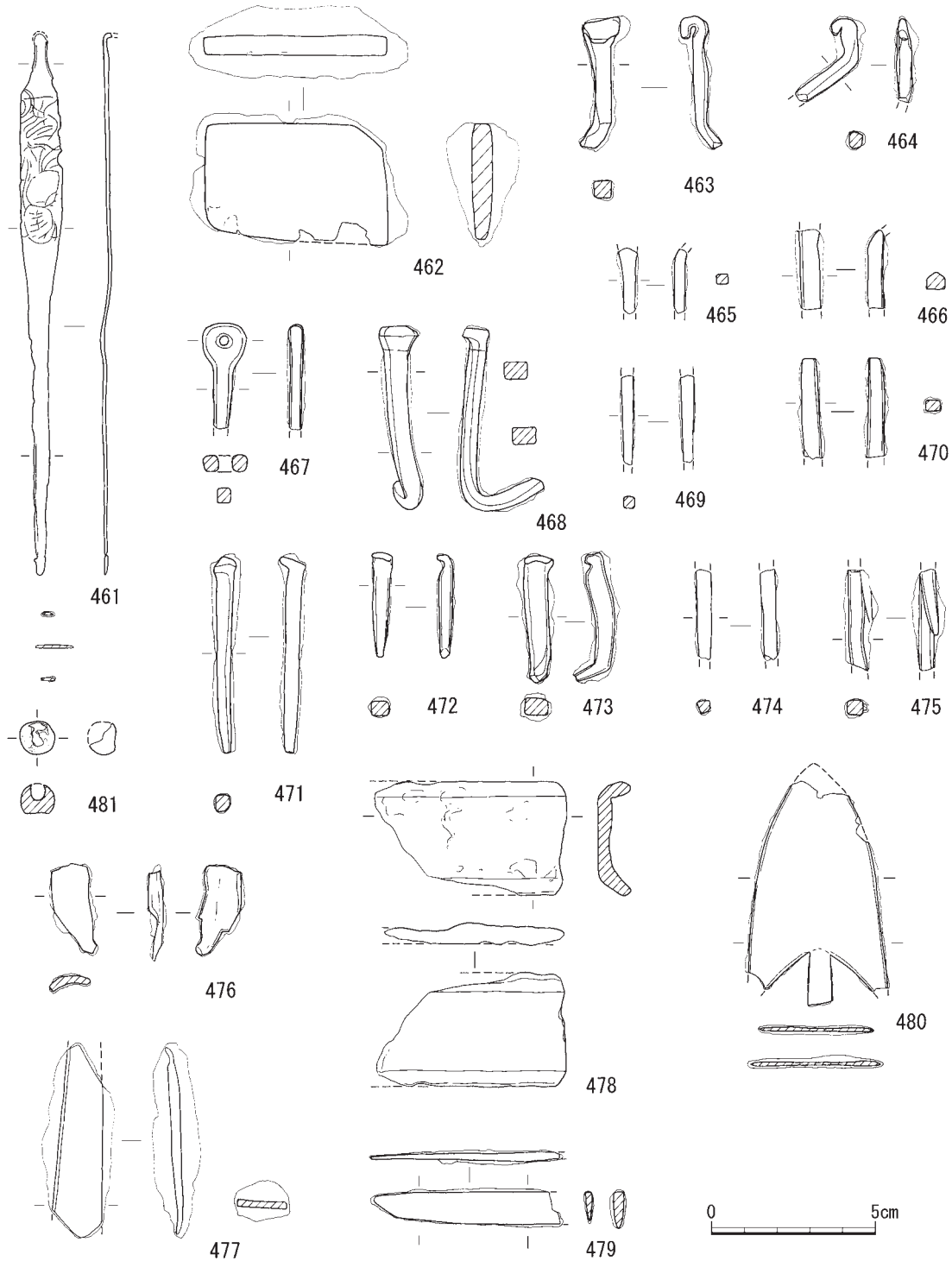
第58図 B・C・D地区第1面出土遺物(16)



第59図 B・C・D地区第1面出土遺物(17)

462は板状の鉄製品である。錆のため本来の形状は不明だが、厚さ5mm程の板状と考えられる。堅穴状遺構 S X303から出土した。S X303からは砥石も出土しており、簡易な鉄の加工等が行われた可能性がある。

463～475は鉄釘である。頭が方形あるいは鍵手状に鍛造するものが多く、円形頭のものは467のみである。463～466は堅穴状遺構 S X303埋土中、467～469は土坑 S K11から出土した。



第60図 B・C・D地区第1面出土遺物(18)

476は円弧状、477は板状を呈する鉄製品であるが、いずれも用途は不明。470・471は、S B 433を構成する柱穴から、476が堀S D01から、472～475・477は堀S D03から出土した。

478はやや厚手の手鎌であろうか。幅3.2cm、厚さ0.4cmを測る。479は刀子の刃部である。この2点は、B地区の中世面精査中に出土したが、中世のものではなく、古代以前にさかのぼるものと考えられる。480は古墳時代の竪穴建物S H351から出土した鉄鏃である。

481はB地区廃土中から採取した鉛玉である。中央部には直径3mm、深さ5mm程の小孔が穿たれる。表面は白色を呈するが、白色が削り取れた部分は灰色である。蛍光X線分析の結果、鉛(Pb)のピークとともに、硫黄(S)が検出された。添加物や不純物が少なくなるように製錬された純粋な鉛(Pb)に近いという所見を得ている。<sup>(注38)</sup>したがって、居館廃絶後の遺物である可能性が高い。

#### (5)動物遺存体

937(写真1)は、堀S D03の底面から出土したウシ右中手骨と判断される骨試料である。骨の全長は18.9cm、中心部の幅は3cmである。ウシの年齢は2才で、解体痕は認められない。

この骨試料に対し、放射性炭素年代測定を行ったところ、 $2\sigma$ 歴年代範囲(95.4%)で1213～1265年の年代を示した。骨は溝底に接するようにして出土しているため、この年代値は堀S D03の掘削時の上限年代を示している。(桐井理揮)



写真1 堀S D03出土ウシの骨



## 4. B・C・D地区（第2面）の調査

### 1) 調査の概要

B・C・D地区の第2面では、古墳時代～古代の遺構を検出した(第61図)。

B地区では、南側では中世の遺構と同一面で古代の遺構が露出している状態であったが、北東側では、約0.2mの遺物包含層が除去した下層に遺構面が存在する。掘立柱建物や竪穴建物を検出した。

C地区では、中世の遺構と同一面で、大きく蛇行する開析谷NR50を検出した。

D地区では、中世の遺構と同一面で、古墳時代～古代の建物跡などを検出した。D地区中央には約0.2mの段差があるが、これは後世の田畠の区画である。この段差よりも西側では遺構の残りが極めて悪く、遺存状況には恵まれない。

遺構の検出状況、土層の堆積状況から、本来はB地区が最も標高の高い部分であり、東西に緩やかに傾斜するような地形であったと考えられる。

### 2) 検出遺構

#### (1) 開析谷とその関連遺構

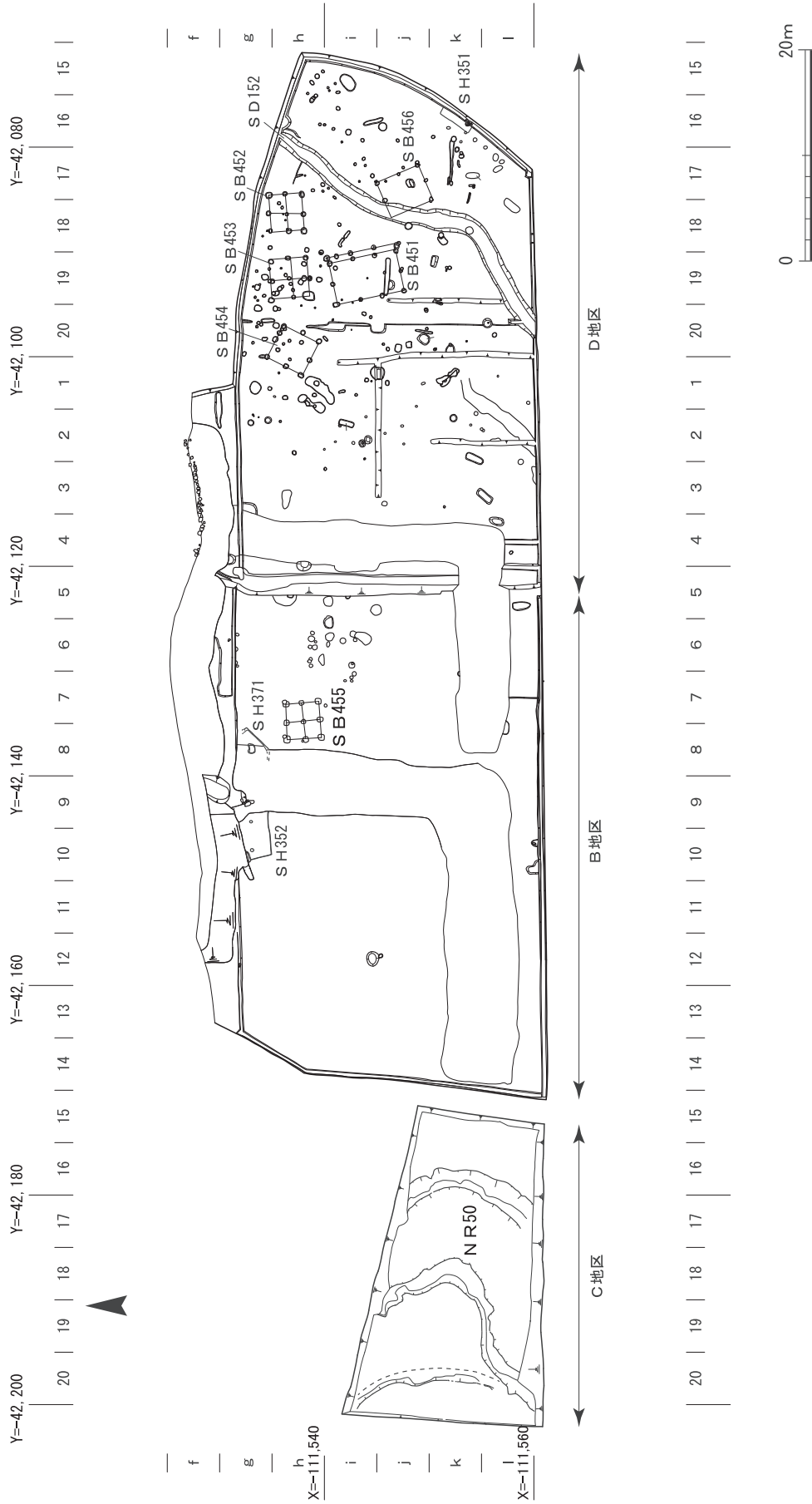
開析谷NR50(第62～65図) NR50は調査区の西側で検出した開析谷で、最大幅15mを測る。C地区で大きく北西方向に蛇行する。層位は大きくV層に大別される。

I層は第63図の1層が対応する。有機質や粗粒砂を含む砂質土で、溝埋没後の耕作土と判断した。奈良時代の土器片が多く含まれるが、中世以降の土器は全く含まれていないことから、中世の遺構群が形成された時期にはすでに埋没していたものと考えられる。

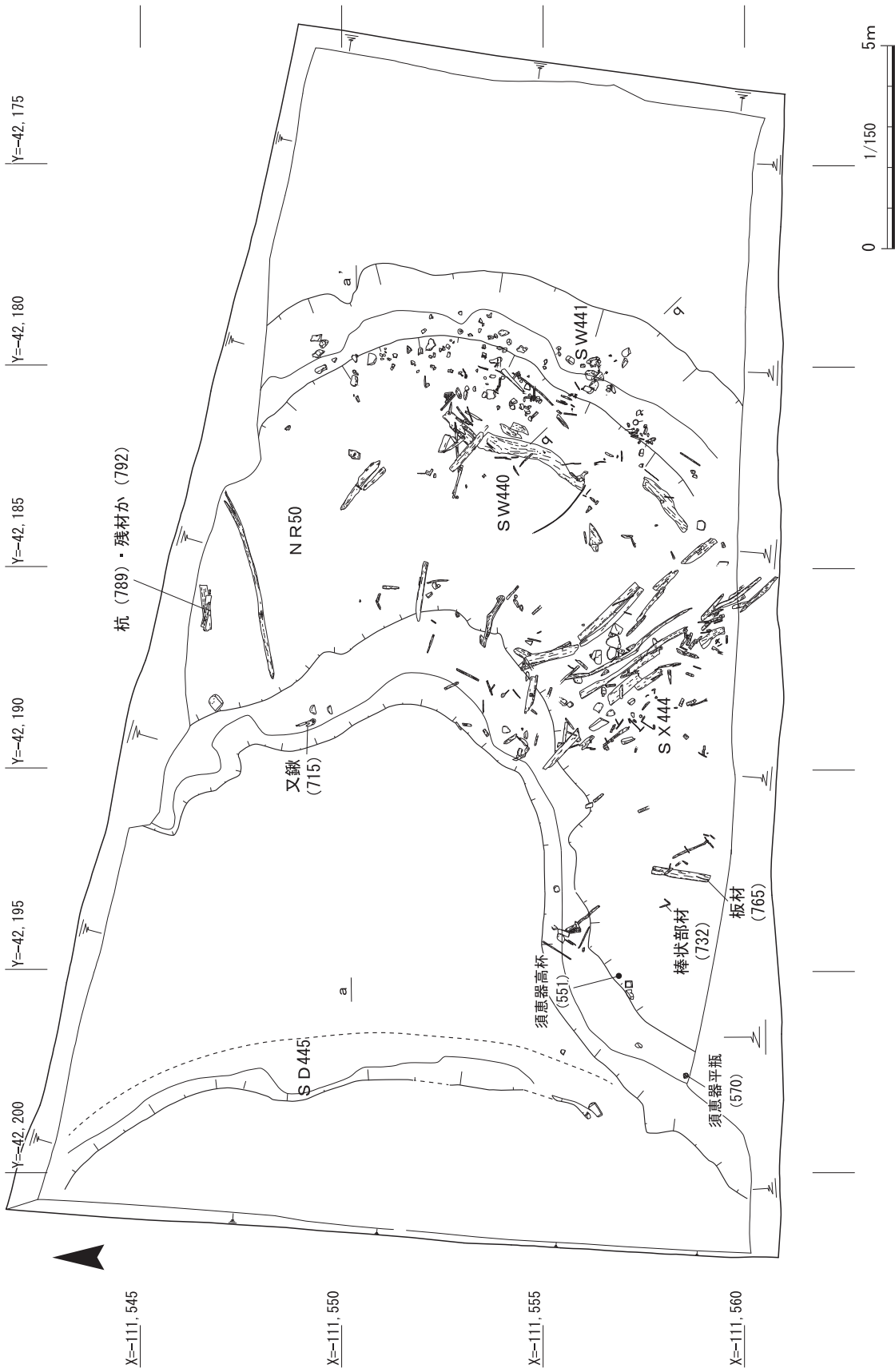
II層は第63図の2層が対応する。マンガン粒を多く含む砂質層で、溝の最上層の埋土である。水流の痕跡は認められないことから、すでに谷がほぼ埋没しているような状態であったと考えられる。ただし、ブロック土や顕著な有機質は確認できないことから、人為的な整地土かどうかは判断できない。埋土中からは飛鳥時代～奈良時代前半の土器が多く出土した。

III層は第63図の3～7層が対応する。3層は灰黄色の粘土質シルト層で、3層から5層にかけて、木材集積SX444が検出された。木材集積SX444は、幅3m・検出長7.5mにわたって、板材や床板、柱材等の建築部材を溝中に設置して構築されている。上下の層よりも砂礫を含む量が少ないため、水流が弱く、滞水状態に近かったと考えられる。この所見は珪藻化石群集の分析からも支持される。遺物には古墳時代後期後半～飛鳥時代の土器を含む。なお、II・III層を中心にウシ・ウマの歯や骨が11点検出された。

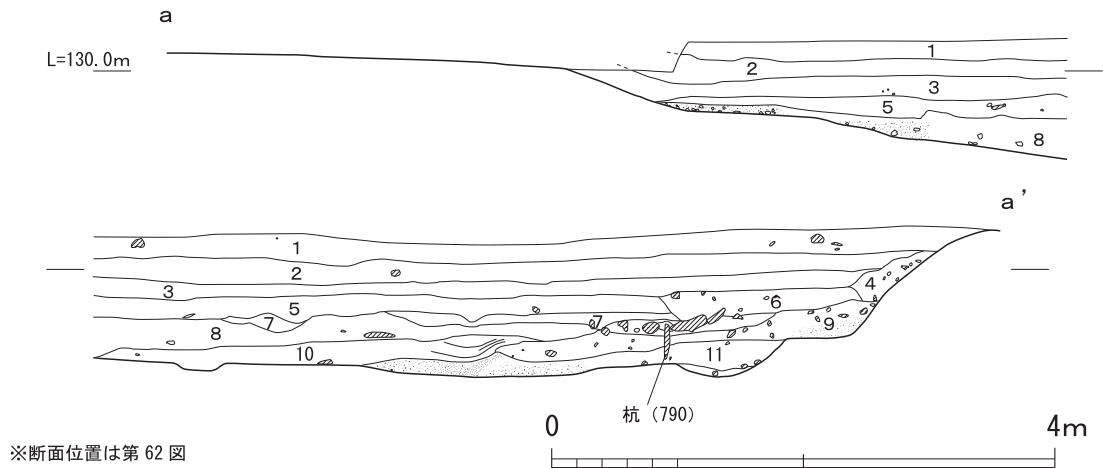
IV層は第63図の8～10層が相当する。9層は礫を多く含む締まりの良い層であり、流路攻撃面にも認められる。他の層位ではこのような状況は認められず、簡易な盛土、あるいは護岸施設である可能性も考えられる。ここでは、9層を護岸遺構SW440としておく。なお、9層に伴って杭列SW441が検出された。8・10層は細粒砂～中流砂を多く含む砂質シルトであり、炭化物を多く含む。下層には弱いラミナ状の堆積が認められる。IV層からは、わずかながら須恵器が出土しているが、第82図614を除くとIII層からの混入であると判断している。614以外の出土土器は



第61図 B～D地区(第2面)遺構配置(1/600)



第62図 C地区遺構配置図(1/150)



1. 浅黄色 (2.5Y 8/3) 粗粒砂混じり極細粒砂〈土器多く含む〉
2. 灰白色 (2.5Y 7/1) 極細粒砂〈粒状のマンガン粒を多く含む・奈良?土器多く含む〉
3. 灰黄色 (2.5Y 7/2) シルト〈線状のマンガン粒を多く含む・飛鳥土器・木片・建築部材多量に含む〉
4. 黄色 (2.5Y 8/6) シルト〈礫を多く含む・地山崩落由来か〉
5. 黒褐色 (10YR 3/1) 粘質土〈均質・木片・土器を多量に含む〉
6. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土〈白色粗粒砂を多く含む・5層と近似・土器多量〉
7. 黄灰色 (2.5Y 5/1) 細粒砂〈しまりのない砂質土・木片を多く含む〉
8. 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質土〜極細粒砂〈礫を多量に含む・砂質土ブロック含む・粒径不揃い〉
9. 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質土〈上層からの礫を多く含む〉
10. 黒褐色 (10YR 3/1) 粘質土と砂質土との互層状の堆積
11. 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質土〈均質〉

第63図 開析谷N R50断面図(1/60)

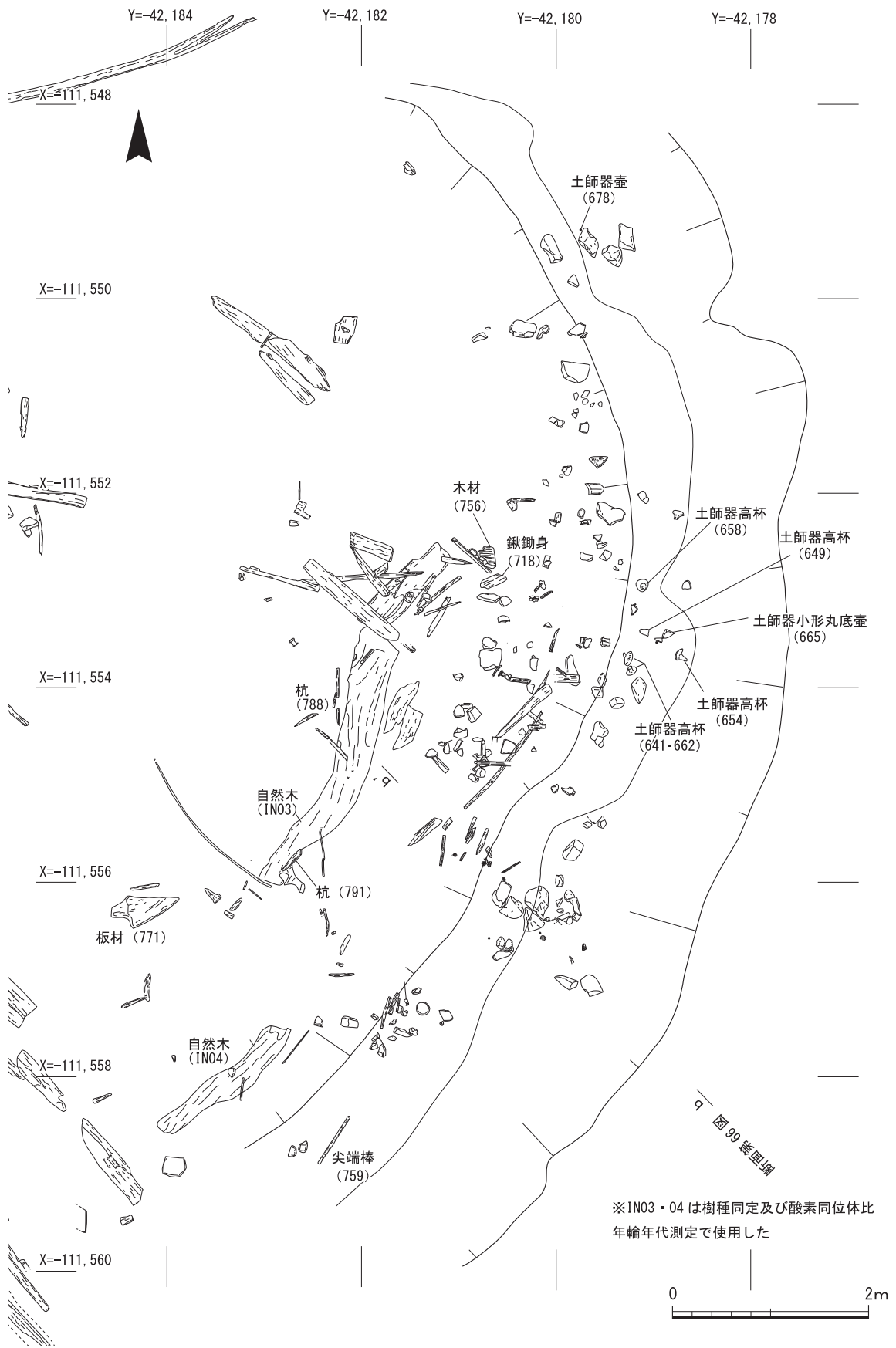
土師器のみであり、古墳時代前期後半から中期前半に中心があると考えられる。

V層は第63図の11層が該当する。砂質粘土質シルトからなり、砂礫を多く含む。10層は弱いラミナ状の堆積で、わずかに水流があったと考えられる。V層からは土師器高杯や小形丸底壺などが多く出土した。(桐井理揮)

**開析谷N R50の水棲環境** 開析谷N R50の堆積環境や古水文環境について検討するため、堆積物中の珪藻化石群集を行った。詳細な分析結果については第6章に記し、ここでは所見を記す。

谷によって侵食された基盤層の礫層直上を被覆する腐植質泥層である古墳時代前期のV層では、珪藻化石の保存状態が不良であった。報告者のこれまでの分析事例をふまえると、珪藻化石は、乾湿変動が激しい層準や、堆積過程及び堆積後に乾燥して好氣的環境が維持されるような層準、さらに洪水層のような堆積速度で速い層準では、保存状態が不良となる傾向が経験的に確認できる。大型植物遺体分析で得られた草本種実群集にもとづくと、V層では湿地の堆積環境が形成されていたと考えられる。また、後述の大型植物遺体分析では、上位のIV層やIII層でも同様に湿地が形成されていたと考えられている。このような湿地環境は、花粉分析とプラント・オパール分析の結果からも支持される。

珪藻化石については、上位のIV層やIII層になると多産するようになる。上記の分析結果などを総合的にふまえると、谷が埋没傾向となった初期段階のV層では、湿地の堆積環境が安定しておらず、珪藻化石の分解が進行するような乾湿変動の激しい状況下にあったと推測される。

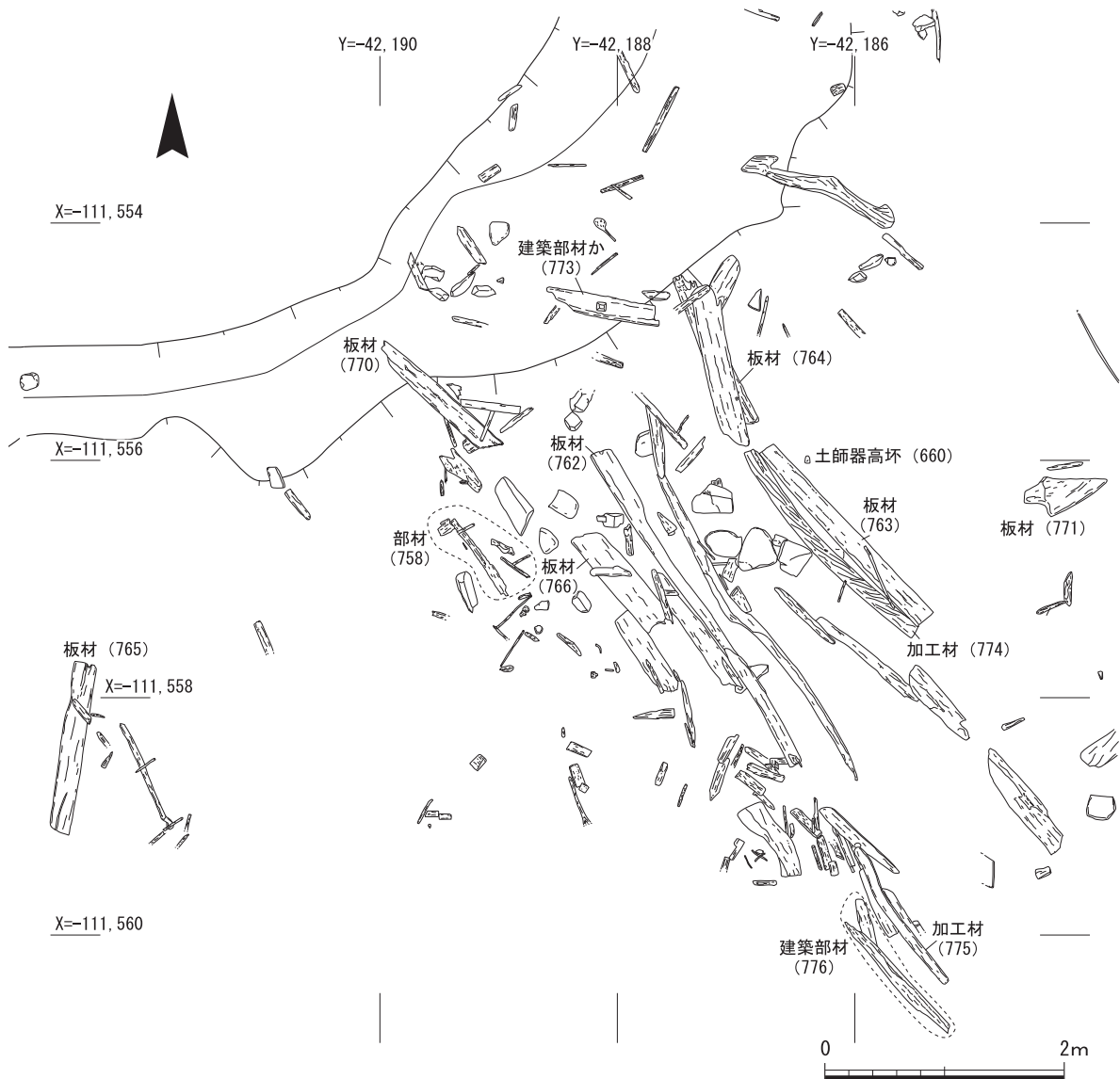


第64図 開析谷NR50・護岸遺構SW440出土状況図(1/60)



V層の上位層である古墳時代中期のIV層、飛鳥時代のⅢ層では、珪藻化石の保存状態が良く、産出量も多い。IV層とⅢ層の珪藻化石は、基本的に淡水種からなり、湖沼沼沢湿地指標種群(N)と沼沢湿地付着生指標種群(O)を含み、広布種を随伴して、淡水不定・不明種が優占する。このうち、優占種の*Cymbella tumida*は、好清水性種で、流水域において稀に第一位優占種となり、そのような水域は極貧腐水性であるとされている。<sup>(注39)</sup>また、好清水性の生態性を示す珪藻がこの他にも産出している。さらに、中～下流性河川指標種群もわずかに伴っており、谷内では極弱い水の流れがあった可能性が高く、清冽な水域環境であったと推察される。

層相及び珪藻化石群集から、IV層とⅢ層の堆積段階における開析谷N R50の谷内では、閉塞されず水循環が良く、河川水及び地下水に涵養された安定した湿地が形成されていたと考えられる。IV層とⅢ層及び下位のV層で湿地が形成されていた様子は、大型植物遺体分析の結果からも確認される。大型植物遺体分析の結果は、開析谷N R50の周囲と谷底が明るく開けていた可能性を示唆している。このような環境が形成されるのは、V層・IV層・Ⅲ層の堆積時期に、人間による植



第65図 開析谷N R50・木材集積S X444出土状況図(1/60)

生攪乱の影響を受けていたためと推定される。この時期の堆積層では、泥炭層の形成が確認できない。これは、谷周辺と谷内において人間などによる植生攪乱が継続的に作用するとともに、谷底が閉塞されず、枯死した植物遺体が折り重なるような堆積環境が形成されていなかったためと考えられる。このような堆積環境は、Ⅳ層、Ⅲ層の珪藻化石群集において、中性～好アルカリ性が特徴的に産出している状況からもうかがわれるとともに、層相や大型植物遺体の分析結果とも調和的である。

飛鳥時代後半のⅡ層になると、珪藻化石の保存状態が不良になる。Ⅱ層と上位のⅠ層では、酸化鉄の斑紋が発達しており、その発達の程度は上位であるほど顕著である。開析谷NR50では、Ⅱ層の堆積段階になると谷内の埋積が進み、局地的に地下水位が低下して、地表付近で好気的環境が維持されるようになったと考えられる。Ⅱ層で珪藻化石の保存が不良であった要因は、谷の埋積進行による地表の乾燥化によると判断できる。Ⅱ層は、層相から耕作土と解釈される。よって、Ⅱ層の堆積段階にみられる地表の乾燥化は、谷の自然な埋没作用のみならず、谷部とその近傍の耕作地の開発といった人為的営力も関係している可能性がある。

(野口真利江・辻 康男＝パレオ・ラボ)

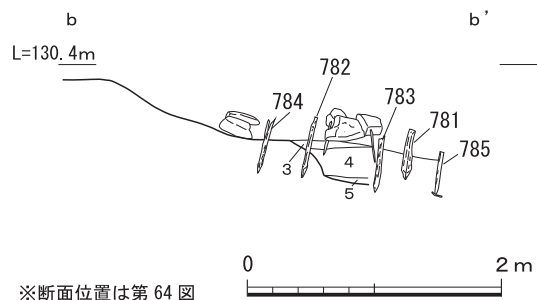
**護岸遺構SW440(第64図)** 開析谷NR50の9層は礫を多く含む層であり、流路攻撃面にのみ認められる。他の層位ではこのような状況は認められないこと、上下の層には含まない中礫や遺物の細片を多量に含むこと、締まりが強いことから、人為的な盛土と判断した。また、杭列SW441(第66図)も、護岸遺構SW440に伴うものである。

礫の上面で、土師器が多く出土している。土師器高杯及び小形丸底壺が多く、被熱したものも含まれる。また、燃えさしや剣形木製品など、祭祀要素を帯びた遺物も周辺掘削中に出土している。土層観察と珪藻化石群集分析から、弱い水流があったことは確実であり、いわゆる水辺の祭祀に関わる遺構である可能性も指摘できよう。

**木材集積SX444(第62・65図)** 開析谷NR50のⅢ層では、幅3m、長さ7.5mにわたって木材集積SX444を検出した。南側は調査区外であるが、さらに南へ続いていることは確実である。

木材の中には、板材・丸材の他、柄や仕口がある建築部材も含まれる。これらの木材は、数枚が折り重ならず、敷き並べられたような状態で検出されている。また、木材の間には幅30cm程度の大礫も検出されており、木材が下流に流出しないように固定するものであったとも考えられよう。

周辺を掘削中には木端や小枝などの自然木が多量に出土した。これらは、すべて持ち帰ることはできなかったため、現地で選別し、わずかでも加工の痕跡が認められたものはすべて取り上げを行った。中には木材加工に関わる削りかすや残材も含まれており、近隣に木材加工場があったと考えられる。



第66図 杭列SW441立面図(1/60)

溝 S D 445 (第62図) 溝 S D 445は幅約1m、深さ0.15mで円弧状に回る溝である。南側は開析谷 N R 50に切られる。残存状況が悪く、西肩のみを検出したのみである。埋土中から古墳時代中期とみられる須恵器の小片が出土しており、開析谷 N R 50IV層と同時期に機能していたと考えられる。

## (2) 掘立柱建物

掘立柱建物は6棟検出した。

掘立柱建物 S B 451 (第68図) 梁間2間、桁行3間の南北棟の側柱建物で、東側に庇をもつ。建物の主軸は北から西に約10°振る。南北6.17m、東西は庇部を含め4.16mで、平面規模は約25.6㎡である。柱穴の平面形状はすべて円形で、残存深は15cm～40cmである。

掘立柱建物 S B 452 (第69図) 梁間2間・桁行2間の総柱建物である。建物の主軸は北から西に7°振る。一部の柱穴から奈良時代と考えられる須恵器の小片が出土した。南北3.22m、東西3.44mで、平面規模は約11.1㎡である。柱穴の平面形状は一部隅丸方形のものもあるがほぼ円形である。柱穴からの出土遺物はない。

掘立柱建物 S B 453 (第70図) S B 452の西側で検出した梁間2間・桁行2間の総柱建物である。S B 452と同一棟の可能性もあるが、別棟として報告する。建物の主軸は北から西に6°振る。一部の柱穴から奈良時代と考えられる土師器、須恵器の小片が出土した。南北3.42m、東西3.80mで、平面規模は約13.0㎡である。柱穴の平面形状はすべて円形である。一部の柱穴から、時期不明の遺物小片が出土している。

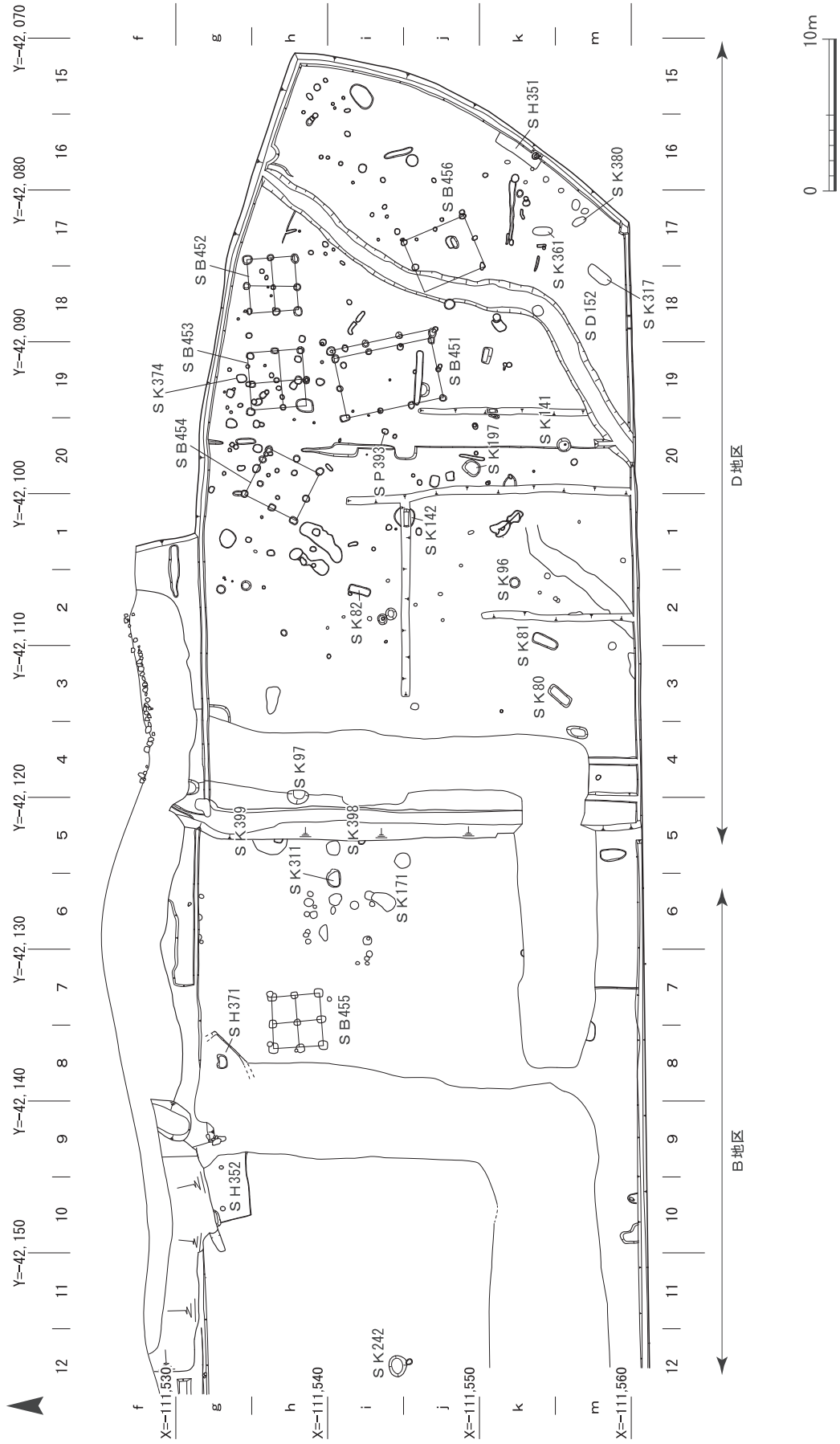
掘立柱建物 S B 454 (第71図) 梁間2間・桁行2間の側柱建物である。建物の主軸は北から東に28°振っており、他の3棟とはやや主軸方位を異にしている。南北3.73m、東西3.39mで、平面規模は約12.6㎡である。柱穴の平面形状は、一部隅丸方形のものも多くは円形である。

掘立柱建物 S B 456 (第67図) S B 451の南東で検出した梁間2間・桁行2間の側柱建物である。S D 152の影響で、西側の柱穴2基は検出できなかったが、1棟の建物として復元した。南北4.34m、東西3.69mで、平面規模は約16.0㎡である。建物の主軸は、北から西へ23°振る。

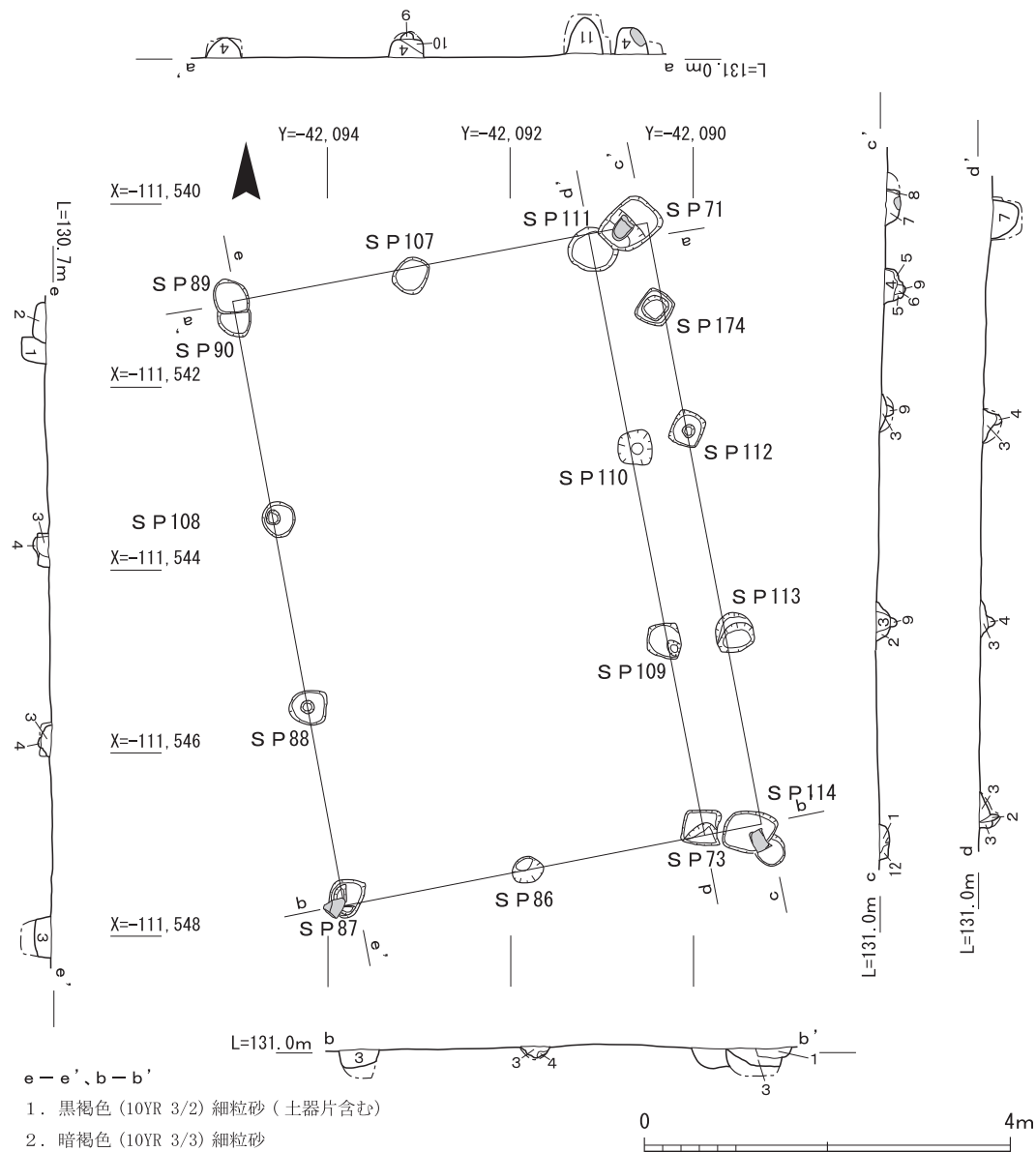
掘立柱建物 S B 455 (第72図) B地区で検出した梁間2間・桁行2間の総柱建物である。建物の主軸は北から西に5°振る。南北3.16m、東西3.37mで、平面規模は約10.6㎡である。柱穴から遺物の小片が出土している。D地区で検出した建物群とは主軸方向を異にし、柱穴の形状も異なっていることから、別の時期の遺構である可能性もあろう。したがって、側柱建物3棟と総柱建物3棟が1つの遺構群として捉えられよう。

D地区の西側は削平が著しく、ほとんど遺構を検出することができなかったが、柱穴の遺存状況からみて、さらに西側に大きく展開していたとは考え難い。また、D地区の北側及び東側は侵食崖となっていることから、北側と東側へは建物群は展開していなかったと考えられる。

出土遺物が少なく、建物群の正確な帰属時期は決めがたいが、須恵器小片が柱穴から出土しており、奈良時代後半に一つの接点を考えておきたい。



第67図 B・D地区(第2面)遺構配置図(1/400)



e-e', b-b'

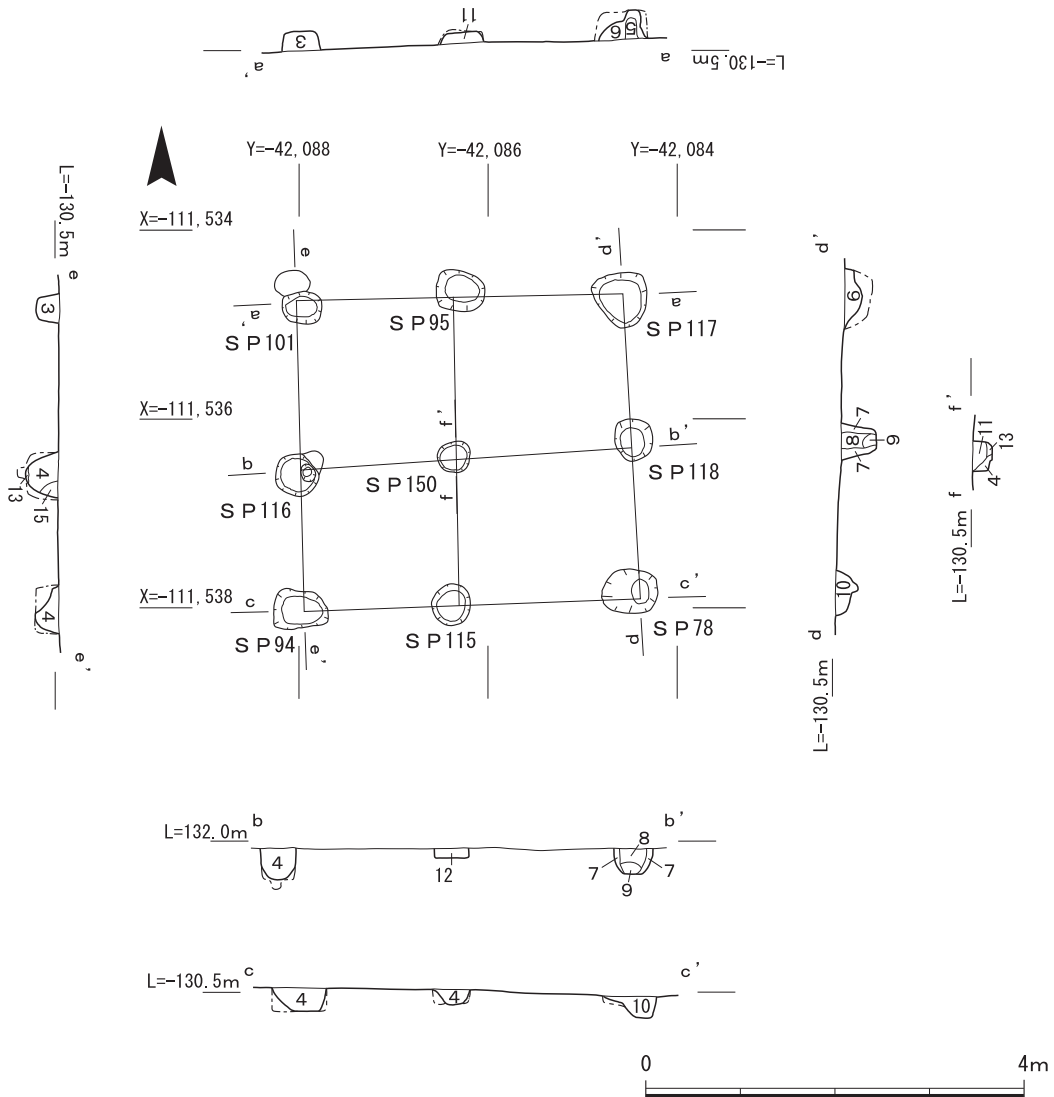
1. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂 (土器片含む)
2. 暗褐色 (10YR 3/3) 細粒砂
3. 暗褐色 (10YR 3/3) 細粒砂 (褐色ブロック土・土器片含む)
4. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) シルト (柱抜取から埋没までに自然に堆積した層か)
5. 黒褐色 (10YR 2/3) 極細粒砂 (鉄分多く褐色のブロック土含む)

a-a', c-c', d-d'

1. 褐色 (10YR 4/4) 細粒砂 (中粒砂・径2cm程の土器片・石およびマンガン含む)
2. 褐色 (10YR 4/4) 極細～細粒砂 (暗褐色土とマンガン含む)
3. 暗灰黄色 (10YR 4/2) 極細粒砂 (マンガンと径2cm程の礫と土器片含む)
4. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂 (細粒砂・径2cm程の礫・ブロック土・マンガン含む)
5. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 極細粒砂 (マンガン多量に含む)
6. 黒褐色 (10YR 3/1) 極細粒砂
7. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂 (中粒砂・マンガン多量に含む)
8. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 極細粒砂 (マンガン多量・黒褐色のブロック土含む)
9. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) シルト (柱抜き取り後の自然堆積か)
10. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 極細粒砂 (マンガン・土器片含む)
11. 黒褐色 (10YR 2/3) 極細粒砂 (鉄分多く褐色のブロック土を含む)
12. 褐色 (10YR 4/4) 細粒砂 (中粒砂・黄褐色のブロック土多く含む)

第68図 掘立柱建物 S B 451 平・断面図(1/80)



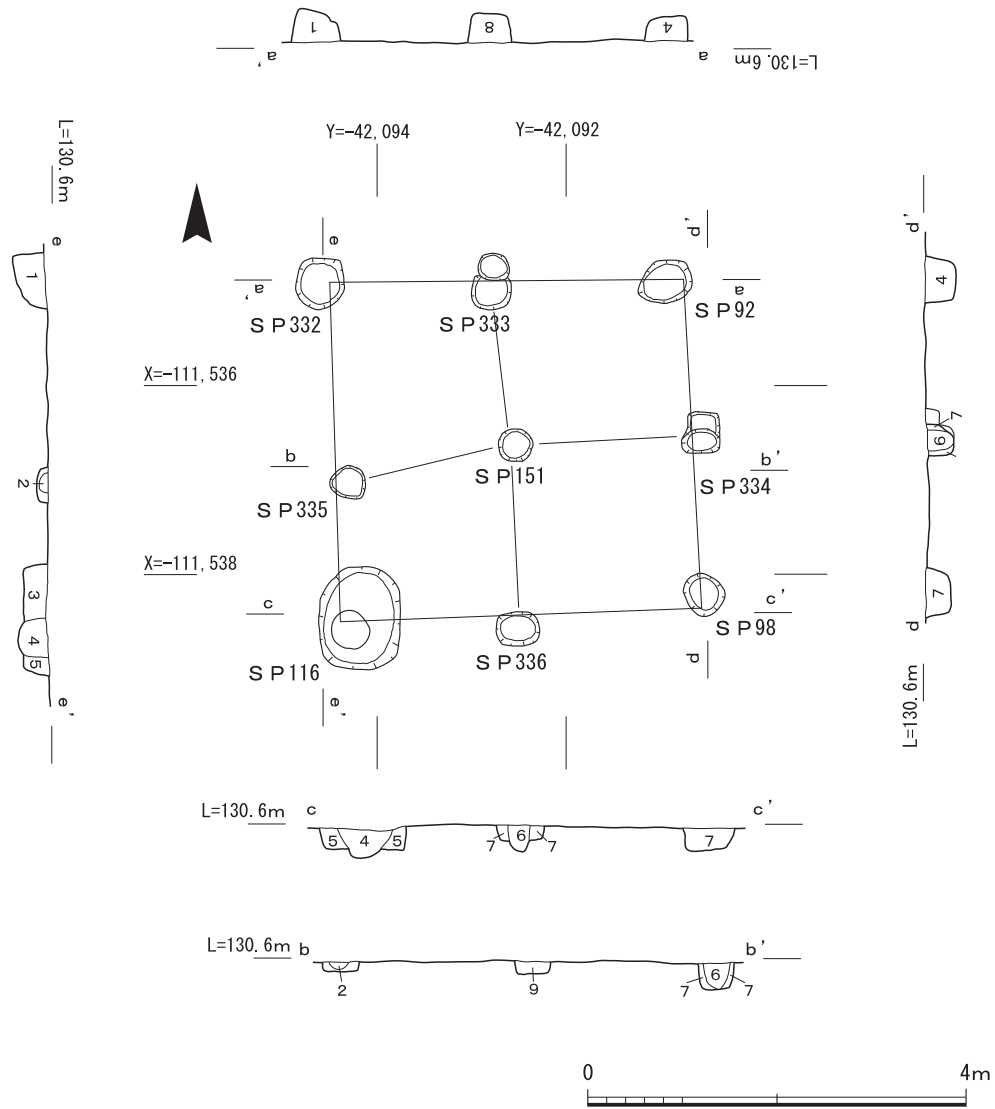


1. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 細粒砂含む極細粒砂 (黄褐色のブロック含む)
2. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 中粒砂含む極細粒砂 (径4cm大のブロック含む)
3. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 中粒砂含む極細粒砂 (マンガン多く含む)
4. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 極細粒砂 (中粒砂・2cm程のブロック土・土器・マンガン含む)
5. 黒褐色 (10YR 3/1) シルト (マンガン含む)
6. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 極細粒砂 (マンガン含む)
7. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 細粒砂 (中粒砂・マンガン多量に含む)
8. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂 (中粒砂・マンガン含む・しまりが良い)
9. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 極細粒砂 (中粒砂・マンガン含む)
10. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 極細粒砂 (中粒砂含む・土器片・マンガン・径2cm程の礫含む)
11. 暗褐色 (10YR 3/3) 極細粒砂 (細粒砂・マンガン・土器片・炭化物を含む)
12. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 極細粒砂 (土器片・マンガン・2~3cm程のベース土ブロック含む)
13. 黄褐色 (10YR 5/6) シルト (粘性あり・柱あたりの痕跡あり)

第69図 掘立柱建物 S B 452平・断面図(1/80)

(3) 竪穴建物

竪穴建物 S H351 (第73図) D地区東端で検出した建物である。一部を検出したのみで、大部分は調査区外である。1辺約3.3mの方形の竪穴建物とみられるが、残存状況は極めて悪く、残存深は0.05mである。貼り床の存在は確認することができなかった。西側には周壁溝がわずかに残る。床面直上からは鉄鏃(第60図480)や土師器の細片が出土した。床面から掘り込まれた浅い土坑状の窪みからは甕の上半部(第98図907)が出土した。土師器の年代観から、古墳時代前期末

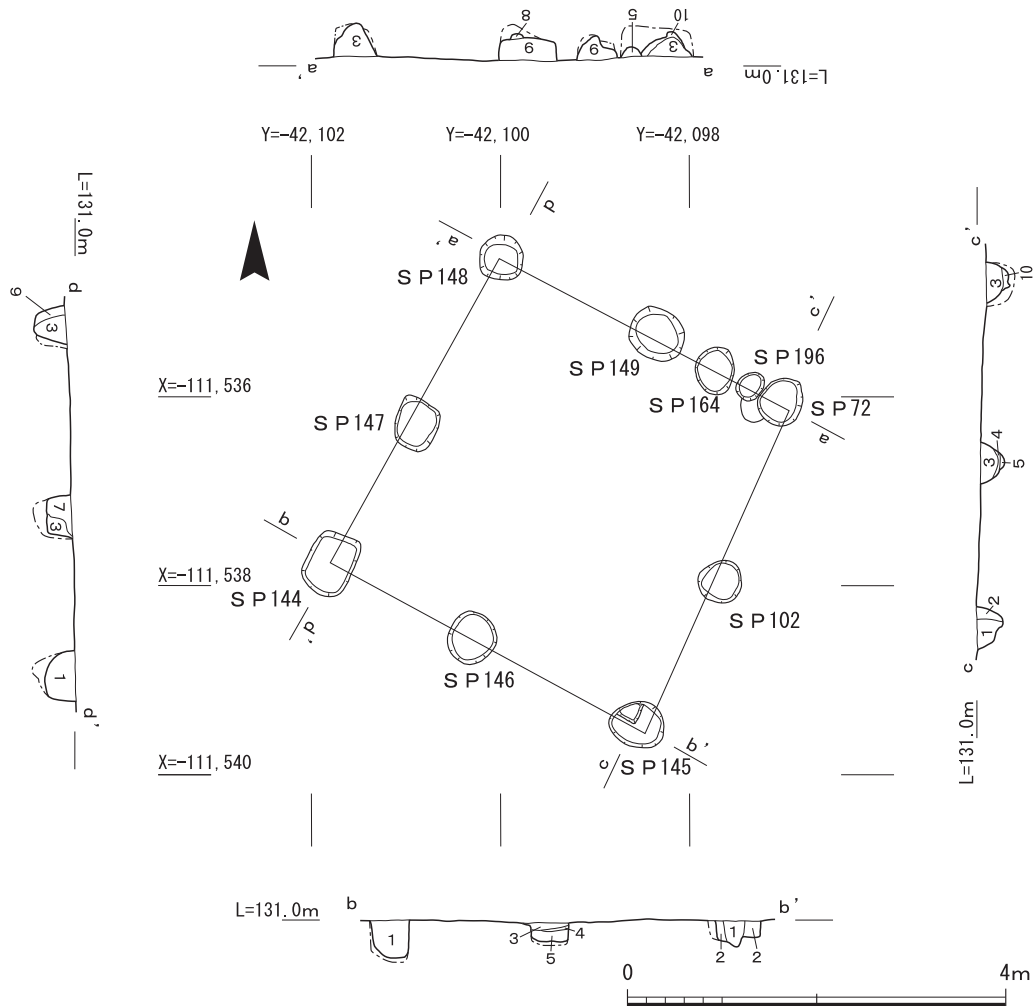


- |                         |                           |
|-------------------------|---------------------------|
| 1. 黒褐色 (10YR 2/3) 極細粒砂  | 6. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂     |
| 2. 暗褐色 (10YR 3/3) 細粒砂   | 7. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 極細粒砂 |
| 3. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 極細粒砂 | 8. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂    |
| 4. 暗褐色 (10YR 3/3) 極細粒砂  | 9. 黒褐色 (2.5Y 3/2) 極細粒砂    |
| 5. 黒褐色 (10YR 2/2) 細粒砂   |                           |

第70図 掘立柱建物 S B 453平・断面図(1/80)

～中期前半の建物と考えられる。

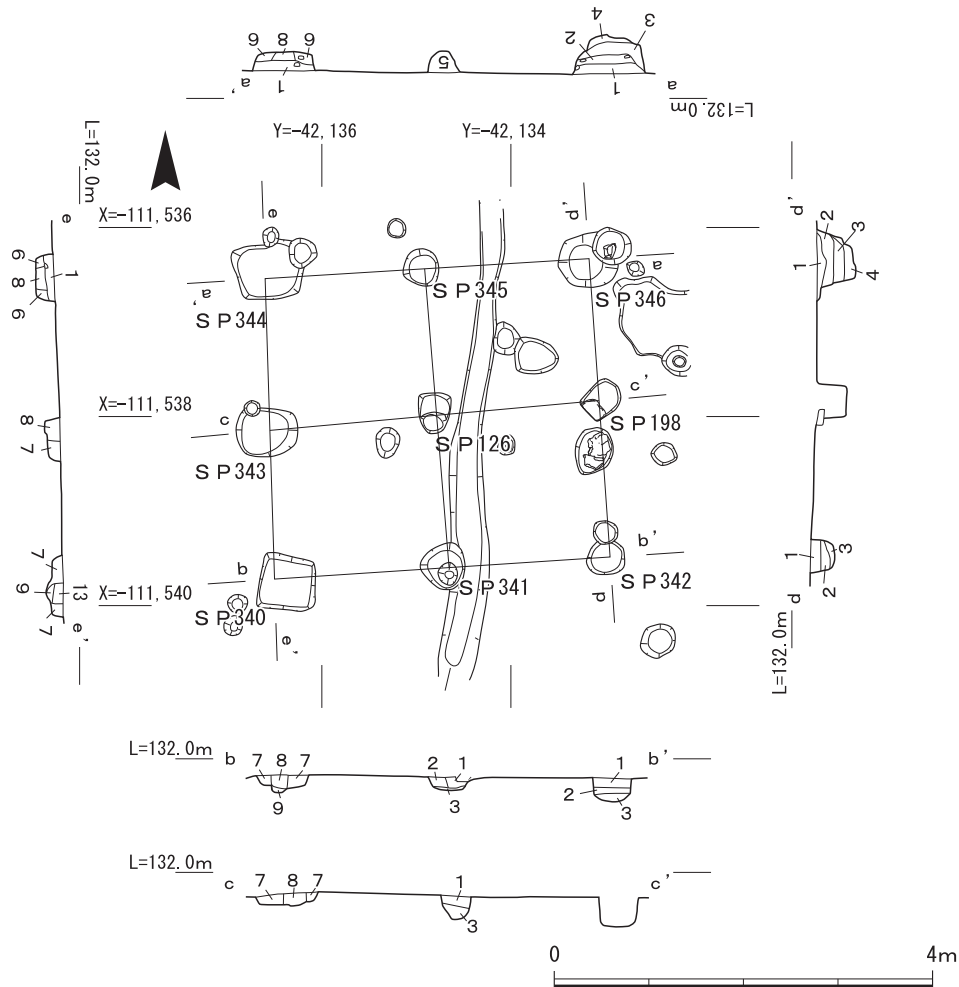
竪穴建物 S H352 (第73図) B地区北端で検出した建物である。北半は攪乱で失われ、西半は中世の堀 S D01によって切られているため、平面規模は明らかではないが、1辺4m以上の方形の建物と考えられる。中央部付近で支柱穴と考えられるピットを2基検出した。カマド、周壁溝は認められなかった。埋土中から土師器口縁部(第98図909)が出土しており、古墳時代前期末～中期前半の建物と考えられる。



- |   |   |
|---|---|
| 1. 黒褐色 (10YR 3/1) 極細粒 (褐色のブロック土を多く含む)   | 7. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 細粒砂 (マンガン多量に含む)          |
| 2. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂 (中粒砂含む)          | 8. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂 (粘性あり)               |
| 3. 黒褐色 (10YR 3/1) 極細粒砂 (土器片含む)          | 9. 暗褐色 (10YR 3/3) 細粒砂 (土器片・マンガン・褐色のブロック土含む) |
| 4. 暗褐色 (10YR 3/3) 細粒砂                   | 10. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 細粒砂                   |
| 5. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 細粒砂 (黒褐色土含む)         |   |
| 6. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂 (細粒砂・炭化物をわずかに含む) |   |

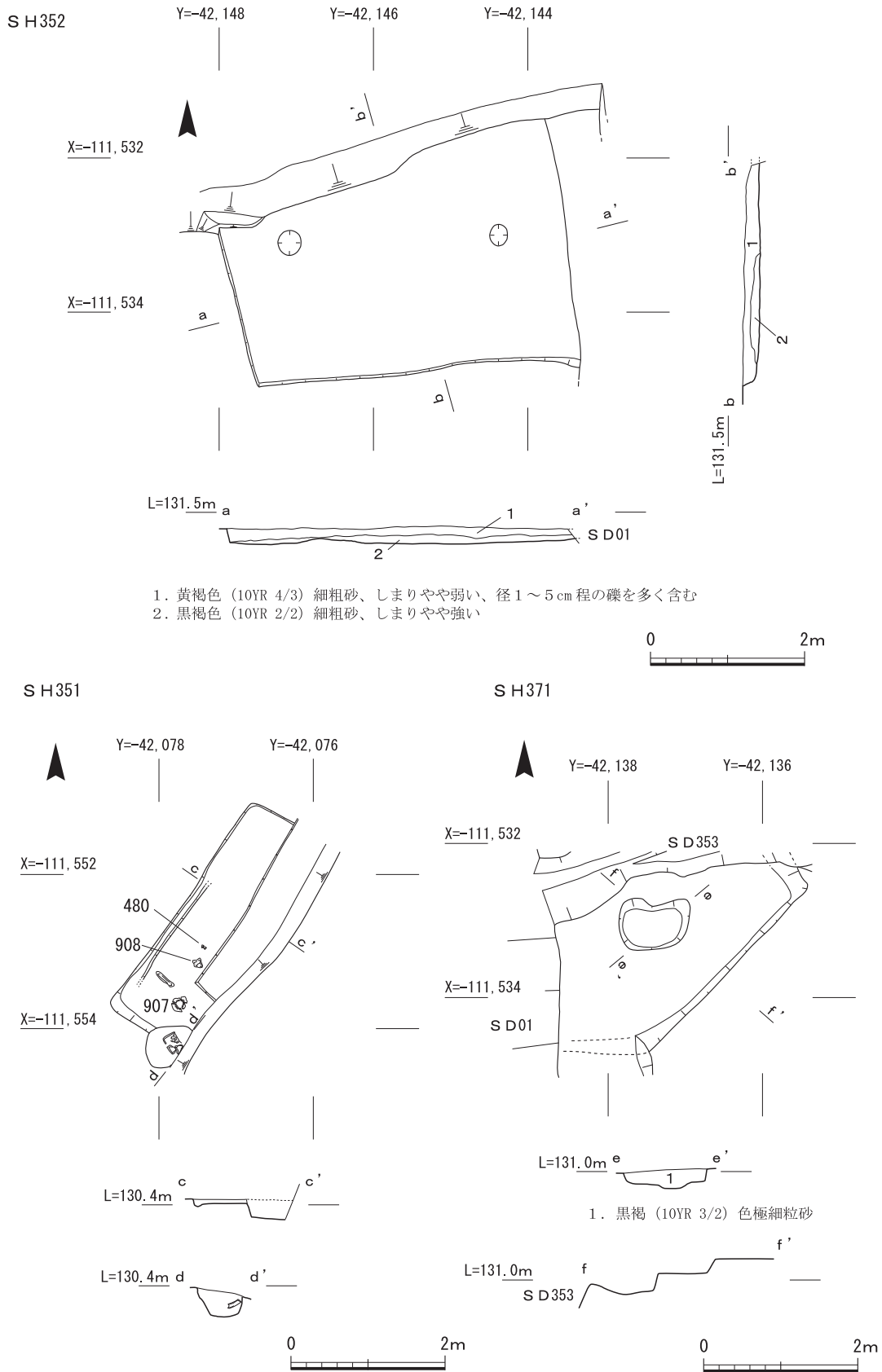
第71図 掘立柱建物 S B454平・断面図(1/80)

竪穴建物 S H371 (第73図) 竪穴建物 S H352と堀 S D01を挟み東側で検出した建物である。西側を堀 S D01に、北側を排水溝 S D353に切られているため、南東側のコーナーの一部分を検出したのみで、規模は不明である。平面形状は方形とみられる。検出中に古代の土器が出土しているが、北側の中世の排水溝 S D353から土師器高杯や布留形甕が出土しているため、建物自体の時期は、他の建物と同じく古墳時代前期末～中期前半を想定しておきたい。



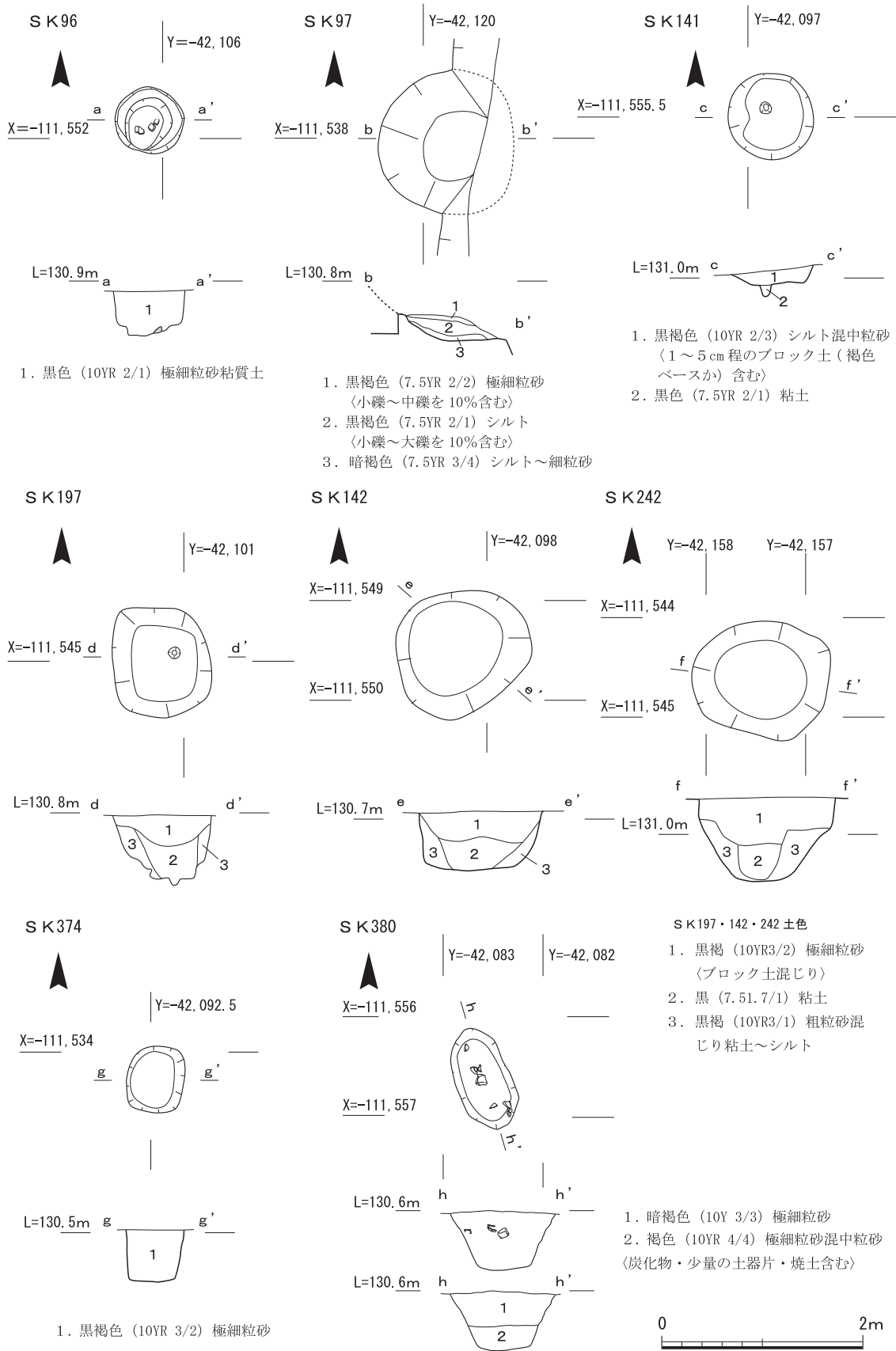
1. 黒褐色 (10YR 2/2) 極細粒砂混じり中粒砂 (径2~6cmの礫含む)
2. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂混じり細粒砂 (土器片・炭化物含む)
3. 黒褐色 (10YR 3/1) 極細粒砂 (径0.5~2cm程の小礫含む)
4. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂混じり中粒砂
5. 黒褐色 (10YR 2/2) 極細粒砂 (少量の地山土含む)
6. 黒褐色 (10YR 3/2) 中粒砂混じり細粒砂 (地山ブロック土をわずかに含む)
7. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂混じり中粒砂
8. 暗褐色 (10YR 3/3) 中粒砂混じり細粒砂 (径0.5cm程の小礫含む)
9. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 中粒砂

第72図 掘立柱建物 S B455平・断面図(1/80)



第73図 竪穴建物 S H 351・352・371平・断面図(1/80)





第74図 土坑 S K 96・97・141・142・197・242・374・380平・断面図(1/60)

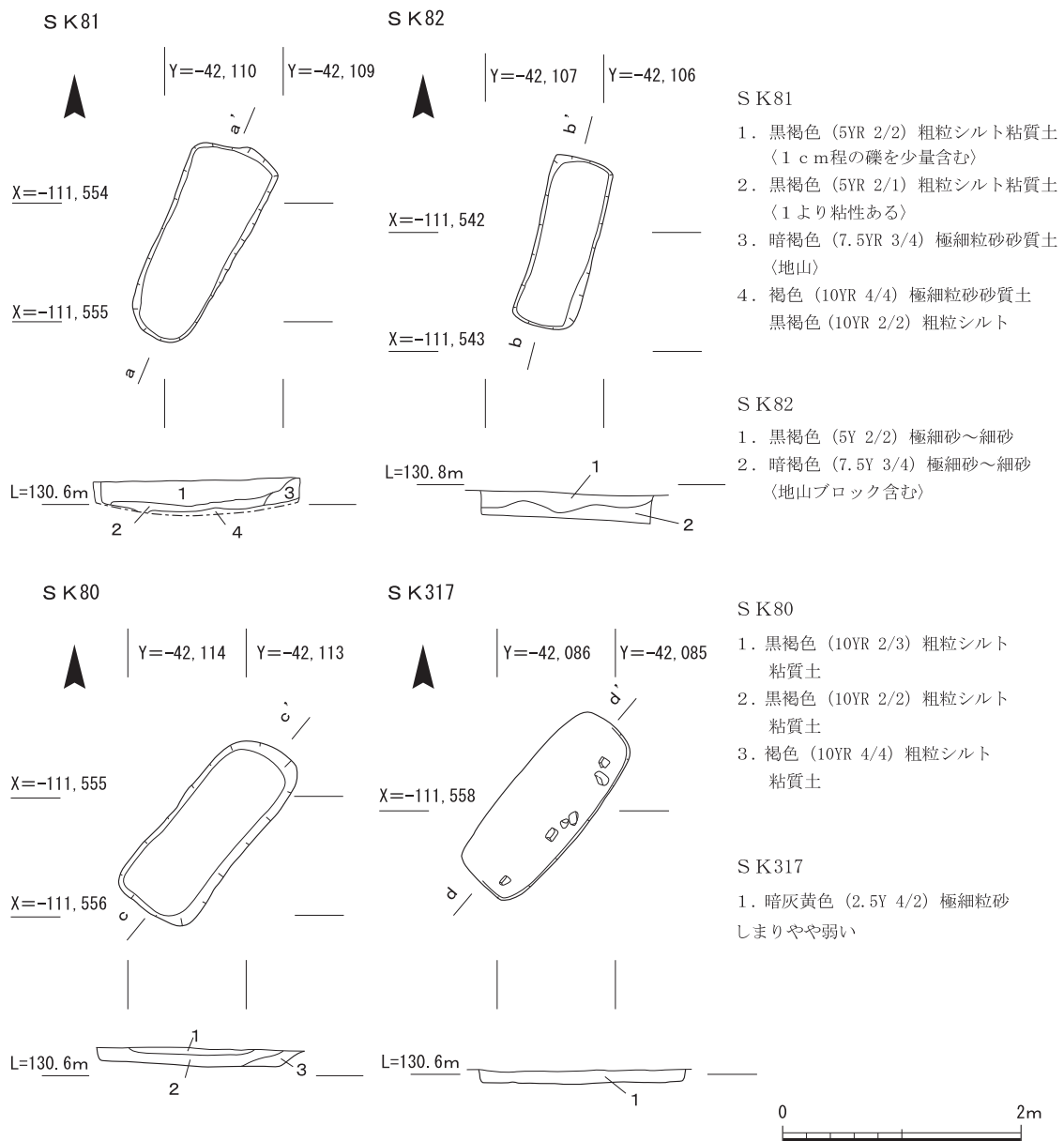
(4) 土坑

① 土坑 S K 380 (第74図)

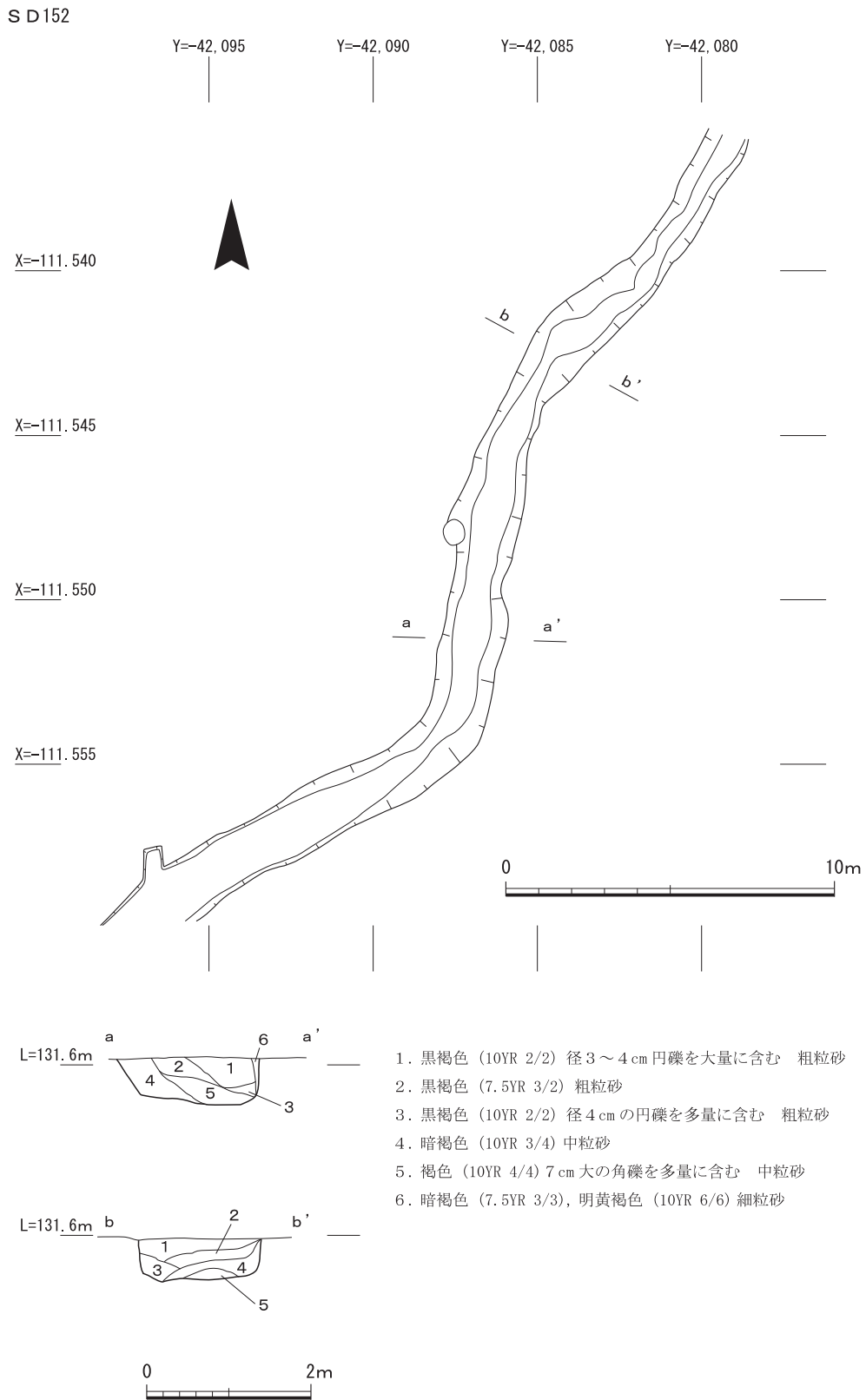
D地区南東隅で検出した長辺1.0m、短辺0.5mの長楕円形の土坑である。断面形状は「U」字状を呈する。1層と2層の境でややまとまって遺物が出土している。下層には炭化物や火を受けた痕跡が認められるため、廃棄土坑の可能性が考えられる。出土遺物(第97図858～863)から、飛鳥時代の遺構と考えられる。

② 円形土坑群

D地区中央部を中心に、複数の円形の土坑を検出した。床面に径0.1cm程の小ピットを持つものがあり、縄文時代の陥し穴である可能性も考慮に入れ調査を行ったが、縄文土器は出土していない。



第75図 土坑 S K 80～82・317平・断面図(1/60)



第76図 溝 S D 152 平・断面図(1/200・1/80)

土坑S K 97(第74図) D地区西端で検出した。堀S D03に切られるため、全形は不明である。出土遺物はない。

土坑S K 141(第74図) D地区中央南端で検出した直径0.8mの円形の土坑である。残存深は約0.15mであるが本来はより深い土坑であったと考えられる。中央部には直径0.15m程度の小ピットが検出された。出土遺物はない。

土坑S K 197(第74図) S K 141の約6m北西で検出した直径0.9mの円形の土坑である。埋土は黒褐色で粘性が強い。中央部には直径0.15m程度の小ピットが検出された。出土遺物はない。

土坑S K 142(第74図) S K 197の約6m北西で検出した直径1.3mの円形の土坑である。埋土は黒褐色で粘性が強い。中央部の小ピットは認められなかったが、S K 197と埋土が共通しており、一連の遺構である可能性が高い。出土遺物はない。

土坑S K 242(第74図) B地区の西端で検出した直径1.5mの円形の土坑である。中世の遺構と同一面で検出したが、埋土は黒褐色で粘性が強く、明らかに時期を異にするものと考えられるため、下層遺構と判断した。中央部には直径0.25mのピットが認められる。出土遺物はない。

土坑S K 374(第74図) D地区北端で検出した土坑である。埋土が他の円形土坑群と共通する。出土遺物はない。

### ③長方形土坑群

長方形土坑群はD地区を中心に複数基を検出した。北から東へ20～30°振っており一連の遺構と考えられる。当初、土壙墓の可能性を考慮して掘削を行ったが、木棺の痕跡などは確認できなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。以下、状況がわかるものを中心に報告する。

土坑S K 80(第75図) D地区西端で検出した幅0.7m、長さ1.7mの長方形の土坑である。埋土は礫混じりで、シルト質である。出土遺物はない。

土坑S K 81(第75図) S K 80の西隣で検出した幅0.7m、長さ1.8mの長方形の土坑である。埋土は礫混じりで、シルト質である。出土遺物はない。

土坑S K 82(第75図) S K 81の約10m北東で検出した幅0.5m、長さ1.5mの長方形の土坑である。壁が垂直に掘りこまれており、埋土には地山由来のブロック土を含む。出土遺物はない。

土坑S K 317(第75図) D地区南東隅で検出した、幅0.7m、長さ1.6mの隅丸長方形の土坑である。上面検出中には礫が認められた。出土遺物はない。

### (5)溝

溝S D 152(第76図) D地区東側で検出した幅約1.8mを測る溝である。蛇行しながら、南から北へ流下したものと考えられる。埋土中には礫を多量に含み、下層ではわずかにラミナ状の堆積が認められる。出土遺物はなく、時期は不明だが、一部が古代の柱穴に切られるため、古代以前の遺構と考えられる。

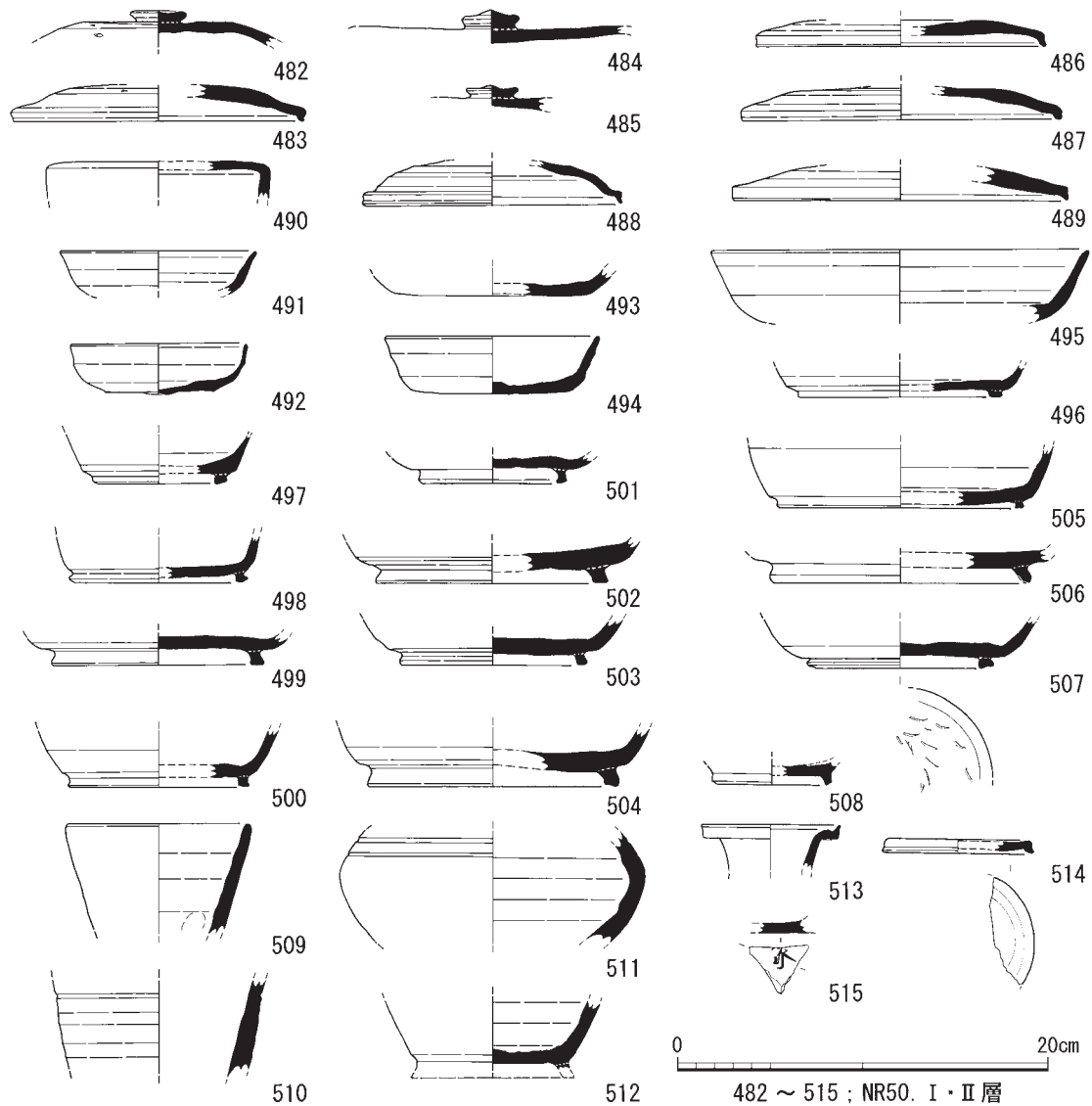
3)C地区出土遺物

(1)土器

開析谷NR50では、前述の大別層位ごとに掘削及び遺物の取り上げを行った。当然、一部に層位の混濁はあるが、おおむね、V層：古墳時代前期後半～中期初頭、IV層：古墳時代中期前半、III層：古墳時代後期～飛鳥時代前半、I・II層：飛鳥時代後半～奈良時代前半である。遺物の記述にあたっては、注40の文献を参考にした。<sup>(注40)</sup>

開析谷NR50(I・II層)(第77～80図) 482～584は開析谷NR50のI・II層出土遺物である。I・II層では、遺物が混在した状態で出土しているため、ここでは両者を合わせて報告する。

482～489は須恵器杯蓋B蓋である。482はやや焼成が甘く、断面は赤褐色を呈する。天井部はナデと回転ヘラケズリが認められる。484は天井部しか残存していない。反りが強く、外面には自然釉が多量にかかる。488はやや古相の遺物で、内面には屈曲部が残る。内外面とも平滑に仕上げられている。490は鋭く屈曲する蓋で、壺蓋と考えられる。



第77図 C地区第2面出土遺物(1)



491～494は須恵器杯Aである。492・494はヘラ切り未調整の杯で、内面は縞状にナデの痕跡が認められる。493は底部のみ残存している。内面には、一部に漆が付着する。495は口縁部の一部しか残存していないが、口径20cmを越す大形の杯である。

496～507は須恵器杯Bである。496は扁平な貼り付け高台を持ち、底部外面には爪圧痕が多く認められる。499は内面が強く研磨され、横方向の擦痕が認められることから、杯蓋転用硯の可能性もある。肉眼では墨痕は確認できない。501の高台は三日月状となる。502・504は厚手の底部で、外面はナデによる凸凹が著しい。杯ではなく、壺類の底部の可能性もある。507はやや焼成が甘く、断面は赤褐色を呈する。底部外面には爪圧痕が顕著に残る。508は底部に緑がかった釉薬がみられるので緑釉陶器の小形の壺であろうか。

509～513は壺類である。509は内外面とも自然釉が顕著に付着する。511は壺肩部で、沈線が2条施される。514は、肉眼では墨痕跡は確認できないが、内面が著しく摩耗しており、小形の杯蓋を転用硯とした可能性がある。515は、墨書土器である。杯底部に「家」が書かれる。丹波全域では600点以上の墨書土器が出土しているというが、曾我部町内では初例である。<sup>(注41)</sup>

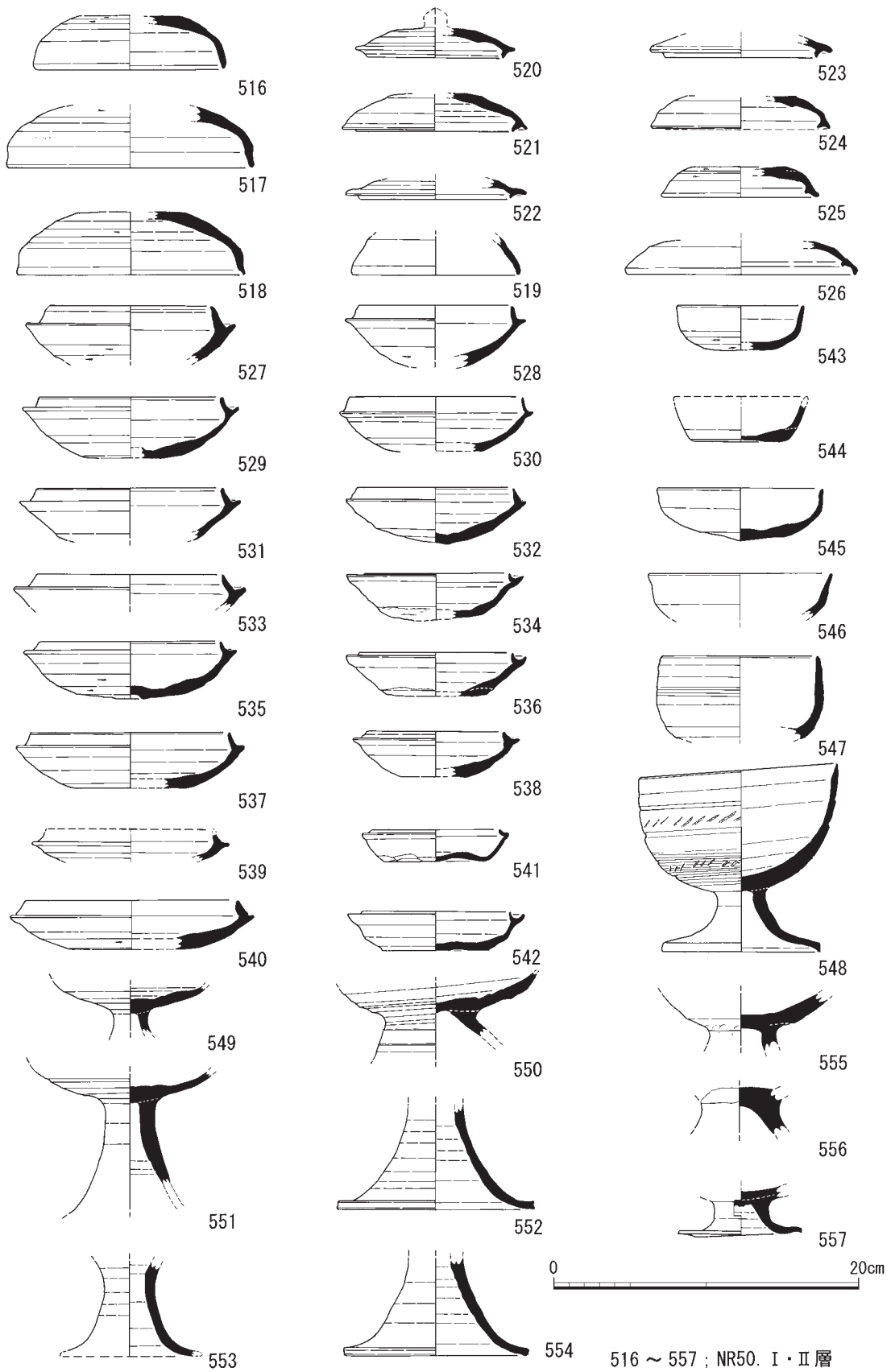
516～519は須恵器杯H蓋である。516は焼成が甘く、赤褐色を呈する。516・517のケズリは天井部には及んでいない。518は口縁部付近で鋭く屈曲するもので、端面には段を持つ。やや古相を示すものか。520～525は須恵器杯G蓋である。つまみ部まで残るものはない。526は、内面にかえりを持つ杯B蓋である。

527～542は須恵器杯Hである。529は底部まで回転ヘラケズリが認められる。底部外面にはヘラ記号のような痕跡がある。532はN R 50検出中に出土したもので、完形で残る。外面は側面の一部にヘラケズリが認められるが、天井部は削り残す。口径は9.0cmを測る。533は口縁部のみ残るもので、焼成が甘く土師質である。534は粗製の杯で、外面には凹凸が残る。他の個体でも見られる特徴だが、底部付近が厚く、その上に粘土紐を付加するように貼り付けた痕跡が観察できる。537は底部ヘラ切り未調整で、底部外面にヘラ記号がある。540は外面に2次被熱を受けた痕跡がある扁平な杯で、口縁部に対して器高が極端に低い。541は扁平な体部で、立ち上がりは低い。他のものと比較して薄く、焼成も良好である。外面には手持ちヘラケズリの痕跡が認められる。

543～546は須恵器杯Gである。543は口径8cm台に復元できる小形品で、外面に底部までヘラケズリが認められる。杯Gとして図化したのが、壺蓋の可能性もある。544は扁平な底部をもち、外面はヘラ切り未調整である。545は焼成が甘く、軟質。外面に強いヘラケズリの痕跡を残す。

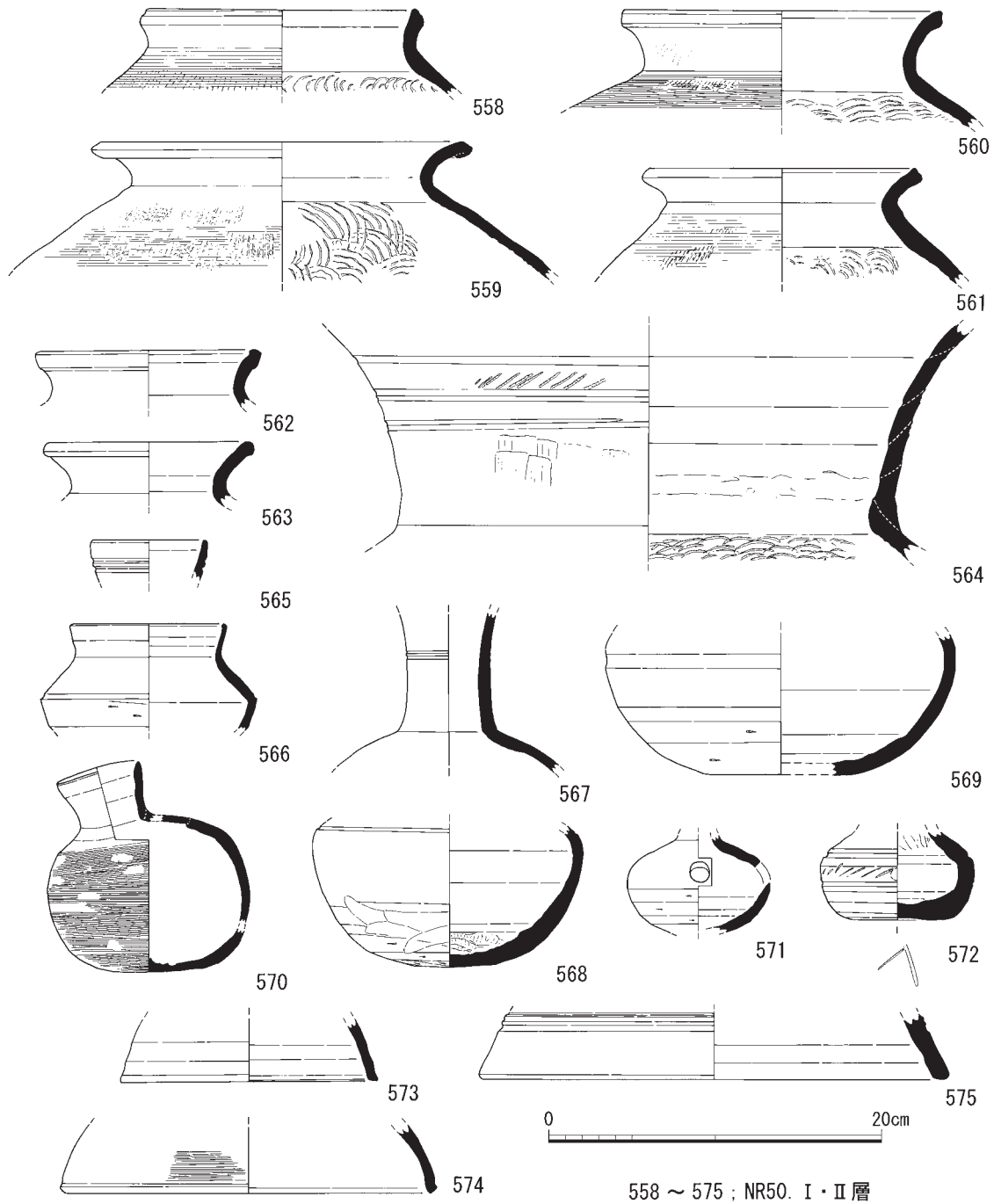
547は深手の椀で脚付椀と考えられる。体部中位には2条の弱い沈線が巡る。体部下半はヘラミガキの痕跡が認められる。548はほぼ完形で残る脚付椀である。体部は沈線とキザミメ、カキメで施文する。焼成時の歪みが大きく、口縁部は楕円形状となる。

549・550は内面に粘土の輪積痕を顕著に残す須恵器脚部で、脚付の壺類であろうか。551～554は須恵器高杯脚部である。いずれも外面にナデの痕跡を残し、スカシ孔は認められない。556は低く、扁平な脚台で、焼成は軟質。557は小形の脚台である。脚内面頂部はヘラケズリにより突起状となっている。

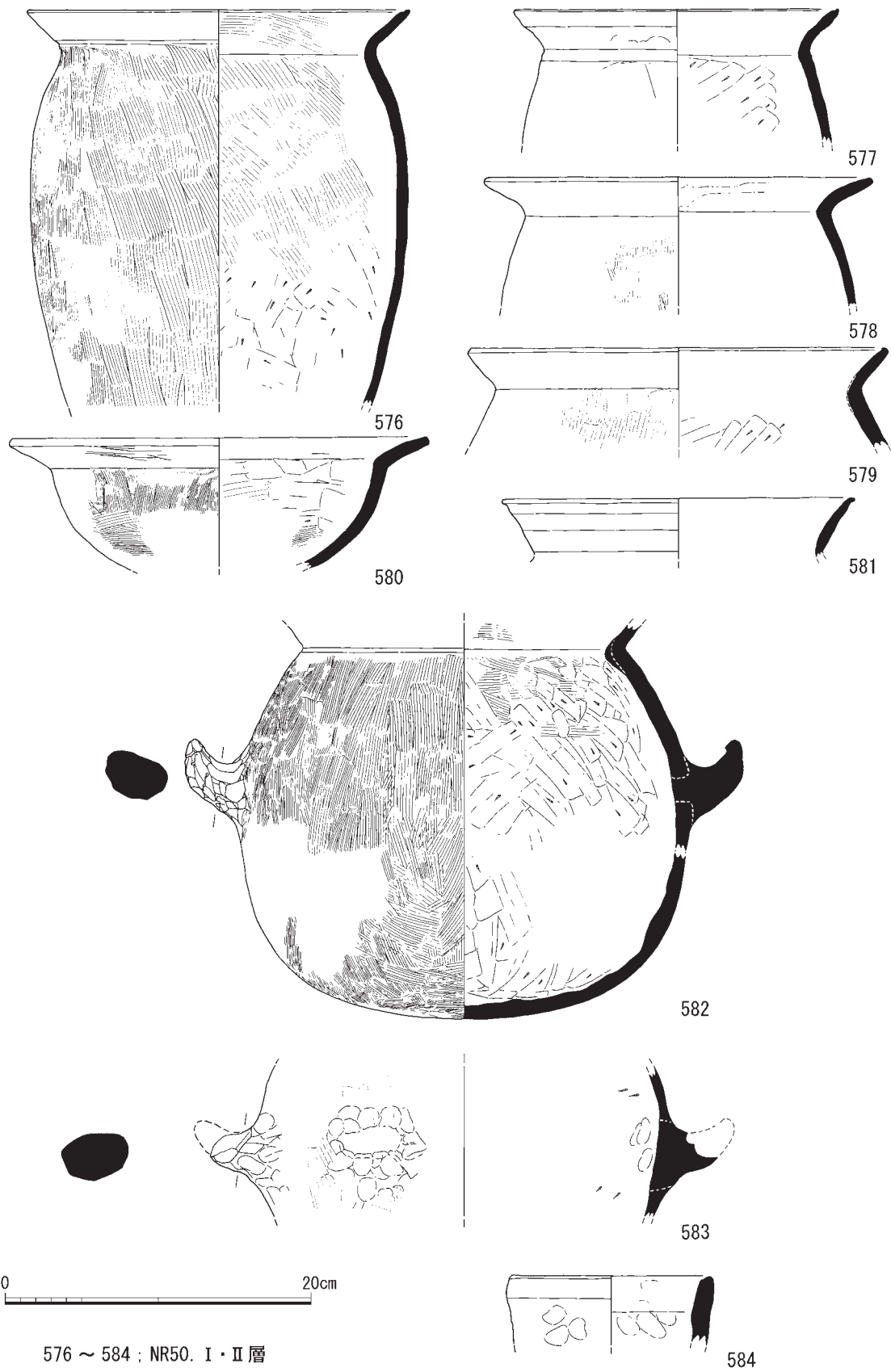


第78図 C地区第2面出土遺物(2)

558～569は須恵器壺類である。壺類の口縁部はバリエーションが多く、特徴的なものを図化した。558は口縁部を短く直立させ、短頸の壺である。559は粘土紐を外側に折り込むことで口縁部を肥厚させる。560は外反する口縁部を持ち、端部には面を持たせる。561は肩部から「く」字状に屈曲させる口縁部である。いずれの壺も、内面の当て具痕は頸部直下までは及ばないこと、肩部にはカキメが施されることなど製作技術上の共通点が認められる。562・563は中形の須恵器壺である。562はナデにより口縁部を上方に拡張する。564は口径が40cmを超す大形の須恵器甕である。566は肩部に沈線が1条めぐる、須恵器短頸壺である。薄手で焼成は良好である。567は平



第79図 C地区第2面出土遺物(3)



第80図 C地区第2面出土遺物(4)

安時代に下る須恵器長頸壺か。外面には自然釉がかかる。568と胎土・焼成が似るが接点はない。

570は、ほぼ完形の須恵器平瓶である。体部は丸みを帯び、中位～下位にはカキメが施される。内面頸部直下には同心円状の接合痕が残る。開析谷NR50南西岸付近で出土した。571・572は甕である。体部下半は反時計回りの回転ヘラケズリが施される。572は平底で下膨れの器形である。器壁は厚く、底部付近では約1.5cmを測る。焼成は軟質である。体部中位にはキザミメが認められる。また、底部外面にはヘラ記号がある。573～575は、いずれも小片のため全形は不明ながら、須恵器器台と考えられる。

576～583は、土師器煮炊具である。576は長胴甕で、外面は全面縦方向のハケメ、内面は上半がハケメ、下半は弱いヘラケズリが施される。口縁部はハケメで仕上げ、口縁端部にはナデによる沈線が認められる。577は口縁部に強いナデを施す甕で、内面は明瞭なヘラケズリが残る。578は他の甕とは異なり、白色系の胎土で、混和剤としてシャモットを多く含んでいる。外面は目の細かいハケメが施される。580は鍋で、外面はハケメ、内面はヘラケズリが認められる。外面に煤が付着する。

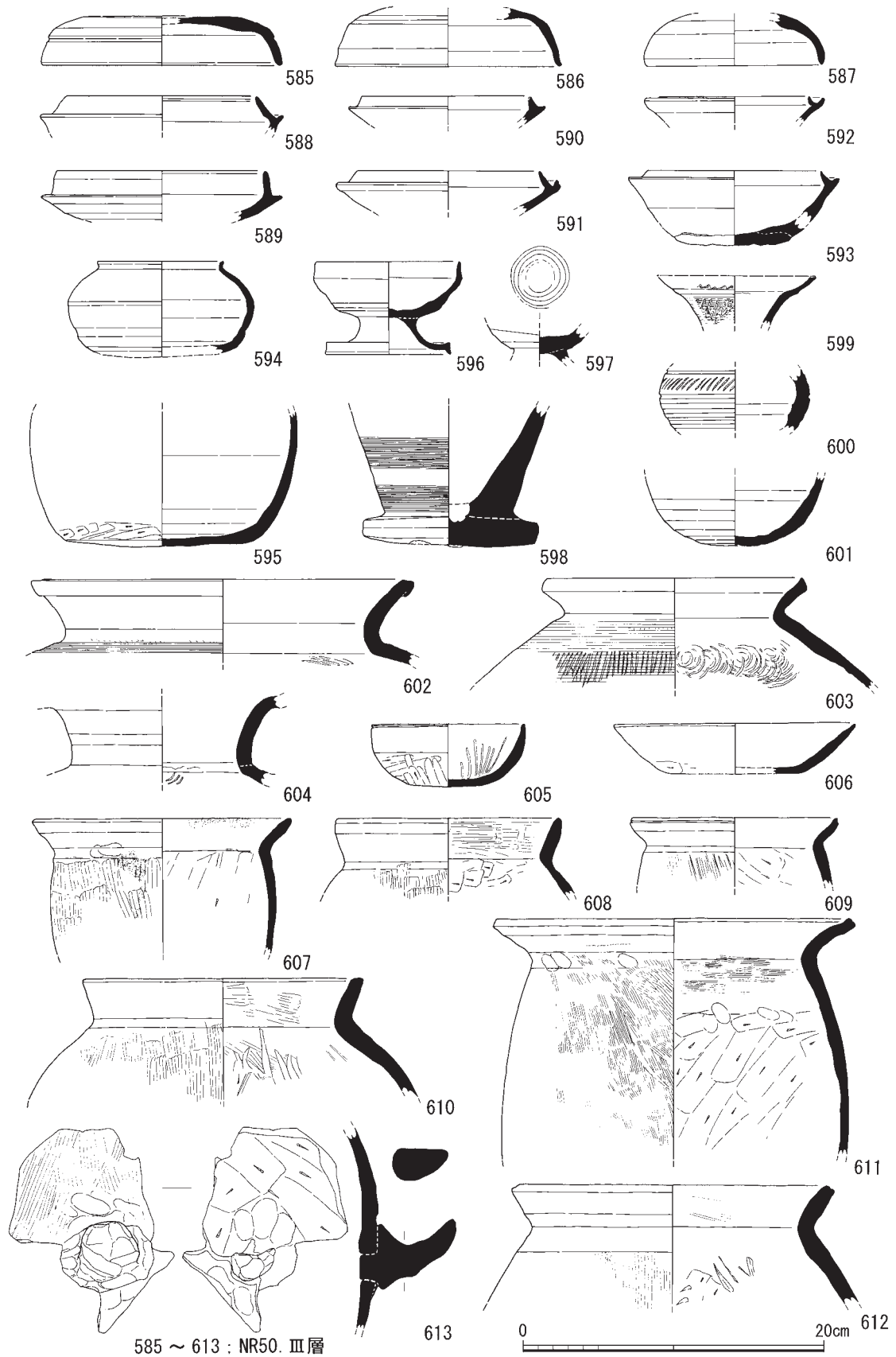
584は、厚手の製塩土器である。端部は指ナデにより凹凸となり、内外面ともにユビ圧痕が顕著に残る。今回の調査で出土した製塩土器は、この1点のみである。

I・II層出土遺物は、古墳時代後期末～奈良時代に属するものである。流路最上層の資料で、層位の混濁はあるものの、おおむねI層が奈良時代、II層が飛鳥時代後半にはほぼ対応すると考えられる。古層を示す下層からの混入や、緑釉陶器や一部の壺類のなかには平安時代に下るものもあるが、おおむね奈良時代中頃、平城Ⅲまでには収まる資料群と考えられる。

開析谷NR50(Ⅲ層)(第81図) 585～604は須恵器である。585～593は杯Hの蓋杯である。585は扁平な形状をする蓋である。586は砂粒をほとんど含まない精製な胎土で、焼成は良好である。口縁部のみ黒変している。587は摩滅が著しく、調整は不明。天井部にヘラ切りの痕跡を残す。内外面とも2次被熱を被った痕跡が認められる。588は口縁部のみの小片である。端部は沈線状の段が認められる。589は口縁部付近までヘラケズリが及ぶ。扁平な形状であるが、立ち上がりは高い。593は木材集積SX444の木材の下から、木材に接するようにして出土した。口縁部と体部に接点はないが、特徴的な胎土と焼成で、同一個体と考えられる。焼成は極めて悪く、内面は土師質である。

594は短頸壺である。595は薄手で深手の鉢D、あるいは鉢Eであろうか。底部付近のみ、不定方向のヘラケズリが認められる。

596は低脚の杯である。全面に黒化処理が施されており、ナデにより平滑に仕上げられる。木材集積SX444付近から出土している。597は脚台であり、内面には鋭利な工具でつけられた渦巻き状の施文が認められる。製形時の痕跡とすると、台付甕などが復元の候補となろう。体部外面にはヘラケズリの痕跡が認められる。598は鉢Fで、いわゆる練り鉢である。内外面とも平滑である。外面には弱いカキメが認められる。599はカキメを施した後、ピッチの短い波状文で施文された甕口縁部である。薄手で焼成は良好。600・601は甕体部である。600は体部下半に幅広の

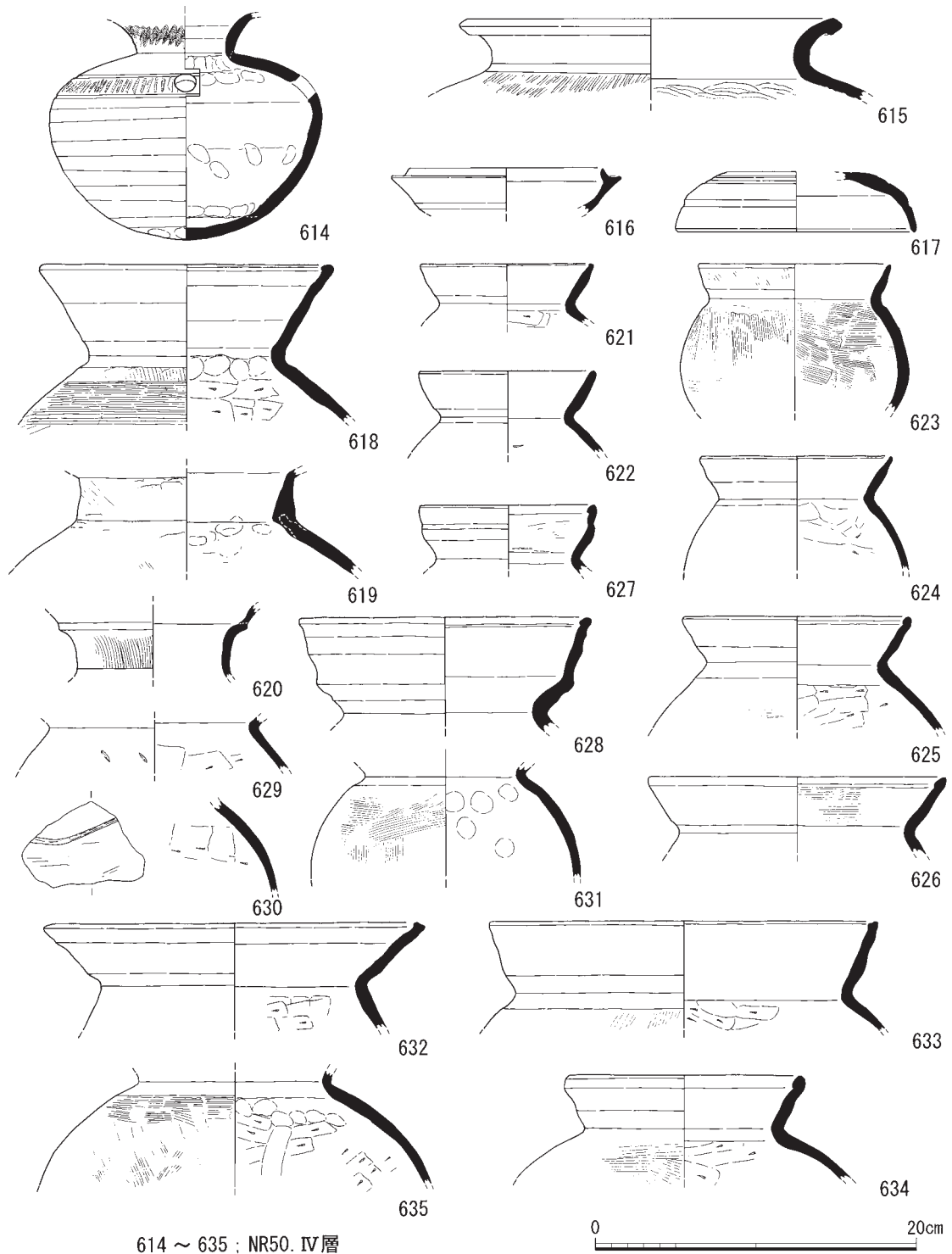


第81図 C地区第2面出土遺物(5)



原体のカキメが、体部中位にはキザミメが施される。601は甗の底部で、反時計回りの回転ヘラケズリが認められる。いずれも器壁は厚いが焼成は良好である。602～604は大形の容器類である。602は広口壺である。口縁端部は外側に巻き込むように成形する。603は短頸壺である。焼成は軟質だが、薄く軽量に仕上げられている。604は須恵器壺頸部である。

605は土師器杯Cである。口径はおおよそ10cm、器高4.2cmを測り、内面には放射状の暗文が



第82図 C地区第2面出土遺物(6)

1段施される。今回の調査で出土した杯Cは破片資料を合わせてもこの1点のみである。606は土師器杯Aである。赤系統で、薄手である。上層からの混入か。

607～613は土師器煮炊具である。全形がわかるものはないが、いずれも外面はハケメ、内面はヘラケズリが施される。610・612は内面に当て具のような痕跡が認められる。

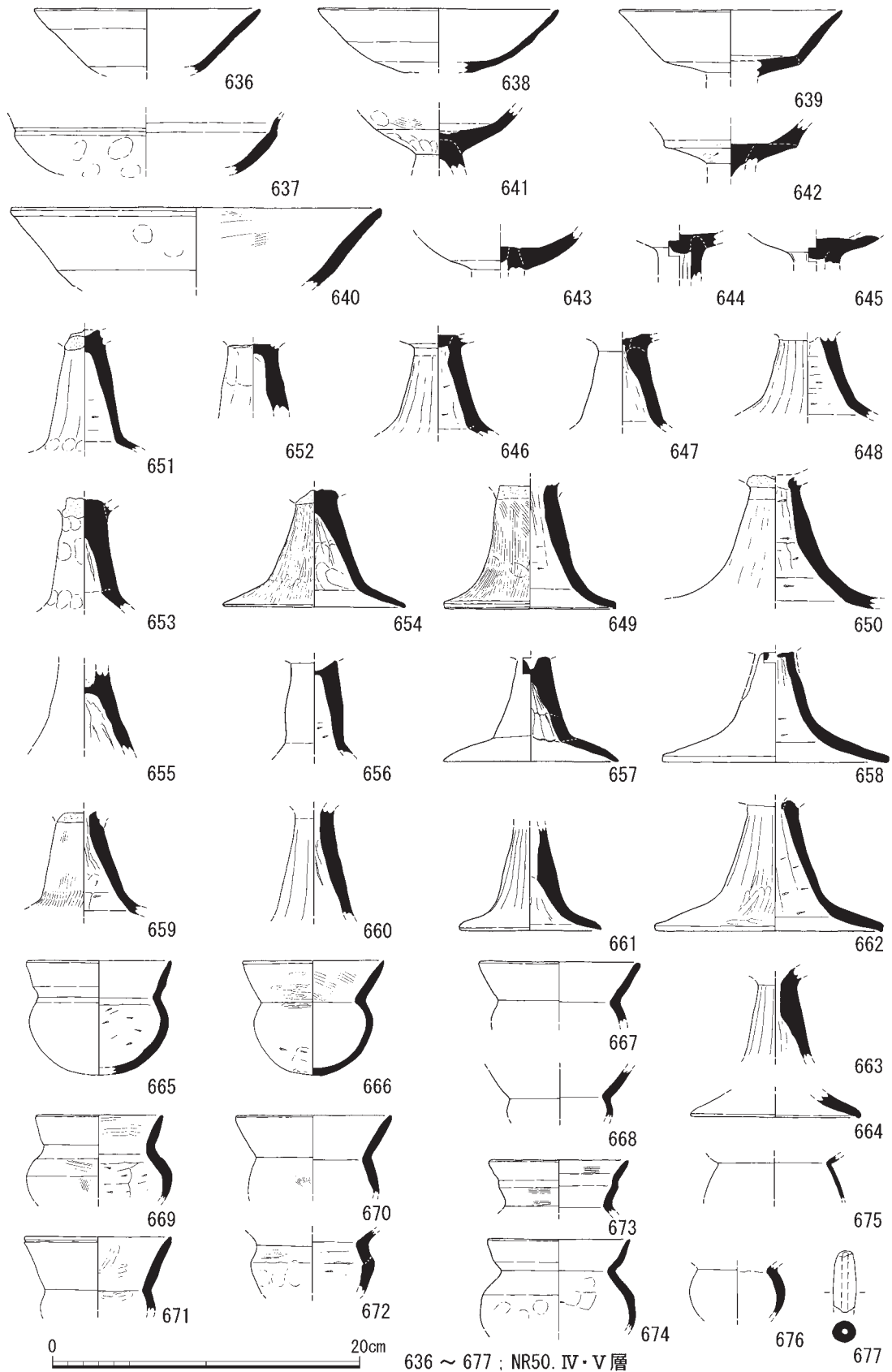
開析谷NR50(Ⅳ・Ⅴ層)(第82～84図) Ⅳ層出土土器は土師器が主体で、須恵器は上層からの混入を除くと614のみである。Ⅳ層とⅤ層の土器は接合するものが多く、形式的にも分別が難しいものが多いため、合わせて報告する。

614～617は須恵器である。614は大形の甕で、頸部にピッチの細かい波状文、体部にキザミメが施される。体部下半は左回りのヘラケズリする。古墳時代中期、TK208並行期と考えられる。615～617もⅣ層出土として取り上げたが、Ⅲ層の遺物に近い時期と考えられ、混入の可能性が高い。615は口縁端部が外側に肥厚する広口壺である。616・617は、TK43並行期の杯Hとみられる。

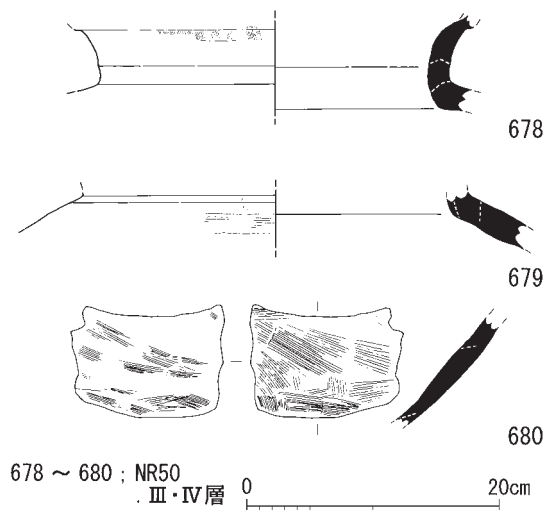
618～676は土師器である。618～620は壺である。618は布留系の直口壺で、肩部に楕円直線文が施される。619は頸部がやや内傾する大形の二重口縁壺で、東部瀬戸内系統の可能性はある。620は山陰系統の二重口縁壺頸部である。

621～634は甕である。621～624は「く」の字状口縁の甕である。多くは内面にヘラケズリが認められる。623はやや粗雑な作りの甕で、内外面ともハケメで仕上げる。いずれも古墳時代中期の遺物と考えられる。625・626・634は口縁部を肥厚させる布留系のものである。図化していない小片も含めると、当遺構出土のものは布留系の甕が主体となる。625は口縁部～肩部に強いナデ痕を残す。胴部外面にはわずかにヨコハケの痕跡が認められる。634は器壁が厚く、頸部の締まりも強いもので、古墳時代中期に下るものか。629は肩部に米粒状の刺突文が、630は肩部にヘラ描文が認められるもので、いずれも布留系の甕である。627は有段口縁甕で、端部をやや肥厚させる。在来系統甕の最終形態と考えられる。628は山陰系の複合口縁甕である。器壁は古墳時代前期のものとしては厚手で、端部は布留形甕と同様に肥厚させる。632・633は大形の「く」の字状口縁甕である。633は直立気味の口縁部で、頸部直下からケズリを施す。胎土には砂粒を多量に含み、白灰色に焼きあがるなど、布留系統の甕とはやや異なっている。635は頸部直下にユビオサエが認められる。壺の可能性もあるが不明。

636～664は高杯である。636・638は山陰系統高杯の口縁部である。内外面とも強いナデで成形する。636の胎土には混和剤として砂粒を多量に含む。638は赤橙色で、精製された胎土である。口縁端部には煤が付着しており、火を受けたと考えられる。637は屈曲部に沈線が入る杯部で、下半は椀状となる。639は有段高杯である。小形の杯部で、段は明瞭ではない。脚部を欠くが、接合は挿入付加法によるものとみられる。640は大形の杯部片である。641～664は脚部を一括した。642～650は円盤充填技法によるものである。642は径の小さい有段高杯である。646は内面上半には絞り痕を残し、下半はヘラケズリである。外面は縦方向に面を持つように成形される。647は内面に絞り痕を残し、内面には棒状の刺突痕が認められる。648～650は幅広短脚の脚柱部であり、有段口縁高杯とみられる。内面は全面ヘラケズリ。649は、内面は全面ヘラケズリで、外面には



第83図 C地区第2面出土遺物(7)



第84図 C地区第2面出土遺物(8)

縦方向のハケメが認められる。651~658は挿入加法によるものである。651は内面の絞り痕をヘラケズリで消す。接合のための調整であろうか、上面は3mmほど凹みがある。654は内面の絞り痕をヘラケズリで消す。上面には杯部と接合するためのヘラによるキザミメが認められる。652は粗製で器壁が厚い。混和剤には有色鉱物を含み、焼き上がりは茶褐色を呈する。653は内面脚裾部に顕著に接合痕を残すもので、器壁は厚く、重量感がある。655~657は上面に3~10mmほど凹みがあるものである。杯部との接合に伴う何らかの処理であろうか。657は内面に粘土の積み上げ痕を残す。662は裾部がスカート状に広がるものである。頂部は刺突が貫通している。円盤充填とみられるが不明。

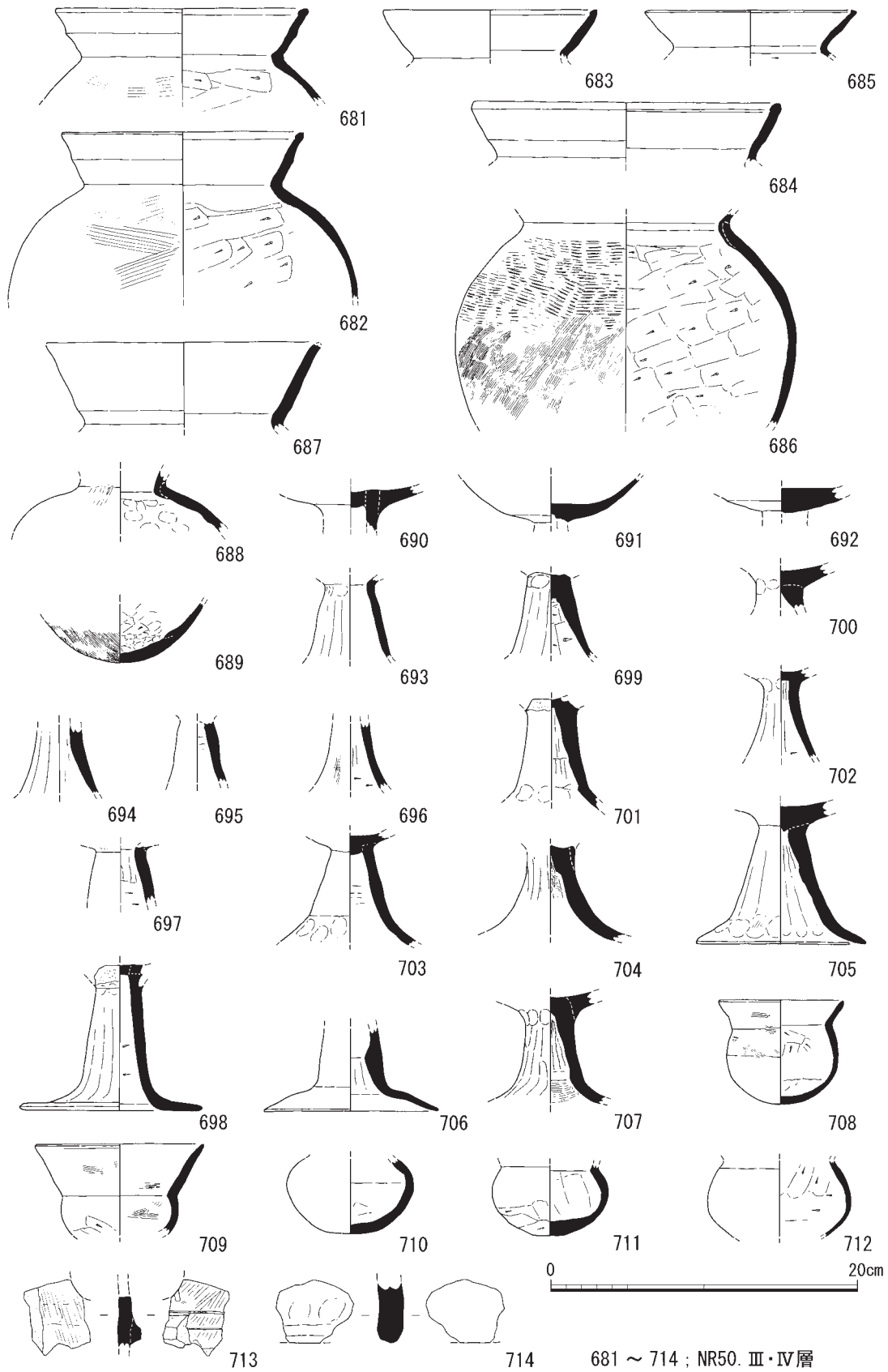
665~676は、小形丸底壺である。665は砂粒を多量に含む粗製のもので、II群系統のものである。体部内面はヘラケズリが認められ、外面には一部朱とみられる橙色の付着物がある。666はほぼ完存する。摩滅が著しいが、橙色を呈し、内外面ともヘラミガキの痕跡が認められる。外面底部下半のみ、弱いヘラケズリが施される、I群系統のものである。667は口縁のみの破片で、外面には煤が付着する。669は体部が張った壺系統のもので、体部内面は強いヘラケズリで仕上げる。673は有段口縁の口縁部で、山陰系統か。端部には煤とみられる付着物が認められる。674は灰白色を呈し、口縁部は上方にナデにより拡張する。体部内面は弱いヘラケズリを行う。

677は土師質の土錘である。NR50で出土した土錘はこの1点のみである。

678~680は大形の容器類である。678は複合口縁壺の頸部である。胎土には片岩を含み、二次口縁部が内傾する東四国系の大形壺である。679は複合口縁壺の肩部である。678と同一個体と考えられるが、接点はない。680は大形壺の体部下半と考えられる。内外面ともハケメで仕上げられる。胎土には角閃石とみられる有色鉱物を含み、焼き上がりは茶褐色を呈する、いわゆる生駒山西麓産胎土である。

開析谷NR50(各層位)(第85図) 681~712は、I~III層で出土した古式土師器を一括した。本来はIV層あるいはV層に伴っていたとみられる。

681~684は布留形甕である。681・682は、口縁端部をやや上方に拡張するもので、山陰系統の布留形甕と考えられる。古墳時代中期前半か。685は端部をシャープにつまみ上げる甕の口縁部で、ケズリは頸部直下まで及ぶ。初現期の布留形甕とみられる。686は外面の摩滅が著しいが、体部上半は水平方向のタタキの痕跡がわずかに認められ、下半は斜め方向のハケメである。内面は右上がりのヘラケズリで、頸部直下はケズリ残す。庄内系統の甕の可能性もあるが、体部が厚く、口縁部を欠くため、明らかではない。687は布留系統の直口壺である。688は無文の二重口縁壺肩



第85図 C地区第2面出土遺物(9)

部とみられる。頸部は細く、接合痕を明瞭に残す。689は小形甕の底部か。内面にはユビ圧痕を明瞭に残し、外面は全面が被熱する。

690～707は土師器高杯である。形式的にはⅣ・Ⅴ層出土のものと大差ない。691は内外面は赤褐色を呈し、断面は灰黒色である。脚内面頂部には刺突痕が認められる。692は接合が剥がれた痕跡がみられる杯部で、挿入付加や円盤充填に拠らないタイプのものである。内面は2次被熱を受ける。693は精製された赤系胎土の脚部である。

708～712は土師器小形丸底壺である。708は内面ヘラケズリ、外面ハケメで仕上げる粗製の小形丸底壺である。外面には煤が付着する。709はやや厚手だが、一部にミガキが残る。口縁端部には弱い沈線がみられる。

以上のように、N R50Ⅳ・Ⅴ層出土土器を概観した。壺では620、甕では629・630、小形丸底壺では666・679などはやや古相を呈し、布留2式以前にさかのぼる遺物と考えられる。しかし、高杯は長脚高杯が含まれずに有段高杯が主体となること、小形器台が認められないことなどから、総合的には古墳時代前期末、布留3式新相以降に中心があると考えられる。また、確実にこの層位に伴う須恵器は614のみで、下限は中期中葉、TK208並行期に求められよう。

## (2) 埴輪(第85図713・714)

わずかながら、埴輪が出土している。713はⅡ・Ⅲ層から出土した円筒埴輪の体部片である。突帯の断面形状は台形状で、剥離面には沈線による突帯設定技法が認められる。内外面とも縦方向のハケメである。また、円形のスカシ孔が一部残る。黒斑は認められないが断面に黒色部が認められ、野焼き焼成と考えられる。714は円筒埴輪の底部と考えられる。ナデで仕上げられ、ハケメは認められない。他にも大形の土師質の破片は出土しているが、埴輪とわかるのはこの2破片のみである。これらの埴輪は、以上の特徴から、川西編年Ⅱ期、古墳時代前期後半～中期初頭の埴輪と考えられる。<sup>(注42)</sup>

亀岡盆地において、古墳時代前期の埴輪が出土している古墳はなく、当地域では最古級の埴輪資料となった。前期古墳の資料としては穴太で採取されたという筒形銅器があるが、犬飼遺跡とはやや距離がある。当遺跡周辺で、今後埋没古墳が検出される可能性もある。(桐井理揮)

## (3) 木製品

**木製品の分類** 木製品の分類は、道具の用途によって行なわれる。一方で、出土する木質遺物の多くは用途がわからないものが多数であり、報告対象とならないものも多い。しかしながら、完成品だけを遺跡の中で抜き出してしまうと、その背後にあるはずの木工活動が切り離されてしまい、見えづらくなる。そこで本報告では、遺跡や遺跡周辺での木工活動に迫るため、また完成品の背後にどれくらい木材量があるのかを推定するために、完成品以外の木質遺物についても数量把握を行なった。用途で分類することが不可能な木質遺物について、形状での分類を行なった。分類には、『木の考古学』<sup>(注43)</sup>の巻末の分類表をもとに、いくつかの分類項目を加えた。以下では、形状の分類を行なった際の基準を示す。

板・板材…板は表面調整されているもの。板材は表面調整がなされておらず、割り裂いた状態



のもの。

薄板…板よりも薄い板。

加工板…表面調整されている板を加工し形作るもの。

棒材…棒状に割り裂かれたもの。

加工棒…棒材に面取りの加工や、端部を加工し形作るもの。

尖端棒…先端が尖った棒材。

留め具(尖端棒)…本遺跡で出土した尖端棒で、長さや加工がある程度共通する一群。屋根材を固定する、「留め具」としての用途を推定したもの。

有頭棒…棒材の端部を何らかの形状に作り出しているもの。

部材片…仕口や特徴的な加工が確認でき、何らかの部材となるもの。

芯持材…芯を含む木取りの木材。

割材…木材を割り裂いたもの。

削りかす…主に、木材の表面を研ったり、刃物をそわせて削りとった際の木屑。木材加工の痕跡を示す。

残材…木材などを加工する際に排出される、不要部分の木塊。木材加工の痕跡を示す。

股木…木が枝分かれている部分。選択的に用いられる場合がある。

雑木…自然木。樹皮がついた枝。周辺の植生を表すことが多い。

樹皮…樹皮の部分。樹皮がついた状態で遺跡に持ち込まれた、あるいはもたらされた木材があったことを示す。サクラ樹皮など有用樹皮もある。

節…加工時に排出される不要部分。もしくは、自然に抜け落ちた節。節から推定直径を復元することができる。<sup>(註44)</sup>

根…樹木の根、もしくは根付近のゆがんだ部分。

燃えさし・付け木…棒状で先端が炭化したもの。

炭化材(その他)…部分的に炭化した木材。

木端…端部に加工痕跡がない、あるいは表面情報の腐植などにより人間活動の痕跡を持たないもの。(浦 蓉子)

**木製品・木材の数量** 開析谷N R50の掘削中には、各層位から夥しい量の木材、木片が出土した。現地ではすべての木材について取り上げを行い、わずかでも加工の痕跡が認められるものを現地で選別し、持ち帰った。整理作業に当たっては、すべての木製品・木材に関して先述の分類に基づいた調査カードを作成し、数量の把握を行った。その数量を示したのが付表5である。

先述のように、自然木に関しては持ち帰っていないものもあり、本来はさらに比率が高くなることが予想されるが、大まかな傾向はつかむことができよう。

各層ともに、用途のわかる木製品が全体の4～7%を占め、用途は不明であるが道具になりうるものや、その背後にある人間活動の結果排出された材や加工時の残材・木屑がおよそ70%か80%を占め、さらに周辺の植生を反映すると考えられる木質遺物が全体のおおよそ5～9%を占

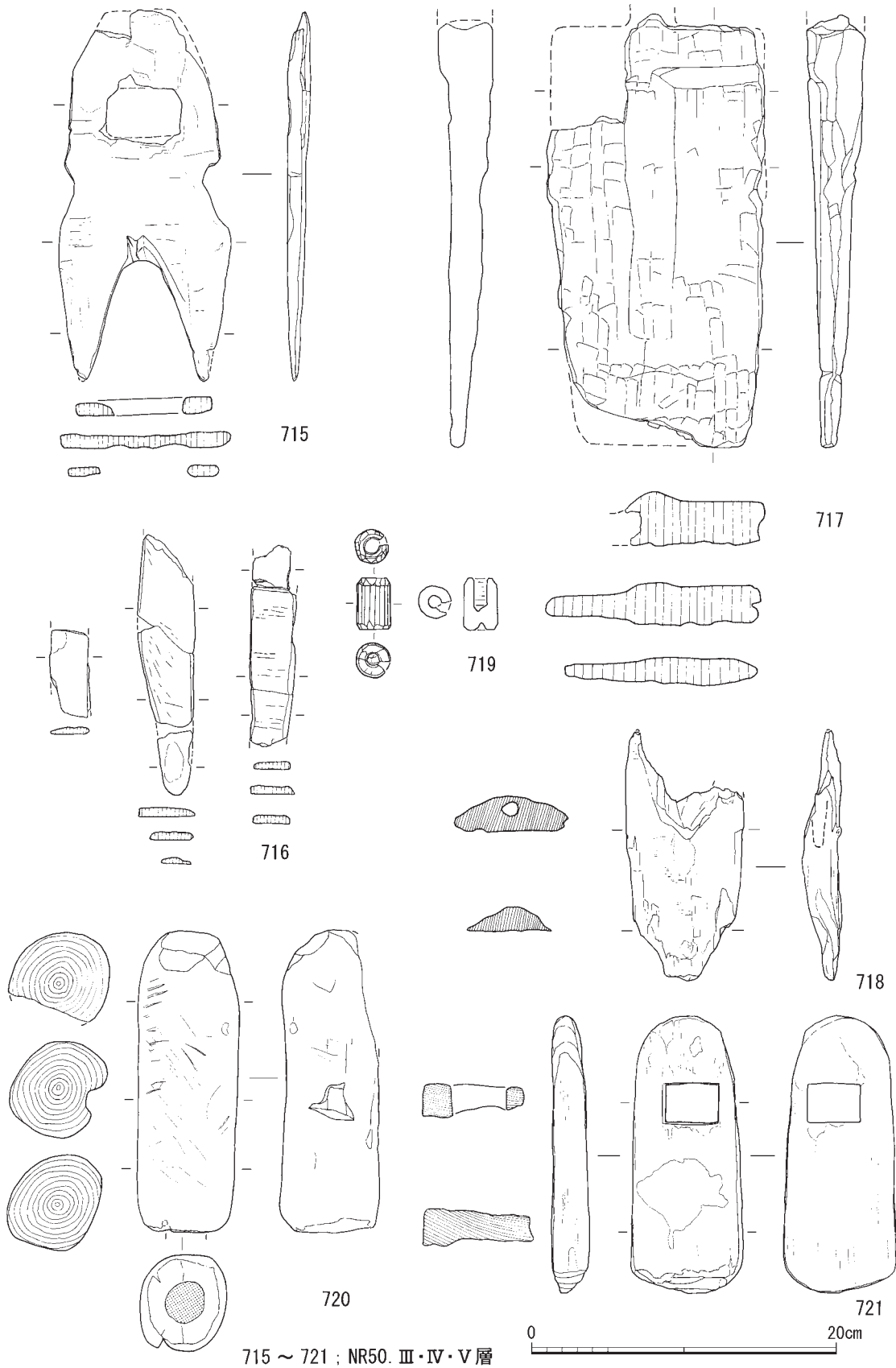
付表5 開析谷N R50出土木製品の組成

分類	I・II層		III層		IV層		V層		合計	
農具	1	0.8%	2	0.5%	7	2.2%			10	1.1%
容器					1	0.3%			1	0.1%
祭祀具			1	0.2%	2	0.6%			3	0.3%
雑具	1	0.8%	2	0.5%	2	0.6%	1	2.0%	6	0.7%
建築部材	1	0.8%	9	2.2%	3	0.9%			13	1.4%
杭・矢板	3	2.4%	9	2.2%	11	3.4%	2	4.1%	25	2.8%
板・板材	21	16.7%	35	8.5%	32	10.0%	22	44.9%	110	12.1%
薄板	9	7.1%	42	10.2%	67	20.9%			118	13.0%
加工板	2	1.6%							2	0.2%
棒材	16	12.7%	89	21.5%	70	21.9%	6	12.2%	181	19.9%
加工棒	2	1.6%	10	2.4%					12	1.3%
尖端棒	4	3.2%	6	1.5%	7	2.2%	1	2.0%	18	2.0%
留め具 (尖端棒)	3	2.4%	1	0.2%					4	0.4%
有頭棒			1	0.2%	2	0.6%			3	0.3%
部材片	4	3.2%	3	0.7%	2	0.6%			9	1.0%
芯持木材	2	1.6%	9	2.2%	4	1.3%			15	1.7%
割材	9	7.1%	38	9.2%	15	4.7%	5	10.2%	67	7.4%
削りかす	8	6.3%	51	12.3%	19	5.9%			78	8.6%
残材	1	0.8%	11	2.7%	11	3.4%	1	2.0%	24	2.6%
又木							3	6.1%	3	0.3%
雑木	5	4.0%	32	7.7%	27	8.4%	4	8.2%	68	7.5%
樹皮	1	0.8%	3	0.7%	2	0.6%			6	0.7%
節	1	0.8%	2	0.5%					3	0.3%
根			3	0.7%					3	0.3%
付け木	4	3.2%	9	2.2%	4	1.3%			17	1.9%
燃えさし	28	22.2%	45	10.9%	32	10.0%	4	8.2%	109	12.0%
木端	16	12.7%	42	10.2%	52	16.3%	2	4.1%	112	12.3%
合計	126	100.0%	413	100.0%	320	100.0%	49	100.0%	908	100.0%

める。報告対象となる遺物は、出土した木質遺物全体の1割弱となる。しかし、その背後には、それらを加工した際の本屑・残材なども含め、7～8割の人間活動によって排出される木材の動きがある。このことを念頭に置いて、遺跡出土の木製品に対しての観察・理解を深めることが重要である。

全体の特徴として、製品や道具類の比率が低率なのに対し、板・板材、あるいは薄板や棒材などが高率となっている。これらの用途は不明ながら、建築部材を含む部材片が一定量出土していることを考えると、なんらかの部材片や加工に伴う痕跡となる可能性もあろう。また、III層に注目すると、削りかすと残材の比率が比較的高い。後述するように、III層では同じ長さに切り揃えたような板材が出土しており、木材加工に伴う活動が付近で行われていた可能性が高い。

なお、器種がわかる製品や部材片に関してはほぼすべての実測図を作成し、掲載している。そ



第86図 C地区第2面出土遺物(10)

の他のものに関しては、代表的なものを取り上げ、図化作業を行った。（浦 蓉子・桐井理揮）

開析谷NR50出土の木製品（第86～93図） 715は直柄のナスビ形又鋏である。716は直柄又鋏の歯である。身部を欠き、それぞれの歯に接点はないが、出土位置が近く同一個体とみられる。最も残りの良い歯は長さ16.8cmある。717は鋤身である。中央には着柄軸（あるいは柄）が認められる。先端に向けて厚さを減じていくが、片面のみ使用による摩滅が著しい。718は鋏鋤身の未製品であろうか。平面形状は先細りで五角形状を呈し、断面形状は三角形となる。

719はソケット状の木製品である。丁寧に作られており、片側には深さ1.5cm程の円形の孔が穿たれている。上面・下面とも面取りされ、内面には削痕が認められる。小形の工具着装具か、あるいは天地逆となり、矢の先端に着装する神頭である可能性もある。神頭の成立は7世紀頃とされていることから、本例は出現期の一例に属するものである。<sup>(注45)</sup>

720は横槌である。身の中央部は使用時の摩滅により窪み、細かなキズが多く認められる。柄部は欠損する。721は詳細は不明ながら農具の可能性のある製品として図化した。扁平な楕円形状を呈し、先端のみ両側から加工されて細くなる。農具とするならば、方形柄孔の小形直柄平鋏か。

722は槽である。平面長方形の一木作りで、立ち上がりが一部残るのみである。723は板状の薄い木材であり、片側面は斜めの加工が認められる。裏面には幅2cm程の浅い窪みがあり、表面は扁平に仕上げられる。全形は不明ながら窪みが脚部の痕跡とみるならば、案の天板の可能性はある。

724は不明木製品である。長さ6.4cmで、方頭を作り出す。先端は欠損している。刀形あるいは刀子形の柄頭の可能性があるが不明。725は刀形の柄部である。片側から抉りを入れ、湾曲させる。724・725とも樹種はヒノキで、木取りは板目である。

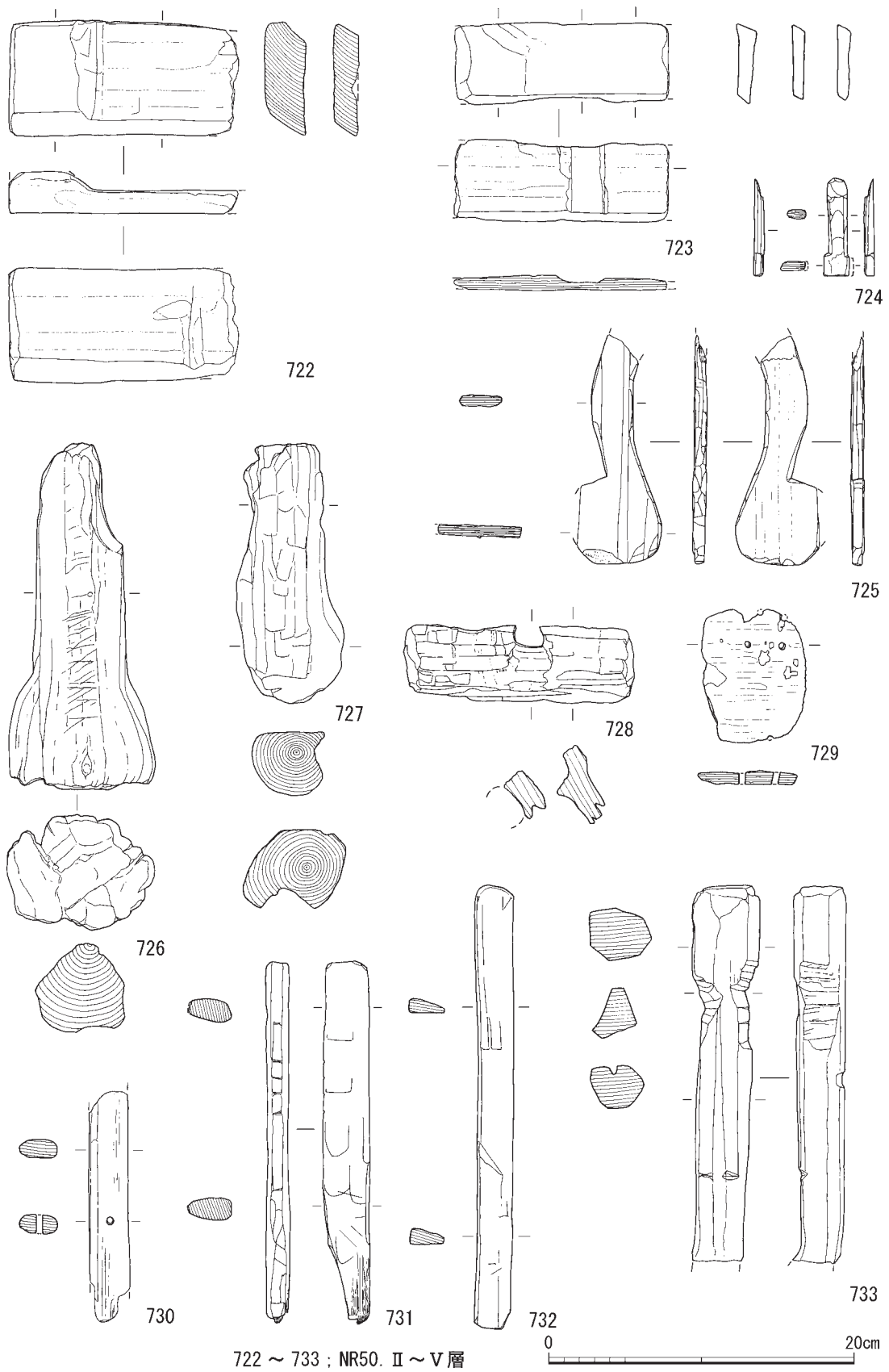
726は芯持材を加工したものである。片側の小口には加工痕が顕著に残り、平坦に仕上げられている。また、断面は不整形な五角形状となり、木裏側は幅2cm程の平坦面を持つ。平坦面は細かい筋状のキズが多く残るため、作業台として使用されたものとする。727も同様に芯持材を加工したもので、平坦面を持つ。キズは目立たないが、何らかの部材、あるいは作業台のようなものであろうか。

728は長辺15cm、短辺5cm程の板材である。中央部には円孔が認められる。編台に伴う錘か。729は平面が楕円形を呈する樹皮の加工品である。確認できるだけで、5か所に、径4～5mm程の円孔が認められる。樹皮製品は紡錘具や板材として報告例があるが、本例の用途は不明である。

730～732は扁平な棒状の部材である。同様の形状のものは多く出土しているが、特徴的なものを取り上げ報告する。730は中央にキリによるとみられる径4mm程の小孔が認められる。用途は不明である。731は先端にかけて細くなる部材で、側面には5か所に、金属器によるとみられるキズが認められる。編台の目盛り板となる可能性がある。733は、いわゆる有頭棒である。くびれ部は手斧とみられる工具で作り出され、加工痕を顕著に残す。頭部を下にするように、NR50に打ち込まれた状態で出土した。

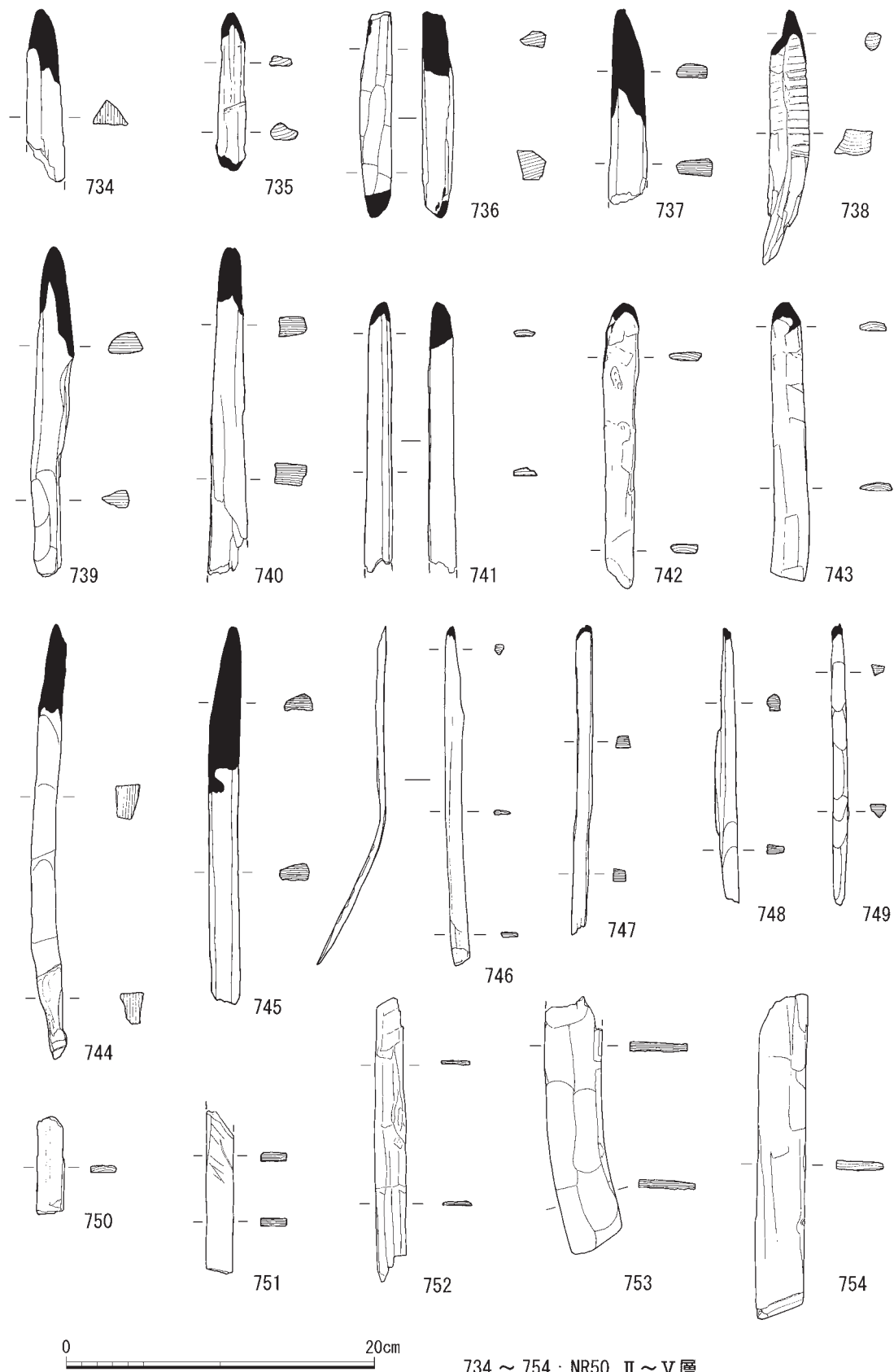
734～749は燃えさしである。燃えさし・付け木の出土量は多く、126点にのぼる。

738は両側面に刃物でつけたようなキズが多数認められる。739は、下端に明確に切断痕が認め



722 ~ 733 ; NR50. II ~ V層

第87図 C地区第2面出土遺物(11)



734 ~ 754 ; NR50. II ~ V層

第88図 C地区第2面出土遺物(12)



られる。742は表面に節が認められ、両側には刃の入りが確認できることから、削りかすと考えられる。744は明確に刃物による加工痕が認められ、削りかすを火付け具として使用したと考えられる。28.2cmを測る大形のもので、両側に煤の痕跡が認められる。745は表面が比較的平滑で、もともと何らかの部材の一部であった可能性も考えられる。746は、中位で強く屈曲する。加工痕が明確に残り、先端には刃の入り部分も確認できることから、削りかすと考えられる。749は全面に加工が認められ、何らかの部材の一部、あるいは削りかすの転用である。燃えさしは火付け、火移しの用途が想定され、他の木製品の製作時に生じた端材によって製作されたと考えられている<sup>(注46)</sup>。犬飼遺跡では、燃えさしの樹種同定は行うことができていないが、節が入ったものや削りかすと同じ特徴を持つものがあることから、残材や破材を利用して火付け具としていたと考えられる。750～754はうす板である。扁平な板材も出土量は多く、100点以上を確認している。

755は平面形状が六角形を呈する板材である。側面は全面加工されており、ほぼ完存する。屋根材の可能性はあるが不明である。756は「凸」状の木材である。本来は板材の先端であったと考えられるが、先端のみを取り去ったものと考えられる。挟り部にはノコギリで切断した痕跡が顕著に残る(図版第94)。757は建築部材である。両端は欠損するが、いずれも仕口を持つ。板目材で樹種はヒノキである。758は両端に仕口を持つ部材である。片端は欠損する。中央部には弱い挟りが認められる。木取りは板目で、樹種はヒノキである。759～761は先端棒である。枝材を使用しているのではなく、大形の材から切り出して作られており、枝と比較してまっすぐで堅い。759は断面形状が楕円形で、表面には顕著な加工はない。下端のみ切り落とし、杭状としている。760は36.1cmを測る。側面は8面となり、先端は尖らせる。761は48.5cmを測る。側面は7面となる。先端は片側から加工している。これらは「留め具」に類例があるというが、出土状況から使用方法に迫ることはできない<sup>(注47)</sup>。

765は板目の板材であり、表面は摩滅が著しい。上方側面に円形の挟りがあることから床板と考えられる。771は板目の板材であり、年輪によって反りがみられる。年輪のカーブは緩く、外側に近い部位と考えられる。樹種はヒノキである。765・771はⅣ層から出土した。

767は丁寧に加工された板材で、片側面は面を持つように加工する。床材、あるいは壁材の一部と考えられる。木取りは追柂目で、樹種はヒノキである。Ⅴ層から出土した。(桐井理揮)

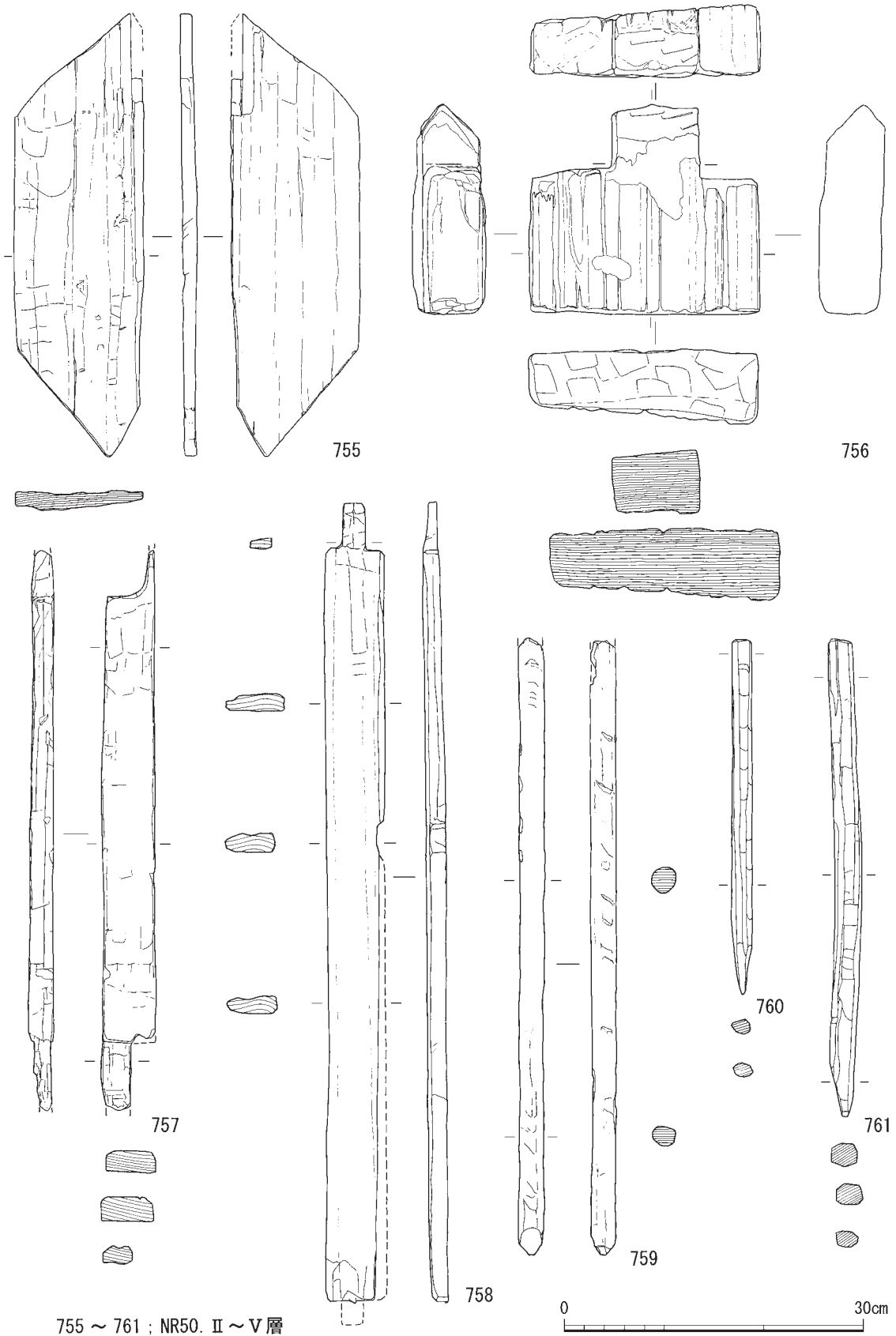
**ナスビ形又鋏の評価** Ⅲ層から出土したナスビ形又鋏(715)は、柄の出土はなかったが、鋏身上半部に柄孔とみられる方形の穿孔が施されていることから、直柄を装着していたと考えられる。柄孔周辺に隆起は見られないが、直柄鋏身でありながら、ナスビ形曲柄鋏のような紐かけ部を有しており、他に類例をみない。以下では、府内の例を参照しつつ、位置づけを考えてみたい。

京都府内における古墳時代後期から古代の鋏身の出土例は少なく、福知山市石本遺跡、向日市鴨田遺跡、長岡京跡で確認されているに過ぎない<sup>(注48)</sup>。石本遺跡では6世紀後半～7世紀初頭にかけて存続した溝内からナスビ形曲柄平鋏の鋏身2点、ナスビ形曲柄又鋏の鋏身が1点及び柄が出土している。平鋏のうち1点は「U」字形鋏鋤先の装着痕跡が確認できる。また、柄は鋏の刃先と逆方向に反り返った反柄と呼ばれるタイプである。鴨田遺跡では包含層内からナスビ形曲柄鋏又

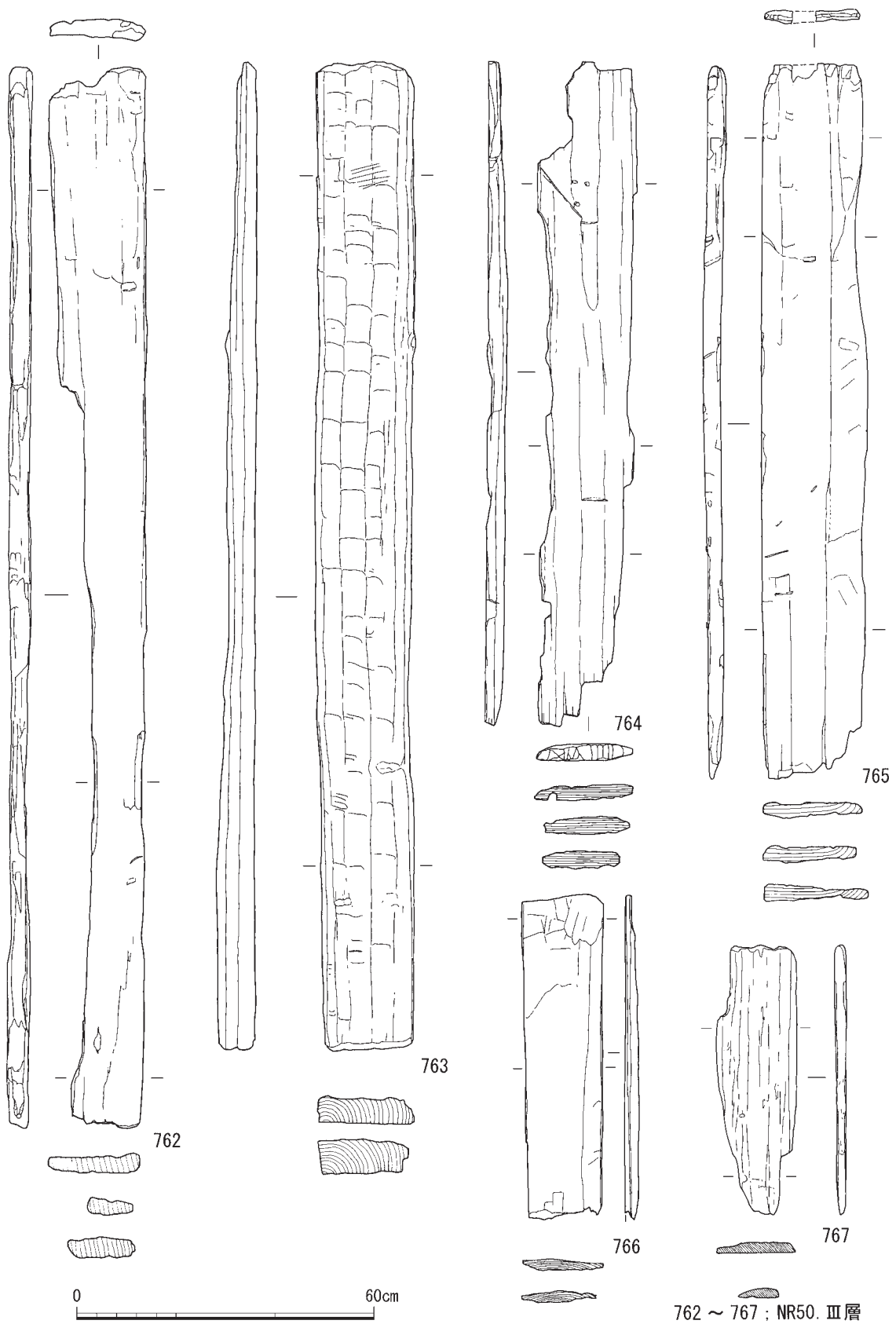
鍬の鍬身が出土しており、帰属時期は5世紀後半から6世紀後半であると考えられる。刃部が鋭くとがっており、二本の刃の間が大きく開いている点は今回出土した資料と平面形状は類似している。長岡京跡では、長岡京期の左京二条条間大路北側溝内から直柄鍬身が出土している。柄孔周辺部の隆起がない点や、上端部は「八」の字状に抉れている点は犬飼遺跡の出土資料と同様であるが、柄孔の形状は縦長の長方形状である。以上のように、少なくとも6世紀後半から7世紀初頭までは府内ではナスビ形曲柄鍬が使用されていたことは明らかであるが、直柄平鍬の出現期は不明であった。飛鳥時代に属する本例は、府内における直柄鍬の導入期にあたりと考えられる。近畿周辺部でもナスビ形曲柄鍬が優勢な時期であり、周辺部と比較しても、古い事例といえよう。

また、前述のとおり今回の出土資料にはナスビ形曲柄鍬のように紐かけ部が作り出されている。これについては、ナスビ形曲柄鍬から直柄鍬へと型式変化する際に属性の一部を残した可能性と、意図的にナスビ形曲柄鍬を模倣して作成された可能性の両方が考えられる。当該期の直柄鍬の類例が少ない現状では結論を導き出すことは難しいが、どちらにしても本資料がナスビ形曲柄鍬から直柄鍬へと移り変わる過渡期の様相を示す資料として評価できる。(大須賀広夢)

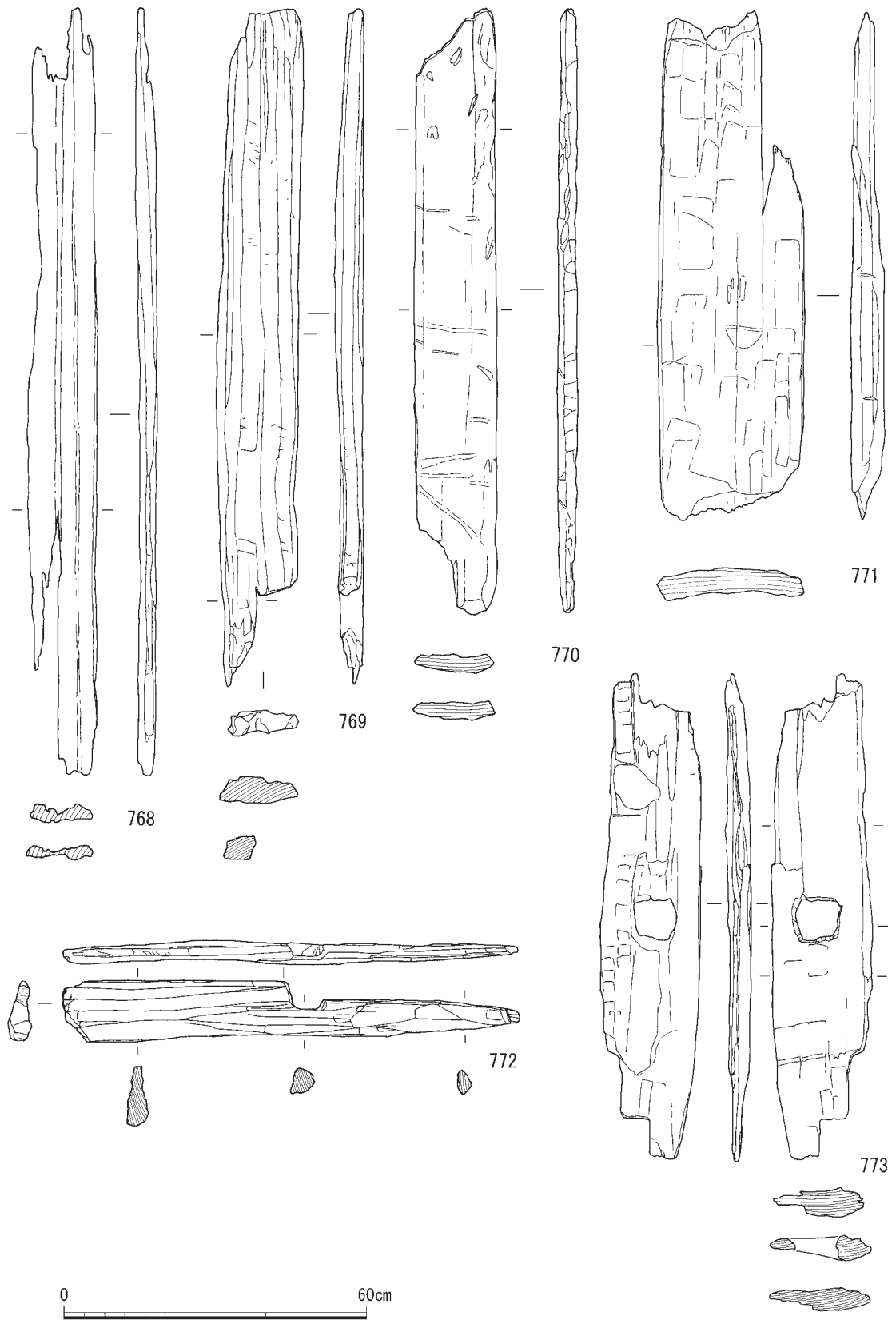
**木材集積S X 444に伴う木材・建築部材(第90~92図)** 762は幅19.1cm、厚さ3cmを測る追柂目の板材である。全体的に腐植が著しく、加工痕の観察は困難である。両端は本来の加工面が一部残存しているとみられ、全長は214.2cmとなる。763は厚さ10.0cm、幅19.6cmを測る追柂目の板材である。一部に節が残る。木裏側は手斧とみられる工具の痕跡が残る。なお、年輪年代分析のため、下端を切断したところ、中央付近で縦に半裁する途中の材であることが明らかとなった。764は幅10cm、厚さ2.0cmの板目の板材である。両端は仕口の可能性もあるが、全面的に腐植が著しく、明らかではない。766は板目の板材であり、幅16.8cm、厚さ2.6cmを測る。表面の一部に樹皮とみられる部分が残っていることから、木材の最外面に近い部分と考えられる。769は幅16cm、厚さ4.7cmの板材である。割裂いた面が多く、全体的に加工痕が乏しいため、製材しただけの板材の可能性もある。下端の一部は仕口の加工の可能性はあるが、腐植が著しく、不明。木取りは板目で、樹種はヒノキである。770は幅16.2cm、厚さ3.2cmを測る板目の板材である。側面はわずかに面を持たせており、床材あるいは壁材の可能性もあるが、不明である。木表側には幅1cm程の圧痕が多く認められる。772は建築部材であろうか。先端にかけて細くなる部材で、断面は二等辺三角形になる。全体的に木肌が荒れ、残りが悪い。樹種はヒノキである。773も建築部材であろうか。木裏側は荒れ、木肌が立っている。中央部と下端の2か所には柄穴が認められるが、加工は雑で、材自体も丸みを帯びたままである。樹種はヒノキである。774は芯持丸太の加工材である。部分的に面を持つように手斧とみられる工具で加工した痕跡が認められる。上端は欠損するが、下端は明らかに切り離す加工がなされている。775は芯持丸太の加工材である。両端は切断痕がみられる。枝や樹皮は除去されており、何らかの部材、あるいは原材である可能性もある。776は芯去材の角材である。両端を欠くが、建築部材と考えられる。777は一部に加工痕が残る以外は腐植が著しい。断面には一部四角柱状になる部分があり、本来は柱材として使用された可能性もあろう。778は幅14.8cm、厚さ3.0cmを測る板目材である。上端に圧痕が残り、



第89図 C地区第2面出土遺物(13)

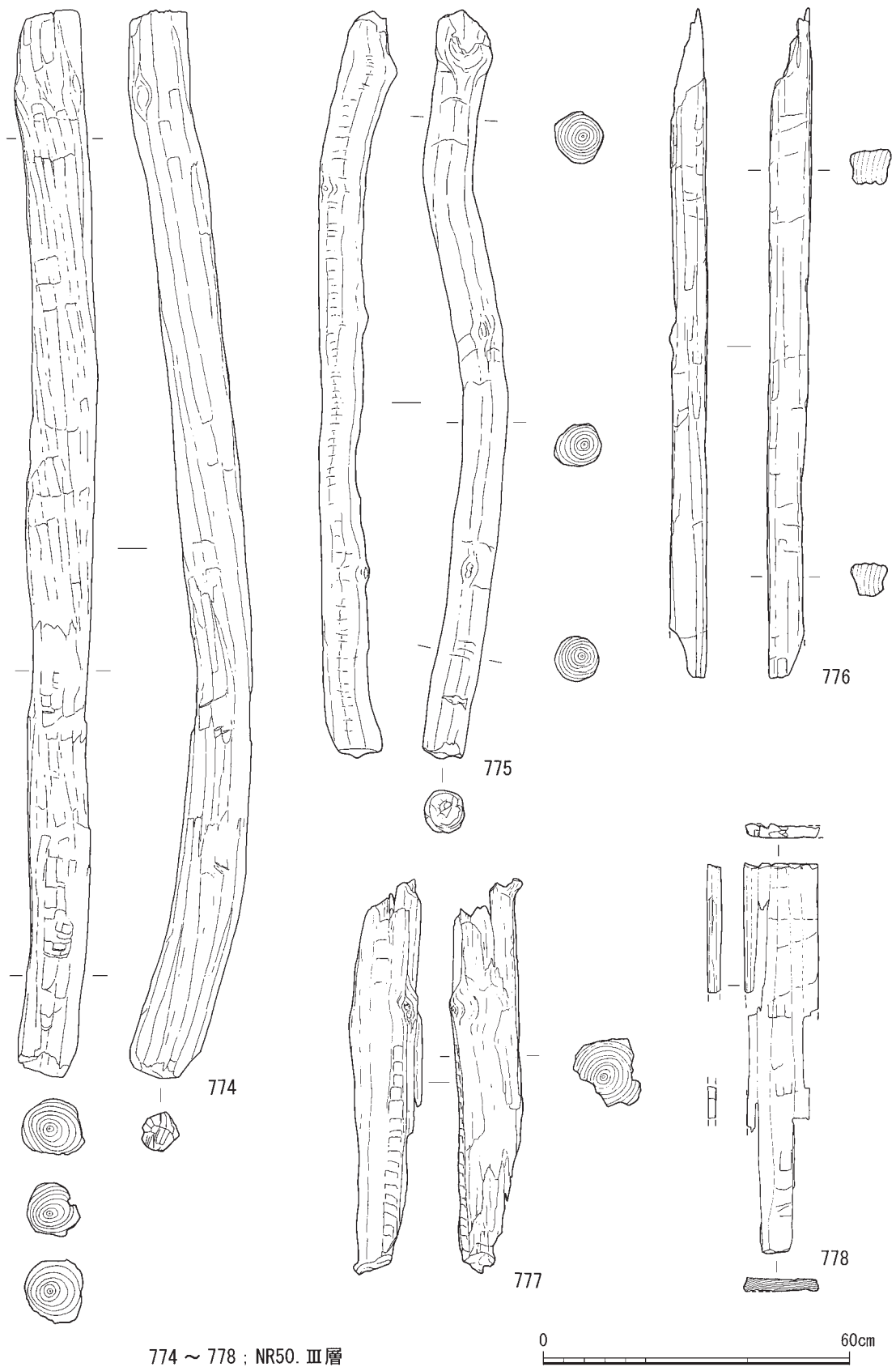


第90図 C地区第2面出土遺物(14)



768 ~ 773 ; NR50. III・IV層

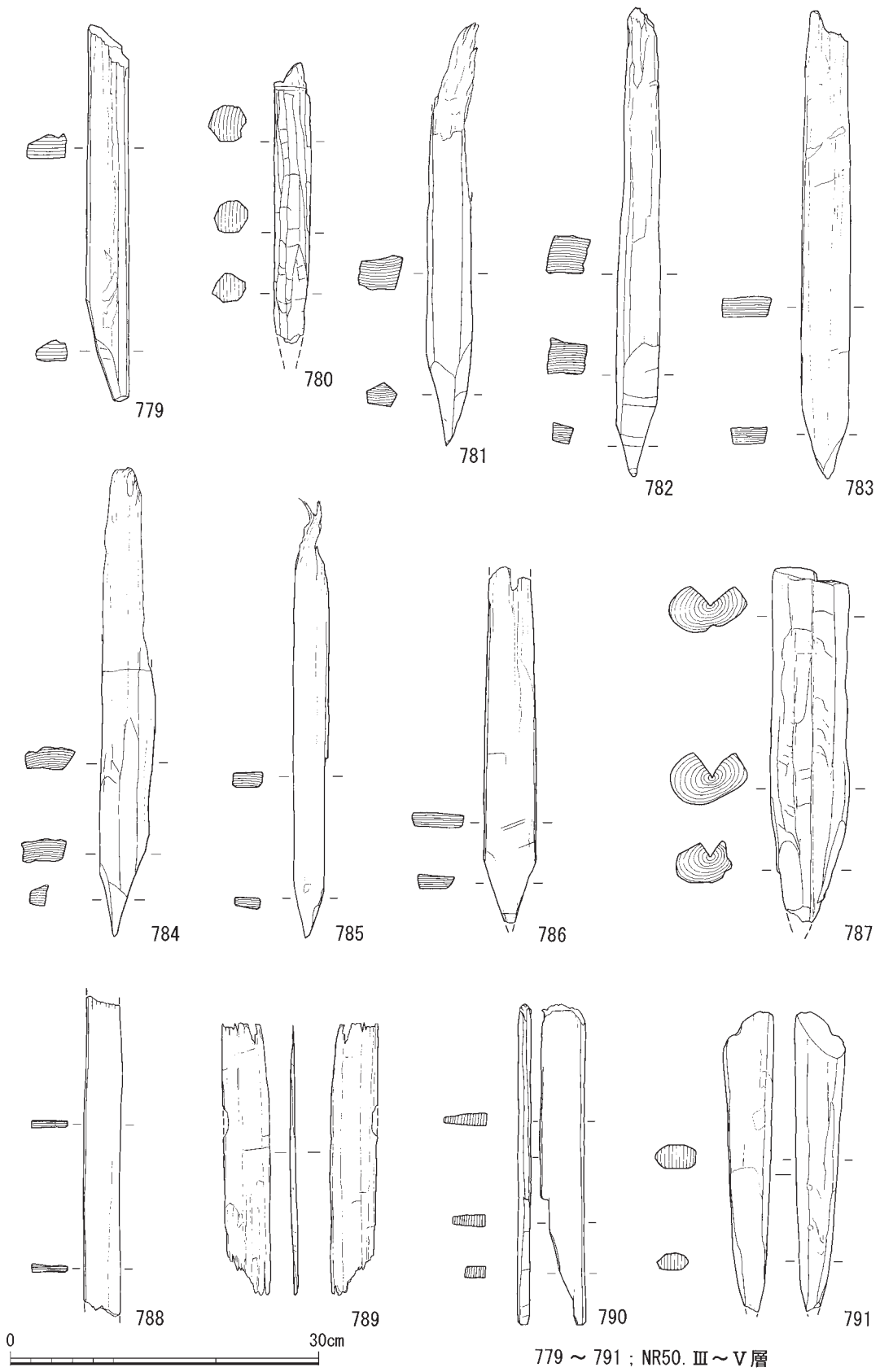
第91図 C地区第2面出土遺物(15)



774 ~ 778 ; NR50. III層

第92図 C地区第2面出土遺物(16)





779 ~ 791 ; NR50. III ~ V層

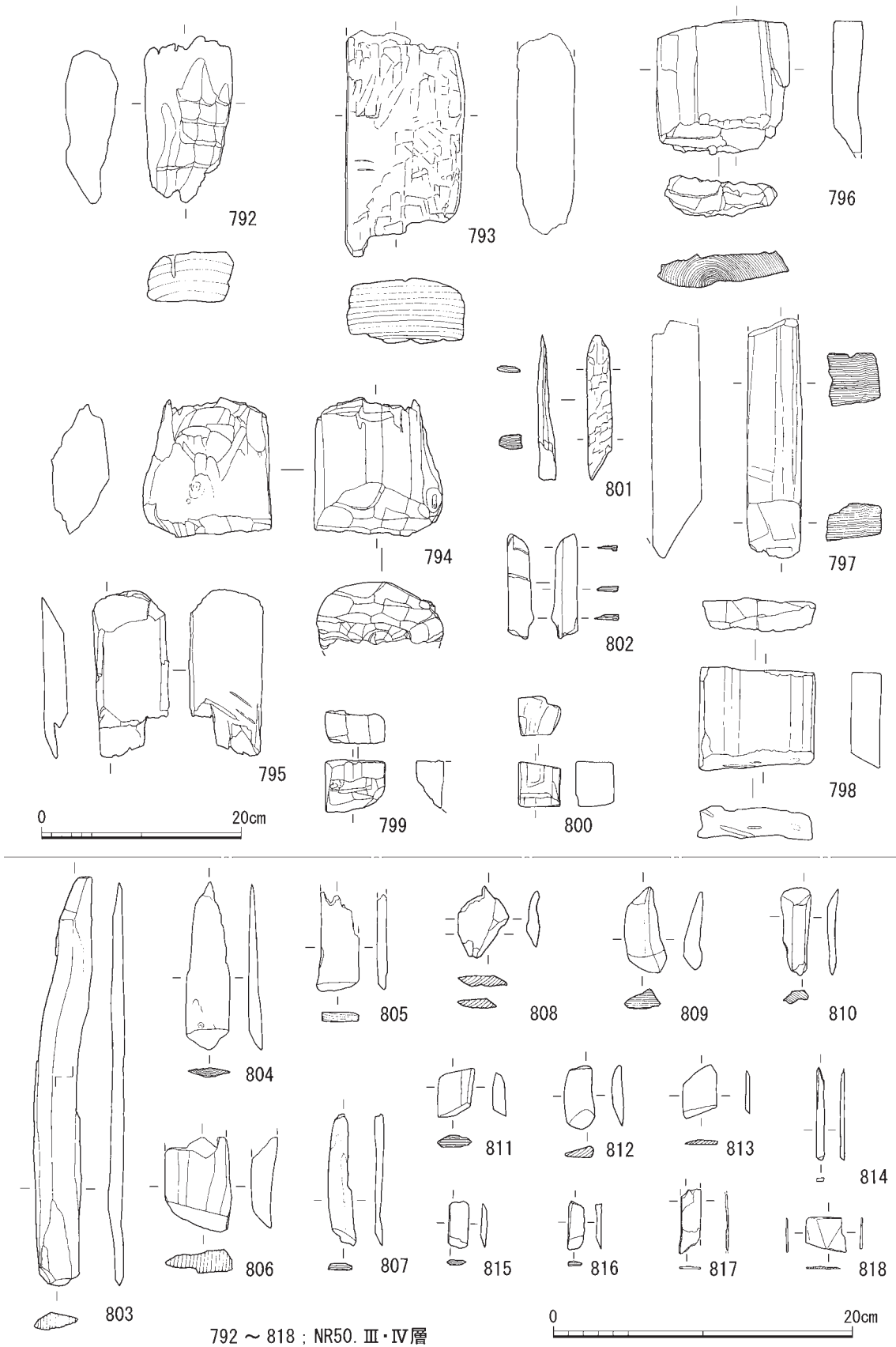
第93図 C地区第2面出土遺物(17)

何らかの部材として使用されたものと考えられる。

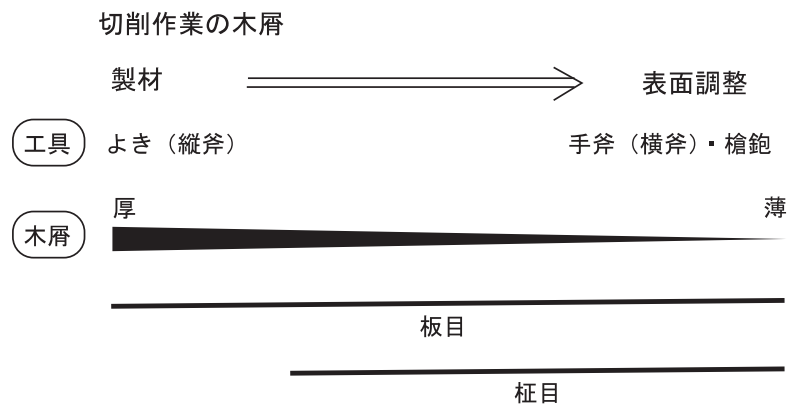
**木杭(第93図)** 779～791は、木杭・矢板類である。779はV層から出土した。割材の片側を加工し、杭とする。780は全面に細かな加工痕が多く残る。先端は欠損する。781～785はIV層に伴う杭列S W441に利用されていた杭である。割りっぱなしの材の先端を加工して杭とする。いずれも年輪の径が大きく、材の外側の破材を利用したのと考えられる。また、これらの杭をサンプルとして樹種同定を行った結果、すべてがヒノキであるという結果が得られている。ヒノキを含むイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の花粉は、少ないながらスギ属に伴い層位的に連続して産出していることから、杭として利用した材は、遺跡周辺で調達できるような環境にあったと考えられる。786・788～790は矢板状の杭である。IV層から出土しているが、原位置を保ったものはない。IV層は杭、矢板の出土がやや目立つ。原位置を保っていたのは、開析谷N R50肩部付近で検出した杭列S W441に伴う角杭だけだが、本来は簡易な水利施設が存在した可能性もある。791は扁平な断面形状で、先端が炭化しており、火を受けたものと考えられる。(桐井理揮)

**木材加工を示す木質遺物(第94図)** 792～794・796～802は残材である。792は全体的に腐植が激しく、両端ともに加工痕が不明瞭である。木材の軸方向に対して斜めに加工される。793は幅11cm、厚さ4cm以上の板目板で両端ともに折損している。表面・裏面ともに割り裂いたままの状態では加工はみられない。794は上端・下端ともに斧による加工が残る。ほぼ樹心に近い位置から半裁した板材。加工痕跡にみられる工具の推定刃幅は3.2cm以上である。下端は斜め、上端は垂直に裁ち落とされる。半裁材の端部を裁ち落とした際の残材とみられる。796は幅13cm以上、厚さ3.1cmの追柵材の板の先端部分を切断した残材。上端は垂直に裁ち落とされ、下端は斜めに裁ち落とされる。ともに斧による切断と判断でき、下端に残る加工痕の刃幅から5.8cmの刃幅を持つ斧で加工したことがわかる。上端は様々な方向から刃が入るが、下端は木表側から加工されているため、加工段階が異なると認定でき、一方向からの加工のみが入る下端が、板材に整形された後の切断と推定することができる。ほぼ樹心を含んだ木取りで木目が詰まる。表面・裏面ともに割り裂いたままの状態では加工は見られない。797は幅5.2cm以上、厚さ5cmの角材状で、板目である。上端は垂直に、下端は斜めに裁ち落とされる。ともに斧による切断と判断できる。798は幅11cm以上、厚さ2.9cmの板目板の先端部分を切断した残材。上端は垂直に裁ち落とされ、斧による切断とみられる。下端は斜めに裁ち落とされるが、加工痕跡は不明瞭である。木目が詰まる。表面、裏面ともに割り裂いたままの状態では加工は見られない。799は幅5.2cm以上、厚さ3.2cmの板目材の端部を切断した際の残材。上端は垂直に裁ち落とされ、下端は斜めに裁ち落とされる。上端は加工痕不明瞭、下端は斧によるものか。刃幅は4cm以上を測る。年輪間隔は狭く、木目が詰まる。表面、裏面ともに割り裂いたままの状態では加工は見られない。800は幅4cm以上、厚さ3.6cmの板目材。表面には加工工具の刃先のあたりが確認できる。両端ともに垂直に裁ち落とされるが、加工痕不明瞭。木材成形時の端部で、残材と認定できる。801は下端に斜めの方向の加工がある。802は表面、裏面ともに平滑で、両端ともに折損している板目材である。

795・803～818は削りかすである。795は大振りな木屑である。両端ともに木表側から刃が入り、



第94図 C地区第2面出土遺物(18)



第95図 作業工程と排出される木屑(削りかす)との対応関係

切断されている。上端には斧の刃端痕及び刃先の痕跡が残る。少なくとも5.3cm以上の刃幅を持つ斧で加工される。下端には向かって上方向からと下方向からの2方向の加工が施されており、このことから木材の側面を縦斧で加工した際の木屑と認定できる。また向かって右側面にハツリ痕跡が確認できるため、ある程度製材工程が進んだ段階の追柁目の木屑であると考えられる。803は木材の側面を長く割り裂いた追柁目の木屑である。上端部に木表側からの加工が入る。804は木表側が弧状を呈し、樹皮に近い部分とみられる。下端に木材の軸方向に対して斜めに、木表側からの加工が入る。刃が入った部分には刃こぼれが明瞭に確認でき、わずかに丸みを帯びる。直径が小さい木材を木表側から削った際の木屑と考えられる。805は、木表側は平滑な加工面に対し斜め方向に刃が入る痕跡が残るため、木表側が平滑に調整された後に、木表側からの加工が行なわれたと考えられる。加工が進んだ材の分割、もしくは廃棄、再利用時などに出た木屑とみられる。806は下端部に木材の軸方向に対して斜めの加工が残るため木屑と判断した。表面は全体的に腐植するため、木面側、木裏側どちらから刃が入るか確認できない。広葉樹である。807は下端部に木表側からの加工が入る。木材の軸方向に長い形状であるが、上端は折損しており加工痕は残らない。板目の木材を木表側から削った際の木屑である。808は下端部に木材の軸方向に対し斜めの加工が入るため木屑と認定した。上端は折損している。木表側には樹皮が残存しており、木表側から加工したと判断できる。伐採後、樹皮付きの木材を加工した際の木屑である。付近で樹皮付きの木材を加工していたことを示す。809は下端部に木材の軸方向に対して斜めの加工が残るため木屑と判断した。表面は全体的に腐植するため、加工方向は認定できない。裏面には加工によるとみられる段差が残る。柁目材の木屑。なお、柁目材の木屑は、板目材の木屑に比べ、一段階加工が進んだ木屑である。広葉樹である。810は長軸方向の断面が平行四辺形を呈する木屑で、表面の表層のみ炭化する。木目が詰まった柁目材の表面を斧で削ったものと考えられる。811は両端ともに切断されている。上端は木材の軸方向に対し垂直に、下端の加工は斜めに入る。厚さは約1cmあり、表面調整時というよりは成形時に出た木屑であろう。広葉樹である。812は下端部に木材の軸方向に対して斜めの加工が残るため木屑と判断した。表面は全体的に腐

植するため、木面側か木裏側のどちらから刃が入るか確認できない。木表側は平滑であるが、加工痕は確認できない。813は、木表側の表面が平滑に加工されてり、その平滑面を削った際の木屑である。木表側から加工が施されている。木材の表面を調整する際の木屑、もしくは再利用時の木屑とみられる。814は下端に木材の軸方向に対し斜めの加工があるため木屑と認定した。柾目で上端は折損する。815は下端に木材の軸方向に対し斜めの加工があるため木屑と認定した。柾目材の表面を削った際の木屑で、上端は折損するが、やや丸みを帯びる。816は下端に刃が入った痕跡が認められる。裏面から加工が入る。柾目材の表面を削った際の木屑。817は針葉樹の樹皮片で檜皮である。両端ともに折損している。818は非常に薄く(1mm~1.5mm)、両面ともに刃物による加工痕が見られ、平滑に整えられている。下端部には刃物による折り取りの痕跡が確認できる。両面ともに平滑に調整された薄板の成形時の加工にともなう木屑とみられる。板目。

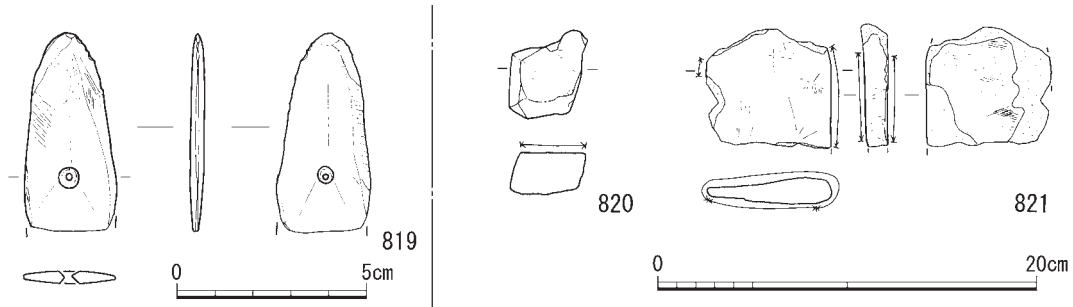
以上のように、残材と削りかすを抽出し、その観察所見を述べた。残材と削りかすの多くはⅢ層、Ⅳ層からの出土である。残材では、板状や半裁材の端部を木材の軸方向に対し斜めに切断する方法がみられた。例えば、796は上端と下端では、加工方向が異なることから、一方向からの加工のみが入る下端が、板材に整形された後の切断と推定できる。板材や半裁材の長さ調節や、端部の加工を付近で行っていたと想定できる。一方で木材を伐採、製材する際に排出されると考えられる樹皮や、「一番不要なパーツ」であり「消費地よりも生産地で除去された可能性が高い」<sup>(注49)</sup>と考えられている節部分は、各層位において、出土した木質遺物の0.5~1%ほどで、本遺跡からはほとんど出土しない。そのため、木材伐採場所や製材場所は出土地点からは離れた場所にあったと考えられる。ただし、808のように樹皮がついた状態の削りかすもあることから、例えば、小径木や広葉樹材など、樹皮がついたままの状態での遺跡や遺跡周辺に持ち込まれ、加工された材もあったと想定できる。

また、残材や木屑の木取りや表面情報からは、木材の加工段階を読み取ることができる。例えば、厚みのある残材には半裁材や板目材、追柾目材が多く、削りかすになると厚さが薄く、柾目の木屑が混じるようになる。柾目面は、木材を打ち割り製材した面に初めて現れる。丸太材を打ち割らずに加工する場合、排出される最初の木屑は板目となる。そのため、柾目の木屑が排出されるということは、打ち割り製材が施された面に対しての加工ということであり、加工段階が進んだ際の木屑といえる。また、打ち割り製材後の柾目面はある程度の面が形成されているため、表面調整の加工が主となることから、木屑の厚みは薄い傾向にあるといえる。また、本遺跡出土の木質遺物で樹種同定がなされているものは、ヒノキがほとんどであるが、目視での確認になるものの広葉樹材の木屑もあり、広葉樹材の加工も行なわれていたといえる。

以上のように、木屑の厚さや木取りから、木屑には成形段階のものと表面調整段階のものが認定でき、これらの段階に応じた木材加工を復元することができる。残材や削りかすを認識することで、本遺跡周辺部(上流部)において木材加工を行っていたということを指摘することが可能である。このように、遺跡出土の木屑を丹念に見ていくことで、遺跡や遺跡周辺における木工活動についての理解を深めることができる。

(浦 蓉子)





第96図 C地区第2面出土遺物(19)

(4) 石製品(第96図)

819は有孔磨製石鏃である。<sup>(注50)</sup>幅5.2cm、長さ2.5cm、厚さ0.4cmを測る。N R 50Ⅳ層から出土した。820は頁岩製の砥石である。821は砂岩製の砥石である。

(5) 動物遺存体

いずれも開析谷N R 50から出土しており、骨が1点、歯が11点、計12点である(付表6)。骨は種類や部位は特定できないが、大きさはイノシシやシカ程度の四肢骨と推測される。歯は、骨格部位の中でもエナメル質に覆われて頑強であるが、当資料の大部分は破片化したものである。

種類が特定できたものはウマ6点、ウシ1点であり、その他4点はウマと思われるもの1点、ウシと思われるもの1点、ウマかウシのいずれかが1点、不明が1点である。ウマと同定できたもので歯種まで特定できたのは上顎M3(右)のみである。破損しており、残存する歯冠高を計測すると老齢個体はなく、若齢ないし壮齢個体ばかりである。

これまで亀岡盆地では、動物遺存体の出土が稀であるが、時塚遺跡第15次調査で検出した奈良時代後半の溝S D 30東端に掘られた土坑から馬歯が出土しており、祭祀に関連するものと推定されている。<sup>(注51)</sup>このほか、南丹市八木嶋遺跡では、古墳時代後期～奈良時代の流路S D 01から、馬歯・骨の出土が報告されている。<sup>(注52)</sup>また、犬飼遺跡に近接する金生寺遺跡でも、奈良時代の層から馬歯が出土している。<sup>(注53)</sup>今回の犬飼遺跡で馬歯が出土した流路N R 50の第Ⅲ層では、古墳時代後期から飛鳥時代の土器が出土していることから、当地にはその頃からウマが飼育されていたと考えられる。古墳時代中期に大量渡来したウマの各地域での導入と普及を考える上で貴重な資料である。

(丸山真史)

付表6 開析谷N R 50出土の動物遺体一覧

報告番号	グリッド	遺構	層位	小分類	部分	左右
938	-	N R 50	上層 精査中	ウマか	白歯	-
939	120	N R 50	I層	ウマ	白歯	-
940	120	N R 50	I層	ウシか	白歯	-
941	119	N R 50	II層	ウマ	下顎白歯 (P3/P4/M1)	左
942	k16	N R 50	II層	ウシ	上顎白歯 (M1/M2か)	右
943	k16	N R 50	II層	哺乳類	白歯か	-
944	119	N R 50	II層	ウマ	上顎白歯 (M1/M2か)	左
945	119	N R 50	II層	不明	骨幹部	-
946	k18	N R 50	III層	ウマ	上顎 M3	右
947	116	N R 50	II・III層岸部分	ウマ	上顎後白歯	左
948	k18	N R 50	III層	ウマ	(下顎か) 白歯	右か
949	118	N R 50	III層	ウマ/ウシ	白歯か	-



#### 4) B・D地区の出土遺物(第2面)

B・D地区の下層では、古墳時代～奈良時代の遺物が出土している。遺構に伴うものは少なく、多くが包含層や、中世の堀S D01・S D03掘削中に出土したものである。

822～855は奈良時代以降の遺物を一括した(第97図)。

822～831は蓋である。822・823は扁平な宝珠つまみの杯蓋である。823は天井部しか遺存していないが、打撃痕のような窪みが多く認められ、何らかの2次的使用が想定できる。824は小片だが、環状つまみの杯蓋と考えられる。826は天井部から端部にかけての破片である。天井部は平坦で、端部にむけて緩やかにさがる。端部はわずかに内傾するように短く折り曲げられる。825は鋭い屈曲部をもつ壺蓋である。828は屈曲部を残し、やや古相か。天井部には重ね焼きの痕跡を残す。830は器壁が厚く、平坦な天井面が直線的につづき、わずかに外傾する端部にいたる。

832～845は杯Bの底部である。全形がわかるものはない。834・835のように底部外側に近い部分に高台を貼り付けるものと、やや内側に高台を貼り付けるものの二者がある。836は側面から底部にかけて屈曲させ、やや内側に高台を貼り付ける。838は側面から底部にかけて緩やかに湾曲させ、やや内側に高台を貼り付ける。840・844は高台の外側にユビオサエの痕跡を顕著に残す。841は側面から底部にかけて強く屈曲させ、矮小な高台を貼り付ける。843は大形に復元できるので、内面の屈曲も弱いことから皿である可能性もある。高台はやや外側に踏ん張る形状となる。

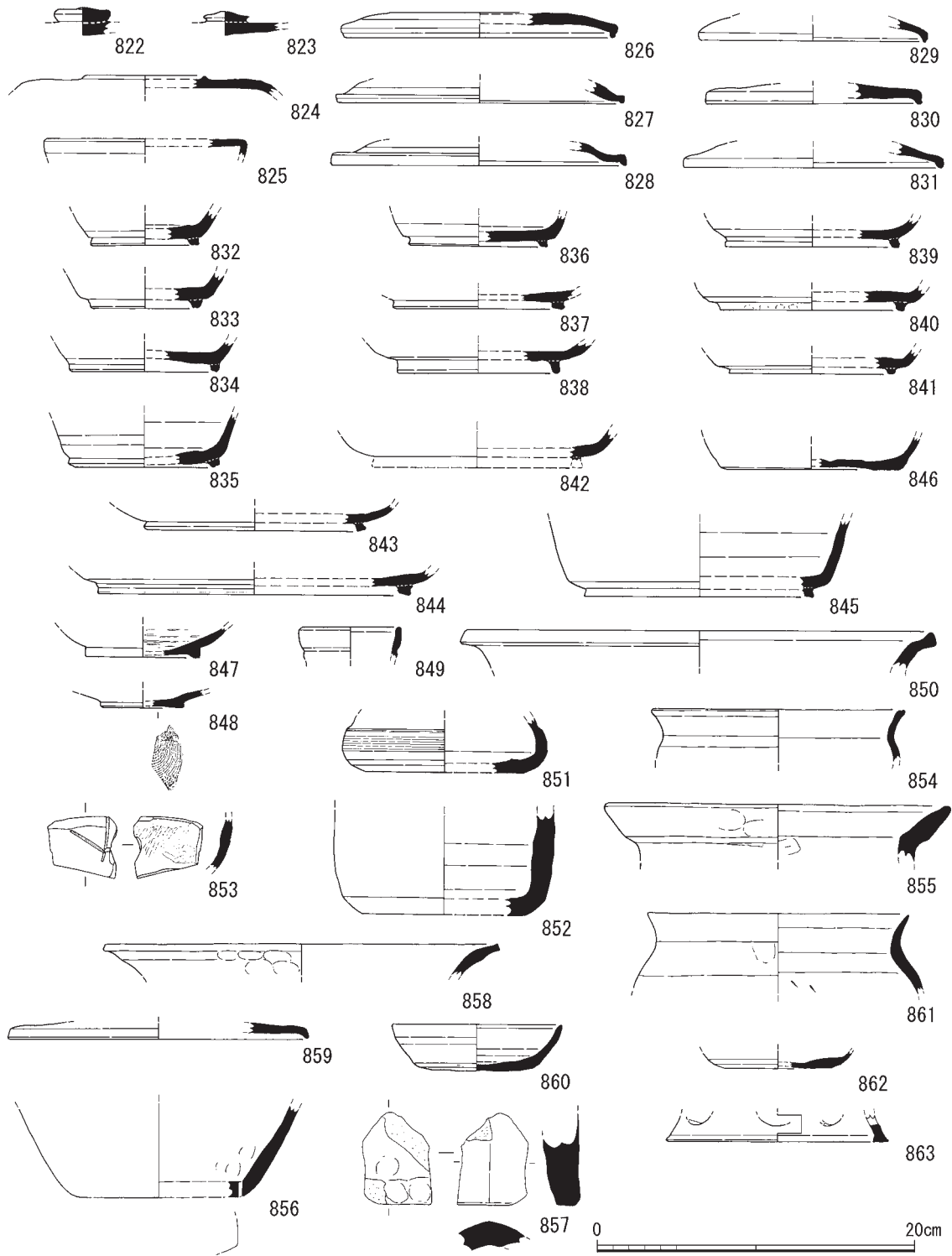
846は杯Aである。ヘラ切り未調整で、外面中央部は突起状にケズリ残されている。

847は削り出し高台の稜椀底部である。器壁は他のものよりも薄く、内面はミガキが認められる。また、内面見込み部には弱い圏線が巡る。

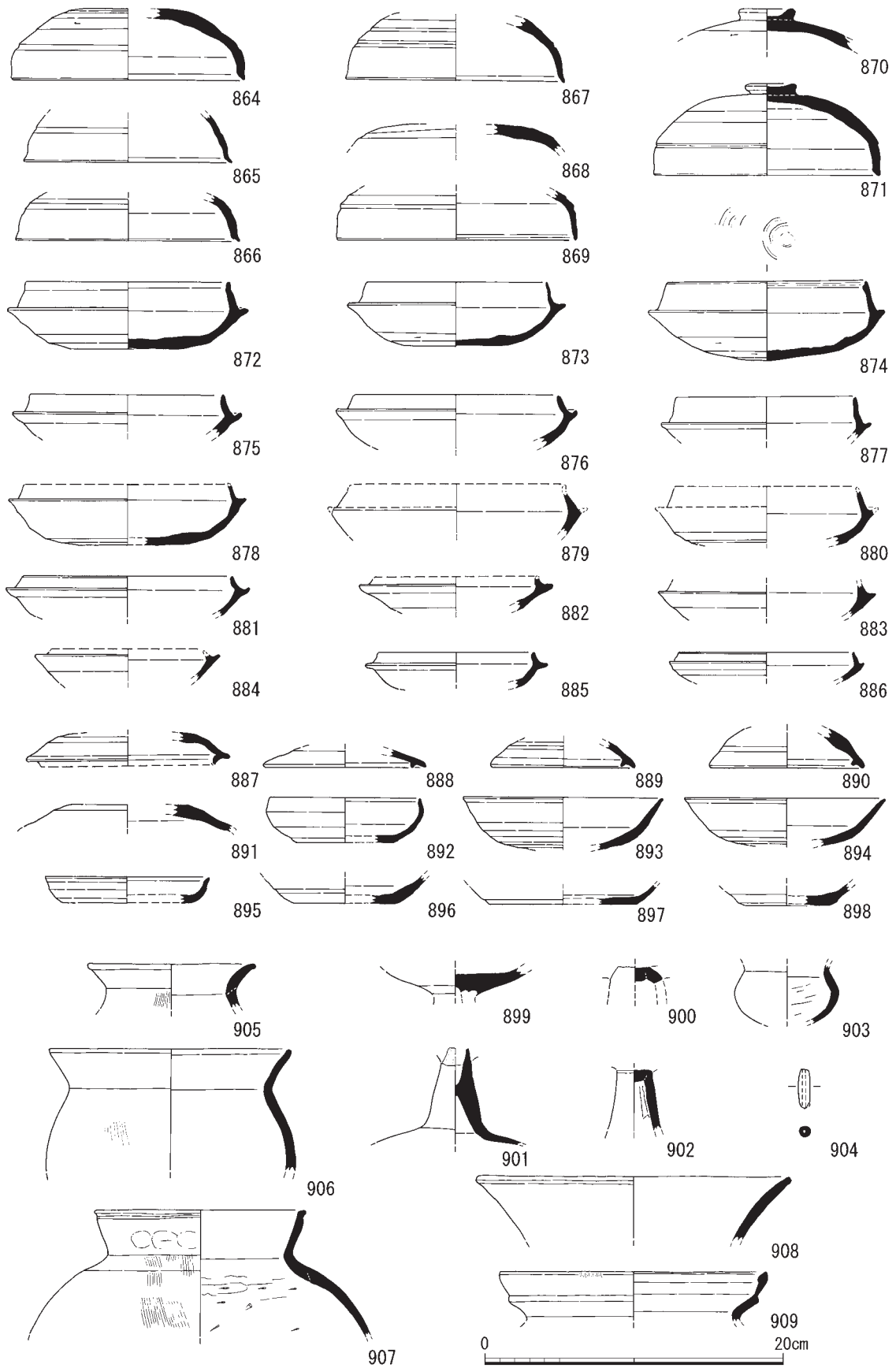
848は糸切りの須恵器椀底部である。849は小形の壺口縁部である。端部はわずかに内湾し、外面に沈線が一条巡る。850は須恵器甕口縁部である。内外面ともに自然釉がかかる。851は扁平な須恵器壺底部である。底部は回転ヘラケズリ、体部はカキメが施される。底部付近には「一」状のヘラ記号のような痕跡が認められる。852は壺Pの底部である。外面には自然釉がかかる。S P 333から出土した。853は須恵器片である。小片のため器種は不明だが、薄手で内面のナデ調整が十分ではないことから、壺体部と考えられる。外面にはヘラでつけたような痕跡が認められる。D地区S P 393から単独で出土した。

854は須恵器鉢Dであろうか。855は土師器甕である。856は底部付近に小孔をもつ土師器片で、甕底部と考えられる。857は土師質土器の小片で、器壁は極めて厚い。若干の屈曲があり、本来は円弧状と考えられる。ナデで仕上げられ、ハケメやケズリは認められない。移動式カマドなどが復元の候補となろう。D地区S P 86から出土した。

858～863はD地区S K 380から出土した。862が上層から出土した以外は、下層出土の一括資料である。858・861は土師器煮炊具である。861は口縁部がナデにより仕上げられる甕で、内面はヘラケズリが認められる。859は須恵器杯蓋である。860・862は須恵器杯Aである。底部外面は回転ヘラケズリが認められる。863は円形のスカシを持つ須恵器の小片で、器台などの脚部と考えられる。以上の資料は、飛鳥時代後半に位置付けられる。



第97図 B・D地区第2面出土遺物(1)



第98図 B・D地区第2面出土遺物(2)

864～909は古墳時代～飛鳥時代の遺物を一括した(第98図)。

864～874はMT15～TK10型式の杯身・杯蓋である。多くは包含層あるいは中世の堀の上層から出土している。864はB地区SK311から出土した。口縁端部にはナデによる段があり、天井部は全面回転ヘラケズリが認められる。865は端部がやや外反するもので、ヘラケズリは認められないなど、他の個体とは異なった特徴を持つ。869は天井部と側面の境に沈線によって稜をつくり出し、端部は沈線による段をもつ。やや古相を示す。870・871はつまみ付きの杯である。871はB地区SK311から出土した。口縁部と体部の境には一条の沈線があり、天井部は全面ヘラケズリである。焼成が甘く、砂粒を多く含んでいる。873は薄手の杯である。874は上層遺構検出中に出土した、ほぼ完形の杯である。焼成はやや甘く、胎土には砂粒を多く含む。体部内面には同心円状のタタキの当て具痕を残す。

875～886はTK43～209並行期の杯である。遺構から出土したものはなく、すべてが包含層あるいは中世の堀の上層から出土している。そのため、総じて残存率が悪く、小片が多い。875・876のように、口縁部がやや内湾しながら短く立ち上がるものと、877・880のように直線的にやや長く立ち上がるものがある。881はB地区SP157から出土した。他のものは焼成が甘く、胎土に砂粒を多く含むのに比べて、焼成が堅緻で胎土も密である。

887～898は飛鳥時代の須恵器である。古墳時代後期のものと同様、小片が多い。887～890は杯G蓋とみられる。887は端部が長く、天井部よりも下に突き出す。古相を示すものか。889・890は天井部が膨らみをもつ。端部は短く、突き出さない。892は口縁部が内傾する杯Gである。焼成が良く、胎土にも砂粒をほとんど含まないなど、他のものと異なった特徴を持つ。893・894は扁平な形状の杯である。893内外面ともユビナデ、894は底部付近のみヘラケズリが認められる。895は小形の皿か。896～898は杯Aである。

899～903・905～909は土師器である。905は小形の甕口縁部である。頸部の屈曲が緩く、外面はハケメで仕上げられる。古代のものか。899・902はB地区の排水溝SD353上面で出土した土師器高杯である。いずれも円盤充填の痕跡が残る脚部で、古墳時代前期～中期とみられる。本来は、SD353に切られているSH371に伴っていた可能性が高い。901は小形の高杯脚部である。摩滅が著しいが、精良な胎土で、赤橙色を呈する、古墳時代前期のものと考えられる。903は小形丸底壺である。内面にはヘラケズリが認められ、焼き上がりは灰白色を呈する。904は包含層中から出土した管状土錘である。907・908はD地区SH351床面直上から出土した。907は甕である。器壁は厚く、内面には接合痕を残すなど粗雑な作りである。口縁端部はわずかに外側に突出するように整形する。908は直口壺口縁部である。器壁は厚く、胎土には径5mm以上の大粒の砂粒を含む。いずれも古墳時代前期末～中期前半とみられる。909はB地区SH352から出土した甕口縁部である。上方に拡張させる在地系統の甕で、端部は肥厚させる。古墳時代前期末か。

(名村威彦・桐井理揮)

## 5. A・E地区の調査

### 1) 調査の概要

A地区は南北約20m、東西約38mの長方形の調査区である。古墳時代の竪穴建物・ピット・土坑・焼土を含む性格不明遺構を検出した。調査区西側のピット・土坑は残存状況が悪いが、北東側では比較的良好である。また、土坑は大形のものと同小形のものを検出した。焼土を含む性格不明遺構は、当初竪穴建物とそれに伴う炉跡の可能性を考慮したが、平面形態が判然とせず焼土もまばらであったため、性格は不明である。全体として遺構に伴う遺物は少ない。調査区東側では、包含層から古墳時代の土師器や須恵器の破片が出土した。

E地区は、A地区の北側と東側に隣接する調査区である。便宜的にA地区の北側に隣接する範囲をE地区北半、東側に隣接する範囲をE地区南半とする。E地区では北半で掘立柱建物・柵列・溝状遺構・土坑・焼土を含む土坑を検出し、南半では柵列・土坑を検出した。E地区北半、南半ともに南西側の遺構は残存状況が悪いが、北東側では比較的良好である。古墳時代から近世にかけての遺物が出土した。

### 2) 基本層序(第100・101図)

A地区の現地表面は標高134m、E地区の現地表面は標高133mである。両調査区は隣接しており、基本的な層序は9層確認している。1・2層は、現代の耕作土及び床土である。4層は、古墳時代や中世の遺物を含む包含層である。遺構検出面は5層で、古墳時代前期から中期の遺構及び中世の遺構を検出した。8層は、3～7cmの円礫や10cmを超える角礫を多量に含んだ砂礫層である。5層を削り込んで堆積している箇所が局所的に確認できており、洪水や土石流などによる堆積と考えられる。なお、10層については近現代の攪乱層である。地形は両調査区にわたって、東側に向かって下がっており、A・E地区南壁では、E地区からA地区東側については、1～5層が確認できるが、A地区西半では1・2層の直下で5～7層を確認した。

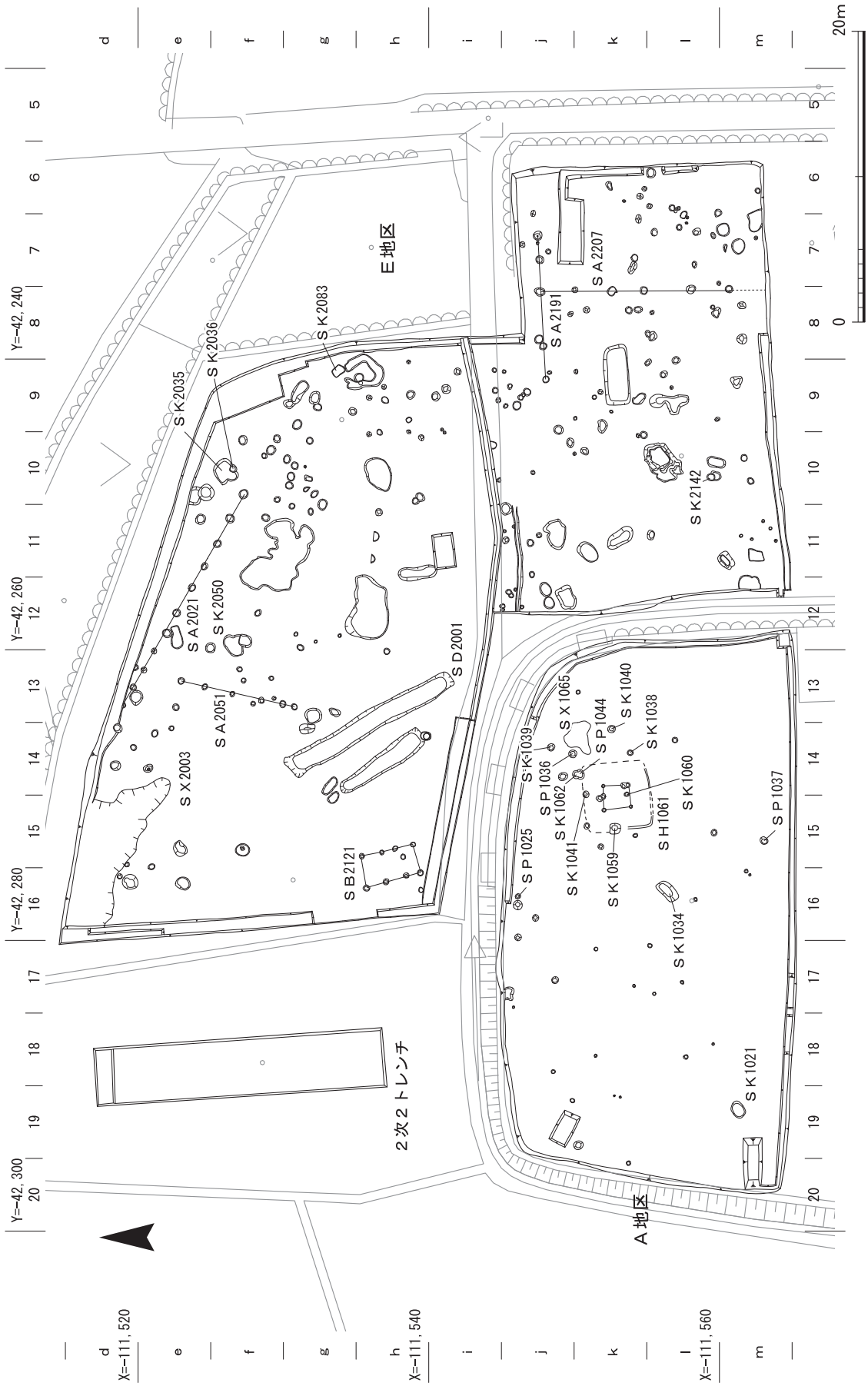
### 3) 検出遺構

#### (1) 掘立柱建物

掘立柱建物 S B 2121 (第102図) E地区北半の南西側で検出した桁行3間、梁間1間の掘立柱建物である。柱穴はいずれも素掘りで、直径約0.42m程度であるが、残存状況は悪く、深いもので0.12m程度しか残っていない。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

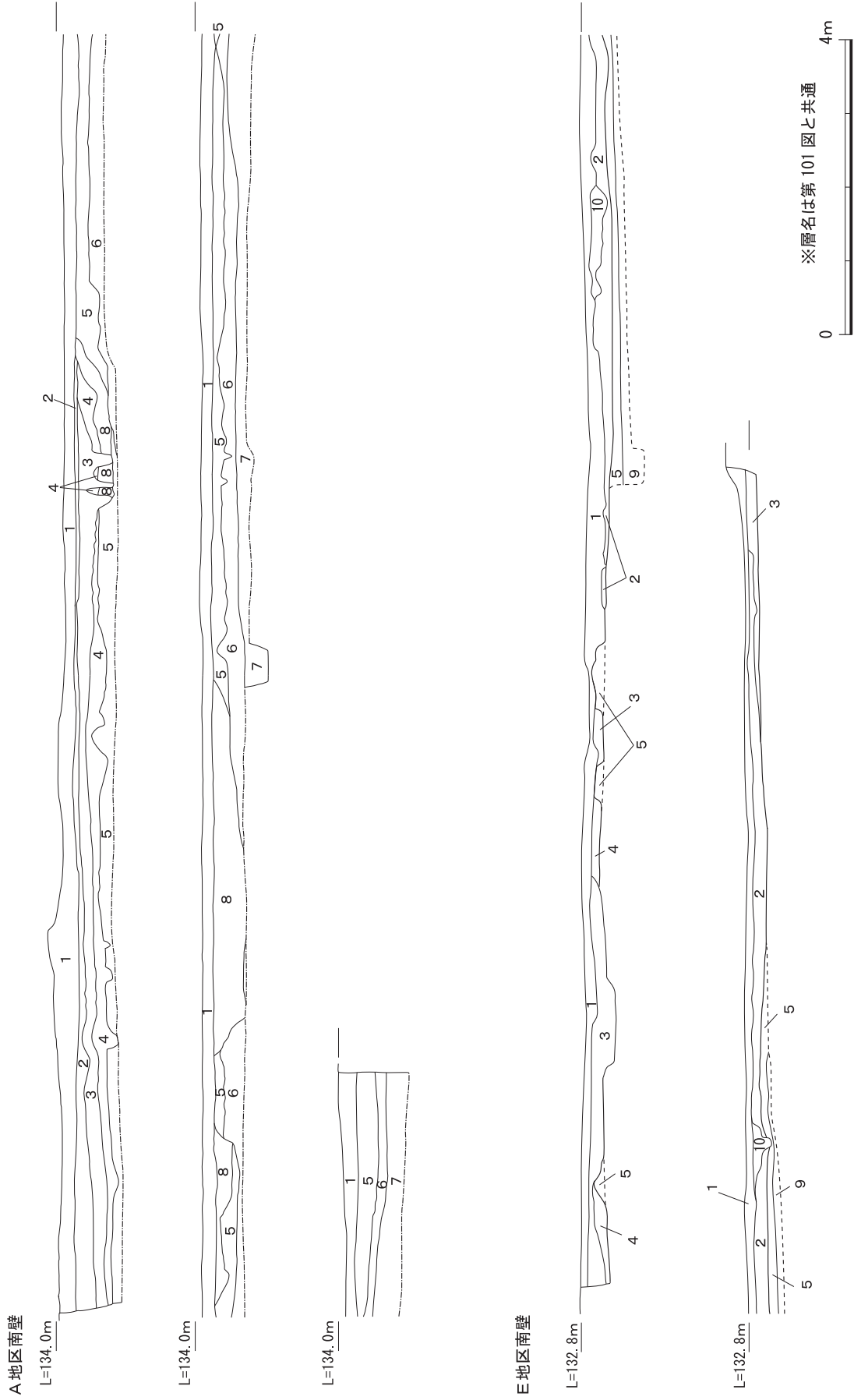
#### (2) 竪穴建物

竪穴建物 S H 1061 (第102図) A地区東側で検出した。残存状況が悪く、建物内の埋土はほとんど残っていなかったが、周壁溝の一部と主柱穴を検出した。周壁溝は南西側隅を中心に、西壁・南壁の一部を検出しており、0.03mほど残存していた。柱穴は4基検出しており、いずれも径0.22m、深さ0.21m程度である。柱穴 S P 1056・S P 1057からは、厚さ3mm前後の土師器の小片が出土したが、いずれも図示できない。竪穴建物に伴う土坑 S K 1059は、長辺約0.7m、短辺約0.64mの平面方形で、深さ約0.33mである。内部から土師器甕(第106図917)が出土した。出土遺物から、古墳時代前期の竪穴建物と考えられる。



第99図 A・E地区遺構配置図(1/400)





第100図 A・E地区南壁土層断面図(1/80)

(3) 柵列

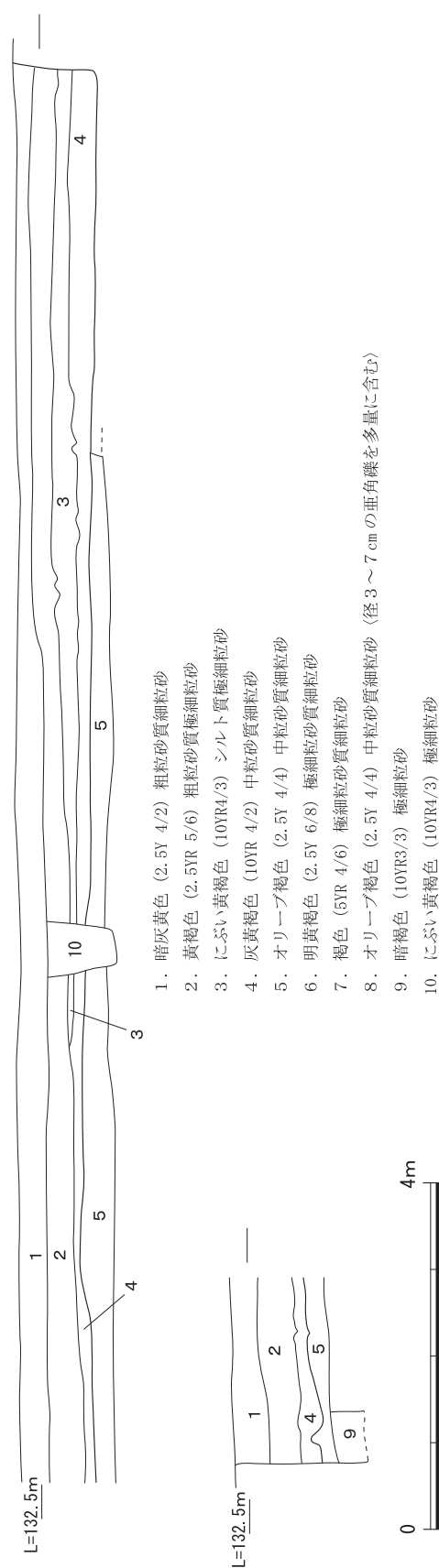
柵列 S A 2021 (第103図) E 地区北半で検出した、N30° W方向の柵列である。北西の柱穴 S P 2021から S P 2031までの10間分を検出している。直径約0.3~0.6mの柱穴で構成されており、柱間の距離は約1.5~2.0mである。深さは深いもので約0.33m、浅いもので約0.1mが遺存していた。S P 2022・2026・2027・2029・2031では、直径約0.2mの柱痕を確認している。柵列を構成する柱穴 S P 2022から、土師器皿(第106図934)が出土した。

柵列 S A 2051 (第103図) E 地区北半で検出した、N13° E方向の柵列である。北側の柱穴 S P 2051~2054、及び S P 2090の4間分を検出している。直径約0.36~0.44mの柱穴で構成されており、柱間の距離は約2.0~2.3mである。深さは0.2~0.25mが遺存していた。S P 2051・2052では、直径約0.2mの柱痕を確認している。

柵列 S A 2191 (第103図) E 地区南半で検出したN87° E方向の柵列である。西側から柱穴 S P 2191・2193・2195~2198の5間分を検出している。直径約0.4~0.5mの柱穴で構成される。柱間の距離は約1.6~3.7mであり、間隔はやや不均等であるが、上部は削平を受けており遺存状況が悪く、深さ0.1m以下の柱穴が多いことから、間隔の広い場所に柱穴が存在していた可能性が考えられる。柱痕は確認できなかった。柵列を構成する柱穴から遺物は出土しなかった。

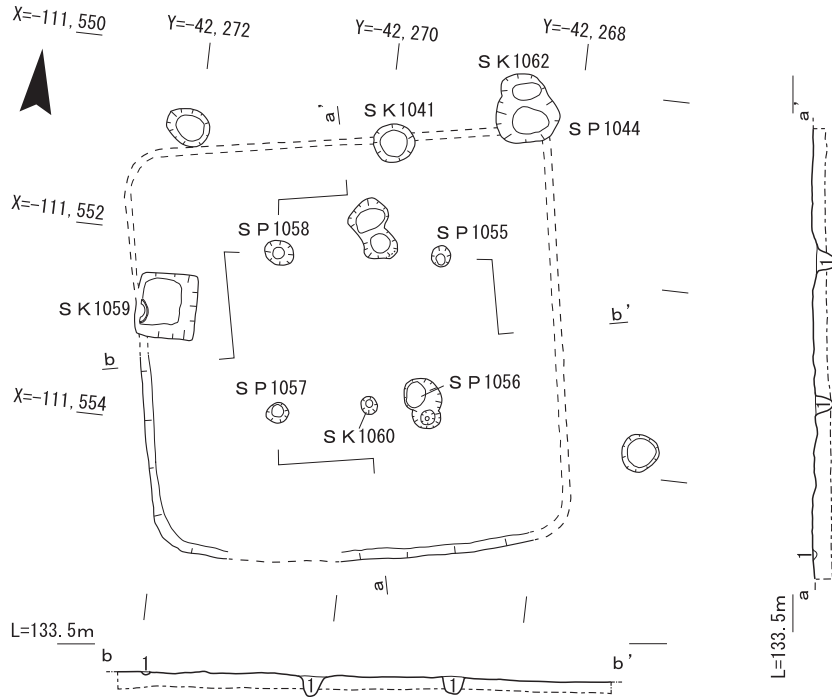
柵列 S A 2207 (第103図) E 地区南半で検出した、南北方向の柵列である。北側の柱穴 S P 2195から2211までの5間分を検出しており、南側にさらに伸びる可能性がある。直径約0.46~0.6mの柱穴で構成されており、柱間の距離は約2.4~3.2mである。上部は削平を受けており、遺存状況が悪く、深さ0.1m以下の柱穴が多い。

E 地区は北半で S A 2021と S A 2051、南半で S



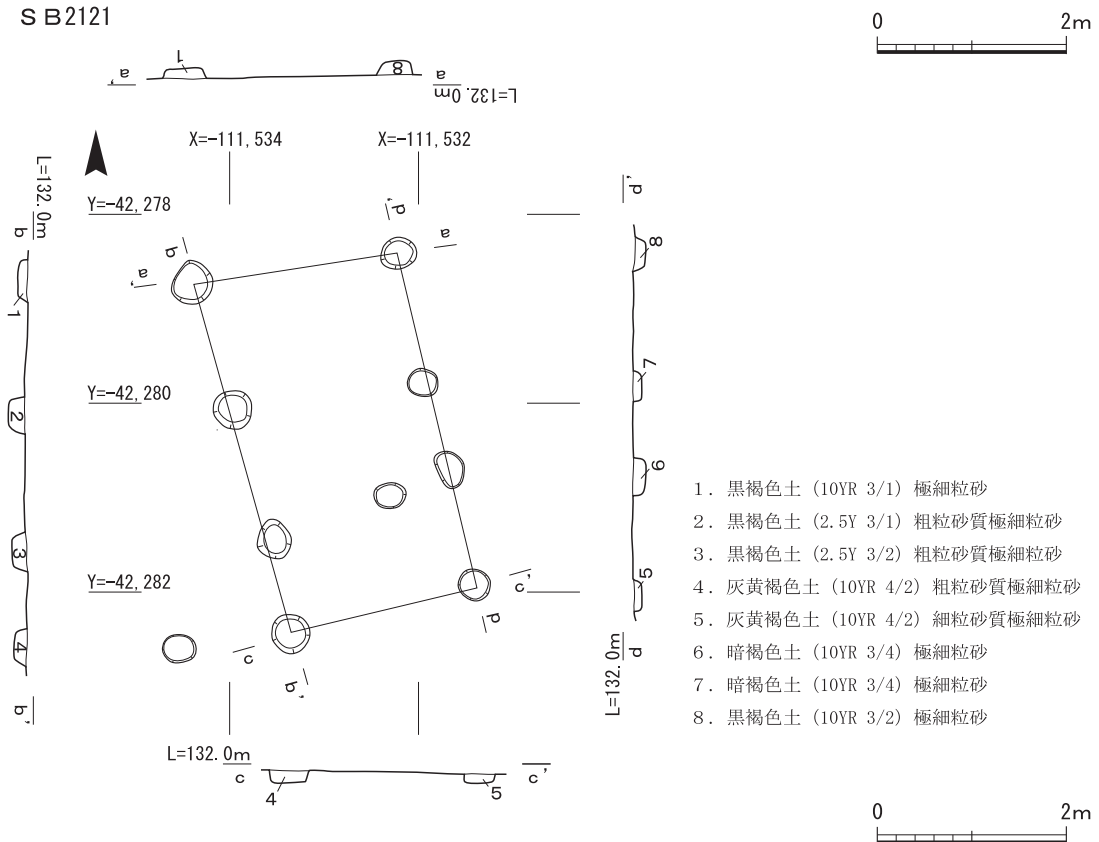
第101図 E地区東壁土層断面図(1/80)

S H1061



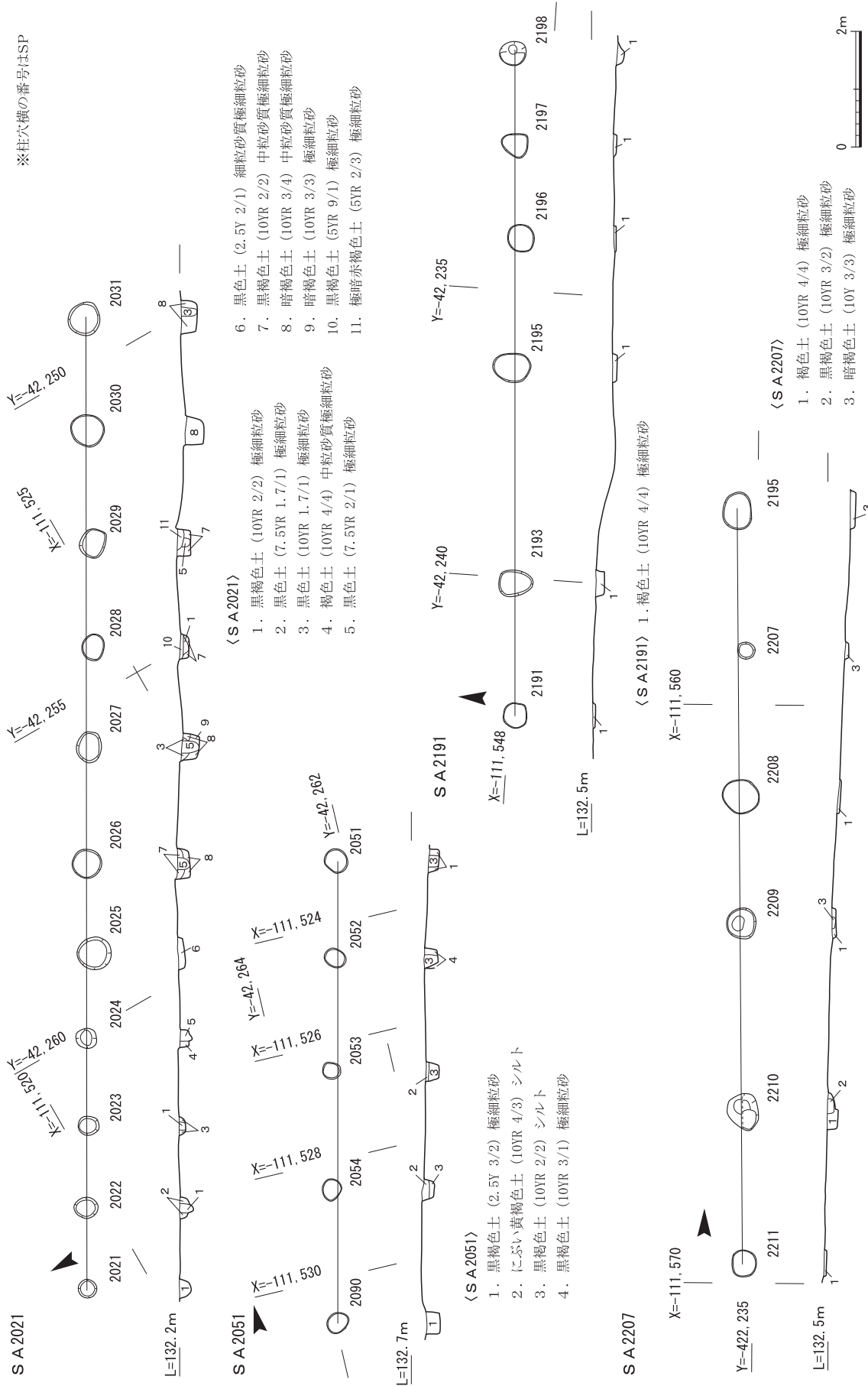
1. 黒色 (5YR 7/1) 極細粒砂質細粒砂

S B2121



1. 黒褐色土 (10YR 3/1) 極細粒砂
2. 黒褐色土 (2.5Y 3/1) 粗粒砂質極細粒砂
3. 黒褐色土 (2.5Y 3/2) 粗粒砂質極細粒砂
4. 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 粗粒砂質極細粒砂
5. 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 細粒砂質極細粒砂
6. 暗褐色土 (10YR 3/4) 極細粒砂
7. 暗褐色土 (10YR 3/4) 極細粒砂
8. 黒褐色土 (10YR 3/2) 極細粒砂

第102図 A地区竪穴建物S H1061・E地区掘立柱建物S B2121平・断面図(1/80)



第103図 E地区柵列平・断面図(1/100)

A2191とS A2207を検出しており、北半の2列は、やや方位が傾くものの、おおむね直交するように並んでおり、南半の2列は直交していることから、いずれもほぼ同時期の遺構と考えられる。出土遺物は僅少で、北半のS A2021を構成する柱穴S P2022から土師器皿が出土したのみであり、詳細な時期は明らかにできないが、中世の遺構と考えられる。

#### (4)土坑

土坑S K 1021(第104図) A地区南西側で検出した。削平を受けており、検出面で長径約1.2m、短径約0.85m、深さ約0.16mの楕円形の土坑である。A地区内では大形の土坑である。遺物は出土しなかった。

土坑S K 1034(第104図) A地区中央で検出した。検出面で長辺約1.63m、短辺約0.87m、深さ約0.66mの隅丸長方形の土坑である。A地区内では大形の土坑で深い。土坑西側はやや底が浅く、階段状を呈する。遺物は出土しなかった。

土坑S K 1038(第99図) A地区西側、竪穴建物S H1061の東側で検出した。検出面で直径約0.4m、深さ約0.1mである。埋土から須恵器と土師器の小片が出土しており、古墳時代後期の土坑と考えられる。

土坑S K 1039(第104図) A地区北東側で検出した。検出面で直径約0.48m、深さ約0.24mである。埋土から厚さ6mm前後の土師器の小片が出土した。詳細な時期は不明であるが、古墳時代の土坑と考えられる。

土坑S K 1040(第104図) A地区西側、竪穴建物S H1061内の西側で検出した。検出面で直径約0.46m、深さ約0.46mである。埋土から土師器の小片数点が出土したほか、精良な胎土の器種不明土師器の口縁部が出土した。詳細な時期は不明であるが、古墳時代の土坑と考えられる。

土坑S K 1041(第102図) A地区東側、竪穴建物S H1061内の北側で検出した。検出面で直径約0.42m、深さ約0.3mである。埋土から、厚さ5mm前後の土師器の小片と須恵器杯蓋(第106図918)が出土した。

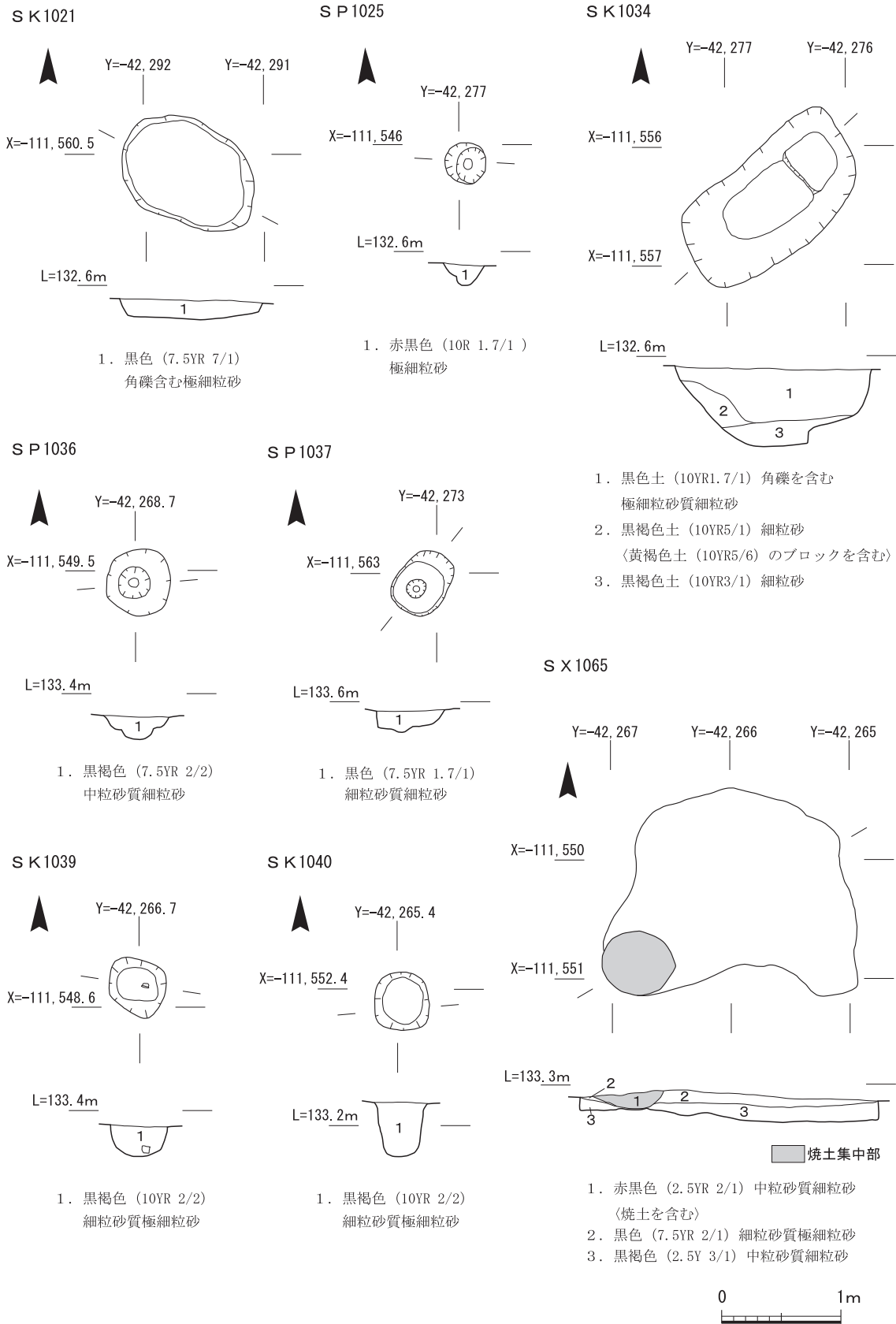
土坑S K 1060(第102図) A地区東側、竪穴建物S H1061の中央付近で検出した。検出面で直径約0.2m、深さ約0.36mである。埋土から、厚さ6mm前後の土師器の小片が出土した。詳細な時期は不明であるが、古墳時代の土坑と考えられる。

土坑S K 1062(第102図) A地区東側、竪穴建物S H1061の北東側で検出した。検出面で推定直径約0.46m、深さ約0.34mである。隣接する土坑S K1044を掘り込む際に削平されている。埋土から、厚さ8mm前後の甕の胴部と考えられる土師器の小片が出土した。詳細な時期は不明であるが、飛鳥時代以降の土坑と考えられる。

焼土坑S K 2036(第105図) E地区北半の北東側で検出した径約0.5mの円形の土坑である。深さ約0.1mが遺存しており、上層には焼土が含まれる。

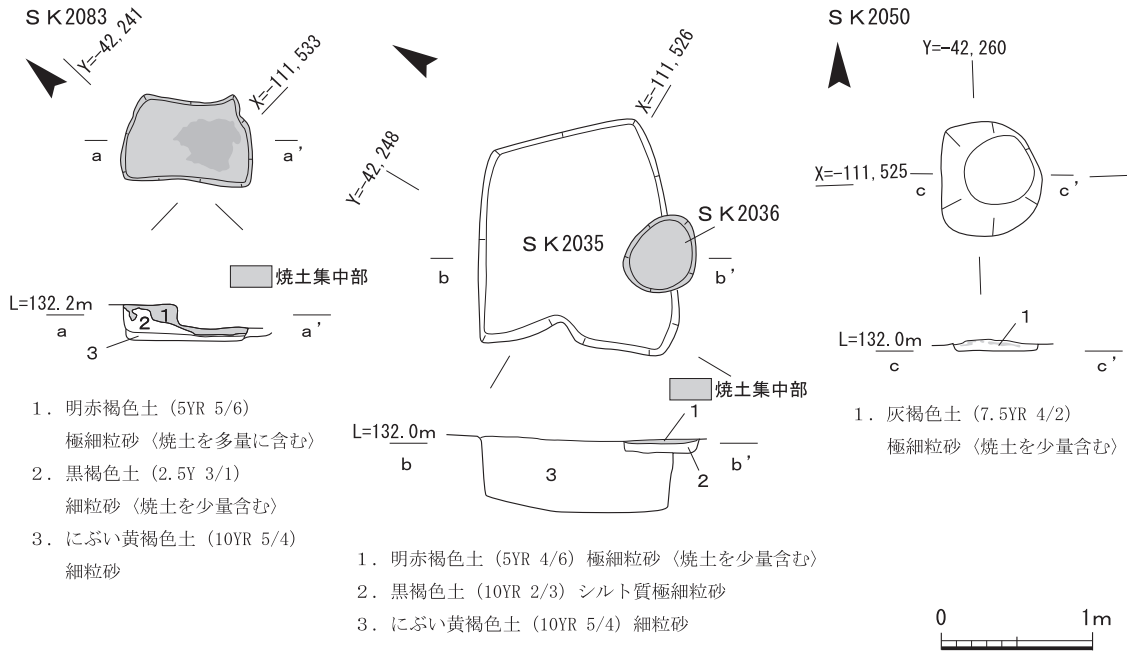
焼土坑S K 2050(第105図) E地区北半の中央北側で検出した不整形の土坑である。埋土は薄く、0.1m以下である。埋土内にまばらに焼土が含まれる。

焼土坑S K 2083(第105図) E地区北半の東側で検出した南北約0.84m、東西約0.53mの方形



第104図 A地区土坑・ピット平・断面図(1/50)





第105図 E地区焼土坑平・断面図(1/50)

の土坑である。土坑南側に焼土を含む層が堆積する。

土坑SK2142(第99図) E地区南半南東側で検出した。検出面で直径約0.34m、深さ約0.14mである。埋土から、須恵器甕の口縁部(第106図928)が出土した。

#### (5)ピット

ピットSP1025(第104図) A地区中央北側で検出した。検出面で直径約0.35m、深さ約0.17mである。ピット西半はやや緩やかに傾斜し、東半にむけて急傾斜に変わる。埋土から、須恵器甕(第106図929)と土師器の小片が出土した。詳細な時期は不明であるが、古墳時代の土坑と考えられる。

ピットSP1036(第104図) A地区北東側で検出した。検出面で直径約0.55m、深さ約0.2mである。ピットは2段掘りである。埋土から土師器及び須恵器の小片が出土した。須恵器は古墳時代後期の杯蓋と考えられる。

ピットSP1037(第104図) A地区中央南側で検出した。検出面で直径約0.57m、深さ約0.18mである。ピット中央はやや深く掘り込まれている。埋土から厚さ8mm前後の土師器の小片が出土した。詳細な時期は不明であるが、飛鳥時代以降のピットと考えられる。

ピットSP1044(第102図) A地区東側、竪穴建物SH1061の北東側で検出した。検出面で直径約0.52m、深さ約0.5mである。隣接する土坑SK1062を削って掘り込まれている。埋土から、厚さ3mm前後の甕の胴部と考えられる土師器の小片が出土した。詳細な時期は不明であるが、古墳時代のピットと考えられる。

#### (6)溝状遺構・不明遺構

溝状遺構SD2001(第99図) E地区北半の西側で検出した。長さ約12.7m、幅約1.4mで、北西から南東方向にのびる。瓦器椀や土師器の小片が数点出土した。中世の遺構と考えられる。

不明遺構 S X 1065 (第104図) A地区北東側で検出した。締まりの強い土が最大で厚さ0.12mで不整形に広がっていた。さらに南西側に突出した部分において若干の焼土を含む範囲を確認した。遺物は出土しておらず、時期や性格は不明である。

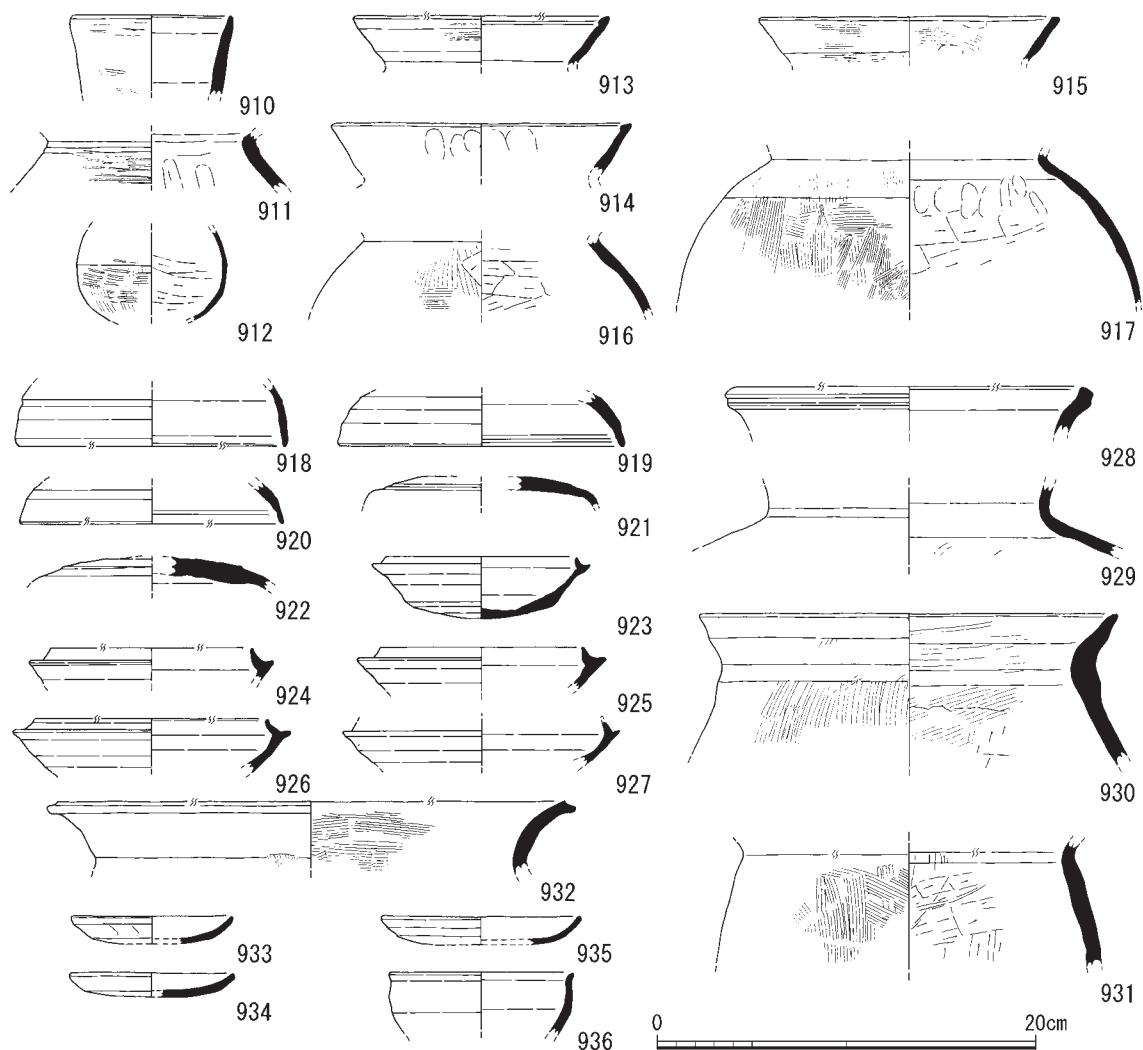
不明遺構 S X 2003 (第99図) E地区北西隅で検出した、不整形な落ち込みである。土師器壺(第106図911)や土師器皿(933)などが出土した。遺構内から出土した遺物は、古墳時代から中世までのものがあり、地形の落ち込みの中に流れ込んだものと考えられる。

これらのほかに、土坑やピットを複数検出したが、出土遺物はなく、時期や性格は不明である。

#### 4) A・E地区出土遺物(第106図)

A・E地区では、古墳時代から近世にかけての遺物が出土した。出土数は少なく、両調査区をあわせてコンテナ10箱に満たない。ほとんどが、包含層から出土した小片である。A・E地区とも古墳時代のものと考えられる土師器がやや多い。

910から917は土師器である。910は直口壺口縁部で、内外面とも摩滅が激しいが、外面にわずかにヨコミガキがみられる。911は壺形土器の頸部から肩部である。頸部外面にヨコナデが施され、



第106図 A・E地区出土遺物

弱い段をつくり出している。肩部外面には細いヨコミガキを施す。内面は全体にヨコナデが見られる。頸部内面には粘土の継ぎ目が残っており、一部、ナデアゲの痕跡が残る。912は小形丸底壺の胴部である。外面には煤が付着している。外面はタテハケののちにヨコミガキが施される。内面は横方向のケズリが施される。913～917は布留形甕である。913～915は口縁部で、端部を折り返し肥厚させている。913は内外面ともにヨコナデが施される。914は摩滅が激しいが、内外面にユビオサエが確認できる。915は内外面にヨコナデが施される。916・917は肩部である。916は、外面に縦方向のハケメが確認でき、わずかにケズリがみられる。内面は斜め方向のケズリののちに横方向のケズリが施される。917は外面上半にヨコナデが施される。下半にはタテハケ及びヨコハケが施される。内面は横方向のケズリが施される。頸部には強いユビオサエが残っており、その後ヨコナデが施される。これらの布留形甕は古墳時代前期後半のものと考えられる。

918～929は須恵器である。918～922は杯蓋である。918の稜は弱い沈線で表現される。口縁部はほぼ直立しており、口縁端部は丸く収められる。TK10型式に相当する。919・920は天井部から口縁部までなだらかに開き、口縁端部は丸く収められる。天井部には回転ヘラケズリが施される。921・922は天井部の破片である。921は内外面ともに回転ナデが施されており、922は回転ヘラケズリが施される。919～922はTK43型式からTK209型式に相当する。923～927は杯身である。923の口縁部は外反しながら斜め上方に短く立ち上がり、口縁端部は鋭く収められる。底部には回転ヘラ切りの痕跡が残る。飛鳥Iに相当する。924～926の口縁部はやや外反しながら斜め上方に短く立ち上がる。924・925は口縁端部を丸く収め、926はわずかに面をつくり出す。927の口縁部は斜め上方に立ち上がる。口縁端部は欠損する。924～927はTK43型式からTK209型式に相当する。928・929は甕である。928は肩部外面にわずかにタタキの痕跡が残る。

930～932は土師器長胴甕である。930は肩部外面に粗い縦方向のハケメが施される。肩部内面には斜めハケ及び縦方向のケズリが施される。931は外面に斜めハケ及び縦ハケが施される。内面は横方向のケズリが施される。932は口縁端部が大きく外反し、ヨコナデによって口縁端部に凹面をつくり出し、内面はヨコハケを施す。933～935は土師器皿である。936は天目茶碗である。

917はA地区SK1059、918はA地区SK1041から出土した。911・933はE地区SX2003から出土した。934はE地区SA2021から出土した。928はE地区SK2142から出土した。929はA地区SP1025から出土した。923・925・932・935はE地区包含層から出土した。924はE地区SK2035から出土した。910・912・913～916・919～922・926・927・930・931・936はA地区包含層から出土した。

## 5) 小結

A地区では古墳時代前期の竪穴建物や古墳時代の土坑、E地区では中世の柵列及び、時期不詳の掘立柱建物や溝状遺構・焼土坑を検出した。A地区・E地区では、いずれの調査区も南西側では遺構の残存状況が悪く、北東側では比較的良好に残存していた。土層堆積の観察から、調査区は南西側から北東側に向けて標高が低くなっており、整地によって平坦化する際に標高の高い南西側が削平されたと考えられる。

(名村威彦)



## 6. 自然科学分析

### 1) 放射性炭素年代測定<sup>(注54)</sup>

#### (1) はじめに

亀岡市の犬飼遺跡より採取された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

#### (2) 試料と方法

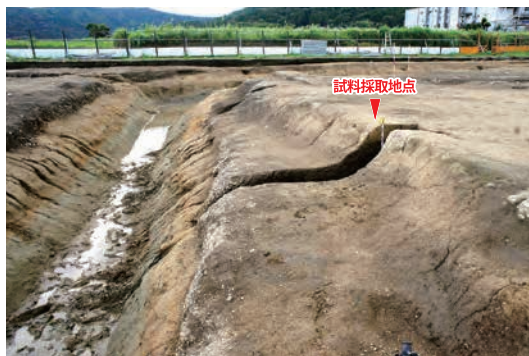
測定試料の情報、調製データは付表7のとおりである。第107図に試料採取地点の堆積状況と測定試料の採取位置、第108図に測定試料の写真を示す。測定資料は、No.1・2をB地区北端の侵食崖の露頭で、No.3は堀S D01基盤層断ち割り中に採取した。No.4は第38図に示した石垣胴木であり、No.5は3章4節5項の写真1に示したウシ右手中手骨(937)である。No.5は堀S D03底に接して出土した試料である。



1. 1地点：測定試料No.1、No.2採取地点



2. 1地点：測定試料No.1 No.2採取位置



3. 2地点：測定試料No.3採取地点



4. 2地点：測定試料No.3採取位置



5. 3地点：測定試料No.4採取地点



6. 3地点：測定試料No.4採取位置(第38図参照)

第107図 年代測定試料の採取地点



試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5S DH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

なお、コラーゲン抽出を要する試料は、必要量（炭素含有量にして0.01g以上）を洗浄後、脱灰処理（冷蔵庫内で数日間）を行い、アルカリ処理（室温で1時間）、酸処理（冷蔵庫内で24時間）後、水洗にてpH3程度に調整する。恒温槽で90℃10時間湯煎してゼラチン化し、遠心分離器にてコラーゲンを分離・回収する。



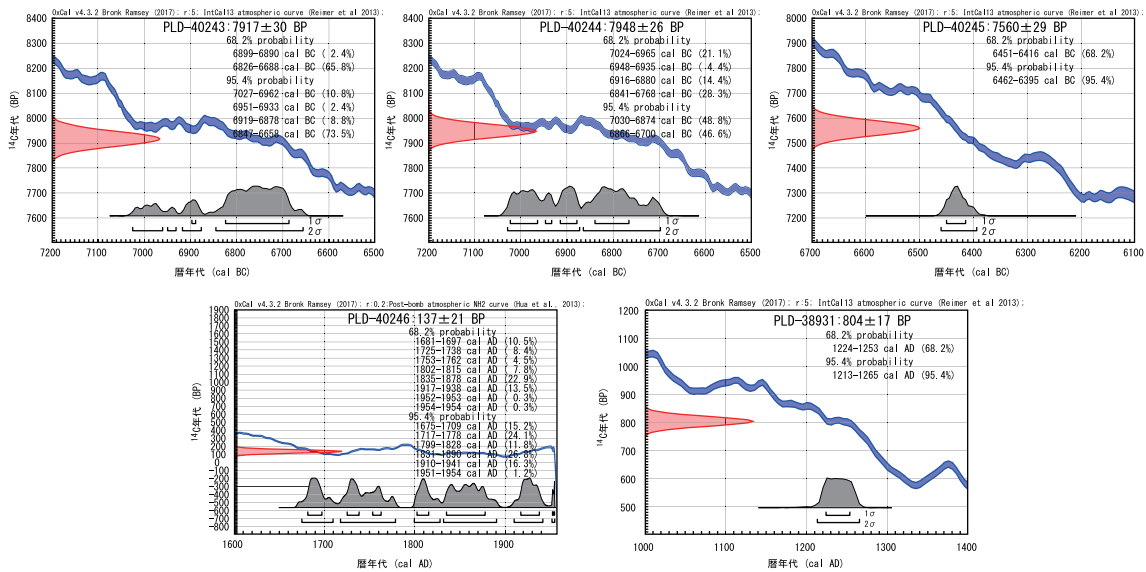
第108図 年代測定試料

付表7 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-40243	試料 No. 1 地点：1 地点	種類：土壌 状態：wet	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-40244	試料 No. 2 地点：1 地点	種類：土壌 状態：wet	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-40245	試料 No. 3 地点：2 地点	種類：土壌 状態：wet	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-40246	試料 No. 4 地点：3 地点 備考：石垣基部胴木	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-38931 (報告 No.937)	試料 No. 5 B 地区 S D 02 Ⅲ層最下層	種類：骨（ウシ右中手骨） 状態：dry	有機溶剤処理：アセトン コラーゲン抽出

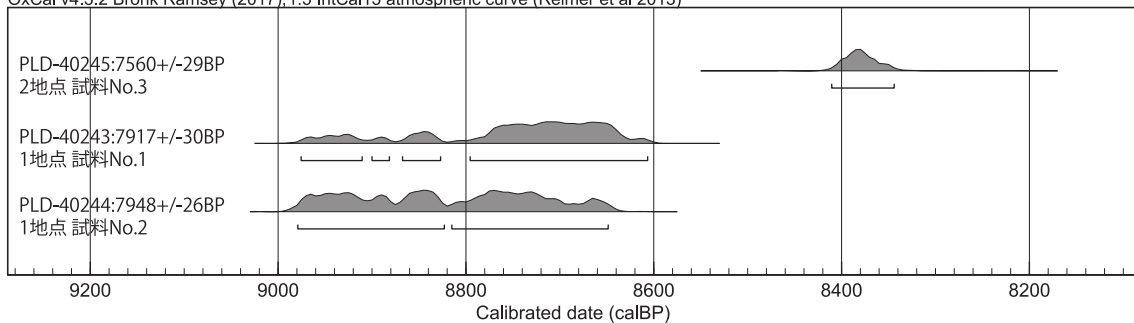
付表8 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-40243 試料 No. 1	-20.96 $\pm$ 0.21	7917 $\pm$ 30	7915 $\pm$ 30	6979-6975 cal BC ( 1.09%) 6907-6887 cal BC ( 6.36%) 6827-6689 cal BC (60.82%)	7031-6965 cal BC (13.12%) 6948-6930 cal BC ( 2.84%) 6917-6878 cal BC ( 9.59%) 6859-6850 cal BC ( 0.94%) 6840-6652 cal BC (68.96%)
PLD-40244 試料 No. 2	-21.94 $\pm$ 0.27	7948 $\pm$ 26	7950 $\pm$ 25	7028-6967 cal BC (21.06%) 6945-6933 cal BC ( 3.87%) 6914-6881 cal BC (12.08%) 6833-6769 cal BC (23.37%) 6758-6751 cal BC ( 1.78%) 6720-6702 cal BC ( 6.11%)	7035-6960 cal BC (23.99%) 6953-6875 cal BC (22.98%) 6866-6736 cal BC (38.24%) 6734-6696 cal BC (10.24%)
PLD-40245 試料 No. 3	-19.87 $\pm$ 0.23	7560 $\pm$ 29	7560 $\pm$ 30	6451-6412 cal BC (68.27%)	6465-6387 cal BC (95.45%)
PLD-40246 試料 No. 4	-33.17 $\pm$ 0.27	137 $\pm$ 21	135 $\pm$ 20	Post-bomb NH2 2013, Reimer et al 2020: 1684-1699 cal AD ( 8.73%) 1722-1735 cal AD ( 7.23%) 1756-1760 cal AD ( 1.64%) 1802-1814 cal AD ( 6.40%) 1834-1889 cal AD (31.24%) 1908-1928 cal AD (11.50%) 1934-1937 cal AD ( 1.09%) 1952-1952 cal AD ( 0.20%) 1954-1954 cal AD ( 0.23%)	Post-bomb NH2 2013, Reimer et al 2020: 1673-1714 cal AD (15.27%) 1717-1743 cal AD (10.69%) 1749-1765 cal AD ( 4.74%) 1773-1778 cal AD ( 0.80%) 1798-1827 cal AD (10.66%) 1829-1900 cal AD (34.68%) 1903-1942 cal AD (17.48%) 1951-1954 cal AD ( 1.12%)
PLD-38931 試料 No. 5	-18.38 $\pm$ 0.23	804 $\pm$ 17	805 $\pm$ 15	1225-1234 cal AD (18.49%) 1237-1261 cal AD (49.78%)	1220-1268 cal AD (95.45%)



第109図 暦年較正結果

OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017); r:5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)



第110図 マルチプロット図



抽出したコラーゲン試料は、必要量を分取後、電気炉内で炭酸ガス(CO<sub>2</sub>)を生成し、真空ラインを用いて硫化物や水などを除去して精製した後、還元剤(純鉄)を用いてグラファイト(炭素)を生成し、加速器質量分析計用ターゲットを作る。

C/N比測定については、上記の方法で抽出したコラーゲンを用いて測定を行った。炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA(ガス化前処理装置)であるFlash EA1112(Thermo Fisher Scientific社製)を用いた。スタンダードは、アセトニトリル(キシダ化学製)を使用した。

### (3)結果

付表8に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、第109図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期 $5730 \pm 40$ 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20、暦年較正結果が1950年以降にのびる試料についてはPost-bomb atmospheric NH2)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

また、C/N比測定については、付表9に測定結果を示す。一般的に骨のコラーゲンのC/N比は2.9~3.6の間に収まる(DeNiro, 1985)。試料から抽出したコラーゲンのC/N比は2.99で、この範囲に収まっており、試料上の問題はないと判断される。

(伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadidze・辻 康男=パレオ・ラボAMS年代測定グループ)

付表9 C/N比測定結果

測定番号	遺跡データ	コラーゲン回収量 (mg)	分析重量 (mg)	C content (%)	N content (%)	C/N ratio
PLD-40243 (報告 No.937)	B地区 S D 02 III層最下層 試料 No. 5 ウン右中手骨	55.11	4.00	43.8	17.06	2.99

2)花粉分析、プラント・オパール分析

(1)はじめに

古環境復元を目的として、中世の居館の堀 S D01と、古墳時代から古代にかけて埋没した開析谷 N R50の埋土が採取された。以下では、試料について行った花粉分析とプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

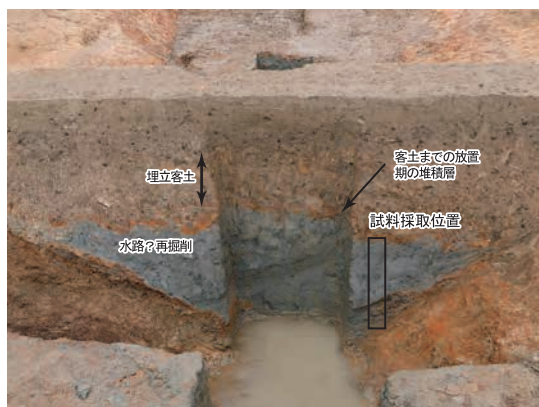
(2)試料と方法

分析試料は、B地区の堀 S D01とC地区の開析谷 N R50で採取された(付表10)。分析試料の時

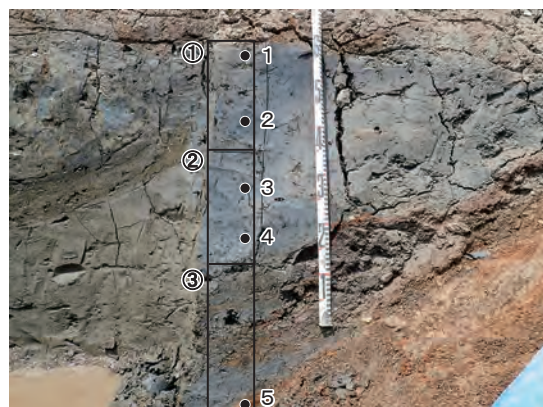
付表10 分析試料一覧

調査区	遺構	層位	時期	試料 No.	岩質	Po	Pl	Di	Se
B地区	S D 01	15層	13世紀後半 ～14世紀	No. 1	灰オリーブ色 (5Y 5/2) 砂質粘土質シルト	○	-	○	-
				No. 2	オリーブ黒色 (5Y 3/2) 粘土質シルト	○	-	○	-
				No. 3	灰色 (5Y 4/1) 粘土質シルト	○	-	○	-
				No. 4	オリーブ黒色 (5Y 3/2) 砂質粘土質シルト	○	-	○	-
		14層	No. 5	灰オリーブ色 (5Y 5/2) 粘土質シルト	○	-	○	-	
C地区	N R 50	II層	奈良時代	No. 1	黒褐色 (2.5Y 3/2) 砂質シルト	○	○	○	-
				No. 2	暗褐色 (10YR 3/3) 砂質シルト	○	○	○	-
		III層	飛鳥時代	No. 3	オリーブ黒色 (5Y 3/1) 腐植質粘土質シルト	○	○	○	○
		IV層	古墳時代中期	No. 4	オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) 腐植質砂質シルト	○	○	○	○
		V層	古墳時代前期後半	No. 5	黒褐色 (2.5Y 3/1) 腐植質砂質粘土質シルト	○	○	○	○

注) Po:花粉分析 Pl:プラント・オパール分析 Di:珪藻分析 Se:大型植物遺体分析



1. B地区 S D01a-a' 断面東壁 堆積および試料採取状況



2. B地区 S D01a-a' 断面東壁 分析試料の採取位置



3. C地区 N R50 北壁 堆積および試料採取状況



4. N R50 北壁 分析試料の採取位置

丸数字は、不攪乱で採取した堆積物ブロック試料番号。丸番号は分析試料の採取位置、数字は試料番号を示す。

第111図 分析試料の採取状況

期は、堀 S D01が13世紀後半～14世紀初頭の鎌倉時代、開析谷 N R50が古墳時代前期後半～奈良時代である。今回の分析では、花粉分析とプラント・オパール分析の試料と同一の試料を用いて、珪藻分析と大形植物遺体分析も行っている。分析試料の詳細については、本報告で一括して示す。

第111図に試料の採取状況、第112図に採取した不攪乱柱状試料の断面写真と岩質記載を示す。

居館の堀 S D01の埋土は、砂混じりの泥層を主体とした堆積物で構成される。最下部には、礫混じりの砂層、底部に薄い泥層が存在する。埋土中には、植物遺体の挟在は認められない。なお、試料採取層準では、上部から溝と思われる再掘削が認められる。

開析谷 N R50は、扇状地が侵食されて形成された小規模な開析谷である。谷埋土の下部は、腐植質に富む泥ないし砂混じりの泥層が堆積する。この層準では、植物遺体の他に、木器を含む木材が多く検出されている。上半部のⅡ層とⅠ層では、砂礫を多く含む泥となり、酸化鉄の斑紋の沈着が顕著になる。

花粉分析には採取した全点の10試料を、プラント・オパール分析には開析谷 N R50の5試料を供した。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

### (3)方法

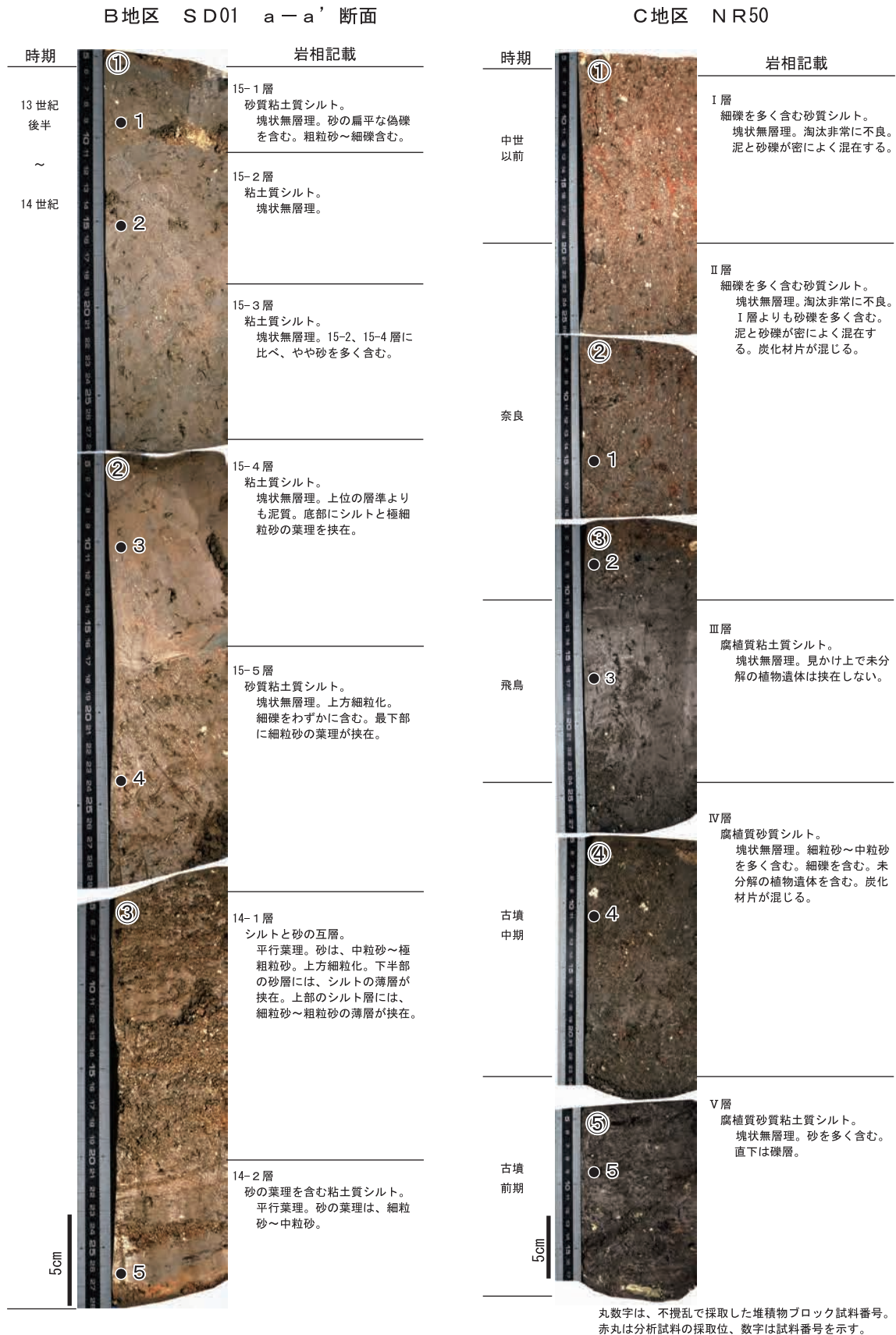
**花粉分析** 試料(湿重量約3～4 g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまでカウントし、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、単体標本(PLC.2918～2925)を作製し、写真2に載せた。

**プラント・オパール分析** 秤量した試料を乾燥後、再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をツールピーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定及び計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、写真3に載せた。

### (4)結果

**花粉分析** 10試料から検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉39、草本花粉30、形態分類のシダ植物胞子2の、総計71である。これらの花粉・胞子の一覧表を付表11に、花粉分布図を第113図に示した。花粉分布図において、樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図及び表においてハイフン(-)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科やバラ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困

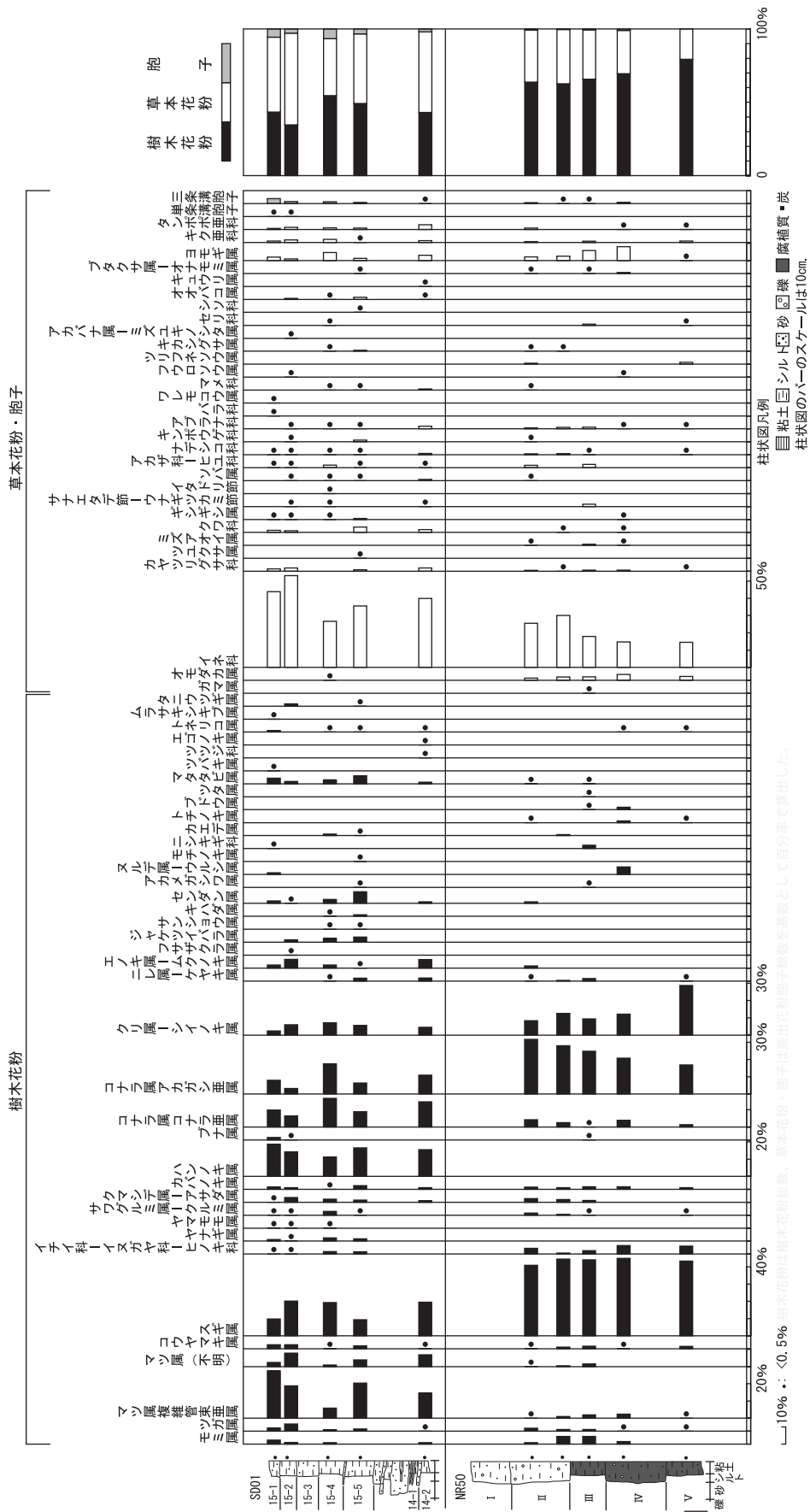




第112図 B地区のS D01、C地区のNR50採取分析ブロック試料断面と分析試料採取位置

付表11 産出花粉孢子一覧表

学名	和名	S D 01					N R 50				
		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5
<b>樹木</b>											
<i>Abies</i>	モミ属	5	2	2	-	2	2	9	9	3	-
<i>Tsuga</i>	ツガ属	4	9	2	3	1	4	2	2	1	1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	59	41	13	48	32	1	2	4	5	1
<i>Pinus (unknown)</i>	マツ属 (不明)	5	17	2	9	15	1	1	3	-	-
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	5	5	1	4	1	1	2	3	1	3
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	21	44	43	22	43	98	89	89	93	95
<i>Taxaceae - Cephalotaxaceae - Cupressaceae</i>	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	1	3	3	-	8	1	4	10	10
<i>Salix</i>	ヤナギ属	2	1	4	3	-	-	-	-	-	-
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pterocarya - Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	1	1	5	1	-	3	1	1	-	1
<i>Carpinus - Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	1	6	4	3	2	5	3	2	-	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	3	2	1	5	2	3	2	3	3	2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	40	31	25	39	34	-	-	-	-	-
<i>Fagus</i>	ブナ属	3	1	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	21	14	37	21	32	10	5	1	8	3
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	17	7	39	15	24	76	56	50	43	37
<i>Castanea - Castanopsis</i>	クリ属-シノキ属	5	13	16	13	10	20	25	19	25	63
<i>Ulmus - Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	-	-	1	4	4	1	1	3	-	1
<i>Celtis - Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	4	11	4	1	11	3	-	-	-	-
<i>Euptelea</i>	フサザクラ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caesalpinia</i>	ジャケツイバラ属	-	3	5	7	-	-	-	-	-	-
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>Phellodendron</i>	キハダ属	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
<i>Melia</i>	センダン属	3	1	5	16	2	2	-	-	-	-
<i>Mallotus</i>	アメメカシワ属	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
<i>Rhus - Toxicodendron</i>	スルデ属-ウルシ属	2	-	-	-	-	-	-	-	9	-
<i>Ilex</i>	モチノキ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Celastraceae</i>	ニシキギ科	1	-	-	-	-	-	-	4	-	-
<i>Acer</i>	カエデ属	-	-	2	1	-	-	1	-	-	-
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	2	1
<i>Vitis</i>	ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-
<i>Parthenocissus</i>	ツタ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Actinidia</i>	マタタビ属	7	3	5	11	2	1	-	1	-	-
<i>Camellia</i>	ツバキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ericaceae</i>	ツツジ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Styrax</i>	エゴノキ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	2	-	1	1	1	-	-	-	1	1
<i>Callicarpa</i>	ムラサキシキブ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Weigela</i>	タニウツギ属	-	3	-	1	-	-	-	-	-	-
<b>草本</b>											
<i>Typha</i>	ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	-	-	1	-	-	5	6	6	10	6
<i>Gramineae</i>	イネ科	217	335	109	171	204	96	96	55	44	40
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	7	12	-	4	10	2	1	2	2	1
<i>Commelina</i>	ツユクサ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	-	-	-	-	-	1	-	2	1	-
<i>Moraceae</i>	クワ科	6	6	-	15	8	-	1	-	1	-
<i>Rumex</i>	ギンギン属	1	2	1	3	-	-	-	-	1	-
<i>Polygonum sect. Persicaria - Echinocaulon</i>	ササエタデ節-ウナギツカミ節	-	1	2	-	1	-	-	4	-	-
<i>Polygonum sect. Reynoutria</i>	イタドリ節	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	-	2	2	1	4	1	-	-	-	-
<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	アカザ科-ヒユ科	1	2	6	2	2	5	-	6	-	-
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科	1	3	2	1	4	2	2	1	-	1
<i>Ranunculaceae</i>	キンポウゲ科	-	1	-	5	-	1	-	-	-	-
<i>Brassicaceae</i>	アブラナ科	-	1	1	1	8	2	3	3	1	1
<i>Rosaceae</i>	バラ科	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Leguminosae</i>	マメ科	-	-	1	1	3	1	-	-	-	-
<i>Geranium</i>	フクロソウ属	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属	-	-	-	-	-	2	-	-	-	3
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	-	-	1	3	-	1	1	-	-	-
<i>Epilobium - Ludwigia</i>	アカバナ属-ミズユキノシタ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Apiaceae</i>	セリ科	-	-	1	-	-	-	-	2	-	1
<i>Labiatae</i>	シソ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Plantago</i>	オオバコ属	-	4	1	6	1	-	-	-	-	-
<i>Cucumis</i>	キュウリ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Ambrosia - Xanthium</i>	ブタクサ属-オナモミ属	-	-	-	2	-	1	-	1	2	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	10	6	19	6	16	8	8	18	24	1
<i>Tubuliflorae</i>	キク亜科	4	9	7	1	5	2	-	2	-	2
<i>Liguliflorae</i>	タンポポ亜科	3	8	4	4	14	3	-	-	1	1
<b>シダ植物</b>											
<i>monolete type spore</i>	単条溝孢子	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>trilete type spore</i>	三条溝孢子	14	7	4	3	2	2	1	1	2	-
<i>Arboreal pollen</i>	樹木花粉	215	218	224	236	220	240	200	202	207	219
<i>Nonarboreal pollen</i>	草本花粉	253	394	159	228	281	133	118	103	88	57
<i>Spores</i>	シダ植物孢子	15	10	4	3	2	2	1	1	2	-
<i>Total Pollen &amp; Spores</i>	花粉・孢子総数	483	622	387	467	503	375	319	306	297	276
<i>unknown</i>	不明	13	8	23	13	8	2	5	1	3	4

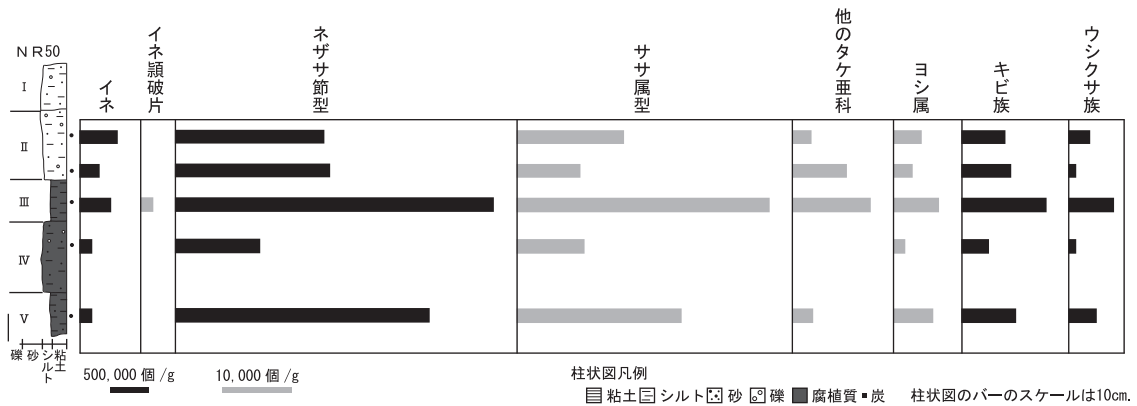


第113図 SD01とNR50の花粉分布図



付表12 試料1 g当たりのプラント・オパール個数

		イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
N R 50	No. 1	47,000	0	191,800	15,200	2,500	3,800	54,600	25,400	40,600
	No. 2	22,900	0	199,500	8,900	7,600	2,500	62,300	7,600	15,200
	No. 3	37,700	1,600	412,700	36,100	11,000	6,300	108,300	56,500	58,100
	No. 4	13,600	0	108,500	9,500	0	1,400	33,900	8,100	10,800
	No. 5	13,700	0	329,700	23,400	2,700	5,500	68,700	34,300	31,600



第114図 開析谷N R 50の植物珪酸体分布図

難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

開析谷N R 50の樹木花粉では、スギ属やコナラ属アカガシ亜属が、草本花粉ではイネ科の産出が目立つ。堀S D 01の樹木花粉では、マツ属複維管束亜属やハンノキ属、コナラ属コナラ亜属が、草本花粉ではイネ科の産出が目立つ。

プラント・オパール分析 同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1 g当たりの各プラント・オパール個数を求め(付表12)、分布図に示した(第114図)。

開析谷N R 50の試料を検鏡した結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が確認できた。また、一部の試料ではイネの籾殻に形成されるイネ穎破片の産出も確認された。(森 将志・辻 康男=パレオ・ラボ)

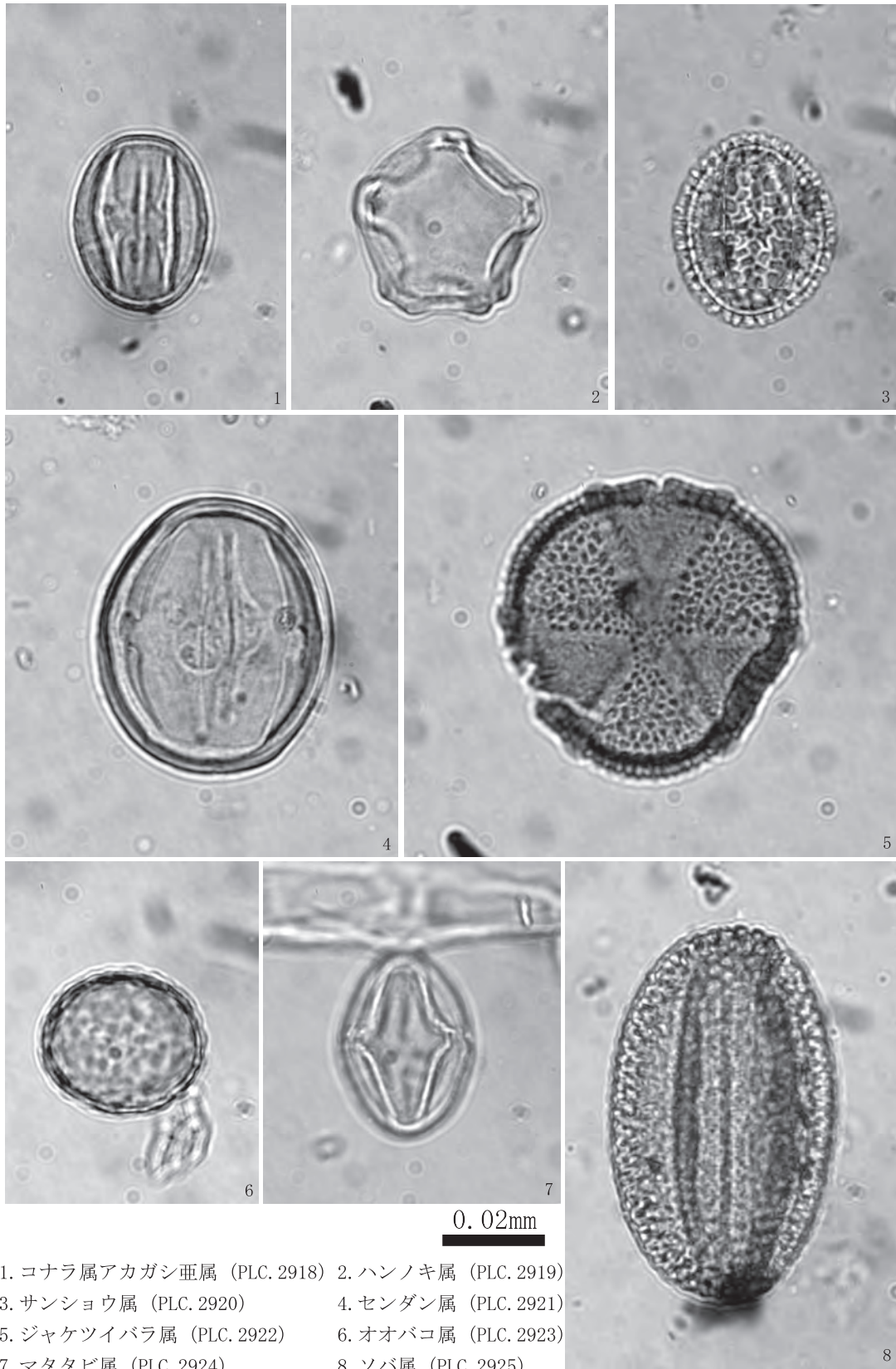
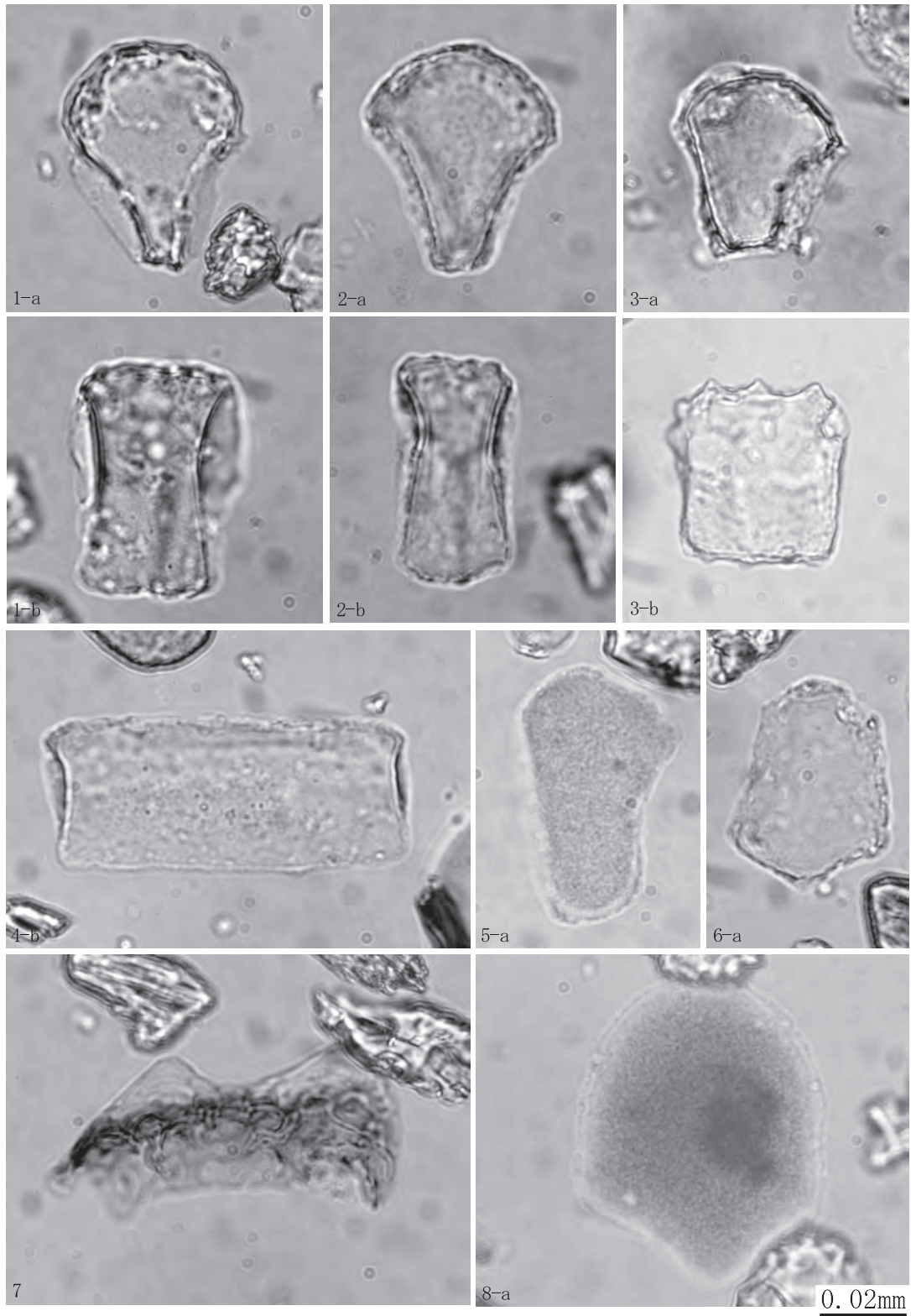


写真2 堀S D01(No.4)から産出した花粉化石



1. イネ機動細胞珪酸体 (No. 1)    2. ネザサ節型機動細胞珪酸体 (No. 1)    3. ネザサ節型機動細胞珪酸体 (No. 3)  
 4. キビ族機動細胞珪酸体 (No. 3)    5. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (No. 3)    6. ササ属型機動細胞珪酸体 (No. 3)  
 7. イネ穎破片 (No. 3)    8. ヨシ属機動細胞珪酸体 (No. 3)    a:断面 b:側面

写真3 開析谷N R50から産出した植物珪酸体



### 3) 堆積物中の珪藻化石群集<sup>(注55)</sup>

#### (1) はじめに

犬飼遺跡のB地区の堀SD01と、C地区の開析谷NR50の埋土中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境や古水文環境について検討した。

#### (2) 試料

分析試料は、中世の居館の堀SD01の埋土から5試料と、古墳時代～奈良時代に埋没が進行した小規模な開析谷NR50の埋土から5試料である。分析試料の詳細や採取位置などは、花粉分析・プラント・オパール分析の報告で示しているので参照されたい。

#### (3) 方法

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

①湿潤重量約1.0gを取り出し、秤量した後ビーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。②反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を15回ほど繰り返した。③懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形(原則として半分程度残っている殻)に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から、堆積物1g当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良い珪藻化石を選び、写真4に載せた。なお、珪藻化石の少ない試料については、プレパラートの面積の2/3以上について同定・計数した。

#### (4) 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉(1988)及び安藤(1990)が設定し、千葉・澤井(2014)により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、汽水種は汽水不定・不明種(?)として、淡水種は広布種(W)として、その他の種はまとめて不明種(?)として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明(?)として扱った。以下に、小杉(1988)が設定した海水～汽水域における環境指標種群のうち汽水域における環境指標種群と、安藤(1990)が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[汽水藻場指標種群(C2)]：塩分濃度が4～12パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

[汽水砂質干潟指標種群(D2)]：塩分濃度が5～26パーミルの水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種群である。

[汽水泥質干潟指標種群(E2)]：塩分濃度が2～12パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

[上流性河川指標種群(J)]：河川上流部の溪谷部に集中して出現する種群である。これらは殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群(K)]：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地及び自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群(L)]：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

[湖沼浮遊生指標種群(M)]：水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群(N)]：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

[沼沢湿地付着生指標種群(O)]：水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所及び湿地において、付着の状態が優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群(P)]：尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落及び泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群(Q)]：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である(陸生珪藻と呼ばれている)。

[陸生珪藻A群(Qa)]：耐乾性の強い特定のグループである。

[陸生珪藻B群(Qb)]：A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

## (5) 結果

### (i) 産出状況

堆積物から検出された珪藻化石は、汽水種が1分類群1属1種、淡水種が57分類群30属37種2変種であった。これらの珪藻化石は、淡水域における7環境指標種群(J、K、N、O、P、Qa、Qb)に分類された(付表13)。また、珪藻分布図を第115図及び第116図に示した。以下では、遺構ごとに珪藻化石の特徴とその堆積環境について述べる。

### (ii) 堀SD01

#### ・No.5 (14層)

堆積物1g中の珪藻殻数は $1.0 \times 10^4$ 個、完形殻の出現率は60.0%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は少ない。環境指標種群では、沼沢湿地付着生指標種群(O)のみが検出された。

珪藻化石の検出数が少なすぎるため、珪藻化石群集に基づく堆積環境については言及できない。

#### ・No.4 (15層)

堆積物1g中の珪藻殻数は $2.3 \times 10^5$ 個、完形殻の出現率は61.4%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、陸生珪藻A群(Qa)がやや多く、中～下流性河川指標種群(K)、湖沼沼沢湿地指標種群(N)、沼沢湿地付着生指標種群(O)などをわずかに伴う。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域などを伴い、わずかに流れのある湿地環境が推



付表13 堆積物中の珪藻化石産出表 <sup>(注56)</sup>

No.	分類群	種群	S D 01					N R 50					
			No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	
1	<i>Nitzschia</i>	<i>levidenis</i>	?		1								
2	<i>Achnanthes</i>	<i>spp.</i>	?	2	3	6	2						
3	<i>Achnantheidium</i>	<i>convergens</i>	J		1								
4	<i>Amphora</i>	<i>spp.</i>	?	2	10	4	3	1		3	25	22	5
5	<i>Caloneis</i>	<i>aerophila</i>	Qa			5	4						
6	<i>C.</i>	<i>spp.</i>	?	2	3	6	6				2	9	
7	<i>Cocconeis</i>	<i>placentula</i>	W	4	2	1	1						
8	<i>Cymbella</i>	<i>aspera</i>	O	8				4				1	1
9	<i>C.</i>	<i>mesiana</i>	W	2	2	6	2				4	5	
10	<i>C.</i>	<i>naviculiformis</i>	W	1	1	2	2						
11	<i>C.</i>	<i>tumida</i>	W	6	4	5	7	2		2	42	28	3
12	<i>C.</i>	<i>turgidula</i>	K		3		3						
13	<i>C.</i>	<i>spp.</i>	?		2	12	5				4	8	1
14	<i>Cymboplectra</i>	<i>apiculata</i>	W								7	1	
15	<i>Diademsis</i>	<i>contenta</i>	Qa		1	2	5						
16	<i>Diploneis</i>	<i>finnica</i>	W				1						
17	<i>D.</i>	<i>spp.</i>	?	1	2	3	5					2	
18	<i>Epithemia</i>	<i>spp.</i>	?	26	11	33	65	2					
19	<i>Eunotia</i>	<i>pectinalis</i> var. <i>minor</i>	O									4	
20	<i>E.</i>	<i>spp.</i>	?	2	1						5	2	2
21	<i>Fragilaria</i>	<i>brevistriata</i>	N		1	1	3				2	11	1
22	<i>F.</i>	<i>capucina</i>	N	1	1	1	1				1	3	
23	<i>F.</i>	<i>vaucheriae</i>	K		1	1							
24	<i>F.</i>	<i>spp.</i>	?		2						1		
25	<i>Gomphonema</i>	<i>acuminatum</i>	O	1		1	1	1			3	2	
26	<i>G.</i>	<i>augur</i>	W	1	1								
27	<i>G.</i>	<i>gracile</i>	O			1							
28	<i>G.</i>	<i>truncatum</i>	W	1	2	3	2					1	
29	<i>G.</i>	<i>spp.</i>	?	4	4	16	22			1	25	38	4
30	<i>Gyrosigma</i>	<i>spp.</i>	?	16	104	5	8				3		
31	<i>Hantzschia</i>	<i>amphioxys</i>	Qa	2	2		4				8	3	
32	<i>Luticola</i>	<i>mutica</i>	Qa			1	1				3	6	1
33	<i>Martyana</i>	<i>martyi</i>	W		1								
34	<i>Meridion</i>	<i>circulae</i> var. <i>constricta</i>	K								2	1	1
35	<i>Navicula</i>	<i>cuspidata</i>	W				1			1	1	1	
36	<i>N.</i>	<i>elginensis</i>	O			5	1					1	
37	<i>N.</i>	<i>laevissima</i>	W			5	9				1	7	
38	<i>N.</i>	<i>spp.</i>	?	5	8	24	10				18	27	
39	<i>Neidium</i>	<i>ampliatum</i>	P				1						
40	<i>N.</i>	<i>spp.</i>	?	1	1	4	2				4	3	
41	<i>Nitzschia</i>	<i>spp.</i>	?		2	7	2				4	1	
42	<i>Pinnularia</i>	<i>borealis</i>	Qa				1						
43	<i>P.</i>	<i>gibba</i>	O	2		3					7	1	
44	<i>P.</i>	<i>subcapitata</i>	Qb		3								
45	<i>P.</i>	<i>spp.</i>	?	4	17	10	6				24	8	
46	<i>Planothidium</i>	<i>lanceolatum</i>	K	1	4	8	2				1	2	
47	<i>Reimeria</i>	<i>sinuata</i>	K	2	1	3	1						
48	<i>Rhopalodia</i>	<i>gibba</i>	W		2		2				1	1	
49	<i>R.</i>	<i>gibberula</i>	W	1		2	1						
50	<i>R.</i>	<i>spp.</i>	?			5	2						
51	<i>Sellaphora</i>	<i>pupula</i>	W		2		1						
52	<i>Stauroneis</i>	<i>acuta</i>	W										1
53	<i>S.</i>	<i>phoenicenteron</i>	O		2	4	1				3	1	
54	<i>S.</i>	<i>spp.</i>	?	2	1	1	2				1	2	
55	<i>Staurosira</i>	<i>construens</i>	N		3	1					3	7	
56	<i>Surirella</i>	<i>spp.</i>	?	1		5	4				1		
57	<i>Synedra</i>	<i>ulna</i>	W			1				1			1
58	<i>S.</i>	<i>spp.</i>	?	2									
59	Unknown	?	?	1	2	6	5				3	2	
汽水不定・不明種			?		1								
上流性河川			J		1								
中～下流性河川			K	3	9	12	6				3	3	1
湖沼沼沢湿地			N	1	5	3	4				6	21	1
沼沢湿地付着生			O	11	2	14	3	5			13	10	1
高層湿原			P				1						
陸生A群			Qa	2	3	8	15				11	9	1
陸生B群			Qb		3								
広布種			W	16	17	25	29	2		4	56	44	5
淡水不定・不明種			?	70	171	141	144	3		4	117	122	12
その他不明種			?	1	2	6	5				3	2	
海水種													
海～汽水種													
汽水種					1								
淡水種				103	210	204	202	10		8	206	209	21
合計				104	212	211	207	10	0	8	209	211	21
完形殻の出現率 (%)				49.0	47.4	64.5	61.4	60.0	-	25.0	52.2	48.8	38.1
堆積物 1g 中の殻数 (個)				4.4E+04	6.7E+05	8.6E+05	2.3E+05	1.0E+04	0.0E+00	7.3E+03	3.5E+05	1.6E+05	2.1E+04

定される。

・ No.3 (15層)

堆積物1g中の珪藻殻数は $8.6 \times 10^5$ 個、完形殻の出現率は64.5%である。おもに淡水種からなり、汽水種をわずかに伴う。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、沼沢湿地付着生指標種群(O)と中～下流性河川指標種群(K)がやや多く、陸生珪藻A群(Qa)、湖沼沼沢湿地指標種群(N)などをわずかに伴う。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域や湿地環境ではあるが、少し流れのある状況が推定される。

・ No.2 (15層)

堆積物1g中の珪藻殻数は $6.7 \times 10^5$ 個、完形殻の出現率は47.4%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、中～下流性河川指標種群(K)がやや多く、湖沼沼沢湿地指標種群(N)、陸生珪藻A群(Qa)、陸生珪藻B群(Qb)などをわずかに伴う。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域や湿地環境ではあるが、少し流れのある状況が推定される。

・ No.1 (15層)

堆積物1g中の珪藻殻数は $4.4 \times 10^4$ 個、完形殻の出現率は49.0%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数はやや少ない。環境指標種群では、沼沢湿地付着生指標種群(O)がやや多く、中～下流性河川指標種群(K)や陸生珪藻A群(Qa)などをわずかに伴う。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域などを伴い、わずかに流れのある湿地環境が推定される。

(iii) NR50

・ No.5 (V層)

堆積物1g中の珪藻殻数は $2.1 \times 10^4$ 個、完形殻の出現率は38.1%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は少ない。環境指標種群では、中～下流性河川指標種群(K)、湖沼沼沢湿地指標種群(N)、沼沢湿地付着生指標種群(O)、陸生珪藻A群(Qa)が検出された。

珪藻化石の検出数が少なすぎるため、珪藻化石群集に基づく堆積環境については言及できない。

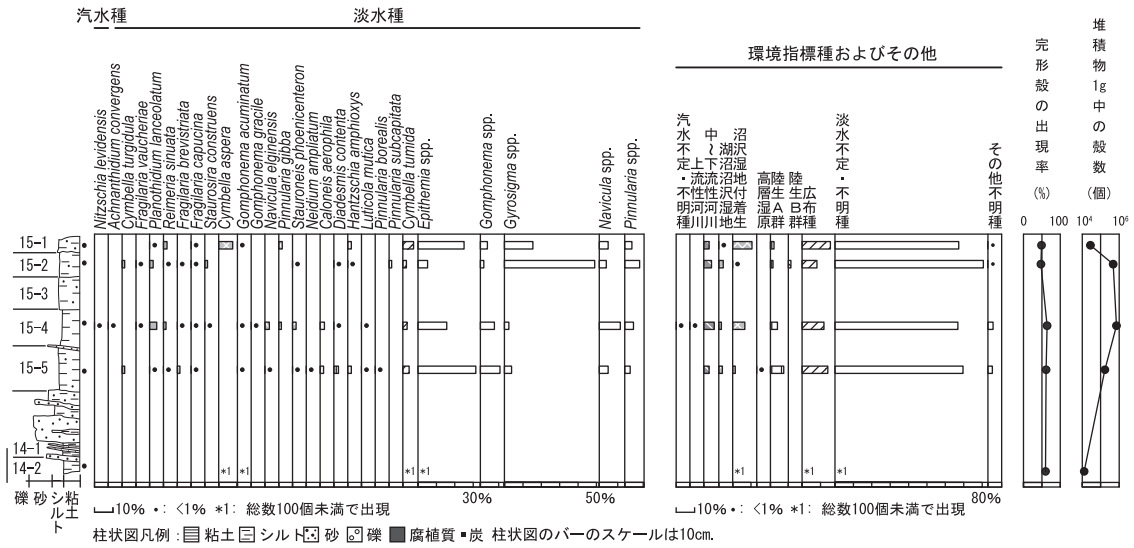
・ No.4 (IV層)

堆積物1g中の珪藻殻数は $1.6 \times 10^5$ 個、完形殻の出現率は48.8%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、湖沼沼沢湿地指標種群(N)がやや多く、沼沢湿地付着生指標種群(O)、陸生珪藻A群(Qa)、中～下流性河川指標種群(K)をわずかに伴う。

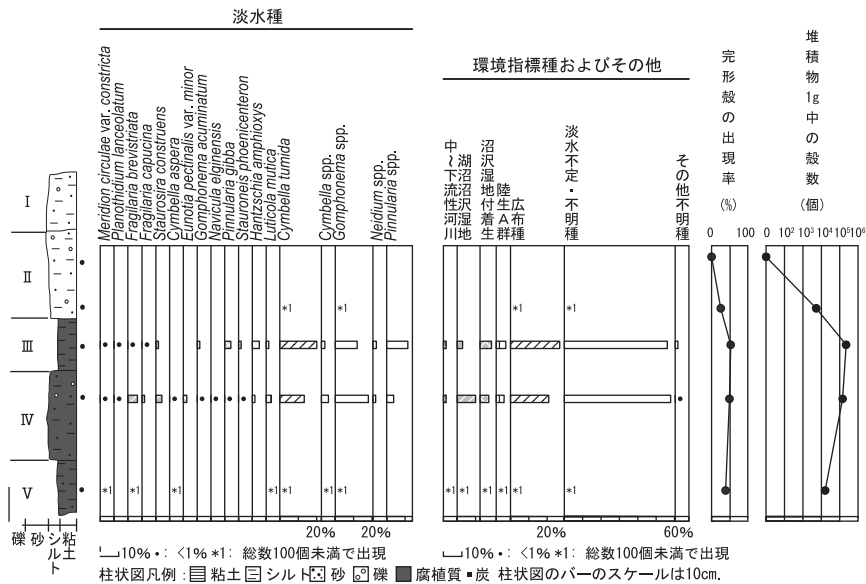
環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域などを伴い、わずかに流れのある湿地環境が推定される。

・ No.3 (III層)

堆積物1g中の珪藻殻数は $3.5 \times 10^5$ 個、完形殻の出現率は52.2%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、沼沢湿地付着生指標種群(O)がやや多く、



第115図 堀S D01の堆積物中の珪藻化石分布図(主な分類群を表示)



第116図 開析谷N R50の堆積物中の珪藻化石分布図(主な分類群を表示)

陸生珪藻A群(Qa)、湖沼沼沢湿地指標種群(N)、中～下流性河川指標種群(K)をわずかに伴う。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域などを伴い、わずかに流れのある湿地環境が推定される。

・No.2 (II層)

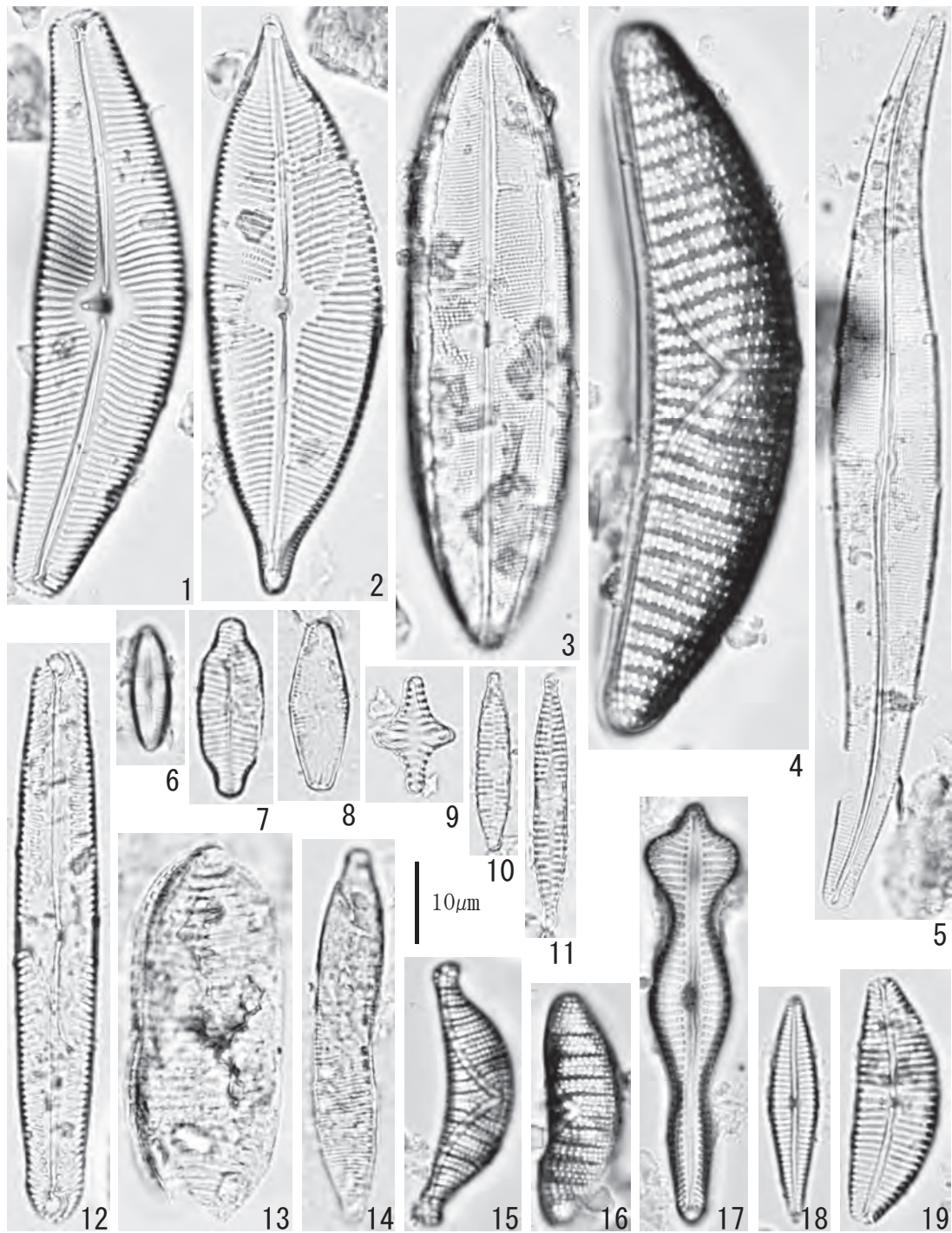
堆積物 1 g 中の珪藻殻数は  $7.3 \times 10^3$  個、完形殻の出現率は25.0%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群は検出されなかった。

珪藻化石の検出数が少なすぎるため、珪藻化石群集に基づく堆積環境については言及できない。

・No.1 (II層)

殻が半分以上残存している珪藻化石は検出されなかった。珪藻化石が検出されなかったため、珪藻化石群集に基づく堆積環境については言及できない。

(野口真利江・辻 康男＝パレオ・ラボ)



1. *Cymbella tumida* (No. 8) 2. *Cymbopleura apiculata* (No. 8) 3. *Neidium ampliatum* (No. 4)  
 4. *Epithemia* spp. (No. 1) 5. *Gyrosigma* spp. (No. 2) 6. *Caloneis aerophila* (No. 3)  
 7. *Navicula elginensis* (No. 3) 8. *Luticola mutica* (No. 9) 9. *Staurosira construens* (No. 9)  
 10. *Fragilaria vaucheriae* (No. 2) 11. *Fragilaria capucina* (No. 2) 12. *Pinnularia gibba* (No. 8)  
 13. *Nitzschia levidensis* (No. 3) 14. *Hantzschia amphioxys* (No. 4) 15. *Epithemia* spp. (No. 4)  
 16. *Epithemia* spp. (No. 1) 17. *Gomphonema acuminatum* (No. 8) 18. *Gomphonema gracile* (No. 3)  
 19. *Cymbella turgidula* (No. 2)

写真 4 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真



#### 4)大型植物遺体

##### (1)はじめに

古植生復元を目的として、埋没谷と考えられるNR50を埋積する古墳時代～古代の層準から、大型植物遺体と堆積物試料が採取された。以下では、現地取り上げの大型植物遺体と、堆積物に含まれていた大型植物遺体の同定結果を報告し、当時の利用植物や植生について検討した。<sup>(注57)</sup>

なお、同じ層から採取された堆積物を用いて、花粉分析とプラント・オパール分析も行われている(花粉分析とプラント・オパール分析の項参照)。

##### (2)試料

試料は、古墳時代前期～中世にかけて埋没した開析谷NR50から、肉眼で確認され、取り上げられた大型植物遺体81試料と、堆積物試料3試料である。分析試料の詳細や採取位置などは、花粉・プラント・オパール分析の報告で示しているので参照されたい。

##### [現地取り上げ試料]

分析試料は、C地区開析谷NR50の古代以降～中世のI層から10試料、奈良時代のII層から18試料、飛鳥時代のIII層から30試料、古墳時代中期のIV層から16試料、古墳時代前期後半のV層から4試料、時期不明のものは3試料である。

##### [堆積物試料]

堆積物試料は、調査区の北壁断面から採取した。試料採取層準と点数は、飛鳥時代のIII層から1試料、古墳時代中期のIV層から1試料、古墳時代前期後半のV層から1試料である。

##### (3)方法

堆積物試料の水洗は、パレオ・ラボで行い、各試料200ccについて、最小0.5mm目の篩を用いて水洗した。大型植物遺体の抽出及び同定は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。モモとスモモ、クルミ属は形態を観察し、完形、動物食痕のある個体、一部破損、半割の個体、破片に分類した。計数が困難な分類群は、記号(+)で示した。

##### (4)結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のイヌガヤ種子とカヤ種子の2分類群、広葉樹のモモ核とスモモ果実・核、キイチゴ属核、コウゾ属核、クワ属核、クリ果実、オニグルミ核、イイギリ種子、カラスザンショウ種子、イヌザンショウ種子、マタタビ属種子、ハクウンボク核、ニワトコ核、タラノキ核の14分類群、草本植物ではヘラオモダカ果実とオモダカ属果実・種子、ホッスモ種子、イボクサ種子、コナギ種子、スゲ属アゼスゲ節果実、スゲ属果実、ヒメクグ果実、カワラスガナ果実、カヤツリグサ属A果実、カヤツリグサ属B果実、ホタルイ属果実、メヒシバ属有ふ果、ヒエ属有ふ果、イネ籾殻、エノコログサ属有ふ果、ムラサキケマン種子、キケマン属種子、タガラシ果実、キンポウゲ属果実、ノブドウ種子、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属果実、カナムグラ核、クワクサ種子、カラムシ属果実、ミズ属果実、トウガン種子、カタバミ属種子、エノキグサ属種子、スミレ属種子、タネツケバナ属種子、ヤナギタデ果実、サナエタデーオオイヌタデ果



実、イヌタデ果実、ボントクタデ果実、ミゾソバ果実、ギシギシ属果実、ウシハコベ種子、ノミノフスマ種子、アカザ属種子、ツリフネソウ属種子、オカトラノオ属種子、ナス属種子、トウバナ属果実、シソ属果実、ニガクサ属果実、タカサブロウ果実、メナモミ属果実、キク科A果実、キク科B果実、チドメグサ属種子、セリ果実の52分類群の、計68分類群が見いだされた(付表14・15)。このほかに、科以下の同定ができなかった芽を一括した。

また、同定の対象外とした不明昆虫遺体も得られた。

以下に、大型植物遺体の産出傾向を時期ごとに、層位別に記載する。

[現地取り上げ試料]

層位不明(時期不明) モモとクリがわずかに得られた。

I層(古代以降～中世) モモが少量と、スモモがわずかに得られた。

II層(奈良時代) モモとスモモが少量、カヤとクリがわずかに得られた。

III層(飛鳥時代) モモとスモモが少量と、カヤとクリがわずかに得られた。

IV層(古墳時代中期) モモが少量と、クリがわずかに、オニグルミの破片が1点、得られた。

付表14 大型植物遺体(2)

分類群	No.	C地区											
		N R 50											
		層位	I層		II層		III層		IV層		V層		
時期	不明	古代以降～中世		奈良		飛鳥		古墳中期		古墳前期後半			
イヌガヤ	種子												(2)
カヤ	種子					2		5	(3)				
モモ	核(完形)	2		6		16		33		10			1
	核(一部破損)			1		7	(2)	3		1			1
	核(動物食痕)			4		12	(3)	5		2			1
	核(半割)	(4)		(2)		3	(3)	(15)		(2)			
	核(破片)			(19)		(25)		(34)		(9)			
スモモ	果実							1					
	核(完形)			2		2		15					
	核(動物食痕)							2					
	核(破片)			(3)		(2)		(16)					
クリ	果実	(2)				(1)			(4)				
オニグルミ	核(動物食痕)												2
	核(破片)									(1)			
ハクウンボク	核												1
備考													

炭化材  
(現地取り上げ試料：括弧内は破片数)

V層(古墳時代前期後半) イヌガヤとモモ、オニグルミ、ハクウンボクがわずかに得られた。

[堆積物試料]

Ⅲ層(飛鳥時代) イネとタガラシがやや多く、イボクサとコナギ、カワラスガナ、カヤツリグサ属A、キンポウゲ属、ヤナギタデが少量、オモダカ属とキケマン属、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、イヌタデ、ウシハコベ、ノミノフスマ、シソ属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が5点未満であった。5点未満の分類群のうち、栽培植物としてはトウガンが得られた。

Ⅳ層(古墳時代中期) イネとタガラシが多く、ノミノフスマがやや多く、オモダカ属とコナギ、ヒメクグ、カワラスガナ、カヤツリグサ属A、ヒエ属、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、ミズ属、ヤナギタデ、ミゾソバが少量、カラスザンショウとイボクサ、カヤツリグサ属B、ホタルイ属、カラムシ属、タネツケバナ属、イヌタデ、ウシハコベ、アカザ属、シソ属、メナモミ属、チドメグサ属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が5点未満であった。

V層(古墳時代前期後半) イネとノミノフスマがやや多く、コナギとスゲ属、ヒメクグ、カヤツリグサ属A、ヒエ属、オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属、カラムシ属、ボントクタデが少量、キイチゴ属とヘラオモダカ、オモダカ属、イボクサ、スゲ属アゼスゲ節、ホタルイ属、カタバミ属、ヤナギタデ、イヌタデ、オカトラノオ属、メナモミ属がわずかに得られた。この他の分類群は、産出数が5点未満であった。

次に、得られた分類群の記載を行い、写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003-)に準拠し、APGⅢリストの順とした。

次に、主な分類群について大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名や順番については「BG Plants 和名-学名インデックス(YList)<sup>(注58)</sup>」に準拠し、APGⅢリストの順とした。

①イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K.Koch 種子 イチイ科

暗灰色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で、先端部がゆるやかに突出する。種皮は硬く、顆粒状の浅い隆起が全面にある。残存高18.6mm、幅9.5mm。

②カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. 種子 イヌガヤ科

濃い赤茶色で、上面観はほぼ円形、側面観は長卵形で両端がやや尖る。表面には縦方向でやや捩じれる不規則な浅い隆起がある。種皮は厚く硬い。高さ25.2mm、幅11.4mm。

③モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科

黄褐色～茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また、片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。完形個体は、高さ23.5mm、幅18.9mm、厚さ15.1mm、一部破損の個体は、高さ23.9mm、幅18.8mm、厚さ14.3mm、動物食痕のある個体は、高さ26.6mm、残存幅16.4mm、厚さ16.4mm、半割の個体は、長さ25.4mm、幅21.0mm、残存厚7.3mm。

④スモモ *Prunus salicina* Lindl. 果実・核 バラ科

果実は黒褐色で、側面観は卵形。表面にはしわがある。残存高14.0mm、幅12.5mm、厚さ

付表15 大型植物遺体(2)

分類群	水洗量 (cc)	No.	3	4	5
		遺構	N R 50		
		層位	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層
		時期	飛鳥	古墳中期	古墳前期後半
			200		
モモ	核		(1)		
キイチゴ属	核	1	(2)		3 (2)
コウゾ属	核				(2)
クワ属	核	(1)			1
オニグルミ	核				(1)
イイギリ	種子				1
カラスザンショウ	種子		(5)		
イヌザンショウ	種子	1 (1)	(3)		
マタタビ属	種子				(1)
ニワトコ	核				1 (2)
タラノキ	核				1
ヘラオモダカ	果実				8
オモダカ属	果実	3	5		2
	種子	4	15		2 (1)
ホッサモ	種子		(1)		
イボクサ	種子	18	6		7
コナギ	種子	22	35		21
スゲ属アゼスゲ節	果実		2 (2)		6 (3)
スゲ属	果実		1		13 (1)
ヒメクグ	果実	1	23		23
カワラスガナ	果実	20 (1)	21		
カヤツリグサ属 A	果実	14 (1)	47		22
カヤツリグサ属 B	果実		6		2
ホタルイ属	果実		9		4 (5)
メヒシバ属	有ふ果	1			
ヒエ属	有ふ果		9 (5)		25 (2)
イネ	穀穀	15 (++)	14 (+++)		15 (++)
エノコログサ属	有ふ果	(1)	(1)		
ムラサキケマン	種子				
キケマン属	種子	4			
タガラシ	果実	47 (50)	40 (74)		1
キンボウゲ属	果実	10	1		(2)
ノブドウ	種子		(2)		1 (1)
オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属	果実	5	7 (7)		11 (8)
カナムグラ	核	(2)			
クワクサ	種子	2			3 (1)
カラムシ属	果実	1	3 (3)		14
ミズ属	果実		12		1 (1)
トウガン	種子				
カタバミ属	種子		2		5 (2)
エノキグサ属	種子	1	(4)		1
スマレ属	種子		(1)		(3)
タネツケバナ属	種子	1	8		4
ヤナギタデ	果実	12 (18)	13 (24)		3 (5)
サナエタデ-オオイヌタデ	果実	(1)			
イヌタデ	果実	2 (5)	2 (4)		2 (3)
ボントクタデ	果実	(1)	(1)		4 (8)
ミゾソバ	果実	(4)	3 (10)		
ギシギシ属	果実		1		1
ウシハコベ	種子	7	5		
ノミノフスマ	種子	9	57		66
アカザ属	種子	1 (2)	4 (1)		1
ツリフネソウ属	種子	1	2		
オカトラノオ属	種子	2			7
ナス属	種子	1 (1)	1 (1)		1 (1)
トウバナ属	果実	1			
シソ属	果実	4 (3)	3 (5)		1 (2)
ニガクサ属	果実		1		
タカサブロウ	果実	1			
メナモミ属	果実		2 (4)		2 (5)
キク科 A	果実	(1)			
キク科 B	果実	1			
チドメグサ属	種子	3 (1)	3 (3)		
セリ	果実	2	1		1
不明	芽	(+)	(+)		
不明	昆虫遺体	(+++)	(+++)		(++)

(水洗試料：括弧内は破片数)

9.2mm。核は茶褐色で、上面観はやや扁平な両凸レンズ形、側面観は紡錘形。両側に縫合線があり、浅い溝が入る。表面は平滑。完形個体は、高さ15.6 mm、幅11.4mm、厚さ7.6mm、動物食痕のある個体は、高さ16.7mm、残存幅12.2mm、厚さ8.7mm

⑤キイチゴ属 *Rubus spp.* 核 バラ科

黄色で、上面観は幅広の両凸レンズ形、側面観は先端が湾曲した腎形。表面には不定形な多角形状の稜による網目状隆線がある。長さ1.9mm、幅1.2mm。

⑥クワ属 *Morus spp.* 核 クワ科

濃い黄褐色で、側面観はいびつな広倒卵形または三角状倒卵形、断面は卵形または三角形。背面は稜をなす。表面にはゆるやかな凹凸があり、厚くやや硬い。基部に嘴状の突起を持つ。長さ2.1mm、残存幅1.6mm。

⑦クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.* 果実 ブナ科

黒褐色で、完形ならば側面観は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。底面にある殻斗着痕はざらつくが、残存していない。残存高23.6mm、残存幅21.4mm。

⑧オニグルミ *Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis (Komatsu) Kitam.* 核 クルミ科

黄褐色で、側面観は広卵形。木質で、壁は厚くて硬く、ときどき空隙がある。表面に浅い縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。動物食痕のある個体は、高さ35.5mm、残存幅23.5mm、厚さ20.4mm(写真5-13)、残存高23.2mm、幅20.8mm、幅19.8mm(写真5-14)。

⑨ハクウンボク *Styrax obassia Siebold et Zucc.* 核 エゴノキ科

茶褐色で、上面観は円形、側面観は倒広卵形。下端に黄淡色の大きな着点があり、表面には頂部から3本の浅い溝が走る。さらに、表面には細かい網目模様があり、厚く硬い。エゴノキより一回り大きく、幅広い。長さ15.3mm、幅9.4mm。

⑩ニワトコ *Sambucus racemosa L. subsp. sieboldiana (Miq.) H.Hara var. sieboldiana Miq.*  
核 レンブクソウ科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形で基部がやや尖る。基部に小さな着点があり、縦方向にやや反る。波状の凹凸が横方向に走る。長さ2.6mm、幅1.9mm。

⑪タラノキ *Aralia elata (Miq.) Seem.* 核 ウコギ科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観はやや四角い半円形。背面はなだらかな円弧状で厚みがあり、ざらつく。腹面は直線状で、端部が突出する。長さ2.0mm、幅1.4mm。

⑫コナギ *Monochoria vaginalis (Burm.f.) C.Presl ex Kunth* 種子 ミズアオイ科

黄褐色で、上面観は円形、側面観は楕円形。表面には縦方向の低い隆起があり、隆起の間には横方向の線が密に入る。長さ1.0mm、幅0.7mm。

⑬スゲ属 *Carex spp.* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で、側面観は狭倒卵形、断面は三稜形。先端と着点が突出する。長さ1.7mm、幅1.1mm。

- ⑭ヒメクグ *Cyperus brevifolius* (Rottb.) Hassk. var. *leiolepis* (Franch. et Sav.) T.Koyama  
果実 カヤツリグサ科  
赤褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形。頂部に突起がある。表面に微細な網目状隆線がある。長さ1.3mm、幅0.8mm。
- ⑮カワラスガナ *Cyperus sanguinolentus* Vahl 果実 カヤツリグサ科  
黒色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。頂部に突起がある。表面に微細な網目状隆線がある。長さ1.3mm、幅0.8mm。
- ⑯カヤツリグサ属A *Cyperus* sp. A 果実 カヤツリグサ科  
茶褐色で、側面観は狭倒卵形、断面は三稜形。頂部と基部が突出する。表面には斑点状の細かい隆起がある。長さ1.6mm、幅0.6mm。
- ⑰カヤツリグサ属B *Cyperus* sp. B 果実 カヤツリグサ科  
黒色で、側面観は卵形、断面は三稜形。頂部と基部が突出する。表面には斑点状の細かい隆起がある。長さ1.0mm、幅0.6mm。
- ⑱ヒエ属 *Echinochloa* spp. 有ふ果 イネ科  
暗褐色で、紡錘形。縦方向に細かい筋がある。内穎は膨らまず、外穎は中央部が最も膨らむ。長さ3.3mm、幅1.8mm。那須(2017)に示された現生種の長幅比と比較すると、栽培型のヒエよりも野生植物のタイヌビエやイヌビエの長幅比に近かった。
- ⑲イネ *Oryza sativa* L. 粳穀 イネ科  
黄褐色で、完形ならば2条の稜があり、表面には四角形の網目状隆線と隆線上の顆粒状突起が規則正しく並ぶ。残存長3.2mm、残存幅2.3mm。
- ⑳エノコログサ属 *Setaria* spp. 有ふ果 イネ科  
赤褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形で先端がやや突出する。アワよりも細長く、乳頭突起が畝状を呈する。長さ2.5mm、幅1.3mm。
- ㉑タガラシ *Ranunculus sceleratus* L. 果実 キンボウゲ科  
淡黄色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。両面中央はやや凹む。周囲は隆起し、稜を持つ。長さ1.4mm、幅1.1mm。
- ㉒カラムシ属 *Boehmeria* spp. 果実 イラクサ科  
赤褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は上下が尖ったゆがんだ円形。表面はざらつく。長さ1.1mm、幅0.8mm。
- ㉓ミス属 *Pilea* spp. 果実 イラクサ科  
黄褐色で、上面観は扁平。側面観は倒卵形で、両端がやや尖る。種皮は柔らかく、表面は平滑であるが、光沢はない。長さ1.4mm、幅0.9mm。
- ㉔トウガン *Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn. 種子 ウリ科  
淡黄褐色で、完形ながら倒卵形。表面は平滑。基部両側に薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚があり、中央部は窪む。へその部分が残っている。残存長4.0mm、残存幅3.7mm。



㊸ナス属 *Solanum spp.* 種子 ナス科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には細かい畝状突起をもつ網目状隆線がある。長さ1.2mm、幅1.5mm。

㊹シソ属 *Perilla sp.* 果実 シソ科

暗褐色で、いびつな球形。端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。エゴマ以外のシソ属である。長さ1.3mm、幅1.2mm。

(5)考察

①現地取り上げ試料

現地取り上げ試料ではモモが多く、任意の10個体の大きさを計測した結果、高さ平均26.2±2.4mm、幅平均20.9±1.7mm、厚さ平均15.5±1.2mmで、縦長の個体が多かった(付表16)。

山梨県内の遺跡から出土したモモ核の事例を集成した新津健<sup>(注59)</sup>によると、モモの核は時代ごとに大きさや形状が変化しており、弥生時代には核長が24.6~26.5mmと比較的大きくかつ丸味が強い核が多いのに対し、平安時代から近世には縦長になる傾向があるという。さらに、奈良・平安時代のモモの核長は23.6~26.6mmで、鎌倉時代には大きさの変異幅が大きく、江戸時代後期になると大型になり、平均核長26.9mm、最大で38.0mm程度の核がみられるとしている。山梨県から出土している奈良・平安時代のモモ核の平均値と比較すると、今回の犬飼遺跡のモモ核は平均値をやや上回る大きさであった。

現地取り上げ試料のうち、時期不明の層準からは、栽培植物で果樹のモモとスモモ、野生植物で食用可能なクリとオニグルミが産出した。モモには打撃痕がみられないため、自然に半分に割れた可能性が高い。破片で得られたオニグルミは、内部の子葉を利用するために割られた後、廃棄された可能性がある。

古墳時代~奈良時代のⅠ~Ⅲ層からは、栽培植物で果樹のモモとスモモが産出した。

古墳時代前期~飛鳥時代のⅢ層~Ⅴ層の現地取り上げ試料では、栽培植物で果樹のモモとスモ

付表16 モモ核の大きさ(単位:mm)

層位	高さ	幅	厚さ
Ⅲ層、No.1201	22.4	18.4	14.7
Ⅱ・Ⅲ層、No.1206	24.5	19.4	16.5
	22.6	18.9	14.4
Ⅲ層、No.1127	28.5	22.1	14.7
Ⅳ層、No.1290	27.3	21.5	14.9
Ⅲ・Ⅳ層、No.1301	26.3	23.0	17.6
	27.3	20.7	15.0
Ⅳ層、No.1337	29.2	23.6	17.0
	25.7	20.1	14.5
Ⅳ・Ⅴ層、No.1568	27.9	21.0	16.0
最小	22.4	18.4	14.4
最大	29.2	23.6	17.6
平均	26.2	20.9	15.5
標準偏差	2.4	1.7	1.2

モ、食用として利用が可能なイヌガヤとカヤ、クリ、オニグルミが産出した。モモやスモモ、オニグルミは、ネズミ類の被害痕が残る個体が多かった。

取り上げ試料のうち、モモやスモモ、オニグルミは、果肉を食べた後に、谷に捨てられた食料残滓の可能性もある。クリは、食用となる子葉を取り出したのちに、不要な果実が捨てられた可能性がある。ただし、これらの取り上げ試料については、谷沿いに生育していた樹木から供給されたものか、人間が廃棄したものか、種実の同定情報のみでは判断できない。

イヌガヤとカヤは木材が丸木弓などの木製品に有用なほか、子葉から採取される油が利用可能である。また、

カヤの子葉は食用としても利用できる。

## ②堆積物試料

古墳時代前期後半、古墳時代中期、飛鳥時代のⅤ層～Ⅲ層の堆積物試料では、産出した分類群に大きな違いはなかった。Ⅴ層～Ⅲ層からは、木本がほとんど産出せず、草本が優占する。産出している主な草本は、イネとともに、水田雑草であるヘラオモダカやオモダカ属、イボクサ、コナギ、タガラシ、タネツケバナ属、セリなどであり、さらに、水田雑草でもある湿生植物のヒメタグとカワラスガナ、沈水植物のホッスモ、湿生～抽水植物のスゲ属とホタルイ属、カヤツリグサ属なども産出した。また、湿地に生育するスゲ属アゼスゲ節とスゲ属、ヤナギタデやサナエタデ・オオイヌタデ、ボントクタデ、タカサプロウなどを伴っていたと考えられる。また、Ⅴ層～Ⅲ層のプラント・オパール分析では、イネが多く産出している。種実の分類群やプラント・オパール分析から考えると、古墳時代前期後半から飛鳥時代にかけて開析谷N R50の谷底では、水田が存在した可能性も示唆される。ただし、発掘調査結果からは、当該期に谷内で水田が形成された状況を示すような痕跡が確認されていない。このため現段階では、N R50の谷底で古墳時代前期後半から飛鳥時代に、谷底内において明るい湿地や浅い滞水域が存在していた状況が確認できるものの、水田が確実に存在したかどうかは言及できない。なお、種実の産出状況から推定される谷内の堆積もしくは古水文環境は、珪藻分析結果とも調和的である。

水田雑草以外の植物では、メヒシバ属やエノコログサ属、ムラサキケマン、キケマン属、カタバミ属、エノキグサ属、ウシハコベ、ノミノフスマ、アカザ属、ナス属、シソ属が得られた。これらの植物は、谷底ではなく、谷壁斜面や谷周囲の扇状地部分のやや乾いた場所に生育していた可能性がある。この他の種類としては、林縁に生育する草本植物であるカラムシ属やミズ属などみられる。さらに、わずかに産出している木本類では、マタタビ属、ニフトコ、タラノキ、カラスザンショウ、イヌザンショウといった林縁種が産出している。花粉分析ではスギ属やアカガシ亜属が多産しているが、古墳時代前期～飛鳥時代の開析谷ではスギやカシ類は分布しておらず、開析谷斜面などの日の当たる場所に上記の樹木が分布していたと考えられる。

また、水田や畑にも生育するヒエ属の有ふ果も産出している。ヒエ属有ふ果の大きさは、長さ3.3mm、幅1.8mmで、那須浩郎<sup>(註60)</sup>が示された現生種の大きさと比較すると、栽培植物のヒエよりも野生植物のイヌビエやタイヌビエの長幅比に近かった。さらには、栽培種はイネだけでなくトウガンも産出している。

(バンダリ スダルシャン=パレオ・ラボ)



スケール 1-9, 12-15:5mm, 10, 11, 16:1mm

1. イヌガヤ種子 (V層、No. 1562)、2. カヤ種子 (Ⅲ・Ⅳ層、No. 1414)、3. モモ核 (完形) (3層、No. 1147)、4. モモ核 (一部破損) (Ⅰ～Ⅲ層、No. 1188)、5. モモ核 (動物食痕) (3層、No. 1147)、6. モモ核 (半割) (No. 1189)、7. スモモ果実 (3層、No. 1146)、8. スモモ核 (完形) (Ⅲ層、No. 1190)、9. スモモ核 (動物食痕) (3層、No. 1147)、10. キイチゴ属核 (V層、No. 5)、11. クワ属核 (V層、No. 5)、12. クリ果実 (Ⅱ・Ⅲ層、No. 1195)、13・14. オニグルミ核 (動物食痕) (V層、No. 1546)、15. ハクウンボク核 (V層、No. 1562)、16. ニワトコ核 (V層、No. 5)

写真5 犬飼遺跡のNR50から出土した大型植物遺体(1)





スケール 17-32:1mm

17. タラノキ核 (V層、No.5)、18. コナギ種子 (V層、No.5)、19. スゲ属果実 (V層、No.5)、20. ヒメクグ果実 (IV層、No.4)、21. カワラスガナ果実 (IV層、No.4)、22. カヤツリグサ属A果実 (IV層、No.4)、23. カヤツリグサ属B果実 (IV層、No.4)、24. ヒエ属有ふ果 (IV層、No.4)、25. イネ籾殻 (IV層、No.4)、26. エノコログサ属有ふ果 (IV層、No.4)、27. タガラシ果実 (III層、No.3)、28. カラムシ属果実 (V層、No.5)、29. ミズ属果実 (IV層、No.4)、30. トウガン種子 (III層、No.3)、31. ナス属種子 (IV層、No.4)、32. シソ属果実 (V層、No.5)

写真6 犬飼遺跡のNR50から出土した大型植物遺体(2)

5) 犬飼遺跡出土木製品の樹種同定

(1) はじめに

京都府亀岡市の犬飼遺跡から出土した木製品の樹種同定を行なった。

試料は、溝跡や流路などから出土した、古墳時代から14世紀にかけての木製品、31点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡及び写真撮影を行なった。

(2) 結果

同定の結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属とスギ、ヒノキ、アスナロの4分類群と、広葉樹のエノキ属とコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)の2分類群の、計6分類群がみられた。ヒノキが最も多く23点で、スギが3点、エノキ属が2点、マツ属複維管束亜属とアスナロ、アカガシ亜属が各1点みられた。同定結果を付表17に、一覧を付表18に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、写真7・8に光学顕微鏡写真を示す。

① マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxyton* マツ科 写真7 1a-1c(406)

仮道管と垂直及び水平樹脂道、放射柔細胞及び放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

② スギ *Cryptomeria japonica (L.f.) D.Don* ヒノキ科 写真7 2a-2c(413)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2~15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

③ ヒノキ *Chamaecyparis obtusa (Siebold et Zucc.) Endl.* ヒノキ科 写真7 3a-3c(769)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移

付表17 犬飼遺跡出土木材の樹種同定結果

時期	古墳時代 前期後半		古墳時代 中期前半		古墳時代後期後半 ～飛鳥時代			飛鳥時代 ～奈良時代		13世紀後半～14世紀				合計		
	器種	刀形	板材	板材・部材	杭	又鍬	板材・部材	丸大材	木製品	部材	へら状木製品	有頭棒	部材		箸	凹盤状木製品
マツ属複維管束亜属												1				1
スギ											1		1		1	3
ヒノキ	1	1		4	4		11	1		1						23
アスナロ															1	1
エノキ属								2								2
コナラ属アカガシ亜属						1										1
合計	1	1		4	4	1	11	2	1	1	1	1	1	1	1	31



行は急である。放射組織は単列で、高さ1～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1分野に2個みられる。ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

④アスナロ *Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 写真8 4a-4c(400)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ2～13列となる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、1分野に2～4個みられる。アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工は比較的容易である。また精油分が多く、耐朽性に優れている。

⑤エノキ属 *Celtis* アサ科 写真8 5a-5c(951)

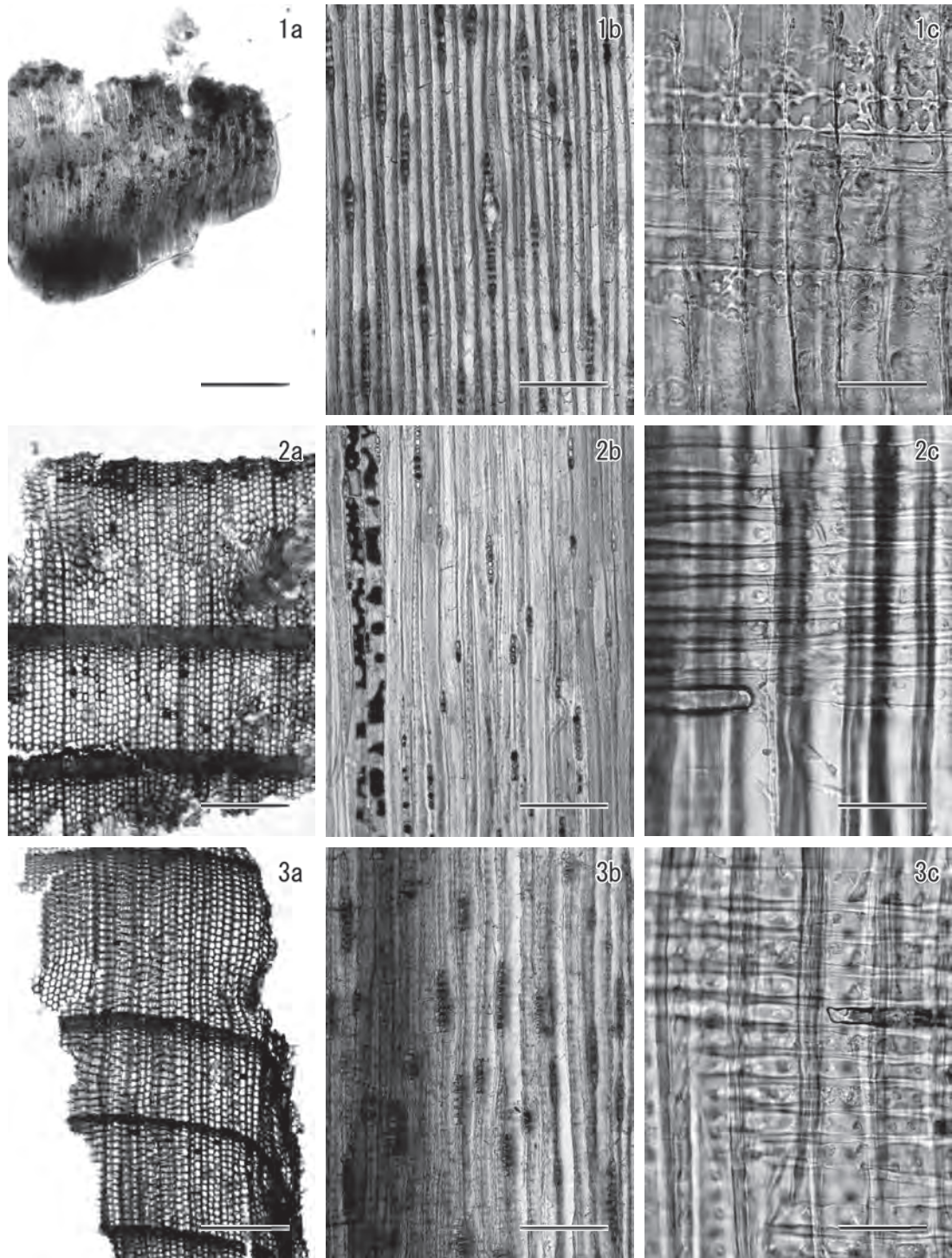
年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合して斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が方形となる異性で、幅1～5列となる。放射組織には鞘細胞がみられる。エノキ属にはエノキやシダレエノキなどがあり、代表的なエノキは本州から九州にかけての温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや硬い。まとまって生育することはなく、現在では薪炭材などに利用される程度である。

⑥コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 写真8 6a-6c(715)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状

付表18 犬飼遺跡出土木材の樹種同定結果一覧

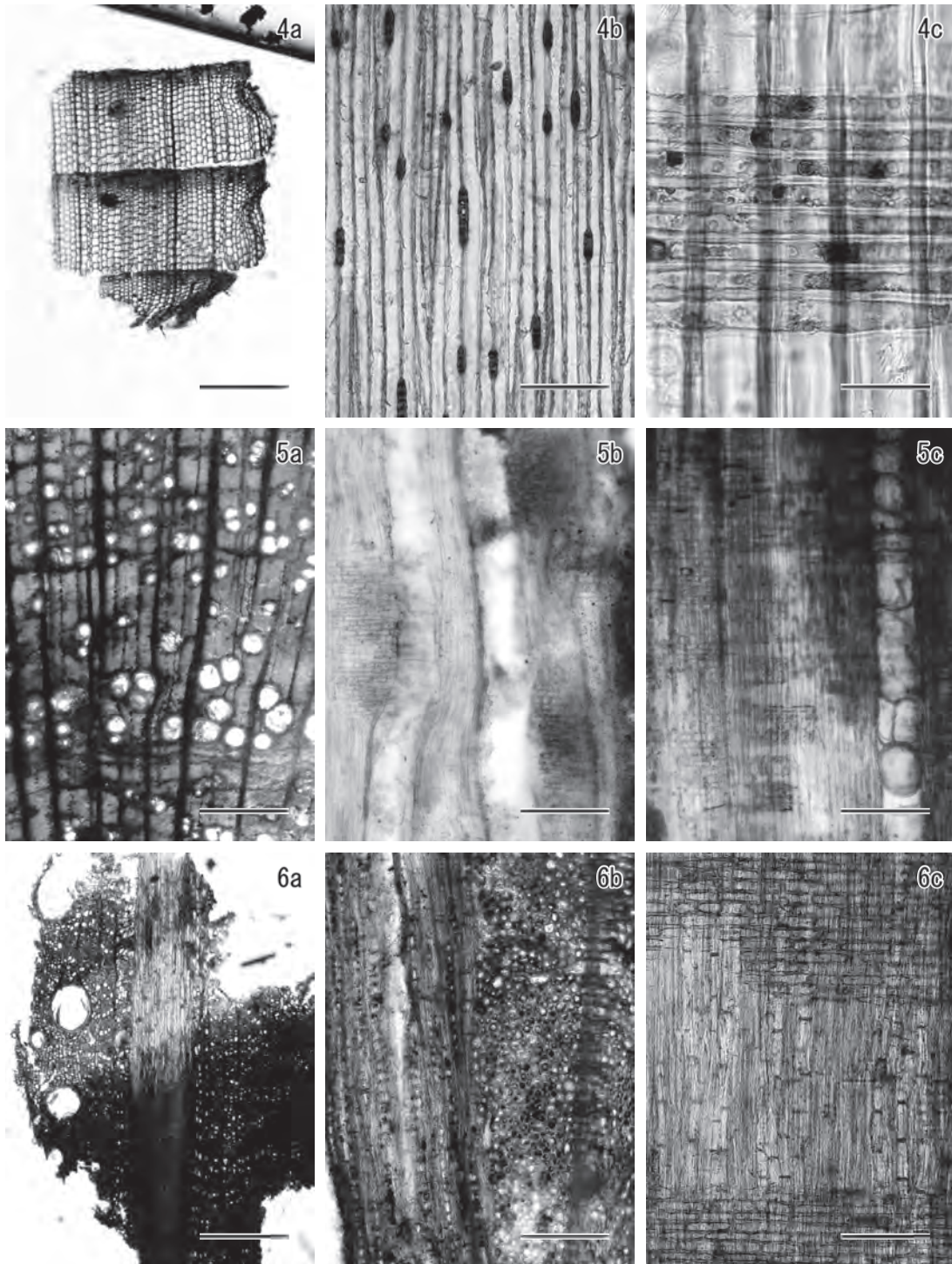
報告番号	地区名	出土位置	層位	器種	樹種	木取り	時期
400	B	S D 03 (k・15)	Ⅲ層	箸	アスナロ	芯去削出	13世紀後半～14世紀
406	B	S D 03 (k7)	Ⅲ層	有頭棒	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木	13世紀後半～14世紀
412	B	S D 01 (k9)	Ⅲ層	円盤状木製品	スギ	板目	13世紀後半～14世紀
413	B	S D 03	最下層	部材	スギ	板目	13世紀後半～14世紀
425	B	S D 03 (k・15・6)	-	ヘラ状木製品	スギ	板目	13世紀後半～14世紀
715	C	N R 50 (j19)	Ⅲ層	又鋏	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り	古墳時代後期後半～飛鳥時代
721	C	N R 50 (I18)	I～Ⅲ層	木製品	ヒノキ	板目	古墳時代後期後半～飛鳥時代
724	C	N R 50 (I17)	Ⅳ層	不明木製品	ヒノキ	板目	古墳時代中期前半
725	C	N R 50	Ⅴ層	刀形の柄部	ヒノキ	板目	古墳時代前期後半
755	C	N R 50	Ⅲ層	屋根材か	ヒノキ	板目	古墳時代後期後半～飛鳥時代
756	C	N R 50 (k16)	Ⅳ・Ⅴ層	木材	ヒノキ	板目	古墳時代中期前半
757	C	N R 50 (k17)	Ⅳ層	建築部材	ヒノキ	板目	古墳時代中期前半
758	C	N R 50 (I18)	Ⅱ・Ⅲ層	部材	ヒノキ	板目	飛鳥時代～奈良時代
762	C	N R 50 (SX444)	Ⅲ層	板材	ヒノキ	追根目	古墳時代後期後半～飛鳥時代
763	C	N R 50 (SX444)	Ⅲ層	板材	ヒノキ	追根目	古墳時代後期後半～飛鳥時代
767	C	N R 50 (j17)	Ⅴ層	板材	ヒノキ	追根目	古墳時代前期後半
769	C	N R 50 (SX444)	Ⅲ層	板材	ヒノキ	板目	古墳時代後期後半～飛鳥時代
770	C	N R 50 (SX444)	Ⅲ層	板材	ヒノキ	板目	古墳時代後期後半～飛鳥時代
771	C	N R 50	Ⅳ層	板材	ヒノキ	板目	古墳時代中期前半
772	C	N R 50 (SX444)	Ⅲ層	建築部材か	ヒノキ	板目	古墳時代後期後半～飛鳥時代
773	C	N R 50 (SX444)	Ⅲ層	建築部材か	ヒノキ	板目	古墳時代後期後半～飛鳥時代
774	C	N R 50 (SX444)	Ⅲ層	加工材	ヒノキ	芯持丸木	古墳時代後期後半～飛鳥時代
775	C	N R 50 (SX444)	Ⅲ層	加工材	ヒノキ	芯持丸木	古墳時代後期後半～飛鳥時代
776	C	N R 50 (SX444)	Ⅲ層	建築部材	ヒノキ	角材	古墳時代後期後半～飛鳥時代
781	C	S W 441 (I17)	-	杭	ヒノキ	角材	古墳時代中期前半
782	C	S W 441 (I16)	-	杭	ヒノキ	角材	古墳時代中期前半
783	C	S W 441 (I17)	-	杭	ヒノキ	板目	古墳時代中期前半
785	C	S W 441 (I17)	-	杭	ヒノキ	板目	古墳時代中期前半
817	C	N R 50 (I18)	Ⅲ層	削り屑	ヒノキ	板目	古墳時代後期後半～飛鳥時代
IN03	C	N R 50 (k16)	Ⅲ層	丸太材	エノキ属	半割	最外年輪 571年
IN04	C	N R 50 (I17)	Ⅲ層	丸太材	エノキ属	芯持丸木	最外年輪 569年



1a-1c. マツ属複維管束亜属(406)、2a-2c. スギ(413)、3a-3c. ヒノキ(769)  
a:横断面(スケール=500  $\mu\text{m}$ )、b:接線断面(スケール=200  $\mu\text{m}$ )、c:放射断面(スケール=50  $\mu\text{m}$ )

写真7 犬飼遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(1)





4a-4c. アスナロ (400)、5a-5c. エノキ属 (951)、6a-6c. コナラ属アカガシ亜属 (715)  
a:横断面(スケール=500  $\mu\text{m}$ )、b:接線断面(スケール=200  $\mu\text{m}$ )、c:放射断面(スケール=4:50  $\mu\text{m}$ ・5-6:200  $\mu\text{m}$ )

写真8 犬飼遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(2)

となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。アカガシ亜属にはアカガシヤツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靱で、耐水性があり、切削加工は困難である。

### (3) 考察

古墳時代前期後半から古墳時代中期にかけての木製品では、刀形・板及び木製品はヒノキであった。ヒノキは木理通直で真っすぐに生育し、加工性が良い樹種である。<sup>(注61)</sup>

丸太材は開析谷N R50の中から出土しており、加工前の原木を貯木していた可能性が考えられている。なおエノキ属は、比較的堅硬な樹種である。

丸太材はエノキ属であった。飛鳥時代から奈良時代にかけての木製品では、楯は堅硬なアカガシ亜属であったが、<sup>(注62)</sup>それ以外の木製品はいずれもヒノキであった。飛鳥時代の丸太材も、加工前の原木を貯木していた可能性が考えられている。さらに残材もみられ、板や木製品もヒノキであることを考慮すると、遺跡内で木製品を作成していた可能性が考えられる。

13世紀後半～14世紀の木製品では、有頭棒はマツ属複維管束亜属、板と木製品はスギ、杭はヒノキであった。マツ属複維管束亜属とスギは、ヒノキと同様に真っすぐで加工性が良い樹種である。<sup>(注63)</sup> 京都府内では、古殿遺跡の鎌倉時代の杭はクリが、平安時代後期～鎌倉時代頃の鳥羽離宮跡の杭はスギやヒノキなどの針葉樹と、多様な広葉樹が確認されており、針葉樹、広葉樹共に多く利用されていることが確認できる。<sup>(注64)</sup> 箸はアスナロ、円盤状木製品はスギであった。アスナロも真っすぐで加工性が良く、耐久性に優れている樹種である。<sup>(注65)</sup>

犬飼遺跡では、堀S D01の15層及び14層、開析谷N R50のⅡ～Ⅴ層の花粉分析も行われている。その結果、古墳時代前期後半から奈良時代にかけては、スギ林を主体とする温帯性針葉樹林が広がっていたと考えられ、カシ類からなる照葉樹林も分布を広げていたと推測されている。今回の樹種同定結果で多産するヒノキを含むイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の花粉については、少ないながらスギ属に伴い層位的に連続して産出している点に着目される。本遺跡の花粉分析結果においてスギ属が多産するのは、花粉生産量の多い風媒花のためで、実際の植生量よりも過大評価されているとみなされる。

なお、調査区の背後は丹波山地が存在しており、主要な山地斜面の森林構成要素と考えられるヒノキやアカガシ亜属については、遺跡周辺から伐採利用していた可能性がある。よって、本遺跡では、遺跡周辺に生育していた温帯性針葉樹林からヒノキを、照葉樹林からアカガシ亜属を選択伐採し、利用していたと考えられる。このうち、ヒノキについては、生態的特徴をふまえると、山地斜面において尾根筋を中心に生育していたと推定される。また、少量ではあるがエノキ属－ムクノキ属の花粉も検出されており、遺跡周辺に生育していたエノキ属も伐採して、溝に貯木していた可能性が考えられる。

13世紀後半～14世紀にかけても、前時代と同様の森林構成であったと推測されている。この時期には木製品にはマツ属複維管束亜属やスギ、ヒノキが利用されており、ヒノキを多く利用していた、前時代の用材傾向とは異なっていた可能性が考えられる。 (小林克也＝パレオ・ラボ)

## 6) 漆器碗の塗膜分析

### (1) はじめに

犬飼遺跡出土漆器製品の塗膜について、断面の顕微鏡観察、蛍光X線分析を行った<sup>(注66)</sup>。その構造及び製作工程の考察は、第3章4節3項の中で行っているため、合わせて参照いただきたい。

### (2) 試料

分析試料は、第52図の漆器碗より採取された漆膜である。漆器碗から2mm角程の破片を採取した。また、382の漆器碗に関してはほとんどの漆が剥離していたため、剥落した漆片を採取した。

### (3) 方法

#### ① 断面観察

蛍光X線分析を行った後、包埋し、厚さ数 $\mu\text{m}$ になるまで#80、#120、#240、#1500、#4000、#10000の耐水紙やすりで研磨した。なお、包埋及びプレパラートへの接着は高透明エポキシ樹脂(セメダインスーパー：セメダイン株式会社製)で行った。完成した試料を光学顕微鏡(OPTIPHOTO-2：Nikon)及び落射顕微鏡(OPTIPHOTO-2：Nikon)で観察した(写真9～11)。

#### ② 蛍光X線分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて測定を行う。機器はOLYMPUS製ハンドヘルド蛍光X線分析装置 DELTA DP-2000 Premiumを使用した。測定条件は励起用X線ターゲットがRh、管電圧及び管電流はSoilモードでビーム1が40keV及び60 $\mu\text{A}$ 、ビーム2が40keV及び40 $\mu\text{A}$ 、ビーム3が15keV及び25 $\mu\text{A}$ (軽元素測定時は15keV)、Miningモードのビーム1が40keV及び100 $\mu\text{A}$ 、ビーム2が10keV及び200 $\mu\text{A}$ である。装置の測定部径は9mm、計測時間はSoilモードが90秒、Miningモードが60秒で、大気雰囲気下で測定した。原子番号12番のMg(マグネシウム)以上の元素の検出が可能である。いずれも計測部位は内・外面の赤色部及び黒色部であり、一部のものは参考として木胎でも分析を行った。

### (4) 結果

378は内外面とも赤色部分を除きおおむね同じ構造である(写真9)。下から下地層、漆層、赤色漆層の3層が観察された。下地層は層厚88 $\mu\text{m}$ までが観察でき、粗い多角形の炭粉粒子が見られる。なお、炭粉の空隙には漆が観察されない。漆層は層厚26 $\mu\text{m}$ で、平坦で粒子の無い透明な層である。赤色漆層は層厚は17 $\mu\text{m}$ で、赤色鉱物粒子が観察され、その空隙には漆が観察された。

379は内外面とも同じ構造である(写真9)。下から下地層、漆層、赤色漆層の3層が観察された。下地層は層厚104 $\mu\text{m}$ までが観察でき、細い棒状と粗い多角形の炭粉粒子が見られる。なお、炭粉の空隙には漆が観察されない。漆層は層厚17～28 $\mu\text{m}$ で、下部は炭粉が混じり上部は平坦であるが、粒子の無い透明な層である。赤色漆層は層厚は12～17 $\mu\text{m}$ で、赤色鉱物粒子が観察され、その空隙には漆が観察された。

380は、内側では下から下地層、漆層、赤色漆層の3層が観察された(写真9)。下地層は層厚71 $\mu\text{m}$ までが観察でき、細い棒状と粗い多角形の炭粉粒子が見られる。なお、炭粉の空隙には漆が観察されない。漆層は層厚15 $\mu\text{m}$ で、平坦で粒子の無い透明な層である。赤色漆層は層厚は29



μmで、赤色鉱物粒子が観察され、その空隙には漆が観察された。

381は内外面とも同じ構造である(写真10)。下から下地層、漆層Ⅱ、漆層Ⅰ、赤色漆層の4層が観察された。下地層は層厚77μmまでが観察でき、細い棒状と粗い多角形の炭粉粒子が見られる。なお、炭粉の空隙には漆が観察されない。漆層Ⅱは層厚13~21μmで、下部は炭粉が混じり上部は平坦である。漆層Ⅰは層厚14μmで、平坦で粒子の無い透明な層である。赤色漆層は層厚は14μmで、赤色鉱物粒子が観察され、その空隙には漆が観察された。

382は剥落した漆から、黒色及び赤色の漆を採取した(写真10)。黒色及び赤色の漆は、赤色漆層を除きおおむね同じ構造であった。赤色の漆は下から下地層、漆層、赤色漆層の3層が観察された。下地層はわずかに炭粉粒子が観察されたのみである。なお、炭粉の空隙には漆が観察されない。漆層は層厚16μmで、平坦で粒子の無い透明な層である。赤色漆層は層厚は22μmで、赤色鉱物粒子が観察され、その空隙には漆が観察された。

383は内外面ともおおむね同じ構造である(写真10)。赤色部は木胎の上から下地層、漆層Ⅱ、漆層Ⅰ、赤色漆層の4層が観察された。下地層は層厚68~76μmまでが観察でき、細い棒状と粗い多角形の炭粉粒子が見られる。なお、炭粉の空隙には漆が観察されない。漆層Ⅱは層厚5~9μmで、下部は炭粉が混じり上部は平坦である。なお、茶色がかった漆層である。漆層Ⅰは層厚15μmで、平坦で粒子の無い透明な層である。赤色漆層は層厚は12μmで、赤色鉱物粒子が観察され、その空隙には漆が観察された。

384は内外面とも同じ構造である(写真10)。下から下地層、漆層Ⅱ、漆層Ⅰ、赤色漆層の4層が観察された。下地層は層厚26μmまでが観察でき、細い棒状と粗い多角形の炭粉粒子が見られる。なお、炭粉の空隙には漆が観察されない。漆層Ⅱは層厚9~11μmで、下部は炭粉が混じり上部は平坦である。なお、茶色がかった漆層である。漆層Ⅰは層厚22μmで、粒子の無い透明な層である。赤色漆層は層厚は7μmで、赤色鉱物粒子が観察され、その空隙には漆が観察された。

385は内外面とも同じ構造である(写真11)。下から下地層、漆層Ⅱ、漆層Ⅰの3層が観察された。下地層は層厚136μmまでが観察でき、細い棒状と粗い多角形の炭粉粒子が見られる。なお、炭粉の空隙には漆が観察されない。漆層Ⅱは層厚0~5μmで、下部は炭粉が混じる。なお、茶色がかった漆層である。漆層Ⅰは層厚7μmで、粒子の無い透明な層である。

386は赤色の漆は下から下地層、漆層Ⅱ、漆層Ⅰ、赤色漆層の4層が観察された(写真11)。下地層は層厚19~35μmで、細かく砕かれた植物質が観察された。なお、植物質の空隙には漆が観察される。漆層Ⅱは層厚13μmで、平坦で粒子の無い透明な層である。漆層Ⅰは層厚12μmで、平坦で粒子の無い透明な層である。赤色漆層は層厚は3~8μmで、赤色鉱物粒子が観察され、その空隙には漆が観察された。なお、観察された木胎は繊維状の組織に似ている。

(金原裕美子=一般社団法人文化財科学研究センター)

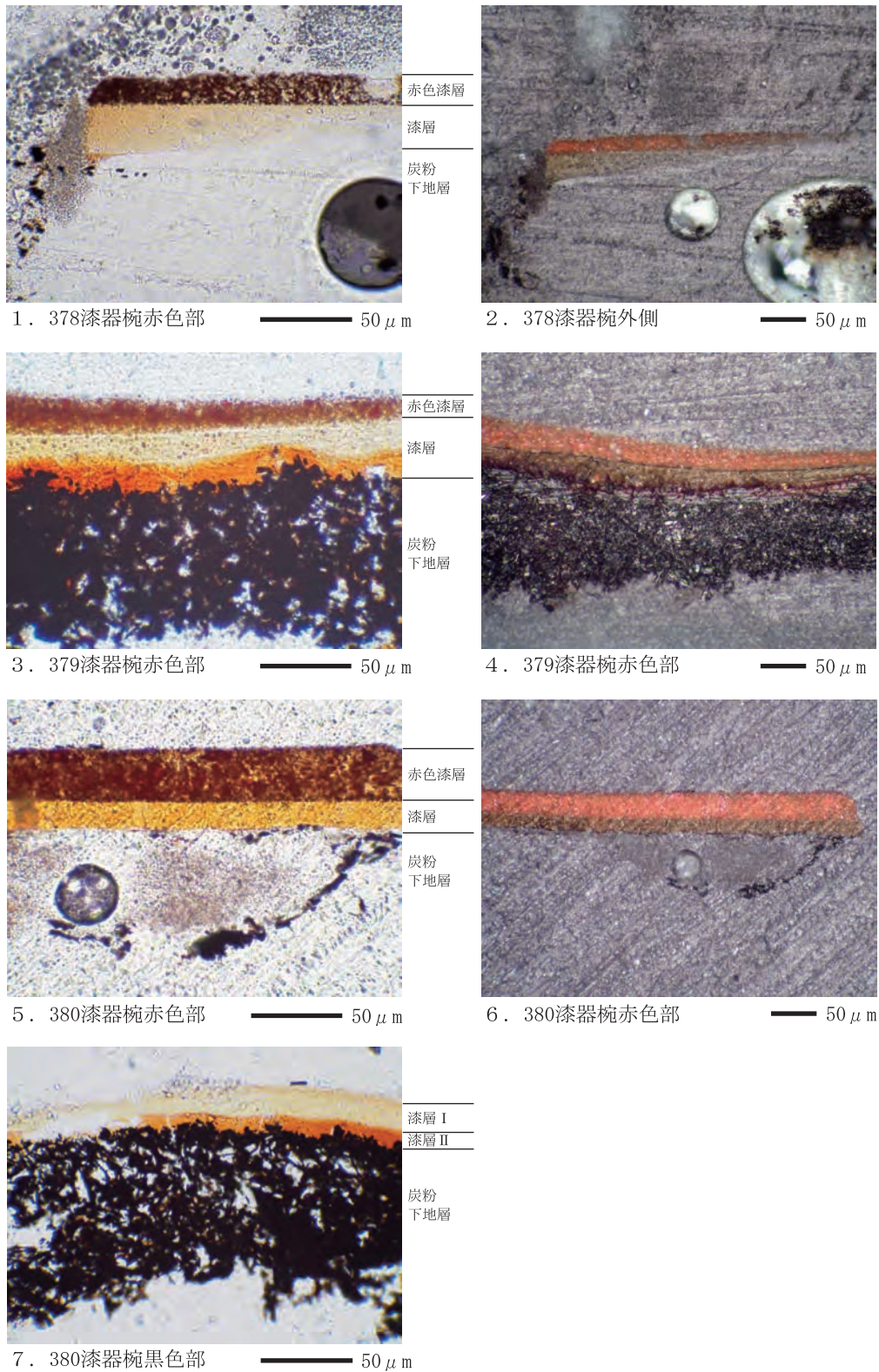
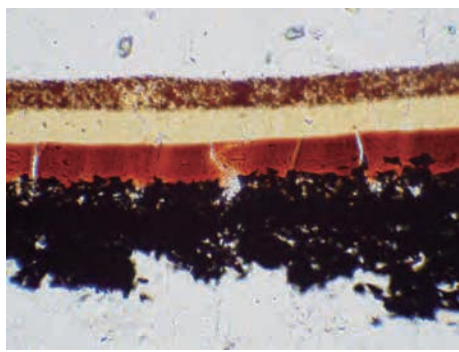


写真9 犬飼遺跡の塗膜分析写真 I

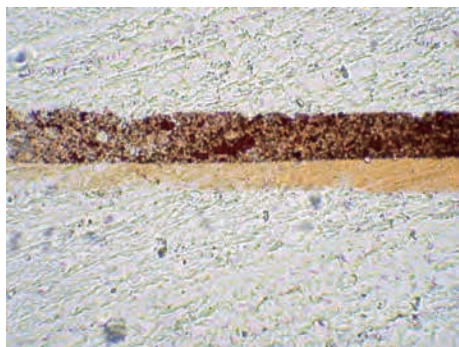




1. 381漆器碗赤色部 50 μm



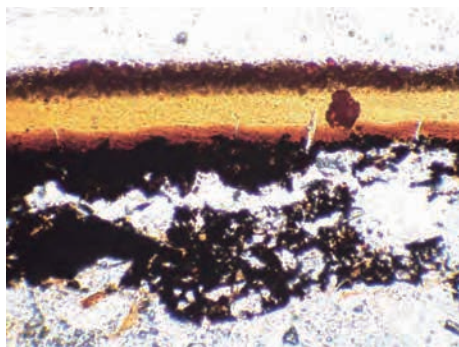
2. 381漆器碗赤色部 50 μm



3. 382漆器碗赤色部 50 μm



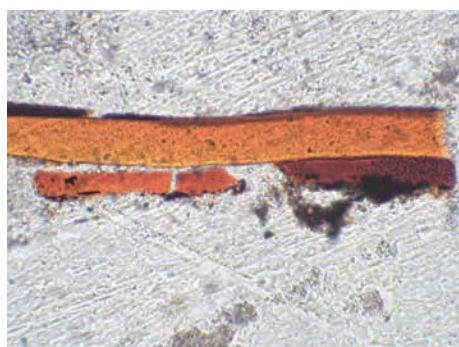
4. 382漆器碗赤色部 50 μm



5. 383漆器碗赤色部 50 μm



6. 383漆器碗赤色部 50 μm



7. 384漆器碗赤色部 50 μm



8. 384漆器碗赤色部 50 μm

写真10 犬飼遺跡の塗膜分析写真 II

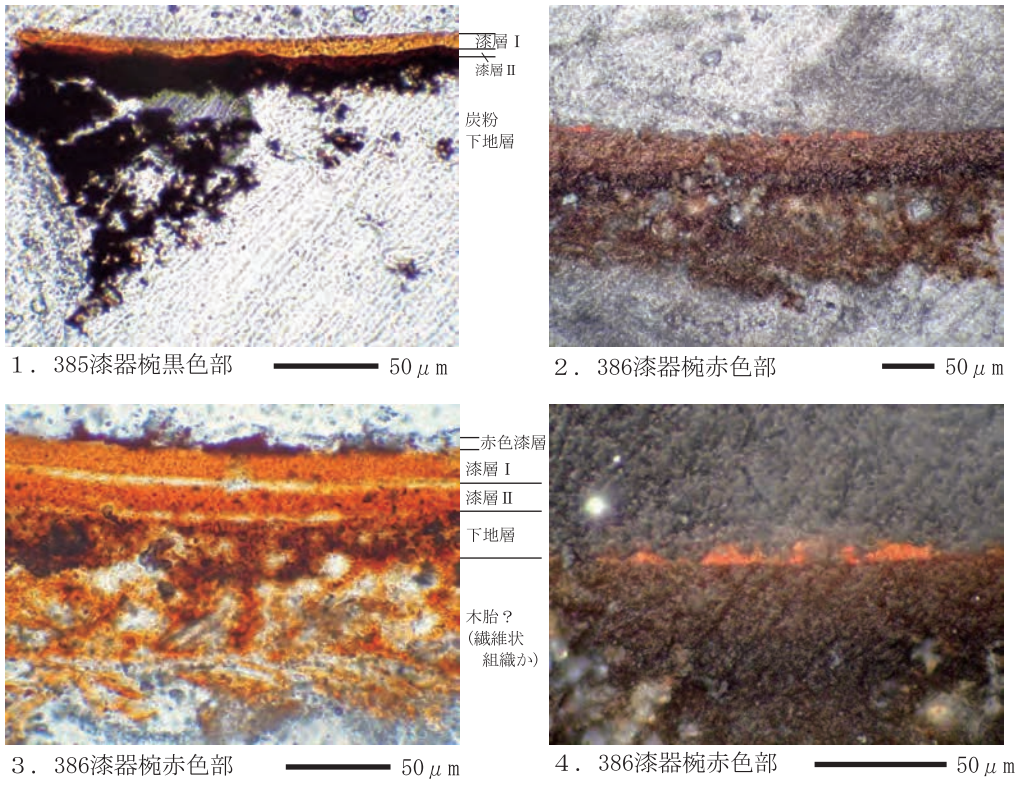


写真11 犬飼遺跡の塗膜分析写真 III



7) 年輪年代測定<sup>(注67)</sup>

## (1) はじめに

C地区開析谷NR50から出土した木材について、年輪年代調査を実施した成果を報告する。

## (2) 調査対象と方法

水浸状態で保管されていた犬飼遺跡第3次調査で出土した木材について、年輪数の多寡を肉眼で観察し、年輪数が多いと判断された5点を調査対象として選別した。各調査対象について最外層が形成されている箇所を鋸で切断し、切断した横断面(木口)をカッターナイフ及び剃刀で調整して、年輪界を明瞭に識別できるようにした。年輪幅の計測は、調整した木口に胡粉を塗布した上で接写撮影し、撮影した写真についてCybis社製年輪計測ソフトウェアCooRecorderを用いて行なった。年輪曲線の照合(クロスデーティング)は、SIEM社製年輪分析ソフトウェアPASTを用い、年輪曲線をプロットしたグラフの目視評価と、統計評価(Baillie and Pilcher 1973)をあわせて行なった。また、クロスデーティングは、調査対象間相互、クロスデーティングが成立した調査対象について平均した年輪曲線及び標準年輪曲線群について繰り返し検討した。

なお、調査対象について薄切片プレパラートの生物顕微鏡観察による樹種同定を実施したが、いずれもヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl.)と同定された。

## (3) 結果

付表19に、調査対象と年輪年代の一覧を示す。 $t$ 値は、クロスデーティングが成立した位置での $t$ 値を示し、IN01、771については薬師寺東塔部材の平均年輪曲線(星野ほか2017)、776については771との値を示す。計数年輪数には、年輪幅を計測した年輪より樹皮側(外側)に、年輪幅は計測できないものの年輪数を計数できる層数を+で示した。なお、肉眼で各調査対象の外側を観察し、樹心側(内側)に対して色や劣化の差がないか観察したが、いずれもはっきりした差が認められず、辺材は残存していないと判断した。最外層の年代は、IN01が524年、776が277年、771が402年であった。いずれも辺材が残存しておらず、各調査対象の伐採年代は、明らかになった最外層の年代を遡り得ないということを示し、また各調査対象が出土した遺構は、最外層の年代以降に埋積されたことを示す。

(星野安治)

付表19 犬飼遺跡出土木材の年輪年代調査一覧

報告番号	出土地点	計測年輪数	$t$ 値※	最外層の年輪年代	計数年輪数	最外層の年代
IN01	NR 50 III層	87	7.0	523	+1	524
IN02	NR 50 IV層	116				
776	NR 50 III層 (S X 444)	77	6.0	276	+1	277
771	NR 50 III層	225	5.7	401	+1	402
763	NR 50 III層 (S X 444)	101				

※ IN01・771は薬師寺東塔部材の平均年輪曲線との $t$ 値、776は771.との $t$ 値を示す。



## 8) 酸素同位体比年輪年代測定

### (1) はじめに

亀岡市の犬飼遺跡から出土した木材の年代を、年輪に含まれるセルロースの酸素同位体比の分析によって判定した。酸素同位体比を使った年輪年代法は、年輪幅に基づく従来の年輪年代法とは異なり、樹種の違いを問わず針葉樹にも広葉樹にも等しく適用でき、比較的年輪数が少ない(年輪数が30~50年程度の)<sup>(注68)</sup>木材の年代も精度よく決定できる方法である。

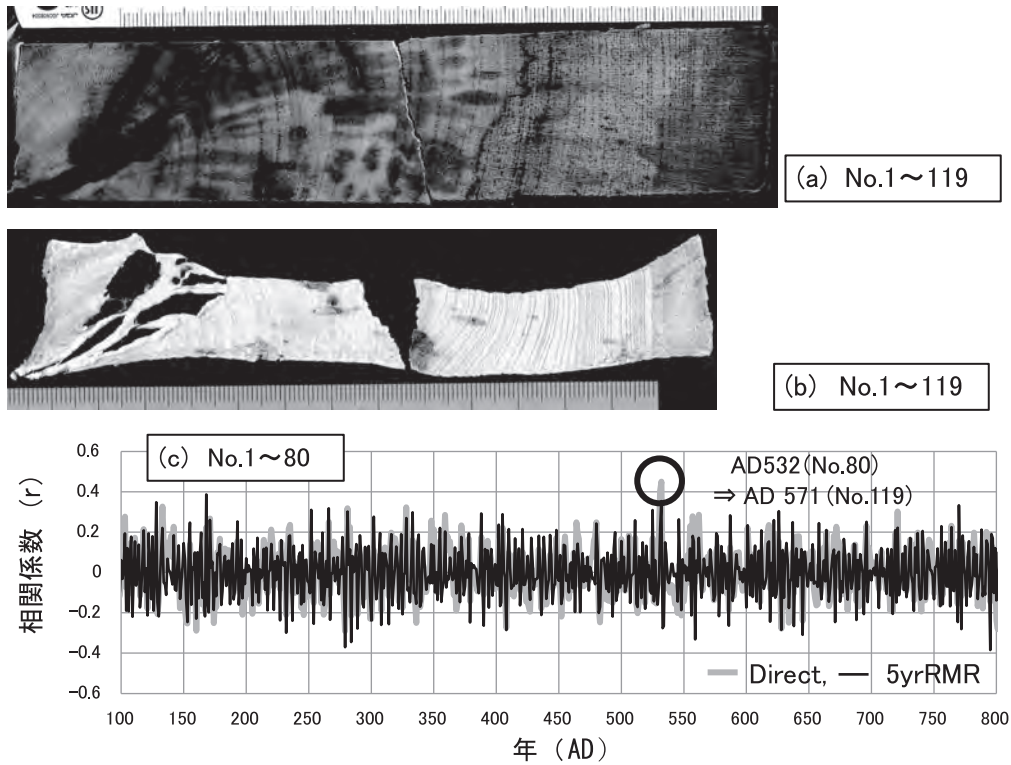
### (2) 試料と方法

分析に用いた出土材の試料は、付表20に示した5点である。以降はこの付表の試料番号(1~5)に従って、試料名を記述する。

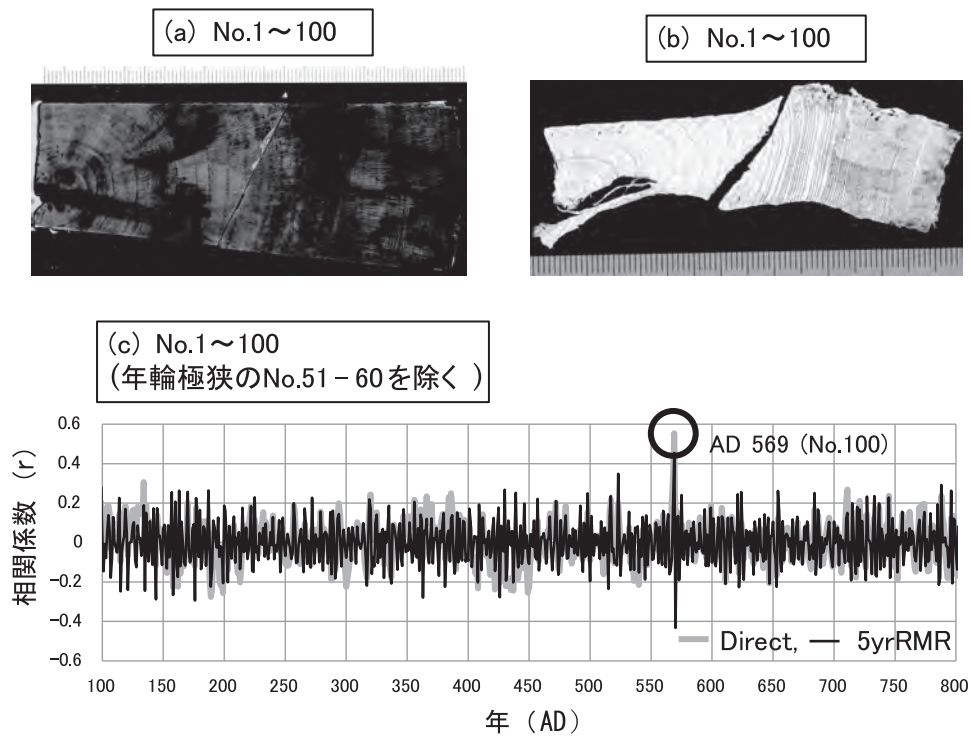
5つの試料は、すべて酸素同位体比年輪年代法による遺跡出土材の標準的な分析・解析方法により年代決定を行った<sup>(注69)</sup>。具体的には、以下の手順によった。[1] 水漬け状態の出土材から全ての年層が含まれる木材ブロックを切り出した。その際、その後のダイヤモンドホイールソーによる薄板の切出しと、長方形のテフロン製反応容器内での化学的なセルロース抽出を可能にするために、ブロック1つ1つの長径は12cm以下とした。つまり、もともとの木材が大きい場合は、いくつかの断片に分割するかたちで木材ブロックを切り出した。[2] 木材ブロックを、その内部が乾かないように注意しながら、厚みのある木枠に接着剤(アロンアルファ・ゼリー状)を使って貼り付け、接着剤が乾燥した後、ダイヤモンドホイールソーを用いて、木口面に平行な厚さ1mmの薄板を切り出し、薄板の年輪画像を濡れた状態でスキャナーを使って取得した(第117~121図の各a参照)。[3] 薄板はテフロン反応容器内で、「酸性の亜塩素酸ナトリウム溶液によるリグニンの分解(リグニンの色が消えるまで数回繰り返す)」と「水酸化ナトリウム溶液によるリグニン分解物及びヘミセルロースの除去」を行った後、希塩酸と純水を使って反応液を完全に除去して中性にした。その後、簡易凍結乾燥法によって完全に乾燥させて、セルロースだけからなる薄板の年輪画像をスキャナーで取得した(第117~121図の各b参照)。[4] セルロース抽出の前後における年輪の画像を比較して正確に年層の認定を行ったのち、セルロース薄板から年輪を1年ずつ各々の重さが100~300 $\mu$ gになるように切り出して銀箔に包み、サーモフィッシャー・サイエンティフィック社の熱分解元素分析計/同位体質量分析計(TCEA/Delta V-Advantage)を使って酸素同位体比(18O/16O比)を測定した。セルロース酸素同位体比の測定値はウィーンの国際原子力

付表20 酸素同位体比年輪年代法による年代決定に供した犬飼遺跡の出土材

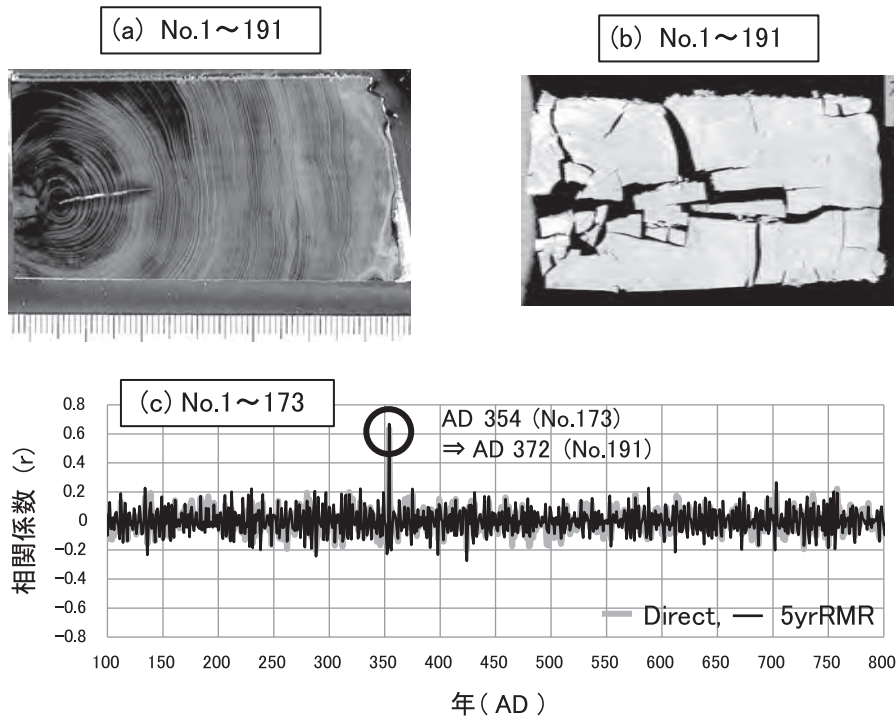
試料番号	報告番号	出土遺構	出土層位	器種	樹種
1	IN03	N R 50	Ⅲ層	自然木	エノキ属
2	IN04	N R 50	Ⅲ層	自然木	エノキ属
3	774	N R 50 (S X 444)	Ⅲ層	建築部材(加工材)	ヒノキ
4	775	N R 50 (S X 444)	Ⅲ層	建築部材(加工材)	ヒノキ
5	763	N R 50 (S X 444)	Ⅲ層	建築部材(板材)	ヒノキ



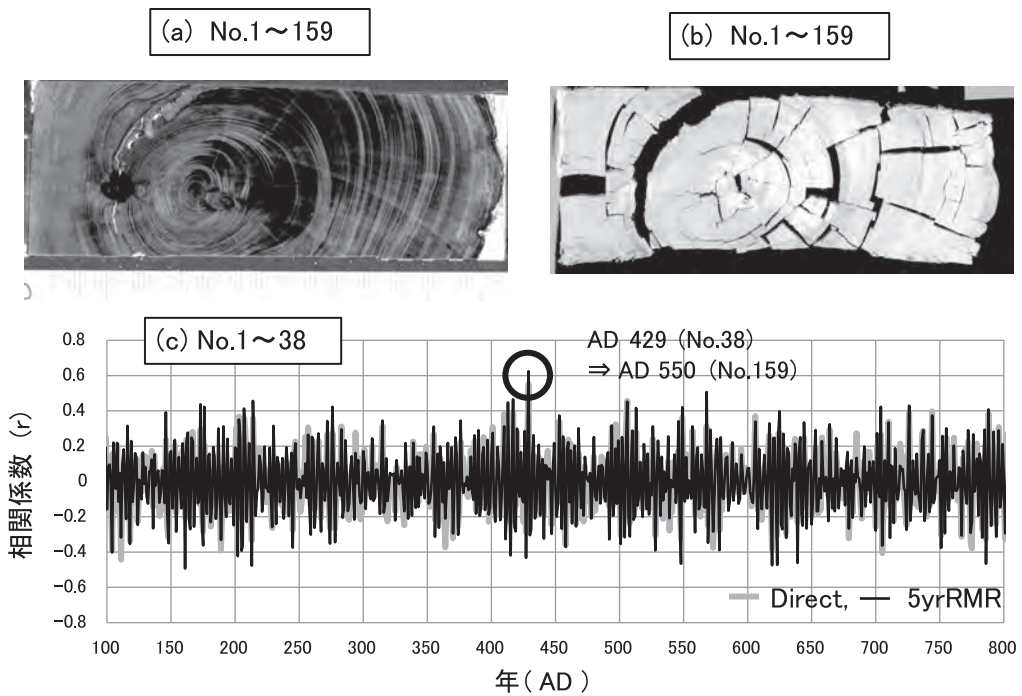
第117図 試料番号1の薄板(a)とそれをセルロース化したもの(b), 及びその年輪セルロース酸素同位体比と標準年輪曲線のスライド相関解析(c)。a~cのNoは認定・使用された年輪の番号。



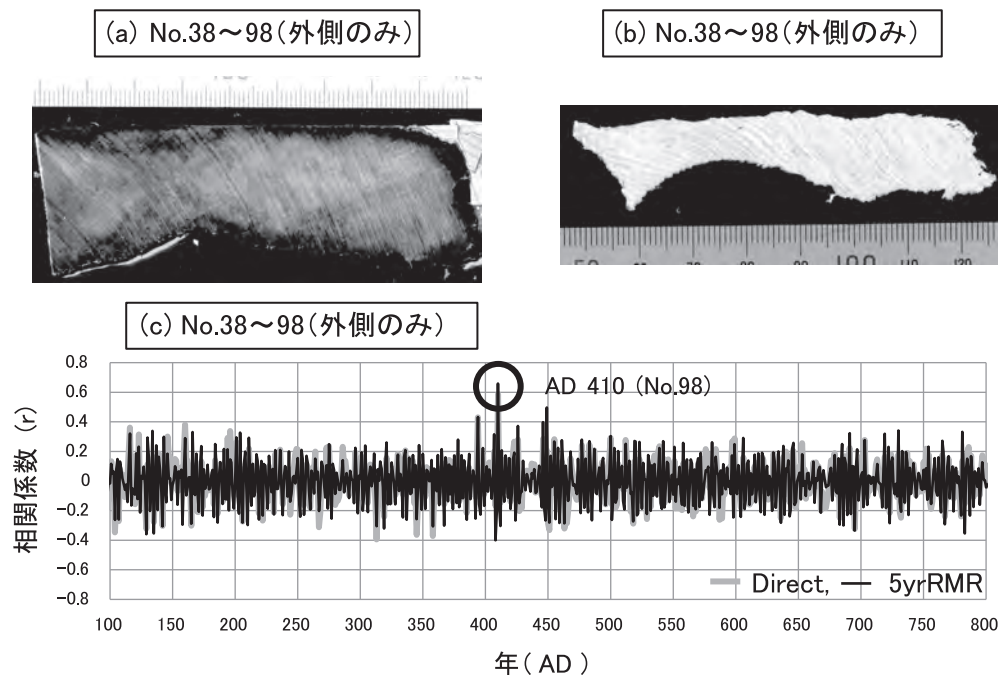
第118図 試料番号2の薄板(a)とそれをセルロース化したもの(b), 及びその年輪セルロース酸素同位体比と標準年輪曲線のスライド相関解析(c)。a~cのNoは認定・使用された年輪の番号。



第119図 試料番号3の薄板(a)とそれをセルロース化したもの(b), 及びその年輪セルロース酸素同位体比と標準年輪曲線のスライド相関解析(c)。a~cのNoは認定・使用された年輪の番号。



第120図 試料番号4の薄板(a)とそれをセルロース化したもの(b), 及びその年輪セルロース酸素同位体比と標準年輪曲線のスライド相関解析(c)。a~cのNoは認定・使用された年輪の番号。



第121図 試料番号5の薄板(a)とそれをセルロース化したもの(b), 及びその年輪セルロース酸素同位体比と標準年輪曲線のスライド相関解析(c)。a~cのNoは認定・使用された年輪の番号。

機関が頒布している標準平均海水(VSMOW)の酸素同位体比に対する千分偏差( $\delta 18O_{VSMOW}$ ; 単位は‰)の形で表示され、その測定誤差は繰り返し測定の標準偏差にして、0.15%以下である。

[5] 試料の年輪セルロース酸素同位体比の経年変動パターンを、中部日本(近畿~東海地方)で得られている紀元前6世紀から現在までの長期にわたる標準年輪曲線(マスタークロノロジー)<sup>(注70)</sup>と比較して、前者を後者の上において年単位でスライドさせながら相関係数の計算(スライド相関解析)を行うことで、試料の年輪年代を決定した(第117~121図の各c参照)。スライド相関解析は、年輪セルロース酸素同位体比をそのまま用いて行う(Direct)だけでなく、データに含まれる可能性のある「個体ごとの長期的な樹齢効果等」の影響を回避するために、データの中の5年以下の変動成分(5年移動平均残差)に対しても行った(5yrRMR)。それらの年代測定の結果については、相関係数( $r$ )と比較に用いた年輪の数( $n$ )から計算される統計値( $t$ )を用いて、その有意性を検定した。一般に $t$ 値が5を越えているときには、年代決定の信頼性は高いと考えられる。

### (3) 結果と考察

試料1から5の年輪年代決定の結果を、付表21に示す。5つの試料は酸素同位体比年輪年代法を適用するのに十分な数の年輪を含んでいたが、年輪の構造が複雑で年輪の認定が難しい部分や年輪幅が狭くてセルロースとなった年層の切り出しが難しい部分を含んでいたため、全ての年層を年代決定のために用いることはできず、結果的にセルロース酸素同位体比による年輪年代決定に供することができた年輪の数は、最低では38年(最大では173年)に留まっている。一般に年輪数が多いほど、年代決定の信頼度は向上するので、その影響は $t$ 値にも表れている。試料番号5

付表21 酸素同位体比年輪年代法による犬飼遺跡の出土材の年輪年代の決定結果

試料番号	年輪数	年代決定に供した年輪の数 (n)	相関係数 (r)	t 値	試料の最外年層の年代 (AD)	樹皮の残存状況
1	1 ~ 119*	80	0.451	4.46	571*	有り
2	1 ~ 100	90	0.554	6.24	569	有り
3	1 ~ 191	173	0.667	11.71	372	なし
4	1 ~ 159*	38	0.624	4.79	550*	なし
5	1 ~ 98?	61	0.658	6.71	410	なし

灰色の部分は、5年移動平均残差 (5yrRMR) による年代決定結果

\* 年輪の認定が難しく、数年の誤差を含む可能性のある結果。

については、全体で約98年分の年層のうち、内側の約37年分の年輪を年代決定に利用していないが、外側の61年分の年層の構造は明確なので、年代決定への影響はない。

5つの試料が出土した層位は大きく2つに分かれていた。

同一層位から出土した試料番号1と2の年代は、片方のt値が5以下であるとはいえ、樹皮が付いたこれら2つの出土材の年代がほぼ同じになったことから、試料番号1と2の両者の年代決定の結果(共に紀元570年前後)の信頼度は十分に高いものと思われる。

残りの3つの試料も同一の層位から出土している。これら3つの出土材には樹皮が付いていないので、それぞれの出土材の伐採年代が現存する最外年層の年代よりもどのくらい新しいかは不明であるが、試料番号3と4は、それぞれ芯持ち丸太の形状をしているので、最外年輪の年代と伐採年代の間の差は余り大きくないと想像できる。3つの試料のうちt値が十分に高い試料番号3と5の最外年層の年代は、紀元4世紀後半から5世紀初頭の狭い範囲内に収まっているので、それらの伐採年代としては、それ以降の5世紀のどこかであると考えられる。試料番号4は、年輪数は多かったもののt値が十分に高くなる年代を見つけることができなかった。ヒノキ特有の偽年輪が多く含まれていた可能性がある。それゆえ、試料番号4の年代(6世紀半ば)は信頼度が低いと考えざるを得ない。

(李 貞・中塚 武 = 名古屋大学大学院環境学研究所)



## 7. 考古学的検討

### 1) 丹波型瓦器椀の編年と中世犬飼遺跡の変遷

#### (1) 丹波型瓦器椀について

犬飼遺跡で最も安定して、多くの遺構から出土しているのは瓦器椀である。単体で出土する陶磁器や土師器は、一定の時間幅を見積もる必要があり、犬飼遺跡の年代的な位置づけを行う上では瓦器椀の年代を考えることが有効であろう。

犬飼遺跡で出土した瓦器椀はいわゆる丹波型瓦器椀とされる型式である。丹波型瓦器椀は橋本久和により設定された型式で、樟葉型に似た暗文を持ち、口径に比して高台径が大きいこと、体部は内湾気味に立ち上がり口縁部を強くヨコナデすることなどの特徴が示された。<sup>(注71)</sup> 1985年には、橋本の編年を念頭に丹波の瓦器椀の編年案が提示された。<sup>(注72)</sup> 石室出土資料など一括性に乏しい資料が中心で、細部は再検討を要すが、出現期では樟葉型と区別がつかないようなものが多く、12世紀代に丹波型瓦器椀として明確に地域性が出現すること、そして丹波型でも北部と南部では地域性が存在することなどが予察的に示された。一方で、出現期と終末期については、資料不足から詳述は避けている。近年、伊野近富は丹波型瓦器椀の検討を進め、上記の特徴に加え「口縁部が肥厚し、外面を強くなでる。口縁端部から1cm程度離れた箇所が分厚いものが多い。」ことも丹波型の特徴の一つとする。そして、器形を基に3分類し、丹波全域で4大別11小期の編年案を提示した。<sup>(注73)</sup> 伊野の編年案は、中世土器全体を見据えたもので、丹波の基準となるものであるが、一括資料中に含まれる瓦器椀を共伴資料から組列したもので、瓦器椀自体の型式変化そのものはさらに追及の余地が残る。

以上のように、丹波型瓦器椀の検討事例を整理したが、犬飼遺跡の瓦器椀に関しては、定型化したヘソ皿との共存関係を見込んで14世紀中ごろの年代を考える意見と、<sup>(注74)</sup> 13世紀後半とする意見がある。<sup>(注75)</sup> 犬飼遺跡の瓦器椀は内面見込み部にユビ圧痕を持つものが一定数認められるなど、他地域では認められない属性を有するものであり、そのことが編年的位置づけを難しくしている。また、これまでの研究では、共伴資料から瓦器椀を序列し、年代を与えてきたことから、瓦器椀の型式だけでは年代の想定が難しいという根本的な問題がある。

そこで、以下では亀岡盆地における、瓦器椀を精査し、その法量を検討することで、瓦器椀自体の型式変化の方向性を提示したい。その上で、共伴資料から各期に年代を与え、瓦器椀の編年案を提示する。なお、先述の伊野編年は丹波全体を視野に入れたものであるが、ここでは犬飼遺跡出土瓦器椀の年代的な位置づけを主眼に置くため、検討対象資料を亀岡盆地周辺の出土品に限定した。<sup>(注76)</sup> また、客観的な数値を示すことで再検証可能な編年となるように心がけた。

#### (2) 亀岡盆地における瓦器椀の変遷

第122図では、瓦器椀が3点以上出土した遺構を対象として、口径の分布を示した。<sup>(注77)</sup> 瓦器椀は、時期が下るに従い、次第に口径が減じていくとされ、編年の重要な一視点である。「径高指数」として示されることが一般的だが、変化の方向性をより明確に示すため、ここでは口径を一義的に取り上げる。また、それに合わせて器高の平均値も示した。瓦器椀は特に後半期についてはい

びつなものが多く、犬飼遺跡出土瓦器碗は同じ個体であっても、計測部位によって最大1cmもの差があった。楕円形の破片の口径を復元する場合、通常よりも大きな口径に復元してしまう危険性もあるため、対象とした資料は、観察表で残存率が4分の1以上とされたものに限定している。口径は、実見できたものに関しては筆者が計測した。その際、可能な限り複数か所で計測し、その平均値を採用した。実見できていないものに関しては観察表の値を採用した。

第122図の法量分布をみると、一括資料中では、口径分布は、中央値から1cm以内の誤差に収まっていることから、丹波においても口径分布が時期をあらわす有効な指標であることは疑いない。むろん、漸移的な変化が想定されるため、ある程度の重複を見込みながら口径分布を読み解くと、

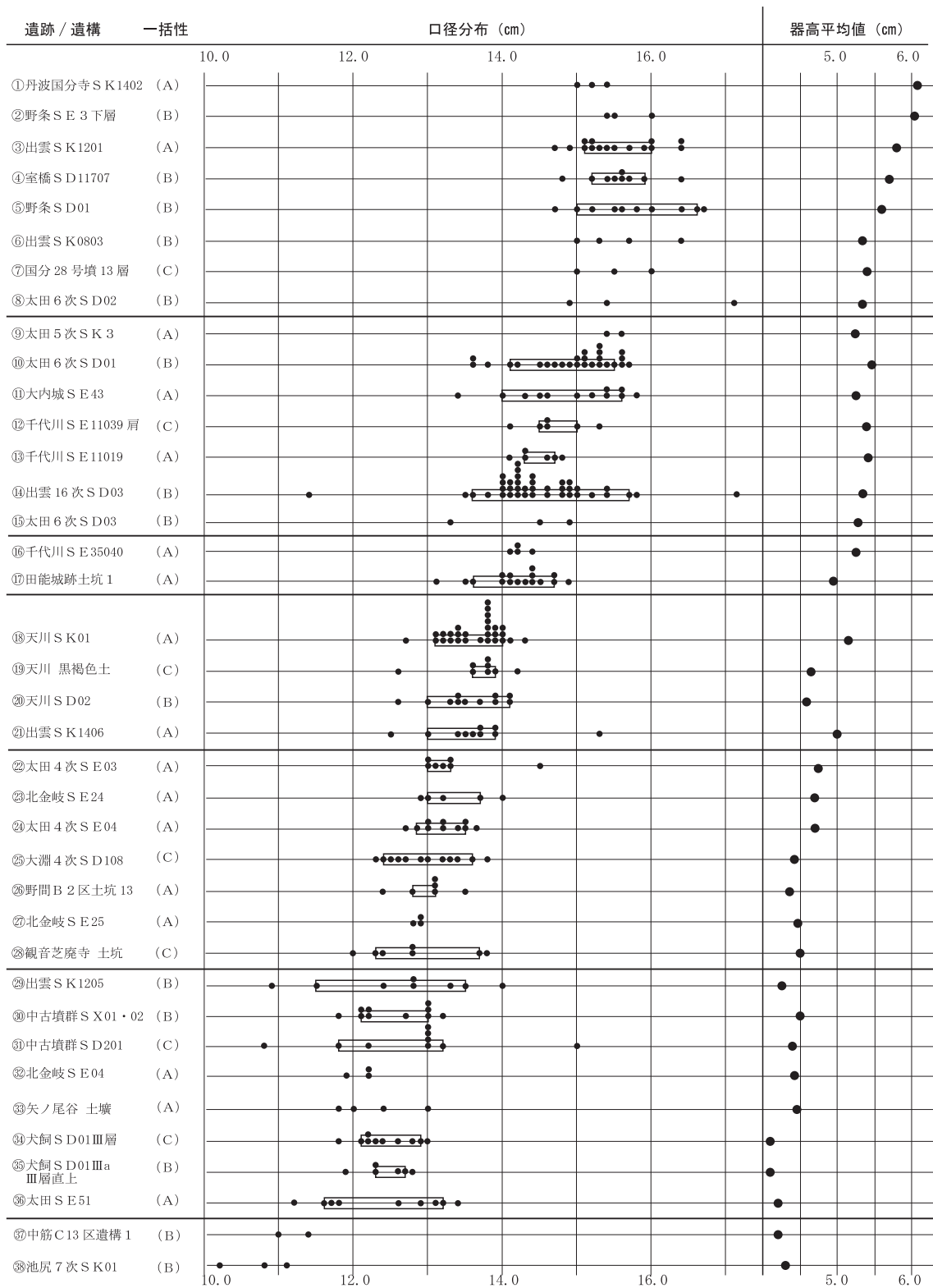
- A. 15.0cm～ (資料①～⑧)
- B. 14.0～15.5cm(資料⑨～⑮)
- C. 13.5～14.5cm(資料⑰・⑱)
- D. 13.0～14.0cm(資料⑳～㉑)
- E. 12.5～13.5cm(資料㉒～㉘)
- F. 12.0～13.0cm(資料㉙～㉞)
- G. ～12.0cm (資料㉟・㊱)

という7つのフェーズを設定することができる。これに器高の平均値を加味するとAは器高の平均値が5.5cmを境に、Eは4.5cmを境にさらに細分できる。特に、Aは口径の分布よりも器高が漸移的に変化する様子を読み取ることができ、口径よりも器高の変化が時期を反映している可能性も指摘できよう。また、Bは良好な一括資料がなく、口径の分布がやや散漫だが、14.5cmを境に口径のピークが表れていることから、同様に、さらに細分できる可能性がある。

あくまでも、これは法量の分布から読み取ることができる資料のグルーピングである。次に、それぞれの資料の中で出土状況の一括性が高いとみられる資料の検討を行い、時間軸の検討を行っていかう。なお、時間幅を含む溝資料は避け、土坑あるいは井戸などの一括廃棄品とみられる遺構を選定している。土師器皿の編年は平尾政幸「土師器再考」から時期を引用している。<sup>(注78)</sup>

Aの資料として挙げる、①丹波国分寺跡S K1402資料は、亀岡における最初期に属する瓦器碗と考えられる。口径15cm台の瓦器碗が3点出土しており、器高の平均値も6cmを越す。土師器皿は4A期(11世紀中頃)とみられる。資料⑦は石室流入資料で出土状況が安定しない資料だが、参考資料として挙げる。瓦器碗と同法量の黒色土器と東播系須恵器鉢が出土している。東播系須恵器鉢は広域流通が始まる11世紀代後半の資料とみられ、黒色土器の編年とも矛盾はない。また、熙寧元寶(初鑄1068年)も伴っていたらしく、当地域における瓦器碗の初現期の一例となるだろう。また、出土瓦器碗数は少ないが、時塚遺跡10次S E492出土瓦器碗は口径15.9cmで、11世紀末とみられる「て」の字口縁の土師器皿が伴う。

B・Cでは、共伴遺物がわかる良好な事例は少ないが、千代川遺跡で共伴遺物がわかる事例がある。S E11019、S E35040に伴う土師器皿は5B～6A期とみられ、Bが12世紀中葉、Cが12



※ 資料は原則として口径が計測可能なもの（口径の半分以上が残存するもの）に限った。その認定は、実見資料以外は遺物観察表による。未実見かつ遺物観察表、遺物写真が未掲載の場合は、実測図で欠けないものを対象に、実測図から計測を行った。

※ 口径分布に関しては、計測は1mm毎に●をプロットし、5点以上がある遺構に関しては80%のものが分布する範囲を示した。

※ 遺構の一括性の基準は以下の通り。

(A) 廃棄の一括性が高く、混入の可能性が少ない遺構。(B) 出土状況からは廃棄の一括性が高いことが想定されるが、溝など後の混入の可能性を排除できない遺構。(C) 同じ遺構から出土しているが、後に混入した可能性が高いものも含まれる遺構。あるいは出土状況が明確にされていない遺構。

第122図 丹波瓦器椀法量分布図

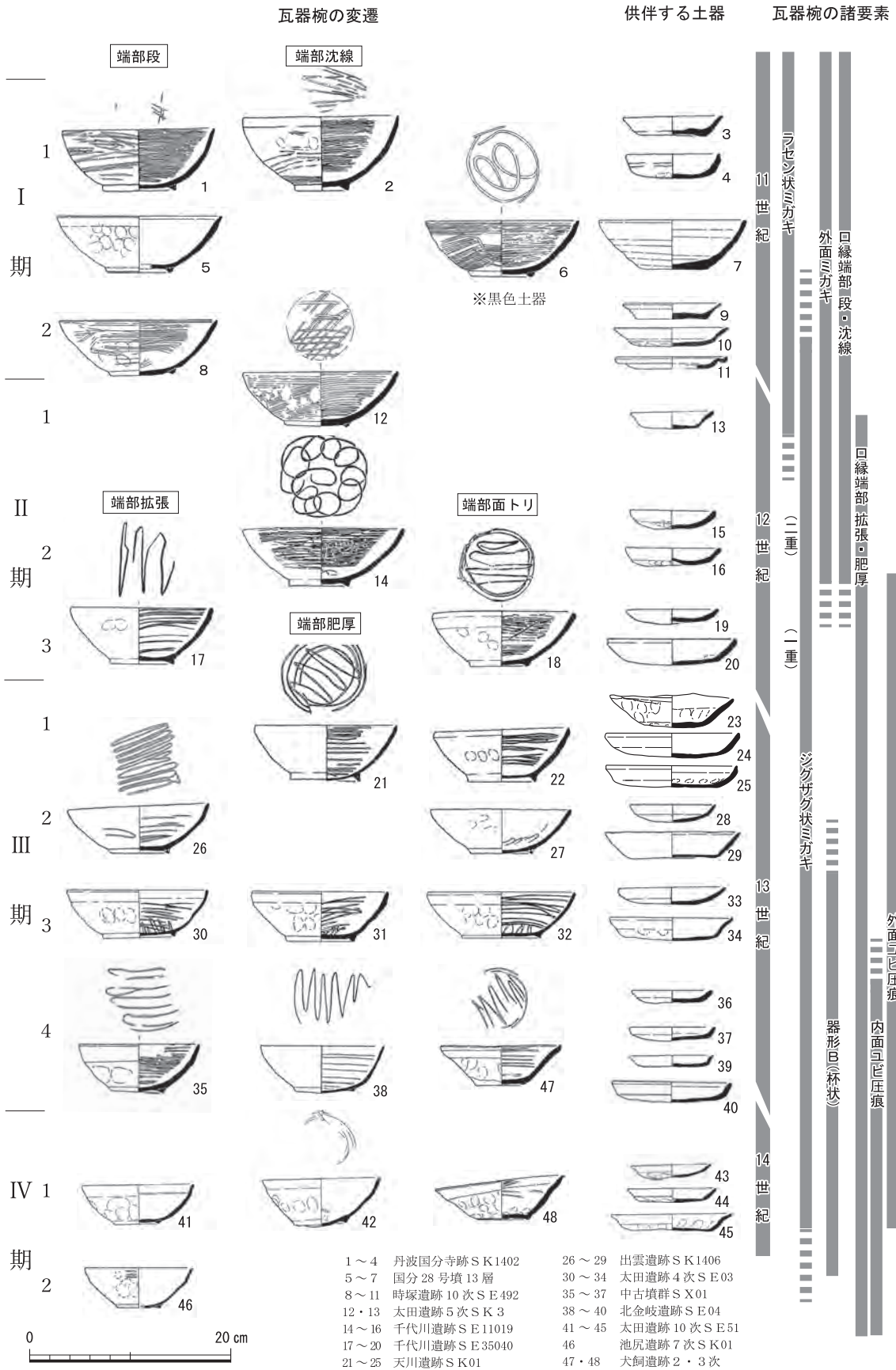
世紀後葉に接点がある。亀岡盆地の事例ではないが、Bのなかでも口径分布が大きい大内城跡S E43が共伴遺物から12世紀前葉と評価されていることとも矛盾はない。Bは口径分布から同一のフェーズとしてまとめたが、前述のように溝資料が多く、実際には時間幅を含むものとみられる。なお、太田遺跡4次15tr溝一括資料は、端部に沈線が入る樟葉型のものと、端部を拡張する丹波型が共伴しており、二段ナデの土師器皿の型式から12世紀中葉とみられる。したがって、遅くとも12世紀中葉までには丹波型が成立し、独自の展開が認められるようになる時期と考えられる。

Dは天川遺跡で良好な資料がある。天川遺跡では土坑や溝から瓦器碗が一括して多量に出土しているが、ここでは一括性の高い資料として資料⑱2次S K01を挙げる<sup>(注79)</sup>。口径は13cm台に集まり、13cm台後半に特に集中が認められる。共伴する土師器皿は13世紀前半のものである。Dの資料では、外面のミガキはほぼ消失しているが、内面にはまだしっかりとミガキを残すものがほとんどである。

次にE・Fの共伴資料を検討していこう。共伴する土師器皿の型式は、資料⑳太田遺跡S E04は6 B期、資料㉑中古墳群S X01・02は6 C期、資料㉒太田遺跡S E50は7 A期と考えられる。亀岡盆地の事例ではないが、能勢町野間遺跡土坑13で13世紀後半の東播系須恵器鉢が伴う。したがって、Eは13世紀中頃、Fは13世紀後葉～14世紀初頭の年代が想定できる。このフェーズでは口径のバラツキが大きいですが、これは、製作技術が粗雑化し、口縁部がいびつなものが増加したことにより、計測部位による差が大きくなったことが一因とみられる。また、このフェーズでも、器高、口縁部径の縮小傾向を認めうるが、器高は4.5cm、口縁部径は12cm台より極端に小さくなることはなく、下げ止まり状態となる。他の地域では、14世紀代の瓦器碗は高台を失い、それに伴い口縁部径も極端に小さいものが出現するが、当地域では消滅期まで高台が保持されたため、口縁部径の縮小現象も鈍化するのだろう。また、この時期のものにも、見込みの暗文が一定数認められることは当地域の特徴として注目される。

以上のように、口径の縮小から想定した時間軸は、共伴資料からも妥当であると考えられる。一方で、終末期の瓦器に関して課題が残る。丹波型瓦器碗の終末期の編年が不安定であったのは、他地域で認められる口径10cm代の瓦器碗の不在も一因となっており、実際、Fでは口径分布から細分することは難しい。そこで、製作技術の粗雑化という面から見通しを述べておきたい。犬飼遺跡で認められる瓦器碗は、粘土の接合痕が顕著に認められ、製作手順の復元が可能である。外面の粘土接合痕に注目すると、口縁部直下まで粘土紐、あるいは粘土板で整形し、一定の乾燥工程を経た後に、口縁部に別の粘土を一周貼り付けていることがわかる。伊野が指摘する、「口縁部が肥厚し、外面を強くなでる。口縁端部から1cm程度離れた箇所が分厚いものが多い」という丹波型固有の型式学的特徴は、この最上段の粘土紐に伴う所作の痕跡であろう。それとともに、内面見込み部にユビ圧痕を持つものが一定数認められる。これは、内面ミガキの消失、すなわち内面調整の省略とともに顕在化する後出的な要素と考えられる。この痕跡は、高台を接着する時のユビ圧痕が、ハケやナデにより整えられずに器面に残ったものと考えられ、製作の粗雑化を顕著に示す要素である。この内面ユビ圧痕を持つものは、側面観が器形Bを呈するものが多く、

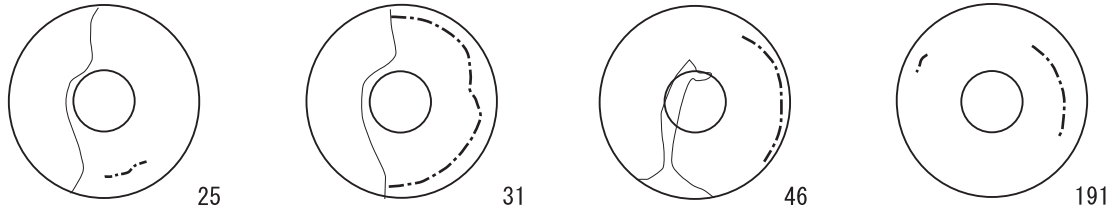




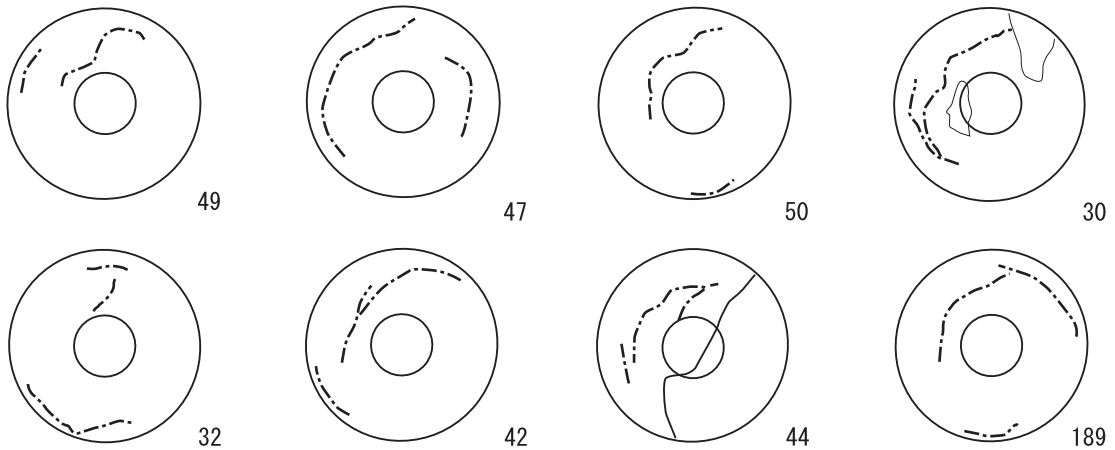
第123図 土坑出土瓦器碗編年案



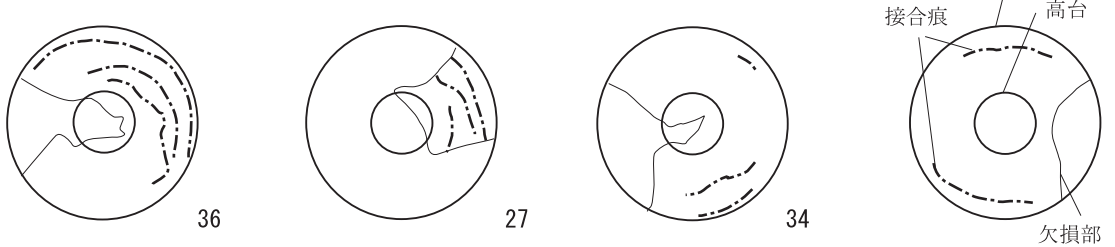
〔口縁部のみ粘土帯〕



〔体部粘土板（左巻き）+口縁部粘土帯〕



〔体部粘土紐輪積み+口縁部粘土帯〕



第124図 瓦器碗の製作技法(数字は報告番号)

内面をハケで整え、ミガキを加える所作が省略された結果、同時期の土師器皿のような特徴的な器形を持つ一群が出現すると考えられる。体部の製作技術も、粘土を左巻きにするという土師器皿でみられる技術を観察することができる。犬飼遺跡でも、堀S D01Ⅲ層のものは器形Aが多く、見込みにミガキを持つものが多いのに対し、Ⅲ層直上出土のものは器形Bが多く、内面のミガキも省略されており、層位的にも年代の前後関係が首肯されよう。

同様の特徴を有する一群は、丹波ではあまり多くなく、犬飼遺跡の他、太田遺跡で出土しているに過ぎない。他方、曾我部町の南に位置する大阪府能勢町では類例を認め、中筋遺跡ではヘソ皿と共伴するなど、14世紀前半に下ることも確認している<sup>(注80)</sup>。これらの瓦器碗は、13世紀後葉以降、亀岡盆地南西部から大阪府北部に流通した、よりローカルな系統の瓦器碗である可能性が高い。

なお、当地域で明らかに犬飼遺跡よりも後出する資料と考えられるのは資料③⑧池尻遺跡第7次調査出土のものである。この資料は破片資料を含み、扱いが難しいが、口径分布の中心が10cm台となっており、これを亀岡盆地における瓦器碗の末期的な形態とみておきたい。

以上を踏まえ、瓦器碗の変遷を法量の縮小と、製作技術の粗雑化の2つの要素からとらえてみた。第123図では、共伴関係が明らかな資料を中心に、分類・整理した。他地域では瓦器碗はⅠ～Ⅳ期の4期に大別され、それぞれ11世紀後半、12世紀前半～後葉、12世紀末～13世紀代、14世紀代の年代が与えられている。それに対応させるならば、AがⅠ期、B・CはⅡ期、D・E・Fの一部がⅢ期、Fの一部・GがⅣ期にそれぞれ相当しよう。(桐井理揮)

### (3) 陶磁器からみた犬飼遺跡

犬飼遺跡で出土した陶磁器は数量こそ少ないものの、一定の時期ごとの傾向や利用状況を示していると考えられる。

まず、犬飼遺跡で出土した輸入陶磁器のうち、11世紀後半から12世紀前半に位置づけられる白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類は6点を数える。一方で、瓦器碗の検討から、犬飼遺跡の成立は13世紀後半と考えられるため、居館の成立時に伝世品である輸入陶磁器を持ち込んだのであろう。居館の成立・存続時期である13世紀末～14世紀初頭については、標識磁器である龍泉窯系青磁碗や白磁皿Ⅸ類は出土している一方、その後続く輸入陶磁器は出土量が少ない。この時期は輸入陶磁器の量自体が低調であることも考慮する必要はあるが、居館の利用は短期間であると想定できよう。

続く15世紀は龍泉窯系青磁碗で雷文帯の文様を刻むものが1点ではあるものの出土している。また、龍泉窯系青磁杯についても同時期のものと考えられ、同じく15世紀に搬入された古瀬戸よりも低調な様相ではあるものの、輸入陶磁器が利用されていた。

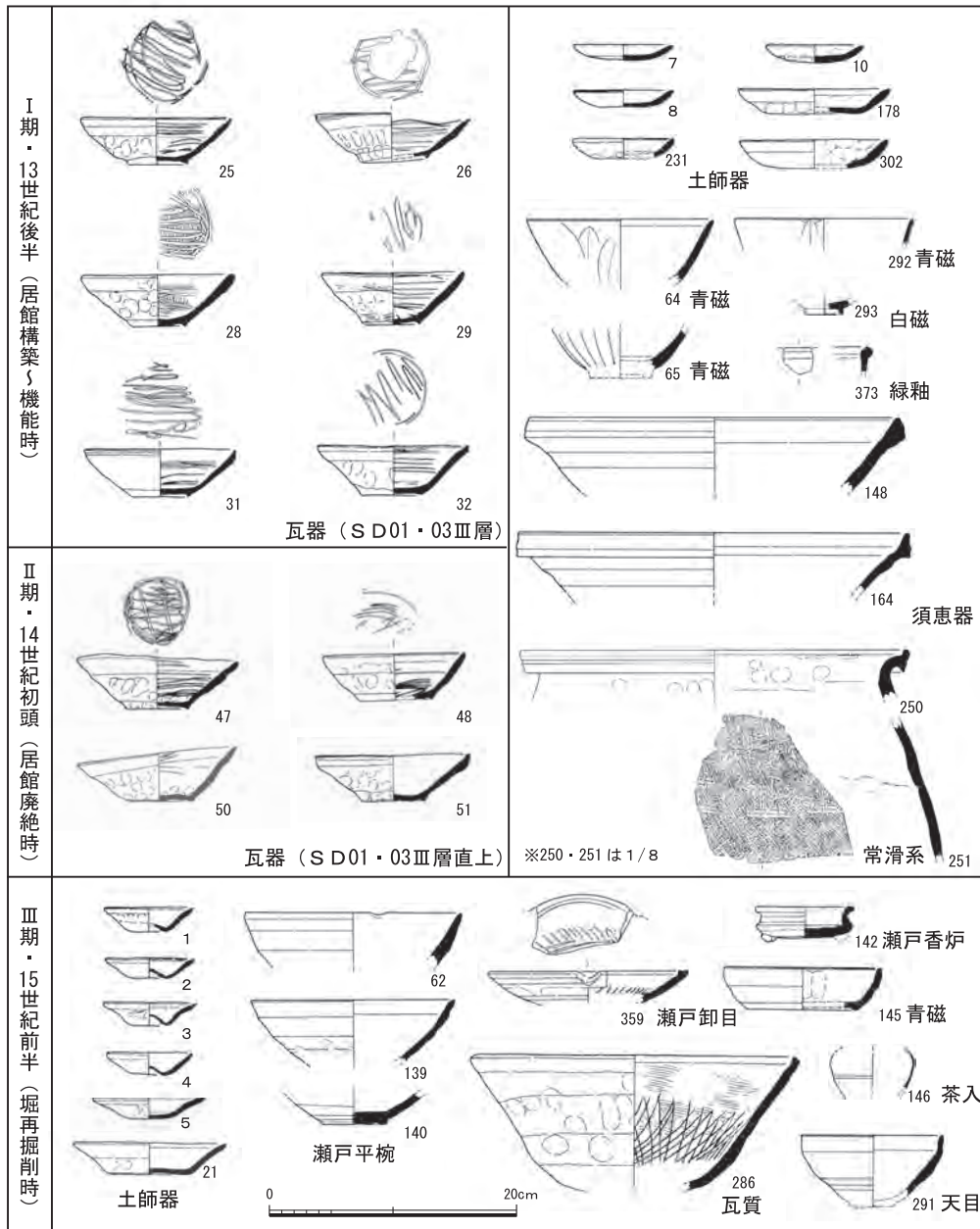
国産陶器については、大きく2時期に分けることができる。第3章第4節でも述べたとおり、13世紀後半の東海系の焼締陶器甕が一定量搬入されており、1回目のピークがこの時期にある。ただし、この時期の国産陶器は甕もしくは壺に限られている。これに対して、2回目のピークである15世紀には、多様な器種の古瀬戸が出土することが特徴で、一般的な供膳具である平碗や調理具である卸目皿の他、天目碗や香炉、瓶子がある。

また、出土した陶磁器類のうち、出土位置がわかるものを区画①、区画②、堀S D01～03の3か所でカウントした(附表4)。堀S D01からの出土量が圧倒的に多く、区画①・②と続く。ただし、天目碗や緑釉陶器といった奢侈品の出土から見るとやや区画①の方が優勢に見えるものの、東西の両地区の出土量に大きな差はない。Ⅰ・Ⅱ期を搬入の中心とする焼締陶器とⅢ期に搬入された古瀬戸の様相をそれぞれ確認しても、Ⅰ・Ⅱ期とⅢ期のいずれも両地区を利用していただと考えられる。(上井佐妃)

### (4) 中世犬飼遺跡の年代と変遷

以上のように、犬飼遺跡で主体となる瓦器碗は13世紀後半～14世紀初頭のものと考えた。したがって、典型的なヘソ皿や、古瀬戸などの陶磁器類は、時期を異にする一群であるといえる。犬飼遺跡出土土器は、第125図のように、Ⅲ期に分けることができる。

Ⅰ期は柱穴に埋納された土器、あるいは堀S D01のⅢ層から出土したものの多くが相当し、居館の構築時の資料と考えられる。Ⅱ期は主に堀S D01のⅢ層直上の資料が相当し、ヘソ皿や一部の瓦器碗が含まれる。堀S D01のⅢ層が埋没し、居館の機能が廃絶した時期と考えられる。Ⅲ層



第125図 犬飼遺跡出土土器の変遷

の上層にはマンガンを含む水棲堆積層が認められるが、埋め戻し土は顕著には認められない。したがって、居館としての機能が廃絶した後も、何らかの土地利用はあったと考えられる。Ⅲ期は堀が水路として再掘削され、周辺の土地利用が行われた時期である。明確な遺構は認められないが、堀SD01のⅡ層や、区画②精査中の遺物が中心である。古瀬戸や土師器皿などが含まれる。

以上のように、掘削・屋敷構築時、廃絶の時期、再利用の時期と3段階の変遷を追うことができよう。犬飼遺跡の居館は、遺構の切り合いがほぼ皆無であり、建物の重複や大規模な改修は想定をしがたい。居館としての継続期間は13世紀後葉から14世紀前葉あたりまでと考えられる。ただし、Ⅲ期にも奢侈品を含む多様な器種の古瀬戸や天目などの輸入陶磁器が出土していることから、それらを入手しようとするような領主層の積極的な関与が想定できよう。（桐井理揮・上井佐妃）

## 2) 犬飼遺跡における居館の構造

犬飼遺跡の居館は、遺構の切り合いが少なく、13世紀後半の居館の全体像が判明する例として、定点的な資料といえる。ここでは、各遺構の属性や類例を今一度、先行研究と比較しつつ、整理しておくことにしよう。

### (1) 堀と土橋

堀は「L」字状に2方向を区画する堀S D01・03と、南北に直線的な堀S D02がある。最も大きな堀S D01は、深さ約2m、幅約8mの大きさで、断面形状は「V」字状を呈する。堀には外部から水を引き入れるための導水溝S D136が付いており、本来は水堀であったと考えられる。この堀の性格については、次項で詳細に検討したい。

堀S D01・03には、南西端に地山削り残しの土橋が付属する。城館の橋については松井一明が整理しており、本例は「幅2m以内と狭く、石積み補強のない」A1類に分類される。A1類は用水に規制されない山城に多く、平地居館では木橋が多いという<sup>(註81)</sup>。本例の特徴としては、区画の南西端に取り付くことがあげられる。通常、防御を意識して橋は堀中央に近い位置に設けられるが、犬飼遺跡の例は、防御に不向きな角隅部に位置しているのである。一方で、A1型土橋は堀幅に比較して通路幅は狭く、その点では防御性が意識された構造でとされる。現状では比較検討を行うことができる資料が見当たらず、今後の検討課題としておきたい。

### (2) 囲曉施設

方形居館では、柵や塀あるいは土塁の痕跡が検出される場合も多い。しかし、犬飼遺跡ではいずれの痕跡も検出することはできなかった。堀S D01の肩部から掘立柱建物S B431の端までは約5mの空闲地があり、この部分には本来何らかの遮蔽施設が存在したとも考えられるが、遺構面には痕跡を残していなかった。

示唆的なのは、堀S D01の土壌分析によって、茎に棘のあるジャケツイバラ属の花粉が検出されたことである。ジャケツイバラ属の花粉は、下層遺構N R50の花粉分析では検出されていないことから、本来自生する植生ではなく、中世の遺構群とともに出現したと考えられる。棘のある植物を生垣にすることに関しては、確かな実例はないものの、室町時代以降に登場すると考えられ、自然樹形の生垣としての利用が想定できるという<sup>(註82)</sup>。また、同じマメ科植物で棘をもつサイカチは、戦国期に寺院や城館に植栽されていたことが知られている<sup>(註83)</sup>。以上のようなことから、堀と建物の間の空闲地には、土塁ではなく、イバラ属の生垣で区画されていた蓋然性が高い。『粉河寺縁起絵巻』では、堀で囲まれた屋敷の内側に棘のある植物が描かれている(第126図①)。

また、居館の西端を区切る堀S D02の埋め戻し層からは、ヤダケ属、あるいはマダケ属とみられるタケの地下茎が検出されている。上層では根による攪乱は全く認められなかったことから、近隣に植栽されていたタケが埋没した痕跡と判断した。タケを背高く育て、屋敷の周囲の垣としたのは『法然上人絵伝(巻1)』の漆間時国館や『一遍上人絵伝(巻4)』の筑前国武士の館など、武士の館に描かれており(第126図②)、武士の館に植栽される植物としては、それほど特殊なものではなかったようだ。犬飼遺跡の居館においても、西側の区画としてタケの生垣が存在したと

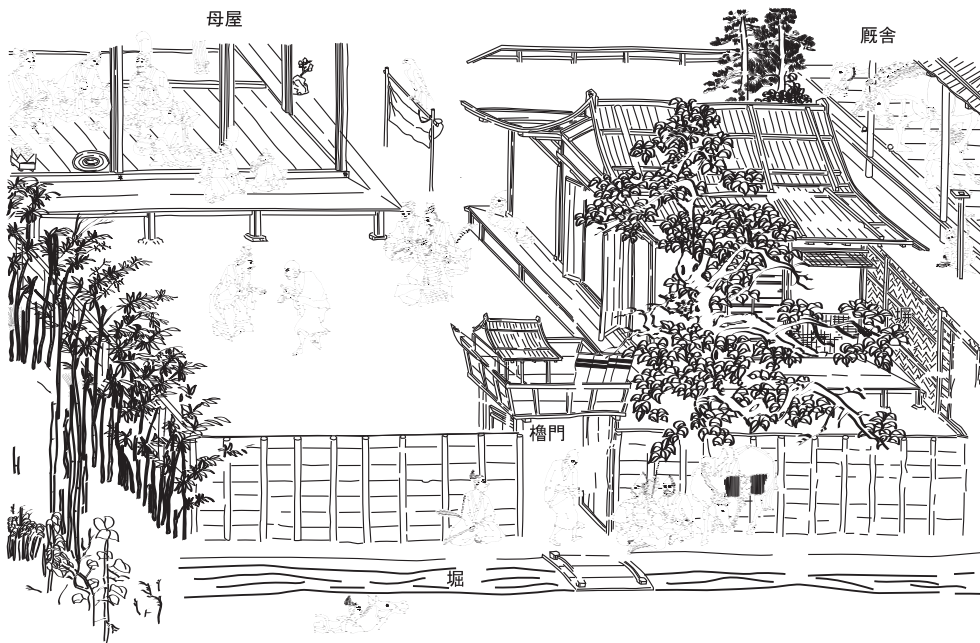


も十分考えられよう。

方形居館の囲曉施設については、居館内部の空閑地に土塁の存在を想定することが定説化する中、屋敷を囲曉する植物の存在が発掘調査により明らかになった意義は大きい。山上雅弘は土塁が残る居館の分布には空白域が認められることから、小規模居館では土塁や堀に囲堯されない事例が多いことを注意している。<sup>(注84)</sup> 植物痕跡は遺構として認識することが困難で、今回の調査でも遺構として認識できたわけではない。しかし、今回の調査成果からは、植物や生垣で囲堯された、絵図に描かれた武士の屋敷から想定されるイメージに近い成果が得られたといえよう。



①『粉河寺縁起』に描かれた屋敷の堀と植物



②『一遍上人絵伝』に描かれた屋敷の堀と植物

第126図 絵図に描かれた居館の生垣とタケ



### (3) 建物の構造

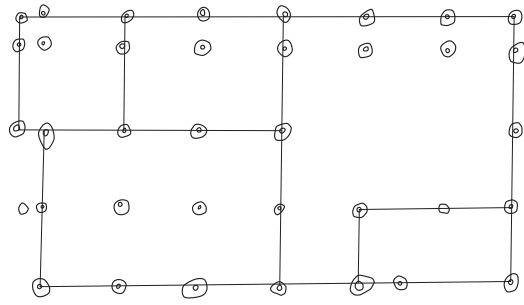
犬飼遺跡では、区画①・②から、主屋と考えられる大形の建物と、付属する小形の建物がそれぞれ1棟ずつ検出された。中世の掘立柱建物については、宮本長二郎が梁間1間型と総柱型という系統の異なる2種の建物が存在することを示し、南北朝期には屋内柱が一部省略されるなどして近世民家の間取りや構造が成立することを指摘している<sup>(注85)</sup>。このような視点から、それぞれの区画の建物の構造を検討してみたい。

区画①の掘立柱建物S B 431は、北側と東側には庇が付き、南側には庇状の突出部が付く、総柱建物と考えられる。西側1間分は柱がなく、土坑状の遺構が複数検出された。この空間が土間になっていた可能性もあるが、柱が省略された総柱型建物とみて問題ない。

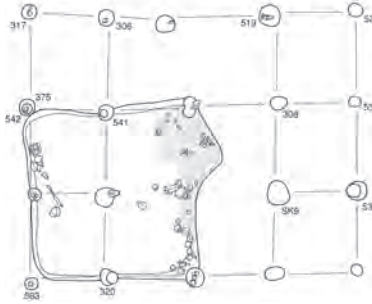
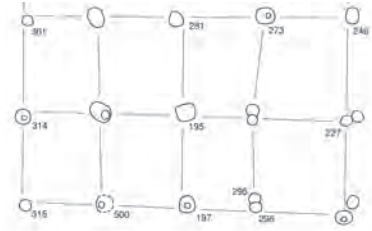
一方、区画②の掘立柱建物S B 433は、柱跡の直径が太いものが多く、また、全柱穴のうち4分の1には栗石や根石を配置していることから、掘立柱建物S B 431と比較すると、より堅牢な上屋構造を持つ建物が復元できる。また、東半分は柱が省略された、土間のような空間(S X 303)と、馬屋と考えられる遺構(S X 304)が検出された。S X 303に接するS K 312付近には焼土が確認され、簡易な火処が存在した可能性がある。土間は通常、水がたまらないように揚土を施しており、当地域でも近世の住居には「あげ土間」という構造が認められる。そのような観点からみると、犬飼遺跡S X 303は土間ではなく、S X 304と一体となった馬屋の機能を持つ空間であった可能性もある<sup>(注86)</sup>。そこで、ここでは同じような平面形状を持つ建物の類例を提示し、若干の検討を行うことにしよう<sup>(注87)</sup>(第127図)。

同じように、屋内に馬屋や土間を備える構造の建物の近隣地域での類例は、和泉市和気遺跡や、京都市久我東町遺跡を挙げることができる。和気遺跡H-1号住居は犬飼遺跡と同じ方形居館の一角で検出された建物で、東半の一部に柱の省略がみられる。掘り込み構造としての土間や馬屋は検出されていないが、後述の神戸市箱木家と近い平面型式が想定されている<sup>(注88)</sup>。久我東町遺跡は京都市伏見区の遺跡で、14世紀の居館関連遺構が検出されている。正式な報告書が未刊のため、詳細は不明であるが、大型の総柱型建物が検出されている。北半は一部柱が省略され、焼土や水甕の据え付け穴とみられる遺構が検出されていることから、土間と考えられている。北東隅には2間×2間の馬屋とみられる張り出しがあり、犬飼遺跡S B 433との共通点が認められる。二ノ宮次郎遺跡は、神戸市北区の居館に伴う遺跡で、総柱型掘立柱建物の中に、犬飼遺跡と同じような竪穴状の窪みを持つ建物が検出されている。その埋土中からは焼土などが検出されており、使用時から建物内で掘り窪めて使用されていたことを示す一例といえる<sup>(注89)</sup>。以上のように、地域の有力者層の居館と目される遺跡で、土間、馬屋とみられる空間を持ち、屋内の半分程度が板張りの空間になるとみられる類似する構造の建物が散見される。その性格や上屋構造について考えるため、現存する民家建築から、犬飼遺跡S B 433との共通点を探してみたい。

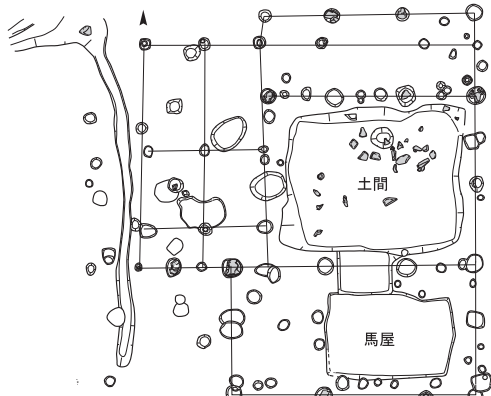
箱木家の主屋は現存最古の民家建築とされ、築造年代が14世紀代にさかのぼるとされる。片側は土間で、前座敷三間取型と呼ばれる、古相の特徴を持つ。亀岡盆地周辺では、中世後期には前座敷三間取型民家を祖形として撰丹型民家という、切妻屋根で片土間の構造を持つ特徴的な民家



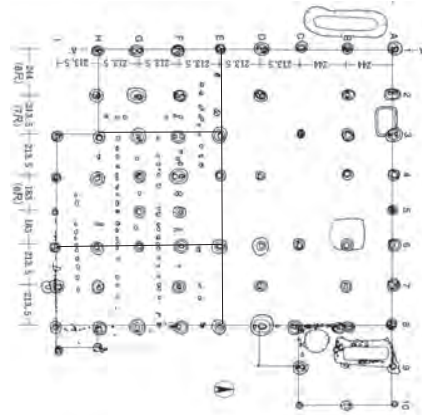
① 和泉市・和氣遺跡H-1号住居 (13世紀)



③神戸市・二郎宮ノ前遺跡S B 3・4  
(13世紀後半～14世紀前半)



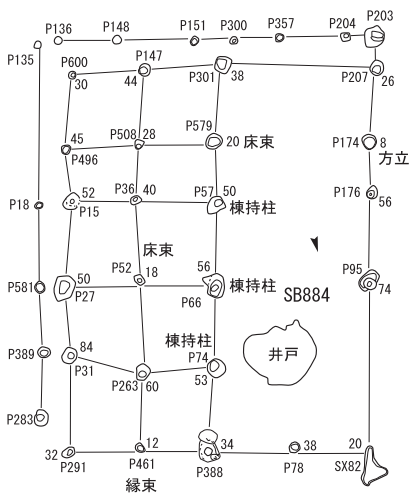
② 亀岡市・犬飼遺跡S B 433 (13世紀後半)



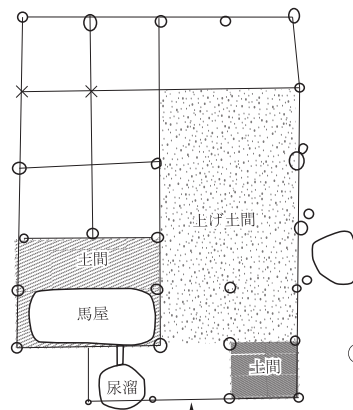
⑤京都市・久我東町遺跡主館 (14世紀)



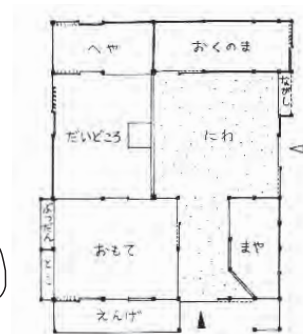
④神戸市・箱木家おもや (14世紀か)



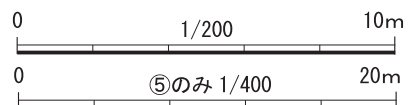
⑥村上市・古渡路遺跡S B 884 (15世紀)



⑦京丹波町・渡邊家前身建物  
(16世紀か)



⑧京丹波町・岡花家おもや (17世紀)



第127図 土間を持つ建物

が成立する。<sup>(注91)</sup>現存最古級の撰丹型民家の遺構とされている京丹波町岡花家では、撰丹型の特徴である縦間取りは採用しつつも、土間の奥に室を設けるなど、それ以降の撰丹型には引き継がれない特徴も持ち、古い形式を残している可能性がある事例である。17世紀の北船井型住居の遺構として知られる京丹波町渡邊家では、建替修理の際に下層の前身建物の発掘調査が行われており、やはり岡花家と同様、奥の間とみられる空間を持つ。<sup>(注92)</sup>このように、亀岡盆地周辺では、近世初頭の古い型式を残す民家で、片土間で土間の奥に室を設ける例がめずらしくない。

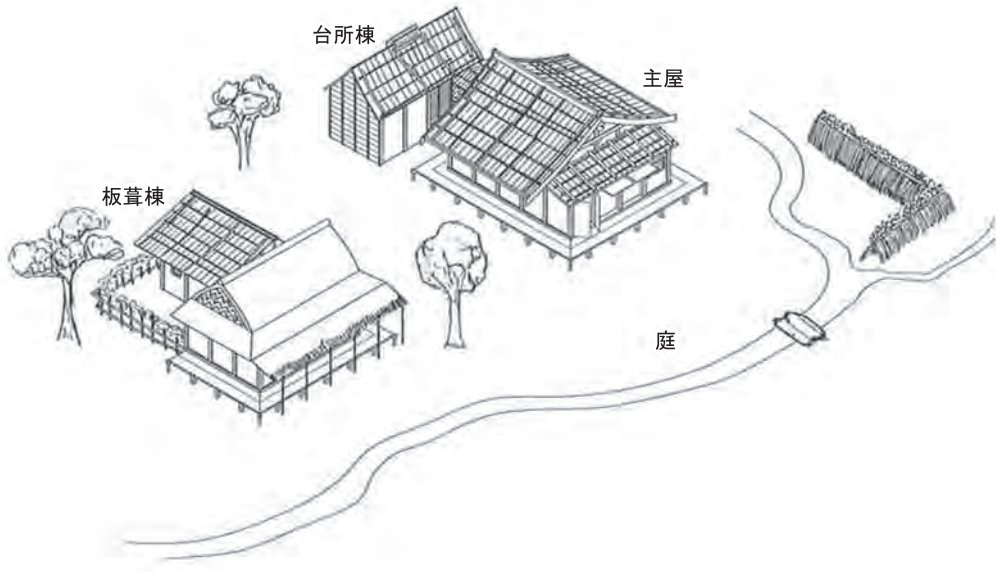
これらの事例を参考にS B 433に再度立ち戻ると、平面形状は14世紀代とされる箱木家との共通点が多く指摘することができる。一方で、土間の奥に室を設けるという点においては、近世初頭の撰丹型民家との共通点も見出すことができる。<sup>(注93)</sup>もちろん、中世にさかのぼる民家の事例が少ない以上、現存民家との形式的ヒアタスは大きく、両者を直接接続させることには慎重である必要があろう。先述のように、S X 303を土間と考えてよいのかという問題も残されている。しかし、近世民家との接点を探りうる資料として問題提起しておきたい。

#### (4)居館としての犬飼遺跡

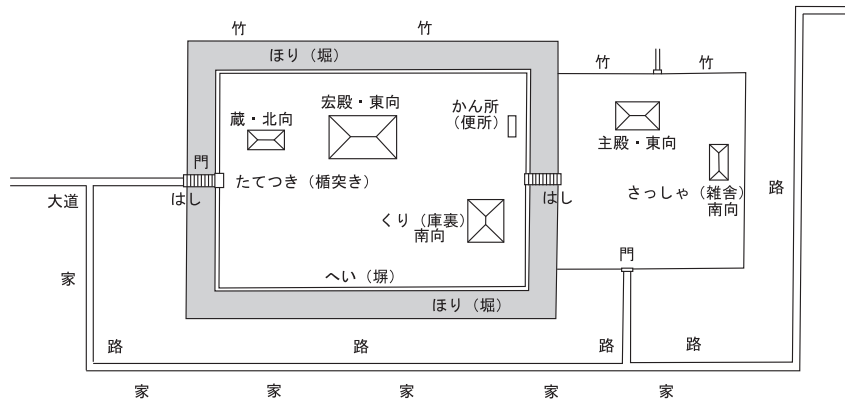
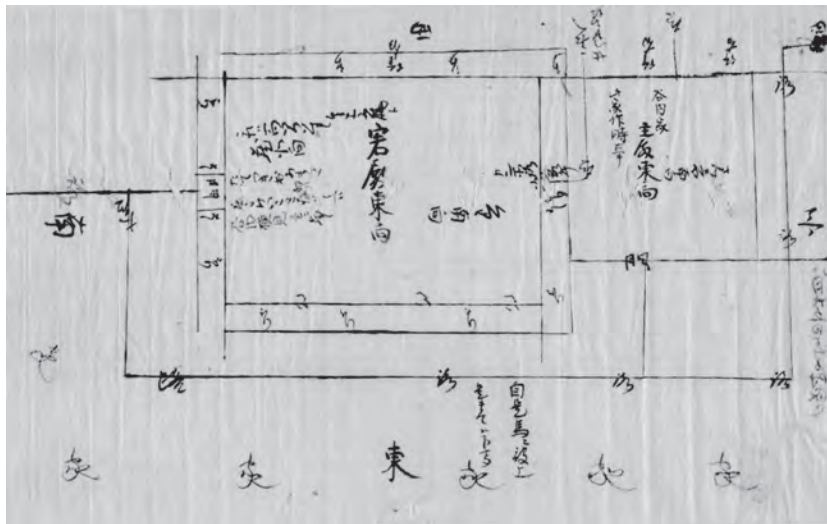
以上検討してきたように、犬飼遺跡の居館は、二つの異なる性格の区画が並立することが特徴である。区画①と②の間には橋の痕跡は認められなかったことから、仮設の簡易な橋の存在を考慮しないならば、それぞれは独立した機能を持った空間であったと考えることができよう。

なお、複郭構造を持つ平地の居館は14世紀代に出現するとされ、本例は初現期の一例に数えられる。<sup>(注94)</sup>同様の事例としては福岡市柏原K遺跡、坂出市空港跡地遺跡、和泉市和氣遺跡など西日本各地で事例があるが、これらは郭間で明らかな格差を有しており、連郭となる犬飼遺跡の事例とは相違がある。同規模の2郭が並立し、居館の内容の全体像が把握できる事例は発掘調査では類例がない。以下では、犬飼遺跡の性格を考える一助とするために、文献及び絵画資料の事例を2、3示しておきたい。

まず、『一遍上人絵伝』に描かれた信濃国(現在の長野県)の武士・大井太郎の館の例を見てみよう。大井太郎の館では、板葺の建物と茅葺の建物が並んで描かれており、その屋敷は溝で区画されている。玉井哲雄の研究によると、板葺きと茅葺きの建物が並立する構造に復元することができるという。<sup>(注95)</sup>また、15世紀の事例ではあるが、『東寺百合文書』には、備中国新見庄の政所指図として、堀で囲まれた空間に客殿と主殿が並んで描かれている(第128図)。<sup>(注96)</sup>犬飼遺跡でも、同様に総柱型掘立柱建物と民家と共通点の多い2つの建物とそれぞれの付随建物があり、構成は類似しているといえよう。想像力をたくましくするならば、犬飼遺跡の区画①の掘立柱建物S B 431は客殿、民家と共通点の多い区画②の掘立柱建物S B 433は普段使いの主殿であったことも想定可能であろう。公的空間と生活空間を分化させたあり方は、前述の柏原K遺跡でも指摘されている。複郭にして居館の内部空間の機能を分化されたことで、中世後期に認められる多様な居館、あるいは城郭へと通ずる構造の初現的なあり方が現れていると考えておきたい。(桐井理揮)



①信濃の武士 大井太郎館の想定復原（黒田 1996）



②備中国新見莊政所屋敷指図（東寺百合文書）翻刻は伊藤ていじ 1985 を参考に再トレース

第128図 文献にみる連郭の居館の事例



### 3) 犬飼遺跡と中世曾我部地域の景観

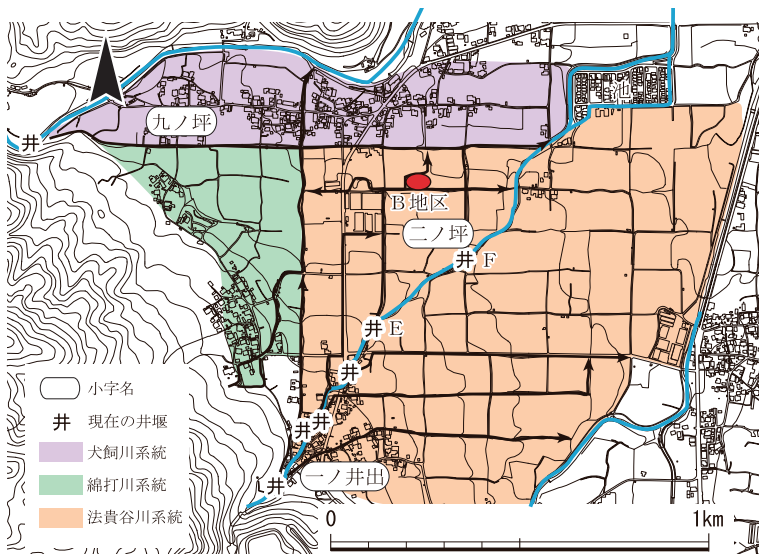
#### (1) 方形居館と水利

堀を持つ居館は武家の屋敷あるいは防衛施設など軍事的側面が強調される一方、背景に開発領主による水路整備など、より地域史に即した論点も示されている。<sup>(注97)</sup>はじめ、文献史学から提起された後者の論点は、橋口定志が中世前期における居館堀の灌漑機能には否定的な見解を示している<sup>(注98)</sup>ほか、広瀬和雄も大阪府長原遺跡の居館の堀の堆積状況から流水状況は認めがたく、灌漑機能は有していなかったと説く<sup>(注99)</sup>。他方、各地の調査事例の蓄積に伴って堀の中に井堰が構築された事例も明らかとなってきた<sup>(注100)</sup>。そのような状況下で、佐野静代は研究史を総括して、居館の堀と用水の関係

- A. 水堀＝溜池。貯水あるいは滞留させた堀水が直接水田に供給される場合。
- B. 水堀＝用水路。居館よりも下流の水田への灌漑用水が流れていた場合。

の二類型に整理した。そして、これまで発掘調査で検出された遺構及びその下流域の灌漑のみに論点がおかれてきたことを批判し、地域の用水システム全体の中で位置づける必要性を論じた。<sup>(注101)</sup>佐野の指摘のとおり、用水と堀の関係については、一義的に考えるのではなく、個別の遺跡とその周辺を整理して、その地理的・歴史的條件を踏まえた上で、各地域の個別の開発史的観点から位置づける必要がある。

犬飼遺跡で検出された3本の堀には、外部から水を引き込む水路が検出され、出口付近では一定量の水を滞水させるための施設が検出されるなど、堀に水利施設としての役割が付与されていた。堀S D01が滞水状態あるいはわずかな水流があった状態であったということは、堆積物中の珪藻化石群集の分析結果からも裏付けられている。さらに、堀S D02・03は現在の水路が位置を踏襲しており、居館としての機能を失った後も、堀を踏襲する水路は地域内の水利システムの中に組み込まれた存在であった。位置と環境の項で既述したが、法貴谷川扇状地先端部という立地上、湧水地や雨水集積による水の確保は想定しがたい。埋没谷や埋没流路から取水したという可

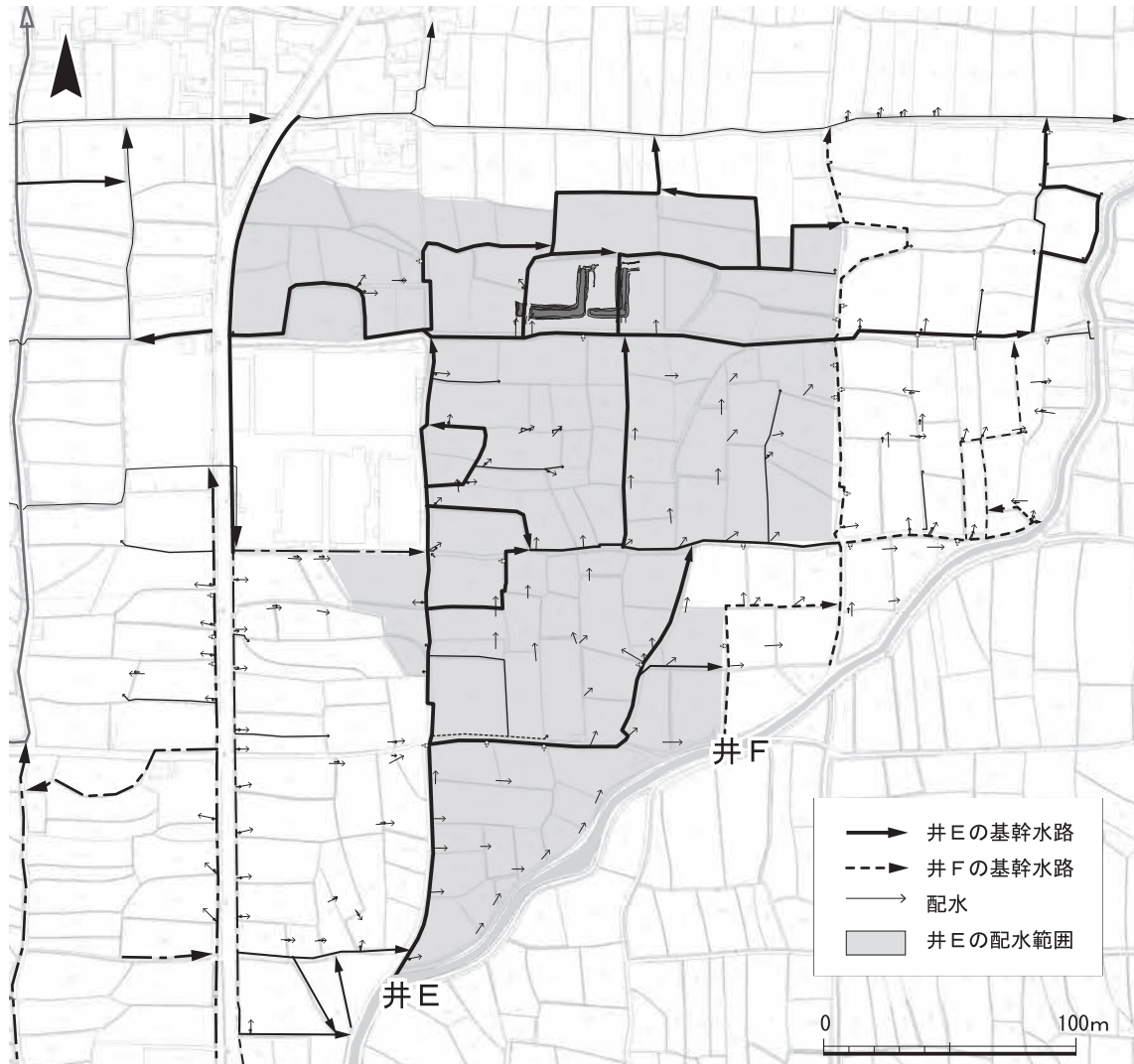


第129図 調査地周辺の現在の水利系統(1/20,000)

能性も考えるが、地形判読や周辺の調査成果からは、周辺に中世の埋没谷の存在は想定しがたいことから、現在の用水路と堀は不可分の関係と考える。

そこで、当地域のほ場整備以前の水利状況の踏査を行い、堀までの水を供給する現在の水利慣行の整理を行うこととした。このような方法論は、中世史や景観史で取り入れられてきた手法で、1980年代以降、ほ場整備





第130図 法貴谷川扇状地の水利慣行(1/3,000)

事業の進展に伴って中世以来の景観の改変されるという危機感から、景観論・環境史として発展してきた。<sup>(注102)</sup> 地割りや水路の位置が中世以来近保持されてきた事例も多く報告されている。<sup>(注103)</sup>

## (2)法貴谷川流域の水利システム

水利調査の範囲としたのは、法貴谷川左岸域である。現在、法貴谷川左岸域では3つの取水系統を確認できる。現在の国道423号線よりも西側はおもに綿打川系統、今回の調査地の北限となる侵食崖よりも北側は犬飼川系統である。綿打川左岸は急斜面の棚田で、条里制地割は及んでいない(第129図)。急傾斜地の棚田化は近世以降とされ、これらも近世の開発による<sup>(注104)</sup>と考えられる。第3は法貴谷川から取水する系統で、現在左岸に配水するのは4か所の取水口である。最上流で確認できる取水口付近は現在でも「一の井手」地名が遺存し、少なくとも近世には、法貴谷川は現在のように長水路していたとみて大過なからう。法貴谷川系統のは場は棚田化しているが、明瞭な条里制地割が認められる。

この中で、犬飼遺跡の居館の堀を踏襲する水路に直接水を供給しているのは法貴谷川系統の水路であり、取水口から南北方向に流れる水路が確認できる(取水口E)。それがB地区のすぐ西で東折し、そのまま東西方向の水路となる。この東西方向の水路から堀 S D02・03が踏襲する現在

の水路に配水する。この水路の最上流部では、令和3年度に発掘調査が行われ、南北方向の水路が確認されており、出土遺物から13世紀中ごろの掘削と評価されている<sup>(注105)</sup>。令和2年度に調査が行われた犬飼遺跡I地区の調査では、現在の里道の直下から13世紀代と考えられる前身の道路状遺構が検出されている<sup>(注106)</sup>。

これまでの発掘調査の成果と今回実施した水利慣行の調査を総合すると、少なくとも法貴谷川系統に属する範囲については、現在認められる条里地割及び水路の原型は13世紀中頃には成立していたと考えられよう<sup>(注107)</sup>。これは、犬飼遺跡の居館の構築時期とも齟齬はない。

先述のように、方形居館の堀の用途に関しては、灌漑水路や溜池としての機能を認めるかどうか論点の一つとなってきた。犬飼遺跡の居館の位置する侵食崖下の水田には、現在は犬飼川の谷口を源とする東西基幹水路により灌漑されていることから、扇状地上とは別の水利系統による。今回の居館の堀は、灌漑システムの最下流部であり、灌漑システムと有機的な関係を持ちつつも下流への灌漑・配水を意図したものととは考え難い。むしろ、農業排水を利用し、堀を滞水させることで、防御性を意識したものであった<sup>(注108)</sup>と考える。

### (3) 犬飼遺跡と曾我部地域の開発

以上のように、13世紀中葉～後葉に法貴谷川扇状地上の開発と水路の整備が行われたと考えた。それは居館の構築と表裏一体で進んだことは明らかであろう。

なお、堀SD01の花粉分析の結果、SD01の集水域で水田稲作が行われていた可能性が指摘されており、その他ソバやメロンの仲間、キュウリなどが栽培されていた可能性も高いという。また、マツ属複維管束亜属とコナラ属コナラ亜属が多く産出していることから、周辺は開けた明るい場所が多く、そこにニヨウマツ類やコナラなどからなる二次林が発達していたという所見も得られている。このような二次林化は、耕作地の拡大や村落人口の増大などによって、耕作地への緑肥や家畜の飼料採集を目的とした採草、日常及び商品としての薪や、炭焼きのための樹木の採取や伐採といった森林バイオマス資源が収奪傾向にあった状況を示している。

文献史学の成果から、条里制の施工時期に関しては、古代と中世前期の2時期に開発が進んだとされており、後者は荘園制的領域支配との関連が説かれている<sup>(注109)</sup>。その説を補強するように、13世紀代における荘園領主の経営強化と、それに伴う集村化及び基幹水路網の再整備も行われた事例が多い<sup>(注110)</sup>。13世紀代に曾我部町法貴に召次保が存在した経緯は、第2章で述べたとおりであるが、13世紀代は曾我部町、特に法貴谷川西岸における開発の画期的な時期であると評価できる<sup>(注111)</sup>。

法貴谷川では、12世紀代に谷口近くの土地利用が認められるのが、今回の調査地周辺では奈良時代の掘立柱建物群が廃絶したのち、土地利用が再開されるのはE地区で検出された柵列の登場を待たなければならない。当地域の中世における開発は、12世紀代に比較的取水が容易な谷口付近に始まり、13世紀中頃に大規模化し、ほぼ、現在の景観の基礎となる水路や土地割が完成したとみて大過ない。そして、犬飼遺跡の居館も、この地域一帯の開発伴いに構築されたと評価しておきたい。

(桐井理揮)

#### 4)開析谷N R 50出土木材の実年代

##### (1)出土状況の整理

N R 50は、C地区で検出した最大幅15mの開析谷と考えられる遺構である。古墳時代前期後半に利用が始まり、古墳時代後期後半から飛鳥時代前半と推定しているⅢ層では、板材を集積した遺構である木材集積S X 444を検出した。

Ⅲ層で出土した木材に対して、年輪年代測定及び酸素同位体比年輪年代測定を行ったが、樹皮の除去された加工材は3～5世紀の年代を示し、土器型式とは年代の乖離が見込まれた。一方、S X 444を除去したのちに検出した広葉樹の自然木(IN03・IN04)に対して行った酸素同位体比年輪年代分析では、IN03が571年、IN04が569年の年代を示した。いずれも樹皮付の丸太材である。IN03は直径50cm近くある丸太材で、全形を検出したのはⅣ層掘削中であつたため、調査中は古墳時代中期の年代を想定していた。しかし、酸素同位体比年輪年代分析の結果を受け、出土状況図と検出写真の再検討を行ったところ、木材集積S X 444の取り上げをすべて完了したのち、Ⅲ層の下層の掘削中にはすでにIN03・IN04とも上部を検出していたことが判明した。一方、S X 444の検出時にはIN03の存在は明らかではなかつた。したがって、IN03・IN04はⅢ層最下層に開析谷N R 50内に設置された、あるいは持ち込まれた丸太材と再解釈するに至つた。

第81図は現場で「Ⅲ層出土」あるいは「Ⅲ～Ⅳ層出土」として取り上げた土器を示している。杯蓋はヘラケズリ範囲が狭く、端部が丸く収められるものと、天井部と側面部の境に弱い沈線がめぐり、端部に面を持つものがある。また杯身は破片資料が多く、口径や器高から判断することが難しいが、立ち上がりが高く内傾して立ち上がっており、体部が浅いことから、T K 43型式にあたる。587・592・593は、口径が小さく立ち上がりも低く、T K 209型式以降であろう。596のような低脚杯はT K 43型式以降、飛鳥時代まで存在する。599・600の甕は口縁部の形態、文様からT K 43型式以降には継続しないものである。605は類例が甘樫丘東麓焼土層S X 037や川原寺寺域西南部下層S D 367から出土しており、飛鳥Iと考えられる。杯Gや口径の縮小した杯Hは不在であり、Ⅲ層出土土器はT K 43型式～飛鳥Iにあたる。

なお、「木器集中区(S X 444)周辺出土」と確実にわかるものは第131図のとおりである。その中でも、593は木材集積S X 444の下層から出土したもので、Ⅲ層でも下層、すなわち952・953と近い時期の遺物と考えられる。これらの遺物は、木材952・953との層位的関係から、上限年代は571年であることが明らかとなった。

##### (2) T K 43型式の実年代をめぐる議論

次に、T K 43型式の実年代をめぐるこれまでの議論について簡単に整理しておこう。

古墳から出土した須恵器を編年し、実年代の対応について体系的な整理がなされた『世界考古学体系』3古墳時代では、海北塚式(≡ T K 43型式)の継続年代の1点が6世紀末以前にあると想定した。これは飛鳥寺創建期の基壇下から出土した須恵器を海北塚式に比定し、飛鳥寺の創建が始まる587年以前と考えることによって導き出されたものであつた。田辺昭三も、『須恵器大成』のなかで、飛鳥寺下層資料をT K 43型式に相当する特徴を持つとし、飛鳥寺の建立が始まっ

た587年の直前かあるいはその少し前の年代とみている。中村浩も同様にⅡ型式第4段階の年代の基準として、やはり飛鳥寺下層資料を挙げている。<sup>(注118)</sup>

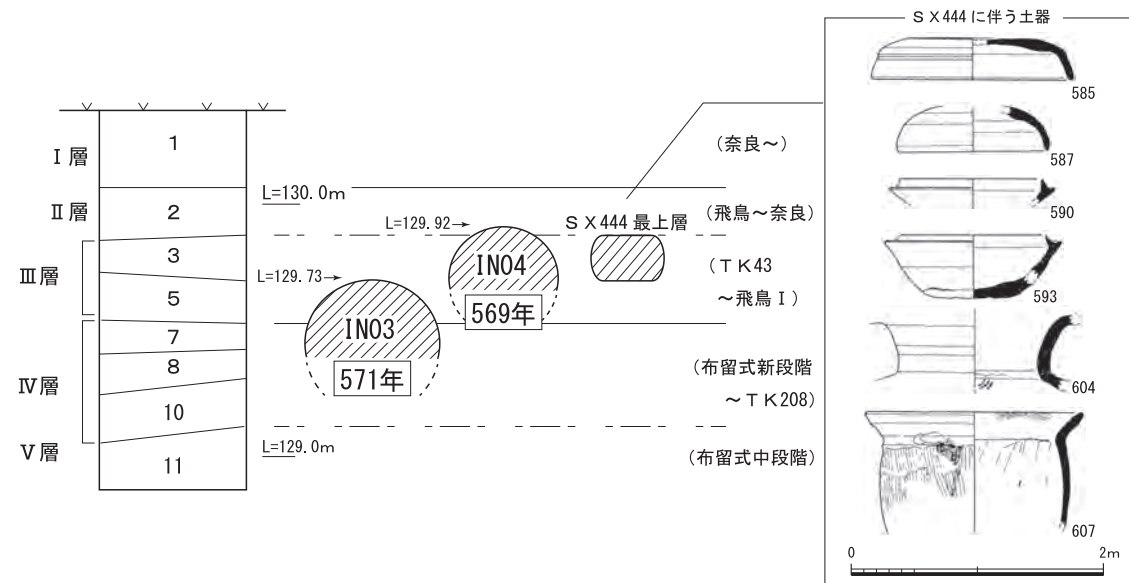
一方、白石太一郎は飛鳥寺下層の資料は数も少なく、あまり良好な資料とは言い難いとし、藤ノ木古墳から出土した須恵器をTK43型式に比定し、その被葬者の推定から実年代を示した。<sup>(注119)</sup> 藤ノ木古墳では二人の壮年男性が同じ割抜式の家形石棺に同時合葬されており、副葬品も卓越した内容を持つ。そして、二人の有力な皇子がほぼ同時に没する出来事として587年の穴穂部皇子と宅部皇子の暗殺を想定し、被葬者を両者に比定する。そのうえで、TK43型式の実年代を六世紀の第4四半期とした。

また、畑中英二氏は、高蔵寺43号窯跡の出土資料に蹄足円形硯と圈足円形硯が存在することに着目し、中国大陸の陶硯との比較から高蔵寺43号窯跡の陶硯について7世紀第1四半期を遡らない年代に比定した。<sup>(注120)</sup> 以上のように、TK43型式の実年代については大きく分けて3つの年代観が指摘できるが、いずれの年代観にもそれぞれ課題が残る。

1つめは飛鳥寺下層資料を評価し、587年以前に実年代の定点を求める説である。しかし、報告書に図示されたものの他にも須恵器が一定数出土しており、TK43型式に比定される須恵器の出土層位や相伴土器の情報は不明である。報告書作成時に、飛鳥寺創建以前に出現していた須恵器の中でも、最も新しい型式を提示するために抽出された可能性も指摘される。<sup>(注121)</sup>

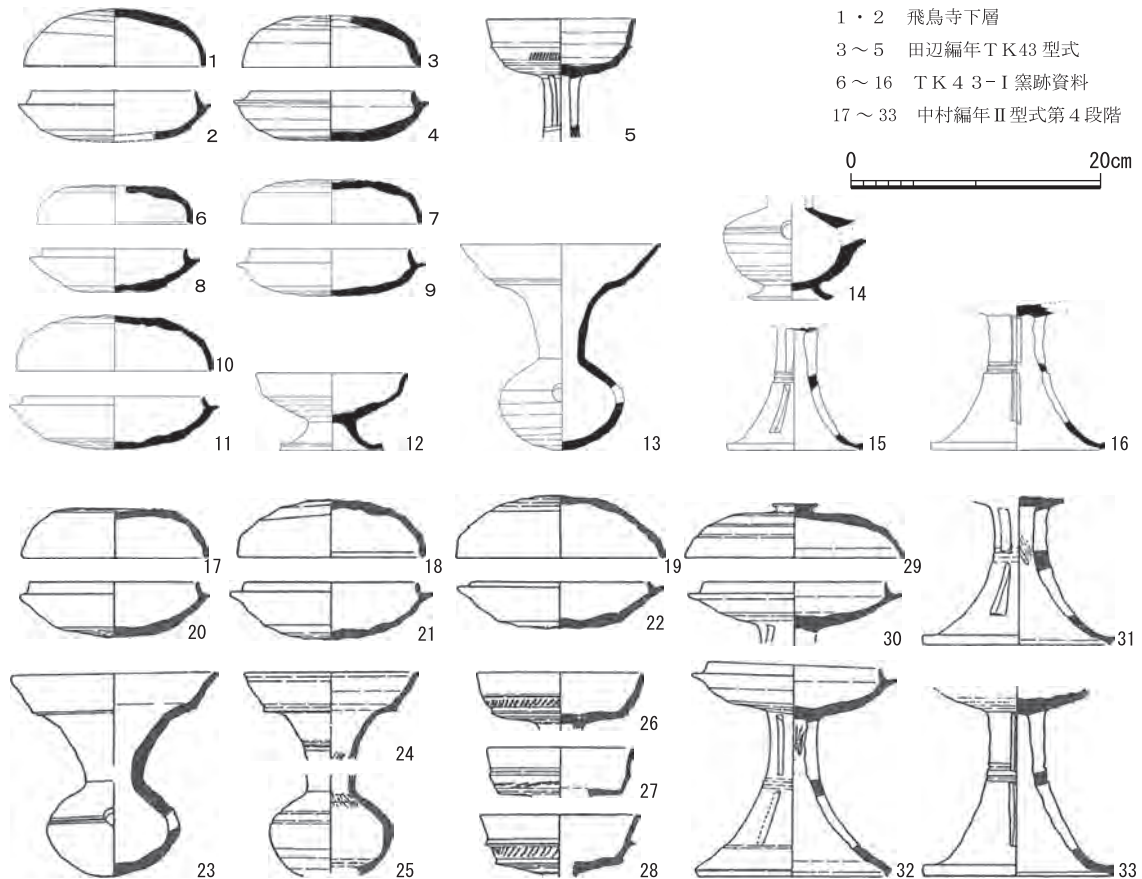
2つめは藤ノ木古墳出土の須恵器を根拠とし、587年以降に実年代の定点を求める説である。これには、藤ノ木古墳出土の須恵器がTK43型式よりも一段階古いものであり、横穴式石室や装飾付大刀の編年から、藤ノ木古墳の造営年代を6世紀末に比定することは困難であるとして、被葬者論による実年代の推定への批判がある。<sup>(注122)</sup>

3つめは、高蔵寺43号窯跡から出土した陶硯の年代と相伴した須恵器からTK43型式が7世紀第1四半期を遡らないとするものである。高蔵寺43号窯跡の調査報告者は「円面硯は本窯の時期



第131図 開析谷N R 50断面模式図





第132図 TK43型式資料の一例(1/6)

とは合わず、新しい時期のものであり、時期としてはかなりの差がある為、本窯で焼かれたものとは考えられない」とする。<sup>(注123)</sup>同様の陶硯が出土した他の窯からの混入も考えられず、窯体内周辺での表採資料として、今後の参考資料のために報告するとしており、陶硯と須恵器の共伴関係についての評価は分かれる。蹄足円形硯の生産の下限が奈良時代前半とされ、7世紀前半まで遡ることに対する評価は、現状では定まっていない。

### (3) 犬飼遺跡出土資料の評価

上述のとおり、TK43型式の実年代観については諸説あり、いずれの年代観も検討の余地が残る。犬飼遺跡出土資料は、杯蓋の形態からTK43型式を中心とする開析谷への流れ込みによる資料であり、層位的には571年頃に伐採された丸太材よりも後に堆積したものである。蓋杯の中にはTK10型式新段階の特徴を持つものもあるが、蓋の沈線や端部の面はTK43型式にも存在し、<sup>(注124)</sup>出土土器の中で古相に属すると考えられる。あるいは、TK10型式新段階からTK43型式の移行期の土器の可能性も考えられる。丸太材の設置とTK43型式を中心とする土器の堆積までどの程度の時間差があったかは明確ではないが、一つの可能性としてTK43型式の上限年代を571年頃とすることはできよう。さらに、木材の設置と土器の堆積に、それほど大きな時間差を見積もる必要がないと考えるとすれば、TK43型式が使用された時期として6世紀第4四半期を想定できる。いずれにせよ、実年代の判明する資料との共伴事例が多くない当該期において一つのデータを提示することができたといえよう。

(名村威彦・桐井理揮)



## 8. 総括

今回の調査では、弥生時代～近世まで、各時期の遺構・遺物が出土した。以下では各時期の様相をまとめ、本書の総括としたい。

**弥生時代** 今回の調査では弥生時代中期後葉～後期のものとみられる有孔磨製石鏃が1点出土した。これまで曾我部町内では弥生時代以前の遺構は未検出であるが、今後遺構の検出が期待される。

**古墳時代** 犬飼遺跡で人間活動の痕跡が明瞭に認められるようになるのは、古墳時代前期後半である。開析谷N R50では、前期後半から中期前半の護岸遺構が検出され、土器や木製品が出土している。また、同時期に属する竪穴建物も4棟確認した。曾我部町内では、近年の発掘調査の成果で、犬飼遺跡の他の調査区や隣接する金生寺遺跡では、大規模な井堰や水路が存在したことが次第に明らかになってきた。弥生時代には利用することが難しかった段丘上の開析谷や流路を利用することにより、地域全体として開発が進展した時期といえるだろう。

一連の遺構は、中期前半でいったん断絶し、中期後半の遺構は検出できていない。後期になるとB地区の下層で、再び散発的ながら遺構・遺物が認められるようになる。後期後半には、開析谷N R50を中心に多くの遺物が出土するようになり、飛鳥時代へと継続する。

**飛鳥時代** 飛鳥時代に属する遺構は、開析谷N R50及びD地区でわずかに検出されている。

開析谷N R50の内部では、木材を集積した遺構であるS X444が検出された。木材に接するようにTK43型式期とみられる須恵器が出土しており、同じ層内の木材の酸素同位体比年輪年代測定を行った結果、AD571年という結果を得ていることから、実年代の一点を知ることができる。TK43型式期の須恵器の実年代をめぐる議論については、前章で詳細に整理したとおりであり、今回その議論に一石を投ずることになった。今後の研究の進展に期待したい。

付表22で示したように、S X444の木材は、厚さが3～5cm、幅15～16cmと18～19cm台と、緩やかなまとまりが認められる一群である。奈良時代の例ではあるが、流通する木材の規格は樽(注125)が幅6寸(約18cm)、厚さ4寸(約12cm)であるという。今回出土した板材は、樽や歩板そのものではなく、加工途中のものや木材の最外面に近いような、いわば破材、廢材が中心とみられる。しかしN R50Ⅲ層からは、節を取り去った加工材や、木材加工の際に出る削りかすが多く出土しており、木材加工層の存在から、N R50のさらに上流の近い位置に、大規模な木材加工に関わる施設があったことは確実といえよう。亀岡盆地内には、奈良時代の山国柚が想定され、古代には近畿地方中枢部に木材を搬出する地域であった(注126)。これまで奈良時代の木材加工場や柚の比定地としては、丹波山地奥地の天若遺跡が想定されてきた。奈良時代以前の木材資源が豊富な時期には、当地域のようなより下流の里に近い場所での木材資源の調達も視野に入れる必要があるだろう。今回検出した一連の遺構は、その解明の糸口となる。

また、神頭や刀形など祭祀関連遺物も出土していることから、今回の調査区の周辺は祭祀空間としても利用されたと考えられる。古墳時代後期から飛鳥時代には、日本書紀安閑条に記される「蘇斯岐屯倉」が犬飼遺跡周辺に存在が想定されており、手工業生産に係る遺構群の存在はあな

付表22 S X444木材一覧

報告番号	法量 (cm)			木取り	備考	樹種
	幅	厚さ	残存長			
762	19.1	3.0	214.2	追柵目		
763	19.6	10.0	200.4	追柵目	分割途中	ヒノキ
764	10.0	2.0	72.5	板目		
766	16.8	2.6	65.8	板目	樹皮直下か	ヒノキ
769	16.0	4.7	135.0	板目	欠込あり	ヒノキ
770	16.2	3.2	120.8	板目		ヒノキ
772	12.2	3.4	92.0	板目	欠込あり	ヒノキ
773	19.7	5.5	96.5	板目	柄あり	ヒノキ
778	14.8	3.0	76.5	板目		
-	18.2	4.2	107.5	板目		

がち無関係ではなかろう。今回の調査では、遺構の検出は断片的なものにとどまったが、今後の検出に期待したい。

**古代** 開析谷N R50は、飛鳥時代後半から奈良時代にかけて埋没し、耕作地化したと考えられる。奈良時代の遺構としては、B・D地区で検出した掘立柱建物群を上げることができる。規模は突出したものではないが、側柱建物3棟を総柱建物2棟から居住単位が構成されており、一般集落の一単位を示す好例と考えられる。

**中世** 奈良時代以降、中世の居館関連遺構が出現するまで、今回の調査区では顕著な遺構は認められない。

犬飼遺跡の居館は、13世紀後半～14世紀初頭までの短期間に使用されたもので、居館の個別の要素の位置付けは前章で詳細に行ったとおりである。歴史的環境の項で整理したように、南北朝時代前夜の当地域は緊張状態にあった。巨大な水堀やイバラの植栽で居館を囲堯し、防御性を高めていることもその反映と考えられる。近年の研究によると、在地領主と武士は不可分の存在であり、武士の活動の一側面として在地領主的性格を想定されている。<sup>(注127)</sup> 犬飼遺跡の構築主体は、一定程度武装した集団であったことは想像に難くないが、もう一方の側面として、周辺の耕地や水利との有機的な関係を有していることも強調しておきたい。

なお、この居館の構造的な特質として、居館の全域の調査を行ったにもかかわらず、井戸が不在であることが挙げられる。出土遺物の検討からは、調理器の比率が極めて低く、供膳器の比率が極めて高いこと、輸入陶磁器の中に一般集落では出土しない優品が含まれていることを示したが、遺構の検出状況も含めると、居住空間として常時機能していたのではなく、公的施設であった可能性も考慮に入れる必要がある。そのように考えた場合、先に示した「備中国新見荘政所屋敷指図」と居館の構造が類似していることは極めて示唆的である。犬飼遺跡には倉庫とみられる遺構がなく、積極的に荘官政所屋敷と評価することはやや躊躇するが、一つの候補として提示しておきたい。<sup>(注128)</sup>

出土遺物から、14世紀前葉の段階で居館は機能を終えたと考えられる。南北朝期を前後する時期が想定できる。居館廃絶後、堀は15世紀代まで維持管理が行われたが、その後、堀S D01及び

堀 S D03の南北方向の部分は埋め戻され、耕地化した。堀 S D02と堀 S D03の南北方向の部分は基幹水路として踏襲された。

**近世** 近世の遺構として検出したのは、居館の片付け及び耕地化に伴う遺構のみだが、今回の調査成果からは、現景観で確認される棚田の石垣の構築時期が江戸時代以降であるという一つの年代的指標が示されたことは重要である。

水野章二は、傾斜地における棚田的な水田開発は、比較的導水が容易な谷口付近を除くと、中世後期に展開の画期があり、棚田が一面に広がるような現景観の成立は近世以降であるという状況を景観歴史学の立場から示している<sup>(注129)</sup>。また、和歌山県では11世紀後半から15世紀前半まで、緩斜面において跋行的に棚田開発が進行したことが示されている<sup>(注130)</sup>。

当地域においても、ほ場整備前は緩斜面に棚田が広がる景観であったが、その形成過程は明らかではなかった。扇状地上を流下する法貴川の現流路は、築堤部分の中を流下する人為的に固定された人工河川である。このような流路固定は、地形的に平坦な氾濫原に比べ、急傾斜をなす扇状地部分の水田開発や棚田化なども関連すると推測される。このような大規模な地形の改変を伴う棚田の造成は近世以降である蓋然性が高く、今回検出した石組に伴うような棚田の出現に付随する可能性も考えられる。いずれにせよ、中世後期には、ほぼ現在の景観につながる景観が形成されていたという成果を得ることができた。 (桐井理揮)

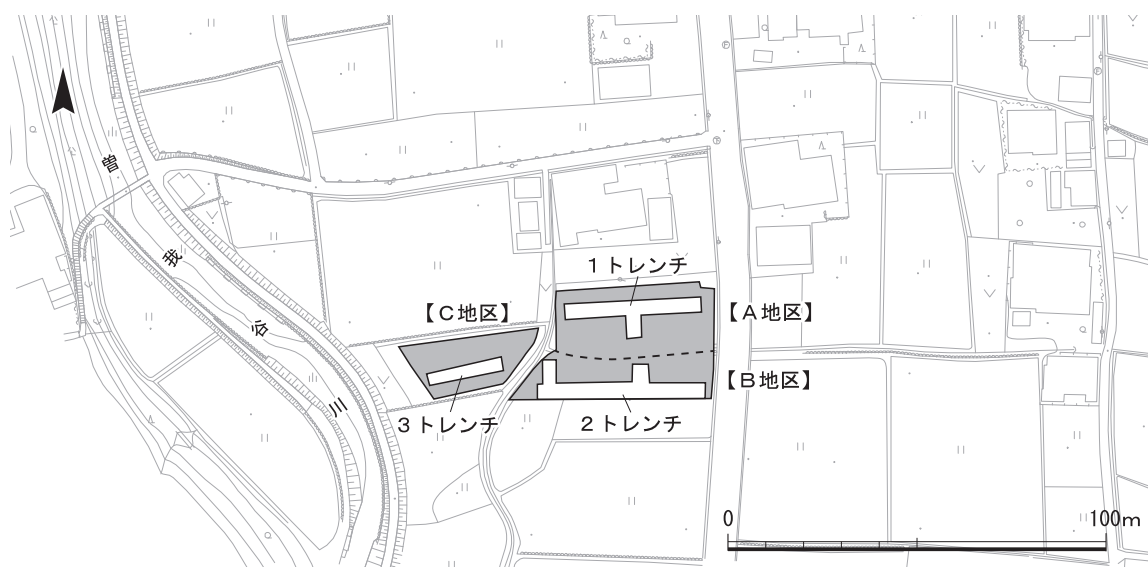
## (2)春日部遺跡第2次

### 1. はじめに

春日部遺跡は、亀岡市曾我部町字春日部・中であって、曾我谷川の形成した扇状地性低位段丘に位置する。<sup>(注131)</sup>南北1400m、東西600mに広がるが、今回の調査地は春日部遺跡の西寄り、標高は140mを測る。春日部遺跡の調査は、亀岡市教育委員会が第1次調査として、平成22～23年度に広範囲の試掘調査を実施した。<sup>(注132)</sup>古墳時代から鎌倉時代の遺構・遺物が報告されている。今回の調査においても、古墳時代と平安時代の遺構・遺物を検出することができた。

### 2. 調査経過

調査はまず小規模調査として、調査範囲に1～3の3つのトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認することから始めた(第133図)。耕作土を重機掘削により除去し、人力による掘削・精査を進めた結果、3か所すべてのトレンチから遺構・遺物を確認した。そうした結果を受けて、3つのトレンチをA～C地区として包括し、本調査を実施した。A～C地区は互いに隣接する本来一続きのものであるが、周辺の地形が北から南にかけて緩やかに高くなり、A地区とB地区では、現在の水田面による段差で70～80cmの高低差があることや、今回検出した平安時代の溝(SD290)がちょうどA～Cの3地区を分断する格好となったため、便宜的にA～C地区とした(第135図)。精査の結果、A・Bトレンチでは古墳時代の竪穴建物・土坑、平安時代の溝・掘立柱建物・土坑、近世の土坑・ピットが、A・B地区と現在の水路により画されているC地区では平安時代の柵がそれぞれ検出された。すべての遺構の掘削を終えた段階で、空中写真撮影および図化作業を行ない、平成30年8月25日に現地説明会を開催した。



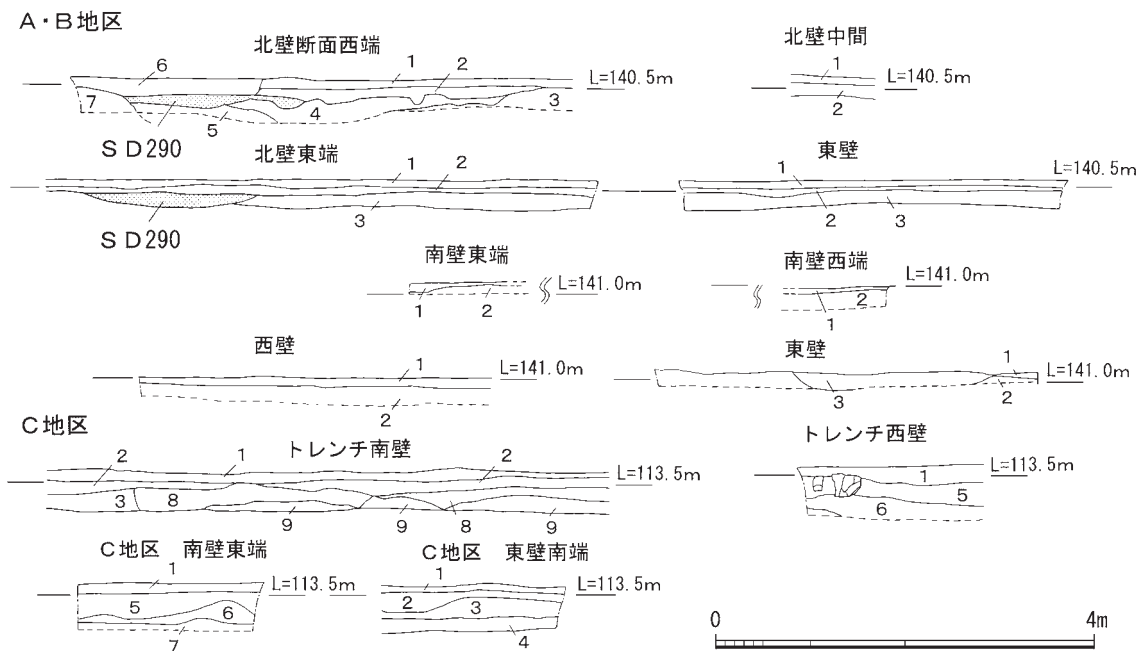
第133図 春日部遺跡調査地位置図(1/2,000)

### 3. 基本層序

今回検出した遺構面の現地表面からの深さは、後世の開発による削平がかなり進んでおり、A地区、B地区、C地区とも非常に浅い。第134図に示すように、いずれの地区の基本層位も、現在の田畑耕作土(第1層)の直下で、マンガンや鉄分粒を含む黄褐色極細砂(第2層)の遺物包含層が厚さ10~15cmでみられた。そしてその下層の第3層(灰黄褐色シルト・暗灰黄色極細砂)上面で、古墳時代、平安時代及び近世の遺構群が検出された。さらに遺構検出面より下層になると、A地区東側とC地区にみられるように、河川の氾濫による粗礫混じりの面(第5層)がひろがり、遺構の存在は極端に希薄となる。

### 4. 検出遺構

#### 1) A・B地区



#### A・B地区

1. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細粒砂
2. 黄褐色 (10YR5/6) 極細粒砂 (径1~2cmのマンガン粒塊多く含む)
3. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト (径2~3cmのマンガン粒 (植物の茎) 全体に含む) (灰色シルト塊全体に混在)

#### SD290

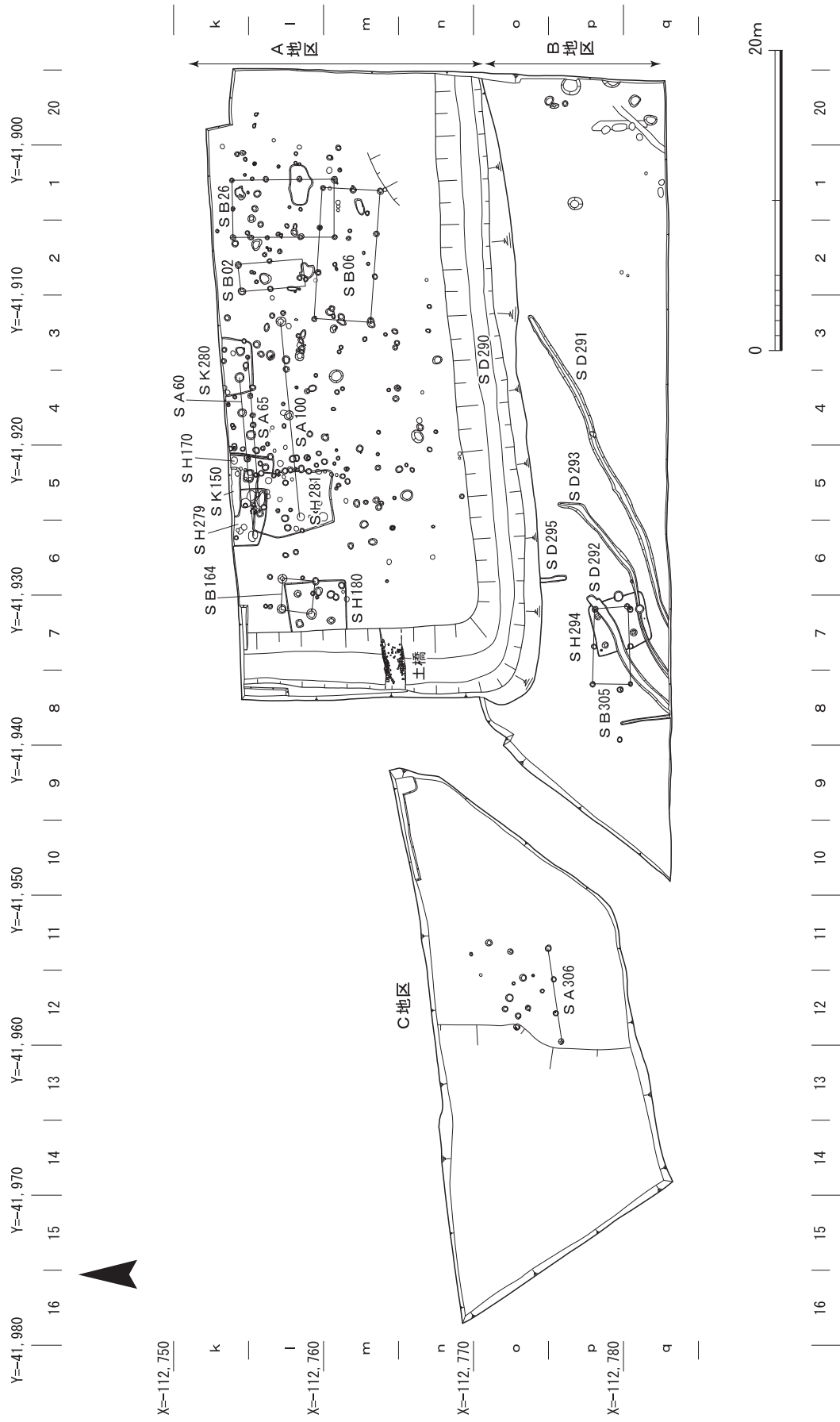
にぶい黄褐色 (10YR5/3) 極細砂

#### C地区

1. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト
2. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 極細砂
3. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極細砂
4. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト
5. 褐色 (10YR4/4) 細砂 (径10cm以上の礫含む)
6. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粒砂
7. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂
8. 灰黄褐色 (10YR6/2) 細砂
9. 褐灰色 (10YR 6/1) シルト (径10cm以上の礫多く含む)

第134図 土層断面





第135図 調査地配全体遺構配置図(1/400)

本地区から検出された遺構には、古墳時代中期～後期、平安時代後期、近世のものがある。古墳時代は5世紀前半から6世紀後半にかけての竪穴建物・竪穴遺構・土坑・溝、平安時代は10世紀後半から12世紀末の掘立柱建物・大形区画溝・土坑、近世は18世紀末の土坑・ピットなどがある。

#### (1)古墳時代(第136図)

竪穴建物4基(S H281・S H279・S H180・S H294)と竪穴遺構3基(S K150・S K280・S K170)である。いずれの遺構も後世の削平を受け、底面からの立ち上がりは浅い。出土土器からみたおよその時期は、切り合いをもつ竪穴建物および竪穴遺構のS H281・S H279・S K150・S K170は5世紀前半、竪穴建物S H294は5世紀末から6世紀前半、竪穴建物S H180は6世紀後半と考えられる。また、B地区の溝S D291・溝S D292・溝S D293は竪穴建物S B294を壊しているため、建物より新しい時期に掘られている。土坑(S K)、ピット(SP)にはS K129、S K261、S P190、S P191などがある(第136図)。遺構内から須恵器・土師器が出土しており、5世紀中葉から6世紀前半にかけてのものである。

**竪穴建物S H281(第137図)** 長辺5～5.4m、短辺3.4～3.8m、残存深さ0.15mを測る。北側がやや広がり、西辺に角度がつくが、ほぼ長方形を呈する。4基ある支柱穴の直径は30～40cm、深さ10～13cmである。また、北壁中央部にて検出したピットS P151から土師器高杯などが出土した。

**竪穴建物S H279(第137図)** 方形の竪穴建物である。北側が調査地外のため、かつ竪穴建物S K150に切られ全体規模は不明である。南辺4m、東西辺は1.7m分、残存深さ0.2mの検出にとどまる。床面から土師器・須恵器がまとまって出土している。支柱穴は未確定ながらピットS P158内や床面からの出土土器の多さから建物跡とした。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

**竪穴遺構S K150(第137図)** 方形竪穴遺構である。北側が調査地外のため、東西辺0.8m分、南辺3.4mで南端部のみの検出である。残存深さは約0.2mである。埋土はにぶい黄褐色シルトである。内側で柱穴が部分的に検出されたが、平安時代の土器片を伴っており、当該期の建物跡と判断できず竪穴遺構とした。

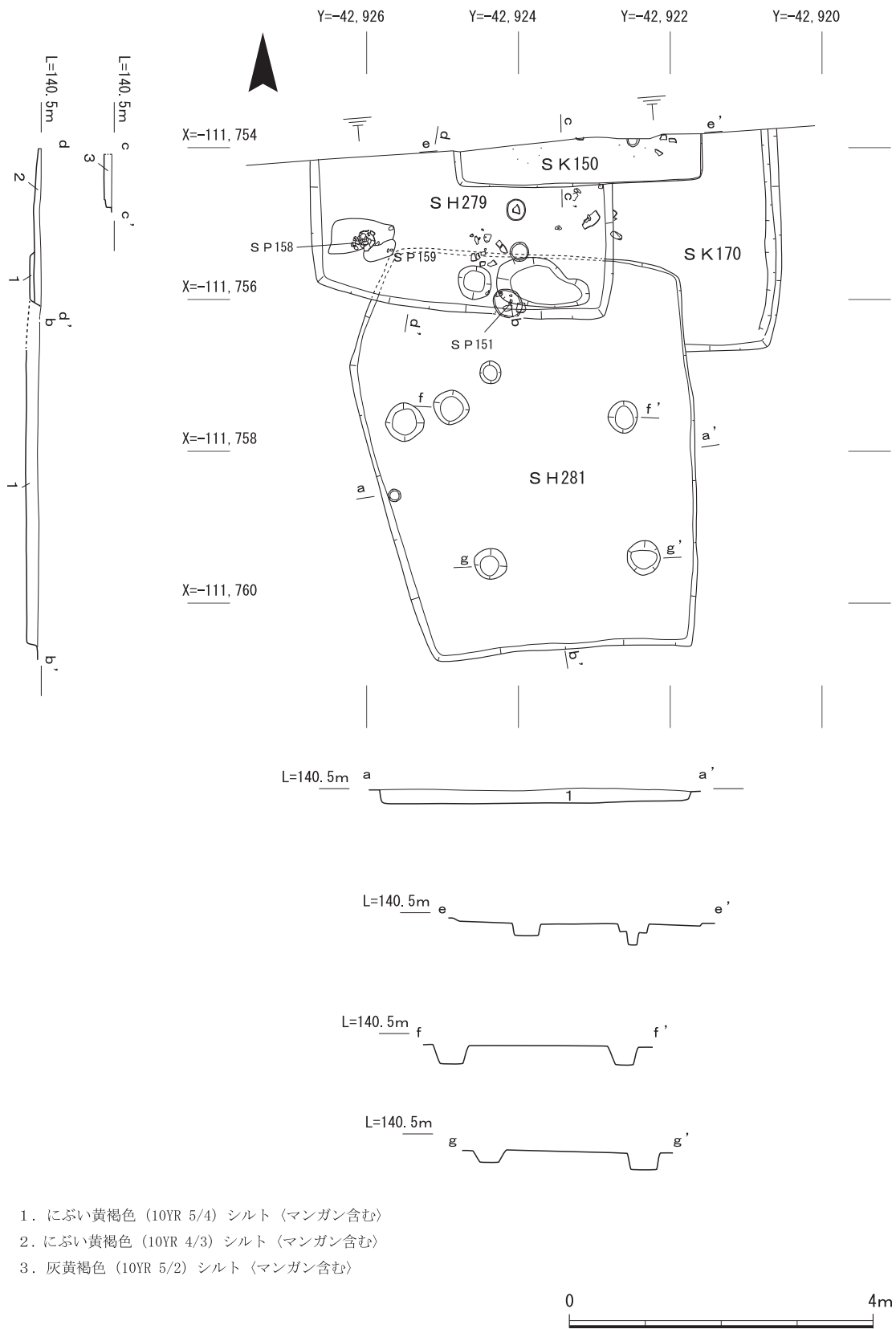
**竪穴遺構S K170(第137図)** 北側が調査地外のため、かつ竪穴建物S H281と同S H279により壊され、南東隅部の検出にとどまる。東西1m分、南北3m分、深さ0.15mで、方形とみられるが全体規模は不明である。埋土はにぶい黄褐色シルトである。東側の壁面に沿って幅約15cmの溝を確認した。内側にピットはあるが、支柱穴の抽出はできていない。須恵器・土師器が少量出土した(第154図12～14)。

**竪穴遺構S K280(第138図)** 南側の部分的な検出で東西3.3m、南北2m分、深さ0.3mを測る。埋め土はにぶい黄褐色シルトである。内側に柱穴状のものは複数あるが、支柱穴の抽出はできていない。出土遺物には、土師器と須恵器の破片が若干出土している(第154図15～17)。

**竪穴建物S H180(第138図)** 溝S D290により西側を壊されているが、南北辺3.2m分、東辺4m、深さ0.1mを測る方形竪穴建物である。支柱穴は4基で、直径42～50cm・深さ15～20cmを測



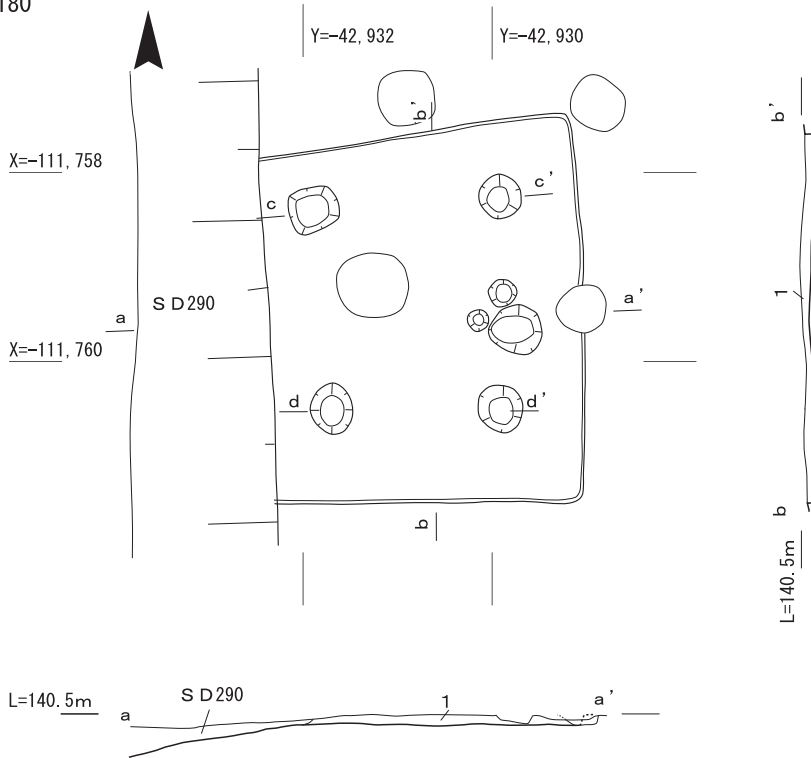
第136図 A地区下層遺構配置図(1/200)



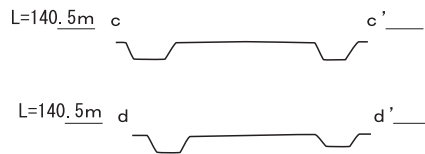
1. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) シルト 〈マンガン含む〉
2. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) シルト 〈マンガン含む〉
3. 灰黄褐色 (10YR 5/2) シルト 〈マンガン含む〉

第137図 竪穴建物 S H279・281、竪穴遺構 S K150・170平・断面図竪穴遺構

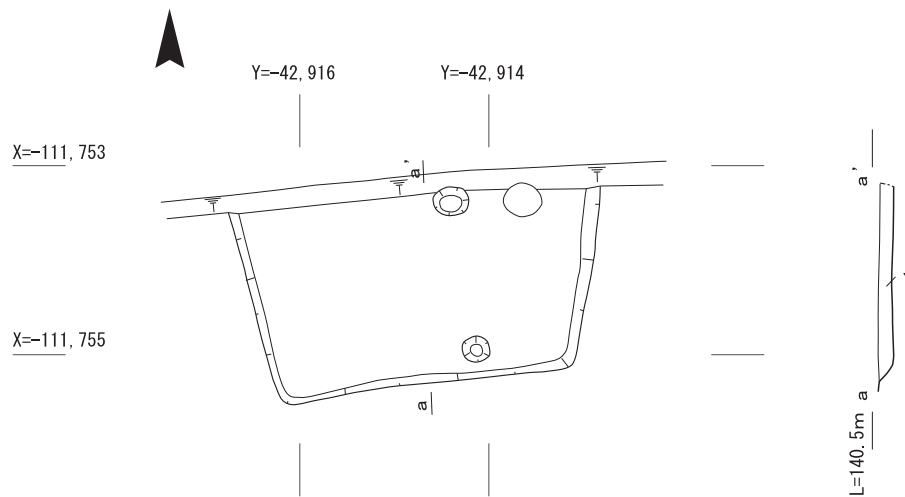
S H180



1. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) シルト



S K280

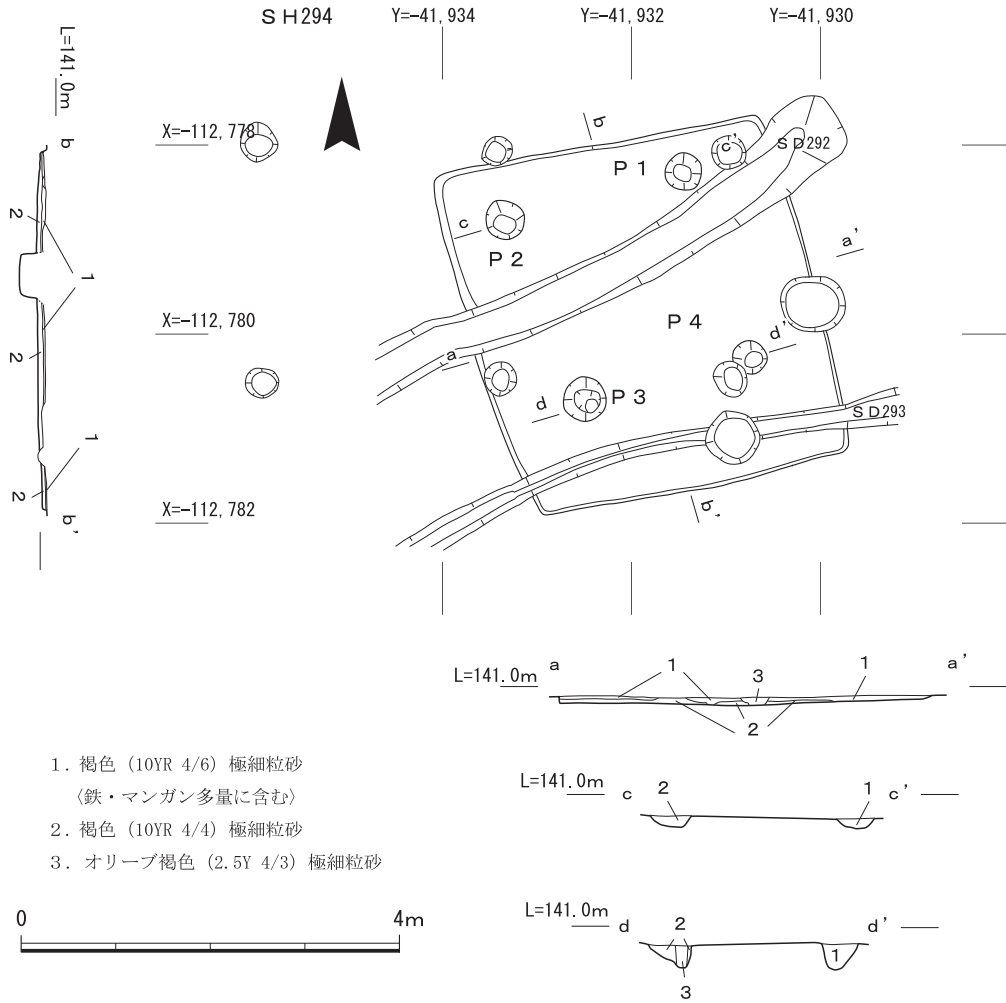


1. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) シルト

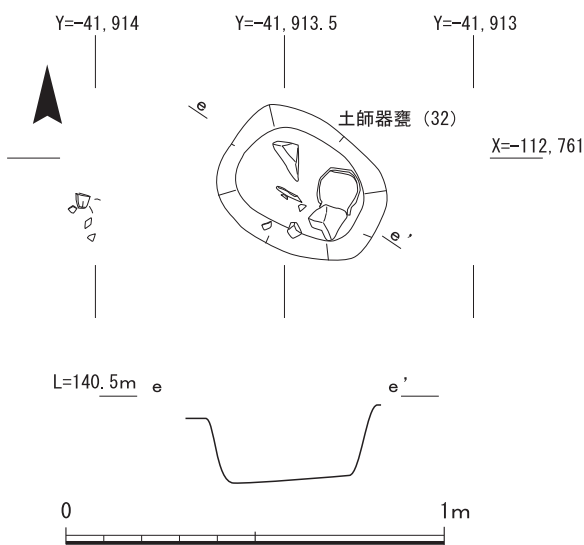


第138図 竪穴建物 S H180・竪穴遺構 S K280平・断面図





第139図 竪穴建物 S H294平・断面図



第140図 土坑 S K261平・断面図 1/40

る。削平のため火処(竈)跡は確認されなかった。出土遺物には6世紀後半の土師器杯と須恵器杯身がある(第154図18・19)。

**竪穴建物 S H294** (第139図) 一辺約3.4~3.8mを測る方形の竪穴建物である。残存の深さは約10cmで、埋土は褐色極細砂である。支柱穴は4基確認され、直径38~42cm、深さ18~24cm、埋土は褐色極細粒砂である。火処とみられる明確な痕跡はみられなかった。

**溝 S D291** 南西から北東に延びる素掘り溝で、長さ22.5m分、幅45~50cm、深さ20~25cmを測る。北東端で浅くなり消失している。古墳時代の須恵器高杯の脚部(第154図

26)が出土した。

**溝 S D 292** 南西から北東方向にのびる素掘り溝で、長さ9.5m分、幅50～60cm、深さ20～30cmを測る。竪穴建物 S H 294内を斜めに走り、壊している。溝内から須恵器杯身・壺・台付壺が出土した(第154図23～25)。

**溝 S D 293** 溝 S D 291と同じく南西から北東方向に伸びる素掘り溝で、北東端部は短く北に屈曲する。竪穴建物 S H 294を壊している。長さ14.5m分、幅38～45cm、深さ20～30cmを測る。出土土器には須恵器の口縁部とみられるものが1点出土した(第154図27)。

**土坑 S K 261** (第140図) 隅丸楕円形で長軸45cm、短軸35cm、深さ18cmである。6世紀とみられる平底の土師器壺(第154図32)が出土した。

**ピット S P 190** 直径25cm、深さ10cmを測る小ピットである。須恵器杯身(第154図29)と、土師器甕口縁部片(31)が出土した。

**ピット S P 191** 長軸30cm、短軸20cm、深さ13cmの楕円形である。6世紀前半の須恵器杯蓋(第154図28)が出土した。

**土坑 S K 129** 直径75cm、深さ30cmを測る。6世紀の須恵器杯身(第154図30)が出土した。

## (2)平安時代(第141図)

平安時代後期の10世紀から12世紀後半のものがある。区画溝 S D 290、掘立柱建物 S B 02・S B 06・S B 26・S B 164、柵列 S A 60・S A 65・S A 100、溝 S D 295、土坑 S K 01・03・04及びピット S P 15・126・303がある。

**溝 S D 290・土橋**(第142図) 溝 S D 290は、A地区の西辺と南辺にはほぼ直角に屈曲するように掘られた大規模区画溝である。西辺の南北の溝は、長さ19.4m以上、幅3.8～4.6m、深さ0.25～0.32mを測る。南辺の溝は、長さ41.4m以上、幅3.3～3.6m、深さ0.24～0.4mの規模である。いずれの溝断面形も緩やかなU字形である。埋土は黄褐色やオリーブ褐色の極細砂である。なお、溝の深さは浅いが、B地区の遺構検出面からみると、A地区の遺構検出面まではおよそ0.7～0.8mの高低差が認められる(第143図)。

南北溝の南寄りに、土橋が設けられていた。土橋の部分は溝掘削時の掘り残した箇所には設けられ、上面には拳大の石を敷き、両側面は補強のために拳大から人頭大の石を積んでいる(第144図)。

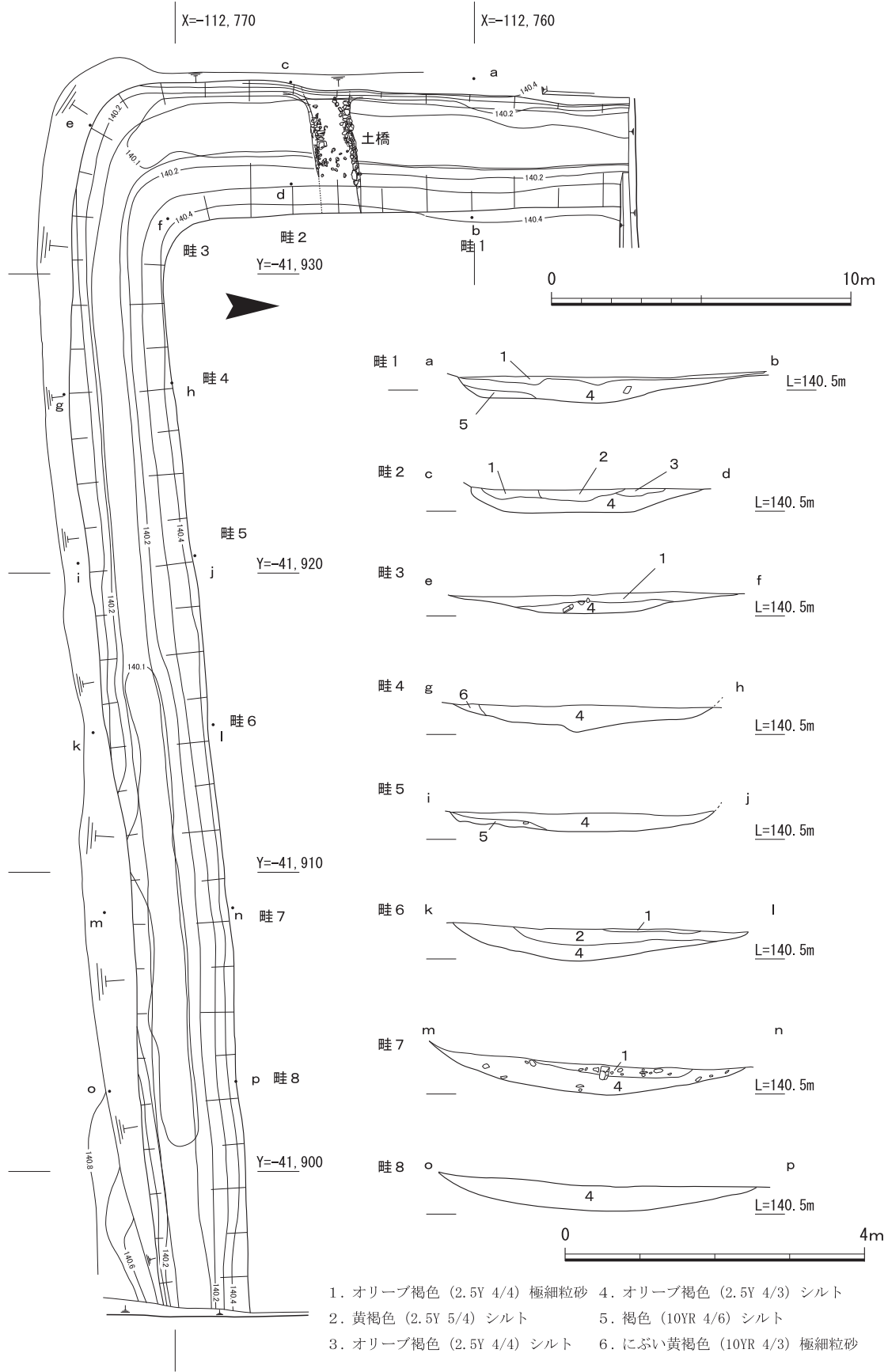
溝内からの出土遺物には平安時代の灰釉陶器片や、瓦器椀片などがある。量的には非常に少ない。黒色土器がなく、瓦器椀が存在すること、さらにそれ以降の時期を示す遺物には輸入青磁の皿(第155図41)がある。溝は灰釉陶器が示す10世紀から、瓦器椀及び青磁皿の形態が示す12世紀後半まで存続し、その後は土石流の影響などで溝は埋められ、消失したものと考えられる。

**掘立柱建物 S B 06**(第147図) 梁間4.2m、桁行9.2mの東西棟の建物跡である。基本2間×3間の建物であるが、西側の梁間中間の柱を欠く。柱間寸法は東側梁間1.8～2.0m、桁行2.8～3.0mである。柱穴の形状は円形で、直径18～25cmを測る。柱穴内の埋土は灰褐色シルトである。

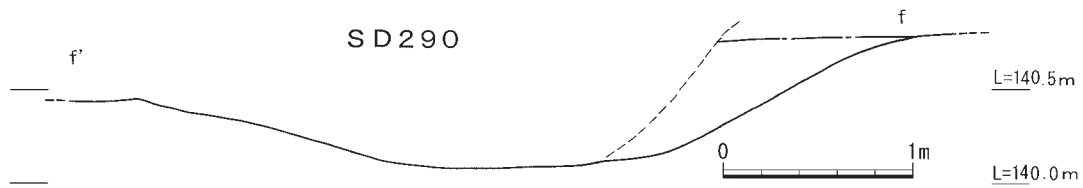
遺物はピット S P 12から土師器皿(第155図44・46)と黒色土器椀(同45)が、ピット S P 234 から土師器椀の底部片(47・48)が出土した。



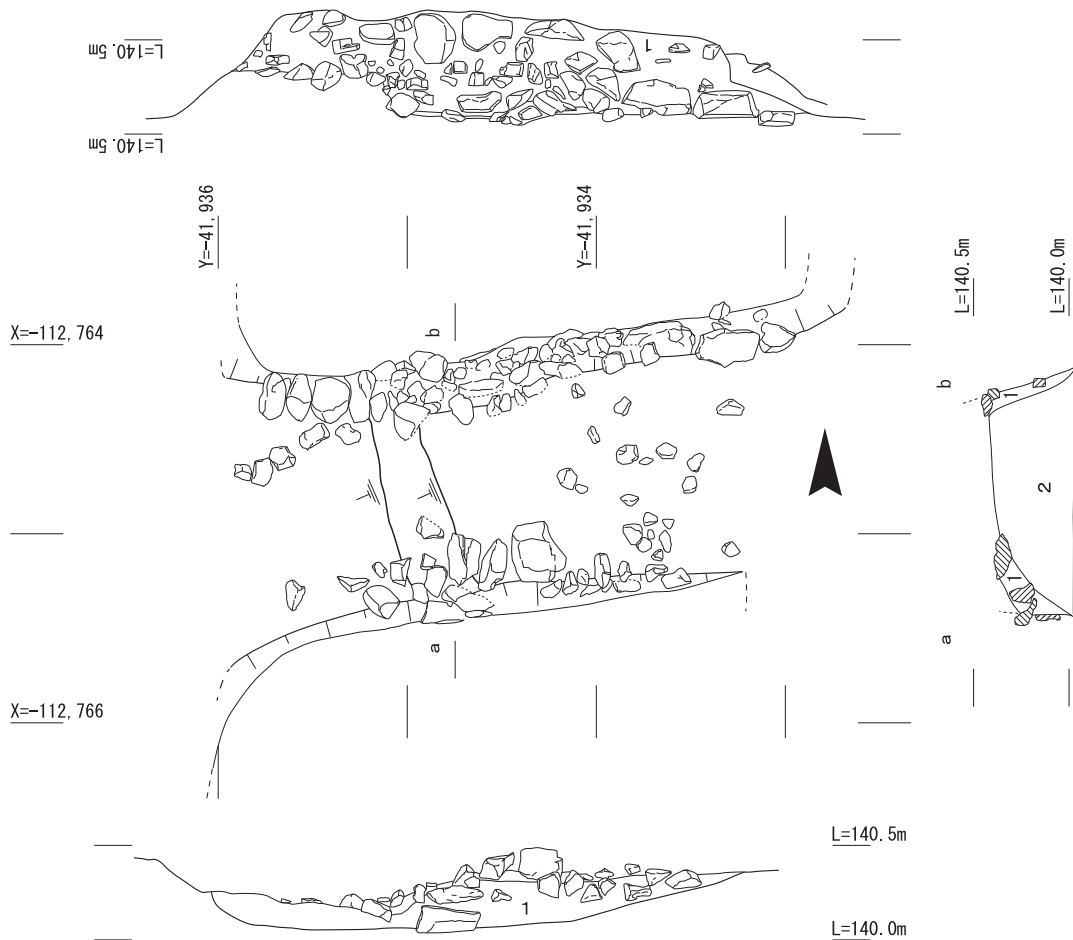
第141図 A地区上層遺構配置図(1/200)



第142図 溝 S D 290平・断面図(1/200・1/80)



第143図 溝 S D 290断面



1. にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 礫・細砂混じりシルト
2. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粗砂混じりシルト

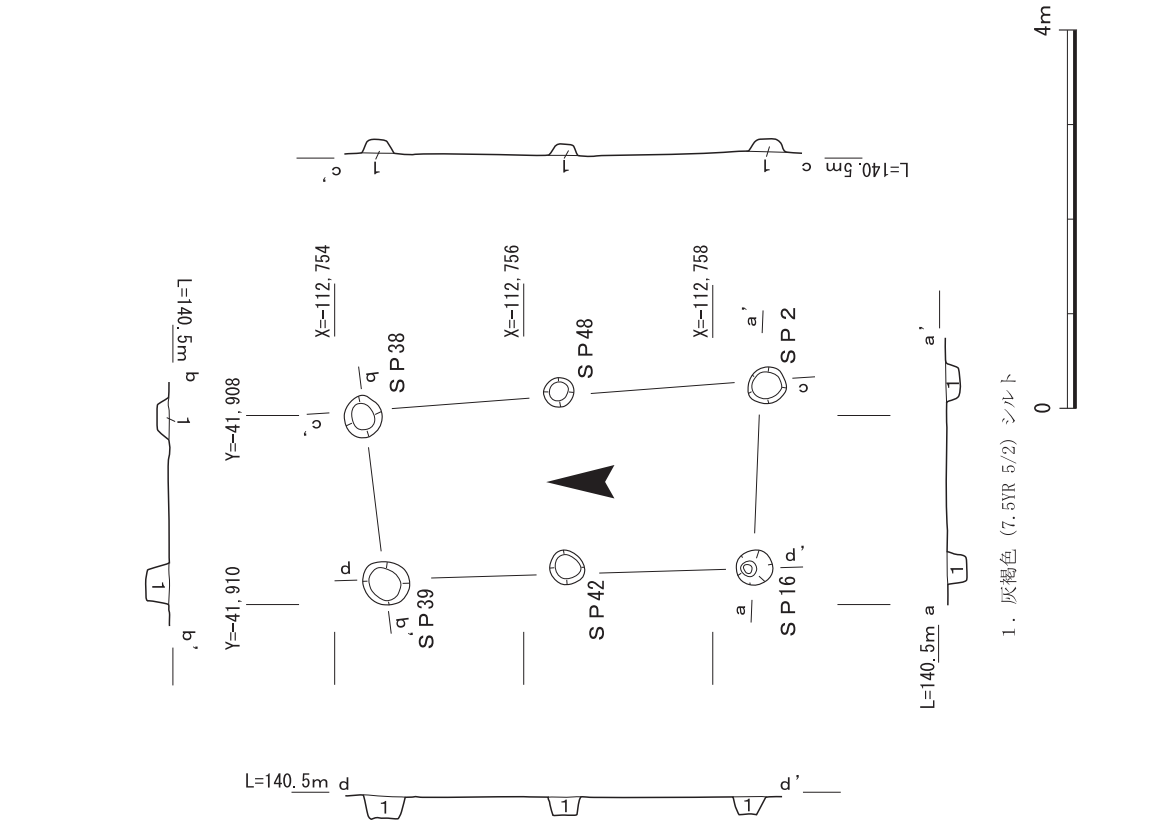
第144図 土橋平・断面図(1/40)

掘立柱建物 S B 26 (第145図) 梁間4.2m、桁行7.2mの南北棟の掘立柱建物である。基本2間×3間の規模であるが、梁間南側の中間柱を欠く。建物の柱間寸法は梁間北辺1.8m等間、桁行の柱間寸法は、東西とも2.2m等間である。柱穴掘形は円形で、直径38~42cmである。

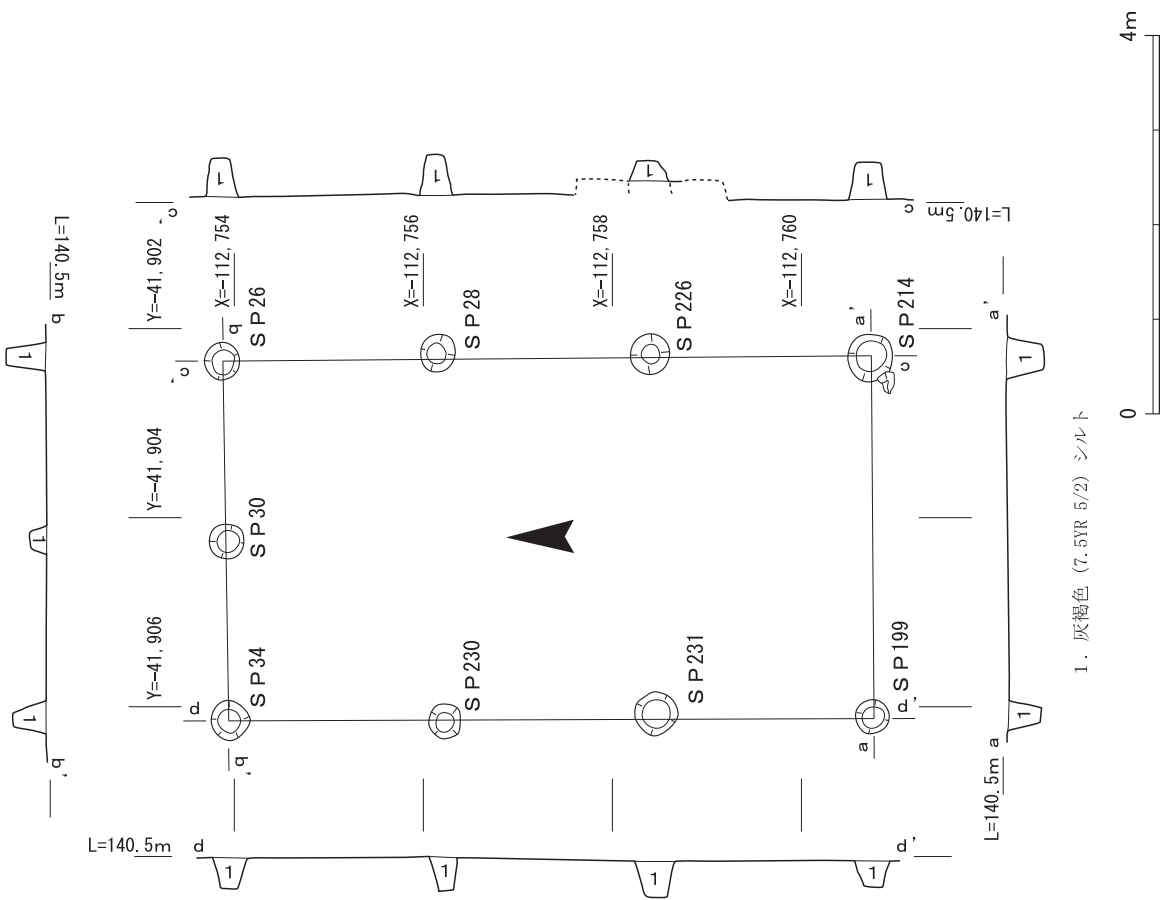
出土遺物はピット S P 30内から瓦器椀片(第155図50)が出土している。

掘立柱建物 S B 02 (第146図) 調査区北東寄りに位置する小規模建物である。南北棟で梁間1間(2.3m)、桁行2間(4.3~4.6m)の規模である。柱穴掘形は円形で直径30~43cmを測る。柱間寸法は、2.0~2.2mを測る。

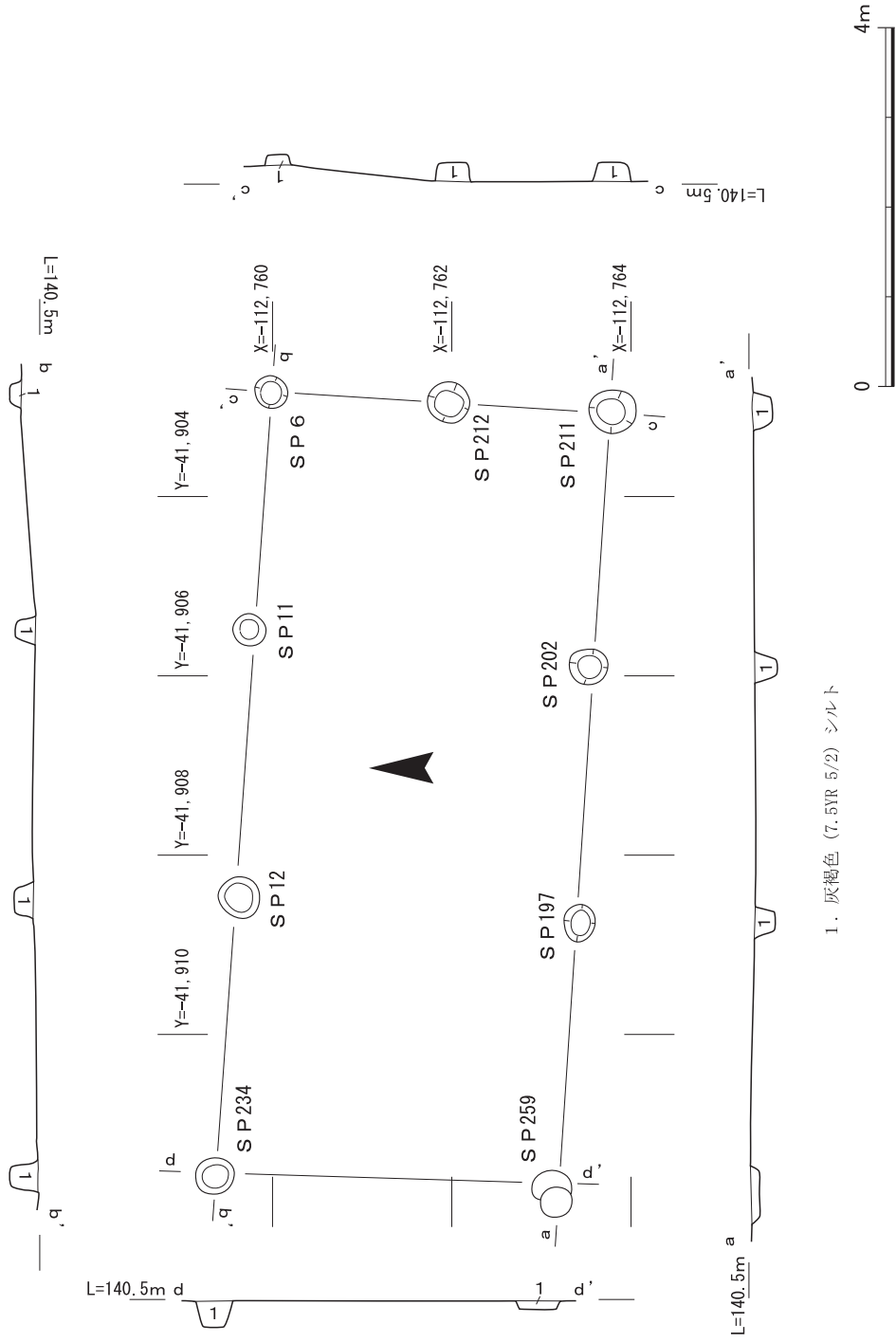




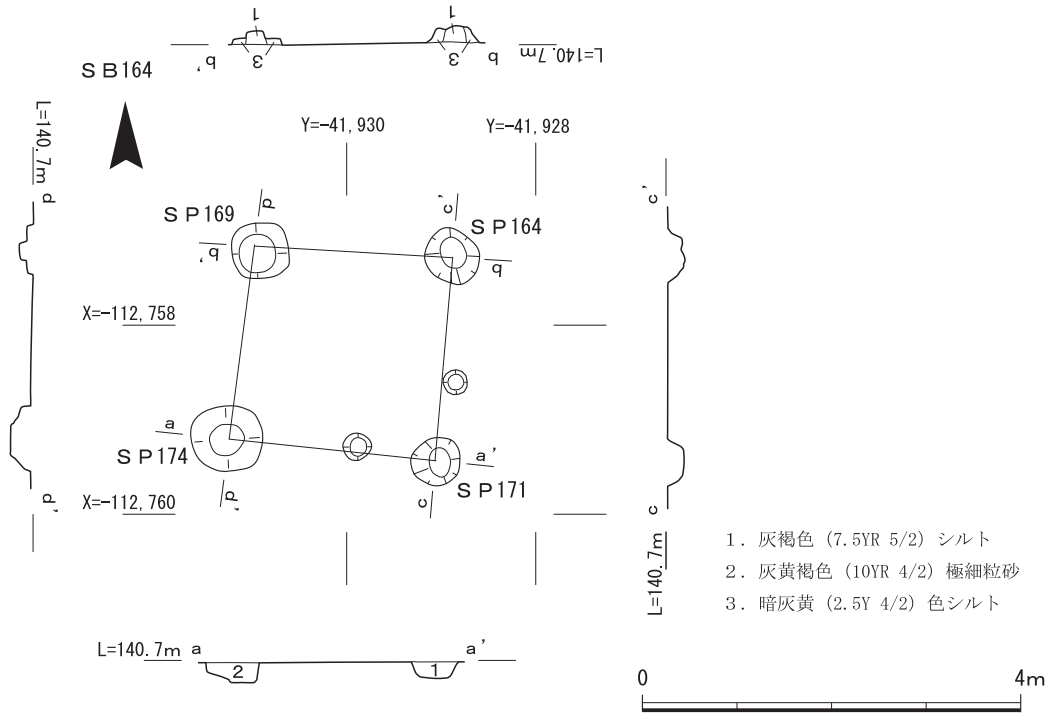
第146図 掘立柱建物 S B 02平・断面図(1/80)



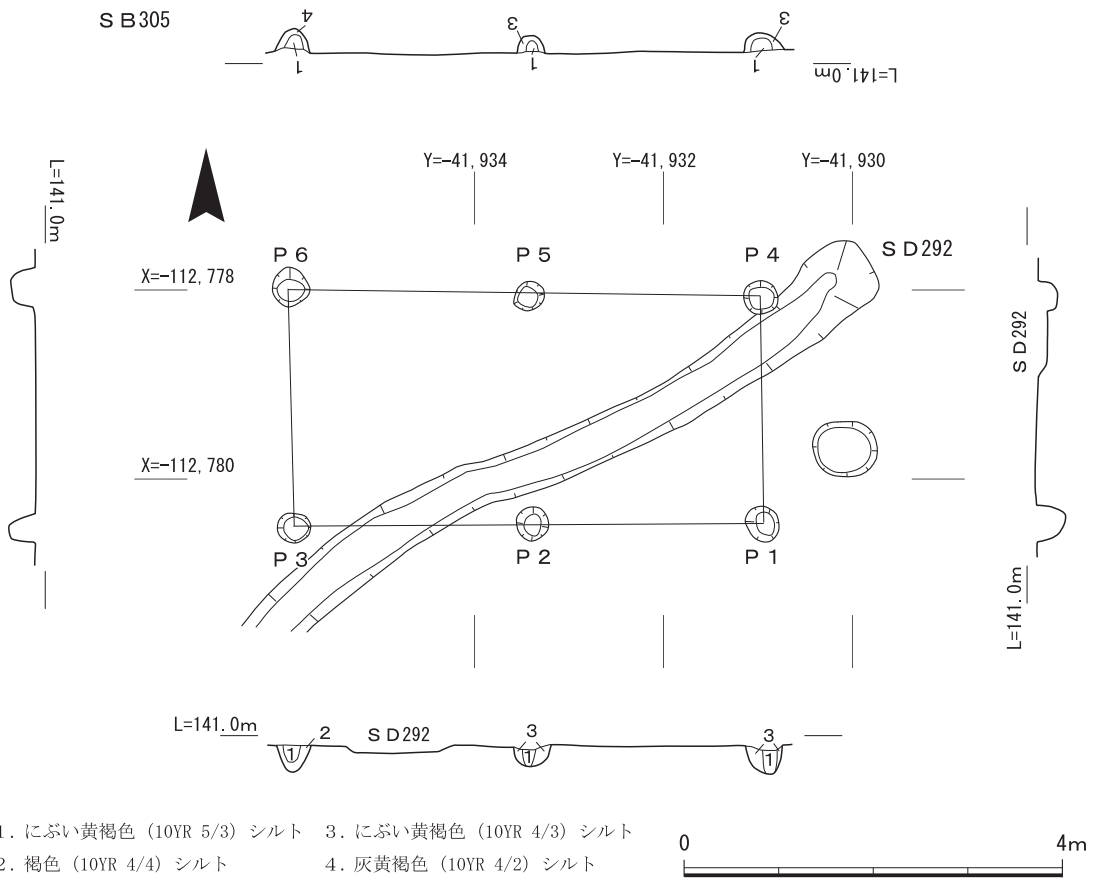
第145図 掘立柱建物 S B 26平・断面図(1/80)



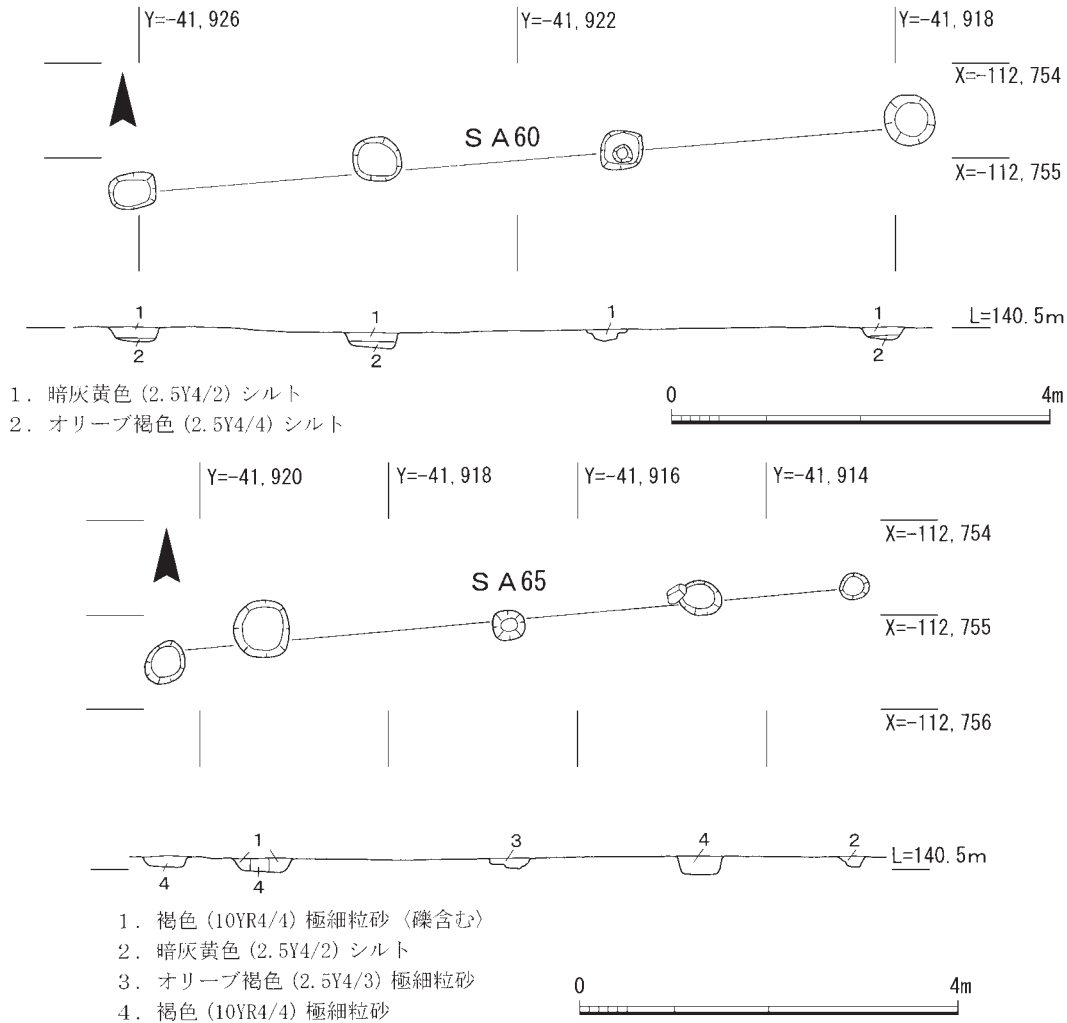
第147図 掘立柱建物 S B 06平・断面図(1/80)



第148図 掘立柱建物SB164平・断面図(1/80)



第149図 掘立柱建物SB305平・断面図(1/80)



第150図 柵列 S A 60・65平・断面図(1/80)

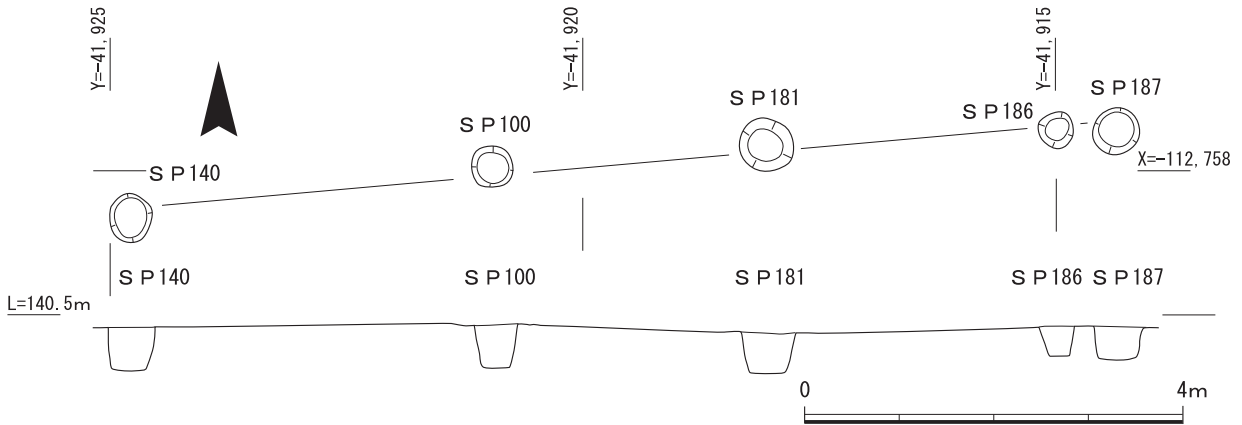
**掘立柱建物 S B 164** (第148図) 1間×1間の建物跡である。柱穴の規模は、他の掘立柱建物や柵列のものと比較して大きい。直径50～65cm、深さ18～22cmを測る。小規模な櫓または倉庫のような建物と考える。溝 S D 290の南北溝に近接する。柱穴 S P 164から土師器羽釜(第155図49)が出土している。

**掘立柱建物 S B 305** (第149図) B地区で溝 S D 290の外側に当たる。東西棟の小規模な建物である。梁間1間(2.7m)、桁行2間(5.2m)を測る。柱穴掘形は円形で、直径30～35cmである。柱間寸法は、梁間2.4m、桁行2.4mである。

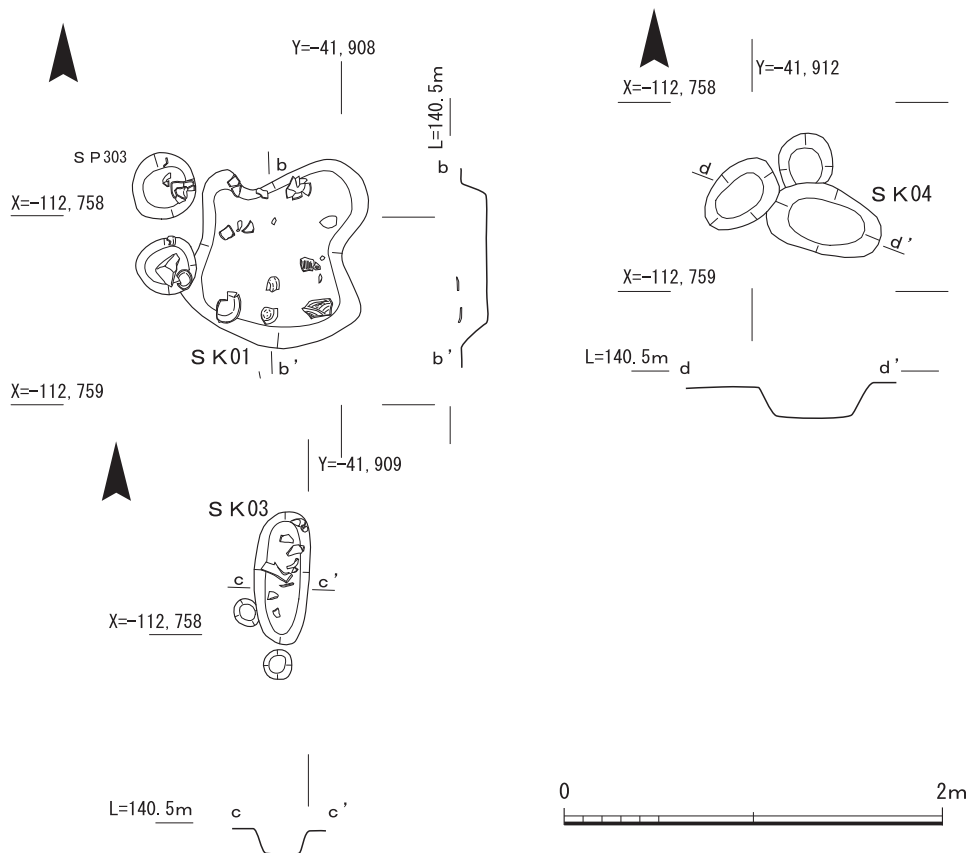
**溝 S D 295** B地区の S B 305の北東に掘られた溝で長さ1.8m、幅0.3～0.4m、深さ0.15mを測る。北側が失われている。瓦器椀(第155図69・70)が出土している。なお、遺構に伴わないが、本溝の周辺で瓦器椀(71)が出土した。

**柵列 S A 60** (第150図) 東西3間のピット列である。確認できる長さは8.8mを測る。ピット掘形の直径は42～48cm、ピット間寸法は、2.7～3.0mである。

**柵列 S A 65** (第150図) 東西4間のピット列で長さは7.7mである。ピット掘形は円形で、直径32～58cm、ピット間寸法1.1～2.7mを測る。



第151図 柵列 S A 100平・断面図(1/80)



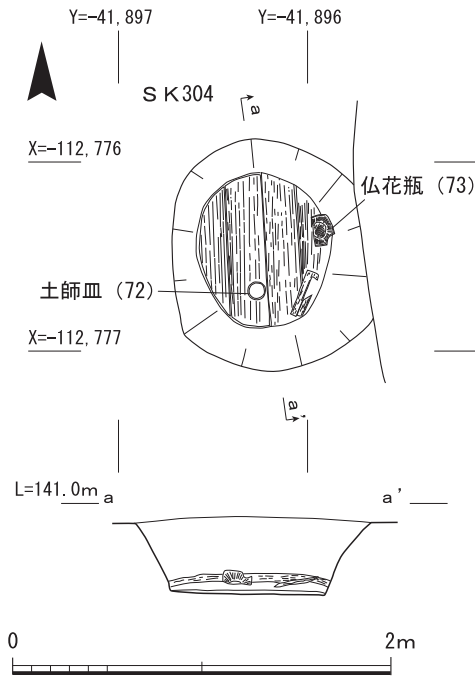
第152図 土坑 S K 01・03・04平・断面図(1/40)

柵 S A 100 (第151図) 東西方向の3間のピット列で、長さ11mの柵とみられる。ピット掘形は円形で、直径45～57cm、深さ37～42cmを測る。ピット S P 100から緑釉陶器碗(第155図66)が出土した。

土坑 S K 01 (第152図) 幅広の不整形土坑で、最大長1.15m、最短長0.8m、残存深さ0.15mである。断面形は皿状で、埋土は暗灰黄色シルトである。土師器皿や黒色土器碗などの土器類(第155図51～56)がまとめて出土した。

土坑 S K 03 (第152図) 長楕円形で、長軸70cm、短軸28cm、深さ15cmを測る。埋土は暗灰黄色シルトである。出土遺物は土師器碗や黒色土器碗の破片(第155図57～59)がある。





第153図 土坑 S K 304 平・断面図 (1/40)

**土坑 S K 04 (第152図)** いびつな長楕円形の不定形土坑である。長軸60cm・短軸35cm・深さ18cmを測る。埋土は暗灰黄色シルトで、黒色土器や緑釉陶器(第155図60~63)などが出土した。

(3) 近世

近世の遺構は、B地区東側の端から検出された。肥溜めとみられる土坑(S K 304・298)や、ピット(S P 297)などがある。

**土坑 S K 304 (第153図)** B地区東端、現在の道路に近接して掘られている円形土坑である。直径約1.2m、深さ0.4mをはかり、埋土は暗灰褐色シルトである。底面には、円形に寸断された3枚の板が隙間なく敷かれていた。中から近世の土師器皿や仏花瓶などが出土した。用途は肥溜用の土坑とみられる。

**土坑 S K 298** 土坑 S K 304と同じ形態の土坑である。直径90~100cm、深さ38~40cmで底は板敷となっており、広東椀が1点出土した。

**ピット S P 297** 直径50cmの円形で深さは約15cmである。中から近世の陶器や磁器類の破片が出土しており、これらをまとめて廃棄した廃棄土坑である。それらの中に、S K 304出土の仏花瓶(第155図73)と同じ個体の口縁部片が出土し、接合した。このほか陶製の丹波焼播鉢(75)が出土した。

3) C地区

西半部は河川の氾濫による粗砂や礫が広がり遺構は確認されなかったが、東半部において、小形の円形のピットが並んで検出された。柵(S A 306)とみられる(第135図)。検出面から出土した土器から、時期は平安時代と考えられる。西半部は曾我谷川の氾濫原に当たり、かつては遺構が存在していたのかもしれないが、現在では捉えることはできない。

(1) 平安時代

**柵 S A 3061 (第135図)** 東西3間(6.8m)の柵とみられる。ピット掘形は円形で、直径29~35cm、ピット間寸法は1.9~2.1mである。柵のピット内から出土遺物はないが、検出面において平安時代後期の遺物が出土しているので、当該期のものとする。

5 ・ 出土遺物

1) A・B地区

(1) 古墳時代(第154図)

**竪穴建物 S H 279** 土師器甕、土師器壺、高杯、須恵器甕、須恵器壺がある(1~9)。1~3は土師器布留式甕である。内湾する口縁部をもつ1と3、直線的な2がある。口縁内側端部は肥

厚している。4は土師器壺で、やや赤味を帯びた良質の胎土を用いて薄く仕上げられている。口縁端部は丸く収められている。5～7は土師器高杯である。口縁部が大きく外反し、深い杯部をもつものである。8は須恵器壺の口縁部である。体部外面にタタキ目がみられる。9は須恵器甕の口縁部片である。

**竪穴遺構 S K 150** 土師器甕(10・11)がある。10は口縁部が内湾し、端部は肥厚している。11は口縁端部の内側が内傾し、布留式期の新しい段階のものである。

**竪穴遺構 S K 170** 土師器甕・高杯、須恵器甕などがある(12～14)。12は土師器布留式甕の口縁部である。13は土師器高杯の脚部である。14は須恵器甕の口縁から頸部の破片とみられる。

**竪穴遺構 S K 280** 15は土師器布留式甕の口縁部である。口縁端部に肥厚がみられるが、やや内傾ぎみになっている。16は土師器高杯の杯部である。17の須恵器杯蓋である。天井部を欠くが、なだらかな丸いラインを描く6世紀後半のものであろう。17は遺構検出面より上の出土であるため、本遺構の時期を示すものではないと考える。

**竪穴建物 S H 180** 土師器杯と須恵器杯身がある(18・19)。18の土師器杯は、口径12.8cm、器高4.3cmを測る器壁の厚い杯で、内面には体部から底部にかけて強めのハケが施されている。19は須恵器杯身である。口径13.5cm、器高4.7cmを測る。6世紀後半のものである。

**竪穴建物 S H 294** 須恵器杯蓋・杯身と平瓶がある(20～22)。20は、口縁部が垂直に立ち上がり、端部にくぼみが見られ、扁平な天井部となっている。口径12.2cm・器高4.6cmを測る。21の杯身は受け部がやや上方に向き、立ち上がりは内傾する。22は平瓶の口縁部であろう。

**溝 S D 291** 須恵器高杯の脚部(26)である。底径11.4cmを測り、灰白色の表面はかなり磨滅している。

**溝 S D 292** 23は須恵器杯で、受け部が水平で小形化している。24は須恵器壺の口縁部である。25は台付壺の体部で、最大径16cmである。最大径に近い体部に左上りの楕円描き列点文がみられる。6世紀代のものである。

**溝 S D 293** 27は須恵器の口縁部で磨滅が顕著である。

**土坑 S K 261** 32は小形平底の土師器壺で、口径9.6cm、器高12.0cm、体部最大径11.4cmを測り、体部外面と口縁部内面にハケ目調整がみられる。

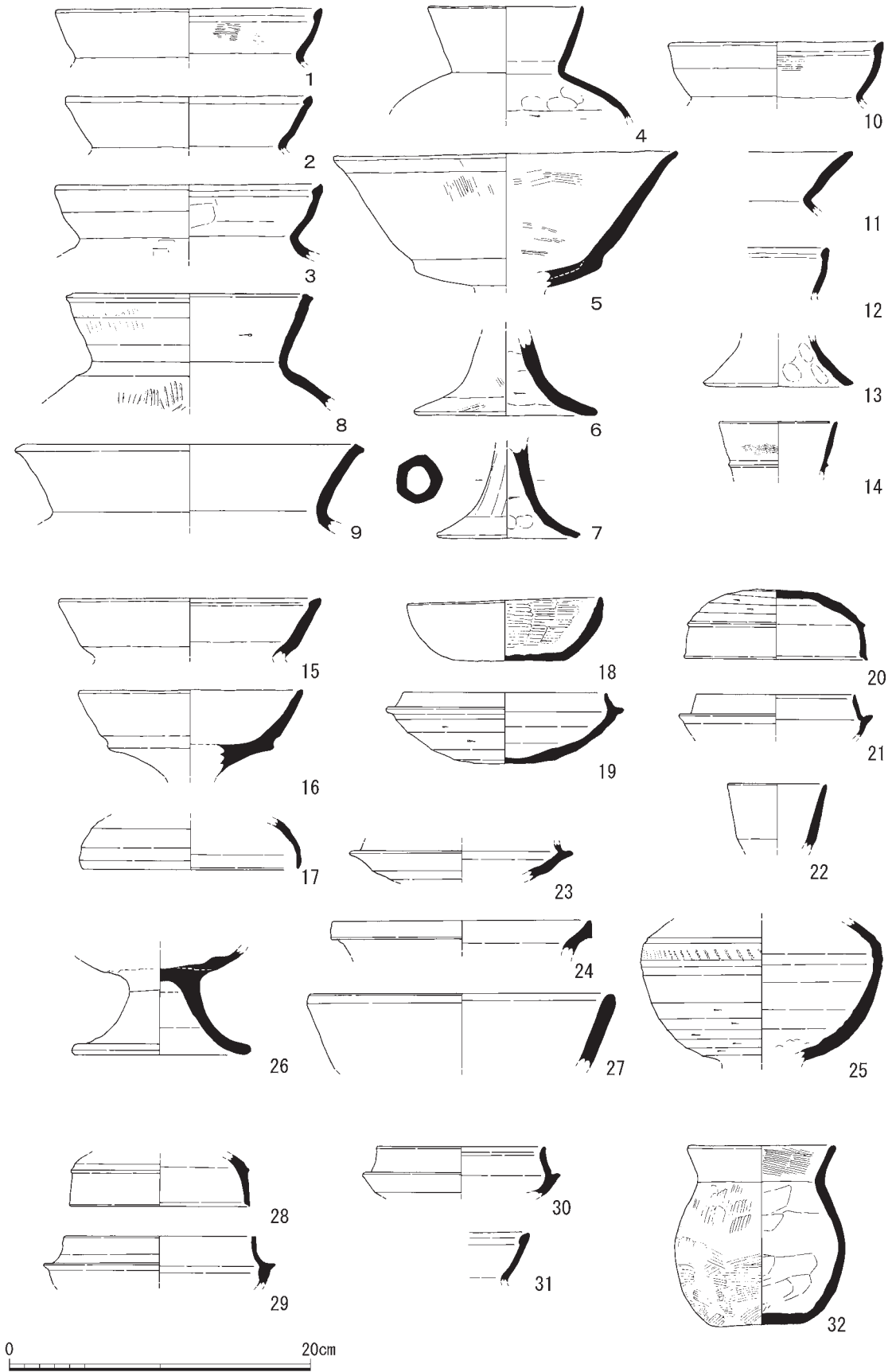
**ピット S P 190** 須恵器杯身(29)と、土師器甕口縁部片(31)がある。29は6世紀代、31は5世紀前半である。時間幅のあるものが混在している。

**ピット S P 191** 28は須恵器杯蓋で、口径11.8cmで小形化しており、5世紀末から6世紀初頭に位置付けられる。

**土坑 S K 129** 30は須恵器杯身で、口径11.2cmを測る。28と同じく5世紀末から6世紀初頭のものである。

## (2)平安時代(第155図)

**溝 S D 290** 土師器、瓦器、緑釉陶器などが出土している。33～36は土師器皿である。33・34は、口縁部を屈曲させないもので、35・36は、強く屈曲した肥厚する口縁部をもち、器高の低く



第154図 A・B地区出土土器(古墳時代)



第155図 A・B地区出土土器(平安時代以降)

なったものである。いずれのものも口径は10cm前後である。33・34は12世紀、35・36は10～11世紀のものである。

37～39は瓦器椀である。37は、口径11.5cmで、内面にハケ目調整と水平方向のミガキがみられる。瓦器椀38・39は底部のみである。断面三角形の高台をもつ12世紀代の資料である。40は、羽釜の口縁部片である。溝S D290における土橋の表面から礫とともに出土した。やや内傾する口縁部をもつ。41は龍泉窯系の青磁皿で12世紀中頃から後半のものである。42は緑釉陶器椀の底部片である。43は輪花させた口縁部をもつ灰釉陶器の椀である。10世紀のもので、外面は透明感のある灰色に施釉されている。

**掘立柱建物S B 06** 44～46は柱穴S P12から出土した。44・46は土師器皿で、45は内外面を黒化させた黒色土器B類の椀である。44は口縁部を大きく屈曲させ器高が低い。46は、体部上半に強いナデを行う。45は、口縁端部の内側に沈線がみられ、低い高台を有する。47・48は柱穴S P234から出土した。底部に糸切り痕を残す土師器椀である。全体に10～11世紀のものである。

**掘立柱建物S B 164** 49はS B164の柱穴S P174内から出土した土師器羽釜の口縁部である。溝S D290の土橋から出土した羽釜(40)と類似するが、こちらの口径は24.8cmと大形である。

**掘立柱建物S B 26** 50は小片ながら瓦器椀の口縁～体部である。

**土坑S K 01** 51・52は土師器皿である。51は口径13.2cmの扁平な板状になった土師器皿である。52は非常に薄い糸切り底をもつ器高の低いものである。53は土師器椀である。54～56は黒色土器B類の椀である。54は口径17cmで、55と56の15cm前後のものと比較してやや大形で深い。口縁端部に沈線がみられ、54・55の底部には、高さ4～6mmの張り付け高台をもつ。

**土坑S K 03** 57は土師器皿または椀の糸切底をもつ高台部である。58・59は黒色土器B類の椀である。

**土坑S K 04** 60は緑釉陶器の高台部分である。61～63は黒色土器B類の椀である。口縁端部内側に沈線をもち、高台は低い。

**土坑S K 129** 68は短い頸部をもつ炆器の壺である。

**柵S A 100** 66はピットS P100出土の緑釉陶器椀である。口径14cmを測り、灰白色の素地に明るい緑色の釉がみられる。

**ピットS P 15** 64・65は土師器皿である。口縁部を大きく屈曲させた器高の低い形のものである。10世紀代のものといえる。

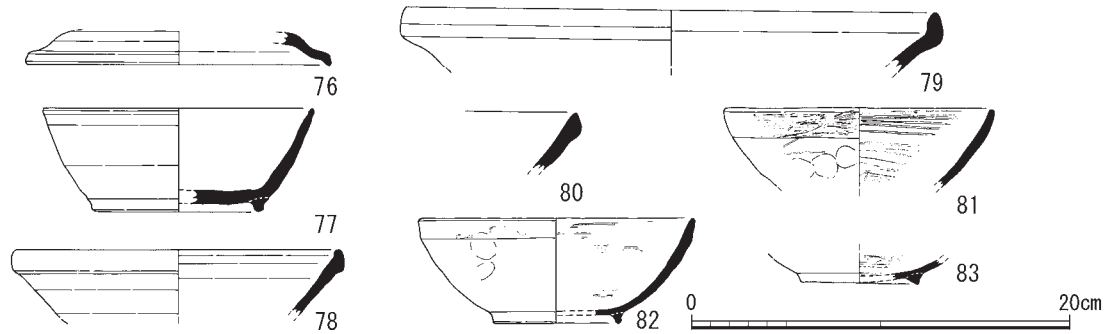
**ピットS P 303** 67は土師器椀の下半部で糸切り高台をもつ。10世紀代である。

### (3)近世(第155図)

**土坑S K 304** 土師器皿72は口径8.3～8.6cm、器高1.9cmを測り、内面の調整はヘラ状工具で行っている。底面にハケ目調整がみられる。仏花瓶73は、平底で肩の張った体部をもち、垂直に伸びる頸部から口縁部は大きく外反する。灰白色の素地に黒に近い濃いオリーブ色の釉葉がかけられている。口縁部径11.8cm、頸部径4cm、体部最大径9.6cm、底部径7.6cmを測る。

**土坑S K 298** 74は口径11cm、器高5.8cmを測る肥前系広東椀である。外面見込みに「寿」の





第156図 C地区出土土器

染付がある。18世紀末(1790～1800年)の時期である。

ピットS P 297 75は、丹波焼の播鉢である。口径24cm、底径16.2cmである。18世紀末から19世紀にかけてのものである。

## 2) C地区

いずれも平安時代の遺物で第3層の遺構検出面から出土した。76と77は須恵器の蓋と杯Bである。9世紀代とみられる。78は玉縁口縁の中国製白磁碗である。11世紀後半から12世紀にかけてのものである。79は東播系の鉢の口縁部である。81～83は瓦器碗で12世紀前半のものである。平安時代初めから平安時代末までの年代幅のある遺物が出土している。

## 6. まとめ

今回の調査で古墳時代と平安時代の遺構群を検出した。古墳時代ではA地点とB地点から竪穴建物や溝が検出された。5世紀前半から6世紀前半のものと、6世紀後半のものがあり、古墳時代中期から後期にかけて集落が営まれていたことが明らかとなった。

調査地西側の丘陵上には、後期の中西山古墳群をはじめ中期から後期にかけての古墳群が多く分布している。曾我部町は亀岡市域でも特に古墳が多く分布する地域であり、その造営集団の集落を考えるとその集落範囲はかなりの範囲に広がっていたと考えられる。今回検出した古墳時代の竪穴建物などは遺存状況が良好ではなかったが、そのような集落の一角をとらえたと考えてよいであろう。

平安時代の遺構群は、10世紀後半から12世紀後半にかけてのものである。なかでも注目されるのが、方形区画の南西隅を含む溝S D 290の検出である。南北19.4m、東西41.4mのL字形で検出した区画溝は、幅3.3～4.6m、深さ0.24～0.4mを測った。溝の内側の建物側からみると溝底との比高差は0.7～0.8mを測る。全体の規模・形状について仮に方形区画の1辺を半町(約54m)とし、溝を宅地を囲む堀とすると、その堀は、東側は現在の道路面を若干越えて南東隅で北上し、北側は民家の北側道路及び水路に沿って東進すると推測される。このような堀と呼べる区画溝の全貌は現在のところ不明であるが、平安時代後期集落においてこのような区画は1か所ではなく、複数の区画が存在していることは十分考えられる。

今回検出した集落は、黒色土器碗などからみて、およそ10世紀後半から営まれてきたことがわ

かる。掘立柱建物、柵、土坑・ピットなど、検出した遺構群の多くは溝SD290の方位と微妙にずれ、かつ建物跡などから出土した土器とは微妙に年代に差がある。そのため、すべての遺構が溝SD290と共存していたとは言えない。溝SD290の初源は明瞭ではないが、その下限の時期は瓦器椀などの出土状況から12世紀前半から後半にかけてとみられる。そして12世紀後半には、今回のC地区およびA地区東側でみられたような曾我谷川の洪水・土石流が当地を襲い、集落は北への移動を余儀なくされ、区画溝も埋没してしまったと考える。現在の春日部の集落が、今回調査地を南限として北に展開していることから、当時の集落も洪水被害を避けて北側に移動したと考えられる。

さらに、溝SD290の在り方で特徴的な点は、溝の深さが極めて浅いということである。溝SD290の土橋の設けられている箇所は比較的深いが、その他の部分は25～40cmと非常に浅い。北側の掘立柱建物や土坑などの検出面が後世に削平されていることを考慮しても溝の内側ラインからの深さは浅い。ただ溝南辺の立ち上がりは、現在の耕地の段差でみても高く、B地区の遺構検出面からは約70～80cmの落差がある。扇状地性低位段丘が南の山麓(撰丹山地)に向かって高度を上げる地形を利用し、南からの守りを若干考慮した可能性はある。しかし、それでも溝SD290に防御的な性格はあまり感じられず、曾我谷川からの灌漑用水路としての機能や、区画内の重要な建物への水害を避けることが主目的であったとみる。当地においては、平安時代末の集落または屋敷地を区画するために、本格的な城館のような深い溝又は堀を設けなければならない緊迫した社会情勢ではなかったと考えられる。近畿地方では12世紀後半に大溝を伴う方形区画の居館が確実に出現するとされている<sup>(注133)</sup>。今回検出した区画溝(SD290)は、そうした時期に向かう前段階(12世紀)における方形居館の萌芽的なものとみることができるとも思われる。(黒坪一樹)

- 注1 近畿農政局ホームページ<https://www.maff.go.jp/kinki/kameokachubu/index.html>
- 注2 村田和弘・黒坪一樹・竹村亮仁・荒木瀬奈・武本典子・浅田洋輔2018「国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡 佐伯遺跡7～9次」『京都府遺跡調査報告集』第178冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注3 藤永正明ほか編1990『西国・丹波街道』歴史の道調査報告書6 大阪府教育委員会
- 注4 井上穎纘1995「第一章 亀岡の自然環境」『新修亀岡市史』本文編第1巻 新修亀岡市史編纂委員会
- 注5 鈴木隆介1998『建設技術者のための地形図読図入門』第2巻 低地 古今書院
- 注6 井上穎纘1996「付図 亀岡市の地形分類図」『新修亀岡市史』資料編第4巻 新修亀岡市史編纂委員会
- 注7 小林謙一2017『縄紋時代の実年代－土器型式編年と炭素14年代－』同成社
- 注8 佐々木尚子・高原 光2011「花粉化石と微粒炭からみた近畿地方のさまざまな里山の歴史」『里と林の環境史 シリーズ日本列島の三万五千年－人と自然の環境』3 文一総合出版  
佐々木尚子2021「京都府域の植生変化と人間活動」『埋蔵文化財ニュース』184 花粉分析からみた都城造営と植生変化（独）国立文化財機構奈良文化財研究所
- 注9 周辺の遺跡の記述に当たっては、個別の発掘調査報告書の他、以下の文献を参考にした。  
石崎善久・小池寛2013「池尻廃寺とその周辺」『第19回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集 古代寺院と律令体制下の京都府～なぜ寺はそこにあるのか～』京都府埋蔵文化財研究会  
石崎善久編2013『京都府中世城館跡調査報告書』第2冊－丹波編－ 京都府教育委員会  
本村豪章・望月幹夫・古谷 毅・中村 浩編1994『東京国立博物館所蔵須恵器集成』I（近畿篇）東京国立博物館  
桐井理揮2017「南丹地域における縄文・弥生移行期の様相」『第24回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集 弥生文化出現期前後の集落について』京都府埋蔵文化財研究会  
桐井理揮・名村威彦2021「京都府における集落の構造と変遷－丹波国桑田郡内におけるケーススタディ－」『古代集落の構造と変遷1』第24回古代官衙・集落研究集会報告書（独）国立文化財機構奈良文化財研究所  
亀岡市史編纂委員会1965『亀岡市史』（亀岡市）  
亀岡市史編さん委員会1995『新修亀岡市史』本文編第1巻 亀岡市  
亀岡市史編さん委員会2000『新修亀岡市史』資料編第4巻 亀岡市  
高野陽子2014「南丹波における古墳時代中期集落の動態」『古代学研究』201 古代学研究会  
高橋誠一1986「亀岡盆地の条里と丹波国府」『人文地理学の視園』水津一朗先生退官記念事業会  
高橋照彦・中久保辰夫編2012『篠窯跡群大谷3号窯の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第5冊 大阪大学考古学研究室篠窯調査団  
中澤 勝1995「官衙遺跡からみた古代の地域構造の変質－丹波国桑田郡－」『亀岡市文化資料館報』第4号 亀岡市文化資料館  
橋本義則・百瀬正恒・岡田文男1997「柚・木材の漕運と京内の津」『長岡京左京出土木簡』1 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第16集（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 注10 黛 弘道1965「犬養氏および犬養部の研究」『学習院史学』2号 学習院大学
- 注11 生田敦司2018「犬養氏と犬養部の理解に関する現状と課題」『日本書紀研究』第32冊 日本書紀研究会
- 注12 上田正昭1961「丹波県の発展」『篠村史』篠村史編さん委員会
- 注13 和田 萃1995「丹波と倭王権」『新修亀岡市史』本文編第1巻 亀岡市史編さん委員会

- 注14 小林敏男1979「旦波大県主をめぐる歴史的世界－丹後の地の古代史によせて－」『地方史研究』第157号 地方史研究会  
磯野浩光1987「古代丹波・丹後の居住氏族について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注15 松崎健太2013「歴史学から見た丹波中世史」『京都府中世城館跡調査報告書』第2冊－丹波編－ 京都府教育委員会
- 注16 竹内理三編1976『莊園分布図』吉川弘文館
- 注17 飛鳥井 拓2020「文献資料にみる丹波の中世城館と領主」『中世の騒乱と武士の館』第144回京都府埋蔵文化財セミナー資料集 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注18 亀岡市教育委員会2012『亀岡市文化財報告書』第82集 亀岡市教育委員会  
尾崎裕妃2020「犬飼遺跡第4次」『京都府埋蔵文化財情報』第138号 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
山本 梓2020「犬飼遺跡第5次」『京都府埋蔵文化財情報』第138号 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
松井 忍・桐井理揮2021「犬飼遺跡第7次」『京都府埋蔵文化財情報』第139号 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注19 前掲注18(亀岡市教育委員会2012)と同じ
- 注20 盛本昌広2008『軍需物資から見た戦国合戦』吉川弘文館
- 注21 吉川昌伸1999「武蔵野台地東部の溜池遺跡における過去6000年間の植生変遷」『植生史研究』7 日本植生史学会  
森 将志・藤根 久・中村賢太郎・竹原弘展・野口真利江・伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絃一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・上野龍之・遠藤邦彦ほか2017「堀堆積物の自然科学分析」『江戸城外堀跡市谷堀』東京都下水道局・鉄建建設株式会社・千代田区・新宿区
- 注22 京都大学大学院小林慧人氏よりご教示いただいた。
- 注23 堂込秀人2003「竪穴建物」『季刊考古学』第85号 雄山閣
- 注24 本村充保2000「方形竪穴土坑について」『居伝遺跡』奈良県橿原考古学研究所調査報告第79冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 注25 箱崎讓治2010『馬小屋の考古学』高志書院
- 注26 高屋茂男2006「畝状空堀群」『中世城館の考古学』高志書院
- 注27 平尾政幸2019「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号 (公財)京都市埋蔵文化財研究所
- 注28 中世土器研究会編1996『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社  
菅原正明1989「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 国立歴史民俗博物館
- 注29 重根弘和2017「備前－編年と分布－」『第36回中世土器研究会 国産陶器の系譜と暦年代 資料集』中世土器研究会
- 注30 安井俊則ほか2012『愛知県史』別編窯業3 愛知県  
藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 注31 宮崎亮一・山本信夫2000『大宰府条坊跡XV』大宰府市の文化財 第49集 大宰府市教育委員会
- 注32 前掲注28(中世土器研究会編1996)と同じ
- 注33 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』

- 注34 桐山秀穂1996「日本における茶臼の研究」『古代學研究所研究紀要』第6輯 古代學研究会
- 注35 四柳嘉章2002「漆の技術と文化－出土漆の世界－」『あらたな世界へいくつもの日本Ⅱ』岩波書店
- 注36 本村充保2006「遺跡出土下駄の全国集成に基づく編年および地域性の抽出に関する基礎的研究」『橿原考古学研究所研究紀要 考古學論叢』第29冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 注37 丸山茂樹監修1986『日本はきもの博物館』ひろしま文庫9 広学図書
- 注38 蛍光X線分析は文化財科学センターに依頼した。
- 注39 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子2005「淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAIpo」『pH耐性能』7 内田老鶴圃
- 注40 田辺昭三1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園研究編集第10号 平安学園  
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店  
白石耕治1992「谷山池地区の編年」『陶邑古窯址群－谷山池地区の調査－』和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書Ⅳ』和泉市教育委員会  
西 弘海1978「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所 学報第31冊 奈良国立文化財研究所  
寺沢 薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所  
深澤芳樹2002「第四章 考察 山田寺下層の土器について」『大和山田寺跡』（独）奈良文化財研究所  
神野 恵2005「3-1-3 土器類」『平城宮発掘調査報告』XVI （独）奈良文化財研究所  
神野 恵・森川 実2010「土器類」『図説平城京事典』柊風社  
森川 実2019「飛鳥時代における須恵器食器の分量変化」『飛鳥時代の土器編年再考』（独）国立文化財機構奈良文化財研究所・歴史土器研究会
- 注41 浅田洋輔2021「丹波国における墨書土器の集成とその傾向」『京都府埋蔵文化財論集』第8集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注42 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 注43 伊東隆夫・山田昌久編2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
- 注44 青柳泰介2019「Ⅲ 大和の古墳時代木材生産地の様相」『古墳時代王権中枢の木材利用に関する総合的研究』奈良県立橿原考古学研究所
- 注45 和田一之輔編2019『木器集成図録』飛鳥藤原篇Ⅰ（独）国立文化財機構奈良文化財研究所
- 注46 浦 蓉子2021「奈良時代の燃えさしについて」『古代の灯火－先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究』（独）国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 注47 奈良文化財研究所李暉氏の御教示による
- 注48 京都府埋蔵文化財研究会編2019『京都府内における農耕具の変化』第26回京都府埋蔵文化財研究会 発表資料集 京都府埋蔵文化財研究会
- 注49 前掲注44と同じ
- 注50 寺前直人1999「近畿地方の磨製石鏃にみる地域間交流とその背景」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論文集 大阪大学考古学研究室
- 注51 伊野近富・岩松 保・岡崎研一・石崎善久・筒井崇史・松尾史子2009「国営農地整備再編事業「亀岡地区」関係遺跡平成18・19年度発掘調査報告 時塚遺跡第15・17次」『京都府遺跡調査報告集』第135冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注52 奥村清一郎・柴 暁彦・原田三壽1994「八木嶋遺跡」『京都府遺跡調査報告集』第56冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター



- 注53 桐井理揮2021「金生寺遺跡第5・7次」『京都府埋蔵文化財情報』第139号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注54 放射性炭素年代測定の項については以下の文献を参考にした。  
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.  
Hua, Q., Barbetti, M., and Rakowski, A.Z. 2013 Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. Radiocarbon, 55(4), 1-14.  
中村俊夫2000 放射性炭素年代測定法の基礎「日本先史時代の14C年代」p3-20日本第四紀学会  
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J 2013 IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0?50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.
- 注55 堆積物中の珪藻化石群集の項については、以下の文献を参考にした。  
安藤一男1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 東北地理学会  
千葉 崇・澤井裕紀2014「環境指標種群の再検討と更新」『Diatom』30  
小杉正人1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 日本第四紀学会  
渡辺仁治・浅井一視1992「高優占度珪藻による有機汚濁度の判定(2). Caloneis, Cocconeis, Cyclotella, Cymbella, Diatoma, Eunotia, Fragilaria, Gomphoneis, Gomphonemaを第1位種とする群集」『Diatom』7 日本珪藻学会
- 注56 種群は前掲注55(千葉・澤井2014)と同じ
- 注57 米倉浩司・梶田 忠2003「BG Plants 和名-学名インデックス(YList)」(<http://ylist.info>)
- 注58 前掲注57と同じ
- 注59 新津 健1999「遺跡から出土するモモ核について-山梨県内の事例から-」『山梨考古学論集』IV 山梨県考古学協会
- 注60 那須浩郎2017「縄文時代にヒエは栽培化されたのか?」『SEEDS CONTACT』4 設楽科研事務局
- 注61 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂2011『日本有用樹木誌』海青社
- 注62 前掲注57と同じ
- 注63 前掲注57と同じ
- 注64 前掲注43と同じ
- 注65 前掲注57と同じ
- 注66 漆器碗の塗膜分析の項に関しては、以下の文献を参考にした。  
前掲注43文献 p.449  
岡田文男1995『古代出土漆器の研究-顕微鏡で探る材質と技法-』京都書院 p.191  
佐伯浩・原田 浩1985「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 pp.20-48  
佐伯浩・原田 浩1985「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 pp.49-100  
島地謙・伊東隆夫1982『図説木材組織』地球社 p.176  
島地謙・伊東隆夫1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 p.296

- 山田昌久1993『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 植生史研究特別第1号』植生史研究会 p.242
- 四柳嘉章2006「漆Ⅰ」『ものと人間の文化史』131-I 法政大学 p.252
- 四柳嘉章2006「漆Ⅱ」『ものと人間の文化史』131-II 法政大学 p.435
- 四柳嘉章2018「中世式の技術転換と社会の動向」『国立歴史民俗博物館研究報告第210集』国立歴史民俗博物館 pp.249-267
- 注67 年輪年代測定の詳細については、以下の文献を参考にした。
- Baillie and Pilcher 1973 'A simple cross-dating program for tree-ring research' "Tree-Ring Bulletin" 33, 7-14
- 星野安治, 児島大輔, 光谷拓実2017「国宝薬師寺東塔木部材の年代測定－建立年代について」『奈良文化財研究所紀要』2017 (独)国立文化財機構奈良文化財研究所 pp.75-77
- 注68 中塚 武2021『酸素同位体比年輪年代法－先史・古代の暦年と天候を編む』同成社
- 注69 一連の分析・解析方法の詳細については、注68の文献、及び以下の文献を参照のこと。
- Akira Kagawa, Masaki Sano, Takeshi Nakatsuka, Tsutomu Ikeda and Satoshi Kubo (2015) : An optimized method for stable isotope analysis of tree rings by extracting cellulose directly from cross-sectional laths, *Chemical Geology*, 393–394, 16–25.
- 注70 マスタークロノロジーには、過去2600年間の各時代から得られている中部日本のヒノキを中心とした67個体の長樹齢木のデータを接合したものを利用した。データの詳細については、以下の文献を参照のこと。
- Takeshi Nakatsuka, Masaki Sano, Zhen Li, Chenxi Xu, Akane Tsushima, Yuki Shigeoka, Kenjiro Sho, Keiko Ohnishi, Minoru Sakamoto, Hiromasa Ozaki, Noboru Higami, Nanae Nakao, Misao Yokoyama, and Takumi Mitsutani (2020): A 2600-year summer climate reconstruction in central Japan by integrating tree-ring stable oxygen and hydrogen isotopes. *Climate of the Past*, 16, 2153–2172, <https://doi.org/10.5194/cp-16-2153-2020>.
- 注71 橋本久和1980「瓦器碗の地域色と分布」『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
- 橋本久和2018『概論 瓦器碗研究と中世社会』真陽社
- 注72 石井清司・引原茂治・伊野近富1985「亀岡盆地出土の瓦器について」『京都考古』第37号 京都考古刊行会
- 注73 伊野近富1995「中世土器の編年(上)」『京都府埋蔵文化財情報』第57号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 伊野近富2021 a 「京北町出土中世遺物と丹波型瓦器碗」『上中城跡の研究』龍谷大学文学部考古学実習室)
- 伊野近富2021 b 「丹波型瓦器碗の分類と編年」『京都府埋蔵文化財論集』第8集(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注74 山本 梓・引原茂治2020「丹波地域における瓦器碗の地域性」『京都府埋蔵文化財情報』第138号(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注75 前掲注73(伊野2021 b)と同じ
- 注76 資料数が少ない時期については、北丹波および能勢町の事例で補完した。
- 注77 瓦器碗の法量に関しては、以下の文献を参考にした。
- 大内城跡 伊野近富1984『大内城跡』京都府遺跡調査報告書第3冊(財)京都府埋蔵文化財調査研

究センター

室橋遺跡 高野陽子・辻本和美2008「室橋遺跡第11次」『京都府遺跡調査報告集』第130集 (公財)

京都府埋蔵文化財調査研究センター

野条遺跡 高野陽子2008「野条遺跡第10・12次、室橋遺跡第5次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第130集 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

池尻遺跡 石崎善久「池尻遺跡第7次」『京都府遺跡調査概報』第123集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

国分28号墳 石崎善久・筒井崇史・松尾史子2008「蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群(1)」『京都府遺跡調査報告集』第129集 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

丹波国分寺跡 中澤 勝2002『史跡丹波国分寺跡第14次発掘調査報告書－記念物保存修理事業－』亀岡市文化財調査報告書第59集 亀岡市教育委員会

中古墳群 高野陽子・黒坪一樹・筒井崇史・伊賀高弘2019「主要地方道亀岡園部線防災・安全交付金事業関係遺跡」『京都府遺跡調査報告集』第178集 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

出雲遺跡 中澤 勝2008「国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査報告」『市内遺跡発掘調査報告書』亀岡市文化財調査報告書第76集 亀岡市教育委員会

中澤 勝2009『国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査報告』亀岡市文化財調査報告書第78集 亀岡市教育委員会

黒坪一樹・高野陽子・武本典子2016「出雲遺跡第15・16・18次」『京都府遺跡調査報告集』第166集 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

大淵遺跡 伊野近富・戸原和人・田代 弘2004「大淵遺跡4次」『京都府遺跡調査概報』第123集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

千代川遺跡 森下 衛・鶴島三壽1992『千代川遺跡』京都府遺跡調査報告書第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

矢尾谷遺跡 安藤信策・福島克彦・中澤 勝2000「鎌倉・室町時代」『新修亀岡市史』資料編第1巻 新修亀岡市史編さん委員会

北金岐遺跡 石井清司・田代 弘1985『北金岐遺跡』京都府遺跡調査報告書第5冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

太田遺跡 岸岡貴英1998「太田遺跡4次」『埋蔵文化財発掘調査概要(1998)』京都府教育委員会

増田孝彦・岡崎研一1998「太田遺跡第5次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第82集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

奈良康正1999「太田遺跡6次」『埋蔵文化財発掘調査概要(1999)』京都府教育委員会

増田孝彦2000「太田遺跡第10次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第82集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

天川遺跡 樋口隆久・森下 衛1987「亀岡市天川遺跡出土遺物について」『京都府埋蔵文化財情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

中澤 勝編1993『天川遺跡発掘調査報告書』亀岡市文化財調査報告書第29集 亀岡市教育委員会

若宮神社遺跡 亀岡市教育委員会のご厚意で実見・計測を行った。崖面崩落に伴って不時発見された資料であり、土師皿や瓦器碗が大量に出土している。土師皿はヘソ皿を含まず、11～13世紀代の様相を示す。

余部遺跡 飛鳥井 拓2020『市内遺跡発掘調査報告書』亀岡市文化財調査報告書第97集 亀岡市教育

委員会

- 注78 前掲注27と同じ(平尾政幸2019) また、土器の年代については、赤松佳代氏・新田和央氏・岡田健吾氏・森島康雄氏・伊野近富氏・加藤雄太氏から多くの教示を得た。記して感謝申し上げる。
- 注79 未報告資料を含むが、亀岡市教育委員会の飛鳥井拓氏のご厚意で実見・実測し、図を掲載した。記して感謝申し上げる。
- 注80 岡本敏行1987『中筋遺跡発掘調査概要』Ⅳ 大阪府教育委員会
- 注81 松井一明2006「橋」『中世城館の考古学』高志書院
- 注82 飛田範夫1999「日本の生垣の歴史の変遷について」『ランドスケープ研究』第62巻第5号 (財)日本造園学会
- 注83 前掲注20と同じ
- 注84 山上雅弘2009「西日本の平地居館と土塁・堀」『中世城郭研究』第23号 中世城郭研究会
- 注85 宮本長二郎1990『日本の美術』第288号 民家と町並 近畿 至文堂  
宮本長二郎1999「日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間－関口欣也先生退官記念論文集』関口欣也先生退官記念論文集刊行会
- 注86 (独)国立文化財機構奈良文化財研究所箱崎和久氏の教示による。
- 注87 出典は、以下の文献による
- ①前掲注85と同じ(宮本長二郎1990)
  - ②本書
  - ③渡辺 昇・山上雅弘・篠宮 正・山本 誠2001『二郎宮ノ前遺跡発掘調査報告書 兵庫県文化財調査報告書第220冊』兵庫県教育委員会
  - ④前掲注85と同じ(宮本1990)
  - ⑤長宗繁一1993「久我東町遺跡の主館」『平安京歴史研究 杉山信三先生米寿記念論集』杉山信三先生米寿記念論集刊行会 P195
  - ⑥中尾七重2012「古渡路遺跡の中世掘建柱建物について－架構等の復元とその特徴－」『文化学園大学紀要』服装学・造形学研究43 文化学園大学
  - ⑦下村 修・益田兼房1978『重要文化財渡邊家住宅修理工事報告書』京都府教育委員会
  - ⑧永井規男編1975『京都府の民家』京都府教育委員会
- 注88 前掲注85と同じ(宮本1990)
- 注89 前掲注87⑤と同じ(長宗1993)
- 注90 前掲注87③と同じ(渡辺ほか編2001)
- 注91 永井規男1977「撰丹型民家の形成について」(『日本建築学会論文報告集』第251号)
- 注92 前掲注87⑦と同じ(下村・益田1978)
- 注93 撰丹型民家の祖型は先述の前座敷三間取り型の民家が想定されているが、その発展過程は不明であった。掘立柱建物S B 433は、最も古い型の民家との共通点が多く、定点的な資料となる可能性がある。民家の事例については、京都府教育委員会の島田豊氏・村田典彦氏に学んだ。記して感謝申し上げる。
- 注94 福島克彦2009「近畿近国における方形城館と単櫛山城」『中世城郭研究』第23号 中世城郭研究会
- 注95 玉井哲雄1996「武家住宅」『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会
- 注96 「備中国新見庄地頭方百姓谷内家差図」『東寺百合文書』サ函399号(東寺百合文書WEB <http://hyakugo.kyoto.jp>)
- 注97 戸田芳美1967「山野の貴族的領有と中世初期の村落」『日本領主制成立史の研究』岩波書店

- 注98 橋口定志1989「中世居館の再検討」『東京考古』5 東京考古談話会
- 注99 広瀬和雄1988「中世村落の形成と展開－畿内を中心とした考古学的研究」『物質文化』50 物質文化研究会
- 注100 本村充保2000「居伝遺跡に見る中世居館の性格」『居伝遺跡』奈良県橿原考古学研究所調査報告第79冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 注101 佐野静代2008「中世居館の用水支配機能と村落景観－開発領主と中世村落－」『中近世の村落と水辺の環境 景観・生業・資源管理』吉川弘文館(初出は1999)
- 注102 高木徳郎2014「生活の舞台としての村落をどうとらえるか」『日本中世史入門』勉誠出版
- 注103 海老澤 衷1993「中世村落の復原」『岩波講座日本通史』第7巻 中世Ⅰ 岩波書店  
服部英雄1995「中世のムラの現地調査はなぜ必要なのか」『中世のムラ 景観は語りかける』東京大学出版会
- 注104 水野章二2014「棚田の歴史」『棚田学入門』勁頭書房
- 注105 現在、整理作業が行われており、詳細な評価は今後にゆだねたい。
- 注106 前掲注18(松井・桐井2021)に同じ
- 注107 当地域は、現存地割や小字「二ノ坪」などの遺存地名から、古代の条里制に起源を求められる可能性が指摘されている(足利健亮1996「第六節 村落と条里」『新修亀岡市史』本文編第1巻 亀岡市史編さん委員会)。実際、金生寺遺跡では古代にさかのぼる条里関連遺構も検出されているが(前掲注53)、犬飼遺跡では古代の掘立柱建物だけでなく12世紀においても地形に沿う柵列が検出されるなど、古代条里制の施工は部分的なものであった可能性が高い。
- 注108 悪水を利用して堀を滞水させる事例は、京都府内では16世紀代の物集女城で認められる。  
福島克彦2021「中世前期城館研究の問題点と上中城跡」『上中城跡の研究』龍谷大学文学部考古学実習室
- 注109 前掲注97と同じ
- 注110 榎原雅治2016『室町幕府と地方の社会』シリーズ日本中世史③ 岩波新書
- 注111 なお、付表1の中世末から近世にかけての亀山藩各村の石高の変遷を見ても、近世初頭以降、当地域の耕地面積の増加を大きく見積もる必要は少なく、中世後期にはほぼ現在の景観が完成していたとみて大過ない。
- 注112 荒木瀬奈2020「金生寺遺跡第5次」『京都府埋蔵文化財情報』138号 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注113 金子裕之・次山 淳1995「甘樫丘東麓の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25 奈良国立文化財研究所
- 注114 黒崎 直・西口壽生1997「寺域西南部の調査」『奈良国立文化財研究所年報』1997-II 奈良国立文化財研究所
- 注115 横山浩一1959『世界考古学体系』3 古墳時代 河出書房
- 注116 奈良国立文化財研究所1958『飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所  
西口壽生1999「飛鳥地域の再開発直前の土器」『奈良国立文化財研究所年報1999』II 奈良国立文化財研究所
- 注117 前掲注40と同じ(田辺1981)
- 注118 中村 浩2001『和泉陶器出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版  
筆者は中村編年II-4が田辺編年TK43型式に併行すると理解しているが、中村は「TK43号窯」の



最終操業面の資料であるTK43-I号窯跡資料をII-3とする(中村2001)。田辺編年TK43型式(田辺1966・1981)とされた資料とTK43-I号窯跡資料との関係はわからないが、田辺(1966)文献の記述からTK43-I号窯跡資料と同時期と位置づけられよう。つまり「TK43号窯跡」の資料については、その位置づけが中村編年と田辺編年では異なる。筆者は「TK43号窯跡」の資料は中村編年II-3と中村編年II-4・田辺編年TK43型式にまたがると捉え、犬飼遺跡開析谷NR50Ⅲ層資料は田辺編年TK43型式・中村編年II-4に比定している。なお、畑中(1999)文献で検討された資料はTK43-I号窯跡資料であり、中村編年II-3の実年代に言及したともいえる。

- 注119 白石太一郎2002「須恵器の暦年代」『年代のものさし-陶邑の須恵器-』大阪府近つ飛鳥博物館
- 注120 畑中英二1999「陶邑TK43号窯跡の年代観に関する再検討-出土陶硯からのアプローチ-」『瓦衣千年-森郁夫先生還暦記念論文集-』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会  
蹄足円形硯は奈良時代に多い器種だが、製作技術から7世紀第一四半期まで遡り得るとする。そして、陶硯とその他に出土した資料の共伴関係を想定し、TK43型式の生産年代の上限は7世紀第1四半期であるとした。
- 注121 尾野善裕1998「中・後期古墳時代暦年代観の再検討」『土器・墓が語る美濃の独自性~弥生から古墳へ~』東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会
- 注122 新納 泉2009「前方後円墳絶期の暦年代」『考古学研究』第56巻第3号 考古学研究会
- 注123 野上丈助ほか1982『陶邑V』大阪府文化財調査報告書第33輯 大阪府教育委員会
- 注124 前掲注40と同じ(田辺1966)
- 注125 岡田文男2005「林業-樽の生産と流通」『列島の古代史 ひと・もの・こと』2 暮らしと生業 岩波書店  
西山良平1977「奈良時代「山野」領有の考察」『史林』第60巻3号 史学研究会  
西山良平1977「奈良時代における「山野」領有の考察」『火林』第60巻第3号 史学研究会
- 注126 橋本義則・百瀬正恒・岡田文男1997「柚・木材の漕運と京内の津」『長岡京左京出土木簡』一 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第16冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 注127 伊藤瑠美2014「中世武士のとらえ方はどう変わったか」『日本中世史入門』勉誠出版
- 注128 なお、丹波では大内城跡が六人部荘政所との評価を受けており、倉庫とみられる遺構も検出されている。(前掲注77伊野近富1984)
- 注129 前掲注104と同じ(水野2014)
- 注130 高木徳郎2010『紀州における中世の棚田-紀伊国鞆淵荘地域の「棚田」-中世紀州の景観と地域社会』ウィング
- 注131 石田志朗1989「V. 3 亀岡盆地の第四系」『京都西北部地域の地質』通商産業省工業技術院地質調査所
- 注132 中澤 勝2012「曾我部町内遺跡発掘調査報告書-穴太遺跡・犬飼遺跡・金生寺遺跡・與野遺跡(與野廃寺)・春日部遺跡-」『市内遺跡発掘調査報告書』(亀岡市文化財調査報告書第82集)亀岡市教育委員会
- 注133 中井 均1991「中世の居館・そして村落-西国を中心として-」『中世の城と考古学』新人物往来社 p.415

〈参考文献〉

- 上原真人編1993『木器集成図録』近畿原始篇 奈良文化財研究所  
島田敏男・黒坂貴裕編2010『出土建築部材における調査方法についての研究報告』科学研究費補助金基盤

- 研究(A)課題番号：18202026「遺跡出土の建築部材に関する総合的研究」(平成18年度～21年度)独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 浦 蓉子2020『木屑を考える 古代の木工活動を検討するための一試論』平成28～31年度科学研究費補助金(若手研究B)「古代都城における木器生産に関する基礎的研究」(独)国立文化財機構奈良文化財研究所
- 水野章二2004『中世村落の景観と環境』思文閣出版
- 田村憲美1990「村落と開発」『日本村落史講座』第2巻 景観1(原始・古代・中世) 雄山閣
- 青柳泰介2009「木材の「原材」生産と流通に関する一考察」『木・ひと・文化』出土木器研究会

付表23 犬飼遺跡出土土器観察表

〈凡例〉

口径欄の記号 復元径；( ) 該当なし；- < >；体部最大径  
 器高欄の記号 残存高；( ) 該当なし；-  
 底径欄の記号 復元底径；( ) 該当なし；-

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
1	土師器	へソ皿	B地区	S D 01 k13 Ⅲ層	(7.2)	1.9	-	3/12	灰白 (10YR8/2)	密	
2	土師器	へソ皿	B地区	S D 01 k11 Ⅲ層	7.1	1.6	-	10/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密	
3	瓦器	椀	B地区	S D 01 l12	(7.5)	1.8	-	5/12	灰白 (10Y R 8/1)	密	外面布痕跡の ちしほり
4	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 Ⅲ層	6.8	1.8	-	6/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密 径1mm 前後の 茶・うす茶・白色砂粒を 含む	
5	土師器	皿	B地区	S D 01 k13 Ⅲ層	(7.0)	(1.6)	-	2/12	灰白 (10Y8/2)	密 径0.1mm 以下の黒・ 灰色粒を主に、まれに径 2mm 長石を含む	
6	土師器	皿	B地区	S D 01 Ⅲ層	(8.0)	(1.3)	-	3/12	にぶい橙 (5YR7/4)	密	内面工具痕あ り
7	土師器	皿	B地区	S D 01 g9 Ⅲ層直上	(7.8)	1.3	-	6/12	にぶい橙 (5YR7/4)	密	
8	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 Ⅲ層	(7.9)	1.3	-	4/12	にぶい褐 (7.5YR6/3)	密	
9	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 Ⅲ層	8.0	1.5	-	8/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	やや密 径0.5mm 以下の 黒色砂粒を少し含む	
10	土師器	皿	B地区	S D 01 k10 Ⅲ層	7.6	1.4	-	完形	にぶい橙 (7.5YR7/3)	密 径1mm 大の白色・ 灰色砂粒、赤色斑粒・雲 母含む	
11	土師器	皿	B地区	S D 01 g9 Ⅲ層直上	8.2	1.5	-	7/12	にぶい橙 (5YR7/4)	密 径1.5mm 以下の赤色 斑粒・白色砂粒を含む	
12	土師器	皿	B地区	S D 01 k10 Ⅲ層	7.8	1.5	-	6/12	灰白 (2.5Y7/1)	密 径1mm 以下の白色・ 黒色・褐色砂粒含む、雲 母含む	
13	土師器	皿	B地区	S D 01 k12 Ⅲ層	(7.8)	1.5	-	5/12	にぶい橙 (7.5YR7/3)	密 径1mm 以下の白色 砂粒含む	
14	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 Ⅲ層	(8.0)	1.5	-	3/12	にぶい橙 (7.5YB7/3)	密 径1mm 以下の赤色 斑粒と雲母を含む	
15	土師器	皿	B地区	S D 01 k・l14	(9.0)	1.1	-	2/12	にぶい橙 (5YR7/4)	密	
16	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 Ⅲ層	8.2	1.8	-	6/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	密 雲母含む	
17	土師器	皿	B地区	S D 01 k8 地山直上	(7.6)	1.3	-	2/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密	
18	土師器	皿	B地区	S D 01 l11 Ⅲ層	(9.0)	1.8	-	3/12 強	灰白 (2.5Y8/2)	密	
19	土師器	皿	B地区	S D 01 l11 Ⅲ層	8.6	1.6	-	7/12	外：にぶい橙 (7.5Y7/3) 内：灰黄 (2.5Y7/2)	密	
20	土師器	皿	B地区	S D 01 Ⅲ層	8.2	1.9	-	ほぼ完 形	にぶい橙 (5YR7/4)	密	
21	土師器	皿	B地区	S D 01 l11 Ⅲ層	(12.2)	2.6	-	4/12	浅黄橙 (7.5YR8/4)	やや粗 径1mm 以下の 白色・乳白色粒を含む	
22	土師器	皿	B地区	S D 01 k10 Ⅲ層	(12.0)	2.0	-	3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密	
23	土師器	椀	B地区	S D 01 k・l14	(12.6)	(3.3)	-	3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	
24	瓦器	椀	B地区	S D 01 k9 Ⅲ a層	12.8	3.5～ 4.2	5.0～ 5.3	完形	外：黒色 (N2/1) 内：灰 (N4/1) 断： 灰白 (7.5Y8/1)	密 径0.5mm 程の黒色粒 を含む	重ね焼き痕の 上からミガキ が入る
25	瓦器	椀	B地区	S D 01 k12 Ⅱ・Ⅲ層	12.0	3.8	-	6/12 強	灰 (N5/0)	密	
26	瓦器	椀	B地区	S D 01 k12	11.8～ 12.4	4.0	-	ほぼ完 形	灰 (N4/0)	密	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
27	瓦器	椀	B地区	S D 01 k12 Ⅲ層	(11.1)	4.4	(4.3)	2/12	灰 (N4/0)	密	
28	瓦器	椀	B地区	S D 03 k6 Ⅲ層	(12.0)	4.1	-	1/12 強	灰 (N4/4)	密	
29	瓦器	椀	B地区	S D 01 k12 Ⅲ層	11.3	4.3	-	9/12	灰 (N5/0)	密	
30	瓦器	椀	B地区	S D 01 k2 Ⅲ層	12.2	4.0 ~ 4.3	5.1	10/12	灰 (N4/0)	密	
31	瓦器	椀	B地区	S D 01 Ⅲ層	12.0 ~ 12.2	3.9	4.5	6/12 底部 9/12	外: 灰 (N4/1) 内: 暗灰 (N3/1) 断: 灰 (10Y5/1)	密	
32	瓦器	椀	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層	12.0	4.0	-	ほぼ完 形	暗灰 (N3/0)	密	
33	瓦器	椀	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層	(12.0)	3.7	-	2/12	灰白 (7.5Y7/1) ~ 灰白 (N4/0)	密	
34	瓦器	椀	B地区	S D 01 k13 Ⅲ層	12.6	4.0	-	8/12	黒 (N2/0)	密	
35	瓦器	椀	B地区	S D 01 k12 Ⅲ層	(11.0)	4.2	-	1.5/12	灰白 (N5/0)	密	
36	瓦器	椀	B地区	S D 01 k13 Ⅱ層	12.2	4.4	-	9/12	明褐 (7.5YR5/6) ~ 灰 (N4/0)	密	
37	瓦器	椀	B地区	S D 01 h8 Ⅲ層	(12.4)	(3.8)	-	2/12	灰 (N4/0)	密	
38	瓦器	椀 / 皿	B地区	S D 01 k11 Ⅲ層	-	(1.2)	(5.0)	底部 1/12	オリープ黒 (5Y3/1)	やや密	
39	瓦器	椀	B地区	S D 01 k10 Ⅲ層	12.7	3.9	-	11/12	オリープ黒 (5Y3/1) 暗灰 (N3/0)	密 径 1 mm 以下の黒灰 色、雲母状の砂粒を含む	外面一部工具 痕あり
40	瓦器	椀	B地区	S D 01 k9 Ⅲ a 層	(10.4)	4.2	4.0 ~ 4.2	2/12	外: 灰 (N4/1) 内: 暗灰 (N3/1) 断: 灰白 (10Y9/1)	やや密	
41	瓦器	椀	B地区	S D 01 k10 Ⅲ層	11.5 ~ 12.0	3.5	-	11/12	灰 (N5/0)	密	
42	瓦器	椀	B地区	S D 01 Ⅲ a 層	(12.2 ~ 12.4)	3.8 ~ 4.1	4.6 ~ 4.9	6/12	外: オリープ黒 (7.5Y3/1) 内: 灰 (N4/1) 断: 灰白 (7.5Y8/1)	密 径 1 mm 程の石が極 少量入る	
43	瓦器	椀	B地区	S D 01 k13 Ⅲ層	(13.0)	(3.7)	-	1/12 強	灰 (N4/0)	密	
44	瓦器	椀	B地区	S D 03 断面 d Ⅲ b 層	12.4 ~ 12.5	3.6 ~ 4.0	4.6 ~ 5.0	6/12	外: 灰白 (7.5Y8/1) 内・断: 灰白 (2.5Y7/1)	やや粗 径 1 ~ 2 mm 程 の黒色・白色粒を含む	
45	瓦器	椀	B地区	S D 03 k6 Ⅲ層	(11.8)	(3.3)	-	1/12	灰 (N4/4)	密	
46	瓦器	椀	B地区	S D 03 k7 Ⅲ層 (最上 層)	12.0	4.1	-	10/12	灰 (N5/0)	密	口縁端部わず かにつまみ上 げ
47	瓦器	椀	B地区	S D 03 k8 Ⅲ層直上	13.0	4.4	-	完形	暗黒 (N3/0)	密 銀色の雲母含む	
48	瓦器	椀	B地区	S D 01 g9 Ⅲ層直上	(11.4)	3.8	-	3/12	灰 (N5/0) 灰白 (7.5Y8/1)	密 径 3 mm 以下の白色、 雲母状の砂粒を含む	
49	瓦器	椀	B地区	S D 01 g9	12.9	4.2	-	完形	灰 (N4/0)	密	
50	瓦器	椀	B地区	S D 01 g9	13.0	4.4	5.2	完形	灰 (N 5/0) 断: 灰白 (N 8/0)	やや密 径 1 mm 程の石 英・長石をわずかに含む	
51	瓦器	椀	B地区	S D 01 h・i 8・9 Ⅲ層直 上 (砂層)	(12.4)	3.7	-	2/12	灰 (N5/0)	密	
52	瓦器	椀	B地区	S D 01 h・i 8・9 Ⅲ層直 上 (砂層)	(12.0)	3.8	-	1/12 以下	灰白 (5Y7/1) ~ 暗灰 (N3/0)	密	
53	瓦器	椀	B地区	S D 01 g9 Ⅲ層直上	(12.6)	(3.1)	-	2/12	灰 (N5/0) 灰白 (2.5Y8/2)	密 径 1 mm 以下の茶色 斑粒、径 3 mm 以下の白 色砂粒を含む	

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
54	瓦器	椀	B地区	S D 01 k11 Ⅲ層	(12.0)	(2.9)	-	1/12	黒 (N2/0)	密	
55	瓦器	皿	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層	(8.2)	(1.5)	-	1/12 強	外：褐灰 (7.5YR6/1) 内：褐灰 (7.5YR5/1)	密	
56	瓦器	皿	B地区	S D 01 k11 Ⅲ層	(10.3)	(1.7)	-	4/12	灰白 (2.5Y7/1)	密	
57	須恵器	鉢	B地区	S D 01 g9 Ⅲ層直上	(22.0)	(3.3)	-	1/12	黒 (N2/0) 灰 (N5/0)	密 径3mm以下の白色・ 黒色砂粒を含む	東播系
58	瓦質土器	鍋	B地区	S D 01 g9 Ⅲ層直上	-	(2.0)	-	-	灰 (7.5Y5/1) 灰 (5Y4/1)	密 径3mm以下の白濁色・ 白色砂粒を含む	
59	瓦質土器	鍋	B地区	S D 01 g9 Ⅲ層直上	(40.2)	(2.1)	-	1/12	暗灰 (N3/0) 灰 (7.5Y6/1)	密 径2.5mm以下の白濁色・ 白色砂粒、茶色斑粒を含む	
60	炆器	甕	B地区	S D 01 Ⅲ層	-	(9.9)	-	-	外：灰白 (5Y7/1) 内：灰褐 (5YR4/2)	やや粗 径1mmまでの 白・茶・黒色砂粒を含む	常滑系
61	炆器	甕	B地区	S D 03 l6 Ⅱ層最下層	-	(6.3)	-	-	外：灰黄褐 (10YR5/2) 内：にぶい赤褐 (5YR4/3)	やや粗 径1mm前後の 白・茶色砂粒を含む	常滑系、内面に 漆付着
62	陶磁器	椀	B地区	S D 01 Ⅲ層	(17.4)	(4.2)	-	1/12	素地：灰白 (5Y8/2) 釉：浅黄 (5Y7/3)	やや粗 径1mm以下の 黒色砂粒を含む	古瀬戸
63	陶磁器	椀	B地区	S D 01 k11 Ⅲ層	-	(2.4)	5.0	底部 12/12	素地：灰黄 (2.5Y7/2) 釉：オリープ黄 (5Y6/3)	密	古瀬戸
64	磁器	椀	B地区	S D 01 Ⅲ層	(15.0)	(5.0)	-	1/12 以下	オリープ灰 (2.5GY6/1)	精良	青磁椀Ⅱ - b 類
65	磁器	椀	B地区	S D 01 Ⅲ層	<10.6>	(3.2)	-	-	素地：灰白 (N7/0) 釉：灰オリープ (7.5Y5/2)	密	青磁椀Ⅱ - b 類
66	磁器	椀	B地区	S D 01 j・k 9	-	(2.3)	(3.4)	底部 5/12 弱	灰白 (2.5GY8/1)	密	白磁
67	陶器	椀	B地区	S D 01 Ⅲ層直上	-	(1.7)	4.0	底部 6/12	外・断：灰白 (N8/0) 内：黒 (7.5Y2/1)	密	天目
68	土師器	皿	B地区	S D 01 k・l 10～12	(6.0)	1.4	-	3/12	明褐灰 (7.5YR7/2)	密	
69	土師器	皿	B地区	S D 01 k・l9 Ⅱ層最下層	(6.8)	1.4	-	1/12	橙 (5YR7/6)	密 径1mm以下の赤色 斑粒を含む	
70	土師器	皿	B地区	S D 01 Ⅱ層最下層	(6.6)	1.2	-	2/12 強	橙 (2.5YR7/6) 底部：赤灰 (2.5YR6/1)	密 径3mm大の明褐色 石粒1つ、径0.5mm以下 の赤褐色砂粒を少し含む	
71	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 Ⅱ層最下層	-	(1.3)	-	-	橙 (5YR6/6) ～にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	
72	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 Ⅱ層最下層	(8.0)	(1.3)	-	1/12	橙 (5YR6/6)	密	
73	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 Ⅱ層最下層	(7.6)	1.2	-	3/12	浅黄橙 (7.5YR8/4)	密	
74	土師器	皿	B地区	S D 01 Ⅱ層最下層	(8.6)	1.5	-	2/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	
75	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 Ⅱ層最下層	(8.6)	(1.5)	-	2/12 強	にぶい橙 (7.5YR7/3)	密	
76	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 Ⅱ層最下層	(8.0)	(1.5)	-	1/12	橙 (5YR6/6)	密	
77	土師器	皿	B地区	S D 01 k・l 12 Ⅱ層最下層	(8.0)	1.2	-	3/12	赤灰 (2.5YR5/3)	やや粗 径0.5mm前後の 白・灰色砂粒を少し含む	
78	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 Ⅱ層最下層	(8.0)	(1.2)	-	3/12	橙 (5YR6/6)	密	



報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
79	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 II層最 下層	(8.6)	1.5	-	7/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	
80	土師器	皿	B地区	S D 01 111 II層最下層	(12.4)	(1.7)	-	1/12	外：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内：橙 (5YR6/6)	密	
81	土師器	皿	B地区	S D 01 k12 112 II層最下層	(12.6)	(2.9)	-	2/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 径 0.5mm 以下の白・ 灰色粒を含む	
82	瓦器	椀	B地区	S D 01 111 II層最下層	(11.4)	(3.1)	-	2/12 弱	暗灰 (N3/0)	密	
83	瓦器	椀	B地区	S D 01 16 II層最下層	(11.8)	(3.9)	-	5/12	黒 (5Y2/1)	密	
84	瓦器	椀	B地区	S D 01 k9 19 II層 最下層	(11.4)	3.5	-	2/12	灰 (N4/0) 灰白 (10Y8/1)	密 径 4 mm 以下の黒灰 色砂粒、径 1 mm 以下の 白色砂粒を含む	
85	瓦器	椀	B地区	S D 01 k12 112 II層最下層	(11.8)	3.8	-	4/12	暗灰 (N4/0)	密	
86	土師器	へソ皿	B地区	S D 01	7.4	1.5	-	完形	浅黄橙 (7.5YR8/4) ~ 浅 黄橙 (10YR8/3)	密	
87	土師器	へソ皿	B地区	S D 01-1 北端	(7.4)	1.8	-	4/12 強	灰白 (10YR8/2)	密 径 1 mm 以下の淡褐 色砂粒少量、径 1 mm 以 下の白色砂粒微細量含む	
88	土師器	皿	B地区	S D 01-1 北端	(7.4)	1.2	-	6/12	淡橙 (5YR8/3)	密 径 1 mm 以下の明褐 色砂粒少量含む	
89	土師器	皿	B地区	S D 01k・1 10 ~ 12 ~ 12	(8.0)	1.5	-	2/12 強	灰黄褐 (10YR6/2)	密	
90	土師器	皿	B地区	S D 01 k12	7.6	1.8	-	完形	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや粗 径 1 mm 大の白 色・灰色・黒色砂粒、赤 色斑粒、雲母を含む	
91	土師器	皿	B地区	S D 01	8.1	1.4	-	ほぼ完 形	にぶい黄橙 (10YR7/2)	やや密 径 1 mm 大の白 色砂粒、雲母含む	
92	瓦質 土器	ミニチ ユア土 器	B地区	S D 01 k9	2.1	3.5	-	ほぼ完 形	灰白 (10YR7/1)	密	
93	瓦器	椀	B地区	S D 01	11.9	4.4	4.5	ほぼ完 形	灰 (7.5Y4/1) ~ 灰白 (5Y7/2)	やや密	
94	瓦器	椀	B地区	S D 01 k・1 10 ~ 12	(13.0)	4.2	-	3/12 強	灰白 (N4/0)	密	
95	瓦器	椀	B地区	S D 01	12.0 ~ 13.0	4.3 ~ 5.0	4.2 ~ 5.0	7/12 底部 3/12	外：灰 (5Y5/1) 内： 灰 (N4/1) 断：灰白 (7.5Y8/1)	やや密	
96	瓦器	椀	B地区	S D 01	(12.2)	3.9 ~ 4.5	4.8 ~ 5.0	6/12	黒 (5Y2/1)	密	
97	瓦器	椀	B地区	S D 01	12.2 ~ 12.8	3.4 ~ 3.6	4.2 ~ 4.4	-	外：オリーフ黒 (7.5Y3/1) 内：暗灰 (N3/1) 断：灰白 (5Y7/1)	やや密 径 1 mm 程の白 色粒を含む	
98	瓦器	椀	B地区	S D 01 k・1 10 ~ 12	(12.5)	(3.3)	-	1/12	暗黒 (N3/1)	密	体部内面重ね 焼き痕あり
99	瓦質 土器	羽釜	B地区	S D 01 i9	(30.0)	(1.8)	-	1/12 以下	黒 (N2/0)	密	
100	土師器	へソ皿	B地区	S D 01 h・i 8・9 II層	7.2	1.7	-	完形	にぶい橙 (5YR7/3)	やや粗 径 1 mm 程の石 英・長石含む	
101	土師器	皿	B地区	S D 01 h・i 8・9 II層	(7.6)	1.8	-	3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 径 1 mm 大の褐色砂 粒、赤色斑粒含む	
102	土師器	皿	B地区	S D 01 113 II層	(9.6)	(1.5)	-	3/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 径 1 mm 以下の白色、 雲母状の砂粒・茶色斑粒 を含む	
103	土師器	皿	B地区	S D 01 k・1 10 II層	(9.0)	1.0	-	3/12	橙 (5YR6/6)	密	

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
104	土師器	皿	B地区	S D 01 g8 II層	8.6	1.6	-	6/12	橙 (7.5YR6/6)	やや密	
105	土師器	皿	B地区	S D 01 l13 II層	(7.8)	(1.3)	-	1/12	橙 (5YR6/6)	密 径1mm以下の赤色 斑粒を含む	
106	土師器	皿	B地区	S D 01 k12 II層	(8.0)	1.7	-	3/12	にぶい橙 (5YR7/4)	やや密 径1mm大の褐色 砂粒、赤色斑粒を含む	
107	土師器	皿	B地区	S D 01 l12 II層	(8.0)	1.6	-	5/12	橙 (7.5YR6/6)	やや密	
108	土師器	皿	B地区	S D 01 k11 II層	(7.7)	(1.1)	-	2/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 径0.5mm以下の茶色 粒少し含む	
109	土師器	皿	B地区	S D 01 k12 II層	(8.2)	1.9	-	2/12	外：浅黄橙 (10YR8/4) 内：橙 (2.5YR6/6)	密	
110	土師器	皿	B地区	S D 01 k12 II層	(9.7)	1.9	-	2/12	灰白 (10YR8/2)	密 径1mm大の白色・ 灰色の砂粒含む	
111	土師器	皿	B地区	S D 01 k9 II層	(10.6)	1.5	-	2/12	明褐灰 (7.5YR7/2)	密	
112	土師器	皿	B地区	S D 01 l13 II層	(9.2)	1.4	-	5/12	にぶい橙 (5YR7/4)	密 径1mm以下の赤色 斑粒を含む	
113	土師器	皿	B地区	S D 01 l12 II層	(11.9)	(2.2)	-	1.5/12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	やや密	
114	土師器	皿	B地区	S D 01 k13 II層	(22.0)	(4.1)	-	1/12	灰白 (10YR8/2)	密 径0.5～4mmの白 色粒を少し含む	
115	瓦器	椀	B地区	S D 01 18	(13.4)	4.0	-	2/12	灰白 (N4/0)	密	
116	瓦器	椀	B地区	S D 01 k13 II層	(13.0)	4.5	-	3/12 弱	灰白 (2.5Y8/2) ～黒 (10Y2/1)	密	
117	瓦器	椀	B地区	S D 01 l13 II層	(11.6)	3.9	-	5/12	暗灰 (N3/0)	密 径1mm以下の白色 砂粒を含む	
118	瓦器	椀	B地区	S D 01 l12 II層	(12.0)	4.0	-	3/12	灰 (N4/0)	密	
119	瓦器	椀	B地区	S D 01 II層	13.0	4.5	5.9	3/12	灰 (N4/0) 断：灰白 (10Y7/1)	密	
120	瓦器	椀	B地区	S D 01 k12 II層	12.5	4.0	-	10/12 強	灰 (5Y4/1)	やや密 径1mm以下の 白色粒を含む	
121	瓦器	椀	B地区	S D 01 l13 II層	(12.6)	4.1	-	6/12	灰白 (2.5Y8/2) 灰白 (5Y8/1)	密 径2mm以下の黒灰 色砂粒・茶色斑粒を含む	
122	瓦器	椀	B地区	S D 01 h9 II層	(12.2)	4.0	-	3/12	灰白 (5Y7/1)～ 灰 (N4/0)	密	
123	瓦器	椀	B地区	S D 01 k10 I・II層	(12.6)	4.0	-	1/12 強	灰 (N5/0)	密	
124	瓦器	椀	B地区	S D 01 k10 II層	(12.0)	(2.8)	-	2/12	黒 (7.5Y2/1)	密	
125	瓦器	椀	B地区	S D 01 k8 II層	(13.0)	3.6	-	3/12	灰 (N5/0)	密	
126	瓦器	椀	B地区	S D 01 k13 II層	(13.0)	(4.2)	-	4/12	灰 (N4/0)	密	
127	瓦器	椀	B地区	S D 01 II 層掘削中	(12.9)	(2.9)	-	1.5/12	暗灰 (N3/3)	やや密	
128	瓦器	椀	B地区	S D 01 l12 II層	(11.9)	(3.7)	-	2/12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	やや密	
129	瓦器	椀	B地区	S D 01 k10 II層	(11.7)	(2.9)	-	2/12 弱	黒 (7.5Y2/1)	やや密 径0.5mm以下の 灰・白色砂粒を少し含む	
130	瓦器	椀	B地区	S D 01 k10 I・II層	-	(2.5)	5.4	底部 6/12	灰 (N5/0)	密	
131	瓦器	椀	B地区	S D 01	(13.0)	(3.3)	-	1/12 強	灰白 (10Y4/1)	密	
132	瓦器	椀	B地区	S D 03 k・1 7・6 II層	(11.4)	3.4	-	1.5/12	灰 (N4/0)	密	
133	瓦器	椀	B地区	S D 03 k・1 7・6 II層	(11.6)	(3.4)	-	2/12	灰 (N4/0)	密	
134	瓦器	椀	B地区	S D 03 k7 II層	(12.2)	(3.0)	-	2/12	外：灰 (N5/0) 内：灰白 (5Y8/1)	粗	
135	瓦器	椀	B地区	S D 03 k・1 7・6 II層	(11.4)	(3.3)	-	3/12 強	暗灰 (N3/0)	密	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
136	瓦器	椀	B地区	S D 03 k7 II層	(12.0)	(3.0)	-	2/12	暗灰 (N3/0)	密	
137	瓦器	椀	B地区	S D 03 k7 II層	(12.0)	(3.2)	-	3/12 弱	暗灰 (N3/0)	密	
138	瓦器	椀	B地区	S D 03 k7 II層	-	(1.2)	(6.0)	底部 3/12	暗灰 (N3/0)	密	
139	陶磁器	椀	B地区	S D 01 h・i 8・9 II層	(16.4)	(5.2)	-	1.5/12	素地：にぶい黄橙 (10YR6/3) 釉：淡黄 (2.5Y8/3)	やや密 径0.5～1mm の白砂粒含む、稀に径4 mmも少量あり	古瀬戸
140	陶磁器	椀	B地区	S D 01 112 II層	-	(2.2)	5.2	底部 12/12	素地：灰黄 (2.5Y7/2) 釉：暗オリーブ (7.5Y4/3)	やや密 少量の砂粒を含 む	古瀬戸
141	陶磁器	壺	B地区	S D 01 113 II層	-	(4.8)	-	-	素地：灰白 (2.5Y7/1) 釉：オリーブ黄 (5Y6/3)	密	古瀬戸
142	陶磁器	香炉	B地区	S D 01 II層	(8.0)	2.5	-	口～ 底部 4/12	素地：灰白 (10YR7/1) 釉：浅黄 (7.5Y7/3)	密	古瀬戸
143	須恵器	鉢	B地区	S D 01 k7 II層	(20.0)	(4.0)	-	1/12 以下	灰白 (N7/0)	やや密 径1mm以下の 白色粒を少し含む	東播系、外面 口縁部重ね焼 き痕
144	炆器	甕口縁	B地区	S D 01 k12 II層	-	(4.0)	-	-	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	密 径1mm以下の白色・ 灰色の砂粒含む	常滑系
145	磁器	盤か	B地区	S D 01 111 II層最下 層	(12.6)	3.4	(8.8)	底部 1/12 以下	緑灰 (7.5GY6/1)	精良	青磁、龍泉窯
146	陶器	小壺	B地区	S D 01 h・i 8・9 II層	-	(3.0)	-	体部 1.5/12	外：灰褐 (5YR5/2) 内：灰 (N5/0)	密	茶入れか
147	須恵器	鉢	B地区	S D 01 k13 II層	(30.0)	(5.2)	-	1/12 以下	灰 (N6/0) 重ね焼き部分：黒 (N1.5/0)	密 径0.5mm大の黒色・ 白色砂粒を含む	東播系、口縁 端部外面重ね 焼き痕自然釉 付着
148	須恵器	鉢	B地区	S D 01 k・l 14 II層	(29.8)	(5.9)	-	1/12 以下	灰 (N6/0) 重ね焼き部分：灰 (N5/0)	径3×5mm大の暗灰色 の石粒1つ、径1mm以 下の黒色砂粒、径0.5mm 以下の白色砂粒を含む	東播系
149	瓦質 土器	播鉢	B地区	S D 01 II層	(32.9)	(5.5)	-	1/12 以下	暗黒 (N3/0)	やや粗	
150	瓦質 土器	播鉢	B地区	S D 01 II層	(31.5)	(7.0)	-	1/12 以下	黒 (N2/0)	やや粗 径1mm以下の 白・茶色砂粒を含む	
151	瓦質 土器	播鉢	B地区	S D 01 II層	<26.0>	(7.5)	-	最大 径部 2/12	暗黒 (N3/0)	やや粗	
152	炆器	播鉢	B地区	S D 01 k・l 10 II層	-	(9.2)	(16.0)	底部 2/12	褐灰 (10YR6/1)	やや粗 径3mm以下の 白色砂粒を含む	備前系
153	土師器	皿	B地区	S D 01 k13 I層	(9.4)	(2.1)	-	1/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 径1mm大の白色砂 粒、雲母含む	口縁部スス付 着
154	土師器	皿	B地区	S D 01 113 I層	(8.2)	(0.9)	-	3/12 弱	にぶい橙 (5YR7/4)	密	
155	土師器	皿	B地区	S D 01 k14 I層	(12.2)	(1.7)	-	1/12 強	浅黄橙 (7.5YR8/4)	密	
156	土師器	皿	B地区	S D 01 113 I層	(9.6)	(3.2)	-	1.5/12	灰白 (2.5Y8/2)	密	
157	土師器	皿	B地区	S D 01 113 I層	(19.6)	3.0	-	1/12	にぶい橙 (5YR7/4)	密	
158	瓦器	椀	B地区	S D 01 k14 I層	(11.4)	(4.3)	-	1.5/12	暗灰 (N3/0)	密	
159	須恵器	鉢	B地区	S D 01 上 面	(26.0)	(3.4)	-	1/12 以下	黄灰 (2.5Y6/1)	やや密 極細かい白・黒 色砂粒、金色雲母を含む	東播系
160	須恵器	甕	B地区	S D 01 上 面	-	(4.6)	(16.9)	底部 1/12	暗灰黄 (2.5Y5/2)	やや粗 径1mm前後の 黒・白・茶色砂粒を含む	

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
161	陶磁器	椀	B地区	S D 01 北側攪乱	(10.9)	(4.5)	-	1.5/12	黒褐 (2.5Y3/1) 断： 灰白 (5Y8/1)	密	天目
162	土師器	皿	C地区	S D 02 砂 層	8.0～ 8.3	1.9	-	完形	にぶい褐 (7.5YR6/4)	密 径1mm大の白色砂 粒含むわずかに含む	
163	炆器	甕	C地区	S D 02 1 15・16	-	(4.7)	-	1/12 以下	にぶい橙 (5YR6/3)	やや密 径1mm程の石 英・長石を少量含む	常滑系
164	須恵器	播鉢	C地区	S D 02	(31.4)	(4.8)	-	1/12 以下	灰白 (N7/0)	やや密 径1mm以下の 白色粒を含む	東播系
165	陶磁器	椀	C地区	S D 02	-	(1.7)	4.5	底部 12/12	オリープ灰 (2.5GY5/1)	精良	龍泉窯系青磁
166	土師器	へソ皿	D地区	S D 03 14 Ⅲ層	7.3	2.0	-	8/12	橙 (7.5YR7/6)	密 径1mm以下の白色 砂粒微細量、径0.5mm以 下の赤褐色砂粒微細量含 む	
167	土師器	へソ皿	D地区	S D 03 g4	7.0	1.7	-	ほぼ完 形	橙 (7.5YR7/6)	やや密 径1.5mm以下の 赤褐色砂粒、径1mm以 下の半透明色砂粒、径2 mm以下の灰色砂粒少量、 径1mm以下の白色砂粒 微細量含む	
168	土師器	皿	B地区	S D 03 k6 Ⅲ層	8.2	1.6	-	ほぼ完 形	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密 径0.5mm前後の 白・茶・灰色砂粒を含む	
169	土師器	皿	B地区	S D 03 19	(8.4)	1.5	-	2/12 強	にぶい橙 (7.5YR7/3)	密	
170	土師器	皿	B地区	S D 03 k・1 7	(7.6)	(1.6)	-	4/12	灰白 (2.5Y8/2)	密 径0.5mm以下の灰色 砂粒を含む	
171	土師器	皿	B地区	S D 03 k・1 6 Ⅲ層	8.1	1.3	-	7/12	にぶい橙 (7.5YR7/3)	やや密	
172	土師器	皿	D地区	S D 03 h4 Ⅲ層出土	7.5	1.2	-	完形	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密 径3mm程度の 明褐色砂粒、径0.5mm 以下の赤褐色砂粒、径1 mm以下の褐色砂粒、雲 母を含む	
173	土師器	皿	B地区	S D 01 k7 Ⅱ層	(7.2)	1.6	-	4/12	褐灰 (10YR6/1)	密 径1mm以下の白色 砂粒微細粒含む	
174	土師器	皿	B地区	S D 03 k8 Ⅱ層	8.4	1.7	-	完形	にぶい橙 (5YR7/4)	密 径0.5～2.5mmの白 色粒・シャモットを少し 含む	
175	土師器	皿	B地区	S D 03 k6 Ⅱ層	(7.4)	1.3	-	4/12	橙 (5YR6/6)	密	
176	土師器	皿	D地区	S D 03 j4 Ⅱ層	(8.0)	1.6	-	6/12	橙 (7.5YR7/6)	やや粗 径1mm大の白 色・黒色砂粒を含む	
177	土師器	皿	B地区	S D 03 漆 椀周辺	(8.4)	(1.2)	-	3/12 強	橙 (5YR6/6)	密	
178	土師器	皿	B地区	S D 03 k・1 7	(12.2)	2.0	-	2/12	にぶい橙 (7.5YR7/3) 褐灰 (7.5YR5/1)	密 雲母少量含む	
179	土師器	皿	D地区	S D 03 h4 Ⅱ層	(12.3)	(2.0)	-	2/12 弱	にぶい黄橙 (10YR7/4)	やや密 径0.5mm以下の 薄茶色粒を少し含む、径 1.5mm大の白色粒・半透 明色粒も混じる	
180	土師器	皿	B地区	S D 02 k・1 14	(14.8)	(2.5)	-	3.5/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 径0.5mm以下の赤褐 色砂粒・白色砂粒微細量 含む	
181	瓦器	椀	B地区	S D 03 k6 Ⅲ層	(12.6)	3.5	-	3/12	黒 (N2/0)	密	
182	瓦器	椀	B地区	S D 03 k6 Ⅲ層	12.1	4.1	4.8	ほぼ完 形	暗灰 (N3/0)	密	
183	瓦器	椀	B地区	S D 03 k・1 5・6 Ⅲ層	(13.8)	3.8	(5.6)	2/12	黒 (N2/0)	やや粗 径1mm程の黒 色粒混じる	
184	瓦器	椀	B地区	S D 03 k6 Ⅲ層	(12.3)	3.7	-	2/12	暗灰 (N3/0)	密	
185	瓦器	椀	B地区	S D 03 k・1 5・6 Ⅲ層	12.4～ 12.6	3.7～ 4.3	(4.9～ 5.0)	12/12 底部 4/12	外：灰 (N5/1) 内：灰 (N4/1) 断：灰白 (N8/1)	密	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
186	瓦器	椀	D地区	S D 03 k・l 4 Ⅲ層	(12.6)	3.9	-	4/12	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	密 径1mm以下の黒色 砂粒を少量含む	
187	瓦器	椀	D地区	S D 03 h4 Ⅲ層	(13.6)	3.7	-	3/12	暗灰 (N3/0)	密 径1mm以下の黒色 砂粒微細量含む	
188	瓦器	椀	D地区	S D 03 上 面	(12.8)	3.8	-	1/12 底部 6/12	灰 (N4/0)	やや密 金雲母を少量含 む 素地はマーブル状	
189	瓦器	椀	B地区	S D 03 断面 d	12.0 ~ 12.8	3.5 ~ 4.3	5.3 ~ 5.8	完形	外:灰 (N4/1) 内:灰 (N6/1) 断:灰白 (10Y7/1)	密	
190	瓦器	椀	B地区	S D 01 k・l 5・6 Ⅲ層	(11.4 ~ 11.8)	3.2 ~ 3.4	(6.0 ~ 6.1)	4/12	外:灰白 (2.5Y7/1) 内・断:灰白 (10YR8/1)	やや粗 径1 ~ 3mm 程 の黒色粒子を含む	
191	瓦器	椀	D地区	S D 03 j4 Ⅱ層	11.2 ~ 12.5	3.0 ~ 4.2	-	11/12	外:黒 (10YR2/1) 内:黄褐 (10YR5/6)	密 黒色粒含む	口縁楕円に歪 む、重ね焼き 痕あり
192	瓦器	椀	D地区	S D 03 k・l 4 Ⅲ層	11.9	4.0	-	8.5/12	暗灰 (N3/0)	やや密 径:0.5mm 大の 石粒、径0.5mm 以下の灰 色砂粒を少量含む	
193	瓦器	椀	B地区	S D 03 k・l 5 Ⅱ層	(12.0)	4.0	-	1/12 強	灰白 (7.5Y8/1)	密	
194	瓦器	椀	D地区	S D 03 k・l 4 Ⅲ層	(12.0)	(3.6)	-	4/12	灰黄 (2.5Y7/2)	密 径0.5mm 大の白色・ 灰色・半透明色砂粒微細 量含む	
195	瓦器	椀	B地区	S D 03 k6 Ⅲ層	(12.0)	(3.8)	-	2/12	黒 (N2/0)	密	
196	瓦器	椀	B地区	S D 03 k・l 5 Ⅲ層	(13.0)	3.4	-	1/12 強	暗灰 (N3/0)	密	
197	土師器	皿	D地区	S D 03 k・l 4 Ⅲ層	10.9	(2.9)	-	7/12	橙 (7.5YR7/6)	密 径1mm以下の白色・ 赤褐色砂粒微細量含む	
198	土師器	火鉢	B地区	S D 02 k15・16	幅 (7.3)	(4.8)	厚み 突帯 部 1.5、 1.2	-	にぶい橙 (7.5YR7/3)	密 径1mm以下の赤褐 色砂粒を少量含む	
199	土師器	土鍋/ 土釜	D地区	S D 03 k・l 4 Ⅰ層	-	(6.9)	(17.0)	底部 2/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	粗 径1 ~ 3mm 大の白 色・半透明色・灰色・黒 色砂粒を含む	外面・内面ス ス付着
200	陶磁器	壺/ 瓶子	B地区	S D 03 k7 Ⅱ層	-	-	-	-	素地:灰白 (10YR8/1) 釉:オリーブ黄 (7.5Y6/3)	密 極細かい黒色砂粒を 含む	灰釉、古瀬戸
201	陶磁器	卸目皿	D地区	S D 03 j4	-	(2.1)	(10.0)	-	灰黄 (2.5Y7/2)	密 径1mm以下の白色 砂粒微細量含む	灰釉、古瀬戸
202	陶磁器	椀	D地区	S D 03 j4 Ⅱ層	(12.6)	(1.8)	-	1/12 以下	灰黄 (2.5Y7/2)	精良	白磁椀Ⅳ類
203	陶磁器	椀	D地区	S D 03 k・l 4 Ⅲ層	-	(3.2)	(5.4)	底部 2/12	素地:灰白 (5Y7/2) 釉:灰白 (5Y7/1)	精良	白磁椀Ⅴ - 4a 類
204	土師器	皿	B地区	S K 11	(7.9)	(1.9)	-	1/12	橙 (7.5YR7/6)	やや粗 径0.5mm 以下の 白・茶色砂粒少量、金色 雲母を含む	
205	土師器	皿	B地区	S K 11	(8.7)	(1.4)	-	3/12	灰黄 (2.5Y6/2)	やや粗 径0.5mm 以下の 白・茶色砂粒、金色雲母 を含む	
206	瓦器	椀	B地区	S K 11	(11.9)	(2.5)	-	1/12	灰 (N4/0)	やや密	
207	瓦器	椀	B地区	S K 11	(12.5)	3.2	-	2/12	暗灰 (N3/0)	やや密	全体に摩滅著 しい 歪みあ り
208	瓦器	椀	B地区	S K 11	(12.8)	3.6	5.4	6/12	暗灰 (N3/0)	やや密	全体に摩滅著 しい 歪みあ り
209	瓦器	椀	B地区	S K 11	-	(1.5)	(4.9)	底部 4/12	暗灰 (N3/0)	やや密	
210	瓦器	椀	B地区	S K 11	-	(1.2)	(4.0)	底部 1/12 以下	暗灰 (N3/0)	やや密	



国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
211	陶磁器	椀	B地区	S K 11	-	(1.6)	4.7	底部 12/12	素地：灰白 (2.5Y7/1) 釉：オリ-ブ灰 (10Y6/2)	密	龍泉窯系青磁
212	陶磁器	-	B地区	S K 11	(10.7)	(0.7)	-	1/12 以下	にぶい黄 (2.5Y6/3)	密	肥前系
213	土師器	皿	B地区	S K 36	(6.2)	1.2	-	2/12 弱	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密 径1mm以下の 赤茶色の粒を多く含む	
214	土師器	皿	B地区	S K 36	7.9	1.9	-	6/12	浅黄橙 (10YR8/3)	密 径1mm以下の赤褐色 砂粒を含む	
215	土師器	皿	B地区	S K 36	(12.2)	(1.8)	-	2/12 弱	灰白 (7.5YR8/2)	密 径0.5mm以下の黒っぽい 粒を含む、径1mm の白い粒も混じる	
216	土師器	皿	B地区	S K 36	(12.8)	(2.3)	-	2/12 弱	灰白 (7.5YR8/2) ～浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 径1mm以下の赤茶 色の粒、径0.5mm以下の 灰色っぽい粒・半透明の 粒を含む	
217	瓦器	椀	B地区	S K 36	(11.6)	(3.4)	-	1/12	暗灰 (N3/0～ 4/0)	密	
218	瓦器	椀	B地区	S K 36	(12.2)	3.6	-	1/12 強	外：暗灰 (N3/0) 灰白 (2.5Y7/1) 内：暗灰 (N3/0)	やや粗 径0.5mm以下の 灰色っぽい粒・白い粒を 含む	
219	瓦器	椀	B地区	S K 36	(11.8)	(3.0)	-	3/12	灰白 (2.5Y8/1)	やや密 径0.5mm以下の 灰色っぽい粒・白い粒を 含む	
220	瓦器	椀	B地区	S K 36	(13.5)	3.5	-	1/12	外：灰黄 (2.5Y7/2) 内：黒 (N3/2) 一部	やや密 径1mm以下少量 の白砂粒・雲母含む	
221	土師器	皿	B地区	S K 40	(6.0)	1.0	-	2/12	橙 (5YR7/6)	やや密	
222	土師器	皿	B地区	S K 40	-	(1.1)	-	1/12 以下	にぶい橙 (5YR7/4)	密 径0.5mm以下の黒っぽい 粒・赤茶色の粒を少し含む	
223	土師器	皿	B地区	S K 40	(8.2)	1.4	-	2/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密	
224	土師器	皿	B地区	S K 40	(8.5)	(1.4)	-	2/12 弱	橙 (2.5YR7/6)	やや粗 径1mm以下の 白い粒・赤茶色の粒を含む	
225	土師器	皿	B地区	S K 40	8.5	1.9	-	完形	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密	
226	土師器	皿	B地区	S K 40	(12.9)	2.0	-	2/12	灰白 (7.5Y R 8/2) 断：灰 (N5/0)	密 径1mm以下の半透明 の粒・白い粒を少し含む	
227	瓦器	椀	B地区	S K 40	-	(1.4)	5.0	底部 12/12	黄灰 (2.5Y6/1)	密	
228	土師器	皿	B地区	S K 37	(11.2)	1.5	-	1.5/12	淡橙 (5YR8/4)	やや密	
229	土師器	皿	B地区	S K 37	(7.8)	(1.1)	-	1/12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	やや密	
230	土師器	皿	B地区	S K 37	(7.9)	1.6	-	1/12	浅黄橙 (10YR8/3)	やや密	
231	土師器	皿	B地区	S K 37	(8.0)	(1.5)	-	3/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	やや密	
232	土師器	皿	B地区	S K 37	(7.3)	(1.3)	-	2/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密	
233	土師器	皿	B地区	S K 37	(8.8)	(1.5)	-	1.5/12	橙 (7.5YR7/6)	密	
234	瓦器	椀	B地区	S K 37	(12.0)	(2.7)	-	1/12 強	灰 (5Y5/1)	やや密	
235	瓦器	椀	B地区	S K 37	(11.8)	(2.7)	-	1/12	灰 (N4/0)	密	口縁端部外面 沈線あり 歪みあり
236	瓦器	椀	B地区	S K 37	(14.5)	4.2	-	1/12	灰 (N4/0)	密	
237	土師器	皿	B地区	S K 27	(7.6)	1.1	-	1.5/12	にぶい黄橙 (10YR7/2)	やや密	
238	土師器	皿	B地区	S K 27	(7.9)	0.9	-	1.5/12	灰白 (10YR8/2)	やや密	
239	土師器	皿	B地区	S K 27	(14.9)	(2.0)	-	1/12	浅黄橙 (10YR8/3)	やや粗 径0.5～2mm の白色砂粒を少量含む	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
240	瓦器	椀	B地区	S K 27	(12.2)	3.9	(4.8)	4/12	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	密	
241	瓦器	椀	B地区	S K 27	(12.0)	(3.7)	-	1/12	黄灰 (2.5Y5/1) ~灰白 (2.5Y7/1)	やや密	
242	瓦器	椀	B地区	S K 27	-	(1.9)	(4.2)	底部 6/12	暗灰 (N3/0)	密	
243	瓦質 土器	風炉	B地区	S K 27	<39.2>	(9.4)	-	-	暗灰 (N3/0)	やや粗 径1mm前後の 白・黒・茶色砂粒を含む	
244	土師器	皿	B地区	S K 18	(7.9)	(1.5)	-	1/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密	
245	瓦器	椀	B地区	S K 18	(13.0)	(3.5)	-	1/12 強	灰白 (7.5Y7/1)	密	
246	瓦器	椀	B地区	S K 18	(12.0)	(3.0)	-	1/12	灰 (N4/0) 灰白 (7.5Y8/1)	密	
247	瓦器	椀	B地区	S K 18	(12.0)	(3.0)	-	1/12	黒 (7.5Y2/1)	密	
248	瓦器	椀	B地区	S K 18	(12.0)	(4.2)	-	2/12	灰 (N4/1)	やや密	
249	瓦器	椀	B地区	S K 18	(11.9)	(2.7)	-	2/12	暗灰 (N3/0)	やや密	
250	須恵器	甕	B地区	S K 18	(41.6)	(5.3)	-	1.5/12	灰 (N5/0)	やや粗 径1~3mmの 白・黒色砂粒を多く含む	
251	須恵器	甕	B地区	S K 18	-	(14.1)	-	-	黄灰 (2.5Y5/1)	やや粗 径1mm前後の 白・黒色砂粒を含む	
252	土師器	皿	B地区	S K 39	(6.4)	1.0	-	2/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	
253	土師器	皿	B地区	S K 39	8.4	1.7	-	6/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 径0.5mm大の明褐色 砂粒、雲母を含む	
254	瓦器	椀	B地区	S K 39	(11.2)	(5.5)	-	2/12 弱	暗灰 (N3/0)	密	
255	陶磁器	卸目皿	B地区	S K 39	(12.8)	2.4	(4.3)	1/12 以下	素地：にぶい黄橙 (10YR7/2) 釉：灰オリーブ (5Y6/2)	やや密	古瀬戸
256	土師器	へソ皿	B地区	S B 431 (S P 62)	(7.4)	(1.8)	-	4.5/12	浅黄橙 (10YR8/3)	密 径1mm以下の明褐色・ 灰色・白色砂粒を含む	
257	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 44)	(7.0)	(1.4)	-	1.5/12	浅黄橙 (7.5YR8/4)	密 径1mm以下の淡褐色 砂粒を含む	
258	土師器	皿	B地区	S B 431 (S K 297)	(7.4)	1.3	-	3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密	
259	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 28)	(6.8)	(1.2)	-	2/12 弱	にぶい橙 (7.5YR6/4)	やや密	
260	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 34)	(8.6)	(1.5)	-	1/12 強	外：黒褐 (7.5YR3/1) 内：にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	口縁内面ス ス附着 (灯明皿 か)
261	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 26)	(7.9)	1.1	-	3/12 弱	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密 径0.5mm以下の 茶・灰色砂粒少、雲母 も含む	
262	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 24)	(7.3)	(1.2)	-	1/12	灰白 (7.5YR8/1)	密	
263	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 26)	8.1	1.5	-	ほぼ完 形	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや粗 径1mm以下の 茶・白・灰色砂粒、極細 かい雲母含む	内外面スス ス附着
264	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 31)	(7.8)	(1.7)	-	1/12	浅黄橙 (10YR8/4)	密	
265	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 20) h12	(9.5)	(1.5)	-	1/12	外：淡橙 (5YR8/3) 内：橙 (2.5YR7/6)	密 径0.5mm以下の白い 粒・極細粒の黒っぽい粒・ 半透明の粒を少し含む	
266	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 41)	8.3	1.6	-	9/12	浅黄橙 (10YR8/3)	やや密 極細かい砂粒 (茶・白・雲母含む)	
267	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 41)	(8.9)	1.5	-	5/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや粗 極細かい砂粒 (灰・白・赤褐色・金色雲 母含む)	外面二次被熱 か
268	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 33)	(8.6)	1.6	-	1/12 強	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 極細粒の白っぽい粒・ 茶色っぽい粒を少し含む	

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
269	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 339)	7.5	2.6	-	7/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 径 0.5mm 以下の赤褐色砂粒微細量含む	
270	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 251)	(10.0)	2.2	-	1/12	にぶい橙 (5YR6/4)	やや密 径 1 mm 大の白色・灰色砂粒を含む	
271	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 28)	(10.0)	1.5	-	4/12	淡赤橙 (2.5Y R 7/3)	密 径 0.5mm 以下の赤茶色の粒・灰色っぽい粒を少し含む	
272	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 31)	(9.9)	(1.8)	-	1.5/12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	やや密	
273	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 24)	(11.4)	2.0	-	1/12 強	灰白 (7.5YR8/2) 断：灰 (N4/0)	密 径 1 mm 以下の赤茶色の粒、径 0.5mm 以下の白い粒・黒っぽい粒を少し含む	
274	土師器	皿	B地区	S B 431 (S P 45)	(12.7)	2.0	-	口～ 体部 2/12	浅黄 (2.5Y7/3)	密	
275	瓦器	椀	B地区	S B 431 (S P 23)	12.6	3.7	4.5	6/12	灰 (10Y4/1)	やや粗	
276	瓦器	椀	B地区	S B 431 (S P 251)	(12.0)	(3.8)	-	4/12	灰白 (2.5Y8/1～ 7/1)	密 径 2 mm 以下の灰色砂粒を少量含む	
277	瓦器	椀	B地区	S B 431 (S P 46)	(12.6)	(2.7)	-	1/12	灰 (N4/0)	密	
278	瓦器	椀	B地区	S B 431 (S P 32)	(12.0)	(2.5)	-	1/12 以下	灰 (5Y4/1)	密	
279	瓦器	椀	B地区	S B 431 (S P 41)	(13.8)	(3.0)	-	1/12	黄灰 (2.5Y4/1)	やや密	
280	瓦器	椀	B地区	S B 431 (S P 31)	(12.0)	(3.0)	-	1/12	暗黒 (N3/3)	密	
281	瓦器	椀	B地区	S B 431 (S P 41)	(13.8)	(2.0)	-	1/12 以下	暗灰 (N3/0)	やや密	
282	瓦器	椀	B地区	S B 431 (S P 28)	-	(0.7)	(4.6)	底部 4/12	灰白 (2.5Y7/1)	密 径 1 mm 以下の黒っぽい粒・径 0.5mm 以下の薄茶色の粒を少し含む	
283	陶磁器	椀	B地区	S B 431 (S P 293)	(15.8)	(3.2)	-	1/12 以下	素地：灰白 (2.5Y3/1) 釉：灰オリーブ (7.5Y6/2)	密	青磁
284	瓦器	椀	B地区	S B 431 (S P 279)	11.7～ 12.0	3.15～ 3.6	5.6	完形	外：灰白 (7.5Y7/1) 内：暗灰 (N3/1)	やや粗 径 4 mm 程の砂礫を含む	
285	炆器	壺	B地区	S B 431 (S P 233)	-	(8.8)	-	1/12 以下	黒 (2.5GY2/1)	やや密 径 2 mm 以下の白色砂粒、径 0.5mm 大の黒色砂粒を含む	外面自然釉付着、常滑系
286	陶磁器	椀	B地区	S B 431 (S P 25)	(13.7)	(3.5)	-	1/12 以下	素地：灰白 (N7/0) 釉：明オリーブ灰 (2.5GY7/1)	密 極細粒の白い粒・黒っぽい粒を含む	青磁椀Ⅳ類、 内面沈線あり
287	瓦質 土器	播鉢	B地区	S B 431 (S P 251)	(25.5)	(10.9)	-	1/12	暗灰 (N3/0)	やや粗 径 1 mm 前後の白・灰色砂粒を多く含む	
288	土師器	皿	B地区	h10	(10.4)	2.0	-	2/12	灰白 (10YR8/2)	密	
289	瓦器	椀	B地区	g11	(12.4)	3.6	-	2/12	灰黄 (2.5YR7/2) ～黒 (5Y2/1)	密	
290	瓦器	椀	B地区	g 13 か	12.0	4.0	-	9/12	暗黒 (N3/0)	密	
291	炆器	甕	B地区	g13	-	(8.9)	-	-	外：灰オリーブ (7.5Y4/2) 内：灰 (5Y6/1)	密 径 1.5mm 以下の白色粒を含む	体部外面自然 釉付着、常滑 系
292	陶磁器	椀	B地区	g10	(11.5)	(5.0)	-	口～ 体部 2/12	素地：灰白 (10YR8/2) 釉：黒 (N1.5/0)	精良	天目、古瀬戸 後期
293	陶磁器	椀	B地区	北壁攪乱	(13.8)	(1.8)	-	1/12 以下	素地：灰白 (7.5Y8/1) 釉：オリーブ灰 (5GY6/1) より明 るい	密	青磁椀Ⅱ - b 類、龍泉窯

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
294	陶磁器	椀	B地区	h11	-	(0.9)	(3.0)	底部 3/12 強	灰黄 (2.5Y7/2)	密	白磁
296	土師器	皿	B地区	S X 303	(7.6)	(1.4)	-	3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密 径 0.5mm 以下の 茶・灰色砂粒、少量の雲 母を含む	
297	土師器	皿	B地区	S X 303 北東	(7.8)	1.3	-	4/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密 径 0.5mm 以下の 茶・白・灰色砂粒を含む	
298	土師器	皿	B地区	S X 303 北東	(8.3)	1.4	-	4/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密 径 0.5mm 以下の 茶・灰色砂粒を含む	
299	土師器	皿	B地区	S X 303 北西	(7.9)	1.1	-	2/12	にぶい橙 (5YR7/3)	やや密 径 1mm までの 白・灰色砂粒、少量の雲 母を含む	
300	土師器	皿	B地区	S X 303	(8.7)	1.6	-	2.5/12	にぶい橙 (10YR7/3)	やや密 極細かい茶・灰 色砂粒を含む	
301	土師器	皿	B地区	S X 303 南側焼土付 近	(8.8)	1.2	-	2/12 強	にぶい橙 (-7/4)	密 径 0.5mm 以下の赤褐 色砂粒を含む	
302	土師器	皿	B地区	S X 303 北西	(11.7)	2.3	-	1.5/12	浅黄橙 (10YR8/3)	やや密 径 0.5mm の茶・ 白色砂粒を少し含む	
303	瓦器	椀	B地区	S X 303 北東隅	(14.6)	(4.7)	4.7 ~ 5.0	2/12 底部 12/12	外：灰 (N4/1 ~ 6/1) 内：灰 (N5/1 ~ 7/1) 断：灰白 (10Y8/1)	やや密	
304	瓦器	椀	B地区	S X 303 北西	12.9	(3.4)	-	1.5/12	灰 (N4/0)	やや粗 径 1 mm 以下の 黒・白色砂粒を含む	
305	瓦器	椀	B地区	S X 303	(12.4)	3.5	-	2/12	灰白 (5Y8/1)	密 径 1 mm 以下の灰色 砂粒を微細量含む	
306	陶磁器	椀	B地区	S X 303 北東	-	(1.1)	(4.4)	底部 6/12	素地：灰黄 (2.5Y7/2) 釉：オリブ黄 (7.5Y6/3)	密 径 0.5 ~ 1mm の白色 粒を少し含む	古瀬戸
307	須恵器	鉢 (片 口)	B地区	S X 303 北西	(28.5)	(6.8)	-	1/12 以下	灰 (N6/0)	やや粗 径 0.5 ~ 4mm の 白・灰色砂粒を含む	東播系
309	土師器	皿	B地区	S B 433 (S P 185)	(6.8)	1.3	-	3/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密 径 0.5mm 以下の 茶色砂粒を少し含む	
310	土師器	皿	B地区	S B 433 (S P 13)	(6.8)	1.1	-	3/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密 極細かい砂粒・ 雲母含む	
311	土師器	皿	B地区	S B 433 (S P 193) h7	(8.0)	(1.5)	-	2/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	
312	土師器	皿	B地区	S B 433 (S P 128) h7	(6.0)	1.2	-	1/12 強	にぶい黄橙 (10YR7/3)	密	
313	土師器	皿	B地区	S B 433 (S X 30)	8.1	1.5	-	完形	にぶい橙 (5YR7/3)	やや粗 径 1 mm 以下の 石英・長石・雲母をやや 多く含む	
314	土師器	皿	B地区	S B 433 (S X 30)	(7.7)	1.3	-	4/12	橙 (5YR7/6)	やや密 径 1 mm 以下の 黒色粒をわずか含む	
315	土師器	皿	B地区	S B 433 (S P 310 上面)	8.2	1.4	-	ほぼ完 形	浅黄橙 (10YR8/3)	密 径 0.5mm 以下の赤褐 色砂粒を含む	
316	土師器	皿	B地区	S B 433 (S P 13)	(9.8)	1.5	-	1/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密 径 0.5mm 前後の 白・茶色砂粒を少し、金 色雲母含む	
317	土師器	皿	B地区	S B 433 (S P 191)	7.9	1.7	-	11/12	にぶい黄橙 (10YR7/3) 褐灰 (10YR6/1)	密 径 1 mm 以下の灰色 砂粒を少量含む	
318	土師器	小皿	B地区	S B 433 (S P 12)	(9.8)	(1.7)	-	1/12 以下	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密	
319	土師器	皿	B地区	S B 433 (S P 300)	8.4	1.8	-	8/12	橙 (2.5YR7/6)	やや粗 径 1 mm 程の黒 砂粒をわずかに含む	
320	土師器	皿	B地区	S B 433 (S P 123) 柱痕	8.3	2.0	-	7/12	にぶい橙 (5YR7/4)	密 径 0.5mm 以下の赤褐 色砂粒、雲母を含む	

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
321	土師器	皿	B地区	S P 159 i6	(8.0)	1.5	-	1/12 以下	灰白 (10YR8/2)	密	
322	土師器	皿	B地区	S B 433 (S P 139)	(14.8)	(1.8)	-	1/12 以下	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 雲母少量含む	
323	瓦器	椀	B地区	S B 433 (S P 239)	(12.8)	3.8	-	1.5/12	灰白 (5Y8/2)	密 径1mm以下の灰色 砂粒を少量含む	
324	瓦器	椀	B地区	S B 433 (S P 131)	13.5	3.8	-	8/12	灰 (10Y4/1) 灰 白 (5Y8/1)	密 径5mm以下の白色 砂粒を含む	
325	瓦器	椀	B地区	S B 433 (S P 193) h7	(10.8)	3.5	-	1/12 底部 3/12	暗灰 (N3/0～ 4/0) 灰白 (5Y8/1)	密	
326	瓦器	椀	B地区	S P 22 j6	(13.0)	(3.2)	-	1/12	灰白 (5Y7/2)	やや密 径0.5mm以下の 灰色砂粒含む	
327	瓦器	椀	B地区	S B 433 (S P 185)	-		4.6	底部 12/12	暗灰 (N3/0)	密	内面被熱
328	瓦器	椀	B地区	S B 433 (S P 123)	-	(2.0)	(5.6)	底部 3/12	黄灰 (2.5Y4/1)	密	
329	瓦器	椀	B地区	S B 433 (S P 245) i6	-	(1.5)	(4.4)	底部 3/12	灰白 (7.5Y7/1)	密	
330	瓦器	椀	B地区	S B 433 (S P 12)	-	(1.5)	(6.2)	底部 1/12 強	暗灰 (N3/0)	密	
331	陶器	壺	B地区	S B 433 (S P 128)	-	(5.5)	(6.9)	底部 2/12	外:灰白 (2.5Y7/1) 内:にぶい褐 (7.5YR5/3)	やや粗 径0.5mm前後の 白・黒色砂粒を含む	外面被熱
332	土師器	へソ皿	D地区	S D 70 14 上層	(7.0)	(1.7)	-	1/12	浅黄橙 (7.5YR8/4)	やや粗 径1mm以下黒 色砂粒、赤色斑粒を含む	
333	土師器	皿	D地区	S D 70 14 上層	(8.0)	1.0	-	4/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや粗 径1mm大の白 色・黒色砂粒、雲母、赤 色斑粒を含む	
334	土師器	皿	D地区	S D 70 14 上層	(8.0)	1.4	-	3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや粗 径1mm以下の 白色砂粒、雲母、赤色 斑粒を含む	
335	土師器	皿	B地区	S D 353 合流点	(8.3)	1.2	-	6/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密 径0.5mm以下の 白・灰・茶色砂粒を含む	
336	土師器	皿	D地区	S D 353 合流点	(8.0)	1.5	-	4/12	橙 (7.5YR7/6)	やや粗 径1～2mm大 の半透明色砂粒、径1 mm以下の白色・黒色砂 粒、赤色斑粒、雲母を含 む	
337	瓦質 土器	ミニチ ユア壺	B地区	S D 353	(2.0)	(2.5)	-	4/12	灰白 (5Y7/1)	やや粗 径1mm以下の 黒色・褐色砂粒を含む	
338	瓦器	椀	B地区	S D 353 合流点	12.8	4.1	6.1	11/12	灰 (7.5Y5/1)	やや粗 径2mm以下の 白色粒が主体で含まれる が他に茶色粒も含む	
339	瓦質 土器	播鉢	B地区	S K 405	(31.9)	(12.6)	-	2/12	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	やや粗 径1～2mmの 白・灰色砂粒を多く含む	
340	土師器	へソ皿	B地区	g7	(7.5)	(2.2)	-	1/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	
341	土師器	皿	B地区	i8	(7.9)	1.2	-	3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密	
342	土師器	皿	B地区	g7	8.1	1.6	-	ほぼ完 形	明黄褐 (10YR7/4)	やや密 径0.5mm前後の 白・灰色砂粒を少し含む	
343	土師器	皿	B地区	g5・6	8.0	1.5	-	ほぼ完 形	にぶい橙 (5YR7/4)	密	
344	土師器	皿	B地区	g5・6	(8.6)	(1.3)	-	2/12	にぶい橙 (5YR7/4)	密	
345	土師器	皿	B地区	精査	(7.9)	0.7	-	1/12 強	にぶい黄橙 (10YR6/4)	密	
346	土師器	皿	B地区	g7	(10.8)	1.8	-	5/12	明黄褐 (10YR7/4)	やや密 径0.5mm前後の 白・茶・灰色砂粒を少し 含む	



報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
347	土師器	皿	B地区	g6	(12.2)	1.5	-	1/12 強	外：にぶい 橙 (7.5YR7/4) 内：褐灰 (7.5YR6/1)	密	
348	瓦器	椀	B地区	h5	(12.0)	(4.3)	-	2/12	暗灰 (N3/0)	密	
349	瓦器	椀	B地区	g6	(12.0)	3.6	-	3/12	灰 (N4/0)	密	
350	瓦器	椀	B地区	g6	(12.0)	4.1	-	1/12 強	灰白 (7.5Y7/1)	密	
351	瓦器	椀	B地区	k8	(11.6)	(3.4)	-	3/12	灰 (N3/0)	密	
352	瓦器	椀	B地区	k8	(11.6)	(3.2)	-	1.5/12	灰 (N5/0 ~ 7/0)	密	
353	瓦器	椀	B地区	k8	(12.2)	(2.9)	-	2/12	灰 (N4/0)	密	
354	瓦器	椀	B地区	k8	(13.2)	(3.8)	-	3/12	暗灰 (N3/0)	密	
355	瓦質 土器	鍋	B地区	i8・9	(19.8)	(2.2)	-	1/12	黒 (7.5Y2/1)	やや密	
356	瓦質 土器	鍋?	B地区	h11	(42.0)	(2.8)	-	1/12 以下	黒 (10Y2/1)	密	
357	陶磁器	平椀	B地区	h5	(15.0)	(4.2)	-	1.5/12	素地：灰白 (7.5Y8/1) 釉：浅黄 (7.5Y7/3)	密	古瀬戸、素地 須恵質
358	陶磁器	平椀	B地区	h9	(15.0)	(4.0)	-	1/12 以下	素地：灰白 (5Y8/1) 釉：オリープ黄 (5Y6/3)	やや密	古瀬戸
359	陶磁器	卸目皿	B地区	精査	(16.0)	(2.6)	-	2/12	素地：灰 白 (5Y8/2) 釉：オリープ黄 (7.5Y6/3)	やや密	古瀬戸
360	陶磁器	椀	B地区	h6	(11.0)	(2.4)	-	1/12	黒 (10YR1.7/1)	密	天目
361	陶磁器	椀	B地区	g6	(11.1)	(5.6)	-	口～ 体部 2/12	素地：浅黄橙 (7.5YR8/4) 釉：黒 (N1.5/0)	密 径1mm以下の白色 粒わずかに含む	天目
362	炆器	壺	B地区	h5	-	(5.8)	-	-	にぶい赤褐 (2.5YR5/3)	密 径1mm以下の白色 粒を含む	常滑系
363	炆器	甕	B地区	k9	長14.3	幅11.2	厚1.4	-	外：にぶい赤褐 (2.5YR4/3) 内：にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	密	常滑系
364	炆器	甕	B地区	l7	-	(8.1)	18.8	底部 7/12	灰 (N4/0)	やや粗 径0.5～3mm の白色砂粒を含む	常滑系
365	炆器	播鉢	B地区	h8・9	(28.0)	(7.0)	-	1/12	褐灰 (10YR6/1)	やや密 径0.5～5mm の白色粒を含む	
366	陶磁器	椀	B地区	k8	<10.5>	(3.6)	-	体部 2/12	素地：灰白 (2.5Y8/2) 釉：黒 (2.5Y2/1)	密	天目
367	陶磁器	椀	B地区	g6	-	(3.8)	-	-	灰白 (10Y7/1)	密	青磁椀IV類、 内面底部圏線 あり
368	陶磁器	椀	D地区	北側精査	(12.4)	(2.9)	-	1/12 以下	素地：灰白 (2.5Y7/1) 釉：明緑灰 (7.5GY7/1)	密 堅緻	青磁蓮弁文椀 B群 (龍泉 窯)、線刻あ り (雷文)
369	陶磁器	皿	B地区	g6	-	(1.0)	-	-	灰黄 (2.5Y6/2)	密	青磁皿I類、 内面底部圏線 あり
370	陶磁器	皿	D地区	S P 76	(11.6)	(2.1)	-	1.5/12 強	灰白 (2.5Y8/1)	精良	白磁皿C類
371	陶磁器	底部	B地区	g6	-	(0.8)	(5.0)	底部 4/12 強	灰白 (7.5Y8/1)	密	白磁皿IX-2類
372	陶磁器	皿	B地区	g6	-	(1.6)	(7.8)	底部 2/12	素地：灰白 (5Y8/1) 釉：灰白 (10Y7/1)	密 素地は質悪い	白磁皿IX-2類
373	緑釉 陶器	盤	B地区	k8	-	(2.1)	-	-	素地：灰 (N6/0) 釉：緑	密	

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
374	焼締 陶器	小壺/ 筒形容 器	B地区	g6	-	(2.8)	-	-	明赤褐 (2.5YR5/6)	密	
375	陶磁器	小椀	D地区	北側精査	(6.2)	(2.8)	-	1/12 以下	灰白 (10YR7/1)	密 径0.5mm以下の白色 粒を少し含む	古瀬戸
376	陶磁器	皿	D地区	北側精査	(12.2)	(2.3)	-	1/12 強	素地：灰白 (2.5Y7/1) 釉：灰オリーブ (5Y6/2)	密	肥前Ⅱ期
482	須恵器	杯蓋A	C地区	NR 50 k18 Ⅱ層	<12.6>	(1.5)	-	-	灰 (N4/0)	やや密 径0.5mm以下の 白砂粒、稀に径5mm以 上の白色砂粒を含む	
483	須恵器	杯蓋A	C地区	NR 50 j17	(15.6)	(2.0)	-	2/12	灰 (N7/0)	密 径0.5mm大の白色砂 粒微細量含む	
484	須恵器	杯蓋A	C地区	NR 50 南 壁掘削	<14.4>	(1.8)	-	-	灰白 (N7/0)	密 径2mm以下の暗灰 色砂粒微細量含む	外面自然釉付 着
485	須恵器	杯蓋A	C地区	NR 50 Ⅰ・Ⅱ層	つまみ 最大径 2.8	(1.4)	-	-	灰 (N7/0)	密 径1mm以下の白色 砂粒微細量含む	
486	須恵器	杯蓋A	C地区	南側壁面	(15.6)	1.45	-	1/12 以下	灰 (N6/0)	密 径0.5mm大の白色砂 粒を少量含む	
487	須恵器	杯蓋A	C地区	南側壁面	(17.2)	(1.8)	-	2/12	灰 (N6/0)	密 径0.5mm大の白色砂 粒微細量含む	
488	須恵器	杯蓋A	C地区	南端付近	(13.8)	(2.4)	-	2/12	灰白 (7.5Y7/1)	やや密 径0.5mm前後の 白・茶色砂粒を少量含む	
489	須恵器	杯蓋A	C地区	NR 50 117 Ⅱ層	(18.0)	(1.8)	-	1/12 以下	灰 (N7/0)	密 径2mm以下の白色 砂粒微細量含む	
490	須恵器	壺蓋	C地区	NR 50 117 Ⅰ層	(12.0)	(2.1)			素地：灰 (5Y6/1) 釉：暗オリーブ (5Y 4/4)	やや密 径0.5mmの白・ 茶色砂粒を少量含む	外面自然釉付 着
491	須恵器	杯A	C地区	重機掘削	(10.5)	(2.4)	-	1/12 強	灰 (N6/0)	密 径1mm以下の白・ 褐色粒を含む	
492	須恵器	杯A	C地区	西側中央段 下げ 西側 精査中出土	(9.5)	2.7	-	3/12 弱	灰 (N6/0)	密 径2mm以下の白・ 黒・褐色粒を含む	
493	須恵器	杯A	C地区	NR 50 南 壁掘削	-	(1.5)	(10.5)	底部 2/12	灰 (N6/1)	密 径1mm以下の白・ 黒色粒を含む、稀に径3 mm大の白色粒、少量の 雲母を含む	内面漆付着
494	須恵器	杯A	C地区	NR 50 k 19 Ⅰ層	(11.4)	3.1	-	4/12	灰 (N5/0)	密 径2mm以下の白色 砂粒微細量含む	
495	須恵器	杯	C地区	西側精査中	(20.2)	(3.9)	-	2/12	灰 (N7/0)	密 径1.5mm以下の黒・ 白色粒を含む	
496	須恵器	杯B	C地区	NR 50 精 査	-	(1.7)	(10.9)	底部 3/12	灰白 (N7/0)	密 径0.5mm以下の白・ 黒色粒を含む	
497	須恵器	杯B	C地区	NR 50 116 Ⅰ層	-	(2.5)	(6.5)	底部 2/12	灰白 (N7/0)	やや密 ごく細かい白・ 茶色砂粒を少量含む	
498	須恵器	杯B	C地区	NR 50 117 Ⅰ層	-	(2.5)	(9.2)	底部 4/12	灰 (N7/0)	密 径5mm大の半透明 灰色石粒1つ、径2mm 以下の灰色砂粒・径1 mm以下の白色砂微細量 含む	
499	須恵器	杯B	C地区	NR 50 117 Ⅰ層	-	(1.9)	(11.4)	底部 2.5/12	灰 (N6/0)	密	
500	須恵器	杯B	C地区	NR 50 117 Ⅰ層	-	(3.1)	(9.6)	底部 2/12	灰白 (5Y7/1)	密 径0.5mm大の白色砂 粒微細量含む	
501	須恵器	杯B	C地区	南端付精査	-	(1.5)	(7.4)	底部 6.5/12	灰 (N6/0)	やや粗 径1mmまでの 白・黒色砂粒を含む	
502	須恵器	杯B	C地区	NR 50 南 壁	-	(2.3)	(12.4)	底部 1/12	灰 (N6/0)	密	
503	須恵器	杯B	C地区	NR 50	-	(2.6)	(10.0)	底部 1.5/12	灰白 (5Y7/1)	やや密 径0.5mm以下の 白色砂粒を少量含む	
504	須恵器	杯B	C地区	NR 50 117 Ⅱ層	-	(3.8)	(13.4)	底部 3/12	灰 (N5/0)	密 径2mm以下の白色 砂粒微細量含む	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
505	須恵器	杯B	C地区	NR 50 k16 I層	-	(3.4)	(13.0)	底部 2.5/12	灰 (N6/0)	密 径1mm以下の白色 砂粒微細量含む	
506	須恵器	杯B	C地区	NR 50 II・III層	-	(1.4)	(13.8)	底部 1/12 以下	灰 (N7/0)	密 径1mm以下の白色 砂粒微細量含む	
507	須恵器	杯B	C地区	NR 50 k16 II層	-	(2.7)	(8.8)	底部 1/12	灰 (N6/1)	やや密 径0.5mm以下の 白・黒・茶色砂粒を含む	底部爪痕あり
508	緑釉陶 器か	杯	C地区	NR 50 岸部 II・III層	-	(1.3)	(6.0)	底部 4/12	灰 (N6/0) 底部：緑がかった ガラス質	密	
509	須恵器	壺	C地区	NR 50 k16 II層	(9.7)	(6.0)	-	2/12	素地：灰 (7.5Y6/1) 自然釉：暗オリ ーブ (5Y4/3)	密 極細かい白色砂粒を 少量含む	全体に自然釉 付着
510	須恵器	壺	C地区	NR 50 117 I層	-	(6.5)	-	-	灰白 (5Y7/1)	密 径0.5mm大の白色砂 粒微細量含む	
511	須恵器	壺	C地区	北壁	<16.4>	(6.2)	-	頸部 1.5/12	外：オリーブ 灰 (10Y4/2) 内：灰 (N5/0)	密 径1mm以下の白・ 灰・朱色粒を含む	外面沈線あ り・自然釉付 着
512	須恵器	壺	C地区	NR 50	<11.6>	(3.8)	-	-	灰 (N6/0)	精良	
513	須恵器	壺	C地区	NR 50 j16 II層	(7.4)	(2.5)	-	3/12	黄灰 (2.5Y5/1)	密	
514	須恵器	杯蓋	C地区	西側精査	(8.1)	1.2	-	3/12	灰 (N6/0)	密 径0.5mm以下の白・ 灰色粒を含む	内面使用痕あ り (転用硯か)
515	須恵器	墨書土 器 (底 部)	C地区	NR 50 j18 II層	-	(0.7)	2.8	-	灰 (5Y6/1)	密 径1mm以下の白・ 黒色粒を含む	「家」
516	須恵器	杯H蓋	C地区	NR 50 j19	(12.3)	(3.5)	-	1/12	外：にぶい褐 (7.5YR5/3) 内：褐灰 (7.5YR5/1)	やや密 径0.5mm前後の 白・茶色砂粒を少量含む	
517	須恵器	杯H蓋	C地区	NR 50 120 II層	(15.8)	(4.0)	-	3/12	灰白 (7.5Y7/1)	やや密 径0.5mm以下の 黒・白色砂粒を含む	
518	須恵器	杯H蓋	C地区	NR 50 岸部 116 II・III層	(14.8)	(4.2)	-	2/12	灰 (5Y6/1)	やや密 径1mm以内の 白・茶・灰色砂粒を含む	
519	須恵器	杯H蓋	C地区	NR 50 119 I・II層	(10.8)	(2.6)	-	1/12 以下	灰 (N5/0)	密	
520	須恵器	杯G蓋	C地区	NR 50 119 II層	(9.0)	(2.0)	-	3/12	灰 (N5/0)	やや粗	
521	須恵器	杯G蓋	C地区	NR 50 k16 II・III層	(12.0)	2.5	-	2/12	外：にぶい赤褐 (2.5YR4/3) 内：赤灰 (2.5YR4/1)	やや粗 径0.5mm前後の 白色砂粒を多く含む	
522	須恵器	杯G蓋	C地区	NR 50 南 壁	(9.8)	(1.3)	-	1/12	灰 (N6/0)	密 径0.5mm大の暗灰色 砂粒を微細量含む	
523	須恵器	杯G蓋	C地区	西壁 116	(10.0)	(1.4)	-	1/12	灰 (N6/0)	密 径1mm以下の暗灰 色砂粒を微細量含む	
524	須恵器	杯G蓋	C地区	NR 50 k17 II・III層	(11.6)	2.0	-	3/12	灰 (N5/0)	やや粗 径0.5～3mm の白・黒色砂粒をやや多 く含む	
525	須恵器	杯G蓋	C地区	西側精査	(10.1)	2.0	-	2/12	灰白 (N7/0)	密 径1mm以下の白・ 黒色粒を含む	
526	須恵器	杯G蓋	C地区	NR 50 119 I・II層	(15.0)	(2.2)	-	1/12 強	灰 (N5/0)	密 径1mm以下の白色 砂粒微細量含む	
527	須恵器	杯H	C地区	NR 50 II層	(10.6)	(3.7)	-	1/12	灰 (N6/0)	密 径10mm大の灰色石 粒1つ、径1mm以下の 灰色砂粒微細量含む	
528	須恵器	杯H	C地区	NR 50 I・II層	(10.0)	(4.1)	-	1/12 以下	灰 (N6/0)	密 径0.5mm大の白色砂 粒少量含む	
529	須恵器	杯H	C地区	NR 50 k18 I・II層	(12.0)	4.0	-	1/12 強	灰 (N6/0)	やや粗 径1mm前後の 白・黒・茶色砂粒を多く 含む	底部外面ヘラ 記号

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
530	須恵器	杯H	C地区	NR 50 k16 II・III層	(11.5)	(3.6)	-	2/12	灰白 (7.5Y7/1)	やや密 径1mm以下の 白色粒わずかに含む	
531	須恵器	杯H	C地区	西側精査	(12.1)	(3.4)	-	1/12 以下	灰 (N7/0)	密 径1mm以下の黒・ 褐・白色粒を多く含む	
532	須恵器	杯H	C地区	NR 50	10.2	4.6	-	完形	灰白 (N7/0)	精良 径1mm以下の白 色鉱物を少し含む	
533	須恵器	杯H	C地区	NR 50 l18 II層	(12.2)	(2.2)	-	3/12	浅黄橙 (10YR8/3)	密	
534	須恵器	杯H	C地区	NR 50 l19 II層	9.6	3.1	-	6/12	灰白 (N7/0)	密 径1mm以下の灰色 砂粒微細量含む	
535	須恵器	杯H	C地区	北壁側溝	(11.8)	3.8	-	1/12	灰白 (N7/0)	密 径1mm以下の白・ 黒・褐色粒を含む	
536	須恵器	杯H	C地区	NR 50 l19 II層	(10.0)	(2.9)	-	1/12	灰白 (7.5Y7/1)	密	
537	須恵器	杯H	C地区	NR 50 k16 II層	(13.0)	3.7	-	2/12	灰 (7.5Y6/1)	やや密 径0.5mm前後の 白色砂粒を少量含む	外面底部ヘラ 記号あり
538	須恵器	杯H	C地区	NR 50 j19	(9.0)	(3.0)	-	2/12	灰 (5Y5/1)	やや粗 径0.5～1mm の白色砂粒を含む	外面付着物多 い
539	須恵器	杯H	C地区	精査	鐳径 (12.95)	(1.8)	-	鐳部 1/12	灰 (N6/0)	密 径1mm以下の白・ 黒色粒を含む	
540	須恵器	杯H	C地区	南端精査	(14.0)	(3.2)	-	1/12	外：暗灰 (N3/0) 内：灰白 (5Y8/1)	密 径2mm以下の暗灰 色砂粒を少量含む	
541	須恵器	杯H	C地区	k19・20	(8.4)	(2.1)	-	3/12	灰 (N5/0)	やや密 径0.5mm前後の 白・黒色砂粒を少量含む	
542	須恵器	杯H	C地区	NR 50 l17 I層	(9.6)	2.6	-	3/12	灰 (N5/0)	密 径2mm以下の白色 砂粒を少量含む	
543	須恵器	杯G	C地区	中央精査	(8.2)	(3.0)	-	3/12	灰 (N6/0)	密 径1mm以下の白色 砂粒少量含む	
544	須恵器	杯G	C地区	NR 50 j18 II層	-	(2.4)	6.1	底部 6/12	灰 (N6/1)	やや粗 径0.5mm前後の 白・黒・茶色砂粒をやや 多く含む	
545	須恵器	杯G	C地区	NR 50 l19 II層	(10.8)	3.5	-	1/12 強	灰白 (5Y8/1)	密 径1mm以下の灰色 砂粒少量含む	
546	須恵器	杯G	C地区	NR 50 l17 II層	(12.0)	(2.9)	-	1/12 以下	灰 (N7/0)	密 径2mm以下の白色 砂粒少量含む	
547	須恵器	脚付椀	C地区	NR 50 l19 I・II層	(10.2)	(5.5)	-	1.5/12	灰 (N5/0)	密 径1mm大の白色砂 粒微細量含む	内面底部自然 釉付着 外面 沈線あり
548	須恵器	脚付椀	C地区	NR 50 k16・17、 l16・19 II・ III・IV・V 層	12.9	11.4～ 12.4	(10.2)	6/12	外：灰白 (N7/0) 内：褐灰 (7.5YR6/1)	密 径1mm以下の白・ 黒色粒を含む	外面沈線あ り、自然釉付 着
549	須恵器	脚付壺 か	C地区	NR 50	<10.0>	(3.6)	-	-	灰 (N6/0)	精良 砂粒をほとんど含 まない	
550	須恵器	脚付壺 か	C地区	NR 50	<10.0>	(5.6)	-	-	灰 (N5/0)	やや粗 径1mm以下の 白色鉱物を多く含む	
551	須恵器	高杯	C地区	NR 50 l20	<12.0>	(10.2)	-	-	灰 (N6/0)	精良 砂粒をほとんど含 まない	
552	須恵器	高杯	C地区	NR 50 j19	-	(6.9)	(12.8)	底部 1/12	灰白 (5Y7/1)	やや密 径0.5mm以下の 白・黒色粒を少量含む	
553	須恵器	高杯	C地区	西端精査	<8.5>	(6.3)	-	-	灰 (N6/0)	やや粗 径0.5mm前後の 白色砂粒を含む、稀に径 5mmの大粒含む	
554	須恵器	高杯	C地区	j 19・20	-	(6.4)	(11.8)	底部 5/12	灰白 (5Y7/1)	やや粗 極細かい～径 1.5mmの白・黒・茶色 砂粒を含む	
555	須恵器	高杯	B・C 地区	精査	頸部 (4.5)	(4.4)	-	基部 9/12	外：灰白 (5Y8/1) 内：にぶい橙 (5YR7/4)	やや粗 7×7mmの明 褐灰石粒1つ、径2mm 以下の暗灰色砂粒を少量 含む	
556	須恵器	脚台	C地区	NR 50 l17 II層	頸部5.1	(3.1)	-	-	灰白 (2.5Y7/1)	密 径1mm以下の白色 砂粒微細量含む	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
557	須恵器	脚台	C地区	NR 50 l20 Ⅲ層	-	3.4	8.1	脚部 12/12	灰 (N5/0)	やや密	
558	須恵器	壺	C地区	NR 50 k16 Ⅱ～Ⅳ層	(14.9)	(5.2)	-	3/12	外：褐灰 (10YR5/1) 内：にぶい橙 (5YR6/3)		外面口縁沈線 あり
559	須恵器	壺	C地区	NR 50 k17・16 Ⅱ 層	(21.6)	(8.5)	-	1/12 以下	灰 (N5/0)	やや密 径0.5～1mm の白・茶色砂粒を少量含 む	
560	須恵器	壺	C地区	NR 50 k16・17 117 Ⅰ～Ⅲ層	(18.8)	(7.0)	-	8/12	灰 (N6/0)	やや密 径5mm以内の 白色砂粒を少し含む	
561	須恵器	壺	C地区	NR 50 k16 Ⅰ・Ⅱ層	(15.8)	(6.9)	-	2/12 弱	灰白 (2.5Y7/1)	やや粗 径0.5～1mm の白・茶・灰色砂粒をや や多く含む	
562	須恵器	壺	C地区	h19・20	(13.0)	(3.5)	-	2/12		やや粗 径0.5～1mm の白色砂粒を多く含む	
563	須恵器	壺	C地区	南端精査	(12.0)	(3.3)	-	3/12 強	灰 (N5/0) 断：灰赤 (2.5YR5/2)	密 径1mm以下の白・ 黒・褐色粒を含む	
564	須恵器	壺	C地区	西端精査	<38.6>	(13.8)	-	-	灰白 (N7/0)	やや精良 径1mm前後 の白色鉱物を含む	
565	須恵器	壺	C地区	NR 50 k16 Ⅰ層	(6.7)	(2.5)	-	1/12	灰 (N6/0)	やや粗 径0.5～1mm の白・黒色砂粒を含む	外面沈線あり
566	須恵器	短頸壺	C地区	南壁	(9.0)	(6.5)	-	2/12	外・内：灰 (N6/0) 断：灰褐 (5YR6/2)	密 径1mm以下の白・ 黒色粒を含む、稀に径2 mm大の黒色粒を含む	外面沈線あり
567	須恵器	長頸壺 か	C地区	NR 50 j16 Ⅰ層	<13.3>	(9.3)	-	-	素地：灰白 (7.5Y7/1) 自 然釉：灰オリーブ (7.5Y4/2)	やや粗 径0.5～3mm の白・黒色砂粒を含む	外面沈線あり・自然釉付 着
568	須恵器	長頸壺 か	C地区	NR 50	<16.3>	(8.8)	-	体部 4/12	紫灰 (5P6/1)	密 径3mm大の長石、 径1mm大の長石等含む	内面底部自然 釉付着
569	須恵器	壺	C地区	NR 50 k16 Ⅱ・Ⅲ層	<21.0>	(8.6)	-	-	灰 (N6/0)	やや粗 径0.5～2mm の白・黒色砂粒を含む	
570	須恵器	平瓶	C地区	西端精査	5.0	13.8	-	全体 7/12	灰 (N6/0～4/0)	普通：径1～2mmの白 色・黒色鉱物を少し含む	
571	須恵器	甗	C地区	NR 50 117・k18 Ⅰ～Ⅲ層	<8.5>	(5.9)	-	最大径 部 5/12	灰 (N6/1)	密 径1mm以下の白・ 黒色粒を含む	
572	須恵器	甗	C地区	NR 50 117 Ⅱ層	-	(5.3)	(5.4)	底～体 7/12	灰 (N6/0) 灰褐 (7.5YR6/2)	やや粗 径1mm程の白 色粒含む	底部ヘラ記号 あり
573	須恵器	器台	C地区	NR 50	(15.4)	(3.8)	-	1/12	外：灰白 (5Y7/1) 内：橙 (5YR7/6)	密 径1mm以下の白・ 褐色粒を多く含む	
574	須恵器	器台	C地区	NR 50 114 Ⅱ層	(22.0)	(4.2)	-	1/12 以下	灰 (N6/0)	密 径2mm以下の暗灰 色砂粒微細量含む	
575	須恵器	器台	C地区	NR 50 116 Ⅰ・Ⅱ層	(28.0)	(4.1)	-	1/12 以下	灰 (N6/0)	やや粗 径1mm前後の 白・灰色砂粒を多く含む	
576	土師器	甗	C地区	NR 50 j19	(24.8)	(26.0)	-	3/12 弱	外：にぶい橙 (5YR6/4) 内：灰黄褐 (10YR6/2)	やや粗 径1～2・5 mm大の石英・長石等 を含む	
577	土師器	甗	C地区	NR 50 117 Ⅱ・Ⅲ層	(21.0)	(9.2)	-	1/12	灰褐 (7.5YR6/2)	やや粗 径2mm以下の 白色・灰色砂粒含む、径 1mm以下の明褐色砂粒 微細量含む	
578	土師器	甗	C地区	NR 50 119 Ⅰ・Ⅱ層	(25.0)	(8.8)	-	1/12	にぶい黄橙 (10YR7/2)	やや密 径4mm大の赤 褐色石粒1つ、径3mm 大の暗灰色石粒1つ、径 2mm以下の赤褐色砂粒 を含む	



国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
579	土師器	甕	C地区	NR 50 II層	(27.0)	(6.5)	-	1/12以下	にぶい黄橙 (10YR7/3)	密 径2mm以下の淡褐色砂粒を少量、径0.5mm大の白色砂粒、雲母少量含む	
580	土師器	鍋	C地区	NR 50 j19	(27.4)	(7.8)	-	1/12以下	にぶい黄橙 (10YR7/2)	やや粗 径1~3mm大の石英・長石・チャート等を含む	
581	土師器	甕	C地区	NR 50 j19	(22.6)	(3.9)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/3)	密 径1mm以下の白・褐・灰色粒を多く含む	
582	土師器	把手付き甕	C地区	NR 50 k17	頸部21.1	(15.0)	-	頸部9/12	にぶい黄橙 (10YR6/4)	やや粗 径1~2mmの石英・長石などを含む	
583	土師器	把手付き甕	C地区	119	-	(12.0)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/3)	やや粗 径2mm以下の白色・半透明灰色・淡褐色砂粒を少量含む	
584	土師器	製塩土器	C地区	NR 50 k16 I層	(13.0)	(4.9)	-	1/12強	にぶい橙 (7.5YR6/4)	粗 径2mm以下の白色砂粒を多く含む	
585	須恵器	杯H蓋	C地区	NR 50 (SX 444) III層	(15.5)	3.3	-	1/12	外:灰白 (5Y7/1) 内:灰 (N4/0)	やや密 径0.5mm以下の白色砂粒を含む	
586	須恵器	杯H蓋	C地区	NR 50 k16 III・IV層	(15.0)	(3.9)	-	1.5/12	灰白 (N8/0)	密 径1.5mm以下の白・黒色粒を多く含む	
587	須恵器	杯H蓋	C地区	NR 50 (SX 444) III層	(11.6)	(3.5)	-	2/12	灰白 (2.5Y7/1)	やや粗 径0.5mm前後の白・茶・黒色砂粒、径3mm位の白色粒を含む	
588	須恵器	杯H	C地区	NR 50 III層	(12.7)	(2.4)	-	1.5/12	灰 (N6/0)	密 径1mm以下の白色砂粒微細量含む	
589	須恵器	杯H	C地区	NR 50 k18 III・IV層	(13.7)	(3.4)	-	2/12	灰 (N5/0)	密 径1mm以下の黒・白色粒を含む	
590	須恵器	杯H	C地区	NR 50 (SX 444) III層	<13.0>	(1.9)	-	1/12	灰白 (7/1)	やや密 径0.5mm以下の白・灰色砂粒を少量含む	
591	須恵器	杯H	C地区	NR 50 118 III層	(12.0)	(2.7)	-	1/12以下	灰 (N6/0)	密	外面重ね焼き痕あり
592	須恵器	杯H	C地区	NR 50 118 III層	(9.8)	(1.7)	-	2/12弱	灰白 (5Y7/1)	密	
593	須恵器	杯H	C地区	NR 50 (SX 444) 766直下 III層	(11.3)	5.0	-	2/12	外:灰白 (5Y7/1) 内:にぶい橙 (5YR7/4)	密 径3mm大の砂粒をわずかに含む	
594	須恵器	短頸壺	C地区	NR 50 119 II・III層間	(8.4)	(6.1)	胴部径(12.4)	1/12体部3/12	灰白 (7.5Y7/1)	密	
595	須恵器	鉢D/E	C地区	NR 50 j11 III層	-	(9.0)	12.5	底部12/12	灰 (N6/0)	やや粗 径0.5~1mm前後の白色砂粒を多く	
596	須恵器	低脚杯	C地区	NR 50 III・IV層	9.2	6.2	-	1/12	黒 (N2/0)	密 砂粒をほとんど含まない	
597	須恵器	台付甕?	C地区	NR 50 k18 III層	-	(3.6)	-	-	外:灰 (N4/0) 内:灰 (N6/0)	粗 径1mm以下の白色砂粒含む	
598	須恵器	鉢F	C地区	NR 50 III・IV層	-	(9.4)	11.7	底部完存	外:灰 (N5/0) 内:灰 (N6/0)	やや粗 径3mm程度の白色鉱物を含む	
599	須恵器	甕	C地区	NR 50 118 III層	(14.4)	(3.3)	-	1/12以下	外:灰 (N6/1) 内:黄灰 (2.5Y6/1)	密 径0.5mm以下の白・黒色粒を多く含む、稀に径2mm大の黒色粒を含む	
600	須恵器	甕	C地区	NR 50 k17 III層	<10.0>	(4.2)	-	-	灰 (N5/0)	やや密 径0.5mm以下の白・黒色砂粒を少量含む	
601	須恵器	甕	C地区	NR 50 k10・16 III・IV層	<11.9>	(4.6)	-	-	外:灰白 (N7/0) 内:灰白 (10YR7/1)	密 径2~2.5mm、径1mm以下の白・灰・黒色粒を含む	
602	須恵器	広口壺	C地区	NR 50 k19 III層	(25.4)	(5.6)	-	5/12弱	灰 (N5/0)	やや粗 径0.5mm前後の白・茶・灰色砂粒をやや多く含む	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
603	須恵器	短頸壺	C地区	N R 50 k17 Ⅲ・Ⅳ層	(16.9)	(7.4)	-	3/12	灰 (N5/0)	やや粗 径1mm以下の白・黒色砂粒を含む、稀に径2mm以上の砂粒を含む	
604	須恵器	壺	C地区	N R 50 (S X 444) l 17・18 Ⅲ・Ⅳ層	頸部 (12.0)	(5.9)	-	頸部 2/12	外:灰 (N4/0) 内: 灰 (N5/0) 断:灰赤 (10R5/2)	密 径2~3mm、径1mm以下の白・灰色粒を含む	
605	土師器	杯C	C地区	N R 50 Ⅲ~Ⅴ層	(10.0)	4.2	-	1/12 以下	褐灰 (5YR5/1) にぶい橙 (5YR6/4)	密	
606	土師器	杯A	C地区	N R 50 l17 Ⅲ・Ⅳ層	(16.0)	(3.3)	-	1/12	橙 (5YR6/6)	密	
607	土師器	甕	C地区	N R 50 (S X 444) Ⅲ層	(17.0)	(9.0)	-	4/12	灰黄褐 (10YR4/2 ~6/2)	やや密 径2mm以下の白色砂粒多く、径1mm以下の明褐色砂粒、黒色砂粒を少量含む	
608	土師器	甕	C地区	N R 50 k16 Ⅲ・Ⅳ層	(14.8)	(5.1)	-	3/12	にぶい黄橙 (10YR6/3)	密 径1mm以下の白色砂粒をを少量含む	
609	土師器	甕	C地区	N R 50 j18 Ⅲ・Ⅳ層	(13.6)	(4.5)	-	1/12	灰黄橙 (10YR5/2)	密 径2mm以下の白色砂粒少量・明褐色砂粒微細量含む	
610	土師器	甕	C地区	N R 50 j16 Ⅱ層	(18.4)	(7.9)	-	1/12	にぶい橙 (5YR6/3)	密 径2mm以下の灰色・白色砂粒を少量含む	
611	土師器	甕	C地区	N R 50 k16 Ⅲ層	23.5	(16.0)	-	9/12	にぶい黄橙 (10YR7/2)	やや粗 径2mm弱の石英・長石・灰褐色・黒灰色の砂粒など含む	
612	土師器	甕	C地区	N R 50 k18 Ⅲ層	(20.4)	(7.9)	-	1/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	密 径2mm以下の灰色砂粒少量、径1mm以下の黒色砂粒少量、径1mm以下の白色砂粒を含む	
613	土師器	甕	C地区	N R 50 k18 Ⅲ層	-	(13.6)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや粗 径1~3mm弱の石英・長石・茶色砂粒等を含む	
614	須恵器	臙	C地区	N R 50 k16 Ⅲ層	頸部 6.0	(14.2)	-	全体 11/12	灰白 (N7/0) 断: 灰赤 (2.5YR5/2)	密 径1mm以下の白・黒色粒を含む	
615	須恵器	広口壺	C地区	N R 50 k17 Ⅳ層直上	(22.8)	(5.1)	-	4/12	灰 (N4/0)	やや粗 径2mm位までの白・茶色砂粒をやや多く含む	
616	須恵器	杯H	C地区	N R 50 j19 Ⅳ層 (8層)	(2.0)	(2.8)	-	2/12	灰 (N5/0)	やや密 径0.5mm以下の白色砂粒を少量含む	
617	須恵器	杯H蓋	C地区	N R 50 k17 Ⅳ層	(14.8)	3.8	-	2/12	外:灰白 (5Y7/1) 内:灰 (N4/1)	やや密 径0.5mm前後の白・黒色粒を少量含む	
618	土師器	直口壺	C地区	N R 50 l16 Ⅳ・Ⅴ層	(18.0)	(11.3)	-	1/12	外:にぶい黄褐 (10YR5/4) 内:にぶい黄褐 (10YR6/4)	やや粗 径4mm大の白色石粒1つ、径2mm以下の白色砂粒多く、径2mm以下の半透明白色砂粒を含む	外面体部スス付着
619	土師器	二重口 縁壺	C地区	N R 50 k16 Ⅳ層	頸部 (13.8)	(6.7)	-	-	外:にぶい橙 (7.5YR7/3) 内:黄灰 (2.5Y5/1)	やや密 径1mm以下の白色・半透明白色砂粒、径0.5mm程の赤褐色砂粒を含む	
620	土師器	二重口 縁壺	C地区	N R 50 k16 Ⅴ層	頸部 (9.5)	(4.6)	-	-	にぶい橙 (7.5YR7/4) ~ (7.5YR6/4)	密 径1~2mm大の灰・褐色粒、径1mm以下の褐・白・灰色粒を多く含む	
621	土師器	甕	C地区	N R 50 l16 Ⅳ・Ⅴ層	(10.6)	(3.5)	-	2.5/12	にぶい黄橙 (10YR7/3) 褐灰 (10YR6/1)	やや密 径1mm以下の半透明白色砂粒を含む	外面スス付着
622	土師器	甕	C地区	N R 50 j17 Ⅳ層	(10.8)	(5.1)	-	3/12	灰黄 (2.5Y7/2)	やや密 径1mm以下の白色砂粒・半透明色砂粒を少量、径0.5mm大の灰色砂粒を少量、径0.5mm大の赤褐色砂粒微細量、雲母微細量含む	

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
623	土師器	甕	C地区	N R 50 k17 IV層	(12.0)	(9.2)	-	3/12	褐灰 (10YR6/1)	密 径1mm以下の白色 砂粒を少量含む	口縁内面黒斑 or スス、二次 焼成受ける
624	土師器	甕	C地区	N R 50 l17 IV層	(11.8)	(7.2)	-	2/12	外：橙 (5YR6/6) 内：にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密 径1mm大の白 色・灰色・半透明色砂粒 を含む	外面口縁付近 スス付着
625	土師器	甕	C地区	N R 50 l17・18 k16・17 II～IV層	(17.8)	(7.2)	-	2/12	灰黄褐 (10YR5/2)	やや密 径2mm以下の 白色砂粒やや多く、径1 mm以下の灰色砂粒を少 量含む	
626	土師器	甕	C地区	N R 50 l16 IV・V層	(14.0)	(9.3)	-	1/12	にぶい黄褐 (10YR5/3)	やや密 径1.5mm以下の 白色砂粒を多く含む	
627	土師器	甕	C地区	N R 50 l17 IV層	(18.4)	(4.8)	-	1/12	にぶい橙 (5YR7/3)	やや密 径1mm大の白 色・半透明色・褐色砂粒 を含む	
628	土師器	甕	C地区	N R 50 j17 IV層	(10.8)	(3.9)	-	2.5/12	にぶい黄橙 (10YR6/3)	やや密 径1mm以下の 白色砂粒を含む	
629	土師器	甕	C地区	N R 50 k16 V層	頸部 (13.0)	(3.4)	-	頸部 1/12	外：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内：灰黄褐 (10YR7/2) 断：灰 (N4/0)	やや粗 径4～2mm大 の白色粒、径1mm以下 の白・灰色粒を含む	
630	土師器	甕	C地区	N R 50 j17 IV層	-	(7.2)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	やや粗 径1mm以下 の白色砂粒を多く、径 0.5mm以下の暗灰色砂粒 微細量含む	
631	土師器	甕	C地区	N R 50 l17 IV層直上	頸部 (10.0)	(7.0)	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	粗 径0.5～1.5mm位の 白・茶・灰色砂粒を含む	
632	土師器	甕	C地区	N R 50 j17 III層 (7層)	(17.0)	(7.2)	-	1/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや粗 径3mm大の半 透明白色砂粒・暗灰色砂 粒を一つずつ、径2mm 以下の半透明白色・白色 砂粒を多く含む	
633	土師器	甕	C地区	N R 50 k16 IV層	(24.0)	(6.7)	-	1.5/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや粗 径1mm以下の 灰色・赤褐色砂粒を多く 含む	
634	土師器	甕	C地区	N R 50 j17 III層 (7層)	(14.4)	(6.5)	-	2/12	にぶい褐 (7.5YR5/4)	やや密 径2mm以下の 白色砂粒多く、径1mm 以下の半透明白色砂粒少 量、径1mm大の暗灰色 砂粒を少量含む	
635	土師器	甕/壺	C地区	N R 50 k16 II～IV層	頸部 (12.0)	(7.1)	-	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	径6×4mm大の白色石 粒2つ、径2mm以下の 白色砂粒を多く、径2 mm以下の半透明白色砂 粒を少量、径1mm以下 の暗灰色砂粒を少量含む	
636	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16	(14.6)	(4.2)	-	1.5/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや粗 径2mm以下の 淡褐色砂粒、径1mm以 下の赤褐色砂粒を含む、 径1mm以下の灰色砂粒 を少量含む	
637	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16・17 IV・V層	(17.6)	(3.8)	-	1/12	灰白 (10YR8/2)	粗 径2mm以下の半透 明白色砂粒・白色砂粒を 多く含む、雲母含む	
638	土師器	高杯	C地区	N R 50 l17・ 18 IV・V層	(15.6)	(4.2)	-	-	にぶい橙 (5YR6/4)	密	
639	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16	14.4	(4.3)	-	7/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密 径1mm以下の 赤褐色砂粒を多く含む	
640	土師器	高杯	C地区	N R 50 l17 IV層	(24.0)	(5.1)	-	1/12 以下	にぶい黄橙 (10YR7/2)	密 径1mm以下の白色・ 灰色砂粒微細量含む	
641	土師器	高杯	C地区	N R 50 IV層	頸部 (3.0)	(4.0)	-	-	橙 (5YR6/6)	やや粗 径1mm前後の 白・黒色砂粒多く含む、 雲母含む	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
642	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 IV・V層	頸部 (3.2)	(3.6)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/3)	やや粗 径1mm以下の 灰色砂粒・白色砂粒を含 む、雲母含む	円盤充填
643	土師器	高杯	C地区	N R 50 117・ 18 IV・V層	-	(2.8)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/2)	やや粗 径2mm以下の 褐色砂粒、径1mm以下 の灰色砂粒を含む	円盤充填
644	土師器	高杯	C地区	N R 50 j17 IV層	基部 3.7	(3.0)	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	密 径2～3mm大の白・ 半透明白色粒、径1mm 以下の白・黒色粒を含む	
645	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16・17 IV・V層	基部 3.8	(1.8)	-	-	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 径2mm以下の褐・ 茶・白色粒、クサリ礫を 含む	円盤充填
646	土師器	高杯	C地区	N R 50 117 IV層直上	頸部 (3.0)	(6.4)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	粗 径2mmまでの白色 砂粒を多く含む	円盤充填
647	土師器	高杯	C地区	N R 50 117 IV層直上	頸部 (3.2)	(6.2)	-	-	外：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内：灰白 (10YR8/1)	やや密 径1～4mm大 の白色・灰色・赤色砂粒 を含む	
648	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 V層	<8.5>	(5.4)	-	-	灰黄褐 (10YR6/2)	やや粗 径2mmまでの 白・茶・黒色砂粒を多く 含む	円盤充填
649	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 IV層直上	-	(8.2)	(11.0)	底部 6/12	浅黄橙 (10YR8/4)	密 径2～5mm大の白・ 灰・黒色粒、径1mm以 下の白・灰・赤色粒を多 く含む	円盤充填
650	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 V層	頸部 (3.2)	(8.0)	-	-	褐灰 (7.5YR5/1)	密 径2mm以下の白色 砂粒を含む	
651	土師器	高杯	C地区	N R 50 IV層直上	頸部 2.6	(7.9)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや粗 径0.5mm前後の 白・茶・灰色砂粒を多く 含む	円盤充填
652	土師器	高杯	C地区	N R 50 k19・20	-	(4.4)	-	-	灰黄褐 (10YR5/2)	やや粗 径1～2mm大 の白色・黒色・褐色・赤 色砂粒を含む	
653	土師器	高杯	C地区	N R 50 南壁	頸部 (3.0)	(7.1)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや粗 極細かい白・灰・ 茶色砂粒を多く含む	脚頂部凹面
654	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 IV層直上	-	(7.7)	11.8	底部 11/12	外：橙 (5YR7/6) 内：にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 径2mm以下の半透 明白色・灰・黒・白色粒 を多く含む、雲母・クサ リ礫も含む	挿入付加脚凹 タイプ
655	土師器	高杯	C地区	N R 50 117・ 18 IV・V層	-	(5.7)	-	-	外：橙 (5YR6/6) 内：にぶい黄橙 (10YR7/2)	密 径1mm大の白色・ 黒色・赤褐色砂粒を含む	
656	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 V層	頸部 3.0	(6.1)	-	-	橙 (5YR6/6)	やや粗 径0.5mm前後の 白・黒色砂粒を含む	脚頂部凹面 (挿入付加)
657	土師器	高杯	C地区	N R 50 j16 IV層上面	基部 2.1	(6.9)	-	-	橙 (5YR7/8)	密 微細な白・黒色粒を 少量含む	
658	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 IV層直上	-	(7.2)	(14.7)	底部 (7/12)	橙 (5YR7/6)	密 径2mm以下の白・ 褐・灰・黒色粒、クサリ 礫を多く含む	円盤充填
659	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 IV層直上	<7.2>	(6.7)	-	-	外：浅黄 (10YR8/4)～橙 (5YR7/6) 内：橙 (5YR7/6)	密 径1mm以下の白・ 黒・灰色粒や雲母を多く 含む	円盤充填
660	土師器	高杯	C地区	N R 50 118 IV層直上	頸部 (2.5)	(7.0)	-	-	橙 (7.5YR7/6)	やや密 極細かい白・茶・ 黒色砂粒を含む	円盤充填か 軸ありか
661	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 V層	-	(6.8)	(9.2)	底部 1/12 以下	灰黄褐 (10YR5/3)	やや密 極細かい黒色砂 粒を含む	円盤充填
662	土師器	高杯	C地区	N R 50 IV層	-	(8.5)	14.7	底部 12/12	外：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内：橙 (7.5YR6/6) 断：灰 (N5/0)	密 径1.5mm以下の白・ 灰色粒を多く含む、稀に 径3mm大の半透明・白 色粒を含む	円盤充填
663	土師器	高杯	C地区	N R 50 j17	頸部 (2.5)	(5.2)	-	-	にぶい黄橙 (10YR5/3)	やや密 径0.5mm以下の 白・茶色砂粒を少量含む	円盤充填 軸 あり

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
664	土師器	高杯	C地区	NR 50 117 IV層	-	(1.6)	(11.0)	底部 3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 径1mm以下の白色 砂粒微細量含む	
665	土師器	小形丸 底壺	C地区	NR 50 k16 V層	(9.2)	7.3	-	3/12	橙 (7.5YR7/6)	やや粗 径1~2mm大 の白色・黒色・褐色・赤 褐色砂粒を含む	
666	土師器	小形丸 底壺	C地区	NR 50 k16 II~IV層	(9.1)	7.5	-	ほぼ完 存	橙 (5YR7/6~ 6/6)	密 径1mm以下の白・ 黒色粒、クサリ礫を含む	
667	土師器	小形丸 底壺	C地区	NR 50 k16 IV・V層	(10.4)	(3.8)	-	1/12	にぶい橙 (5YR7/3)	密	外面スス付着
668	土師器	小形丸 底壺	C地区	NR 50 117 IV層直上	頸部 (3.3)	(3.3)	-	頸部 2/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	密	
669	土師器	小形丸 底壺	C地区	NR 50 117 IV層	(8.2)	(5.7)	-	2/12	にぶい黄褐 (10YR5/4)	やや密 径1~2mm大 の白色・灰色砂粒、雲母 を含む	
670	土師器	小形丸 底壺	C地区	NR 50 117・ 18 IV・V層	(10.0)	(5.2)	-	2/12	にぶい黄橙 (10YR6/3)	やや粗 径1~2mm大 の石英・長石・褐色・赤 色砂粒を含む	
671	土師器	小形丸 底壺	C地区	NR 50 k16 III・IV層	(9.4)	(5.0)	-	1/12	外：橙 (5YR6/6) 内：にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密 径1~2mm大 の石英・長石・灰色砂粒、 雲母を含む	口縁部わずかに スス付着・ 沈線あり
672	土師器	小形丸 底壺	C地区	NR 50 k16 IV層	頸部 (7.3)	(4.2)	-	頸部 2/12	灰白 (10YR8/1) 橙 (7.5YR7/6)	やや密 径1mm大の灰 色・白色砂粒を含む	
673	土師器	小形丸 底壺	C地区	NR 50 117 IV層	(9.0)	(3.5)	-	2/12	にぶい黄橙 (10YR6/4)	密	
674	土師器	小形丸 底壺	C地区	NR 50 k17 III・IV層	(11.2)	(5.9)	-	4/12	灰白 (10YR8/2)	やや粗 径1mm以下の 暗灰色・白色砂粒を少量 含む	
675	土師器	小形丸 底壺	C地区	NR 50 119 V層	頸部 (7.4)	(3.4)	-	頸部 2/12	橙 (7.5YR6/6)	密	
676	土師器	小形丸 底壺	C地区	NR 50 k16 IV層	<6.2>	(3.3)	-	-	外：橙 (5YR6/6) 内：黄灰 (2.5Y6/1)	密	
677	土師質	土錘	C地区	NR 50 k18 III・IV層	<1.6>	4.1	-	-	灰黄 (2.5Y6/2)	やや粗 径1mm程度の 石英・長石・その他黒灰 色等の砂粒を含む	
678	土師器	壺	C地区	NR 50 III層	(28.3)	(7.7)	-	頸部 1.5/12	外・内：にぶい 黄橙 (10YR7/4) 断：灰 (7.5Y4/1)	粗 径1mm程の石英・ 長石類・金雲母等多く含 む	
679	土師器	壺	C地区	NR 50 j16 IV・VI層	-	(4.5)	-	-	外・内：にぶい 黄橙 (10YR7/2) 断：灰 (N4/0)	粗 径1mm程の石英・ 長石・赤色岩石を多く含 む	
680	土師器	壺	C地区	NR 50 IV層	-	(8.2)	-	-	外：にぶい黄 橙 (10YR6/3) 内：黒褐 (10YR3/1 ~灰黄褐 (?))	粗 径1mm以下の白・ 黒・ベージュ色砂粒を多 く含む	
681	土師器	甕	C地区	NR 50 j17 III層最下層	(16.2)	(6.5)	-	4/12	外：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内：にぶい黄橙 (10YR6/3)	やや粗 径2mm以下の 白色砂粒やや多く、径1 mm以下の淡褐色砂粒、 径1mm以下の灰色砂粒 を少量含む	
682	土師器	甕	C地区	NR 50 j17 III層最下層	(15.6~ 16.2)	(10.9)	-	3/12	外：にぶい橙 (7.5YR6/4) にぶ い黄橙 (10YR6/3) 内：にぶい黄橙 (10YR6/3)	やや粗 径2mm以下の 白色砂粒やや多く、径2 mm以下の淡褐色砂粒を 少量、径2mm以下の半 透明白色砂粒を含む	
683	土師器	甕	C地区	NR 50 j18 II層	(13.8)	(3.2)	-	1.5/12	浅黄橙 (10YR8/3)	密 径2mm以下の白・ 灰・褐色粒とクサリ礫を 多く含む	
684	土師器	甕	C地区	NR 50 k17 III層	(20.0)	(3.9)	-	2/12	灰黄褐 (10YR5/2)	やや粗 径2mm以下の 白色砂粒を多く含む	
685	土師器	甕	C地区	NR 50	(13.6)	(3.2)	-	1/12	外：黒 (10Y2/1) 灰オ リーブ (5Y6/2) 内：黒 (10Y2/1)	密 径2mm以下の白・ 灰色粒を多く含む	
686	土師器	甕	C地区	NR 50 IV層	頸部 (13.4)	(13.8)	-	頸部 3/12	にぶい黄褐 (10YR5/4)	粗 径1~2・3mm大 の石英・長石・茶色砂粒 を多く含む	



報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
687	土師器	直口壺	C地区	N R 50 117 II層	頸部 (13.0)	(5.1)	-	頸部 1/12	にぶい黄橙 (10YR6/4)	やや粗 径1~2mm大 の石英・長石・茶色砂粒 を含む	
688	土師器	二重口 縁壺	C地区	N R 50 119 II層	頸部 5.8	(4.1)	-	頸部 12/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	やや粗 径1mmまでの 白・茶・灰色砂粒を多く 含む	
689	土師器	甕か	C地区	N R 50 112 II層	-	(3.8)	-	-	外:褐 (7.5YR4/4) 内:褐灰 (7.5YR4/1)	やや粗 径1~3mm大 の長石・石英等を多く含 む	
690	土師器	高杯	C地区	N R 50 k17 III・IV層	頸部 5.0	(2.2)	-	-	灰黄 (2.5Y7/2)	やや粗 径1mm前後の 白・灰色砂粒を多く含む	
691	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 II~IV層	基部 2.2	(3.0)	-	基部 9/12	橙 (2.5YR6/6)	密 径3mm大の白・灰 色粒、径1mm以下の白・ 灰色粒、径3~1mm以 下のクサリ礫を含む	円盤充填
692	土師器	高杯	C地区	N R 50 118 III層	-	(1.6)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/2)	やや粗 径2mm以下の 褐色砂粒・白色砂粒を含 む、雲母含む	円盤充填
693	土師器	高杯	C地区	N R 50 117 III・IV層	頸部 (3.3)	(5.6)	-	-	橙 (5YR6/6)	やや密 極細かい白・茶 色砂粒を少量含む	円盤充填
694	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 III層	5.1	(4.2)	-	-	にぶい黄褐 (10YR5/4)	粗 径1mm前後の白・ 茶色砂粒を多く含む	円盤充填
695	土師器	高杯	C地区	N R 50 117 II層	<3.8>	(4.0)	-	-	明赤褐 (5YR5/6)	やや粗 径1mm前後の 白・灰色砂粒を多く含む	
696	土師器	高杯	C地区	N R 50 117 II・III層	<4.8>	(4.1)	-	-	外・内:浅黄 橙 (7.5YR8/3) 断:灰 (5Y4/1)	密 径3mm大の白・半 透明色粒含む、径1mm 以下の白色粒を多く含む	円盤充填
697	土師器	高杯	C地区	N R 50 118 III・IV層	頸部 3.2	(3.7)	-	-	外:赤褐 (5YR4/8) 内:橙 (5YR6/6)	密 径1mm大の灰色・ 赤褐色砂粒を含む	
698	土師器	高杯	C地区	N R 50 j16 III・IV層	-	(9.5)	11.7	底部 8/12	灰黄褐 (10YR5/2)	粗 径1.5mm前後の白・茶 灰色砂粒を多く含む	円盤充填
699	土師器	高杯	C地区	N R 50 117 III・IV層	頸部 2.85	(5.6)	-	-	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 径2mm以下の黒・ 灰・白色粒を多く含む	挿入付加
700	土師器	高杯	C地区	N R 50 k17 I層	頸部 3.0	(2.8)	-	-	橙 (5YR6/6)	やや密 径0.5mm前後の 茶・白砂粒を少量含む	
701	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 II層	<5.9>	(7.3)	-	-	にぶい橙 (5YR6/6)	やや密 径0.5mm以下の 白色砂粒、極細かい雲母 を含む	
702	土師器	高杯	C地区	N R 50 117 III・IV層	頸部 2.55	(5.7)	-	-	明赤褐 (2.5YR5/6)	やや粗 径0.5~1mm 前後の白・黒色粒を含む	円盤充填
703	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 II層	<8.9>	(7.2)	-	-	橙 (5YR6/6)	やや粗 径1mm前後の 白・黒・茶色砂粒を含む	
704	土師器	高杯	C地区	N R 50 j17 III層	基部 3.1	(6.1)	-	基部 12/12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	やや密 径1~3mm大 のチャート・石英・長石・ 茶色砂粒を含む	
705	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 II層	-	(9.3)	(11.0)	底部 3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや粗 径1mm前後の 白・灰色砂粒を多く含む	
706	土師器	高杯	C地区	N R 50 k16 III層	-	(5.4)	(11.3)	底部 1/12 以下	浅黄橙 (10YR8/3)	やや密 極細かい茶褐色 砂粒を少量含む	円盤充填
707	土師器	高杯	C地区	N R 50 k17 III層	頸部 3.2	(7.0)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	やや密 径0.5mm以下の 白・灰色砂粒を少量含む	脚頂部凹面
708	土師器	小形丸 底壺	C地区	N R 50 k16 II層	(8.2)	6.8	-	1/12 以下	橙 (7.5YR7/6)	やや粗 径1mm以下の 灰色砂粒、径0.5mm大の 褐色砂粒を含む	
709	土師器	小形丸 底壺	C地区	N R 50 k16 III・IV層	(10.9)	(6.0)	-	3/12	にぶい橙 (7.5YR7/3)	やや密 径1mm大の白 色・灰色・褐色砂粒、雲 母を含む	
710	土師器	小形丸 底壺	C地区	精査	<8.3>	(4.9)	-	-	橙 (5YR6/6) 浅 黄橙 (10YR8/3)	やや密 径1mm大の褐 色砂粒、赤色斑粒を含む	
711	土師器	小形丸 底壺	C地区	N R 50 k16 III層	<7.6>	(4.6)	-	-	外:にぶい橙 (7.5YR7/4) 内:褐灰 (10YR4/1)	密 径1mm大の白色・ 褐色砂粒を含む	

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
712	土師器	小形丸 底壺	C地区	N R 50 117 II・III層	頸部径 (7.2)	(5.0)	-	-	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや粗 径1~4mm大 の白色・半透明色・灰色 砂粒、赤色斑粒を含む	
713	埴輪	円筒	C地区	N R 50 k17 II・III層	長さ4.9	幅4.3	厚さ 0.75	胴部 1/12 以下	にぶい黄橙 (10YR7/3)	密 径1mm程の石英・ 長石をわずかに含む	
714	埴輪	円筒	C地区	N R 50	長さ4.1	幅5.1	厚さ 1.6	-	にぶい褐 (7.5YR5/3)	粗 径1mm程の石英・ 長石を多く含む	
822	須恵器	蓋	D地区	S D 03 h4 上面	-	(1.8)	-	-	灰白 (N8/0)	密	
823	須恵器	蓋	B地区	k6	-	(1.5)	-	-	外:灰白 (N7/0) 内:灰白 (7.5Y7/1)	密	
824	須恵器	蓋	B地区	S D 01 k 14 掘削中	-	(1.3)	-	蓋突出 部径 1/12 以下	灰白 (N7/0)	密	
825	須恵器	蓋	D地区	精査 (北側)	<12.8>	(1.2)	-	最大 径部 1.5/12	灰 (N5/0) 断:灰赤 (2.5YR6/2)	密 径0.5mm以下の白い 粒をやや多く含む	
826	須恵器	蓋	B地区	S D 01 k10 I・II層	(17.0)	(1.5)	-	1/12 強	灰 (N7/0)	密	
827	須恵器	蓋	B地区	g6	(18.0)	(1.4)	-	1/12 以下	灰白 (2.5Y7/1)	密	
828	須恵器	蓋	D地区	j19	(18.4)	(1.5)	-	1/12	灰白 (N7/0)	密 径1mm以下の黒色 粒、極細粒の白色粒を含 む	外面重ね焼き 痕あり
829	須恵器	蓋	B地区	g6	(14.0)	(1.4)	-	1/12 以下	灰 (N6/0)	密	
830	須恵器	蓋	B地区	h9	(13.4)	(1.3)	-	1/12 以下	黄灰 (2.5Y6/1)	密	
831	須恵器	蓋	B地区	g12・13	(16.0)	(1.5)	-	1/12 以下	灰白 (N7/0)	密	
832	須恵器	杯B	B地区	g6	-	(2.3)	(6.7)	底部 1/12	灰 (N6/1)	密 径1mm以下の白色 砂粒を含む	
833	須恵器	杯B	B地区	g6	-	(2.2)	(6.5)	底部 2/12	灰白 (2.5Y7/1)	密 径1mm前後の白色 砂粒を含む	
834	須恵器	杯B	D地区	S D 03 h4 上層	-	(1.9)	(9.0)	底部 2/12	灰 (N6/0)	密 極細粒の白色粒を少 し含む	
835	須恵器	杯B	D地区	S D 01	-	(3.4)	(8.7)	底部 2/12 弱	灰 (N6/0)	やや密 径0.5~1.5mm の白色粒、径1mm以下 の黒色粒をやや多く含む	
836	須恵器	杯B	D地区	S D 03 i4 II層	-	(2.0)	(8.5)	底部 1.5/12	灰 (N7/0)	密 極細粒の白色粒・黒 色粒を少し含む	
837	須恵器	杯B	D地区	g19	-	(1.4)	(10.5)	底部 1/12 以下	灰白 (N7/0)	密 径0.5mm以下の白色 粒、極細粒の黒色粒を少 し含む	
838	須恵器	杯B	B地区	S D 01 上 面	-	(2.3)	(10.0)	底部 1.5/12	灰 (N6/1)	やや密	
839	須恵器	杯B	B地区	g12・13	-	(1.7)	(11.0)	底部 1/12 強	灰白 (2.5Y7/1)	密	外面自然釉付 着
840	須恵器	杯B	B地区	g6	-	(1.6)	(11.6)	底部 1/12 強	灰白 (N7/0)	密	
841	須恵器	杯B	B地区	S D 01 113 I層	-	(1.2)	(10.0)	底部 1/12	灰白 (5Y7/1)	密	
842	須恵器	杯B	B地区	S B 433 (S P 129) 掘 削中	-	(2.1)	-	-	灰黄 (2.5Y6/1)	やや粗 径1mm前後の 白色・黒色砂粒を含む	
843	須恵器	杯B	B地区	g5・6	-	(1.4)	(16.0)	底部 1/12	灰 (N7/0)	密	
844	須恵器	杯B	D地区	S D 03 i4 II層	-	(1.7)	(19.5)	底部 1/12 強	灰白 (N7/0)	やや密 径1.5mm以下の 白色粒、径0.5mm以下の 黒色粒を含む	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
845	須恵器	杯B	B地区	g5・6	-	(4.7)	(14.4)	底部 1/12 以下	灰白 (7.5Y7/1)	密	
846	須恵器	杯A	B地区	g5・6	-	(2.0)	(11.6)	底部 2/12	灰白 (N7/0)	密	
847	須恵器	稜椀	B地区	g12・13	-	(1.7)	(6.8)	底部 2/12 強	灰 (N6/0)	密	内面底部圏線 あり
848	須恵器	椀	D地区	S D 03 h4 II層	-	(1.2)	(4.9)	底部 3/12 強	灰 (N6/0)	密 径0.5mm以下の白色 粒・黒色粒・茶色粒を少 し含む	内面重ね焼き 痕あり
849	須恵器	壺	B地区	S D 01 上 面	(6.0)	(2.0)	-	2/12	灰 (5Y6/1)	やや密	
850	須恵器	甕	B地区	S D 01 k10 III層	(29.3)	(2.3)	-	1/12	灰 (5Y5/1)	やや密	口縁外面自然 釉付着
851	須恵器	壺	B地区	S D 01 k13 III層	-	(3.5)	(10.0)	底部 3/12	灰白 (2.5Y7/1)	密	
852	須恵器	壺P	B地区	g5・6	<13.6>	(6.6)	-	-	灰白 (2.5Y7/1)	密	体部外面自然 釉付着
853	須恵器	壺体部 か	D地区	S P 393	<13.4>	(3.3)	-	最大 径部 1/12 強	灰 (N6/0)	精良 径1mm以下の白 色粒を少し含む	
854	須恵器	鉢Dか	D地区	S D 03 14	(15.8)	(3.4)	-	1/12	灰 (N6/0) 断：明褐灰 (5YR7/2)	密 径0.5mm以下の茶色 粒・白色粒・黒色粒を少 し含む	
855	土師器	甕	D地区	S B 453 (S P 333)	(21.5)	(3.6)	-	1/12	灰白 (7.5YR8/2)	粗 径1.5mm以下の白色 粒、径1mm以下の半透 明色粒・黒色粒・茶色粒 を多く含む	
856	土師器	甗	D地区	h2	-	(5.6)	(10.4)	底部 1/12 以下	にぶい黄橙 (10YR7/3)	粗 径1～3mmの石英・ 長石・シャーマットを多 く含む	
857	土師器	移動式 竈か	D地区	S B 451 (S P 86) 掘削 中	-	(6.8)	-	-	明黄橙 (10YR6/6)	やや密 径1mm以下の 石英・長石・カクセン石 を含む	
858	土師器	甕	D地区	S K 380	(24.6)	(2.0)	-	1.5/12	浅黄橙 (7.5YR8/4)	やや粗 径1～3mmの 赤茶色粒、径1mm以下 の白色粒・黒色粒を含む	
859	須恵器	蓋	D地区	S K 380 上層	(18.8)	(1.1)	-	1.5/12	明紫灰 (5P7/1)	密 径1mm以下の白色 粒、径0.5mm以下の黒色 粒を少し含む	外面重ね焼き 痕あり
860	須恵器	杯A	D地区	S K 380 上層	(10.6)	(3.0)	-	4/12 強	灰白 (N7/0)	密 堅緻 径0.5mm以下 の白色粒・黒色粒を含む、 径1～1.5mm大のも混じ る	
861	土師器	甕	D地区	S K 380 上層	(16.3)	(5.2)	-	1/12 以下	明褐灰 (7.5YR7/2)	粗 径1～2mmの赤茶 色粒・黒色粒を多く含む	
862	須恵器	杯A	D地区	S K 380 上層	-	(1.1)	(6.6)	底部 4/12 弱	灰白 (N7/0)	密 径0.5mm以下の白色 粒、極細粒の黒色粒を含 む	
863	須恵器	器台等 脚部か	D地区	S K 380	-	(1.7)	(13.9)	底部 3/12	灰 (N6/0)	精良	
864	須恵器	杯蓋	B地区	S K 311	(15.4)	4.8	-	4/12	灰白 (5Y7/1)	やや粗 径1mm前後の 白色砂粒を含む	
865	須恵器	杯蓋	B地区	g5・6	(14.0)	(3.2)	-	1/12 強	灰白 (N7/0)	やや密 径0.5～4mm の白色粒を含む	
866	須恵器	杯蓋	B地区	g10	(15.0)	(3.0)	-	1/12	灰白 (2.5Y7/1)	密	
867	須恵器	杯蓋	B地区	h5	(14.6)	(4.3)	-	2/12 以上	灰白 (N7/0)	やや密 径1mm以下の 白色・黒色粒を含む	
868	須恵器	杯蓋	B地区	h5	-	(1.5)	-	-	外：褐灰 (10YR6/1) 内：灰白 (2.5Y7/1)	やや密 径1.5mm以下の 黒・白色粒を含む	
869	須恵器	杯蓋	B地区	g5・6	(16.0)	(3.3)	-	1/12	灰 (7.5Y6/1)	やや密 径1.5mm以下の 白色粒を含む	

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
870	須恵器	杯蓋	B地区	S X 303 南西掘削中	つまみ 径 3.2 <10.5>	(2.9)	-	-	灰白 (5Y7/1)	やや密 径 0.5mm 前後の 灰・茶色砂粒を少し含む	
871	須恵器	杯蓋	B地区	S K 311 i6	(15.0)	6.2	-	1/12	灰白 (2.5Y7/1)	やや粗 径 1 mm 以下の 白色・灰色砂粒を含む	
872	須恵器	杯身	B地区	h5	(13.6)	5.0	-	2/12 以上	外:灰白 (5Y7/1) 内:灰白 (7.5Y7/1)	やや密 径 0.5 ~ 3 mm の白色粒を含む	
873	須恵器	杯身	B地区	i7	(12.0)	4.3	-	3/12	灰白 (N7/0)	やや密 径 1 mm 以下の 白色砂粒を含む	
874	須恵器	杯身	B地区	j6	(13.2)	5.3	-	4/12	灰白 (5Y7/1)	やや粗 径 1 mm 前後の 白・灰色砂粒を多く含む	口縁端部沈線 あり 全体的 にいびつ
875	須恵器	杯	B地区	h5	(12.8)	(2.8)	-	1/12 以上	灰白 (N7/0)	密	
876	須恵器	杯	B地区	S D 01 k10 I・II層掘 削中	(13.6)	(3.5)	-	1/12	灰 (N7/0)	密 径 1 mm 以下の黒色 砂粒微細量、径 0.5mm 以 下の白色砂粒微細量含む	
877	須恵器	杯	B地区	g6	(12.1)	(2.9)	-	1/12 以下	灰 (N6/1)	密 径 1 mm 以下の白色 砂粒を含む	
878	須恵器	杯	B地区	h6	<15.9>	(4.0)	-	最大径 2/12	灰 (N5/0)	やや粗 径 0.5 ~ 1 mm の白・黒色砂粒を含む	
879	須恵器	杯	B地区	g5・6	<17.8>	(2.9)	-	-	灰白 (N8/0)	密	
880	須恵器	杯	D地区	S D 03 g4 上面掘削中	<14.4>	(3.7)	-	最大径 1/12 強	灰白 (N8/0)	密 極細粒の白色粒・黒 色粒を少し含む	
881	須恵器	杯	B地区	S B 434 (S P 157) 掘 削中	(14.0)	(2.7)	-	1/12 強	灰 (N5/0)	密 径 0.5mm 以下の白色 砂粒微細量含む	
882	須恵器	杯	B地区	S D 01 i13 I層	(10.8)	(2.3)	-	1/12 以下	灰白 (N7/0)	やや密 径 0.5mm 以下の 黒色・白色砂粒を少し含 む	
883	須恵器	杯	B地区	i5	<14.5>	(2.3)	-	-	灰 (N6/1)	やや粗 径 1 mm 前後の 灰色砂粒を含む	
884	須恵器	杯	D地区	北西精査	鐳径 (12.4)	(1.9)	-	鐳部 1/12 強	灰 (N6/0)	精良	
885	須恵器	杯	B地区	g5	(10.4)	(2.4)	-	1/12 以下	外:灰 (5Y4/1) 内:灰白 (N7/0)	密	
886	須恵器	杯	B地区	g8	(11.6)	(2.0)	-	1/12 以下	灰白 (N7/0)	密	外面被熱
887	須恵器	杯G蓋	B地区	g6	(11.5)	(2.2)	-	1/12 以下	灰白 (N7/0)	密 径 1 mm 以下の白色 砂粒を含む	
888	須恵器	杯G蓋	B地区	g6	(10.9)	(1.3)	-	1/12 以下	灰 (N5/0)	密	
889	須恵器	杯G蓋	D地区	i17	(9.5)	(1.8)	-	1/12 強	灰白 (N7/0)	精良 極細粒の白色粒・ 黒色粒を少し含む	
890	須恵器	杯G蓋	B地区	h9	(10.3)	(2.6)	-	2/12	外:灰 (5Y6/1) 内:灰白 (7.5Y7/1)	密	
891	須恵器	蓋	B地区	S P 22 掘削中	<14.0>	(1.8)	-	-	灰 (5Y6/1)	やや密	
892	須恵器	杯	B地区	S D 01 k・110 II層	(10.0)	3.0	-	1.5/12	灰 (N5/0)	密	
893	須恵器	杯	D地区	北側精査	(13.2)	(3.5)	-	1/12 強	灰白 (N7/0)	密 径 1 mm 以下の白色 粒、径 0.5mm 以下の黒色 粒を含む	
894	須恵器	杯	D地区	S K 361	(14.4)	(3.2)	-	2/12 強	灰白 (N7/0)	密 径 1.5mm 以下の白色 粒、径 0.5mm 以下の黒色 粒を含む	
895	須恵器	皿か	B地区	g6	(11.0)	(1.7)	-	1/12	灰白 (7.5Y7/1) ~灰白 (N7/0)	密	
896	須恵器	杯A	D地区	g10	-	(1.6)	(7.4)	底部 2/12	灰白 (2.5Y7/1)	やや密	
897	須恵器	杯A	B地区	g12・13	-	(1.3)	-	-	灰白 (N7/0)	密	
898	須恵器	杯A	B地区	g6	-	(1.5)	(5.6)	底部 3/12	灰 (N6/1)	密 径 1 ~ 1.5mm 大の白 色砂粒を含む	

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
899	土師器	高杯	D地区	S D 353 合流点	-	(1.3)	-	-	橙 (5YR6/6)	粗 径1~3mm大の白 色・半透明色・灰色・黒 色砂粒、赤色斑粒を含む	S H 371 に伴 う土器か
900	土師器	高杯	B地区	h5	-	(0.9)	-	-	黒 (7.5YR2/1)	やや密 径2mm以内の 白色粒を含む	
901	土師器	高杯	D地区	北西精査	-	(6.5)	頸部~ 脚部 (4.5)	頸部~ 脚部 6/12	橙 (5YR7/6)	やや密 極細粒の砂粒を 含む	
902	土師器	高杯	B地区	S D 353	-	(4.1)	-	-	橙 (7.5YR6/6)	粗 径1~2mm大の白 色・半透明色・灰色・黒 色砂粒、赤色斑粒、雲母 含む	S H 371 に伴 う土器か
903	土師器	小形丸 底壺	B地区	g10	-	(4.0)	-	-	外：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内：浅黄橙 (10YR8/3)	密	
904	土師質	土錘	B地区	k13	長 2.65	幅 0.8	-	-	にぶい橙 (5YR6/3)	密	
905	土師器	甕	B地区	h5	(11.2)	(3.0)	-	1/12 以下	にぶい黄 (2.5Y6/3)	やや密 径1mm以下の 白色・乳白色・灰色粒、 金色雲母含む	
906	土師器	甕	B地区	g5・6	(16.0)	(8.1)	-	1/12	にぶい褐 (7.5YR6/3)	粗 径0.5~3mmの白 色・透明色粒、雲母を含 む	
907	土師器	甕	D地区	S H 351	(13.8)	(8.6)	-	2/12 強	浅黄橙 (7.5YR8/3) ~ 橙 (5YR7/6)	粗 径1~2mmの白色 粒 (径3~4mm大のもの の混じる)・半透明色粒、 径1.5mm以下の黒色粒・ 茶色粒を多く含む	
908	土師器	直口壺	D地区	S H 351 k16	(20.8)	(4.3)	-	3/12 弱	橙 (5YR6/6)	粗 径2mm以下の白色 粒・半透明色粒を多く含 む、径3~4mm大のもの の混じる、径1~1.5mm の黒色粒・茶色粒を含む	
909	土師器	甕	B地区	S H 352	(17.7)	(3.3)	-	1/12 以下	外：灰黄褐 (10YR4/2) 内：灰黄褐 (10YR5/2)	やや粗 径1mm以下の 白・茶・黒色砂粒を多く 含む	
910	土師器	直口壺	A地区	精査	8.4	(4.2)	-	2/12 強	橙 (5YR7/6)	粗 径1~2mmの半透明 の粒径1mm以下の白 い粒茶色い粒雲母透明の 粒黒い粒 (少し) を多く 含む	
911	土師器	壺	E地区	S X 2003	頸) 11.0	(3.1)	-	2/12 弱	にぶい赤褐 (5YR5/4) 断面) 黒褐 (2.5Y3/1)	やや粗 径1.5mm以下の 白い粒半透明の粒茶色い 粒径0.5mm以下の黒っぽい 粒を多く含む	
912	土師器	小形丸 底壺	A地区	精査	<8.0>	(4.8)	-	体部 2/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	やや粗 径0.5mm前後白 茶砂粒含む	
913	土師器	甕	A地区	j14	(13.3)	(2.7)	-	1/12 以下	浅黄橙 (7.5YR8/3)	やや粗 径0.5~2mm の茶色い粒径1mm以下 の白い粒黒い粒を含む	
914	土師器	甕	A地区	精査	15.8	(2.8)	-	1/12	明褐 (7.5YR5/6)	やや粗 径0.5mm前後白茶 砂粒含む	
915	土師器	甕	A地区	精査	15.5	(2.4)	-	1/12	橙 (7.5YR6/6)	やや粗 径0.5mm白黒砂 粒少量含む	
916	土師器	甕	A地区	精査	12.0	(4.0)	-	1/12 以下	橙 (7.5YR6/6)	粗 径1~2mm白砂粒 多く含む	
917	土師器	甕	A地区	S P 1059	頸) 14.6	(8.2)	-	3/12	橙 (2.5YR6/6)	粗 径1~2mmの白い 粒茶色い粒径1~1.5mm の黒っぽい粒半透明の粒 を多く含む	
918	須恵器	蓋	A地区	S K 1041	(14.0)	(3.3)	-	1/12 以下	灰白色 (N7/0)	密 極細粒の白い粒径 0.5mm以下の黒い粒を少 し含む径2~3mm大の 白い粒混じる	



国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土地点	法量 (cm)			残存率	色調	胎土	備考
					口径	器高	底径				
919	須恵器	蓋	A 地区	精査	15.0	(2.9)	-	1.5/12	灰白 (2.5Y7/1)	密 径 0.5mm 前後の白・ 黒色砂粒を含む	
920	須恵器	壺	A 地区	精査	(13.8)	(2.2)	-	1/12	外)灰白(2.5Y7/1) 内)にぶい橙 (5YR7/4)	密 径 1 mm 以下の白い 粒極細粒の黒っぽい粒を 含む	
921	須恵器	蓋	A 地区	精査	<12.4>	(1.6)	-	最大径 1/12	灰黄 (2.5Y7/2)	やや密 径 0.5mm 前後の 灰色砂粒少量含む	
922	須恵器	蓋	A 地区	精査	<12.6>	(1.8)	4.1	2/12	灰 (N6/1)	密 径 1 mm 前後白色砂 粒少量含む	
923	須恵器	杯身	E 地区	精査	10.1	3.3	受け 部) 11.6	2.5/12	灰白 (10YR8/1)	やや粗 径 1 ~ 1.5mm の白い粒半透明の粒径 1 mm 前後の黒い粒を含む	
924	須恵器	杯身	E 地区	S K 2035	(10.6)	(1.9)	-	1/12	灰白 (2.5Y7/1)	密 径 0.5mm 以下の黒い 粒 (多め) 白い粒を含む	
925	須恵器	杯身	E 地区	精査	10.7	(2.3)	-	2/12 弱	灰白 (N7/0)	密 径 1 mm 以下の白い 粒黒い粒を含む	
926	須恵器	杯身	A 地区	精査	(12.3)	(2.9)	-	1/12 強	灰 (N6/0)	やや粗 径 0.5 ~ 1.5mm の白い粒黒い粒を含む	
927	須恵器	杯身	A 地区	j14	-	(2.5)	受け 部) 14.7	1/12 強	外)灰白(2.5Y8/2) 内)にぶい橙 (7.5YR7/6)	密 極細粒の白い粒黒っ ぽい粒を含む	
928	須恵器	甕	E 地区	S K 2142 l 10	(18.3)	(2.6)	-	1/12	灰白 (2.5Y8/1)	やや密 径 1 mm 以下の 黒っぽい粒径、0.5mm 以 下の灰色っぽい粒を含む	
929	須恵器	甕	A 地区	S P 1025	頸) 15.2	(3.9)	-	頸) 2/12 弱	灰 (N6/0)	密 径 1 mm 以下の白い 粒黒い粒を含む 径 2 mm 大の白い粒も混じる	
930	土師器	甕	A 地区	北側精査	22.0	(8.1)	-	頸) 2/12 弱	にぶい橙 (5YR7/4)	やや粗 径 1 ~ 2 mm の 茶色い粒白い粒径 1 mm 以下の黒っぽい粒を含む 径 3 mm 大の粒も混じる	
931	土師器	甕	A 地区	包含層	(17.6)	(6.8)	-	1/12 強	にぶい橙 (7.5YR7/3)	やや密 径 1 mm 以下の 白い粒茶色い粒径 0.5mm 以下の黒っぽい粒を含む	
932	土師器	甕	E 地区	包含層	(26.9)	(3.5)	-	1/12 強	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや密 径 1.5mm 以下の 白い粒透明の粒黒っぽい 粒茶色い粒を含む	
933	土師器	皿	E 地区	S X 2003	8.5	(1.5)	-	2/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 極細粒の白い粒黒い 粒灰色の粒を少し含む	
934	土師器	皿	E 地区	S P 2022	8.6	1.3	-	2/12	橙 (2.5YR6/6)	密 径 0.5mm 以下の茶色 い粒を少し含む	
935	土師器	皿	E 地区	包含層	10.3	(1.5)	-	2/12 弱	内外)橙(5YR7/6) 断)暗灰(N3/0)	密 径 0.5mm 以下の赤茶 色い粒 (やや多い) 黒っ ぽい粒 (少し) を含む	
936	陶磁器	椀	本調査 A 地区	包含層	9.6	(3.4)	-	1/12 強	素地)灰白 (7.5YR8/2) 釉) 暗赤褐 (5YR3/3)	やや密 径 0.5mm 以下の 黒っぽい粒を少し含む	天目

付表24 犬飼遺跡出土木製品ほか観察表

報告 番号	種類	地区名	出土地点	法量 (cm)			木取り	樹種	備 考
				長さ	幅	高さ・ 厚さ			
378	漆器椀	B地区	S D 01	口径 (18.4)	-	器高 (3.0)	-	トチノキ	残存率口縁部 1/12 強 外面黒 内面黒模様部分朱
379	漆器椀	B地区	S D 01	口径不 明	-	器高 (2.2)	-	ハンノキ 属	外内面黒模様部分朱
380	漆器椀	B地区	S D 03	-	高台径 (7.6)	器高 (2.7)	-	トチノキ	残存率底部 12/12 高台内に「二」 刻文 外内面黒模様部分朱
381	漆器椀	C地区	S D 02 青灰色 砂層	口径 (16.6)	-	器高 (4.5)	-	カツラ	残存率口縁部 1/12 外内面黒模様 部分朱
382	漆器椀	D地区	S D 03 l4 Ⅲ b 層	-	高台径 7.0	器高 (1.0)	-	ケヤキ	残存率底部 9/12 外内面オリ ブ黒 (7.5Y3/1) 高台内に「ト」刻 文
383	漆器椀	B地区	S D 01	口径 (14.5)	高台径 6.3	器高 4.3	-	トチノキ	残存率底部 12/12 外面黒模様部 分朱 内面朱 高台内に「三」か 「川」刻文
384	漆器椀	B地区	S D 01	-	高台径 (7.8)	器高 (3.2)	-	トチノキ	残存率底部 3/12 強 外内面黒 模様部分朱
385	漆器皿	B地区	S D 03 k・l5・6 Ⅲ層	口径 (8.0)	底径 6.0	器高 1.1	-	サクラ属	残存率口縁部 2/12 外内面黒
386	漆器	B地区	S D 03 断面 d Ⅱ層	-	6.4	器高 (2.6)	-	-	外内面赤黒 (10R1.7/1) 模様部分朱赤 (10R4/8)
387	曲物	B地区	S D 03 l6	直径 (14.0)	-	高さ (7.3)	-	-	一か所に穴を開けている。樹皮に て 1 列に止めている。打ち合わせ の幅は 7.0cm 程度。
388	曲物	B地区	S D 01 j・k9 Ⅲ層 a	-	5.4	0.15 ~ 0.2	-	-	
389	曲物	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層 a	23.1	1.0 ~ 1.1	0.15 ~ 0.24	-	-	
390	曲物	B地区	S D 01	7.0	1.4	0.3	-	-	側板破片
391	曲物	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層	7.2	1.5	0.2	-	-	側板破片
392	曲物一部 か	B地区	S D 01 k11 Ⅱ層最下層	3.3	1.9	1 枚の 厚さ 0.1 程 度	-	-	部材の一部か
393	曲物蓋板	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層	12.3	12.3	0.6	板目	-	
394	曲物底板	B地区	S D 01 k10 Ⅲ層	12.2	11.0	0.6	柁目	-	
395	曲物底板	B地区	S D 01 l12 Ⅲ層	17.7	3.3	1.1	板目	-	
396	曲物底板	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層 a	11.5	8.2	0.4 ~ 0.5	板目	-	
397	曲物か	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層	14.3	3.0	0.9	板目	-	
398	不明木製 品	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層	13.0	1.9 ~ 4.1	2.1 ~ 2.4	追柁目	-	
399	曲物部材 か	B地区	S D 01 Ⅲ層	8.9	0.5	0.5	柁目	-	
400	箸	B地区	S D 02 l5 Ⅲ層	12.3	0.5	0.4	板目	アスナロ	
401	不明木製 品	B地区	S D 01 l11 Ⅱ層最下層	4.0	1.2	0.9	板目	-	
402	不明木製 品	B地区	S D 01 l11 Ⅱ層最下層	8.1	1.2	1.1	板目	-	
403	不明木製 品	B地区	S D 01 l13 Ⅱ層	8.0	1.1	1.1	板目	-	
404	竹加工品	B地区	S D 03 k・l5 Ⅲ層	21.3	1.4	1.4	-	タケ科	
405	不明木製 品	B地区	S D 03 k・l5・6	19.1	0.9	0.5	柁目	-	

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	地区名	出土地点	法量 (cm)			木取り	樹種	備 考
				長さ	幅	高さ・ 厚さ			
406	有頭棒	B地区	S D 03 k7 Ⅲ層	13.2	5.1	4.9	芯持丸太	マツ属複 維管束亜 属	
407	有頭棒	B地区	S D 01 j12 Ⅱ・Ⅲ層境	6.8	3.9	3.5	芯持丸太	-	
408	有頭棒	B地区	S D 01 j・k9 Ⅲ層	5.8	5.9	3.8	柁目か	-	
409	有頭棒	B地区	S D 03 k・l5・6	4.9	3.1	2.8	芯持丸太	-	
410	有頭棒	B地区	S D 01 Ⅲ層	7.4	4.1	3.7	芯持丸太	-	
411	有頭棒	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層	6.5	5.3	4.6	芯持材	-	
412	円盤状木 製品	B地区	S D 01-1 k9 Ⅲ層 a	5.0	5.3	0.6	板目	スギ	
413	不明部材	B地区	S D 03 S X 429 東側最下層	46.5	4.0～ 2.7	最大 1.25	板目	ヒノキ	柄穴縦3.45横1.0 穴2か所あり 径0.3cm・径0.2cm 前後にある
414	不明部材	B地区	S D 03 S X 429 東側最下層	10.2	4.1～ 3.25	最大 1.2 最 小0.75	板目	-	穴径0.4cmと径0.35cm程度のもの2か所
415	不明木製 品	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層	18.4	4.0	0.6	柁目	-	
416	下駄	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層	11.5	2.7	0.9～ 2.1	板目	-	
417	下駄	B地区	S D 01 k13 Ⅲ層	5.2	8.9	1.0	板目	-	
418	下駄	B地区	S D 01 k13 Ⅲ層	4.9	8.5	0.9	板目	-	
419	板材	B地区	S D 01 k9 Ⅲ層	5.8	5.1	0.8	追柁目	-	
420	板材	B地区	S D 01 j12 Ⅱ・Ⅲ層の境	5.9	5.4	1.0	柁目	-	
421	木材	B地区	S D 01 k11 Ⅲ層	7.5	2.1	0.8	板目	-	
422	残材	B地区	S D 01	7.5	3.9	2.0	板目	-	
423	藁草履	B地区	S D 01 l7	14.3	前7.3 後 5.9	0.35～ 0.4	-	-	鼻緒：長さ1.55cm 径約1.0cm
424	編籠	D地区	S D 03 Ⅲ層	-	-	-	-	タケ亜科	大きさ不明
425	ヘラ状木 製品	B地区	S D 03 k・l 5・6	18.8	3.7	0.5	板目	スギ	
426	ヘラ状木 製品	B地区	S D 03 k・l 5・6	18.8	3.2	0.5	板目	-	
427	ヘラ状木 製品	B地区	S D 01 l9 Ⅲ層	18.1	3.8	1.2	板目	-	
428	ヘラ状木 製品	B地区	S D 01 j・k9 Ⅲ層	6.5	3.9	0.4	板目	-	
429	ヘラ状木 製品	B地区	S D 01 j12 Ⅱ・Ⅲ層境	11.6	34.8	0.3	柁目	-	
430	ヘラ状木 製品	B地区	S D 03 k・l5 Ⅲ層	11.6	3.6	0.4	追柁目	-	
431	ヘラ状木 製品	B地区	S D 01 Ⅲ層	13.6	3.5	0.6	柁目	-	
432	ヘラ状木 製品	B地区	S D 01 h・i8・9 Ⅱ層	15.6	4.1	0.4	板目	-	
433	ヘラ状木 製品	B地区	S D 03 k7 Ⅲ層	17.4	3.6	0.8	板目	-	
434	ヘラ状木 製品	B地区	S D 03 k7 Ⅲ層	21.8	3.6	0.7	板目	-	
435	燃えさし	B地区	S D 01 k12 Ⅱ・Ⅲ層境	14.4	3.6	1.4	追柁目	-	
436	削りかす	B地区	S D 01 k11	5.5	1.7	0.4	追柁目	-	
437	割材	B地区	S D 01 l12 Ⅲ層	28.4	5.8	1.3～ 2.3	芯持丸太	-	

報告 番号	種類	地区名	出土地点	法量 (cm)			木取り	樹種	備 考
				長さ	幅	高さ・ 厚さ			
438	割材	B地区	S D 01 112 Ⅲ層	8.3	10.7	4.2	板目	-	
439	割材	B地区	S D 01	16.0	6.0	1.8	芯去材	-	
440	割材	B地区	S D 01	16.5	5.7	3.2	追柁目	-	
441	割材	B地区	S D 01 k11 Ⅲ層	14.6	5.8	3.2	芯持丸太	-	
442	みかん割 材	B地区	S D 01 j・k9 Ⅲ層	10.9	4.9	1.1	板目	-	
443	杭	C地区	S W 430	47.2	6.7	5.6	芯持丸太	-	
444	杭	C地区	S W 430	53.4	6.1	7.1	芯持丸太	-	
445	杭	C地区	S D 02	58.0	7.5	6.8	芯持丸太	-	
446	杭	C地区	S W 430	59.8	7.8	6.5	芯持丸太	-	
447	杭	C地区	S W 430	65.0	5.7	6.7	芯持丸太	-	
448	杭	C地区	S W 430	118.8	12.0	12.0	芯持丸太	-	
449	杭	C地区	S W 430	114.3	4.2~ 6.6	5.9	芯持丸太	-	
450	杭	C地区	S W 430	99.0	6.9× 5.8 7.3× 8.3	-	芯持丸太	-	
451	杭	C地区	S W 430	59.2	10.5	10.0	芯持丸太	-	
452	杭	C地区	S W 430	34.3	6.3	4.7	芯持丸太	-	
453	杭	C地区	S W 430	80.8	10.2	5.8~ 8.4	芯持丸太	-	
454	杭	C地区	S W 430	80.0	6.2	6.5	芯持丸太	-	
455	杭	B地区	S D 03 (S X 429の東側)	84.8	8.5	8.4	芯持丸太	-	
456	杭	C地区	S W 430	101.5	8.4	8.3	芯持丸太	-	
457	杭	C地区	S W 430	79.3	7.1	6.6	芯持丸太	-	
458	杭	C地区	S W 430	85.8	21.6	10.8	芯持丸太	-	
459	杭	C地区	S W 430	39.5	9.0	8.1	芯持丸太	-	
460	杭	C地区	S D 02	69.1	8.4	8.4	芯持丸太	-	
715	又鋏	C地区	N R 50 j19 Ⅲ層	24.3	11.2	1.5	みかん割 り	コナラ属 アカガシ 亜属	
716	又鋏	C地区	N R 50 k16 Ⅳ・Ⅴ層	17.2	3.8	0.6	板目	-	
717	鋤	C地区	N R 50	28.5	9.1・ 14.1・ 12.6	3.7・ 2.8・ 1.8	板目	-	
718	鋏鋤身か	C地区	N R 50 k17 Ⅳ層	24.8	11.8	4.0	追柁目	-	
719	神頭	C地区	N R 50 119 Ⅲ層 (5層)	3.4	2.2	0.6~ 0.7	芯持丸太	-	ソケット状になっている 丁寧な 加工
720	横槌	C地区	N R 50 k17 Ⅳ層	19.7	6.5	6.4	芯持丸太	-	
721	イスか	C地区	N R 50 118 Ⅰ~Ⅲ層	18.2	7.3	2.5	追柁目	-	
722	槽	C地区	N R 50 j17 Ⅳ層	15.0	7.5	1.6~ 2.8	追柁目	-	
723	案の天板 か	C地区	N R 50 119 Ⅱ層	14.0	5.3	0.8	板目	-	
724	刀形の柄 か	C地区	N R 50 117 Ⅳ層	6.4	1.2・ 1.7	0.65	板目	ヒノキ	
725	刀形	C地区	N R 50 Ⅴ層 (8層)	15.0	2.75・ 5.4	0.6・ 0.9	板目	ヒノキ	
726	作業台か	C地区	N R 50 k17 Ⅳ層	22.6	9.5	7.5	芯持丸太	-	
727	作業台か	C地区	N R 50 117・18 Ⅳ・Ⅴ層	25.6	10.1	7.6	芯持丸太	-	

報告 番号	種類	地区名	出土地点	法量 (cm)			木取り	樹種	備 考
				長さ	幅	高さ・ 厚さ			
728	錘	C地区	N R 50 I・II層 119	15.1	5.1	3.1	追柵目	-	
729	樹皮加工 品	C地区	N R 50 k16 V層	8.9	6.55	0.9	板目	-	樹皮に4か所の孔あける
730	棒状部材	C地区	N R 50 117 IV層	15.1	2.5	1.25	板目	-	両端を欠き、元の形状は不明だが中央部に3mm程の円孔ありキリによる穿孔か
731	目盛板	C地区	N R 50 119 II層	23.4	2.9・ 2.8	1.5	追柵目	-	全面に加工あり 側面には刀物によるキズが4か所ある
732	棒状部材	C地区	N R 50 III層	29.1	2.3・ 2.4	1.1	追柵目	-	両端に加工あり 片側は薄く加工している 用途不明品
733	有頭棒	C地区	N R 50 k17 IV層	24.5	4.3	3.4	板目	-	
734	燃えさし	C地区	N R 50 l20 II層	11.2	2.25	1.6	柵目	-	
735	燃えさし	C地区	N R 50 j17 III層	10.2	1.45・ 1.8	0.7・ 1.1	追柵目	-	
736	燃えさし	C地区	N R 50 119 II層	13.4	1.7・ 1.9	1.1・ 1.9	追柵目	-	
737	燃えさし	C地区	N R 50 k17 V層	12.7	2.5	1.2	板目	-	
738	燃えさし	C地区	N R 50 118 III層	16.5	1.1・ 2.5	1.1・ 2.2	追柵目	-	
739	燃えさし	C地区	N R 50 j17 II層	21.9	2.4	1.4	板目	-	
740	燃えさし	C地区	N R 50 k17 V層	21.3	2.6	1.4	板目	-	
741	燃えさし	C地区	N R 50 j18 IV層(8層)	17.6	1.4・ 1.6	0.5・ 0.55	板目	-	
742	燃えさし	C地区	N R 50 118 III層	18.5	1.85・ 2.2	0.6・ 0.7	板目	-	
743	燃えさし	C地区	N R 50 j18 IV層(8層)	18.1	1.85・ 2.2	0.6・ 0.7	追柵目	-	
744	燃えさし	C地区	N R 50 k16 IV・V層	28.2	2.1・ 2.35	最大 1.8・ 1.6	板目	-	下方の先端のみ加工あとは割さき
745	燃えさし	C地区	N R 50 119 V層	24.6	2.0	1.1	板目	-	
746	燃えさし	C地区	N R 50 j17 IV層	22.0	0.6・ 1.1	0.7・ 0.35・ 0.4	板目	-	
747	燃えさし	C地区	N R 50 118 II層	20	1.0	0.85	板目	-	
748	燃えさし	C地区	N R 50 IV層(8層)	17.9	1.35	1.1	板目	-	
749	燃えさし	C地区	N R 50 117 II層	18.3	1.05	0.9	板目	-	
750	板材	C地区	N R 50 119 III層	6.3	1.6	4.5	追柵目	-	
751	板材	C地区	N R 50 k16 IV・V層	10.6	1.7	0.5	板目	-	
752	板材	C地区	N R 50 k18 III層	18.4	1.8・ 1.9	0.25・ 0.3	板目	-	
753	板材	C地区	N R 50 k17 II・III層	16.7	3.7	0.65	板目	-	やや沿る 薄板 表面に丁寧な加工はない
754	板材	C地区	N R 50 IV層直上	21.1	3.1	0.5	板目	-	
755	屋根材か	C地区	N R 50 III層	44.0	13.0	1.3	板目	ヒノキ	
756	部材片	C地区	N R 50 k16 IV・V層	21.0	8.8・ 23.0	最大 7.2 最 小5.4	板目	ヒノキ	



報告 番号	種類	地区名	出土地点	法量 (cm)			木取り	樹種	備 考
				長さ	幅	高さ・ 厚さ			
757	建築部材	C地区	NR 50 k17 IV層	56.8	5.0・ 5.3・ 3.0	2.2・ 2.5・ 1.8	板目	ヒノキ	断面両側面はイキ、上・下端の別の方向に欠込がある 一方は丸みあり、下方はやや凹み段がつく
758	部材	C地区	NR 50 (SX 444) III層	80.1	5.8・ 4.9	1.7	板目	ヒノキ	
759	先端棒	C地区	NR 50 117 II層上面	62.6	2.6	2.6	板目	-	芯なし
760	先端棒 (留め具か)	C地区	NR 50 III・IV層	36.1	2.1	1.5	追柵目	-	
761	先端棒	C地区	NR 50 119 II層	48.5	2.7	2.4	追柵目	-	
762	板材	C地区	NR 50 (SX 444) III層	214.2	9.2～ 19.1	2.1～ 4.1	追柵目	ヒノキ	
763	板材	C地区	NR 50 (SX 444) III層	200.4	19.6	10.0	追柵目	ヒノキ	芯去材
764	板材	C地区	NR 50 (SX 444) III層	72.5	10.0	2.0	追柵目	-	
765	板材 (床材か)	C地区	NR 50 IV層	145.2	19.0～ 20.4	3.8	板目	-	
766	板材	C地区	NR 50 (SX 444) III層	65.8	16.8	2.6	板目	-	
767	建築部材 (床か壁材)	C地区	NR 50 j17 V層	54.7	17.1	2.3	追柵目	ヒノキ	
768	板材	C地区	NR 50 II層	153.5	13.0	3.8	追柵目	-	
769	板材	C地区	NR 50 (SX 444) III層	135.0	16.0	4.7	板目	ヒノキ	
770	板材	C地区	NR 50 (SX 444) III層	120.8	16.2	3.2	板目	ヒノキ	
771	板材	C地区	NR 50 IV層	101.2	29.0	6.4	板目	ヒノキ	
772	建築部材 か	C地区	NR 50 (SX 444) III層	92.0	3.1～ 12.2	最小 3.4 最大 4.8	板目	ヒノキ	
773	建築部材 か	C地区	NR 50 (SX 444) III層	96.5	19.7	5.5	板目	ヒノキ	枿穴 7.5 × 6.3cm
774	加工材	C地区	NR 50 (SX 444) III層	210.0	10.6～ 13.6	10.6～ 13.6	芯持丸太	ヒノキ	
775	加工材	C地区	NR 50 (SX 444) III層	146.8	8.8～ 11.2	7.2～ 10.8	芯持丸太	ヒノキ	
776	建築部材	C地区	NR 50 (SX 444) 118 III層	131.9	8.0	7.0	角材	ヒノキ	
777	柱材か	C地区	NR 50 III層	77.6	14.2	13.6	芯持丸太	-	部分的に四角柱
778	板材	C地区	NR 50 (SX 444) III層	76.5	14.8	3.0	板目	-	
779	杭	C地区	NR 50 k17 V層	37.2	4.2	2.5	板目	-	一方のみ
780	杭	C地区	NR 50 117 III・IV層	27.8	3.6	3.6	板目	-	全面加工 先端加工
781	杭	C地区	SW 441 117	42.0	4.5	3.6	角材	ヒノキ	
782	杭	C地区	SW 441 116	46.2	4.0	3.8	角材	ヒノキ	
783	杭	C地区	SW 441 117	46.3	4.6	2.0	板目	ヒノキ	
784	杭	C地区	SW 441 116	45.9	5.1	2.1	板目	ヒノキ	扁平
785	杭	C地区	SW 441 117	43.2	3.4	1.5	板目	ヒノキ	
786	杭	C地区	NR 50 116 IV層	35.2	5.2	1.4	板目	-	横のみ加工
787	杭	C地区	NR 50 117 IV・V層	34.8	7.7	5.6	芯持丸太	-	先端杭状 丸太(細)の1/4のみ欠きとったような形状 木杭の再加工か
788	杭	C地区	NR 50 k17 IV層上面	31.0	3.5	0.9	板目	-	
789	杭	C地区	NR 50 III層	107.5	18.2	4.2	板目	-	

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	地区名	出土地点	法量 (cm)			木取り	樹種	備 考
				長さ	幅	高さ・ 厚さ			
790	杭	C地区	N R 50 IV・V層	31.6	4.2	1.2	柱目	-	板片側のみ加工
791	杭	C地区	N R 50 III・IV層	29.6	5.0	2.4	柱目	-	
792	残材	C地区	N R 50 III層	16.7	8.8	6.7	追柱目	-	
793	残材	C地区	N R 50 118 III層 木集中区	42.7	11.8	6.7	柱目	-	
794	残材	C地区	N R 50 119 III層	13.9	12.8	5.35	芯去みか ん割り	-	丸太(細、小径木)の残材
795	残材	C地区	N R 50 j18 IV層(8層)	16.6	7.5・ 7.2	2.4	追柱目	-	
796	残材	C地区	N R 50 118 III層	13.7	13.5	4.2	芯持丸太	-	
797	残材	C地区	N R 50 k16 IV・V層	24.0	5.5・ 5.3	5.3	板目	-	全面裂いた跡
798	残材	C地区	N R 50 III層	10.3	11.5	3.2	追柱目	-	手斧痕がみえないこと、側面に止めたような跡が2か所あることから、のこぎりによる加工か。板の端を切り落としか
799	残材	C地区	N R 50 k19 III・V層	5.25	6	2.8	板目	-	
800	残材	C地区	N R 50 118 III層	7.6	2.2	4.0	追柱目	-	芯去の角材 上・下面を切っている 斜め方向の加工痕あり のこぎりによる加工の可能性あり
801	残材	C地区	N R 50 k16 IV層	14.5	2.25・ 2.5	0.7・ 1.5	追柱目	-	
802	残材	C地区	N R 50 117 IV層	10.5	2.0・ 2.3・ 2.7	0.5	板目	-	
803	削りかす	C地区	N R 50 118 III層	27.4	3.15・ 3.0弱	最大 1.2 断 面 0.95	板目	-	
804	削りかす	C地区	N R 50 117 III・IV層	11.4	2.8	0.55	芯去材	-	
805	削りかす	C地区	N R 50 117 IV層	6.7	2.5	0.65	板目	-	
806	削りかす	C地区	N R 50 117 III・IV層	6.3	4.4	1.5	板目	-	
807	削りかす	C地区	N R 50 k17 IV層	8.8	1.6	0.45	板目	-	
808	削りかす	C地区	N R 50 118 III層	4.9	3.35	0.85	追柱目	-	
809	削りかす	C地区	N R 50 118 III層	5.7	2.4	1.3	板目	-	
810	削りかす	C地区	N R 50 k17 IV層	5.9	1.75	0.85	追柱目	-	
811	削りかす	C地区	N R 50 118 III層	3.3	2.3	0.8	板目	-	
812	削りかす	C地区	N R 50 117 III・IV層	4.2強	1.9	0.7	追柱目	-	
813	削りかす	C地区	N R 50 118 III層	3.6	2.25	0.3	追柱目	-	
814	削りかす	C地区	N R 50 117 III・IV層	6.2	0.5	0.25	板目	-	
815	削りかす	C地区	N R 50 117 III・IV層	3.1	1.25	0.35	板目	-	
816	削りかす	C地区	N R 50 117 III・IV層	3.4	0.95	0.3	板目	-	
817	削りかす	C地区	N R 50 118 III層	4.3	1.3	0.13	板目	ヒノキ	
818	削りかす	C地区	N R 50 k17 IV層	2.3	2.4	0.05~ 0.2	追柱目	-	

付表25 犬飼遺跡出土金属製品観察表

報告 番号	種類	地区名	出土地点	法量 (cm)			素材	備 考
				長さ	幅	厚さ		
461	筭	C地区	S D 02 上面	16.65	1.3	0.12	銅	7.3 g
462	板状鉄製品	B地区	S X 303	4.1	6.7	2.2	鉄	
463	釘	B地区	S X 303 北東	4.1	0.55	0.5	鉄	
464	釘	B地区	S X 303 北東	2.7	0.5	0.5	鉄	
465	釘	B地区	S X 303	2.0	0.6	0.45	鉄	
466	釘	B地区	S X 303 北東	2.5	0.6	0.5	鉄	
467	釘	B地区	S K 11	3.2	最大 1.35 軸 0.45	0.4	鉄	
468	釘	B地区	S K 11	5.7	0.7	0.5	鉄	
469	釘	B地区	S K 11 北側	2.8	0.35	0.4	鉄	
470	釘	B地区	S P 124 (S B 433)	3.1	0.4	0.4	鉄	
471	釘	B地区	S P 191 (S B 433) h7	6.0	0.4	0.4	鉄	
472	釘	D地区	S D 03 h4 上面	3.2	0.5	0.5	鉄	
473	釘	B地区	S D 03 l8	3.9	0.75	0.65	鉄	
474	釘	D地区	S D 03 h4 上面	2.8	0.4	0.4	鉄	
475	釘	B地区	S D 03 北端 II層	3.1	0.4	0.45	鉄	
476	円弧状 鉄製品	B地区	S D 01 l11 II層最下層	2.8	1.1	0.3	鉄	
477	板状鉄製品	B地区	S D 03 k・l7・6 II層	6.0	1.5	0.2	鉄	
478	手鎌か	B地区	精査	3.5	5.8	0.6	鉄	
479	刀子	B地区	S D 01 h9 上面	5.8	1.0	0.25	鉄	
480	短茎鎌	D地区	S H 351	6.9	3.6 ~ 4.05	0.2	鉄	
481	鉛玉	B地区	廃土内表採	1.0	1.1	-	鉛	4.47 g

付表26 犬飼遺跡出土石製品観察表

報告 番号	種類	地区名	出土地点	法量 (cm)			石材	備 考
				長さ	幅	厚さ		
295	石臼	B地区	北壁	直径 (18.6)	12.4	厚み 8.3	閃緑岩	
308	砥石	B地区	S X 303	長 7.1	幅 3.2	厚み 0.8	泥岩 / 頁岩	浅黄 (2.5Y7/3) 重さ 28.0 g
377	基石	B地区	g6	直径 1.0 ~ 1.2	-	最大厚み 0.52	粘板岩	黒色
819	有孔磨製 石鎌	C地区	N R 50 l18 IV層	5.2	2.5	0.4	■	
820	砥石	C地区	N R 50 k16 IV層	4.7	4.1	2.2	頁岩	
821	砥石	C地区	廃土中	6.2	6.6	1.4	砂岩	

付表27 春日部遺跡出土土器観察表

報告番号	種類	器種	地区名	出土遺構・地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備考
1	土師器	甕	A地区	SH279 SP158	17.6	(3.8)		2/12	橙(7.5YR6/4)	やや密 径1mm大の白色、半透明砂粒を含む	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、横方向ハケ、ケズリ	
2	土師器	甕	A地区	SH279	16.2	(3.7)		1/12	にぶい橙(10YR6/4)	やや密 径1mm以下の半透明・白色、半白色・赤褐色砂粒含む	外・内：ヨコナデ	
3	土師器	甕	A地区	SH279	17.6	(5.0)		4/12	橙(5YR6/6)	やや密 径1mm以下の白色砂粒 径2mm以下の半透明・白色・暗褐色砂粒、0.5mm大の赤褐色砂粒含む	外・内：ヨコナデ、ナデ	
4	土師器	壺	A地区	SH279 SP158	10.2	(7.5)		5/12	橙(5YR6/6)	やや密 径1~3mm大の白色・赤褐色・半透明砂粒含む	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ユビオサエ、ケズリ	
5	土師器	高杯	A地区	SH279	32.7	(9.0)		11/12	外：にぶい橙(5Y6/4)橙(5Y6/6) 内：にぶい橙(7.5YR7/4)	密 径1mm以下白色砂粒、径0.5mm赤褐色砂粒を含む	外・内：ヨコナデ、ハケ、マメツ	
6	土師器	高杯	A地区	SH279	-	(5.7)	11.8	12/12	にぶい橙(7.5YR7/4)	密 径2mm以下の白色砂粒、径1mm以下の灰色砂粒含む	外：マメツ、ミガキ 内：ケズリ、ナデ	
7	土師器	高杯	A地区	SH281 SP151	-	(6.5)	9.2	12/12	橙(5YR6/6)	密 径0.5mm大の赤褐色砂粒、径1mm以下の灰色・半透明・白色砂粒、径2mm以下白色砂粒を含む	外・内：ケズリ、ナデ	
8	須恵器	壺	A地区	SH279	15.6	(7.6)	-	4.5/12	灰白(N7/0)	やや密 径2mm以下の白色砂粒含む	外：ヨコナデ、タタキ 内：ケズリ後回転ナデ、ナデ	
9	須恵器	甕	A地区	SH279	(22.1)	(5.8)	-	1/12	オリープ灰(2.5GY5/1)灰白(N7/0)	やや密 径1mm大の白色・半透明・黒色砂粒を含む	外・内：回転ナデ	
10	土師器	甕	A地区	SK150	14.2	4.2	-	1/12	にぶい橙(7.5YR6/4)	やや密 径1~2mm大の白色、半透明、褐色砂粒、赤色斑粒を含む	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ	
11	土師器	甕	A地区	SK150	-	(4.0)	-	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	やや密 径1mm大の白色・半透明・褐色砂粒、赤色斑粒を含む	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ケズリ?	
12	土師器	甕	A地区	SK170	-	(3.1)	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	やや密 径1mm大の白色・黒色・赤色砂粒を含む	外・内：ヨコナデ	
13	土師器	高杯	A地区	SK170		3.2	(9.0)	2/12	橙(7.5YR6/6)	やや密 径1~2mm大の白色・半透明・灰色・褐色砂粒、赤色斑粒を含む	外：ナデ 内：ユビオサエ	
14	須恵器	甕	A地区	SK170	7.9	-	-	1/12	灰白(5Y7/1)	密	内・外：回転ナデ	
15	土師器	甕	A地区	SK280	(17.2)	(3.9)	-	1/12	橙(5YR6/6)	やや密 径1mm大の白色・半透明・褐色砂粒を含む	外・内：ヨコナデ	
16	土師器	高杯	A地区	SK280	14.8	(5.7)	-	1/12	灰白(10YR8/2)	やや密 1~2mm大の白色・黒色砂粒含む	外・内：ヨコナデ	
17	須恵器	杯蓋	A地区	SK280	14.2		-	2/12	灰(N5/0)	やや密 径1mm以下の黒色・半透明砂粒含む	外：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ	
18	土師器	杯	A地区	SH180	12.8	4.3	-	11/12	にぶい黄橙(10YR7/3)	やや粗 径2mm以下の白色・明褐色砂粒 径1mm大の黒色砂粒少量含む	外：回転ナデ、ナデ 内：ハケ	
19	須恵器	杯身	A地区	SH180	13.5	4.7	-	6/12	灰白(N8/0)	やや密 径1~2mm大の灰色・黒色砂粒を含む	外：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、ナデ	外面自然釉かかる
20	須恵器	杯蓋	B地区	SH294	12.2	4.6	-	5.5/12	灰(6/0)	やや密 径1mm以下の白色砂粒含む	外：ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ	

報告番号	種類	器種	地区名	出土遺構・地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備考
21	須恵器	杯身	B地区	SH294	(10.5)	(2.8)	-	1/12	灰白(N7/0)	やや密 径1~3mm大の白色・黒色砂粒を含む	外・内：回転ナデ	口縁ゆがみ有り
22	須恵器	平瓶	B地区	SH294	4.4	(4.4)	-	3/12	灰白(N7/0)	密	外・内：回転ナデ	
23	須恵器	杯身	B地区	SD292	-	(2.4)	-	-	灰(N6/0)	やや密 径1~3mm大の白色砂粒を含む	外・内：回転ナデ	
24	須恵器	壺	B地区	SD292	(17.0)	(2.3)	-	1/12	灰白(7.5Y7/1)	密 径1mm以下の白色・黒色砂粒を含む	外・内：回転ナデ	
25	須恵器	台付壺	B地区	S D292	-	(9.3)	-	-	灰白(N7/0)、灰(10Y4/1)	やや密 径1mm~5mm大の白色・黒色砂粒を含む	回転ナデ、沈線、列点文、沈線、回転ヘラケズリ	体部のみ残る
26	須恵器	高杯	B地区	SD291	-	(7.0)	11.4	底) 2/12	灰白(N7/0)	やや密 径3mm大の黒色石粒 径2mm以下の黒色砂粒を含む	外・内：ナデ、回転ナデ	
27	土師器	鉢	B地区	SD293	(33.0)	(5.0)	-	1/12	浅黄(2.5Y7/3)	やや密 径1mm大の白色・灰色・赤色砂粒を含む	外・内：ヨコナデ、マメツ	
28	須恵器	杯蓋	A地区	SP191	11.8	(3.5)	-	2/12	灰(N5/0)	やや密 径1mm大の白色砂粒を含む	外：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
29	須恵器	杯身	A地区	SP190	12.4	(3.3)	-	2/12	灰(N5/0)	密 径1~3mm大の白色砂粒を含む	外・内：回転ナデ	
30	須恵器	杯身	A地区	SK129	11.2	(3.4)	-	2/12	灰(N4/0) 断面)暗赤	密 径1mm大の白色砂粒を含む	外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：沈線、回転ナデ	
31	土師器	甕	A地区	SP190	-	(3.3)	-	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	やや密 径1mm大の白色・半透明・褐色・赤色砂粒を含む	外・内：ヨコナデ	
32	土師器	壺	A地区	SK261	9.6	12.0	-	3/12	にぶい黄橙(10YR7/3)	密 径1mm以下の褐色砂粒を含む	外：ヨコナデ、マメツ、ハケ 内：ヨコナデ、ハケ、ケズリのチナデ	
33	土師器	皿	A地区	SD290	7.0	1.1	-	2/12	にぶい橙(5YR7/4)	密	外：ヨコナデ、ユビオサエ 内：ヨコナデ、ナデ	
34	土師器	皿	A地区	SD290	9.4	2.0	-	3/12	浅黄橙(10YR8/3)	密 径1mm大の白色砂粒、赤色斑粒を含む	外：ヨコナデ、不調整 内：ヨコナデ、ナデ	
35	土師器	皿	A地区	SD290	11.2	(1.1)	-	1/12	灰白(10YR8/1)	密	外：ヨコナデ、ハクリ 内：ヨコナデ、マメツ	
36	土師器	皿	A地区	SD290	9.6	0.9	-	10/12	にぶい橙(5YR7/4)	密	外・内：ヨコナデ、マメツ	
37	瓦器	椀	A地区	SD290	11.6	(3.7)	-	2/12	灰(N4/0)	密	外：ミガキ、不調整 内：ミガキ、ハケ残る	
38	瓦器	椀	A地区	SD290b	-	(1.6)	4.6	2/15	暗灰(N3/0)	密 黒色砂粒を含む	外：貼付け高台、マメツ 内：マメツ	
39	瓦器	椀	A地区	SD290	-	(1.7)	7.2	3/12	黒(N2/0)	密	外：貼付け高台 内：マメツ	
40	土師器	羽釜	A地区	SD290土橋	(17.8)	(3.9)	-	1/12	橙(5YR6/6)	やや密 径1~3mm大の白色・半透明・黒色・灰色砂粒を含む	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ハケ	スス付着
41	青磁	皿	A地区	SD290	9.8	(1.5)	-	2/12	素地)灰白(2.5Y8/2) 釉調)灰白(5Y7/2)	精良	外：露胎部、施釉 内：施釉	龍泉窯系
42	緑釉陶器	椀	A地区	S D290	-	(2.4)	(9.6)	1/12	素地)にぶい黄橙(10YR7/4)	密 径0.5mm大の褐色砂粒少量含む	外：素地、削り出し高台 内：回転ナデ、釉残る	
43	灰釉陶器	皿	A地区	SD290	(15.0)	(2.8)	-	1/12	素地)灰白(N8/0) 釉調)灰白(10Y7/2)	やや密 白色砂粒を含む	施釉	



国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

報告 番号	種類	器種	地区名	出土遺構・ 地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	胎土	調整	備考
44	土師器	皿	A地区	SP12 (SB06)	9.0	1.0	-	1/12	橙(7.5YR7/6)	やや密 径1~2mm大の 灰色、赤褐色砂粒含む	外・内:ヨコナデ・ マメツ	
45	黒色 土器	椀	A地区	SP12 (SB06)	15.6	5.2	-	4/12	黒(2.5GY2/1)	密 径3mm以下4の半 透明・白色砂粒含む	外:ヨコナデ、 ミガキ、貼付け 高台 内:ヨコナデ、 沈線、ミガキ、 暗文	
46	土師器	皿	A地区	SP12 (SB06)	(16.0)	(2.8)	-	3/12	にぶい橙 (7.5YR7/3)	密 径1mm以下の灰色 砂粒含む	外:ヨコナデ 内:不調整か?	
47	土師器	椀	A地区	SP234 (SB6)	-	(1.5)	5.8	(底) 3/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密 径1~2mm大 の白色、半透明砂粒含む	外:回転ナデ、 中心円状の粘土 痕 内:マメツ	
48	土師器	椀	A地区	SP234 (SB6)	-	(1.6)	4.8	5/12	灰白(5Y7/1)	密 径1mm大の白色・ 茶褐色・灰色砂粒含む	外:マメツ 内:ヨコナデ	
49	土師器	羽釜	A地区	SP174 (SB164)	24.8	(4.7)	-	1/12	外)橙 (5YR6/6) 内)明褐色 (5YR7/1)	径2mm以下の淡褐色、 半透明白色、赤褐色砂 粒を含む 径1mm大 の白色砂粒含む	外:ヨコナデ、 ハケ、マメツ 内:ヨコナデ	
50	瓦器	椀	A地区	SP30	-	2.7	-	-	黒(N2/0)	密	外:ヨコナデ、 ユビオサエ 内:ヨコナデ、 マメツ	
51	土師器	皿	A地区	SK01	13.2	(0.4)	-	1/12	灰黄(2.5Y7/2)	やや密 径1~3mm大 の灰色・半透明・赤褐 色砂粒を含む	外・内:ヨコナデ、 マメツ	
52	土師器	皿	A地区	SK01	10.8	1.3	-	5/12	灰白 (10YR8/1)	密 径2mm以下の白色 砂粒少量含む	外・内:ヨコナ デ	
53	土師器	椀	A地区	SK01	11.6	3.6	5.4	(口) 1.5/12	灰白(7.5Y8/1)	やや密 径1~3mm大 の白色・灰色砂粒含む	外・内:マメツ	
54	黒色 土器	椀	A地区	SK01	17.1	(6.0)	-	2/12	灰(7.5Y4/1)	密	外:不調性、貼 付け高台、ミガ キ 内:ミガキ、横 方向ミガキ	
55	黒色 土器	椀	A地区	SK01	15.6	5.2	-	7/12	黒(N2/0)	密	外:ヨコナデ、 ミガキ、貼付け 高台 内:ヨコナデ、 沈線、ミガキ、 マメツ	
56	黒色 土器	椀	A地区	SK01	15.0	(4.3)	-	3/12	黒(N2/0)	密 径1mm以下の白 色砂粒を含む	外:ヨコナデ、 ミガキ 内:沈線、ミガ キ	
57	土師器	椀底部	A地区	SK03	5.5	(1.8)	-	完形	灰黄(2.5Y 7/2)	密 径2mm以下の白色 砂粒微細量 径0.5mm 大の明褐色砂粒少量含 む	外:ナデ、糸切 り 内:ナデ	
58	黒色 土器	椀	A地区	SK03	14.0	4.2	-	2/12	黒(2.5Y2/1)	密 雲母か?含む	外:ナデ、ミガ キ 内:ナデ、沈線、 ミガキ	
59	黒色 土器	椀	A地区	SK03	14.6	(3.3)	-	1/12	灰白(2.5Y8/2)	密 雲母含む	外・内:ナデ、 マメツ	
60	緑釉 陶器	椀	A地区	SK04	-	(2.2)	6.8	6/12	素地)灰白 (10YR8/2) 釉調)緑釉	密	外:施釉、露胎 部 内:施釉(ハクリ)	
61	黒色 土器	椀	A地区	SK04	15.8	(3.1)	-	1/12	外:黒(5Y 2/1) 内:灰(5Y4/1)	密 雲母含む	外:ナデ、ミガ キ 内:灰(5Y4/1)	
62	黒色 土器	椀	A地区	SK04	-	(0.9)	6.2	2/12	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	密 雲母含む	外:ナデ、貼付 け高台 内:ミガキ	
63	黒色 土器	椀	A地区	SK04	15.4	(3.1)	-	1.5/12	褐灰 (7.5YR4/1)	密 雲母含む	外・内:ナデ、 ミガキ、マメツ	
64	土師器	皿	A地区	SP15	9.4	1.3	-	2/12	灰白 (10YR8/1) 褐灰色(10YR 5/1)	やや密 径1mm大の白 色・半透明・褐色砂粒 含む	外:ヨコナデ、 不調整 内:ヨコナデ、 マメツ	ての字口緑

報告 番号	種類	器種	地区名	出土遺構・ 地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 率	色調	胎土	調整	備考
65	土師器	皿	A地区	SP15	10.6	(1.9)	-	4/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 径1mm大の半透 明・赤褐色・茶褐色砂 粒、赤色斑粒含む	外：ヨコナデ、 ユビオサエ 内：ヨコナデ、 ナデ	ての字口縁
66	緑釉 陶器	椀	A地区	SP100	(14.0)	(3.8)	-	1/12	素地)灰白 (7.5Y7/1) 釉調)緑釉	やや密 径1mm大の白 色砂粒含む	外・内：施釉	
67	土師器	椀	A地区	SP303	-	(3.3)	6.6	5/12	灰白 (10YR8/1)	密	外：ヨコナデ、 貼付け高台 内：ナデ	糸切痕
68	炆器	壺	A地区	SP126	10.8	(10.2)	-	1/12	灰色(7.5Y5/1 ~7/1)	密 径3mm以下の白 色・灰色砂粒含む径 5mm大黒色砂粒、径 7mm大白色砂粒	外・内：回転ナ デ	
69	瓦器	椀	B地区	SD295	(13.6)	(4.6)	-	1/12	暗灰(N3/0)	密	外・内：マメツ	
70	瓦器	椀	B地区	SD295	(6.0)	(1.0)	-	1/12	暗灰(N3/0)	密	外：ナデ、貼付 け高台 内：ナデ	
71	瓦器	椀	B地区	西端精査中	13.8	(4.5)	-	3/12	暗オリーブ灰 (2.5GY3/1)	密 径0.5mm程度白色 砂粒含む	外：ヨコナデ、 ユビオサエ 内：マメツ	
72	土師器	皿	B地区	SK304	8.4	1.9	-	完存	にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密 径1mm大の白 色・灰色砂粒、赤色斑 粒、雲母を含む	外：ヨコナデ、 ユビオサエ、ハ ケ？ 内：ヨコナデ、 ヘラ状工具ナデ	
73	陶器	仏花瓶	B地区	SK297 SK304	11.8	17.0	-	4/12	素地)灰白 (10YR7/1) 釉調)黒褐 (10YR2/2)	やや密 径1mm大の白 色・灰色砂粒を含む	外：施釉 内：露胎部	頸部に把手 の名残の飾 りあり
74	磁器	広東椀	B地区	SK297	11.0	5.8	-	9/12	素地)灰白 (7.5Y8/1) 釉調)染付	精良	外・内：施釉	
75	陶器	搦鉢	B地区	SK297 SK304	24.0	(11.1)	-	1/12	素地)褐灰 (7.5YR5/1)、 にぶい黄橙 (10YR7/2) 釉調)黒 (10YR1.7/1)	密 径1~2mm大の白 色・褐色砂粒を含む	外：回転ナデ、 施釉、貼付け高 台、露胎部 内：すり目	体部と高台 で胎土が違 う
76	須恵器	蓋	C地区	3層 包含層	16.0	(1.8)	-	1/12	灰白(N7/0)	やや密 径1~3mmの 黒色粒、白色砂粒含む	外・内：回転ナ デ	
77	須恵器	杯	C地区	中央 包含層	14.2	5.4	-	2/12	灰色(N6/0)	密	外・内：回転ナ デ	
78	中国製 白磁	椀	C地区	3層 包含層	17.0	(3.6)	-	1.5/12	素地)灰白 (N8/0) 釉調)透明	精良	外・内：施釉	
79	須恵器	鉢	C地区	2~3層 包含層	(28.0)	(3.1)	-	1/12	灰(N6/0~ 5/0)	密 径1mm以下の半透 明、白色砂粒含む	外・内：回転ナ デ	
80	須恵器	鉢	C地区	3層 包含層	-	(3.0)	-	-	灰(N6/0)重 ね焼き部分)灰 色(N4/0)	密 径1mm以下の灰色 砂粒を含む	外・内：回転ナ デ	
81	瓦器	椀	C地区	3層 包含層	14.2	5.2	-	2/12	暗灰(N3/0)	密	外：ナデ、ミガキ、 ユビオサエ、ナ デ、貼付け高台 内：ミガキ、暗 文	
82	瓦器	椀	C地区	3層 包含層	14.4	5.5	-	1/12	暗灰(N3/0)	密	外：ヨコナデ、 ユビオサエ、貼 付け高台 内：ミガキ	
83	瓦器	椀	C地区	3層 包含層	-	(1.7)	(5.0)	1/12	暗灰(N3/0)	密	外：マメツ、貼 付け高台 内：ミガキ、暗 文	

# 圖 版

図版第1 犬飼遺跡第2・3次

B～D地区



(1) 調査地遠景(東から)



(2) 第1面掘削状況(上が北)



図版第2 犬飼遺跡第2・3次

B～D地区



(1) 第1面掘削状況(北西から)



(2) 第1面掘削状況(西から)



図版第3 犬飼遺跡第2・3次

B～D地区



(1) 犬飼遺跡と犬飼城(南東から)



(2) 第1面掘削状況(南西から)



図版第4 犬飼遺跡第2・3次

B～D地区



(1) 1 トレンチ全景(北東から)



(2) 1 トレンチ南壁断面(北から)



(3) 2 トレンチ全景(南から)



図版第5 犬飼遺跡第2・3次

B～D地区



(1) 2トレンチ北壁断面(南から)



(2) 6トレンチ北壁断面(南から)



(3) 第1面遺構検出状況(南東から)



図版第6 犬飼遺跡第2・3次

B～D地区



(1) 第1面区画①全景(南西から)



(2) 第1面区画①全景(南東から)



図版第7 犬飼遺跡第2・3次

B～D地区



(1) 第1面区画②全景(南西から)



(2) 第1面区画②全景(南から)





(1) 堀 S D01 断面 a (東から)



(2) 堀 S D01 断面 b (南東から)





(1)堀 S D01断面 c (南から)



(2)堀 S D01断面 d (南から)



図版第 10 犬飼遺跡第 2・3 次

B～D 地区



(1) 堀 S D01 東西断面①(南西から)



(2) 堀 S D01 東西断面②(南西から)



(3) 堀 S D01 III a 層検出状況  
(南東から)





(1) 堀 S D01 完掘(南西から)



(2) 堀 S D01 完掘(南西から)



(3) 堀 S D01 掘削状況(東から)





(1) 堀 S D01Ⅲ層遺物出土状況  
(上が北)



(2) 堀 S D01Ⅲ層直上  
遺物出土状況(東から)



(3) 堀 S D01出口付近  
遺物出土状況(南西から)





(1) 取水溝 S D 136 完掘 (北東から)



(2) 取水溝 S D 136 断面 (北東から)



(3) 堀 S D 01 出口付近 (北東から)



図版第 14 犬飼遺跡第 2・3 次

B～D 地区



(1) 排水溝 S D 353(東から)



(2) 排水溝 S D 353と堀 S D 01  
の接続部分(西から)



(3) 排水溝 S D 353と雨落ち溝  
S D 386の接続部分(北から)



図版第 15 犬飼遺跡第 2・3 次

B～D 地区



(1)排水溝 S D 353断面 a (東から)



(2)排水溝 S D 353断面 b (南から)



(3)通路状遺構 S X 406(北から)





(1) B・C 間拡張区堀 S D02 完掘状況 (南西から)



(2) 堀 S D02 北壁断面 (南から)





(1) 堀 S D02 及び関連遺構完掘 (南西から)



(2) 溝 S D140、井堰 S W430 完掘状況 (北東から)



図版第 18 犬飼遺跡第 2・3 次

B～D 地区



(1) 溝 S D140・井堰 S W430 断面  
(北から)



(2) 堀 S D02 完掘 (北西から)



(3) 堀 S D02 植物遺体検出  
(南東から)





(1) 堀 S D02 漆器碗出土状況  
(北から)



(2) 井堰 S W430 杭断面  
(西から)



(3) 堀 S D02 植物遺体検出  
(北東から)





(1) 堀 S D03 断面 a (西から)



(2) 堀 S D03 断面 d (南から)





(1) 堀 S D03 屈曲部 (北西から)



(2) 堀 S D03 編籠出土状況 (上が東)



図版第 22 犬飼遺跡第 2・3 次

B～D 地区



(1) 堀 S D 03 東西断面 (南西から)



(2) 堀 S D 03 と S D 70 の接続部  
(北東から)



(3) 堀 S D 03 掘削状況 (南西から)





(1) 堀SD03掘削状況(北西から)



(2) 土橋 S X429 東側、堀 S D03  
断面(北から)



(3) 堀 S D03 木製品出土状況  
(北西から)



図版第 24 犬飼遺跡第 2・3 次

B～D 地区



(1) 排水溝 S D 400 断面 a (北から)



(2) 排水溝 S D 400 断面 b (西から)



(3) 通路状遺構 S X 382 断面  
(北から)





(1) 土橋 S X428 (南から)



(2) 土橋 S X428 (南東から)





(1) 土橋 S X428 (南から)



(2) 土橋 S X428 (北東から)





(1) 土橋 S X429 (南西から)



(2) 土橋 S X429 断ち割り (南西から)





(1) 掘立柱建物 S B 431 完掘 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B 431 完掘 (西から)





(1) 掘立柱建物 S B 432 完掘 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B 433 完掘 (南から)





(1) 竪穴状遺構 S X 303 掘削状況 (南から)



(2) 竪穴状遺構 S X 303 掘削状況 (東から)





(1) 竪穴状遺構 S X 303、焼土坑 S K 312 周辺炭・焼土検出 (北東から)



(2) 竪穴状遺構 S X 303 完掘 (東から)





(1) 竪穴状遺構 S X 303、焼土坑  
S K 312 断面(北西から)



(2) 竪穴状遺構 S X 303 東側断面  
(南東から)



(3) 竪穴状遺構 S X 303・304 断面  
(南東から)





(1) 掘立柱建物 S B 434 (南から)



(2) 集石土坑 S K 11 検出 (南から)





(1) 集石土坑 S K11 断面(北から)



(2) 集石土坑 S K11 断面(南から)





(1) 集石土坑 S K18 断面(東から)



(2) 集石土坑 S K18(掘削状況から)





(1) 土坑 S K36 掘削状況 (南から)



(2) 土坑 S K40 遺物出土状況  
(北から)



(3) 土坑 S K405 (南東から)



(1) 掘立柱建物 S B 431  
柱穴 S P 339 遺物出土状況  
(北から)



(2) 掘立柱建物 S B 431  
柱穴 S P 41 遺物出土状況  
(東から)



(3) 掘立柱建物 S B 431  
柱穴 S P 279 遺物出土状況  
(南から)







(1) 掘立柱建物 S B 431  
柱穴 S P 42～45 検出状況  
(南から)



(2) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 131 遺物出土状況  
(南から)



(3) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 191 遺物出土状況  
(西から)





(1) 掘立柱建物 S B 433  
礎石 S X30 遺物出土状況  
(南から)



(2) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 123 遺物出土状況  
(北から)



(3) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 191 遺物出土状況  
(西から)





(1) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 188 断面(北から)



(2) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 193・S P 198 断面  
(西から)



(3) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 167 断面(東から)





(1) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 173 断面(東から)



(2) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 134 断面(北から)



(3) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 183 根石検出(南から)





(1) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 188 根石検出 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 300 根石検出 (南から)



(3) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 138 根石検出 (南から)





(1) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 193 根石検出(南から)



(2) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 13 根石検出(南から)



(3) 掘立柱建物 S B 433  
柱穴 S P 167 根石検出(南から)



図版第 44 犬飼遺跡第 2・3 次

B～D 地区



(1) B地区北側斜面(北東から)



(2) 切岸 S X 427 (東から)





(1) 切岸 S X427 (西から)



(2) 区画溝 S D401 (西から)



(3) 区画溝 S D401 (西から)



図版第 46 犬飼遺跡第 2・3 次

B～D 地区



(1) 石列 S X38 検出 (南から)



(2) 石列 S X38 断面 (東から)



(3) 土坑 S K481 (北から)





(1) 開析谷 N R 50(Ⅲ層) 検出状況(上が北)



(2) 開析谷 N R 50(Ⅲ層) 検出状況(南東から)





(1) 開析谷 N R 50 (Ⅲ層) 検出状況 (西から)



(2) 木材集積 S X 444 検出状況 (南東から)





(1) 木材集積 S X444(北東から)



(2) 木材集積 S X444(北から)





(1) 開析谷 N R 50 断面(南から)



(2) 開析谷 N R 50 断面(南西から)





(1) 開析谷 N R 50 断面(南西から)



(2) 開析谷 N R 50 自然木 I N 03 出土状況(南から)





(1) 開析谷 N R 50 完掘状況 (南東から)



(2) 開析谷 N R 50 遺物出土状況 (南東から)





(1) 開析谷 N R50 遺物出土状況(南から)



(2) 杭列 S W441 掘削状況(西から)





(1) 開析谷 N R 50 遺物出土状況  
(西から)



(2) 開析谷 N R 50 遺物出土状況  
(南から)



(3) 開析谷 N R 50 遺物出土状況  
(北から)



図版第 55 犬飼遺跡第 2・3 次

B～D 地区



(1) 第 2 面調査地遠景(北東から)



(2) 第 2 面調査地遠景(東から)





(1) D地区全景(南から)



(2) 掘立柱建物 S B 451 完掘(南西から)





(1) 掘立柱建物 S B 452 完掘 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B 453 完掘 (南から)





(1) 掘立柱建物 S B 454 完掘 (南西から)



(2) 掘立柱建物 S B 455 完掘 (南から)





(1) A 地区全景(南から)



(2) 竪穴建物 S H1061(北から)





(1)ピット S P 1025断面(南から)



(2)ピット S P 1036完掘(南から)



(3)ピット S P 1037断面(南東から)





(1)ピット S P 1044・土坑 S K 1062  
断面(東から)



(2)土坑 S K 1021断面(南から)



(3)土坑 S K 1034断面(南東から)





(1) 土坑 S K1038 断面(南から)



(2) 土坑 S K1039 断面(南から)



(3) 土坑 S K1040 断面(南から)





(1) 土坑 S K1041 断面(南から)



(2) 土坑 S K1060 断面(西から)



(3) 不明遺構 S X1065 焼土部分断面  
(南から)





(1) E 地区北半全景(東から)



(2) E 地区南半全景(北から)





(1) 掘立柱建物 S B 2121 (南から)



(2) 柵列 S A 2021 (北西から)



図版第 66 犬飼遺跡第 2・3 次

A・E 地区



(1) 柵列 S A2051 (北から)



(2) 柵列 S A2191 (西から)



図版第 67 犬飼遺跡第 2・3 次

A・E 地区



(1) 柵列 S A2207(南から)



(2) 溝 S D2001・S D2002検出状況(北西から)





(1) 焼土坑 S K 2036 検出状況  
(東から)



(2) 焼土坑 S K 2036 断面 (南西から)



(3) 焼土坑 S K 2083 掘削状況  
(南から)









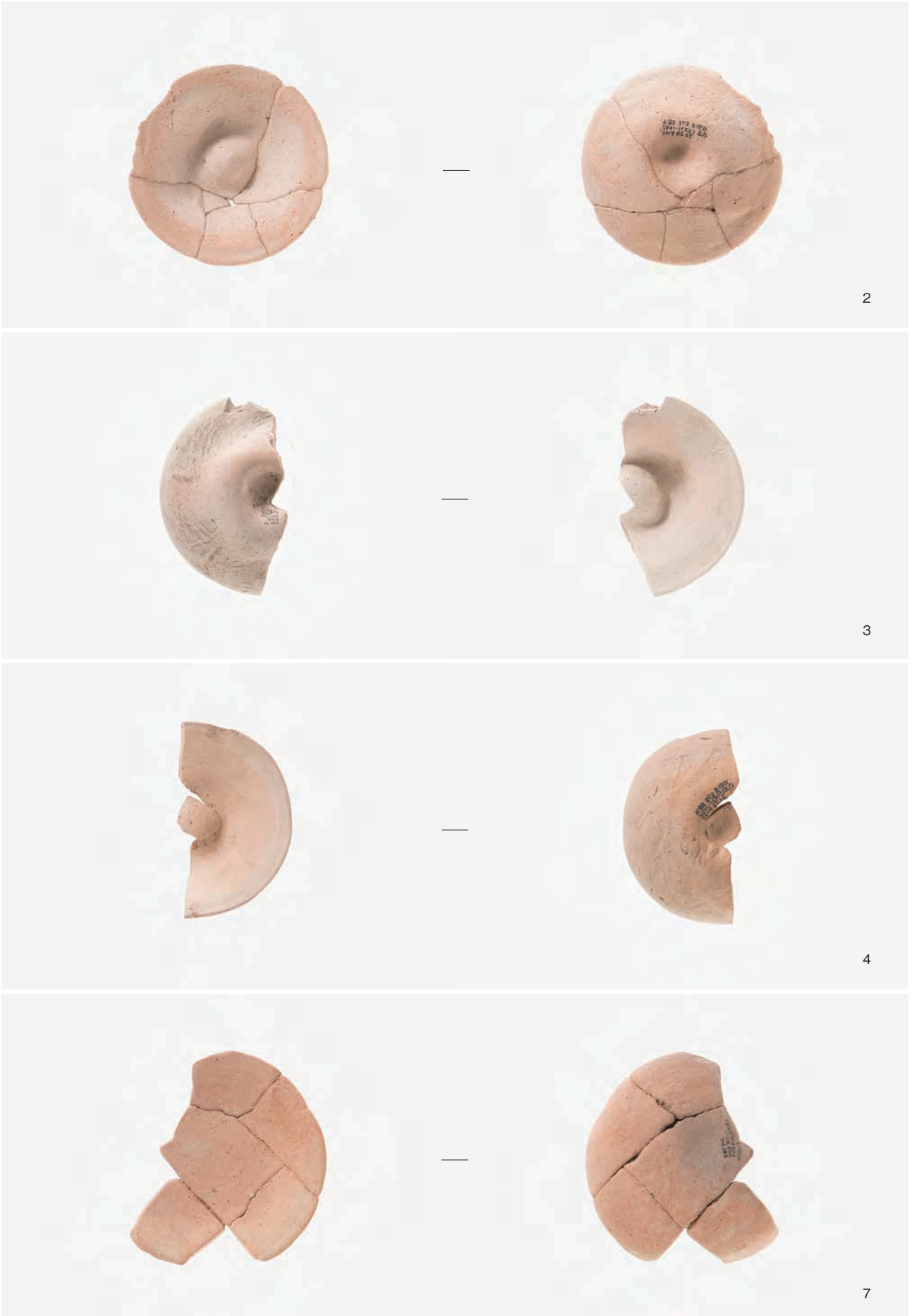




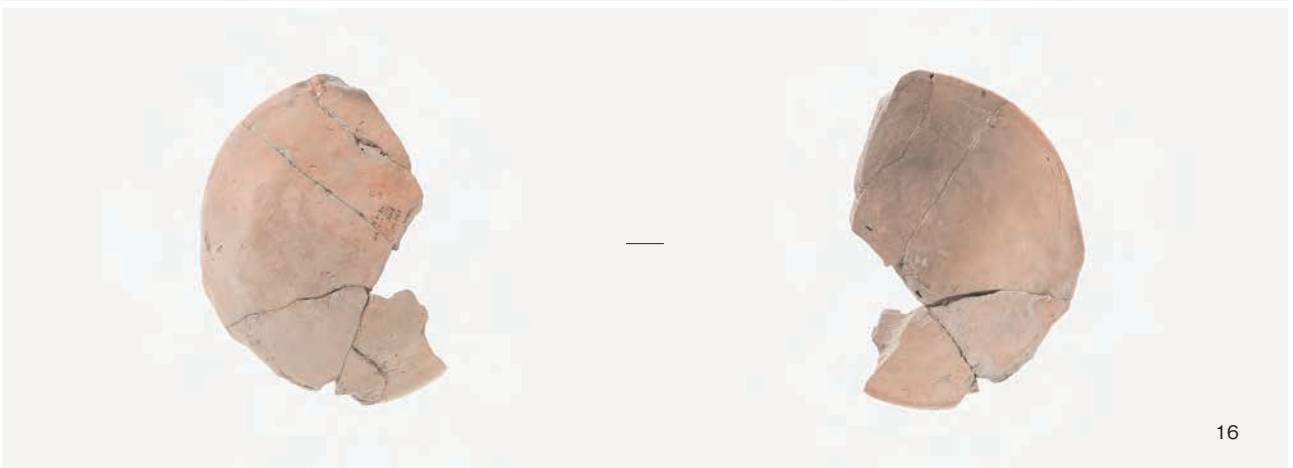
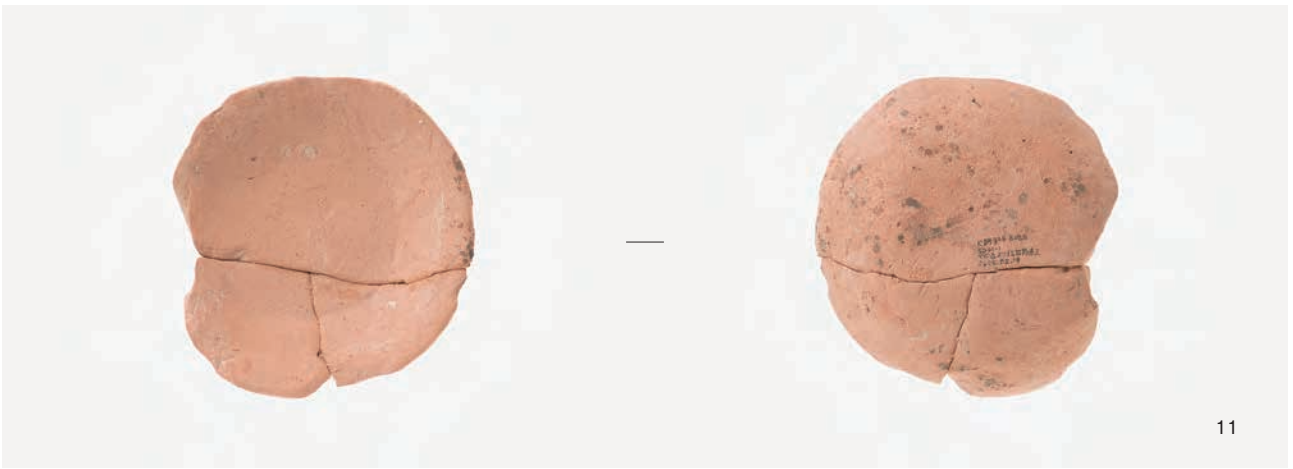


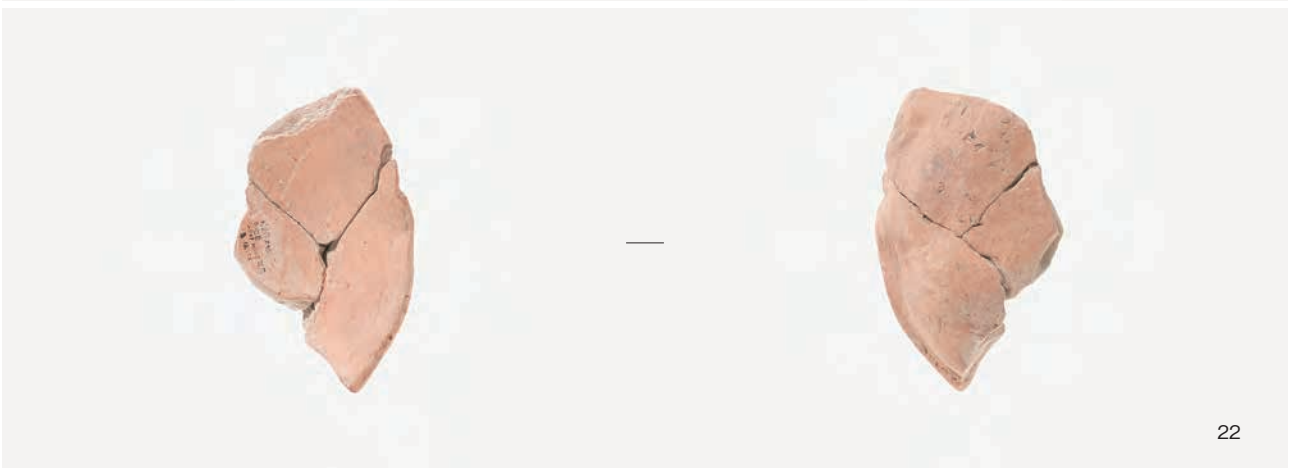
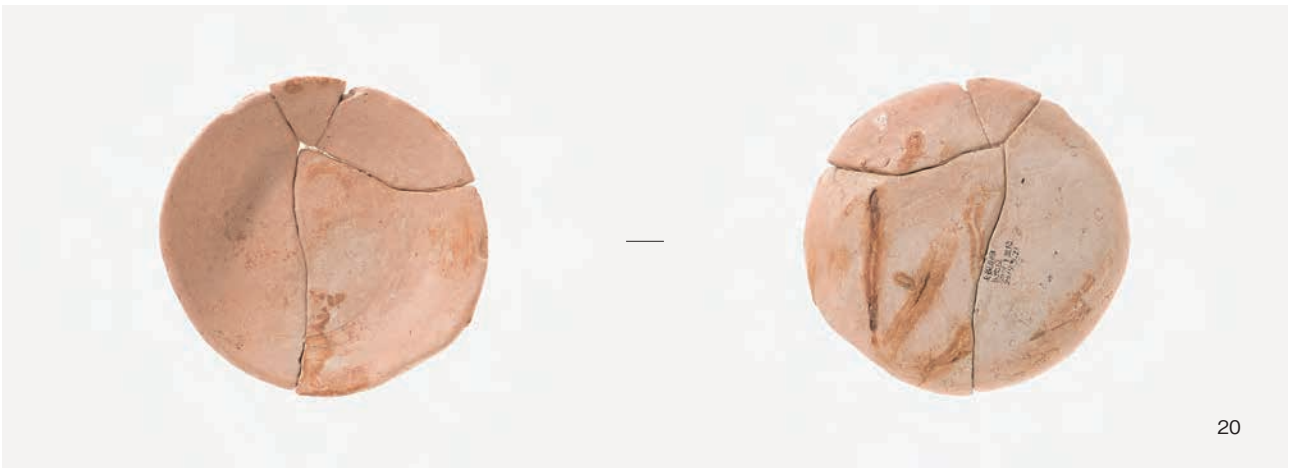
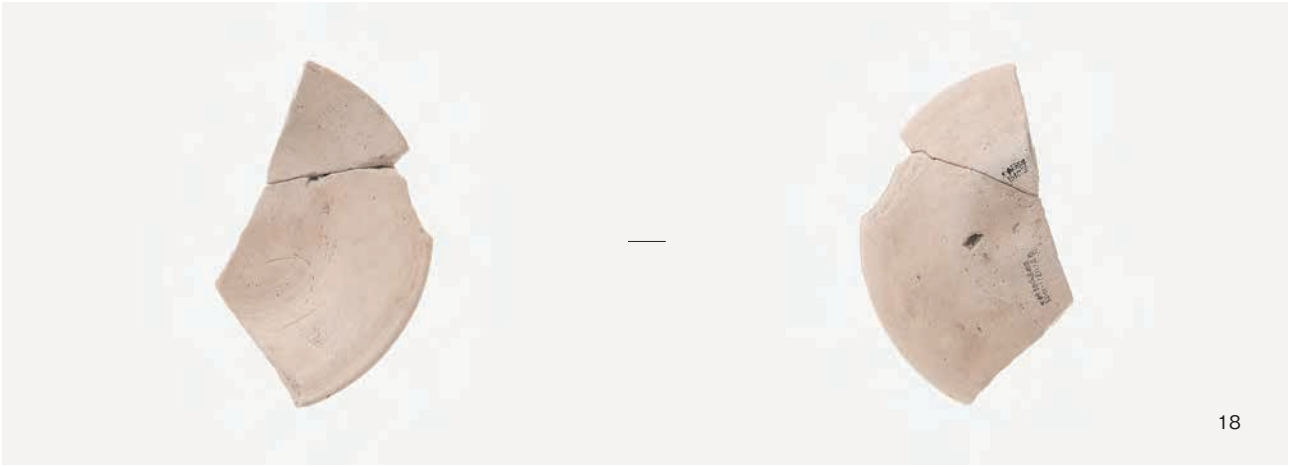






出土遺物 7





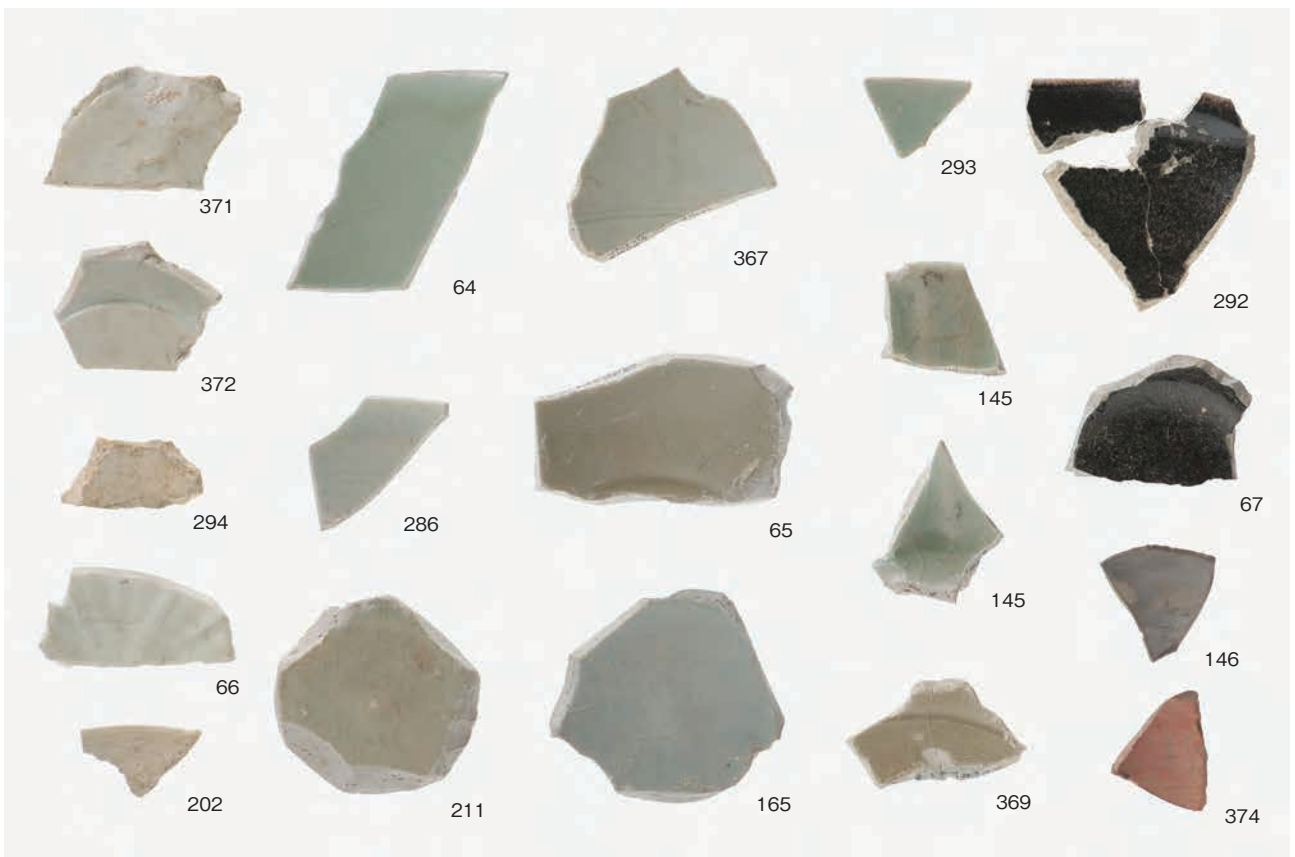




出土遺物10



(1) 出土遺物11 輸入陶磁器(外面)



(2) 出土遺物12 輸入陶磁器(内面)



(1) 出土遺物13 炆器(外面)



(2) 出土遺物14 炆器(内面)





(1) 出土遺物15 瀬戸・美濃(外面)



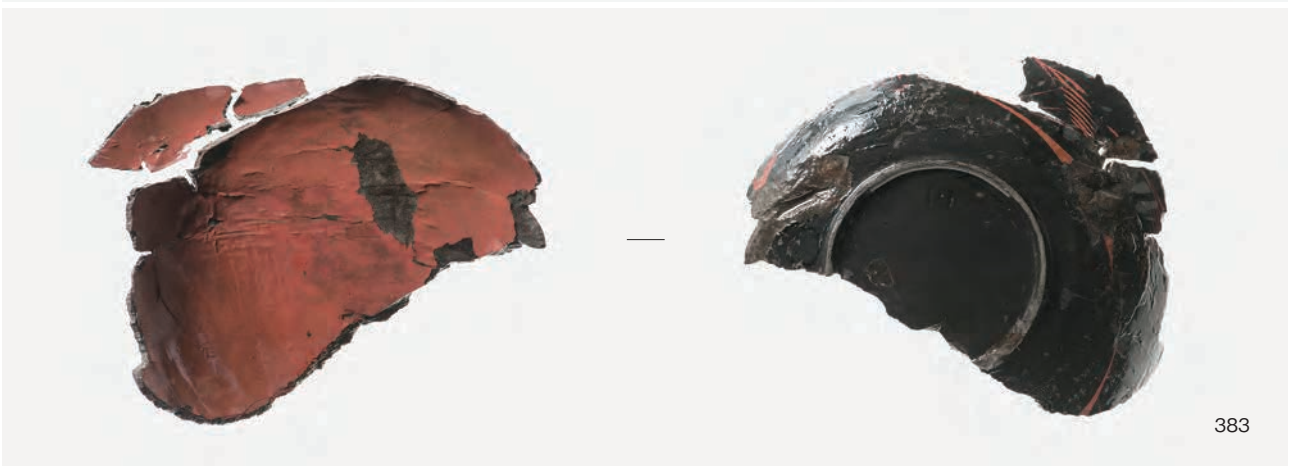
(2) 出土遺物16 瀬戸・美濃(内面)



(1) 出土遺物17 石器・金属器

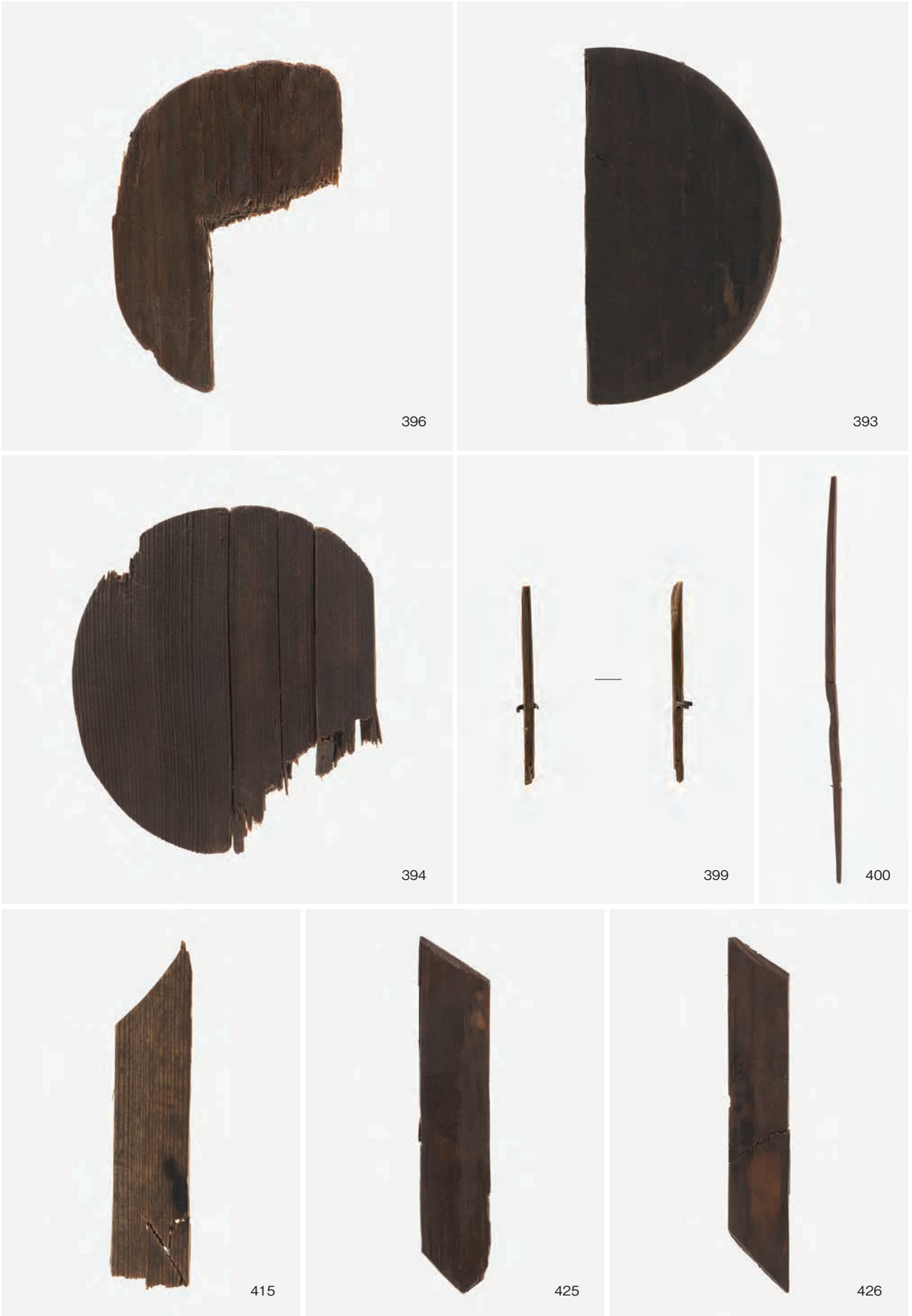


(2) 出土遺物18 金属器



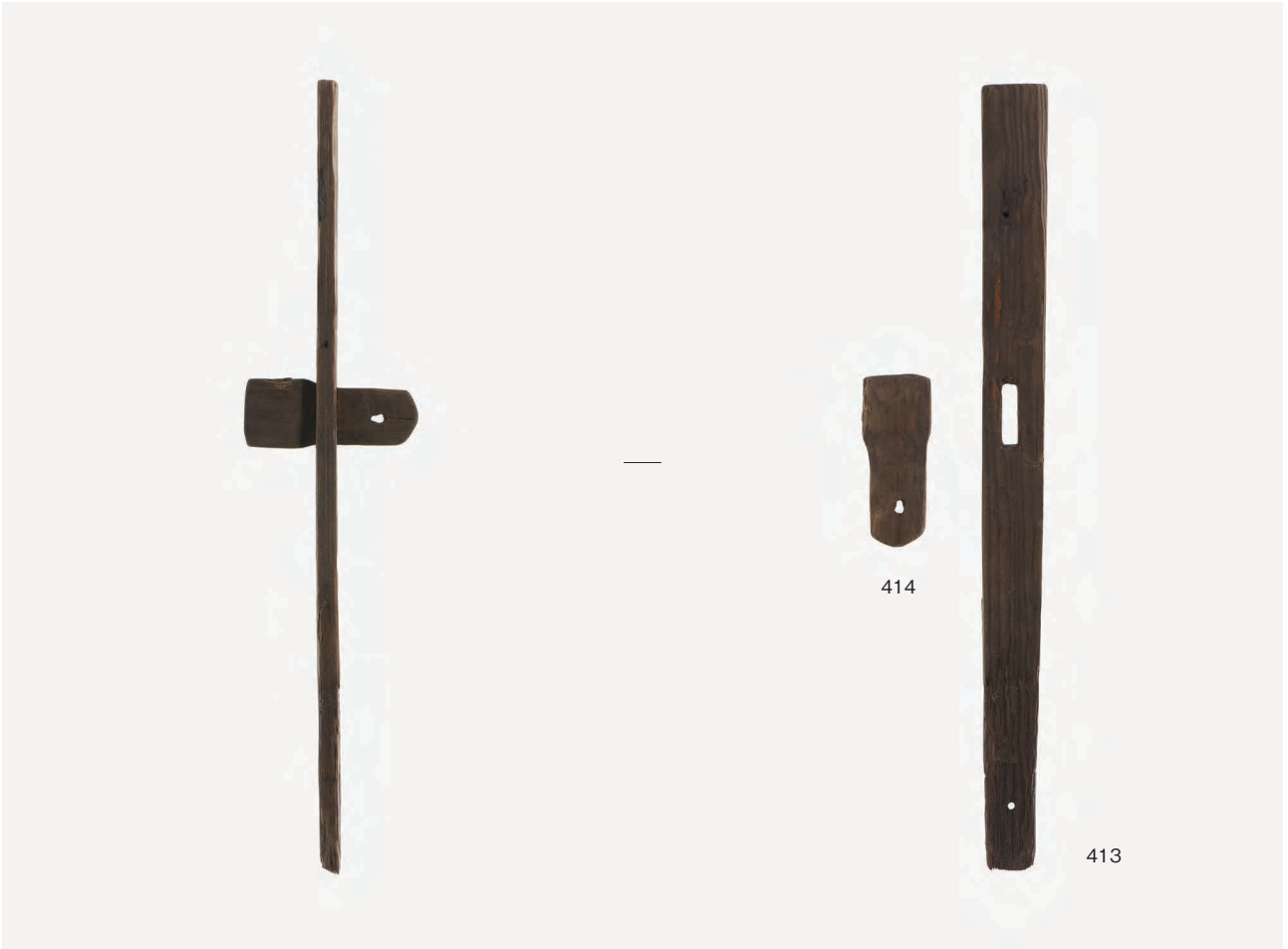




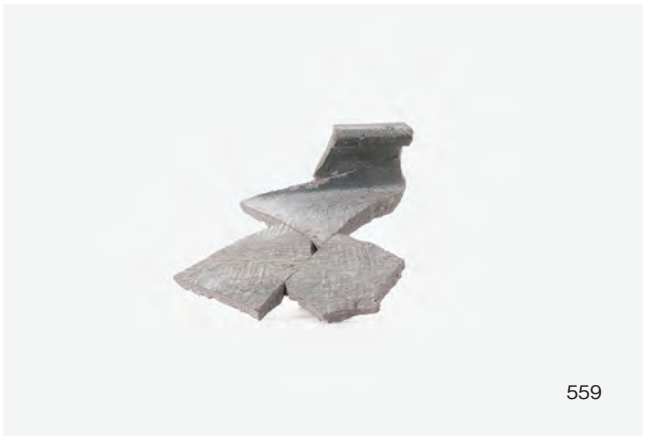




































出土遺物34 開析谷NR50出土の動物遺存体







出土遺物36 A・E地区出土遺物2





(1) 調査地遠景(南から)



(2) A・B地区全景(下が北)





(1) 調査地A・B地区(西から)



(2) 調査地C地区(北から)



(3) 同(東から)





(1) 竪穴建物 S H279・281、  
竪穴遺構 S K150・170(南から)



(2) 同(北東から)



(3) 竪穴建物 S H279出土土器  
(南から)





(1) 竪穴建物 S H281、S P151内  
出土遺物(北東から)



(2) 竪穴建物 S H180(西から)



(3) 竪穴建物 S H180出土須恵器  
(北西から)



(1) 竪穴建物 S H180出土  
土師器(南西から)



(2) 竪穴遺構 S K280(南から)



(3) ピット S P190(南から)







(1) 土坑S K 1 (東から)



(2) 土坑S K 3 (北から)



(3) 土坑S K 4 (北から)





(1)ピットS P12(南から)



(2)掘立柱建物S B164(北から)



(3)溝S D290東西部(西から)





(1) 溝 S D 290 a— a' 断面  
(東から)



(2) 溝 S D 290 d— d' 断面  
(東から)



(3) 溝 S D 290 h— h' 断面  
(東から)





(1) 溝 S D 290 南西屈曲部 1  
(南西から)



(2) 溝 S D 290 南西屈曲部 2  
(南西から)



(3) 溝 S D 290 土橋検出状況  
(北から)





(1) 溝 S D 290 土橋 (西から)



(2) 溝 S D 290 土橋南側面 (南から)



(3) 溝 S D 290 土橋北側面 (北から)





(1) 竪穴建物 S H294(南から)



(2) 溝 S D291~293(南西から)



(3) 掘立柱建物 S B292(西から)





(1) 土坑 S K304(北から)



(2) 土坑 S K304土器出土状況  
(北から)



(3) 土坑 S K297(南から)





(1)土坑 S K298(西から)



(2)土坑 S K298広東碗出土状況  
(北西から)



(3)ピット列 C - S A 1 (北東から)







(1) 出土遺物 2



(2) 出土遺物 3



(1) 出土遺物 4



(2) 出土遺物 5



報告書抄録

ふりがな	京都府遺跡調査報告集
書名	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
副書名	
巻次	第185冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第185冊
編著者名	桐井理揮・引原茂治・上井佐妃・名村威彦・黒坪一樹ほか
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番03 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2022年3月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
いぬかい 犬飼遺跡第2次	きょうとふかめおか しそがべちょういぬ かいうまのうえ・は たがくほ 京都府亀岡市曾 我部町犬飼馬ノ 上、畑ヶ久保	262064	156	34° 59' 37.74"	135° 32' 17.16"	20181112～ 20190314	4,155	ほ場整備
いぬかい 犬飼遺跡第3次						20190502～ 20191003	5,569	
かすかべ 春日部遺跡第2次	きょうとふかめおか しそがべちょうかす かべ 京都府亀岡市曾 我部町春日部	262064	157	34° 58' 57.87"	135° 32' 27.01"	20180514～ 20180918	1,715	ほ場整備

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
犬飼遺跡第2次	集落遺跡	古墳・中世	堀、柱穴、土坑、溝	土師器、瓦器、須恵器	
犬飼遺跡第3次	集落遺跡	中世	堀、掘立柱建物、土坑、土橋、溝 開析谷	土師器、瓦器、須恵器、漆器、陶磁器、木製品、杭	中世居館
春日部遺跡第2次	集落遺跡	古墳・平安	竪穴建物、溝(堀)、柵	須恵器、土師器	区画溝

所収遺跡名	要 約
犬飼遺跡第2次	小規模調査を7か所のトレンチで実施し、柱穴や土坑などを検出した。 A・B・C区で本調査を実施し、屈曲する堀を検出した。
犬飼遺跡第3次	B・C・D地区上層の調査では13世紀後葉から14世紀前葉の中世居館の調査。幅約8m、深さ約2mの2条の堀を検出し、堀の内側の2つの区画から掘立柱建物、土橋などを検出した。 B・C・D地区下層の調査では、古墳時代の開析谷の中から木材集積遺構を検出した。 A・E地区の調査では、古墳時代の竪穴建物、古代の掘立柱建物を検出した。
春日部遺跡第2次	古墳時代の竪穴建物を検出。 平安時代後期の方形区画溝を検出し、その内側から掘立柱建物や柵列を検出した。

京都府遺跡調査報告集 第185冊

令和4年3月30日

発行 公益財団法人  
京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141